

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第190集

岸和田市

下池田遺跡

大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財調査報告

2009年7月

財団法人 大阪府文化財センター

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第190集

岸和田市

下池田遺跡

大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財調査報告

財団法人 大阪府文化財センター



64溝中央部（北西から）



序 文

下池田遺跡は、岸和田市北部に位置し、市域を代表する弥生時代の遺跡の一つとして知られております。そもそもの下池田の地名は、遺跡の南東、行基開穿とされる久米田池の下に位置することに由来するといえます。久米田池から、はるか遡った神於山は銅鐸の出土で知られ、市域ではさらに西側の流木銅鐸も知られます。

下池田遺跡周辺に目を転じますと、北約4kmには国史跡池上曾根遺跡を望みます。また、下池田遺跡に隣接し、当センターの前身の一つである、財団法人大阪府埋蔵文化財協会による調査が行われ、弥生時代後期の集落を調査するなど多数の成果を得ることができました箕土路遺跡、西大路遺跡などが所在します。

さて、今回報告いたします調査では、過去に行われました成果に、さらに彩りを与える成果を得られました。巻頭図版にも掲げましたような弥生時代後期を中心とする多くの遺物は、当時のムラの生活を彷彿とさせてくれるものであります。また、近代における岸和田を代表する産業の一つであった煉瓦産業を思い起こすことができる、粘土を採取した土坑、これを運ぶためのレールなども見つかりました。これらは、岸和田市の歴史を描く上で、新たな一資料を提供することができたと考えます。

このような調査成果も、多くの方々のご協力があったからこそ、得られるものです。今回の事業は、PFI事業であり、株式会社奥村組関西支社をはじめとして、関係諸機関の方々には、多大なご協力を賜りました。また、調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、岸和田市教育委員会からの、ご指導、ご配慮をいただきました。深く、感謝申し上げますとともに、今後とも当センターの事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成21年7月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野 正 好

例 言

1. 本書は、大阪府岸和田市下池田町3丁目に所在する下池田遺跡07-1の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社奥村組関西支社から財団法人大阪府文化財センターが平成19年11月1日～平成21年7月31日の間委託を受け、調査及び整理作業を行い、平成21年7月31日、本書刊行をもって完了した。なお、受託事業契約名は、大阪府岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う下池田遺跡発掘調査である。
3. 調査は以下の体制で実施した。
【平成19年度】調査部長 赤木克視、南部調査事務所所長 大野 薫、調査第一係長 藤澤真依、技師 井西貴子、非常勤専門調査員 奈良拓弥
【平成20年度】調査部長 赤木克視、南部調査事務所所長 大野 薫、調査第一係長 中村淳磯、副主査 駒井正明（8月31日まで）、技師 市村慎太郎、非常勤専門調査員 奈良拓弥
【平成21年度】調査部長兼調査課長 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査（南部）総括主査 森屋美佐子、副主査 市村慎太郎
4. 木器・金属器などの保存処理等については調査グループ主査 山口誠治が行った。
5. 調査の実施にあたっては、岸和田市教育委員会、大阪府教育委員会をはじめとし下記の方々に、ご指導、ご協力を賜った。記して感謝を表したい。（敬称略）
近藤利由・虎間英喜・山岡邦章（岸和田市教育委員会）、山上 弘（大阪府教育委員会）
6. 本書の作成にあたっては、駒井・市村・奈良が執筆した。各執筆の文責は目次に記す通りである。また、弥生時代の集落動向について、森井貞雄氏（大阪府教育委員会）にご教示を得た。
7. 編集は、市村・奈良が行った。
8. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにて保管している。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、T.P.（東京湾平均海水位）を基準とし、プラス値を記している。また、使用単位はメートルを基本とし、小数点第二位までを記している。ただし、小数点第二位が0の場合は、小数点第一位までである。
2. 遺構平面図などに付す座標値はいずれも世界測地系（測地成果2000）によるもので、単位はメートルである。
3. 遺構平面図に付す方位針は、磁北である。
4. 現地調査及び遺物整理は、財団法人大阪府文化財センターが2003年8月に定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』に準拠して行った。地区割りの第Ⅰ区画はD4、第Ⅱ区画は9である。
5. 断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』第28版 2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。なお、本文中における記載順序は、色名・記号・土質名の順である。
6. 遺構番号は、遺構の種類に係わらず1からの連番で、番号—遺構の種類の順で記載する。
7. 遺構平面図の縮尺は、50分の1を基準としているが、一部20分の1・60分の1・80分の1・

100分の1・800分の1・1000分の1がある。また、遺物の縮尺は、土器・土製品が4分の1、石器が3分の2、木器が6分の1で、金属器は、銅鏃が1分の1、レール・犬釘が4分の1である。なお、枕木付きレールは20分の1である。

大きさを記す場合の使用単位は、遺構ではメートル単位で小数点第二位まで、遺物では第4章第3節を除き、センチメートル単位で小数点第一位までを基準とするが、金属器の一部は小数点第二位まで記す。

8. 写真図版の縮尺はすべて任意である。
9. 本書における遺物番号は、実測図、写真図版とも一致する通し番号である。
10. 引用・参考文献、註は各章末に記すが、第4章のみ各節末に記している。

目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

第1章 経過	(市村)	1
第1節 調査の経過		1
第2節 発掘作業の経過		1
第3節 整理作業等の経過		2
第2章 遺跡の位置と環境	(奈良)	3
第1節 地理的環境		3
第2節 歴史的環境		3
第3章 調査の方法と成果	(市村・奈良)	9
第1節 調査の方法	(市村)	9
第2節 層序	(奈良)	14
第3節 遺構	(奈良)	17
第1項 弥生～古墳時代		17
第2項 古代以降		46
第4節 遺物	(市村・駒井・奈良)	47
第1項 土器・土製品・瓦		47
(1) 弥生～古墳時代	(市村)	47
(2) 古代以降	(駒井)	185
第2項 絵画土器	(市村)	187
第3項 銅鏃	(市村)	188
第4項 石器		188
(1) 打製石器	(駒井)	188
(2) 磨製石器	(奈良)	191
(3) 礫石器	(奈良)	197
第5項 木器	(奈良)	197
第6項 その他の遺物	(市村)	199
第4章 総括	(市村・奈良)	205
第1節 発掘調査成果	(奈良)	205
第2節 64 溝出土土器の計量的分析と検討	(市村)	216
第3節 近代煉瓦採掘坑とレールについて	(奈良)	233

遺物観察表

図版

報告書抄録

挿図目次

図 1	調査位置	1
図 2	地区割り・調査区配置	2
図 3	調査地周辺の地形（2万5千分の1）	5
図 4	遺跡地図（2万5千分の1）	7
図 5	基本層序柱状模式図（1）	12
図 6	基本層序柱状模式図（2）	13
図 7	遺構全体図	15・16
図 8	12 竪穴住居平面・断面・土器出土状況	18
図 9	170 竪穴住居平面・断面	19
図 10	170 竪穴住居柱穴断面	20
図 11	170 竪穴住居柱穴・小穴・土坑断面	21
図 12	115 竪穴住居平面・土坑・柱穴断面	22
図 13	115 竪穴住居土坑・柱穴断面	23
図 14	127 竪穴状遺構平面・断面・小穴断面	24
図 15	53 柱穴平面・断面	25
図 16	14・39・90・222 土器棺墓平面・断面	26
図 17	17・139 土坑平面・断面	28
図 18	22・141・145 土坑・18 井戸平面・断面	30
図 19	113 井戸・16 溝平面・断面	31
図 20	64 溝西部土器出土状況	32
図 21	64 溝中央部土器出土状況	35・36
図 22	64 溝東部土器出土状況	37・38
図 23	131・133 柱穴平面・断面	39
図 24	65 溝東部平面	40
図 25	64 溝・65 溝・128 流路・104 溝・120 溝・24 流路・52 流路断面	41・42
図 26	古代以降の遺構全体図	44
図 27	ルール1、148 粘土採掘坑平面・断面	45
図 28	竪穴住居出土遺物（1）（12・115 竪穴住居、127 竪穴状遺構）	48
図 29	竪穴住居出土遺物（2）（170 竪穴住居）	49
図 30	土器棺墓出土遺物（1）（14 土器棺墓）	52
図 31	土器棺墓出土遺物（2）（39 土器棺墓）	53
図 32	土器棺墓出土遺物（3）（90・222 土器棺墓）	54
図 33	土坑等出土遺物（1）（45 落ち込み、110・139・141・145 土坑、113 井戸）	56

図 34	土坑等出土遺物 (2) (17・22 土坑、23 落ち込み)	57
図 35	土坑等出土遺物 (3) (18 井戸)	58
図 36	溝出土遺物 (1) (16・56・104・216 溝)	60
図 37	溝出土遺物 (2) (64 溝西部・上層上部 1)	64
図 38	溝出土遺物 (3) (64 溝西部・上層上部 2)	67
図 39	溝出土遺物 (4) (64 溝西部・上層上部 3)	68
図 40	溝出土遺物 (5) (64 溝西部・上層上部 4)	71
図 41	溝出土遺物 (6) (64 溝西部・上層下部 1)	72
図 42	溝出土遺物 (7) (64 溝西部・上層下部 2)	77
図 43	溝出土遺物 (8) (64 溝西部・上層下部 3)	79
図 44	溝出土遺物 (9) (64 溝西部・下層 1)	80
図 45	溝出土遺物 (10) (64 溝西部・下層 2)・層位不明)	83
図 46	溝出土遺物 (11) (64 溝中央部・上層上部)	84
図 47	溝出土遺物 (12) (64 溝中央部・上層下部 1)	87
図 48	溝出土遺物 (13) (64 溝中央部・上層下部 2)	88
図 49	溝出土遺物 (14) (64 溝中央部・上層下部 3)	91
図 50	溝出土遺物 (15) (64 溝中央部・上層下部 4)	92
図 51	溝出土遺物 (16) (64 溝中央部・上層下部 5)	95
図 52	溝出土遺物 (17) (64 溝中央部・上層下部 6)	96
図 53	溝出土遺物 (18) (64 溝中央部・上層下部 7)	99
図 54	溝出土遺物 (19) (64 溝中央部・下層 1)	100
図 55	溝出土遺物 (20) (64 溝中央部・下層 2)	101
図 56	溝出土遺物 (21) (64 溝中央部・アゼ)	103
図 57	溝出土遺物 (22) (64 溝東部・上層上部 1)	104
図 58	溝出土遺物 (23) (64 溝東部・上層上部 2)	109
図 59	溝出土遺物 (24) (64 溝東部・上層上部 3)	110
図 60	溝出土遺物 (25) (64 溝東部・上層上部 4)	113
図 61	溝出土遺物 (26) (64 溝東部・上層下部 1)	114
図 62	溝出土遺物 (27) (64 溝東部・上層下部 2)	119
図 63	溝出土遺物 (28) (64 溝東部・上層下部 3)	120
図 64	溝出土遺物 (29) (64 溝東部・上層下部 4)	123
図 65	溝出土遺物 (30) (64 溝東部・上層下部 5)	124
図 66	溝出土遺物 (31) (64 溝東部・上層下部 6)	127
図 67	溝出土遺物 (32) (64 溝東部・上層下部 7)	128
図 68	溝出土遺物 (33) (64 溝東部・上層下部 8)	131
図 69	溝出土遺物 (34) (64 溝東部・上層下部 9)	132
図 70	溝出土遺物 (35) (64 溝東部・下層 1)	135
図 71	溝出土遺物 (36) (64 溝東部・下層 2)	136

図 72	溝出土遺物 (37) (64 溝東部・下層 3)	139
図 73	溝出土遺物 (38) (64 溝東部・下層 4)	140
図 74	溝出土遺物 (39) (64 溝東部・下層 5)	143
図 75	溝出土遺物 (40) (64 溝東部・下層 6)	144
図 76	溝出土遺物 (41) (64 溝東部・アゼ 1)	145
図 77	溝出土遺物 (42) (64 溝東部・アゼ 2・その他)	149
図 78	溝出土遺物 (43) (120 溝中央部)	150
図 79	溝出土遺物 (44) (120 溝南東部)	155
図 80	溝出土遺物 (45) (120 溝北西部)	157
図 81	溝出土遺物 (46) (65 溝南東部 1)	161
図 82	溝出土遺物 (47) (65 溝南東部 2)	163
図 83	溝出土遺物 (48) (65 溝東部・南部・南西部・西部)	166
図 84	流路出土遺物 (1) (210 流路中央部)	170
図 85	流路出土遺物 (2) (52 流路、210 流路中央部・南部)	171
図 86	流路出土遺物 (3) (128 流路南東部 1)	174
図 87	流路出土遺物 (4) (128 流路南東部 2)	177
図 88	流路出土遺物 (5) (128 流路南東部 3・東部)	180
図 89	流路出土遺物 (6) (128 流路南西部・西部)	182
図 90	流路出土遺物 (7) (128 流路北西部、210 流路北部)	184
図 91	古代以降遺物 (1)	185
図 92	古代以降遺物 (2)	186
図 93	絵画土器	187
図 94	銅鏃	188
図 95	石器 (1) (打製石器 1)	189
図 96	石器 (2) (打製石器 2)	190
図 97	石器 (3) (打製石器 3)	191
図 98	石器 (4) (磨製石器 1)	192
図 99	石器 (5) (磨製石器 2)	193
図 100	石器 (6) (磨製石器 3)	194
図 101	石器 (7) (礫石器 1)	195
図 102	石器 (8) (礫石器 2)	196
図 103	木器	198
図 104	土管	199
図 105	粘土採掘坑関連遺物 (1)	200
図 106	粘土採掘坑関連遺物 (2)	202
図 107	既往の調査と今回の調査	207
図 108	遺構変遷 (1)	209
図 109	遺構変遷 (2)	210

図 110	周辺の遺跡変遷	213
図 111	地形図に描かれた軽便軌道	234
図 112	現在の地形図と軽便軌道	235

表目次

表 1	遺跡名称	6
表 2	新旧遺構番号対応	14
表 3	遺構変遷	206
表 4	周辺の遺跡変遷	212
表 5	64 溝個別計測値一覧	217
表 6	64 溝個別計測値の地点ごとの傾向	218
表 7	64 溝中央部・各取上番号積上げ値での器種組成変化傾向（左）と各取上番号の器種組成（右）	220
表 8	各遺跡器種組成と遺跡ごとの傾向	222
表 9	各遺跡器種組成集計	223

図版目次

巻頭図版 1	64 溝中央部（北西から）	巻頭図版 2	64 溝出土土器群
図版 1	1. 調査区全景（垂直）	3.	14 土器棺墓（南東から）
図版 2	1. 12 竪穴住居全景（北西から）	4.	90 土器棺墓（南から）
	2. 12 竪穴住居断面（南から）	5.	39 土器棺墓（南から）
	3. 土器出土状況（北西から）	6.	222 土器棺墓（北から）
	4. 41 柱穴断面（南東から）	7.	17 土坑（南西から）
	5. 51 柱穴断面（南東から）	8.	139 土坑（東から）
図版 3	1. 170 竪穴住居南西部（北西から）	図版 6	1. 64 溝西部出土状況（西から）
	2. 170 竪穴住居北東部（南東から）		2. 64 溝中央部北西端出土状況（南東から）
	3. 191 中央土坑断面（南西から）		3. 64 溝中央部 131・133 柱穴全景（北東から）
	4. 154 柱穴断面（南西から）	図版 7	1. 64 溝東部全景（南西から）
	5. 165 柱穴断面（西から）		2. 64 溝東部出土状況 1（北から）
	6. 193 柱穴断面（南から）		3. 64 溝東部出土状況 2（北から）
図版 4	1. 115 竪穴住居全景（南から）		4. 64 溝東部出土状況 3（北から）
	2. 120 溝北西部断面（北西から）		5. 64 溝東部断面（南西から）
	3. 84 土坑断面（南から）	図版 8	1. 120 溝中央部全景（東から）
	4. 87 柱穴断面（北西から）		2. 83 中央土坑断面（南から）
	5. 88 柱穴（西から）		3. 120 溝南東部全景（南から）
図版 5	1. 127 竪穴状遺構全景（南から）		4. 65 溝南東部断面（西から）
	2. 127 竪穴状遺構断面（南西から）		

	5. 65 溝南東部木器出土状況（南から）	図版 26	64 溝中央部（7） 土器
	6. 65 溝南東部全景（南西から）	図版 27	64 溝東部（1） 土器
図版 9	1. 128 流路南東部全景（南西から）	図版 28	64 溝東部（2） 土器
	2. 210 流路南東部断面（西から）	図版 29	64 溝東部（3） 土器
	3. 52 流路断面（北西から）	図版 30	64 溝東部（4） 土器
	4. 184 畦畔全景（南西から）	図版 31	64 溝東部（5） 土器
	5. 226 畦畔南西部（北から）	図版 32	64 溝東部（6） 土器
図版 10	1. レール 1 出土状況（南西から）	図版 33	64 溝東部（7） 土器
	2. 148 粘土採掘坑全景（北西から）	図版 34	64 溝東部（8） 土器
	3. レール 2 出土状況（北から）	図版 35	64 溝東部（9） 土器
	4. 1 粘土採掘坑全景（南から）	図版 36	120 溝 土器
図版 11	12・115 竪穴住居 土器	図版 37	65 溝（1） 土器
図版 12	170 竪穴住居 土器	図版 38	65 溝（2） 土器・韃羽口・土錐・不明土製品
図版 13	14・39・90・222 土器棺墓 土器	図版 39	流路（1） 土器
図版 14	17・139 土坑、45 落ち込み 土器	図版 40	流路（2） 土器
図版 15	18 井戸、64 溝西部（1） 土器	図版 41	流路（3） 土器
図版 16	64 溝西部（2） 土器	図版 42	流路（4） 土器・不明土製品
図版 17	64 溝西部（3） 土器	図版 43	打製石器（1）
図版 18	64 溝西部（4） 土器	図版 44	打製石器（2）
図版 19	64 溝西部（5） 土器	図版 45	磨製石器・礫石器
図版 20	64 溝中央部（1） 土器	図版 46	絵画土器・木器・銅鏃
図版 21	64 溝中央部（2） 土器	図版 47	古代以降 土器・レール
図版 22	64 溝中央部（3） 土器	図版 48	1. 大阪窯業株式会社岸和田工場跡地
図版 23	64 溝中央部（4） 土器		2. 岸和田煉瓦綿業株式会社跡地
図版 24	64 溝中央部（5） 土器		3. 新田避溢函渠
図版 25	64 溝中央部（6） 土器		

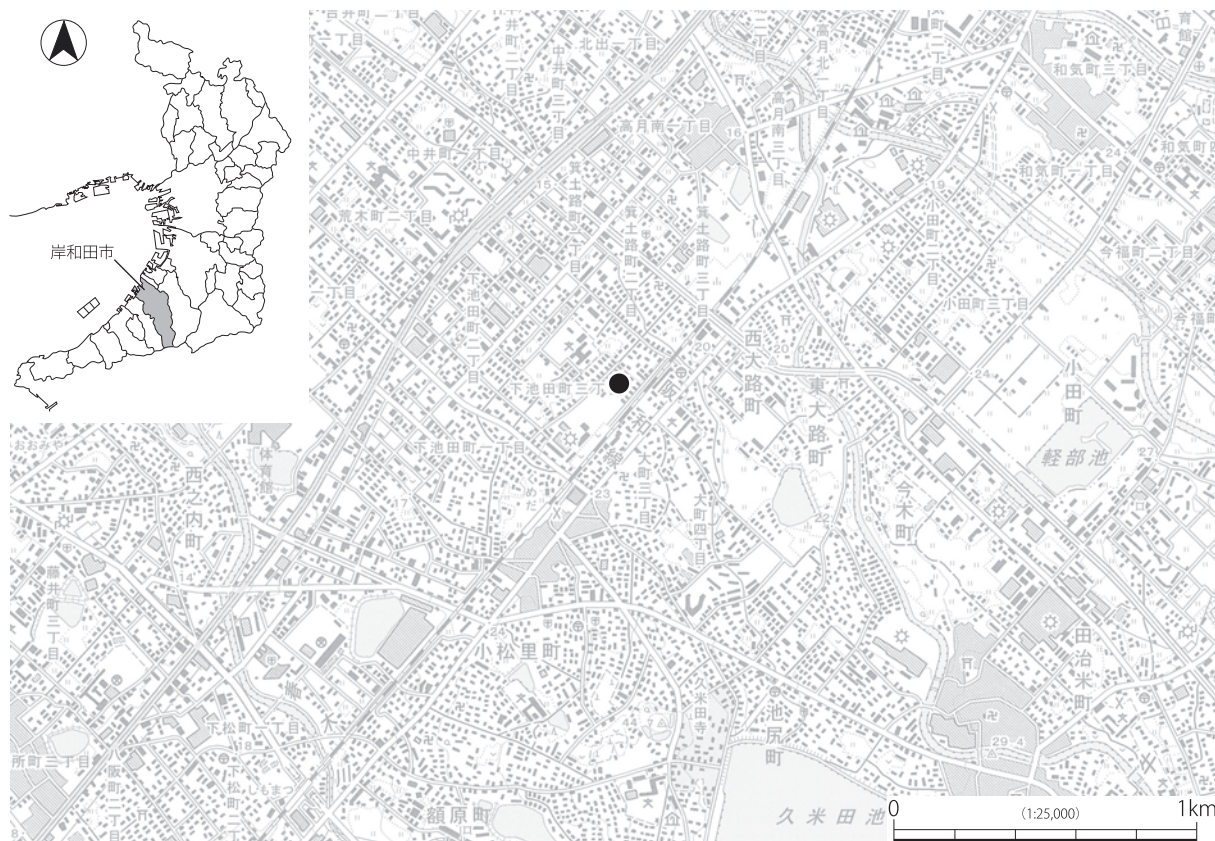
第1章 経過

第1節 調査の経過

本調査は、岸和田市下池田町3丁目地内の下池田遺跡（以下、当遺跡と称す）において、大阪府営岸和田下池田住宅建て替えに伴い行ったものである（図1）。今回の建て替え事業は、「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）」（平成11年法律第117号 最終改正平成17年法律第95号）に基づき、民間事業者の優れた能力等を活用して、府営住宅と民間施設等の整備を行うもので、「大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクト」とされたものである。同プロジェクトの実施方針は平成18年3月29日に公表された。平成18年5月30日の入札説明書の要求水準書（府営住宅整備・用地活用編）には、「6. 埋蔵文化財本掘調査」の項目に、「埋蔵文化財の本掘調査は、「(財)大阪府文化財センター」と委託契約を締結し実施すること」とされており、同プロジェクトについての特定事業契約を、平成18年12月15日付で締結した契約の相手方の一社である株式会社奥村組関西支社と、財団法人大阪府文化財センターが、平成19年11月1日付で委託契約を締結した。

第2節 発掘作業の経過

今回の調査地は、大阪府教育委員会により平成13～17年度に調査が行われた北側の住棟2棟分、構内道路、集会所部分の調査で、現況道路の切り替えなどの都合上、26区に区分し調査を行い、一部の調査区はさらに細分して調査を行った（図2）。現地における発掘調査は、平成19年11月より開始



した。平成20年2月16日には、9区で検出された土器が多量に出土した溝などを対象に、地元向けの現地公開を行った。降雪に見舞われる荒天であったが、163人の参加があった。電柱の移設の都合上、着手できない箇所を除き、7月末で大部分の調査が終了した。8月23日～10月19日に大阪府立弥生文化博物館で開催された「20年度夏季企画展 鉄道発掘物語」に、枕木付レールを出品した。未調査であった箇所の調査を平成20年10月9日に行い、同日を持って全ての発掘調査が終了した。

第3節 整理作業等の経過

現場での作業と併行し、出土遺物の洗浄・注記等の作業を行った。また、出土時点で脆くなっている土器が多く、弥生土器、土師器などはバインダー含浸による強化を行った。そして、大部分の調査が終了した8月より本格的な整理作業を開始した。まず8月中は、出土遺物の大まかな把握に努め、その後接合、石膏による補強、復元作業を翌年1月まで行った。遺物実測作業は、9月より開始し、翌年2月まで行った。これと併行し、2月より実測遺物の版組、トレースを行い、3月に終了した。遺構関連では、遺構図面のトレース等の作業を8月後半より開始し、翌年3月までで終了した。遺構写真の紙焼き、遺物写真の撮影等、写真関連業務は、1月から4月に行った。この間に、報告書本文の執筆を随時行い、本報告書の刊行をもってすべての作業を終了した。

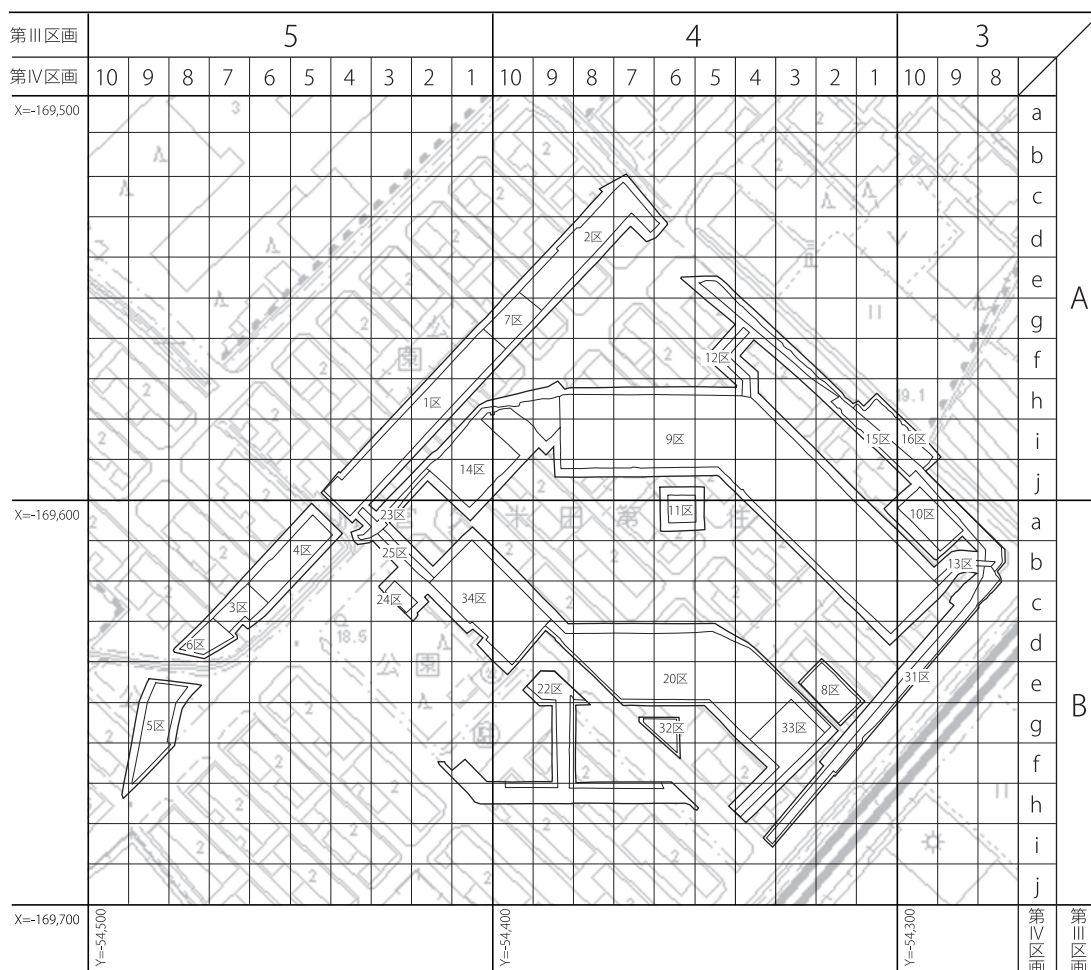


図2 地区割り・調査区配置

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境 (図3・5・6)

当遺跡が立地する岸和田市は、大阪府と和歌山県の境界となる和泉山脈から大阪湾へと徐々に比高が低くなる地形で、春木川や牛滝川といった主要河川は和泉山脈やその前衛山地を水源とする。これらの河川によって開析を受けた尾根状に南北に伸びる地形が海岸近くまで広がっており、平野部は非常に狭い地形を呈している。

当遺跡は、北に天の川、南西に春木川が流れ、久米田池から小松里町にかけての尾根状に伸びる丘陵上にあり、天の川によって開析を受けた段丘の西側緩斜面に立地する。ちなみに、弥生時代中期前～中葉の遺跡である栄の池遺跡は、春木川によって開析を受けた東側緩斜面に立地している。

今回の調査地は、後世の大規模な土地改変による削平は認められるが、大きくは(図5・6)で示していることからわかるように南東から北西にかけて低くなる地形であった。調査区の中央部ではいずれも地形に沿って走行する流路を検出し、竪穴住居などの主要な遺構はこの流路よりも北側に集中していた。検出できた遺構の標高は、T.P.16～18mである。

当遺跡が立地する基盤層(地山)は、砂礫とシルトの互層によって形成される層であった。基盤に含まれる砂礫の大きさは中～大の円礫で、風化度合いは比較的緩い。岩石は礫岩、砂岩、泥岩、石英斑岩、チャート、花崗岩である。これらの岩石は南に立地する和泉山脈に起源するものであり、この基盤は和泉山脈に源流をもつ河川によって形成された低位段丘と考えられる。

第2節 歴史的環境 (図4 表1)

旧石器時代 岸和田市内における旧石器時代の遺跡としては、国府型ナイフ形石器が発見された葛城山頂遺跡¹⁾、西山遺跡¹⁾、琴山遺跡¹⁾、上フジ遺跡²⁾がある。また、山ノ内遺跡³⁾では国府型ナイフ形石器に加えて船底形石器の出土も見られる。

縄文時代 岸和田市内では草創期、早期や前期の土器が発見されていないが、この頃と考えられる有舌尖頭器が、三田遺跡⁴⁾、黒石遺跡⁵⁾、栄の池遺跡⁶⁾、当遺跡⁷⁾で発見されている。中期になると、春木八幡山遺跡⁸⁾、箕土路遺跡⁹⁾、軽部池西遺跡¹⁰⁾、葛城山頂遺跡で出土しているが、遺構は発見されていない。

後期・晩期になると、軽部池西遺跡で竪穴住居の可能性が指摘される遺構から土器が出土している。山ノ内遺跡では、土坑・土器棺墓が発見されており、接合資料を含む多量の石器と後期の土器が検出され、黒曜石や瑪瑙といった他地域との広域流通が想定される資料も出土している。中之社遺跡¹¹⁾では、谷の埋土からではあるが後期を中心とした土器と石器が出土しており、近くに石器製作を行った集落が営まれていたと推定されている。この他にも春木八幡山遺跡^{1・12)}、春木天の川遺跡¹³⁾、箕土路遺跡¹⁴⁾、葛城山頂遺跡¹⁵⁾、山直中遺跡¹⁶⁾、大町遺跡¹⁷⁾、三田遺跡¹⁸⁾でこの時期の土器が出土している。

また、詳細な時期の特定はできないが、縄文時代の石器が出土する遺跡として当遺跡、加守三昧山遺跡¹⁾、二俣池北遺跡¹⁵⁾、土生遺跡¹⁶⁾、琴山遺跡¹⁾、尾崎遺跡¹⁾、仏谷尾遺跡¹⁾、三本松下遺跡¹⁾、狐塚遺跡¹⁾、荒子遺跡¹⁾、畑遺跡^{1・17)}が存在する。栄の池遺跡では、緑泥片岩製石棒が発見されている。

弥生時代 前期の遺跡としては、春木八幡山遺跡、田治米宮内遺跡¹⁸⁾、加守三昧山遺跡¹⁾で土器が出土して

いるが、明確な人為的痕跡を示す遺構は発見されていない。

この地域で集落の形成が確認できるのは中期中葉に入ってからである。春木川流域の栄の池遺跡では竪穴住居5棟、掘立柱建物15棟、方形周溝墓2基が検出されており、津田川流域の畑遺跡では竪穴住居1棟、掘立柱建物8棟、方形周溝墓1基が検出されている。2つの遺跡はその規模と距離から、「拠点集落」と、その周辺に立地する「衛星集落」として捉えられている。天の川流域にあたる当遺跡もこの頃に集落が形成され始めたと考えられる。他にも、牛滝川流域の田冶米宮内遺跡、山ノ内遺跡、天の川流域の春木八幡山遺跡、春木天の川遺跡、池尻町遺跡¹⁾、岡山矢取遺跡¹⁾、春木川流域の兒子池東遺跡¹⁾、津田川流域の土生遺跡で土器の出土が認められる。また、神於山から2区流水文銅鐸¹⁹⁾、流木町から4区袈裟禪文銅鐸²⁰⁾、無文小銅鐸²¹⁾が出土している。

中期後葉になると栄の池遺跡や畑遺跡では、集落の縮小が認められ衰退へと向かうが、当遺跡では引き続き集落が営まれ続け、集落の規模が拡大する。

後期になると、どぞく遺跡¹⁾、上フジ遺跡¹⁾、上松中尾遺跡¹⁾の高地性集落が出現する。春木川上流にある標高60m前後のどぞく遺跡は、後期中葉から後葉にかけての竪穴住居4棟、掘立柱建物1棟を検出している。牛滝川上流にある標高80m前後の上フジ遺跡は、後期前葉から後葉にかけての竪穴住居5棟が検出され、大型円形住居からは小型銅鐸が発見されている。春木川上流にある標高40m前後の上松中尾遺跡では、後期前半とされる竪穴住居10棟前後、掘立柱建物1棟、井戸1基を検出している。高地性集落ではないが、標高40m前後の谷に立地する尾生遺跡²²⁾では、五角形の平面形を有する竪穴住居が検出されており、出土した手焙形土器から近江地域との関係が指摘されている。

後期後葉から庄内式期に入ると、西大路遺跡²³⁾、山之内遺跡²⁴⁾、軽部池西遺跡²⁴⁾、今木遺跡²⁴⁾で竪穴住居を検出し、春木宮の上遺跡²⁵⁾、大町遺跡²⁵⁾で多くの土器が出土しており、これらの集落が営まれていたことが想定される。いずれの遺跡でも検出された住居数は数棟程度であることから、小規模な集落が形成されていたと考えられる。集落域に関してはある程度判明しているが、墓域に関しては不明な点が多く、当遺跡で前方後円形周溝墓を構築していることが判明している程度である。。

古墳時代 前期半ばに久米田貝吹山古墳²⁶⁾、前期末に摩湯山古墳²⁷⁾とその陪塚である馬子塚古墳²⁸⁾が築造される。中期には風吹山古墳²⁹⁾、無名塚古墳²⁹⁾、持ノ木古墳²⁹⁾、女郎塚古墳³⁰⁾が築造され久米田古墳群を形成する。集落としては芝ノ垣外遺跡³¹⁾で竪穴住居2棟と掘立柱建物2棟が検出され、磯之上遺跡で多量の土器が発見されている。また、前期後半には165基の土坑墓が発見された三田遺跡³¹⁾があり、摩湯山古墳との関係が説かれている。この地域では、大型前方後円墳の築造は前期で終了し、中期には帆立貝形・円・方墳といった中・小規模の古墳を構築するようになる。中期後半の集落としては山直北遺跡³⁾で竪穴住居が発見されている程度で、集落の実態については不明確である。ただ、遺物の出土状況から、当遺跡や畑遺跡でもこの頃の集落が形成されていたと考えられる。

後期になると三田古墳²⁾のような円墳が市内各地域で築造される。後期の集落は、これまであまり遺跡が形成されていない地域で、山直北遺跡³²⁾、水込遺跡³²⁾、二俣池北遺跡³²⁾といった集落が認められる。三田遺跡、上フジ遺跡、畑遺跡では、それまでの集落は一端廃絶していたがこの頃に再び集落が形成される。

飛鳥・奈良時代 7～8世紀の集落としては、二俣池北遺跡、水込遺跡、芝ノ垣外遺跡、三田遺跡、上フジ遺跡、吉井一ノ坪遺跡¹²⁾、栄の池遺跡、西大路遺跡、畑遺跡、黒石遺跡がある。7世紀後半には、小松里廃寺、春木廃寺、久米田寺と言った古代寺院が建立され、久米田池¹⁾もこの頃の築造と考えられる。小松里廃寺、春木廃寺¹⁾では明確な遺構は発見されていないが白鳳時代の瓦が出土している。

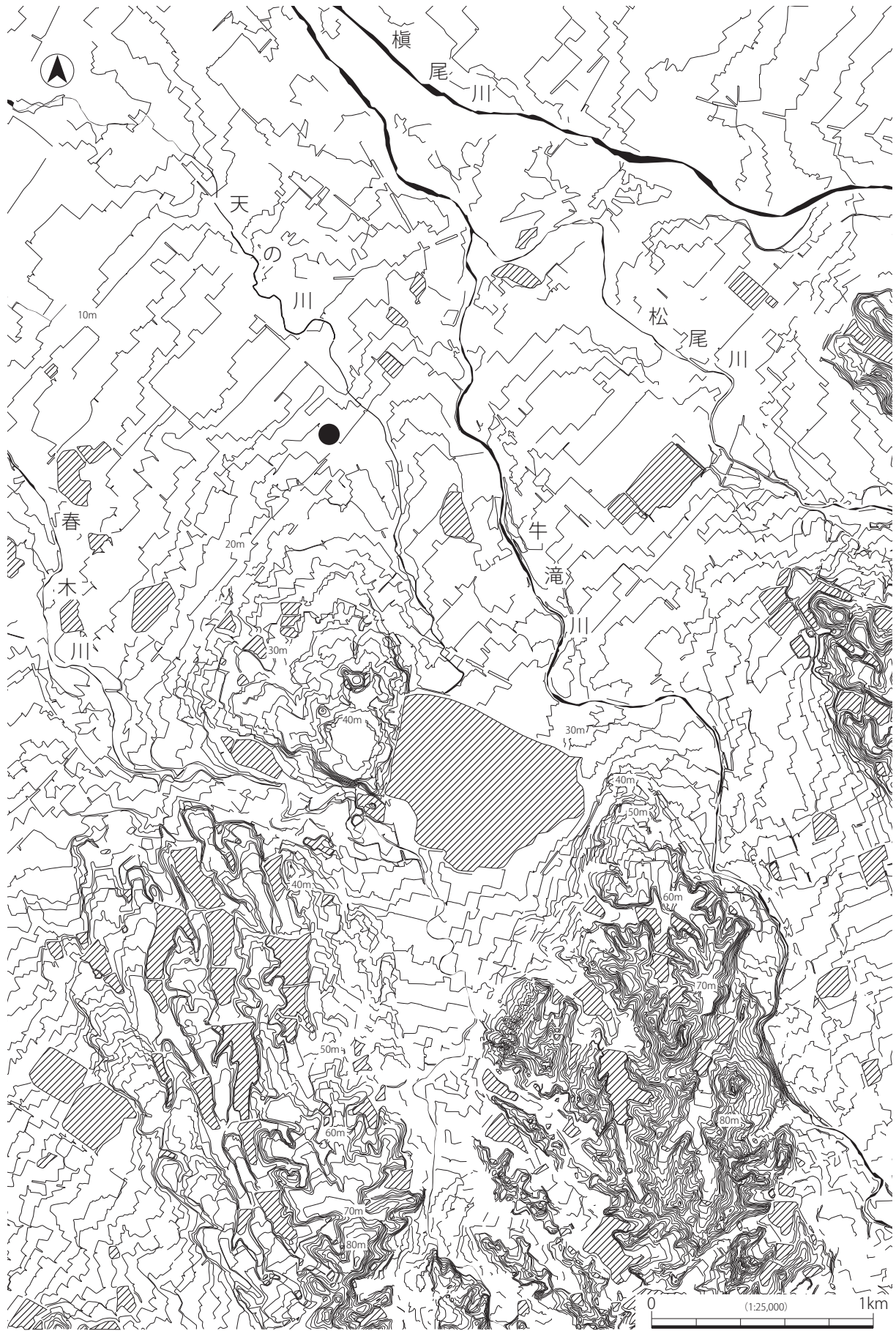


図3 調査地周辺の地形

●が調査地。大阪府 1961 『1/3000 地形図』を基に作成。標高は O.P. 値

表1 遺跡名称

番号	遺跡名	時代	種類	62	久米田池内遺跡	奈良・平安・中世	散布地
1	磯之上遺跡	古墳	集落跡	63	久米田池内須惠窯跡	古墳	生産遺跡
2	吉井一之坪遺跡	古墳・奈良・平安	散布地	64	岡山八ツ川遺跡	弥生	散布地
3	吉井遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	65	岡山矢取遺跡	弥生	散布地
4	吉井上品寺跡	平安	社寺跡	66	岡山遺跡	古墳・奈良・中世	散布地
5	夜疑麻寺跡	平安	社寺跡	67	岡山御坊跡	中世	社寺跡
6	高月寺跡	平安	社寺跡	68	岡山狐塚古墳	古墳	古墳
7	板原遺跡	縄文・弥生・古墳	集落跡	69	西山遺跡	旧石器	散布地
8	和泉国府跡	奈良	官衙跡	70	西山古墳	古墳	古墳
9	国府城跡	中世	城館跡	71	古銭出土地	中世	散布地
10	府中遺跡	弥生・古墳	集落跡	72	上フジ遺跡	古墳・奈良・平安・中世	集落跡
11	和泉寺跡	奈良	社寺跡	73	二俣池北遺跡	古墳・奈良・平安・中世	集落跡
12	箕土路遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	74	水込遺跡	古墳・奈良・平安・中世	集落跡
13	犬飼堂廃寺	平安・中世	社寺跡	75	楠本神社古墳	古墳	古墳
14	荒木土塁跡	中世	城館跡	76	高山古墳	古墳	古墳
15	下池田遺跡	弥生・古墳・中世	集落跡	77	三田墓地	近世	その他の墓
16	西大路遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	78	重ノ原古墳群	古墳	古墳
17	今木遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	79	馬塚古墳	古墳	古墳
18	今木廃寺	平安・中世	社寺跡	80	重ノ原古墳	古墳	古墳
19	軽部池西遺跡	縄文・弥生	集落跡	81	小金塚古墳	古墳	古墳
20	小田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	82	重ノ原遺跡	古墳	散布地
21	軽部池遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	83	松尾池尻埴輪窯跡	古墳	生産遺跡
22	軽部池	奈良	その他	84	武蓮廃寺	平安・中世	社寺跡
23	和気遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	85	上松三味遺跡	中世・近世	その他の墓
24	観音寺城跡	中世	城館跡	86	狐塚遺跡	縄文	散布地
25	狐塚古墳	古墳	古墳	87	下松狐塚古墳	古墳	古墳
26	寺門古墳群	古墳	古墳	88	上松宮之遺跡	中世	集落跡
27	寺田遺跡	古墳・中世	集落跡	89	神明山古墳	古墳	古墳
28	摩湯北遺跡	中世	散布地	90	合池遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	散布地
29	栄の池遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡	91	合池窯跡	古墳	生産遺跡
30	小松里廃寺	古墳・奈良・平安・中世	社寺跡	92	上松遺跡	弥生	散布地
31	八木城跡	中世	城館跡	93	道ノ池窯跡	古墳	生産遺跡
32	金池西遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	散布地	94	唐池遺跡	古墳・奈良・中世	散布地
33	大路城跡	中世	城館跡	95	笠松遺跡	奈良・平安・中世	散布地
34	大町遺跡	弥生	散布地	96	笠松北遺跡	古墳・中世	集落跡
35	丸山古墳	古墳	古墳	97	尾生遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡
36	田鶴羽遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡	98	赤山古墳群	古墳	古墳
37	池尻古墳	古墳	古墳	99	どぞく遺跡	弥生	集落跡
38	池尻町遺跡	弥生・古墳	散布地	100	お立場古墳	古墳	古墳
39	今木城跡	中世	城館跡	101	箱谷古墳	古墳	古墳
40	山ノ内遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世	集落跡	102	石塚古墳	古墳	古墳
41	山直北遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡	103	板屋遺跡	奈良・平安・中世	散布地
42	イナリ古墳	古墳	古墳	104	上松中尾遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡
43	摩湯山古墳	古墳	古墳	105	泉光寺	近世	城館跡
44	馬子塚古墳	古墳	古墳	106	岸和田藩主岡部家累代の墓	その他（不明）	その他の墓
45	田治米宮内遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	107	尾崎遺跡	縄文	散布地
46	田治米廃寺	奈良	社寺跡	108	琴山遺跡	縄文	散布地
47	三田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世	集落跡	109	仏谷尾遺跡	縄文	散布地
48	東山古墳	古墳	古墳	110	児子池東遺跡	弥生	散布地
49	額原遺跡	古墳	散布地	111	壺山遺跡	奈良	散布地
50	浄行寺古墳	古墳	古墳	112	荒子遺跡	その他（不明）	散布地
51	久米田古墳群	古墳	古墳	113	上松狐塚古墳	古墳	古墳
52	久米田貝吹山古墳	古墳	古墳	114	たな川塚古墳	古墳	古墳
53	志阿弥法師塚古墳	古墳	古墳	115	福田城跡	中世	城館跡
54	長坂古墳	古墳	古墳	116	畑遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	集落跡
55	無明塚古墳	古墳	古墳	117	行合堂	中世	社寺跡
56	風吹山古墳	古墳	古墳	118	天神山古墳	古墳	古墳
57	持ノ木古墳	古墳	古墳	119	大師淵遺跡	弥生	散布地
58	女郎塚古墳	古墳	古墳	120	矢代寸廃寺	平安	社寺跡
59	円筒棺出土地	古墳	古墳	121	三合塚古墳	古墳	古墳
60	久米田寺跡	奈良・平安・中世	社寺跡	122	三本松下遺跡	縄文	散布地
61	久米田池	奈良・平安・中世	その他（池）				

大阪府地図情報提供システム (http://www.pref.osaka.jp/doboku/23cals_ec/tizu.html) を基に作成



図4 遺跡地図

(地図資料編集会編 1989「岸和田東部」『明治前期 関西地誌図集』柏書房に加筆)

註

- 1) 石部正志 1979「考古編」『岸和田市史』第1巻 自然・考古編 岸和田市
- 2) 田中一廣・虎間英喜 1988『上フジ遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第25輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
駒井正明 1993『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第80輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 3) 森井貞雄ほか編『山ノ内遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第34輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
豊岡卓之ほか『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会報告書第24輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 4) 小山田宏一 1985『三田遺跡試掘調査概要』大阪府教育委員会
渡辺昌宏ほか編 1987『三田遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第15輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 5) 木下 亘ほか 1990『黒石遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第59輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 6) 近藤利由ほか 1979『栄の池遺跡』岸和田遺跡調査会
- 7) 中村 浩編 1987『下池田遺跡第二次発掘調査報告』岸和田遺跡調査会
近藤利由 1987「下池田遺跡」『昭和62年度 発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要13 岸和田市教育委員会
山岡邦章 2003「5. 下池田遺跡」『平成14年度 発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要29 岸和田市教育委員会
西口陽一ほか 2007『下池田遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2007-1 大阪府教育委員会
- 8) 堅田 直 1965『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』岸和田市教育委員会・財団法人古代学協会
- 9) 高島 徹編 1987『箕土路遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第13輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 10) 久米雅雄 1987『軽部池西遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第11輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 11) 田中龍男ほか編 1999『中之社遺跡他発掘調査報告書』(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第39集 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 12) 石部正志 1996「古代編」『岸和田市史』第2巻古代・中世編 岸和田市
- 13) 武内雅人ほか 1988『山直中遺跡』大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第22輯 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 14) 三木 弘 2007『大町遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2006-2 大阪府教育委員会
- 15) 宮崎泰史編 1989『二俣池北遺跡・上フジ遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第45輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 16) 近藤利由 1975『土生遺跡第3次発掘調査概要』岸和田遺跡調査会
酒井龍一ほか 1976『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要1 岸和田市教育委員会
近藤利由 1998『土生遺跡発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要3 岸和田市教育委員会
- 17) 近藤利由・西田康子 1988『畑遺跡』岸和田市教育委員会
- 18) 竹原伸次 1995『田治米宮内遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
虎間英喜 1999『田治米宮内遺跡』岸和田市埋蔵文化財調査報告書6 岸和田市教育委員会
- 19) 1899「和泉国の銅鐸」『考古学会雑誌』第3編第2号 考古学会
- 20) 玉谷 哲 1962「大阪府岸和田市流木町発見の銅鐸」『古代文化』第9巻第2号 財団法人古代学協会
- 21) 森 浩一 1973「岸和田市流木町出土の銅鐸」『古代学研究』第68号 古代学研究会
- 22) 山中吾郎・山岡邦章 2004『春季特別展 谷に刻まれた文化』岸和田市立郷土資料館
- 23) 橋本高明ほか編 1988『西大路遺跡』大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第23輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 24) 山本 彰編 1989『今木遺跡』(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第36輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 25) 山岡邦章 2000『春木宮ノ上遺跡』岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書9 岸和田市教育委員会
- 26) 吉井秀夫 1998『久米田貝吹山古墳第1次～4次調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告第7冊 立命館大学文学部
- 27) 上林史郎編 1998『摩湯山古墳』大阪府埋蔵文化財調査報告1997-2 大阪府教育委員会
- 28) 虎間英喜 2008「1. 馬子塚古墳」『平成19年度 発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要34 岸和田市教育委員会
- 29) 虎間英喜 1993『久米田古墳群発掘調査概要Ⅰ』岸和田市文化財調査概要報告1 岸和田市教育委員会
虎間英喜 1995『久米田古墳群発掘調査概要Ⅱ』岸和田市文化財調査概要報告2 岸和田市教育委員会
- 30) 虎間英喜 1993「3. 女郎塚古墳」『平成14年度 発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要29 岸和田市教育委員会
- 31) 駒井正明編 1987『芝ノ垣外遺跡』大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第8輯 大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 32) 橋本裕行編 1990『水込遺跡』大阪府埋蔵文化財協会発掘調査報告書第58輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査は、当センターが策定した『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』（以下、マニュアルと略）に基づき実施した。まず、本調査付与された調査名は、下池田遺跡 07 - 1 である。調査区域内は、設計段階で1から35（27を除く）の34調査区に細分されており、今回の調査区名はこの呼称を援用し、設定した（図2）。

当遺跡は、既往の調査により、弥生時代の遺跡として知られており、これらの調査地点に近接する今回の調査でも、同様に弥生時代の遺構が確認されることが予想された。このため、これらとの時期的、遺構の性格的な関連などが、まずもって問題として意識された。今回の成果については、以下の節で記すとおりであり、周辺調査をもふくめた検討については、第4章第1節に記したとおりである。また、調査が進むにつれ、以下の節でも記すように、多数の粘土採掘坑の存在が明らかになった。この遺構の時期は新しいものの、近代における岸和田市の歴史を考える上で重要な資料であることがわかり、同様な問題意識を持って調査を行った。この成果については、第4章第3節に記したとおりである。

さて、地区割りは、世界測地系に準拠している。大阪府南西端 $X=-192,000$ m、 $Y=-88,000$ m を基準とし、縦6 km、横8 km で区画し、縦軸 A ~ O、横軸 0 ~ 8 で表示される「第Ⅰ区画」では、D 4 に位置する。この第Ⅰ区画を縦1.5 km、横2.0 km で4分割し、南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16で表示する「第Ⅱ区画」では、9に位置する。この第Ⅱ区画を100 m単位で縦15、横20に区画し、北東端を基点に縦A ~ O、横1 ~ 20で横・縦の順で表示する「第Ⅲ区画」では、3 A · 3 B · 4 A · 4 B · 5 A · 5 B に位置する。さらに、この第Ⅲ区画を10 m単位で区画し、北東端を基点に縦 a ~ j、横1 ~ 10で横・縦の順で表示する「第Ⅳ区画」を、遺物の取り上げ単位として専ら使用した。また、第Ⅳ区画を5 m単位で区画し、北東側をⅠ、北西側をⅡ、南東側をⅢ、南西側をⅣとする「第Ⅴ区画」も併用した。

層番号、面番号は、上層から下層へ数が増えるが、第2層上面が第2面といった具合ではなく、層呼称と面呼称とが不一致である。調査区の大部分は、機械掘削により盛土、旧作土層を除去した段階で地山層が確認でき、包含層が存在しなかった場合が多い。このため、多くの調査区では遺構検出面が1面のみである。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく、また各トレンチを横断し1から順に通し番号を付与した。今回の調査で付与した遺構番号は、若干の欠番を含むが226番までである。

遺構実測図は、いずれもセンター所定のA2版方眼紙を使用した。平面図については基本的に、各トレンチの各遺構面において100分の1で図面を平板等にて作成した。また、各トレンチの層序を記載する断面図は、20分の1で図面を作成した。各層の注記において、色調については『新版標準土色帖』2006年版を使用した。個別遺構の平面図、立面図、断面図については、適宜縮尺を設定したが、10分の1もしくは20分の1で作成したものが多い。なお、これらの図面は通し番号を付与し、A2版用図面ケースに入れて保管している。また、遺構の整理などのため、200分の1で遺構概略図を作成した。

調査における写真撮影には、35 mm白黒フィルム・リバーサルフィルム（いずれもISO 100）、デ

デジタルカメラを主に用い、全景写真や一部の遺構などに6×7白黒フィルムを、また特に重要な場合は同リバーサルフィルムを用いた。なお、撮影対象を記す当センター所定の写真写しこみラベルは、調査名、調査区（トレンチ名）、内容（地区割）、撮影方向、撮影日、撮影者を記したものであり、35mm白黒フィルムに写しこみをしている。これらのうち、各種フィルムについては、マニュアルに従い、所定のアルバム等に収納した。また、デジタルカメラのデータは、以下で記すデジタル台帳用に使用した。

また、一部の遺構面については、トラッククレーンによる航空測量（200分の1撮影・50分の1図化）を実施した。概ね、各トレンチ1回ずつだが、トレンチを細分して撮影したり、複数遺構面で撮影した場合もある。また、クレーン撮影以外に、遺物が多量に出土した64溝については、一部で吊り下げポール撮影（50分の1撮影・20分の1図化）を行い、作業時間の短縮を図った。

遺物の取り上げは、上述のように第Ⅳ区画もしくは第Ⅴ区画を基本単位とし、センターの定めたマイラーベースの現場遺物取り上げ用ラベルに、調査名―調査区名、地区名、層位／遺構面、遺構名、出土年月日、登録番号を記している。この際付与した登録番号は、今回の調査で1からの通し番号であり、調査区（トレンチ）を横断している。

出土遺物は、取り上げ後洗浄を行った。なお、弥生土器など軟質な土器については、バインダーを含浸させた。その後、遺物への注記を行ったが、注記の内容は、マニュアルに基づき遺跡名称である「シモイケダ」と、調査名、調査区名、登録番号である。注記には、手書きのほか、注記マシン（日立インクジェットプリンターKX-D 3667 K）も併用した。これらの出土遺物は、後述する登録台帳用のデジタルカメラによる写真撮影を行うと同時に、磁器、土師器などといった種別を確認し、点数を数えた。その後、接合、復元作業をおこなった。今回の調査では、第3章第2節基本層序にも記すように、旧作土層を除去した段階で地山層が露出する調査区が多い。このため、接合の対象は遺構出土遺物がほとんどであり、時期、複数の調査区にまたがる遺構など、遺構の関係を考慮しながら接合作業をおこなった。そして、一部の遺物は、石膏にて補強復元をおこなった。接合、復元された遺物は、抽出し、実測を行った。抽出されなかった遺物については、登録番号ごとにビニール袋もしくはたまねぎ袋に収納し、基本的にセキスイTS-28のコンテナに数袋ずつを収納した。

なお、今回検出された遺構のうち、64溝を特に重視し、計量的分析を行った。これは、多量の土器が出土したが、破片資料が多く、また全てを図化することは不可能なため、破片資料も含めた遺物様相を把握するためである。詳細については、第4章第2節に記したとおりである。

当センターではマニュアルで各種デジタル台帳の作成が義務付けられている。これはファイルメーカーproにて作成された、写真台帳、登録台帳、遺物台帳の三者である。写真台帳は、上記の調査時に現場でデジタルカメラにて撮影されたデータをインポートしたもので、各種フィルムで撮影された写真番号とリンクするようにしている。また、報告書に掲載した写真の検索も可能である。登録台帳は、上記の遺物取り上げで付与された登録番号ごとに、その出土遺物をデジタルカメラにて撮影したものをインポートし、ラベルのデータを入力したものである。また、遺物の内容、保管場所などの情報も記されている。遺物台帳は、実測・掲載用に抽出、実測した遺物に関するものであり、実測済遺物をデジタルカメラにて撮影したものをインポートしたものである。また、器種、残存率などの遺物に関する情報も記されている。これは、報告書掲載遺物とリンクしており、保管場所等の情報も記されている。これらのマニュアルは、調査の進捗に応じて、随時作成した。

さて、抽出した遺物は、当センター所定の実測用紙に一部を除き原寸にて実測した。大部分がA3版

実測用紙を使用した。大形の遺物についてはA2版を使用し、木器についてはマイラーを使用した場合もある。実測を行った遺物は、実測番号を付加し、上述のデジタル遺物台帳のため、デジタルカメラで撮影を行った。実測遺物のうち、写真図版に掲載するものについては、石膏復元や色塗りを行った。報告書掲載対象となった遺物には、それぞれ報告書掲載番号を注記し、最終的にセキスイTS-28もしくはTR-47のコンテナに、報告書掲載番号順に収納した。なお、実測図には、実測図番号、登録番号、調査区、地区割、遺構名・層位名、出土年月日といった個々の土器について抽出前に付与されたデータと、器種、胎土、法量、色調、残存率、実測日など実測によって得られたデータ、さらに報告書との対応のため挿図番号、写真図版番号をそれぞれ注記した。最終的に報告書掲載番号順にファイルに収納した。

遺構図版はAdobe社のPhotoshop CS3、Illustrator CS3を使用して作成した。遺物図版は、上記の実測図を縮小したものをロットリングにてトレーシングペーパーにトレースし、作成した。写真図版のうち、遺物については、南部調査事務所写真室において遺物の写真撮影を行った。遺構・遺物写真とも、紙焼きしたものは、センター所定のA4版写真図版台紙に貼りこんだ。

以上の報告書印刷用の各種図版作成、保管、活用のための各種台帳作成と併行し、報告書本文を作成した。最終的に、本書刊行をもって、全ての作業を終了した。

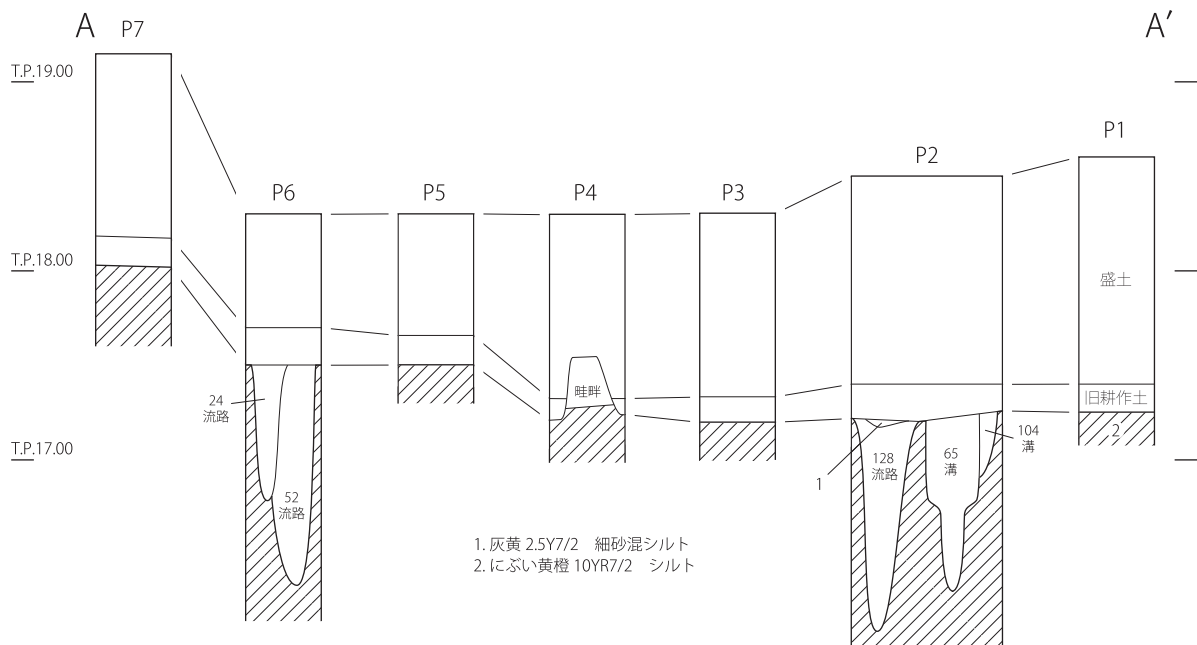
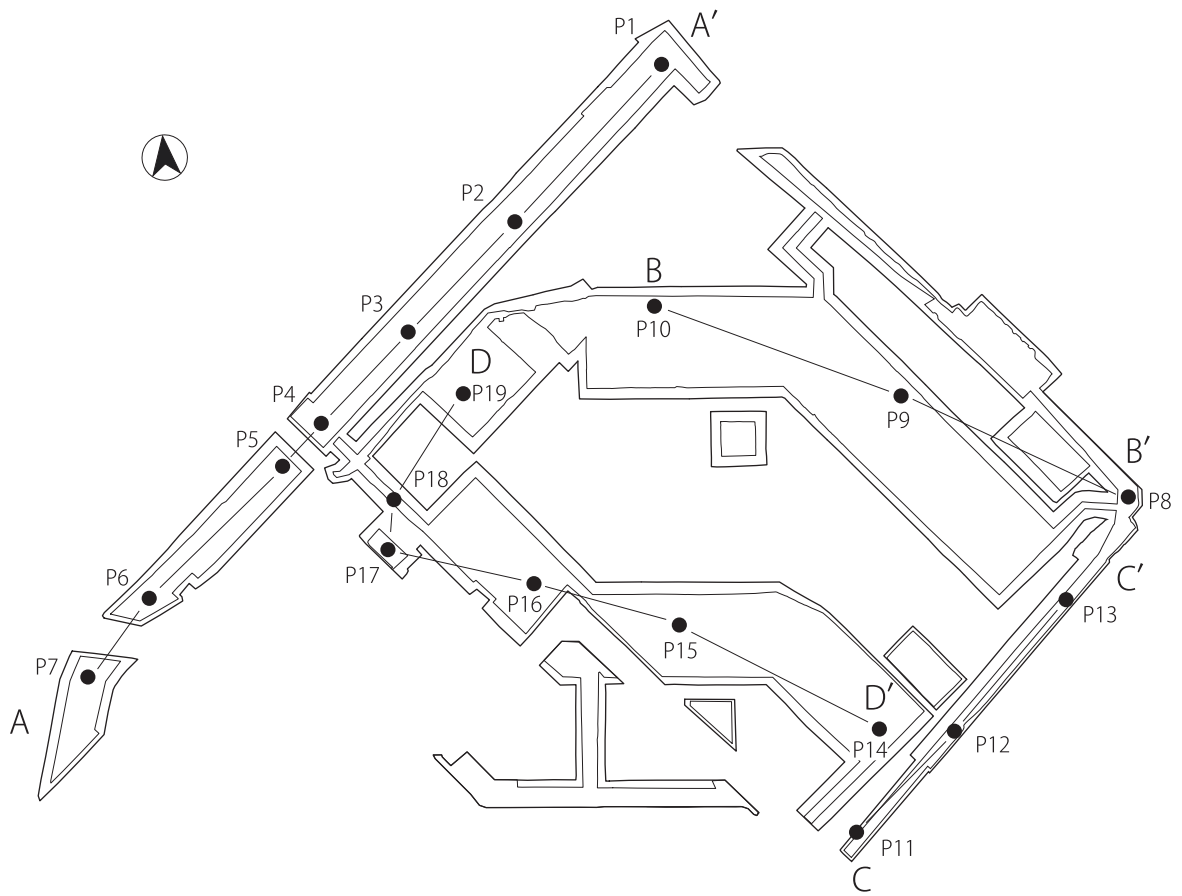


図5 基本層序柱状模式図 (1)

第2節 層序

今回の調査地では盛土と旧耕作土の直下に基盤層があらわれ、遺構面としては1面しか検出することができなかった。ただ、流路部分の直上は浅い窪地となっていたために、中世や古代の遺物を包含する堆積層を確認することができた。良好に残存していたP9やP19の地点に関しては面的な調査を行ったが、中世や古代に属するような遺構を検出することはできなかった。次に、各調査区で見られた層について述べていく(図5・6)。

盛土：時期を示すような遺物は含まれていなかったが、1966年に府営久米田第四住宅が建設されたことから、1966年頃に造成された盛土と考えられる。厚さは、総じて0.8～1mに及ぶ。

旧耕作土：調査地のほぼ全域で確認することができた。近世後期の肥前磁器が層内から出土したことから、近世後期に耕作地として水田が営まれていたと考えられる。層の厚さは、ほぼすべての調査区で0.2m前後である。

1層：128流路と210流路の上部において確認できた灰黄色シルト(P2・P9・P16・P17・P18・P19の1)である。遺構はなく、層内から瓦器椀が出土した。P19部分においては0.4mの厚さを有するが、その他の部分では0.1m前後しか残存していない。

2層：1層と同じく210流路上部において確認できた黒褐色砂質シルト(P17・P18・P19の2)である。遺構はなく、層内から古墳時代後期～古代の須恵器が出土した。厚さは0.1m前後である。

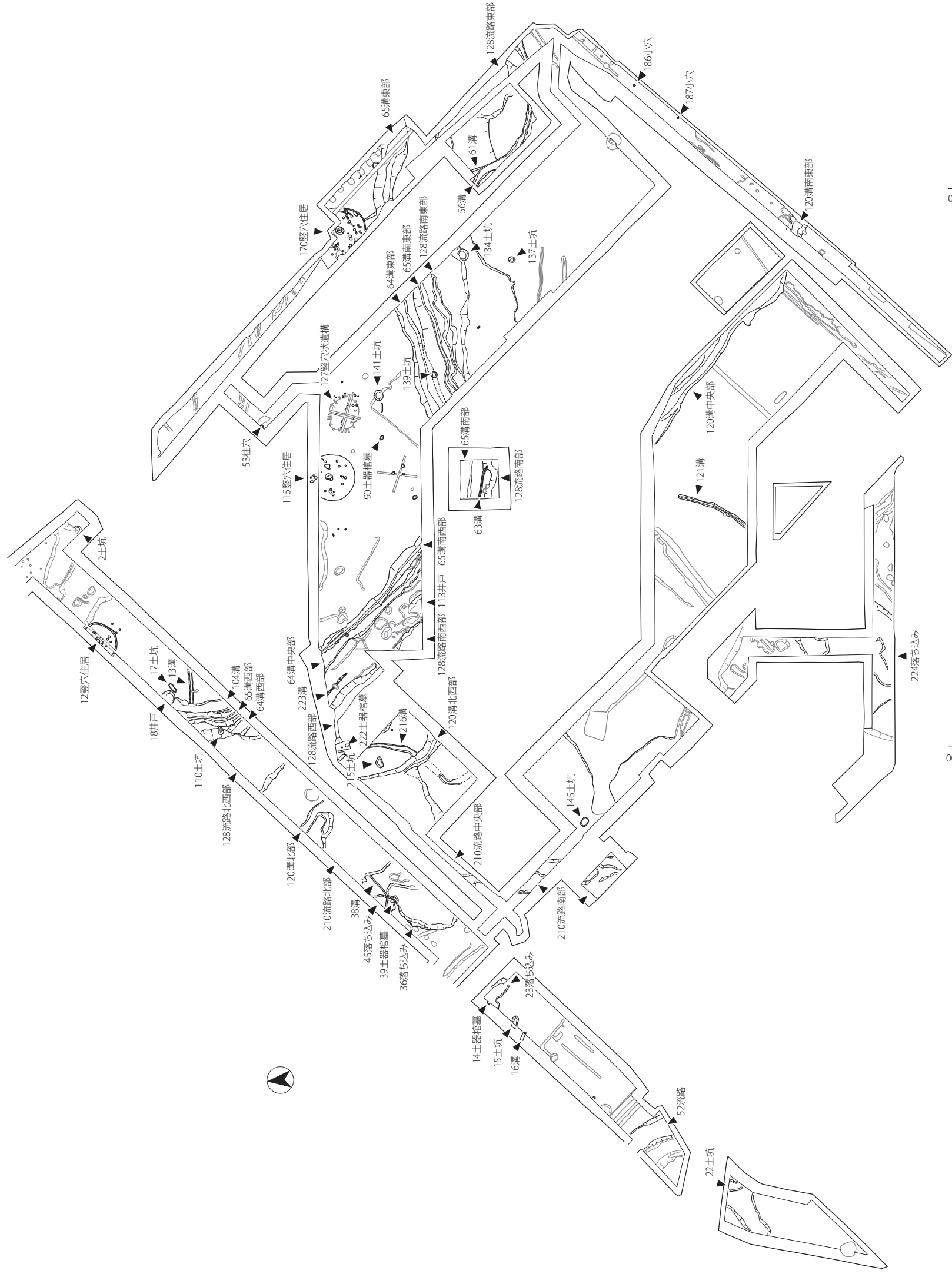
3層：1層と同じく210流路上部において確認できた褐灰色シルト(P17・P18・P19の3)である。遺構、遺物は見られなかった。厚さは0.05m前後である。

基盤層(地山)：にぶい黄橙色シルト、灰白色シルト、灰白色大～中礫、オリーブ黄色砂質シルトの互層からなる。今回の調査で検出した遺構は、すべてこの面での検出である。

このように、今回の調査区では部分的に面的な層の広がりを確認することはできたが、近世～近代の耕作による土地改変により、1～3層は大幅に削平されていると推測される。

表2 新旧遺構番号対応

旧番号	19土坑	109溝	112溝	211溝	64溝	120溝	180溝
新番号	104溝	64溝西部	64溝中部	64溝中部	64溝東部	120溝中央部	120溝南東部
旧番号	209溝	65溝	57溝	67溝	149溝	105溝	214溝
新番号	120溝北西部	65溝南東部	65溝南部	65溝南西部	65溝東部	65溝西部	210流路中央部
旧番号	210溝	217流路	44流路	128流路	147流路	126流路	212流路
新番号	210流路中央部	210流路南部	52流路	128流路南東部	128流路東部	128流路南西部	128流路西部
旧番号	旧流路1	35流路	33流路	46粘土採掘坑	60粘土採掘坑		
新番号	128流路北西部	128流路北西部	128流路北西部	148粘土採掘坑	183粘土採掘坑		



X=-169,600

Y=-54,500

Y=-54,400

Y=-54,300



古代以降はグレー表示

図7 遺構全体図

第3節 遺構

今回の調査で検出した各遺構の詳細について述べていく(図7)。ここでは、弥生～古墳時代と古代以降に項目を分け、各項目の遺構の種類ごとに記載する。時期呼称については次節を参照されたい。また、ここで記載する遺構名が調査時とは異なる名前を付している場合がある。対応関係は表2に記すとおりである。

第1項 弥生～古墳時代

(1) 竪穴住居

12 竪穴住居 (図8・28・95 図版2・11・43)

調査地の北側に位置するもので、今回の調査では最も残存状況が良好な住居址である。直径約7mを有し円形を呈する。住居内からは、中央土坑1基、支柱穴2基、壁溝1条、小穴4基を検出した。

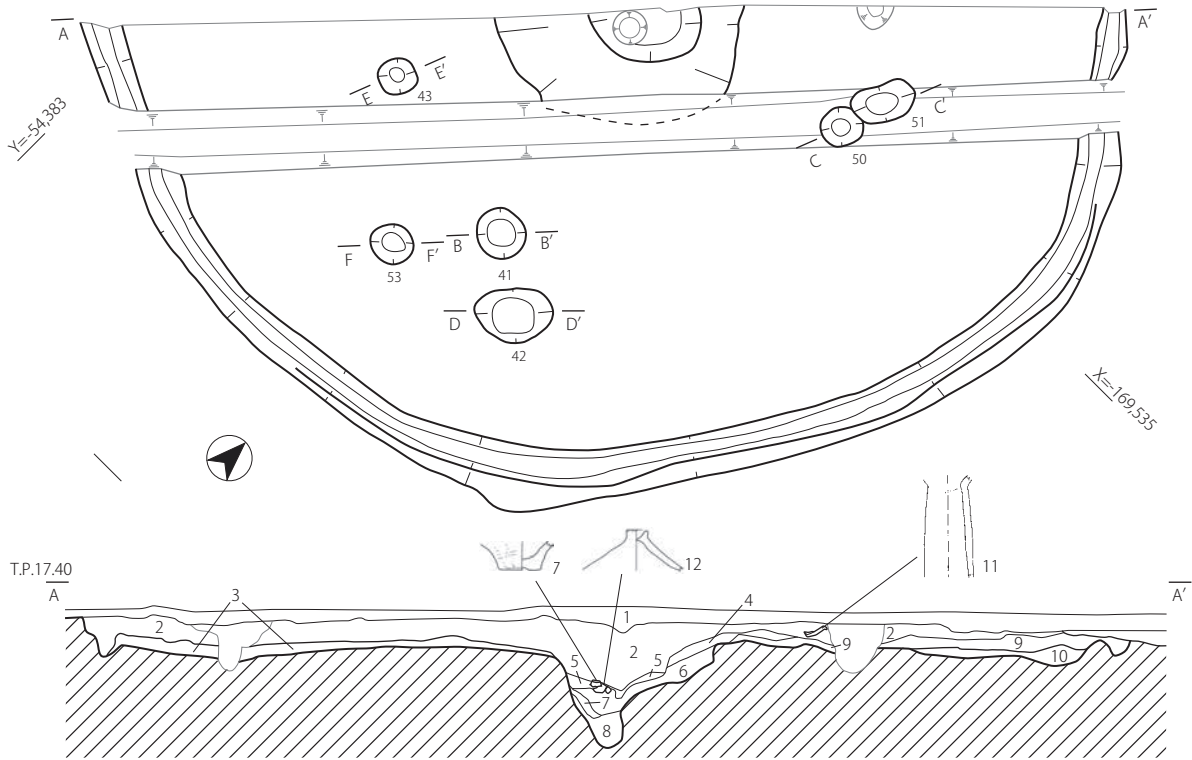
中央土坑は直径約2m、深さ0.75mの二段土坑である。坑内は主に黒褐色シルトが堆積しており、部分的に炭の堆積が見られた。壁溝は幅0.2～0.25m、深さ0.13～0.25mである。南東側の壁溝は住居の掘り方よりも0.2m内側に掘られている。支柱穴は2基検出できた。41柱穴は、柱痕部分が直径0.23m、51柱穴は、直径0.25mである。41柱穴と51柱穴の芯々間の距離は2.65mを測る。住居の約半分を検出しており2本の支柱穴があることから、4本柱建物に復元することができる。床面の一部には砂質シルトが見られる箇所があった(3・10層)。

高坏(9・10)、石鏃(1163)は床面で検出した。また、壺(3・4)は壁溝直上に据え置かれており、壁溝に挟まれた状態で検出した。住居に堆積した層(2層)からは、壺(2)、甕(5・7)、高坏(8・11)、蓋(12)、器台(1)が出土している。平面形と埋土を検討した結果、建て替えの痕跡は認められず、遺物の出土状況からも機能期間は弥生時代後期前葉で短期間の存続であったと考えられる。

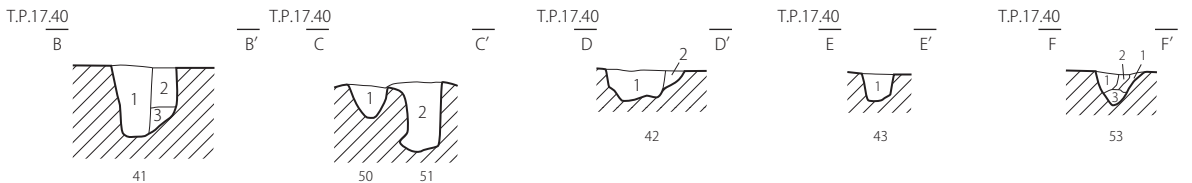
170 竪穴住居 (図9・10・11・29 図版3・12)

調査地の北東側に位置する。水田耕作による土地改変のため上部はかなりの削平を受けて床面などは残存していなかった。西側部分は水田段差によりさらに0.3m前後深く削り込まれている。また、12竪穴住居や後述する115竪穴住居は基盤層である礫上に立地しており、170竪穴住居は同じ基盤層でもシルト上に立地して他の住居とは立地条件が異なる。住居内からは、中央土坑1基、支柱穴24基、壁溝3条、小穴6基、土坑1基、排水溝1条を検出した。

191中央土坑は、二段土坑で上段の直径1.3m、下段の直径0.7m、深さ0.85mである。埋土はシルトが堆積しており、炭化物を多く含む。支柱穴は、直径0.25m前後のものがほとんどであるが、160・205柱穴は直径0.15m前後と小さい。支柱穴は浅いものでも0.4m、深いものになると0.65mの深度を有する。いずれの埋土も、黒褐色～褐灰色のシルトをベースに基盤層起源のシルトブロックが含まれる。柱を抜き取った後に、周囲の土で埋め戻された結果であろう。また、154柱穴の底には上面が水平になるよう石が据えられていた。192柱穴は191中央土坑を掘削した後に検出したことから、191中央土坑に伴わない柱穴である。194・178・166・164・163・177・200小穴、197・199土坑は、いずれも浅く自然の窪みか住居構築時における形成痕跡と考えられる。壁溝は、南東から南にかけての部分で3条を検出した。壁溝の切り合い関係を確認することはできなかったが、少なくとも2度の建て替えが行われており、南東側へと拡張していったと考えられる。最も内側に位置する201溝は幅0.18m、深さ0.04mである。中央に位置する202溝は幅0.14m前後で掘り込みがなく色の違いをとどめるの



1. 褐灰 10YR5/1 砂質シルト (旧耕作土)
2. にぶい黄褐 10YR4/3 中礫～中砂混砂質シルト
3. にぶい暗褐 10YR3/3 砂質シルト
(黄褐 10YR5/6 砂質シルトブロック含む)
4. 灰黄 10YR4/2 粗砂混砂質シルト
5. 黒褐 10YR3/2 粗砂混粘質シルト (炭化物含む)
6. 黒褐 10YR3/2 粗砂～中砂混砂質シルト
7. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂～細砂
8. 黒褐 10YR3/1 大礫～粗砂混粘質シルト
9. 褐灰 10YR5/1 中礫～細砂混砂質シルト
10. 橙 7.5YR6/6 粗砂多く混砂質シルト



- | | | | | |
|---|---|---|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐 10YR3/2 粘質シルト 2. 褐灰 10YR5/1 粗～中砂混砂質シルト 3. 明黄褐 2.5Y7/6 砂質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混砂質シルト 2. 黒褐 10YR3/1 中砂混粘質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐灰 10YR4/1 砂質シルト
(明黄褐 10YR6/6 砂質シルト含む) 2. 明黄褐 10YR6/8 小礫～粗砂混砂質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐灰 10YR4/1 粗砂混砂質シルト | <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐 10YR4/6 砂質シルト 2. 褐灰 10YR4/1 中砂混砂質シルト 3. 黄灰 2.5Y4/1 粗～中砂 |
|---|---|---|--|--|

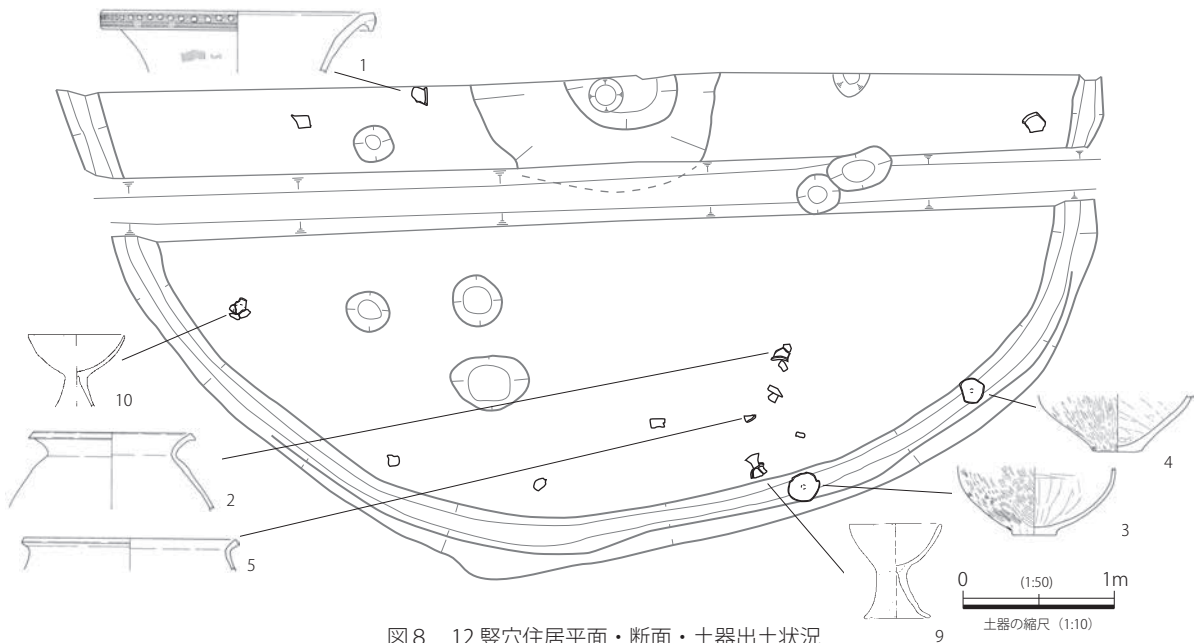


図8 12 竪穴住居平面・断面・土器出土状況

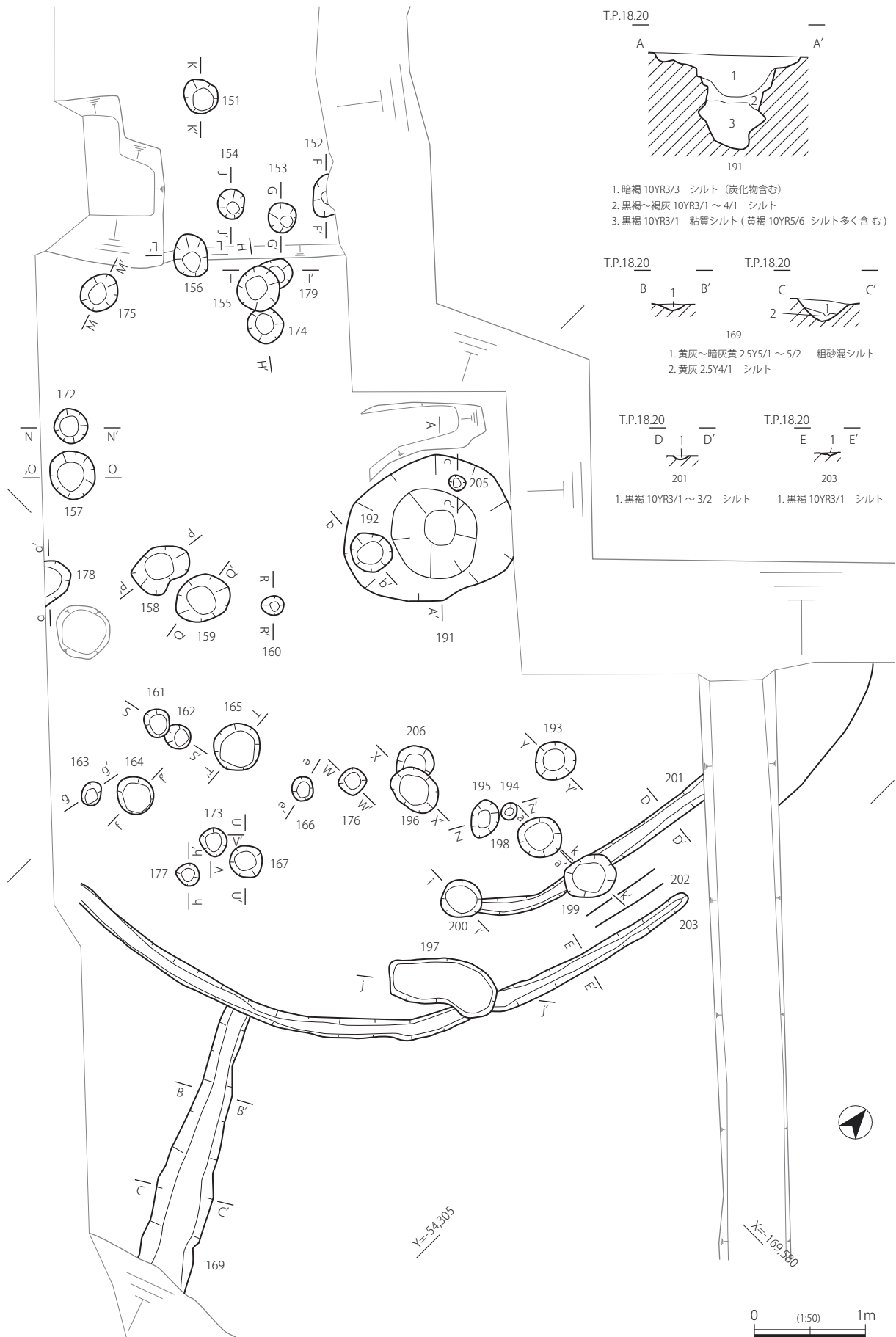
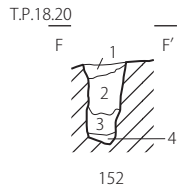
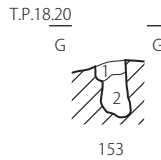


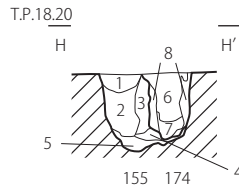
図9 170 竪穴住居平面・断面



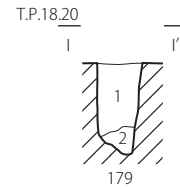
1. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混シルト
(褐灰 10YR5/1 シルト 含む)
2. 褐灰 10YR5/1 細砂混シルト
(明黄褐 10YR7/6 シルトブロック
・灰黄褐 10YR4/2 粗砂多混シルトブロック
含む)
3. 灰黄褐～褐灰 10YR4/2～5/1 シルト
4. 褐灰 10YR5/1 シルト



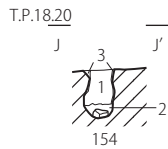
1. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混シルト
(褐灰 10YR5/1 シルト 含む)
2. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
(黄褐 10YR5/6 シルトブロック
・褐灰 10YR5/1 細砂混シルトブロック
含む)



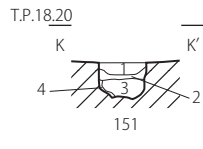
1. 黒褐 10YR3/2 シルト
(にぶい黄褐色 10YR5/4 シルトブロック 含む)
2. 黒褐 10YR3/2 シルト
(にぶい黄褐 10YR5/4 シルトブロック多く含む)
3. 明褐～褐 10YR6/6～4/4 シルト
4. 黒褐～黄灰 10YR3/2～2.5Y4/1 極細砂～シルト
5. 明黄褐 10YR6/6 シルト
6. 明黄褐～褐 10YR6/6～4/4 シルト
(褐灰 10YR4/1 シルトブロック 含む)
7. 褐灰 10YR4/1 シルト
8. 褐灰 10YR5/1～4/1 シルト



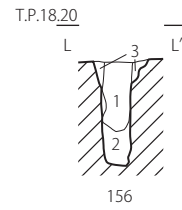
1. 暗褐 10YR3/4 シルト
(褐灰 10YR5/1 粘質シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック含む))
2. 褐灰 10YR5/1 粘質シルト



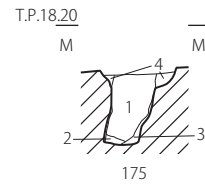
1. 黒褐 10YR3/2 シルト
(灰白 2.5Y8/2 シルトブロック 含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～粘質シルト
3. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
(黄褐 10YR5/6 シルト含む)



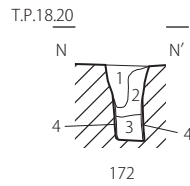
1. 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト～シルト
(黄褐 2.5Y5/4 粘質シルトブロック多・炭化物 含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 砂質シルト
3. 灰白 2.5Y8/2 シルト
4. 黄灰 2.5Y4/1 シルト
(灰白 2.5Y8/2 シルトブロック 含む)



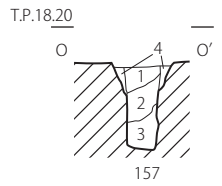
1. 黒褐 10YR3/2 小礫～粗砂少混シルト
2. 黄灰 2.5Y4/1 シルト～粘質シルト
(明黄褐 10YR6/6 シルトブロック 含む)
3. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
(黄褐 10YR5/6 シルト 含む)



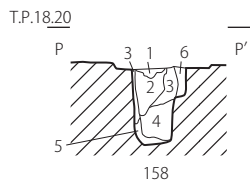
1. 黒褐 10YR3/2 シルト
(褐 10YR4/6 シルトブロック)
2. 黄灰 2.5Y5/1 シルト～粘質シルト
3. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
(灰黄 2.5Y6/2 シルトブロック)
4. 暗灰黄 10YR5/2 シルト



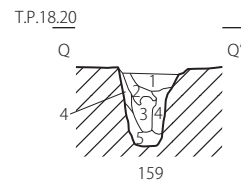
1. 黒褐 10YR2/2 シルト
(黄褐 10YR5/6 シルト 含む)
2. 明黄褐 10YR6/6 シルト
(灰黄褐 10YR4/2 シルト 含む)
3. 黒褐 10YR3/2 シルト
(褐灰 10YR5/1 シルトブロック
・明黄褐 10YR6/6 シルトブロック 含む)
4. 褐灰 10YR6/1 極細砂～シルト



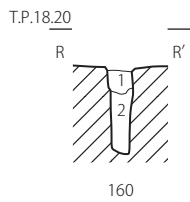
1. 黒褐 10YR3/2 シルト
(明黄褐 10YR6/6 シルトブロック少量 含む)
2. 黄褐 2.5Y5/4 シルト
(にぶい黄褐 10YR5/4 シルト)
3. 黒褐 10YR3/2 シルト
4. にぶい黄 2.5Y6/4 細砂～シルト



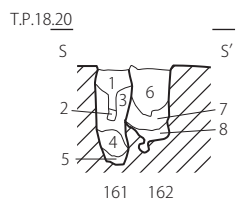
1. 明黄褐 10YR6/6 シルト (Fe 斑頭著)
2. 黒褐 10YR3/2 シルト (炭化物 含む)
3. 褐灰 10YR5/1 極細砂～シルト
4. 褐灰 10YR4/1 粘質シルト
5. 黄灰 2.5Y5/1 極細砂～シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック多く 含む)
6. 黒褐 10YR3/1 シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック多く 含む)



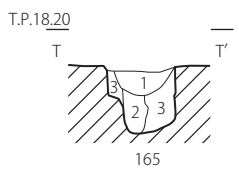
1. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック多く 含む)
2. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック 含む)
3. 明黄褐 10YR6/6 シルト
(褐灰 10YR5/1 極細砂～シルト 含む)
4. 褐灰 10YR5/1 極細砂～シルト
(明黄褐 10YR6/6 シルト 含む)
5. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック多く 含む)



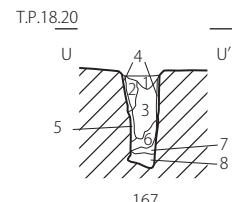
1. 黄灰 2.5Y6/1 シルト
2. 暗灰黄 10YR4/2 シルト～粘質シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック 含む)



1. 黄灰 2.5Y4/1 シルト
(にぶい黄 2.5Y6/4 シルト多く 含む)
2. 黄灰 2.5Y4/1 シルト
3. 黄灰 2.5Y5/1 極細砂～シルト
(黄褐 2.5Y5/6 シルト
・明黄褐 10YR6/6 シルト 含む)
4. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
5. 浅黄橙 10YR8/3 シルト
6. 黒褐 10YR3/1 シルト
7. 灰黄褐 10YR4/2 粘質シルト
8. 褐灰 10YR5/1 シルト
(黄灰 2.5Y5/1 シルトブロック 含む)



1. 褐灰 10YR4/1 シルト
(にぶい黄橙 10YR6/5 シルトブロック多く 含む)
2. 明黄褐 10YR6/6 シルト
(灰黄褐 10YR4/2 シルト
・褐灰 10YR5/1 シルトブロック 含む)
3. 明黄褐 10YR6/6 シルト
(灰黄褐 10YR4/2 シルト
・褐灰 10YR5/1 シルトブロック多く 含む)



1. 黄灰 2.5Y4/1 シルト
(にぶい黄 2.5Y6/4 シルトブロック多く 含む)
2. 黄灰 2.5Y6/1 シルト
(にぶい黄 2.5Y6/4 シルトブロック 含む)
3. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
(にぶい黄 2.5Y6/4 シルトブロック多く 含む)
4. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
5. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
(にぶい黄 2.5Y6/4 シルトブロック少量 含む)
6. 黒褐 10YR3/1 粘質シルト
(にぶい黄褐 10YR4/3 シルト・炭化物 含む)
7. 灰白 2.5Y7/2 粗砂混粘質シルト
8. 黄灰 2.5Y4/1 シルト



図 10 170 竪穴住居柱穴断面

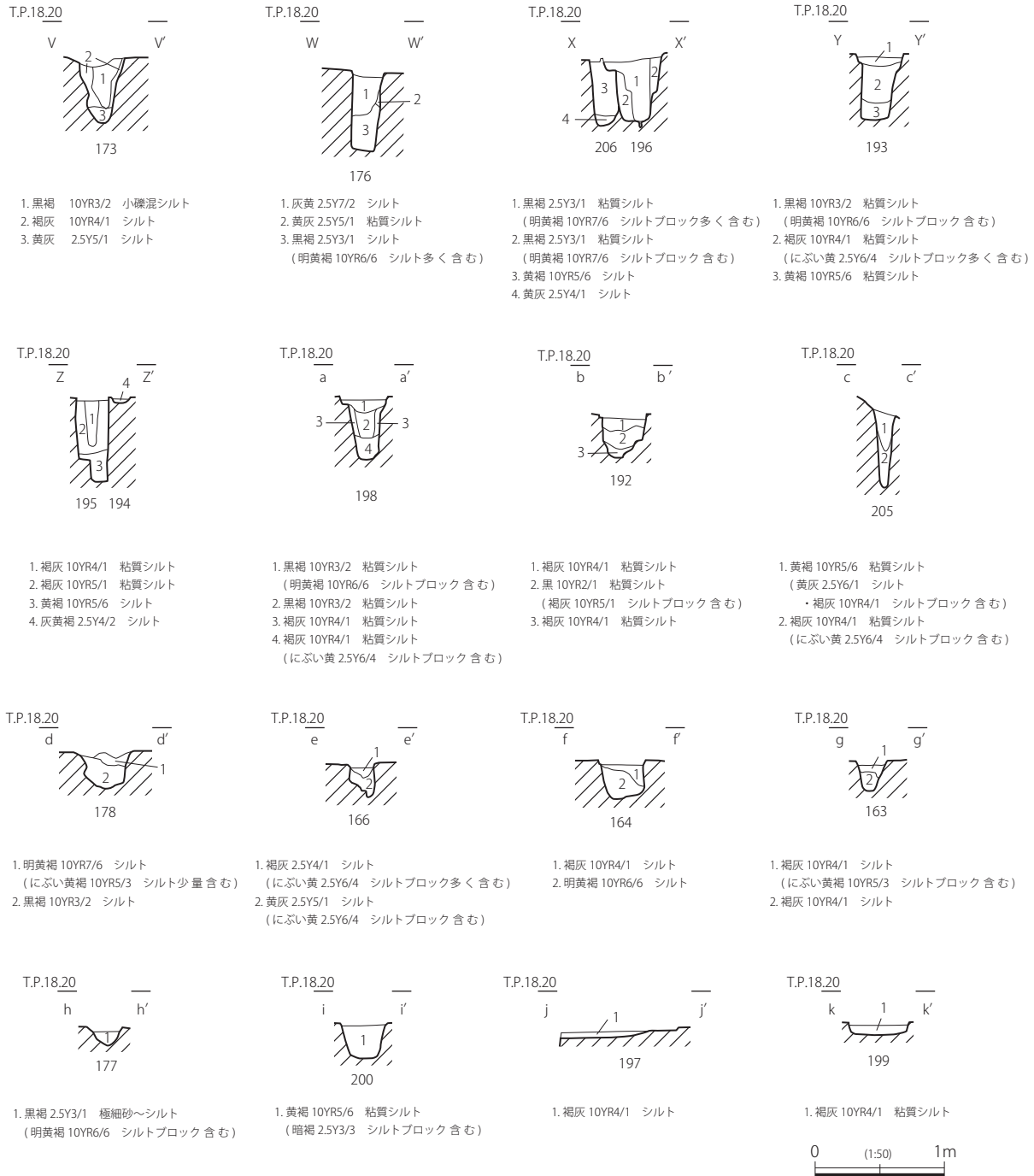


図 11 170 竪穴住居柱穴・小穴・土坑断面

みであった。最も外側の 203 溝は幅 0.23 m、深さ 0.06 m である。169 溝は、203 溝に取り付く住居外へと続く排水溝で、深さは 0.06 ~ 0.2 m を有し住居から離れるに従って広く深くなる。溝の南東は 67 溝によって切られ、全体の長さや形状は不明である。

170 竪穴住居の想定範囲にすべての柱穴が検出されていることから、掘立柱建物などの別の建物が建っていたとは考えにくく、柱穴はすべて竪穴住居に伴うものと考えられる。壁溝の条数から最低でも 3 時期の存続期間があったと推測されるが、最も古い時期の遺構は切り合い関係により 201 溝と考えられる。201 壁溝を基準として円形住居を想定した場合、直径は 6.5 m に復元することができる。また、155 柱穴を中心とした西側と 196 柱穴を中心とした東側に一定の柱穴のまとまりが見られ、191 中央土坑との関係から 5 本または 6 本柱の建物であったと想定できる。同様に、202 壁溝では直径 7.5 m、

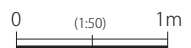
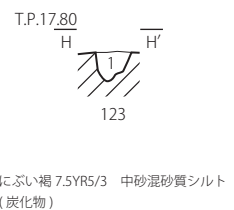
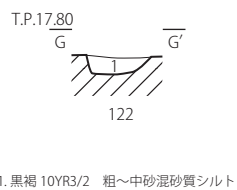
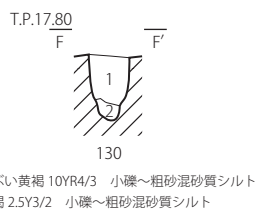
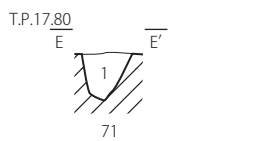
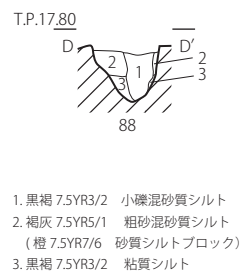
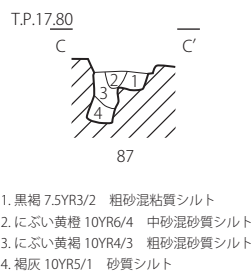
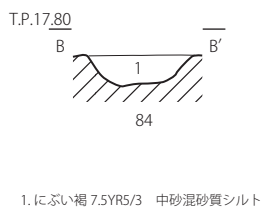
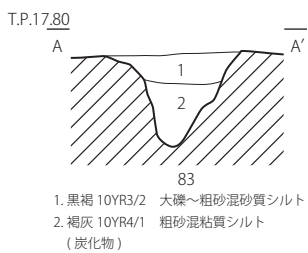
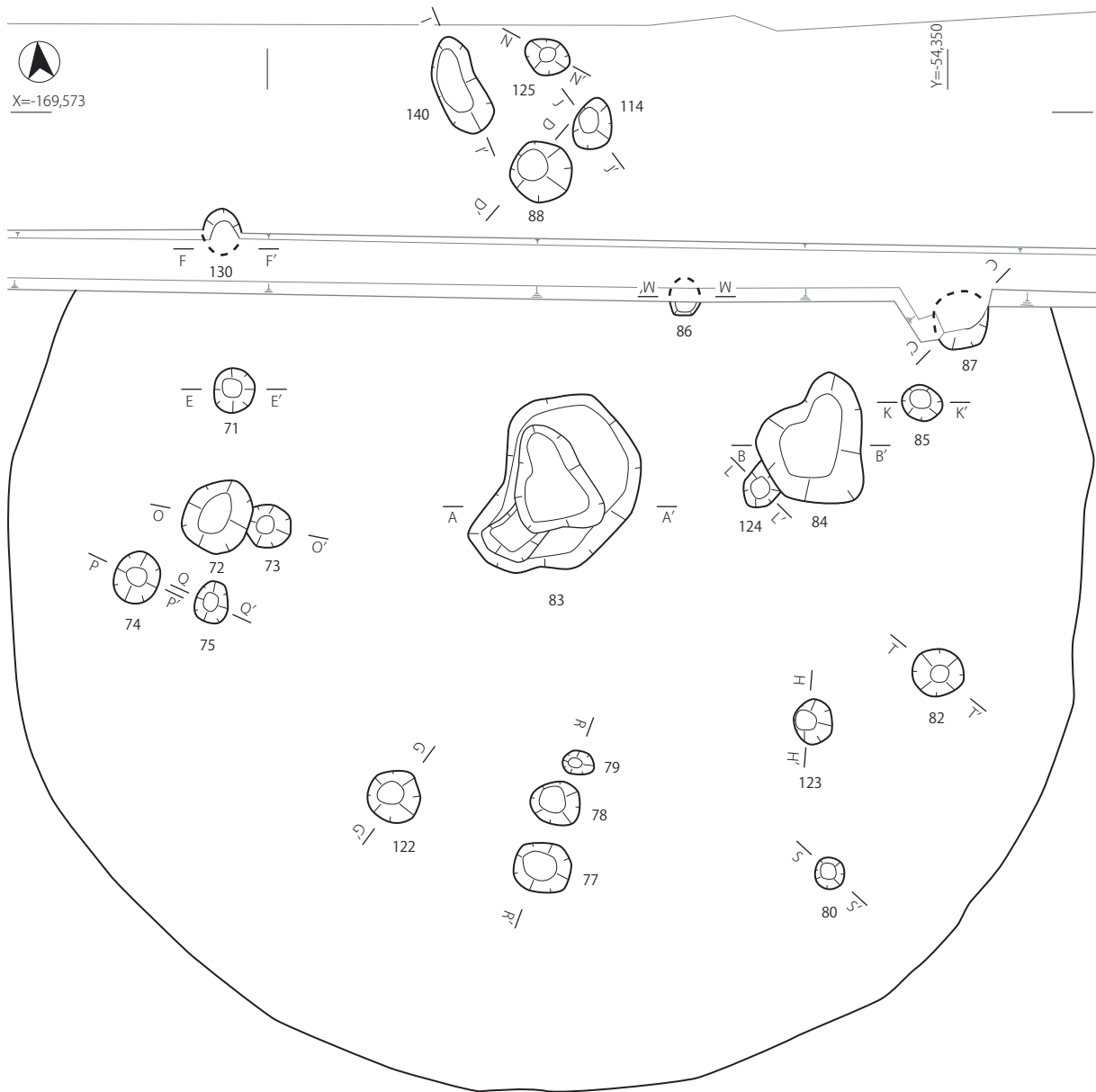


図 12 115 竪穴住居平面・土坑・柱穴断面

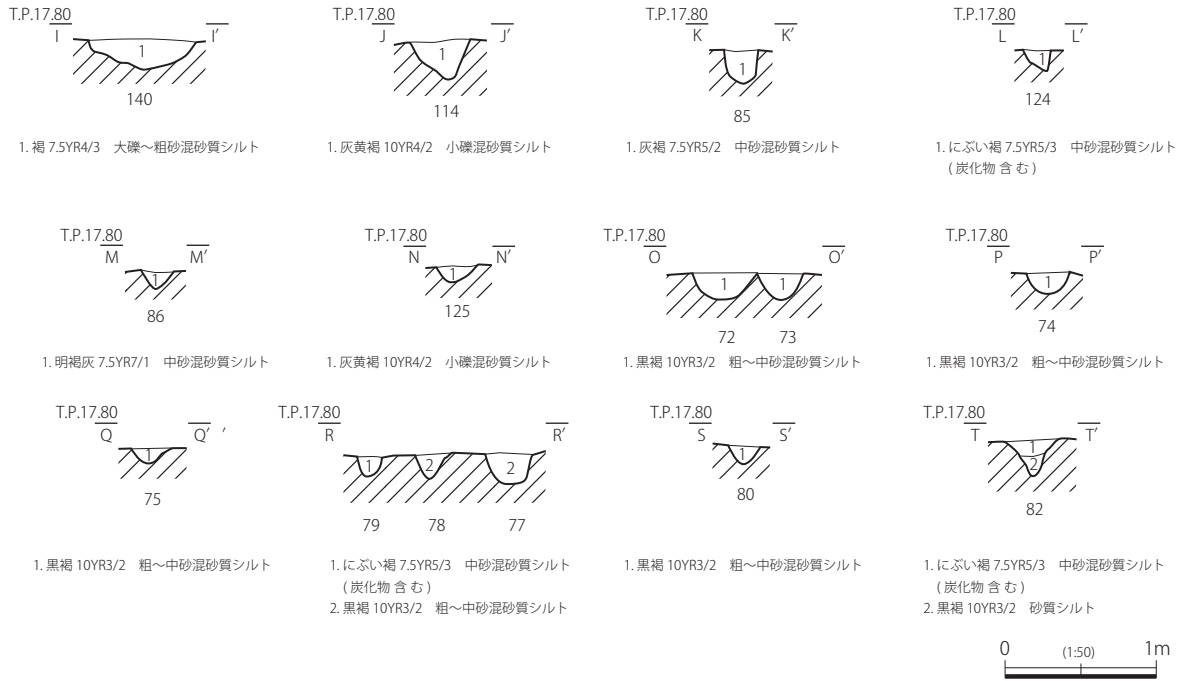


図 13 115 竪穴住居土坑・柱穴断面

203 壁溝では直径 8 m の円形住居が復元でき、柱が集中する箇所を基準として、柱の数は 5 本または 6 本であったと考えられる。

191 中央土坑からは壺 (27・29・30)、高坏 (22～26)、甕 (28・31～34) が出土した。155・157・159・167・175・192・196 柱穴からは甕・壺・高坏・鉢・器台 (35～43)、169 溝からは高坏 (44) が出土した。この他にも小破片であるため図化していないが、152・153・154・156・157・158・160・161・162・163・164・165・172・173・174・176・192・193・195・198・200・205・206 柱穴、166・177・194・200 小穴、197・199 土坑から弥生土器が出土している。これらの遺物から、最終的な廃絶時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

115 竪穴住居 (図 12・13・28 図版 4・11)

調査地の中央よりやや北側に位置する。旧耕作土直下にあり土地改変のため上部のほとんどは削平されている。そのため、円形になる痕跡と土坑 3 基、柱穴 4 基、小穴 16 基を残すのみであった。直径は約 8 m で、壁溝にあたる部分には埋土と思われる土が点的に存在したが、壁溝を検出することはできなかった。

83 中央土坑は、南北 1.3 m、東西 1 m の南西側に少し開く不正円形を呈する。深さ 0.6 m、埋土は黒褐色のシルトで炭化物が含まれていた。明確な主柱穴として、87・88・71・130 柱穴がある。いずれも深さ 0.35～0.45 m を測る。87・88・71 柱穴の配列から、122・123 小穴も柱穴と推定され、5 本柱建物に復元することができる。84 土坑は南北 0.9 m、東西 0.7 m、深さ 0.2 m を有する不正円形の土坑である。埋土は、にぶい褐色の砂質シルトで、性格については明らかにできなかった。140 土坑は、南北 0.7 m、東西 0.3 m、深さ 0.2 m の長楕円形の土坑である。弥生土器と考えられる小破片が出土している。114 小穴は、直径 0.4 m、深さ 0.25 m の円形で、細片ではあるが弥生土器が出土した。その他の小穴は、深さ 0.1 m 前後といずれも浅く住居内における凹凸と考えられる。

出土遺物は、83 中央土坑から壺 (16)、甕 (15)、高坏 (17・18)、84 土坑から鉢 (13・14) が出土した。また、図化していないが 88 柱穴から甕、高坏といった弥生時代後期の遺物が見られた。71・

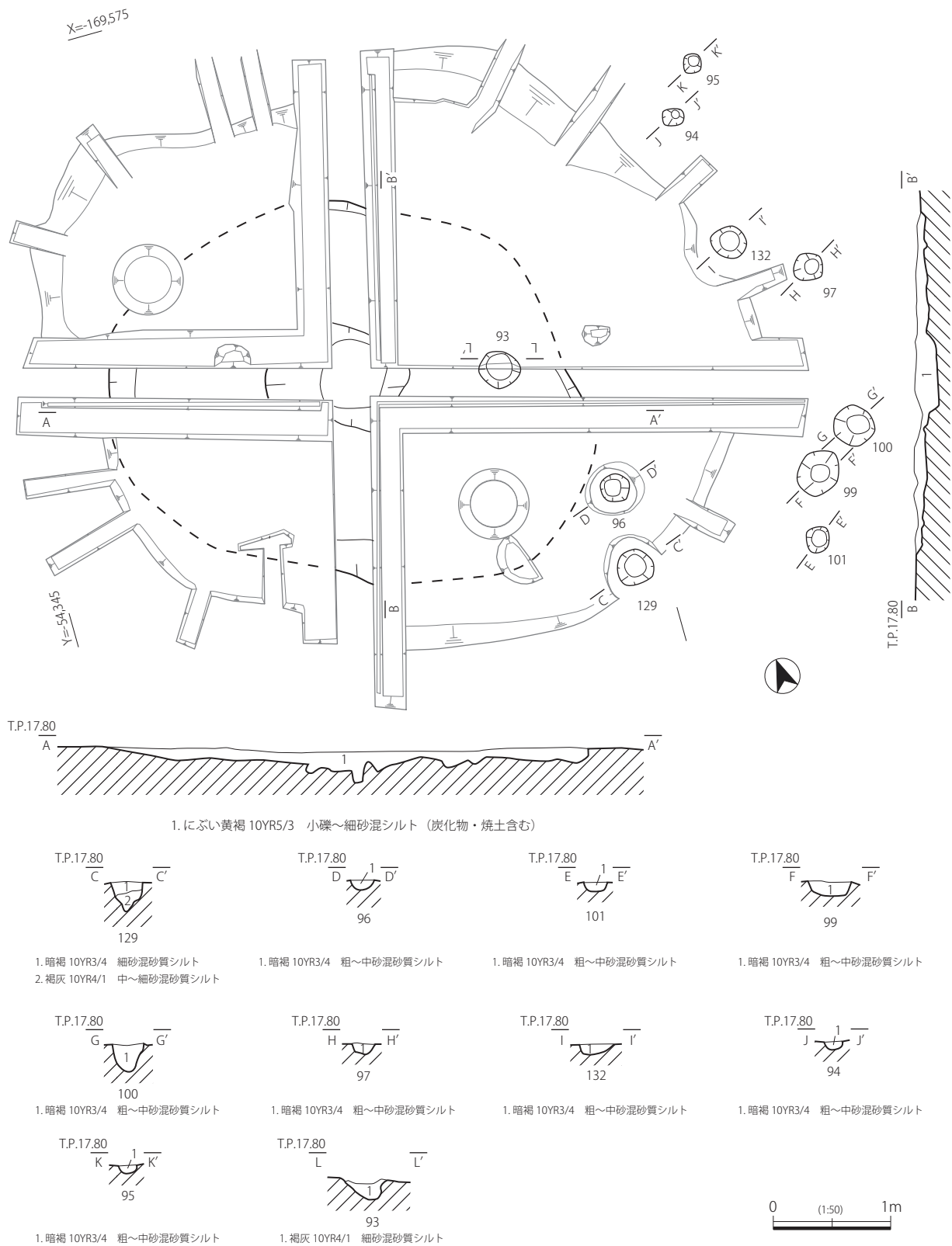


図 14 127 竪穴状遺構平面・断面・小穴断面

72・73・74・75・82・86・87・122・124・125・130 小穴でも弥生土器と思われる小破片が出土したが、いずれも時期や器種を詳細に特定することはできない。

平面形に重複関係がみられないこと、そして柱穴となる遺構が少ないことから、建て替えはなく弥生時代後期前～中葉に属するものとする。

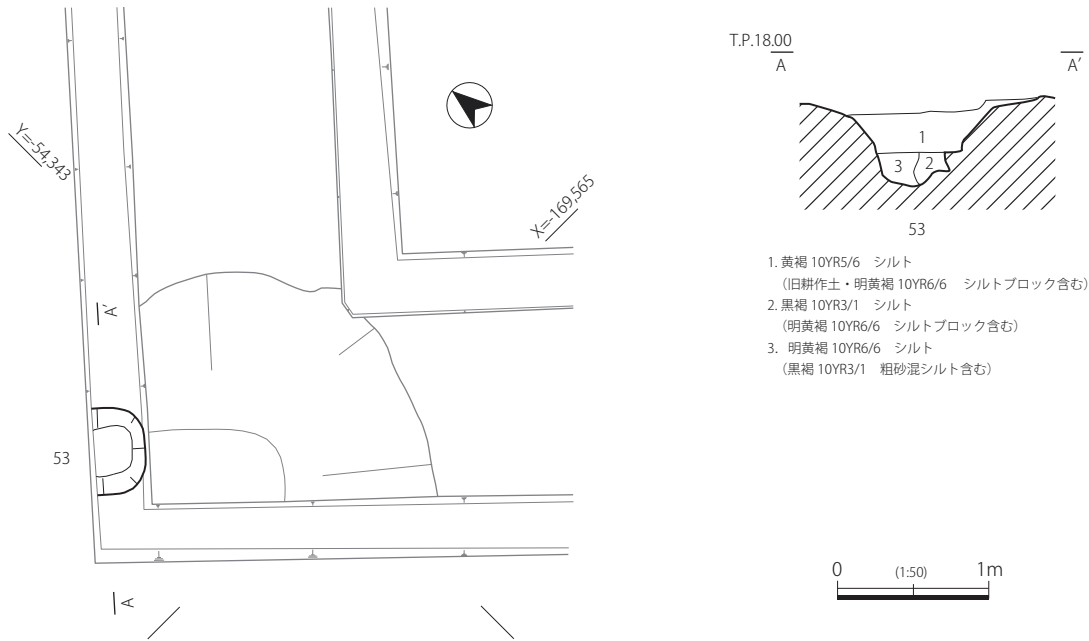


図15 53 柱穴平面・断面

127 竪穴状遺構 (図14・28 図版5・45)

115 竪穴住居から東に約 3 m の場所に位置する。遺構検出中は、竪穴住居を想定して調査を行ったが中央土坑、壁溝などを検出することはできなかった。埋土には炭化物と 0.1 m 大の焼土塊が含まれており、中心部分には炭化物が顕著に見られた。確認のため中心部分に十字のアゼを残しながら遺構内をさらに掘り下げて調査を行ったが、新たな遺構を発見することはできず、3～4 m の楕円で中心部分に向かってすり鉢状に窪む形状の遺構と判断した。

127 竪穴状遺構の周辺には小穴を検出することができ、特に 100・129 小穴は深さ 0.3 m 前後で他に比べて深く、柱穴となる可能性がある。99・100・129 小穴からは、弥生土器と思われる土器片が数点出土したが、時期や性格を特定するまでには至らなく、これらの小穴が 127 竪穴状遺構に伴うものかは判断できなかった。また、遺構の周囲には境界を明確にすることはできないが、直径約 10 m の範囲で炭化物と火を受けたような土が広がっていた。

127 竪穴状遺構の埋土からは壺 (20)、甕 (21)、高坏 (19) が出土した。

以上の状況から、当初は住居地の底部中央を検出した可能性を想定していたが住居を構成する配列の柱穴がないことから竪穴住居址と解することはできない。火を使用したと思われる土の広がりや 127 竪穴状遺構が相互に関係を持つものか断定はできないが、2つの関連を重視して屋外炉跡などのような火所があったと考えておきたい。時期は弥生時代中期後葉～後期中葉と推定される。

53 柱穴 (図15)

115 竪穴住居の北約 15 m に位置する。上部 (1・2 層) は近世の掘削により削平されていたが、下部 (3・4 層) において直径 0.5 m を有する 53 柱穴を検出した。柱部分 (3 層) は、径約 0.26 m である。出土遺物はなかったが、付近は遺構が集中する箇所であり、弥生時代の竪穴住居や掘立柱建物の柱穴となる可能性が高い。

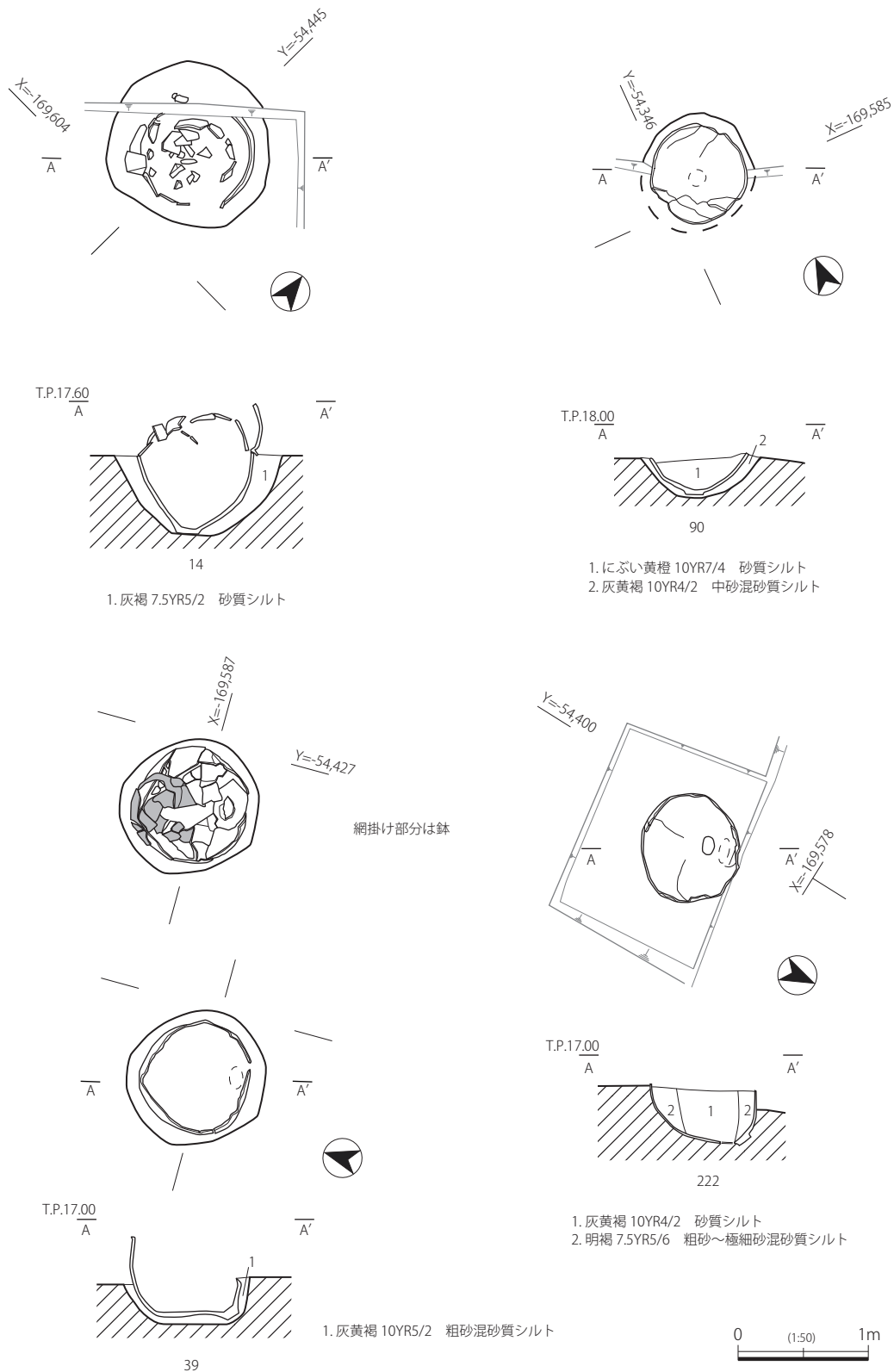


図 16 14・39・90・222 土器棺墓平面・断面

(2) 土器棺墓

14 土器棺墓 (図 16・30 図版 5・13)

調査地の南西側に位置し、23 落ち込みを切って埋設されていた。棺身は壺 (48) で、甕 (47) を棺蓋として立位の埋葬位置を採る。掘り方の直径は約 1.2 m である。土器棺内の埋土から副葬品のような

遺物を発見することはできなかった。接合作業の結果、棺身は口縁部まで残存していることが判明し、完形品による埋葬であった。弥生時代中期後葉の所産と推察する。

90 土器棺墓 (図 16・32 図版 5・13)

調査地のほぼ中央で、旧耕作土直下で検出した。上部の削平により土器棺墓ではない可能性もあるが、同様の様相である 14・39・222 が土器棺墓と考えられることから土器棺墓と判断した。検出した部分は、棺身となる弥生時代中期の壺 (52) の底部のみであった。現状での掘り方は直径 0.8 m、埋葬位置は立位と想定できる。埋土からの出土遺物はなかった。想定のとおり立位の土器棺墓とすれば、旧地表面から 0.7 m 以上は削平されたことになり、後世の土地改変がいかに大規模であったかをうかがい知ることができる。

39 土器棺墓 (図 16・31 図版 5・13)

調査地の西側に位置し、45 落ち込みを切る。土器の埋設に合わせて掘り方の平面形は北東～南西方向の楕円形を呈する。棺身は壺 (50) で、頸部より上位を水平になるよう打欠を行っている。棺蓋は鉢 (49) である。棺内の埋土から副葬品などは出土しなかった。垂直から約 40 度傾けて、頸部が磁北より 9 度東に向くように埋設している。弥生時代中期末頃である。

222 土器棺墓 (図 16・32 図版 5・13)

調査地中央やや西に位置する。上部は、耕作地化に伴って削平されている。明確な掘り方が見られないことから棺と同規模の大きさかやや大きい掘り方であったと考えられる。棺身は、生駒山西麓産胎土の壺 (51) で、棺蓋となるような遺物は出土しなかった。胴部下半の部分に穿孔を施し、穿孔部分が下になるよう約 40 度傾けて斜位に埋設し、頸部を磁北から 26 度東に振った位置に向けている。弥生時代中期末頃と考えられるが、後期に下る可能性もある。

(3) 土坑・井戸・落ち込み

17 土坑 (図 17・34 図版 5・14)

調査地北側で、12 竪穴住居から南西方向に 16 m の場所で検出した。東西幅 1.8 m、南北幅 0.7 m、深さ 0.15 m の長楕円形の土坑である。断面形状は肩から底に向かって緩やかな傾斜を持つ。深度が浅いにも関わらず、630 点余りの土器片とサヌカイト剥片 2 片が出土した。接合を行ったが完形になるものはなく多くは破片であることから、廃棄されたものと考えられる。

図化したものは、壺 (78～82)、甕 (73～75・83)、高坏 (77)、鉢 (76) がある。弥生時代中期後葉頃である。

139 土坑 (図 17・33 図版 5・14)

調査地中央やや東で、64 溝東部と 65 溝南東部の間に位置する。64 溝東部掘削後に検出することができた。上部は 64 溝によって削られており、本来の規模はさらに大きかったものと推測されるが、現状で幅約 1.0 m、深さ 0.2 m の不整形な平面形を有する土坑である。埋土は褐灰色砂質シルト (1 層) と灰黄褐色粘質シルト (2 層) の 2 つに分かれる。

土器のほとんどは 1 層から出土しており、比較的大きな破片が多いのが特徴である。1 層で出土したものは、壺 (58・59)、甕 (53～55)、鉢 (56)、蓋 (57) がある。また、2 層からは完形の小型鉢 (60) 1 点が出土した。いずれも弥生時代中期後葉と考えられる。

110 土坑 (図 7・33 図版 43)

調査地の北側に位置し、65 溝西部によって切られて 128 流路北西部を切っている。平面形は東西に

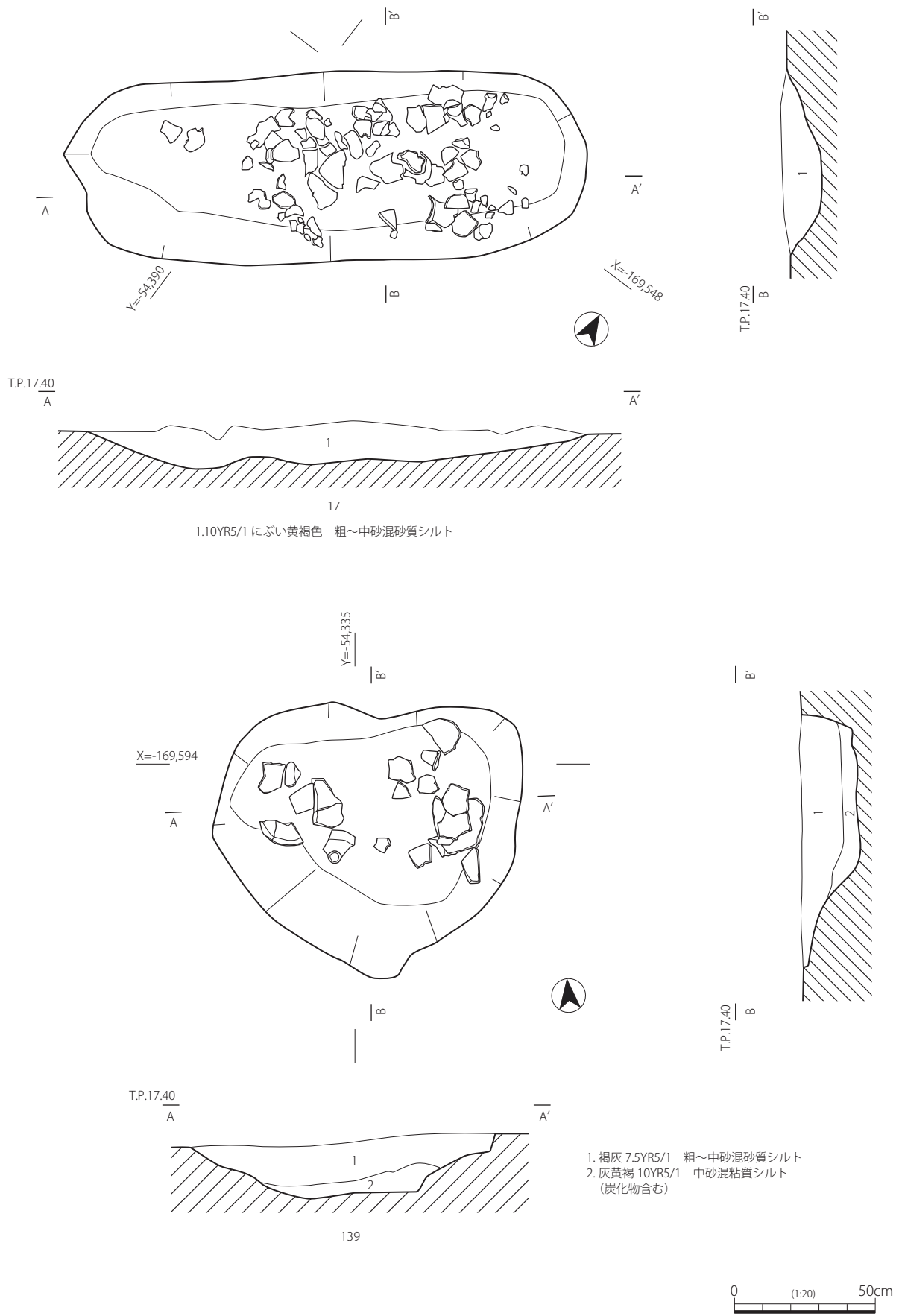


図 17 17・139 土坑平面・断面

長い不整形で、断面形状は一部が深く掘りこまれており二段になる。東西幅は約2 m、南北幅は約1 m、深さ0.3～0.4 mを測る。平面・断面ともに不整形である。埋土は、灰色(7.5 Y 6/1)粘質シルトの1層のみであった。

壺(61～63)、石匙(1159)が出土した。出土した遺物は弥生時代ではあるが遺構の切り合い関係から、古墳時代前期と推測される。

145 土坑(図18・33)

調査地の南西側で、第3章第2節で記述したように流路による窪みのため、若干の堆積層が見られた場所に位置する。その堆積層を掘削した後に145土坑を検出した。長軸で1.6 m、短軸で1.1 mの楕円形を呈する。深さは0.1 mで、500点余りの土器片が出土した。

図化したものは甕(66～68)、壺(69)、高坏(70)である。弥生時代後期前～中葉と推察する。

141 土坑(図18・33 図版45)

調査地の中央やや東に位置する。水田段差のため、北東部分はさらに約0.2 mの削平を受ける。直径1.7 mで、埋土は黄橙色シルトからなり基盤層と区別が付きにくい。そのため、一部を深く掘ることにより、底を確認した。深さは0.45 mである。

出土遺物は、蛸壺(71)、磨製石斧(1188)がある。細片のため図化していないものの中に廉状文を施す破片、生駒山西麓産胎土の土器片がある。弥生時代中期後葉頃と考えられる。

22 土坑(図18・34 図版43)

調査地の最も南西に位置する遺構で、東西幅は1.6 m、南北幅は現状で2.0 mを測る。南北に長い形状から、溝の可能性もあるが埋土には流水を示す様相はなく、北側に延びると想定される場所で溝を検出できなかったことから土坑と判断した。深さ0.2 mで、埋土は3層に分かれる。

出土遺物は、甕(84)、高坏(85)、石鏃(1167)がある。弥生時代中～後期であろう。

134 土坑(図7)

128流路南東部の28層を掘削した後に検出した。直径1.9 m、深さ0.42 mを測る。埋土は、下層・褐色灰色(10 Y R 6/1)粘土、中層・灰白色(10 Y R 8/2)中砂、上層・黒褐色(10 Y R 3/1)粘質シルトの大きく3層からなる。平面は円形を呈し、断面は緩やかな円弧を描く形状である。

出土遺物には図化していないが、付加状の口縁をもつ広口壺や弥生時代後期のタタキ甕などが見られた。

遺構の切り合い関係と堆積層の観察から128流路と並行または先行すると考えられる。

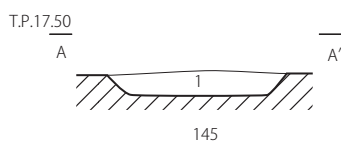
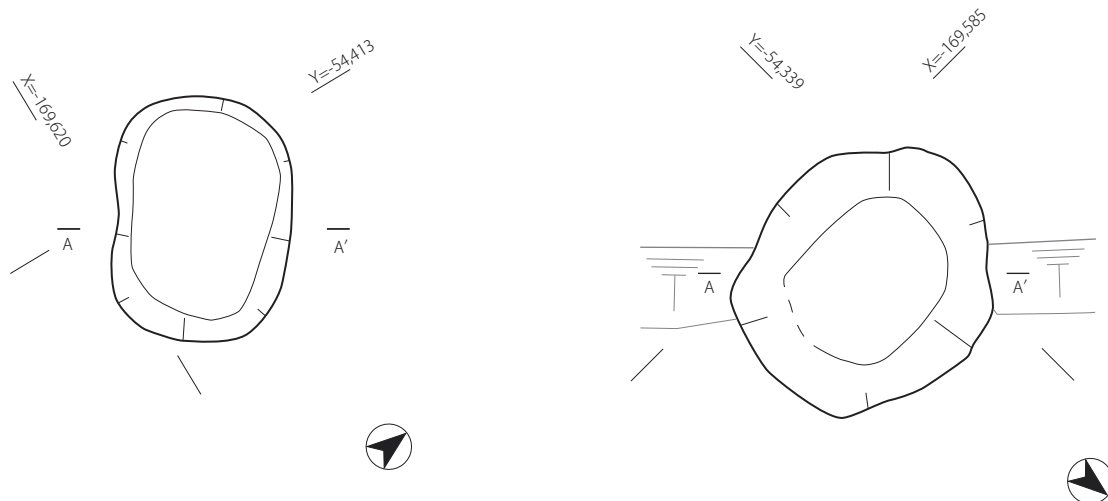
137 土坑(図7)

調査地の東側に位置する土坑で、直径1.1 m、深さ0.44 mを測る。断面はすり鉢形を呈し、埋土は褐色(7.5 Y R 4/3)粗～中砂混砂質シルトが堆積していた。ブロック土を含むことから最終的に埋め戻されたものと考えられる。

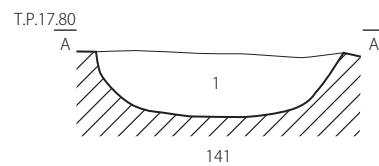
出土遺物には図化していないが布留形甕の破片が含まれており、古墳時代前期と推定される。

18 井戸(図18・35 図版15)

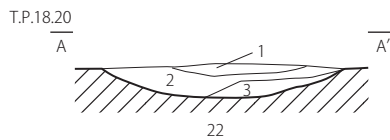
調査地北側、17土坑の北に位置し、104溝の一部を掘削して形成している。直径2.3 m、深さ0.7 mを測る。埋土は、下層から粘土、粘質シルト、砂質シルトの順で水平に堆積していた。常に湧水していることから、素掘りの井戸であったと考えられる。また、断面観察の結果ある程度堆積した後、新たに掘削されていることが確認できた。



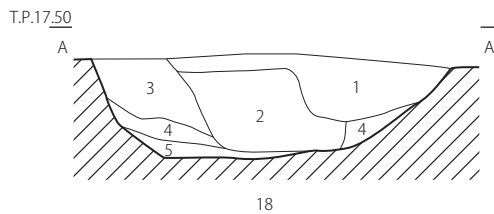
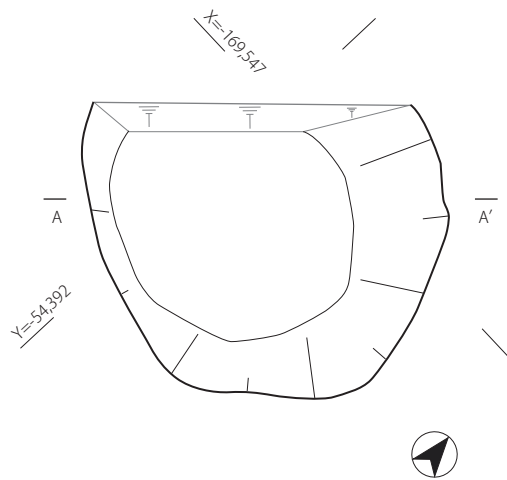
1. 灰黄褐 10YR4/2 粗砂混砂質シルト



1. 黄橙 10YR8/6 シルト



1. 黒褐 10YR3/2 砂質シルト
2. 灰白 2.5Y8/2 砂質シルト
3. にぶい褐 7.5YR5/3 小礫混砂質シルト



1. 褐灰 10YR4/1 大礫混砂質シルト
2. 黒褐 10YR3/1 大~小礫多混粘質シルト
3. 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト
4. 黒褐 7.5YR3/1 中~細砂混粘質シルト
5. 灰 N4/ 粘土



図 18 22・141・145 土坑・18 井戸平面・断面

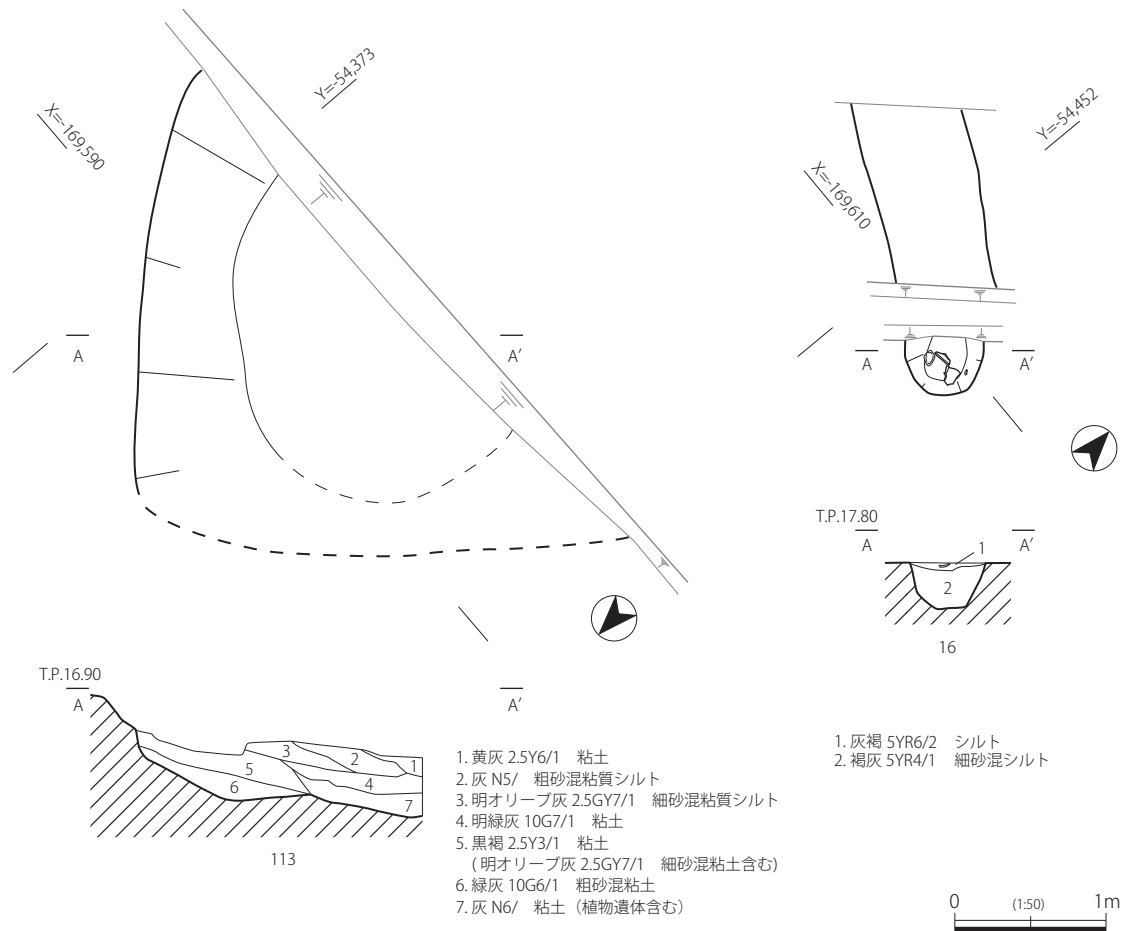


図19 113井戸・16溝平面・断面

再掘削後の埋土（2層）には多量の土器が含まれており、接合作業から甕（89・92）といった完形になるものが破棄されていたことが判明した。井戸廃棄時における祭祀行為と関係して廃棄された可能性がある。3～5層からは、弥生時代中期の壺（98）・高坏（97）が出土した。また、図化していないが中期前葉と思われる甕の口縁部が1点出土している。

遺物の時期幅が長いため、遺物の時期をそのまま遺構の機能期間とは考えにくい。弥生土器が細片であることから混入と考え、機能時期は古墳時代前期前半と推測される。

113井戸（図19・33）

調査地の中央やや西に位置し、近代の粘土採掘により上部と西側部分は大きく削平を受けている。そのため、全体の平面形を捉えることができなかったが、東側に直線的な辺を持つことから、一辺約3.5mの矩形を呈していたと推測される。現状で深さ0.4m、埋土は7層に分かれる。

遺物は主に下層の6～7層からで、須恵器無蓋高坏（72）が出土した。他にも、弥生時代後期の甕や植物遺体出土している。湧水が常に見られることから、素掘り井戸の可能性を指摘しておきたい。古墳時代後期である。

23落ち込み（図7・34）

調査地の西側に位置し、14土器棺墓に切られる。北西から南東にかけて長い平面形を有し、長軸は約5m、短軸は2.5m、深さ0.3mを測る。埋土はオリーブ褐色（2.5 Y 5 / 6）小礫混砂質シルトで、遺構の肩部から底にかけてなだらかに傾斜しており、人為痕跡ではなく自然地形の可能性が高い。

この落ち込みからは、壺（86～88）が出土した。弥生時代中期中葉頃に埋没したと考えられる。

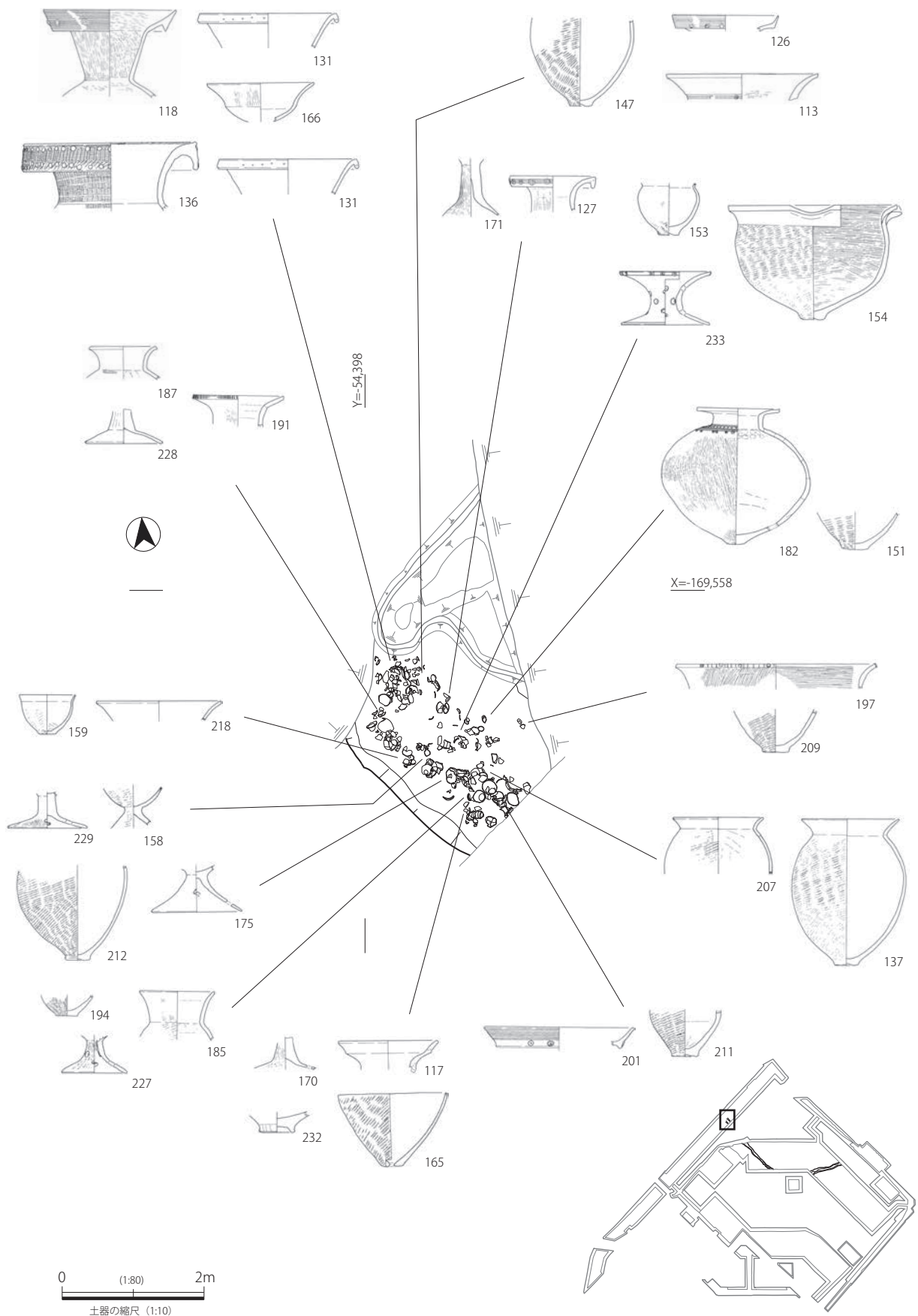


図20 64溝西部土器出土状況

45 落ち込み (図7・33)

調査地の西側に位置し、39 土器棺墓・38 溝に切られる。調査区の端に位置するため全形については不明である。深さは0.1～0.12 mを測り、非常に浅いことから自然地形と考えられる。

ここからは台付鉢(64)ミニチュア土器(65)が出土した。なお、図化していない中に、結晶片岩を多量に含む土器が1片存在する。激しい磨滅のため調整などは全く確認できず、大きさも5 cm程度、厚さ1 cm程度で器形を類推することも不可能である。しかし、胎土に含まれる結晶片岩からは明らかに他地域からの搬入品であることを示しており、その重要性からここに記しておく。

224 落ち込み (図7・91)

調査地の最も南側に位置する。調査範囲の関係から全形を明らかにできないが、平面形は北東から南西にかけて広がると想定される。流路の可能性も十分に考えられるが、付近でこれに対応するような流路が検出できていない。埋土の状況から人為的な遺構とは考えられず、ここでは自然地形の落ち込みとして捉えておく。

埋土は大きく直上包含層、上層、下層の3層に区分でき、直上包含層からは須恵器(1138)の他、瓦器椀が出土し、下層からは弥生土器が出土した。形成時期は不明である。

36 落ち込み (図7)

調査地の西側に位置する。上部は粘土採掘による削平が著しく、平面形は南北に長い形状を有する。検出幅は長軸で約10 m、短軸で約7 mに及ぶ。深さは平均して0.8 mを測り、断面形状は肩部から底にかけてなだらかに傾斜する。後述する南から北へと走行する210 流路の攻撃面にあたることから、210 流路のオーバーフローによって形成された落ち込みと考えられる。出土遺物はなく、遺構の前後関係についても後世の削平によって明らかにすることができなかった。

ここで記した遺構以外にも調査時において検出した土坑、小穴が多数存在する(図7)。いずれの遺構も、深度が浅かったり出土遺物がなかったりしたため、機能時期や性質については明確にすることができなかった。

(4) 溝・流路

調査区を細分して調査を行ったため、遺構番号は各調査区において検出した遺構の順序で付した。これによって、隣接した調査区で同一と考えられる遺構に関しても、調査時点で別の番号を付す結果となった。以下では、整理作業における検討の結果、同一であると判断した遺構に関しては調査時における個別番号の表記を避け、統一した番号で記述を行い細別した遺構はそれぞれの方位を記すこととする。例えば、調査時において、9区128 流路と14区212 流路は別の番号を付したが、検討の結果、一連の流路であると判断した。そこで、全ての遺構を128 流路と呼称し、9区128 流路を128 流路南東部、14区212 流路を128 流路西部として名称を変更し、記載した。調査時における旧番号は、表2のとおりである。

104 溝 (図7・25・36 図版45)

調査地の北側に位置し、南東から北へと走行し18 井戸・65 溝に切られる溝である。現状で幅2.6 m、深さは0.4 mを測る。南側の延伸部分は64 溝・65 溝によって削平されていると考えられる。

出土遺物には、壺(99・101)、高坏(100・102・103)がある。103は庄内式の高坏であるが、庄内式期の遺物を多数含む65 溝からの混入と考えられる。遺構に伴う遺物は高坏(102)の可能性が高く、機能時期は、弥生時代後期中～後葉と推測される。

216 溝 (図7・36 図版45)

調査地中央やや西側で検出した南から北へと走行する溝である。120 溝によって切られており、北側は調査区内で検出することができないことから 128 流路によって削平されたと考えられる。幅は 0.7 m で、深さは 0.1 m と浅い。そのため、120 溝より南東部分においては溝の延長部分を明確に検出することができなかった。しかし、当該調査区の南東壁において溝の断面を確認しており図7の点線で記したような走行を呈していたと想定している。深度は浅かったが比較的多くの遺物が出土した。

出土遺物は、生駒山西麓産胎土の壺 (105)、壺 (106・107)、甕 (104・108) がある。弥生時代中期後葉～後期中葉頃と考えられる。

16 溝 (図19・36)

調査地の西側に位置する。幅 0.5 m、深さ 0.3 m を測り、北西へと伸びる溝である。埋土は 2 層にわかれ、上層部分において土器が出土した。

出土した土器は、甕 (109)、壺 (110) で、弥生時代中期後葉～末である。

56 溝 (図7・36 図版36)

調査地の東側に位置し、南東から北西へと走行する溝である。埋土は 3 層からなり、上層・にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂質シルトに 0.1 m 大の黄灰色 (2.5 Y 5 / 1) 粘質シルトブロック (地山) が混じる、中層・黒褐色 (10 Y R 3 / 1) 粘質シルト、下層・灰色 (5 Y 5 / 1) 中礫～細砂に黄灰色 (2.5 Y 5 / 1) 粘質シルトブロック (地山) が少量混じる、である。下層から中層にかけては機能時における堆積で、上層は埋め戻し土と考えられる。

出土遺物は、図化していないが弥生時代中～後期の土器が多いものの、布留式と思われる高坏 (111) が出土している。128 流路の第 28 層を切って掘削されており、128 流路より新しくなる可能性があるが、遺物の年代観から 128 流路と併存していた可能性を想定しておきたい。延伸部分に関しては調査対象外であるため不明である。

64 溝 (図20～23・25・37～77・93・94 巻頭図版1・2 図版6・7・15～35・43～46)

調査地のほぼ中央に位置し、東から西へと走行する溝である。調査区の関係で分断されてはいるがいずれも土器 (112～820) が大量に入る一連の溝であり、西部では 3.2 m、中央部では 26.8 m、東部では 14.8 m を検出して総延長は 44.8 m になる。

64 溝は、粘土採掘や水田耕作による削平、後述する 65 溝や 128 流路による削平のため、本来の規模については不明である。最も残りの良好な 64 溝東部では、二段になるように掘削されており上段幅 4.8 m、下段幅 2.9 m になる。溝の深度については、同じく 64 溝東部が 1.0 m と最も深く、その他の部分においては平均 0.25 m 前後である。断面観察から、溝には大きく 2 時期あることが判明した。最初の時期は、最大幅を形成する掘削である。そして、ある程度堆積が進んだ後に内側の部分を再掘削している。再掘削は、検出した部分のほぼ全域で認めることができた。土器の多くは、この再掘削後の層からの出土である (2 層)。土器は、溝を 1 m 単位で任意に区切り、出土レベルから大きく上層上部、上層下部、下層という単位で取り上げを行った。そのため、比較的大きな破片に関しては出土位置を押さえているが、すべての遺物に関して出土位置を捉えられていない。

出土した土器の総破片数は 54,547 点で総重量は 938.251 kg にのぼる。完形品や完形にまで復元できるものは深く掘削されていた東部に比較的多くあったが、接合しない破片の数が圧倒的に多い。出土した土器については第 3 章第 4 節と第 4 章第 2 節で詳述するが、多くは弥生時代後期後葉～庄内式期前

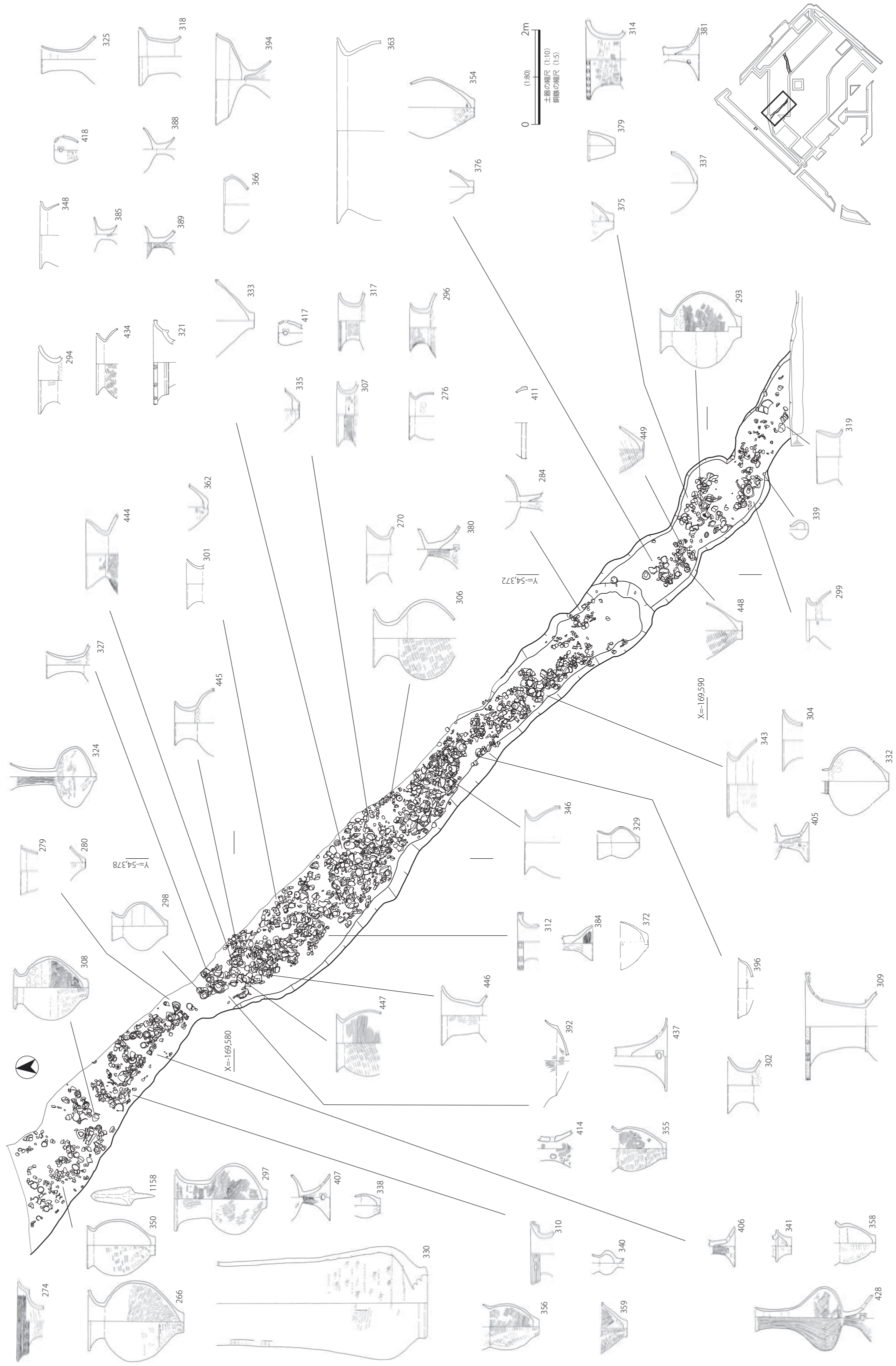


图21 64号清中央部土器出土状況

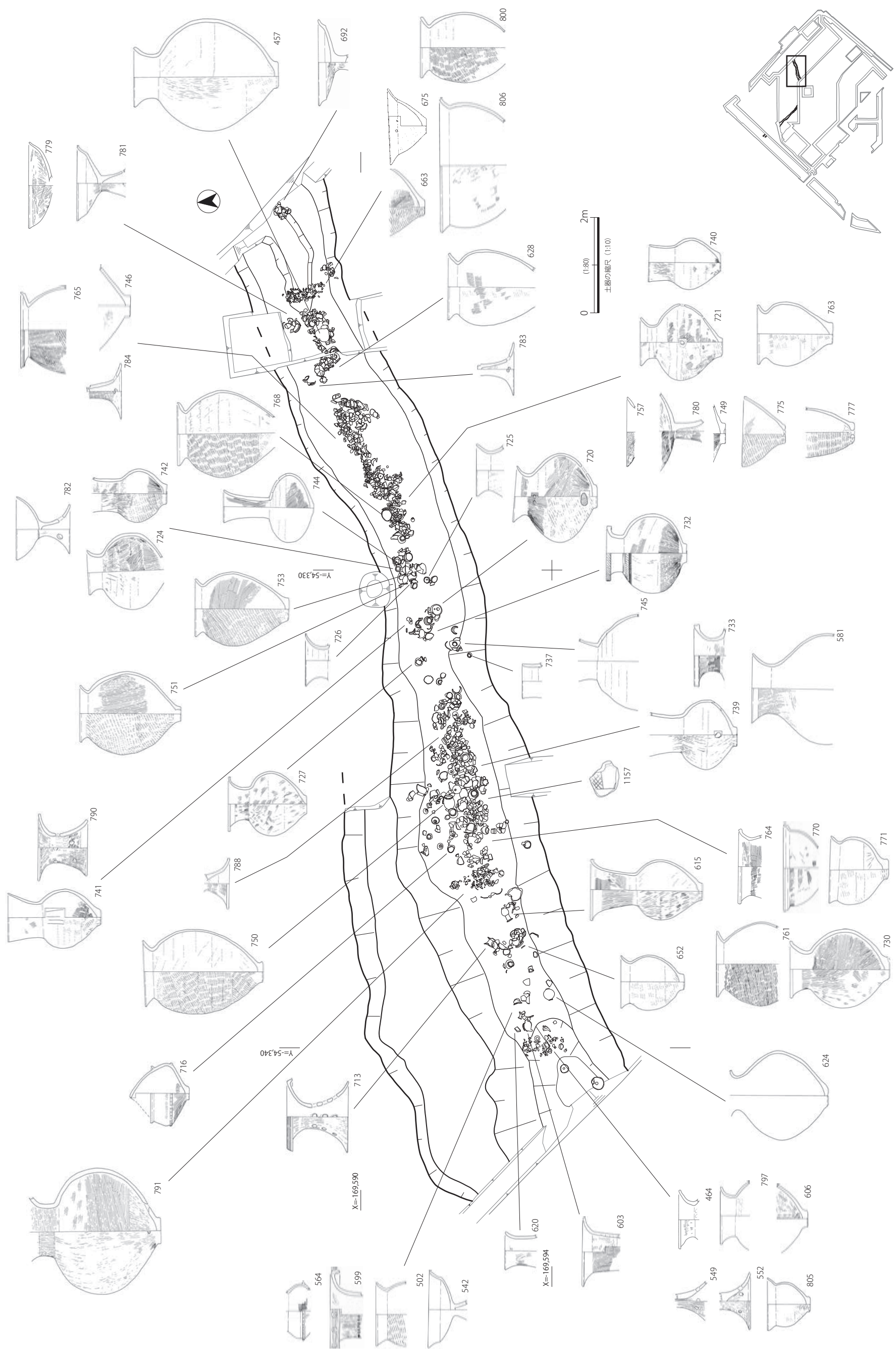


図22 64溝東部土器出土状況

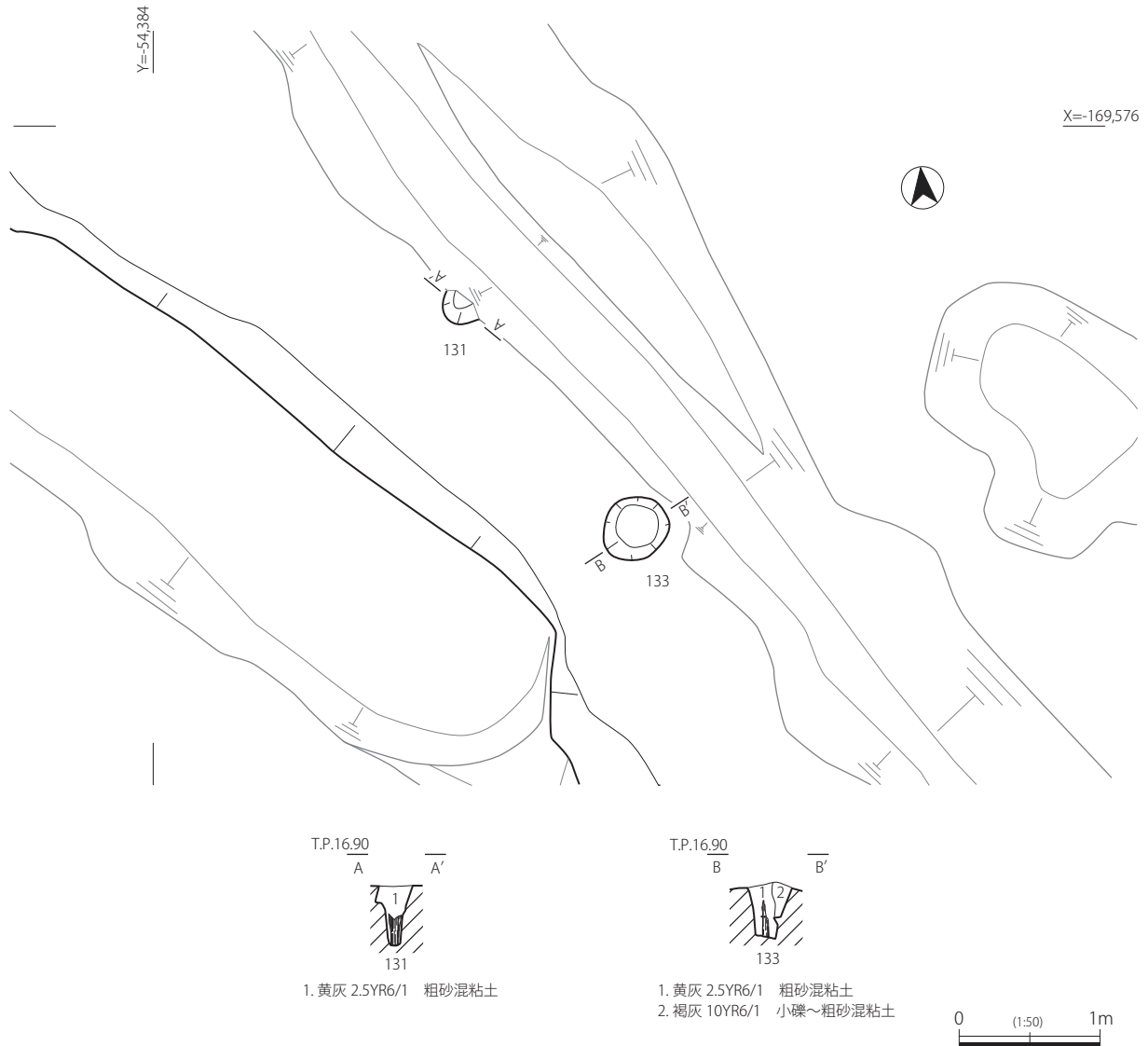


図 23 131・133 柱穴平面・断面

半に属する土器である。また、特筆すべき遺物として、銅鏃 1 点 (1158) と、この遺構に伴う可能性が高い絵画土器 1 点 (1157) がある。いずれも遺物洗浄時における発見であったため、正確な出土位置や層位について知ることはできないが、銅鏃は 64 溝中央部でも最も北西側に位置する場所からの取り上げであり、絵画土器は 64 溝東部でも中央から出土している。図 20・21・22 は上層下部の出土状況を図示しており、掲載した遺物は層位に関係なく出土位置を示している。

64 溝の東側延伸部分に関しては、東側に位置する調査区内において検出することができなかった。溝の走行が想定される延長上に 65 溝があることから、この溝によって完全に削平を受けていると推測される。また、64 溝の西側延伸部分は 128 流路によって切られているが、過去に調査が行われた第 1 次調査において同様の溝が検出されておりさらに西側へと続く。

中央部の北東端の部分において土器を取り上げた後に、2 つの柱穴を検出した。いずれも埋土は粘土で、柱根が部分的に遺存していた。131 柱穴では比較的良好な状態で残存しており一辺が 0.9 m を測る。

樹種鑑定の結果、同木材はマツ科と判明した。133 柱穴の残存状況は悪く直径約 0.4 m である。樹種鑑定の結果、131 柱穴と同様のマツ科であった。この柱穴からは、他に弥生土器と思われる破片が出土した。

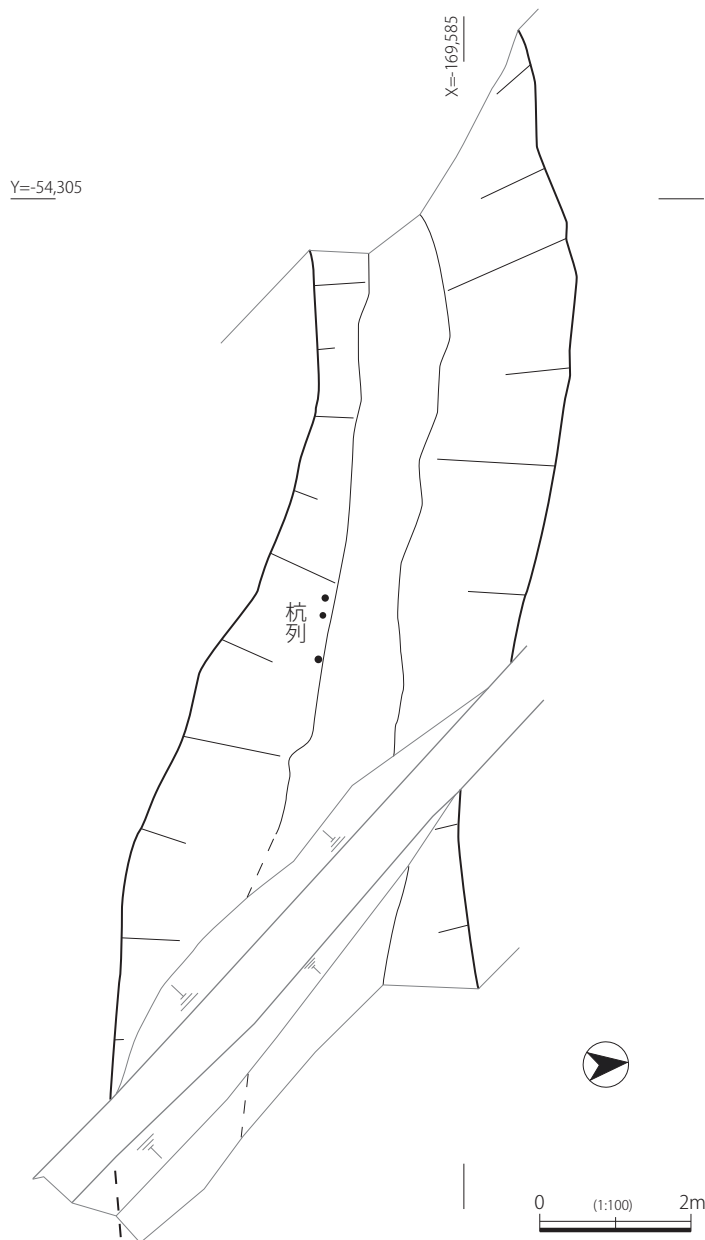


図 24 65 溝東部平面

明確に捉えることはできなかったが、庄内式期後半～古墳時代前期前半と推測され、210 流路に先行するものである。

65 溝 (図 7・24・25・81～83・103 図版 8・37・38・43・45・46)

上述した 64 溝に並行、または一部重なりを持ちながら走行する溝である。調査で検出した総延長は 72 m、深度は平均して 1.4 m を有する。断面形状は V 字を呈しており上端幅 3.3 m、下端幅 0.4 m である。埋土は場所によって細部は異なるが、概ね下層に小礫～粗砂 (12・13・17 層)、上層にシルト～粘土 (4～8 層) が堆積している。東部では、木杭 (1202～1204) が溝と並行するように 3 本打設されていた。

64 溝を削平しているため弥生時代後期後葉～庄内式期の土器が一定量出土しているが、下層 (12 層) からは T K 208～M T 15 型式の須恵器・鞆羽口 (931)・砥石 (1199) が出土した。下層 (12 層) の上部において建築部材と考えられる木製品 (1210・1211)、曲げ物の底板 (1205～1207)、粘土層 (8 層) からは TK217 型式の須恵器坏蓋 (924) が出土した。以上のことから古墳時代後期前半ま

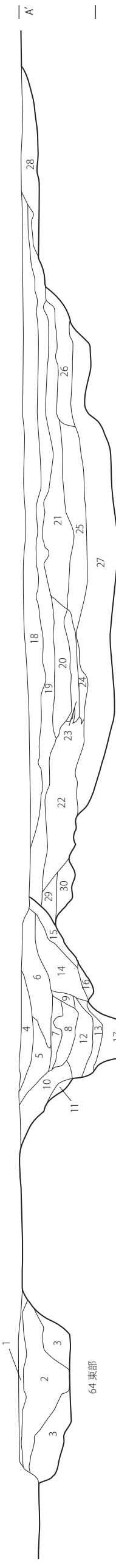
2つの柱穴の周辺にはこれと対応するような遺構はなくこの部分に建物が建っていたとは考えにくい。64 溝を渡るための橋が架かっていたものと推定される。

120 溝 (図 7・78～80 図版 8・36)

調査地の南側に位置し、南東から北西へと直線的に走行する溝である。調査地の東側において、南から北へと走行する 210 流路と一部重なりを持っていた。検出した総延長は 70 m で、最も残りの良かった北西部の上端幅で 3.3 m を有する。東から西に行くに従って漸次深くなっており、東端から西端の底でおおよそ 0.9 m の比高差がある。埋土は、下層・暗灰黄色小礫～粗砂とシルト (120 溝北西部 5～7 層・120 溝南東部 5・6 層) 中層・灰黄色粘質シルト (120 溝北西部 4 層・120 溝南東部 4 層)、上層・黒褐色粘質シルト (120 溝北西部 1～3 層・120 溝南東部 2・3 層) からなる。土器の多くは下層からの出土である。

出土した遺物は、弥生時代中期後葉～庄内式を中心として、庄内形甕とも考えられる甕 (867)、布留形甕 (834)、布留式高坏 (841)、棒状木製品 (1209) がある。210 流路との切り合い関係

T.P.18.00



64 東部

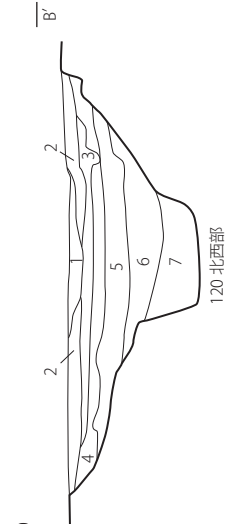
1. 明褐 10YR3/1 大礫混砂質シルト
2. 浅黄褐 10YR8/4 大礫混砂質シルト
3. にぶい黄褐 10YR7/3 大礫混砂質シルト
4. にぶい黄褐 10YR7/2 中礫混砂質シルト
5. にぶい黄褐 10YR4/3 大礫混砂質シルト
6. 灰黄褐 10YR6/2 大礫混砂質シルト
7. 黒褐 10YR3/1 大礫混砂質シルト
8. 褐灰 10YR4/1 粘土
9. 明褐 10YR7/1 砂質シルト
10. 褐灰 10YR4/1 大礫混砂質シルト

11. 黄褐 10YR8/6 中礫混シルト
12. 灰白 5Y7/1 細砂(黄灰 2.5Y4/1 小礫混砂質シルト含む)
13. 灰黄褐 10YR5/2 大礫混砂質シルト
14. 灰黄褐 10YR5/2 中礫混砂質シルト
15. 灰褐 7.5YR4/2 中礫混砂質シルト
16. 黒褐 7.5YR3/1 大礫混砂質シルト
17. 灰オリーブ 5Y6/2 細砂(黄灰 2.5Y4/1 粗砂混砂質シルト含む)
18. 明黄褐 10YR7/6 粗砂混砂質シルト
19. 褐 7.5YR4/3 中礫混砂質シルト
20. 褐灰 10YR6/1 中礫混砂質シルト

21. にぶい黄褐 10YR6/4 中砂多混砂質シルト
22. 褐灰 10YR6/1 粘質シルト
23. 灰白 10YR7/1 中礫混
24. 黒 10YR2/1 粘土
25. 明黄褐 10YR6/6 粗砂(褐灰 10YR6/1 粘土・灰化物含む)
26. 灰黄褐 10YR5/2 中砂混砂質シルト
27. 灰白 10YR7/1 大礫混砂(褐灰 10YR6/1 粘土含む)
28. にぶい黄褐 10YR7/4 大礫混砂多混砂質シルト(風化礫含む)
29. 灰黄 2.5Y6/2 粗砂混砂質シルト
30. 褐 7.5YR6/6 粗砂混砂質シルト(にぶい黄褐 10YR5/3 砂質シルト含む)

65 南東部

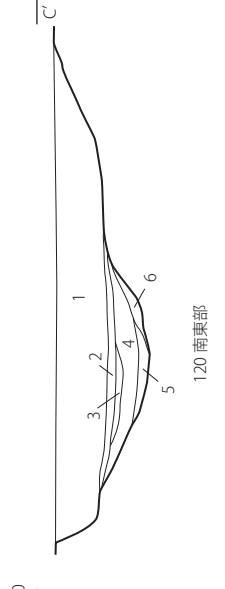
T.P.17.00



120 北西部

1. 黒 10YR2/1 粗砂混粘質シルト
2. 褐灰~黒褐 10YR4/1 ~ 3/1 粗砂多混粘質シルト
3. 褐灰 10YR4/1 ~ 5/1 小礫混砂質シルト
4. 灰黄~暗灰黄 2.5Y6/2 ~ 5/2 小礫混砂質シルト
5. 灰 5Y5/1 小礫混砂
6. 灰白 N7/1 小礫混砂
7. 灰 5Y5/1 小礫混砂

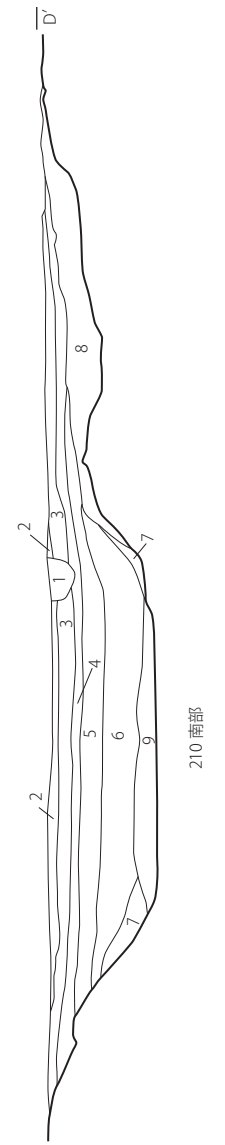
T.P.18.50



120 南東部

1. 撈乱
2. 黒褐~黒 10YR3/1 ~ 2/1 粘質シルト
3. 褐~にぶい赤褐 10YR4/4 ~ 5/3 小礫混砂
4. 黒褐 10YR3/1 粘質シルト
5. 暗灰黄 2.5Y5/2 小礫混シルト
6. 黄灰 2.5Y3/1 粘質シルト

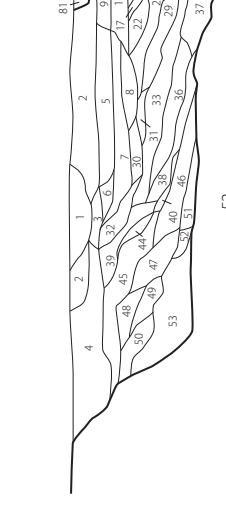
T.P.17.30



210 南部

1. 撈乱
2. にぶい黄褐 10YR5/4 細砂混シルト
3. 褐灰 10YR5/1 細砂混シルト
4. 褐灰 10YR4/1 粗砂多混シルト
5. 黒褐 10YR3/1 中礫混砂質シルト
6. 暗灰 N3/1 細砂混粘土
7. 褐灰 10YR6/1 粘土
8. 褐灰 10YR5/1 中礫混砂質シルト
9. 暗灰黄 2.5Y5/2 大礫混砂質シルト

T.P.17.70



52 東部

1. にぶい黄褐 10YR4/3 シルト
2. にぶい黄褐 10YR5/4 粘質シルト
3. 灰褐 7.5YR5/2 粘質シルト
4. にぶい黄褐 10YR4/3 粘質シルト
5. にぶい黄褐 10YR4/3 粘質シルト
6. 褐灰 7.5YR4/1 粘土
7. 褐灰 10YR4/1 粘土
8. 黄灰 2.5Y4/1 粘土
9. 灰褐 7.5YR4/2 粘質シルト
10. 褐灰 10YR4/1 小礫混粘質シルト
11. 褐灰 10YR4/1 シルト
12. 灰黄褐 10YR4/2 中砂
13. 黄灰 2.5Y4/1 粘土
14. 灰黄褐 10YR5/2 中砂
15. 褐灰 10YR4/1 粘土
16. 黄灰 2.5Y4/1 粘質シルト
17. 黄褐 2.5Y5/3 シルト
18. 黄褐 2.5Y5/3 細砂
19. 灰 5Y4/1 粘土
20. 灰オリーブ 5Y4/2 細砂

T.P.18.00



104 東部

61. にぶい黄 2.5Y6/3 粗~中砂
62. 黄褐 10YR5/6 粘質シルト
63. 黄灰 2.5Y5/1 シルト
64. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂
65. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト
66. 暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト
67. にぶい黄褐 10YR5/4 中砂
68. 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト
69. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂
70. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂
71. にぶい黄褐 10YR5/4 砂質シルト
72. 黄褐 2.5Y5/3 極細砂
73. 暗灰黄 2.5Y5/2 粗砂
74. 灰オリーブ 5Y5/2 中砂
75. にぶい黄褐 10YR6/4 大礫混極細砂
76. にぶい黄 2.5Y6/3 小礫混粗砂
77. にぶい黄 2.5Y6/3 シルト
78. オリーブ灰 2.5Y5/1 中礫混
79. にぶい黄褐 10YR5/4 シルト
80. 灰黄褐 10YR6/2 細砂

81. にぶい黄褐 10YR5/3 シルト
82. にぶい黄褐 10YR5/4 粘質シルト
83. 黒褐 7.5YR3/1 粘質シルト
84. 黄灰 2.5Y4/1 中砂

1. 灰オリーブ 5Y6/2 小礫混砂質シルト
2. 灰黄褐 10YR4/2 シルト
3. 黄褐 10YR5/6 シルト
4. 黄褐 5YR4/1 シルト
5. 青黒 5PB2/1 粗~細砂

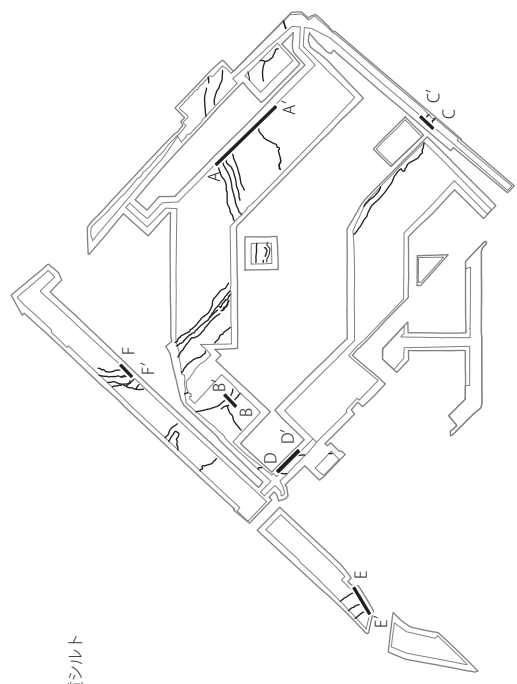


図 25 64 溝・65 溝・128 流路・104 溝・24 流路・52 流路断面

ではある程度埋没しており、古墳時代終末期になって機能を停止したと考えられる。

121 溝 (図7)

調査地の南側に位置し北東から南西に走行する溝である。長さ 13 m分を検出し、幅 0.7 m、深さ 0.4 mを測る。埋土は、緑灰色 (5 G 6 / 1) 砂質シルトが堆積していた。弥生土器と思われる小破片 3 点が出土したのみである。

13 溝 (図7)

調査地の北側に位置し東西方向に走行する溝である。幅 0.6 m、深さ 0.2 mを有し、埋土には暗灰黄色 (2.5 Y 4 / 2) 砂質シルトが堆積していた。出土遺物はなかったが遺構の切り合い関係から 104 溝よりも古くなり弥生時代後期に属すると考えられる。

38・63・121・223 溝 (図7)

これらの溝はいずれも浅く出土遺物がないため、機能時期や性質については明らかにできなかった。

128 流路 (図7・25・86～90 図版9・39～46)

64 溝・65 溝と並行または一部重なりをもつ流路で、東から西へと地形に沿って大きく蛇行しながら走行する。流路が完全に埋没した後は浅い窪地状の地形となったことを示す埋没後層〔黄色土層(18層)・黒色土層(19層)] が認められた。西部で幅約 7 m、深さは 1.2 mを有する。東部から南東部にかけての部分では南側へと広がっている。埋土は大きく上層と下層の 2 層に分かれ、下層はさらに上部〔最終堆積層(20・23・24層)・風化礫層(28層)・砂層(21・25・26層)・褐色土層(図25にはないが22～26層と27層の間に見られる層)] と、下部〔最下層(27層)・黒色礫層(図25にはないが27層より下に部分的に見られる層)] に細分できる。流路堆積が進んだ後も幅 2.3 m、深さ 0.4 mで、最終堆積層で埋没する小規模な流路として機能していたと考えられる。東部から南東部にかけて浅く広がりを見せる場所では、基盤層の風化礫を多量に含む砂質シルト(28層)の堆積が認められ、層内には弥生時代の遺物が顕著に含まれていた。

出土遺物には弥生時代後期～庄内式期の土器が多いが、下層から布留形甕(1026～1028・1057～1060・1093・1100～1102・1106・1107・1110～1112・1121・1122)、高坏(1016・1031～1036・1062・1063・1065・1066)、小形丸底壺(1038～1040・1068)が出土している。また、下層からは植物遺体としてシャシャンボ(ツツジ科)やクリなどの自然木が出土している。流路の機能時期は、古墳時代前期前半と考えられる。

210 流路 (図7・25・84・85・90 図版9・39・42・43・45・46)

調査地の中央に位置し南西から北へと走行する流路である。第3章第2節でも記しているように流路による窪地のため上層部分には2層の堆積層があった。この堆積層を掘削した後に流路を検出した。北部から中央部にかけて120 溝と重なる部分があり、この箇所については検出段階において両者を明確に分けることができなかった。調査区の関係上、全形を把握できる箇所は少ないが南部で幅 8.1 m、深さ 0.84 mを測る。大きく、上層(2～5層)と下層(6～9層)に区分され、上層上部(2～4層)、上層下部(5層)、下層上部(6～8層)、下層下部(9層)に細分される。

下層からは、弥生時代中～後期の土器を一定量含むが(974・976・978～988・998・1001・1124・1130)、これに混じって小形丸底壺(1125)、直口壺(1127)、高坏(1128・1129)が出土している。古墳時代前期と考えられる。

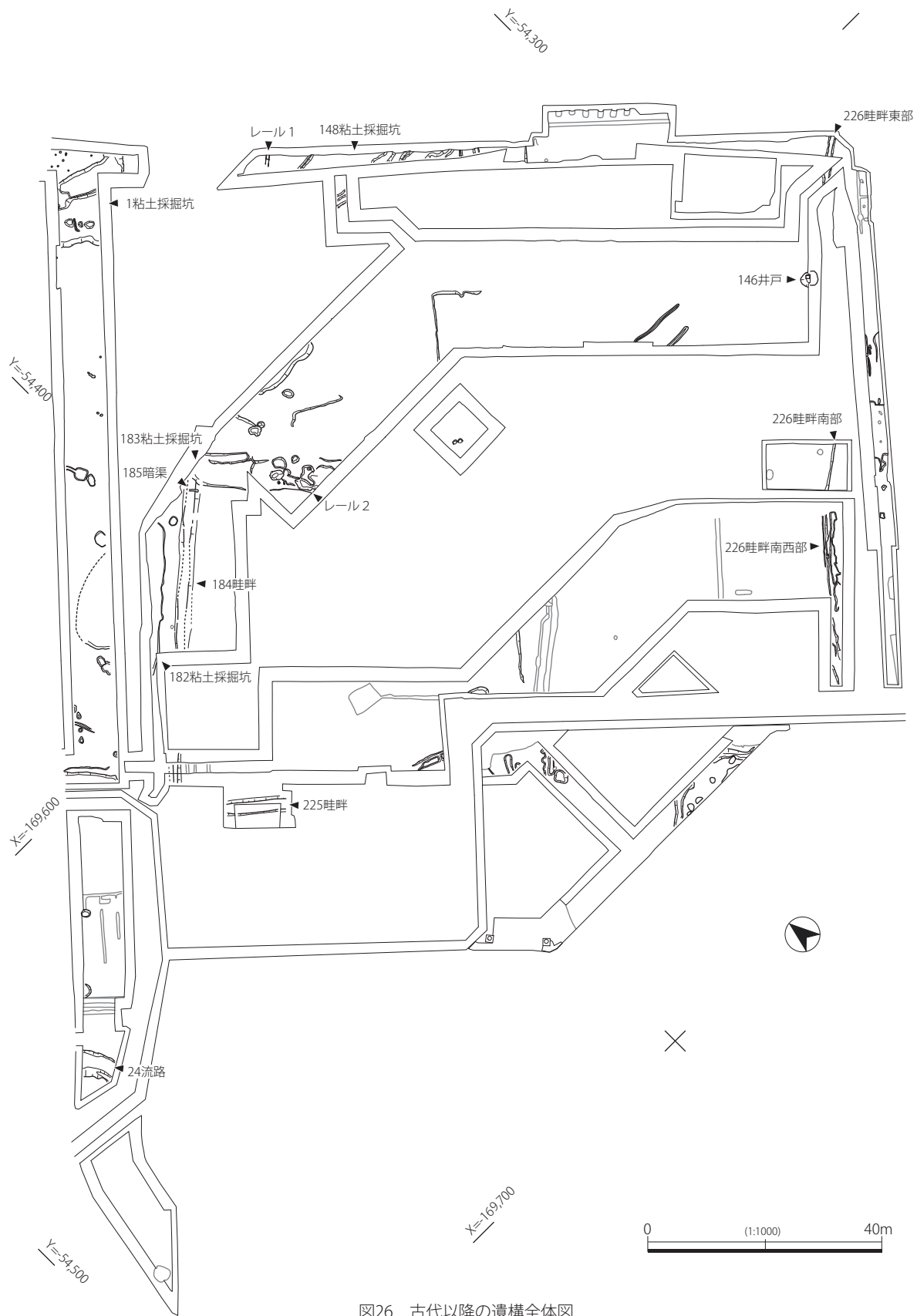


図26 古代以降の遺構全体図

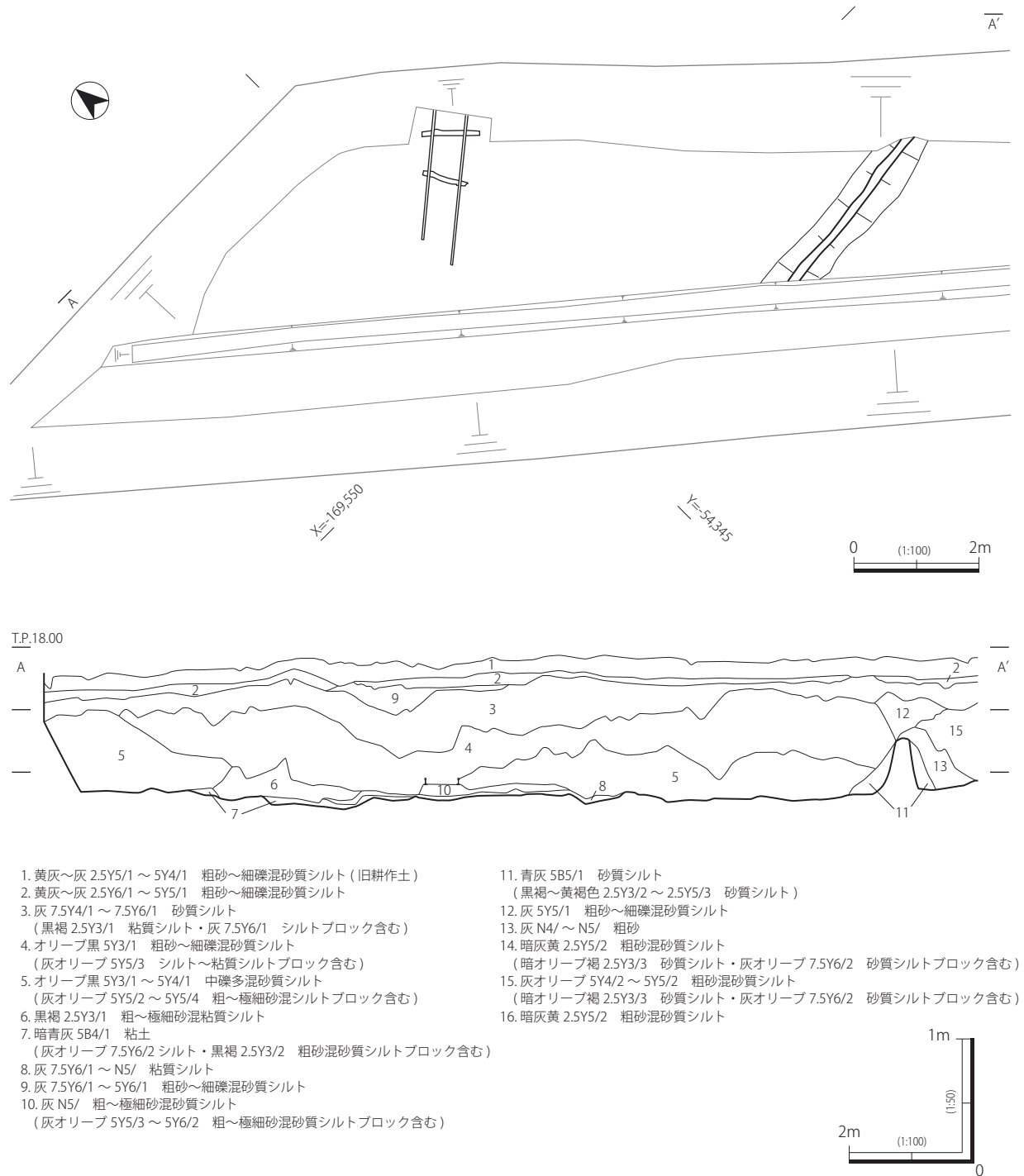


図27 レール1、148 粘土採掘坑平面・断面

52 流路 (図7・24・85 図版9)

調査地の南西端に位置し、南東から北西へと流れる流路である。24 流路によって切られているため全形については不明であるが、現状で幅 4.5 m、深さ 1.1 mを測る。

出土遺物は図化した壺 (1002・1003) 以外にも、少量の弥生土器と思われる破片が出土している。時期については第4章第1節で述べるように、2003～2005年にかけて行われた調査における流路の延伸部分と想定され、2003～2005年調査で出土した遺物より庄内式前半と捉えられる。

第2項 古代以降

184・225・226 畦畔 (図26・91 図版9)

調査地の西側部分において、磁北から約45度西に振る184畦畔とこれと直行する225畦畔を検出した。184畦畔は古代から中世の遺物(1132・1134～1136・1142・1147・1148・1154)を包含する層の上に形成されている。調査区の範囲は八木郷下池田里三十一ノ坪と三十二ノ坪に相当する箇所であり(玉谷1996)、184畦畔と226畦畔の距離は約109mを測ることから、184畦畔は坪境、226畦畔は南東に隣接する大町との里境にあたる畦畔となる。184畦畔を構成する層からは13世紀前半の瓦器碗(1149)が出土しており、これ以降に形成されたものと考えられる。下層では前身となるような畦畔を検出することはできなかった。184畦畔の直上に盛土が施されていることから、府営住宅建設の1966年まで畦畔として機能していたと考えられる。

185 暗渠 (図26・104)

184畦畔に埋設して185暗渠が構築されていた。暗渠は3基の土管(1212)によって構成され、ソケット部が北西になるよう埋設されていた。ソケット部の接合状況から、南東側の水田から北西側の水田に水を通すための近代における通水用暗渠と考えられる。

146 井戸 (図26・92)

2辺に板と角材による木枠を持つ井戸である。埋土からは土人形(1155)が出土している。掘削深度が深くなることが予想されたため安全上の理由から完掘せず、検出面から約1.2mの地点で調査を終了した。

24 流路 (図7・24・92)

盛土を除去した直下で、52流路と一部重なるように検出することができた南東から北へと走行する流路である。幅4.8m、深さ0.7mを測る。出土遺物には瓦(1152)の他に、図化していない肥前磁器染付碗、堺播鉢がある。現在のコンクリート製用水路がすぐ南を流れていることから、この前身となる流路と考えられる。機能時期は確定しがたいが近世から現代まで機能していたと推測される。

1・148・182・186 粘土採掘坑 (図26・27・105・106 図版10・45・47)

調査地内において4箇所の粘土採掘坑を検出した。大規模な採掘坑であるため調査区内において全形を捉えることはできなかったが、1粘土採掘坑では幅約11m、深さ0.9mに達する。埋土は基盤層である砂質シルトをベースに、黒褐色粘質シルト、灰色シルトといった0.2mを超えるブロック土が含まれていた。ブロック土の中には多量の弥生土器が含まれていることから、この時代の遺構または包含層に起源するものと推測される。183粘土採掘坑では、184畦畔の一部を壊し64溝中央部の間を掘削していた。また、基盤層の礫部分には粘土採掘坑が見られないことから、基盤層を構成するシルトを求めて採掘していた様子をうかがい知ることができる。184畦畔は、埋め戻しの際に修復されている。調査区北西に位置する148粘土採掘坑では、畦畔状の3つの高まりが残されておりこれらの区画は作業工程上の単位を示している可能性がある。いずれの採掘坑の底にも薄く灰色粘質シルトが堆積していることから、掘削後しばらくの間は開口していたと考えられる。断面の検討から、埋め戻しは数度に分けて採掘坑縁辺部から中心へと埋め戻しを行っている様子が復元できる。粘土採掘坑を埋め戻した上部には旧耕作土が堆積していることから、粘土採掘後も水田を営んでいたと推測される。この大規模土坑が、近代における粘土採掘坑であると判明したのは、粘土採掘坑の中から2点レールが出土したことにある。1つは、148粘土採掘坑の底から出土した枕木2本を伴うレール1で(1213)、もう1つは183粘土

採掘坑の壁際から出土した緩やかにカーブするレール2である(1214)。1214は1本しか出土しないことから別の場所で敷設されていたものが廃棄されたもの、1213は敷設後そのまま廃棄されたものと考えられる。他に、183粘土採掘坑からは枕木(1218・1219)や犬釘(1215・1216)が出土した。近代における粘土採掘の目的については第4章第3節で詳述する。

埋土を構成するシルトブロックからは、弥生時代を中心として平安時代までの遺物(1220～1243)が出土した。

ここで記した以外にも小穴や土坑を検出することができたが、いずれも埋土に旧耕作土が含まれており、近世以降の遺構であると推測される。しかし、その性質については明らかにすることができなかった。

第4節 遺物

第1項 土器・土製品・瓦

(1) 弥生時代～古墳時代

1. はじめに

今回の調査で出土した遺物のほとんどが弥生中期後葉～後期後葉の土器である。しかしながら、良好な一括遺物とは言いがたく、既存の編年を使用する。これに前後する時期についても同様である。以下で、遺物の記述を行う前に、時期判断等を行う際の参考文献を記しておく。

まず、弥生時代中期については、地村邦夫氏の「和泉地域第Ⅲ・Ⅳ様式の編年」(『池上曾根遺跡』、1999年、大阪府教育委員会)を使用する。なお、同編年は、水平口縁の高坏と段状口縁壺を基軸としているが、実際のところ、当遺跡での当該形式の出土量は少ない。遺物の時期記載においては、当該文献の第Ⅲ様式、第Ⅳ様式をそれぞれ中期中葉、中期後葉として用いるが、時期の判断が困難な場合はより大雑把に中期などとする。この場合の中期は、中葉～後葉のことを言うことがほとんどである。形式分類についても、当該文献の、広口長頸壺、広口短頸壺、段状口縁壺、細頸壺、甕、鉢、高坏などの呼称を用いるが、各種壺については単に壺と記す場合もある。なお、地村氏の編年で使用されない型式もあり、それらについては、樋口吉文氏の「和泉地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ、1990年、木耳社)も使用している。ただし、時期呼称については、地村氏の編年対応に従って、地村氏の呼称を用いている。また、生駒山西麓産の胎土を有する中河内地域からの搬入資料については、寺沢 薫氏・森井貞雄氏の「河内地域」(『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ、1989年、木耳社)の呼称、編年を使用している。また、これ以外の近畿諸地域についても『弥生土器の様式と編年』の各地域を参考とした。

次に、弥生時代後期については、若林邦彦氏の観音寺山遺跡における分類(「土器」『大阪府和泉市観音寺山遺跡発掘調査報告書』、1999年、同志社大学歴史資料館)を使用する。遺物の時期記載においては、当該文献の弥生後期前葉・中葉・後葉の呼称を用いるが、時期の判断が困難な場合はより大雑把に後期などとすることもあるし、逆に初頭と限定する場合もある。形式分類についても、当該文献の、広口壺、広口長頸壺、長頸壺を用いるが、高坏については一部有稜高坏ともする。また、大形鉢については中形鉢とする。

この弥生時代後期に一部重複するが、以降の時期については、西村 歩氏の「和泉北部の古式土師器と地域社会」(『下田遺跡』、1996年、(財)大阪府文化財調査研究センター)を使用する。ただし、細分型式までは言及できていない部分も多く、下田編年呼称をそのまま用いてはいない。時期呼称は、上

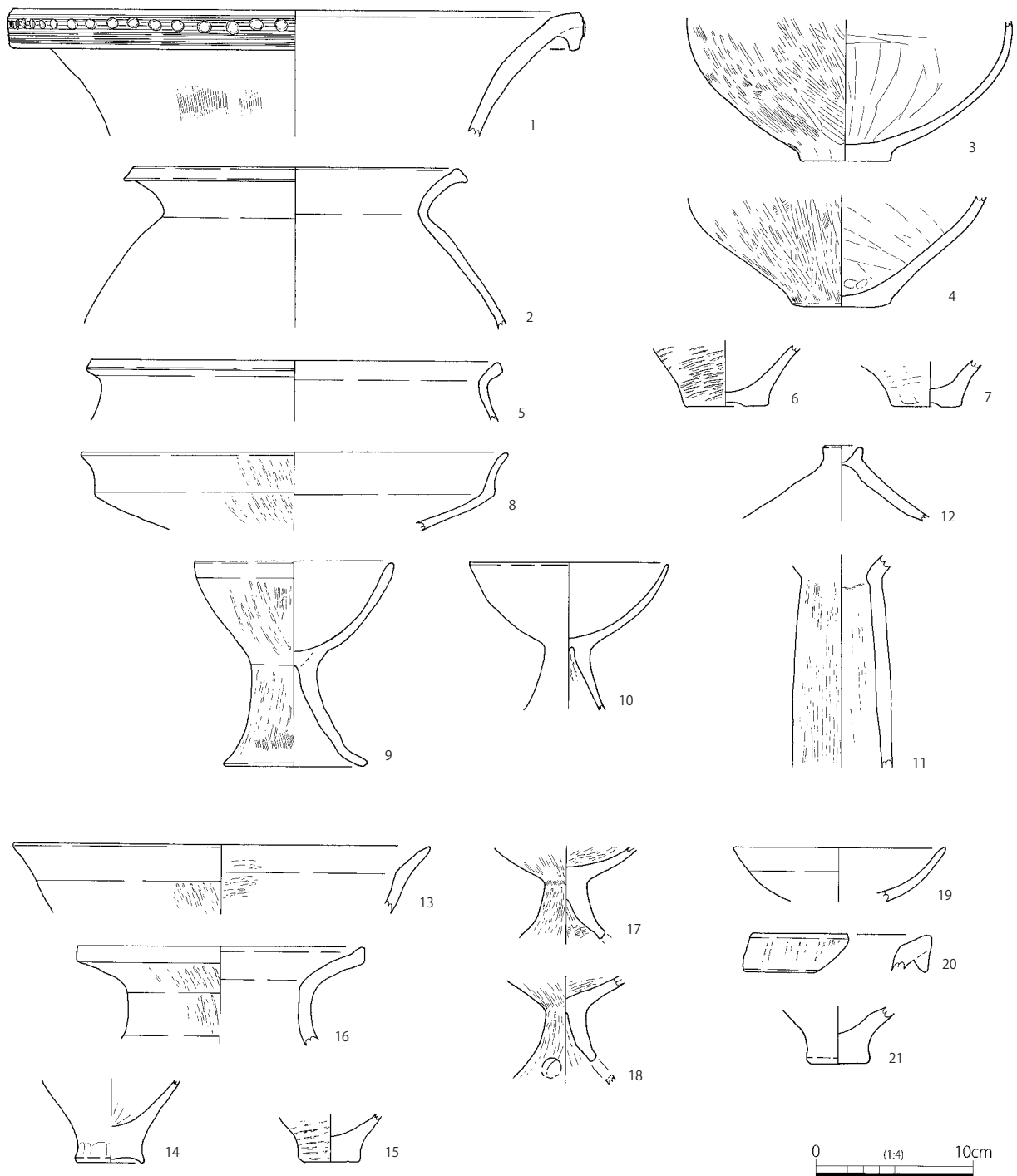


図28 竪穴住居出土遺物(1)(12・115 竪穴住居、127 竪穴状遺構)

記の若林氏による後期後葉が主に重複すると思われる。しかし、下田編年で使用される後期後半古段階などの呼称は、今回の資料の多くが溝資料で、そこまで時期を限定できるものではないため、より大雑把なものとなっている。このため、後期については基本的に若林氏の前葉・中葉・後葉呼称を使用する。なお、下田Ⅰ-1式を中葉、Ⅰ-2・3式を後葉とし、Ⅰ-4式と判断できたものは後期末とする。庄内式併行期についても庄内式、もしくは庄内式併行期とする程度で、可能であれば前半、後半などの区分をする程度である。なお、下田Ⅱ-1～Ⅱ-2古を庄内式前半、下田Ⅱ-2新～Ⅲを庄内式後半とする。ただし、下田Ⅱ-1式と判断できるものは庄内式初頭、同Ⅱ-2式と判断できるものは庄内式中頃とする。なお、下田遺跡における土器分類図にはない、細頸壺の呼称も用いている。このほかに、下田

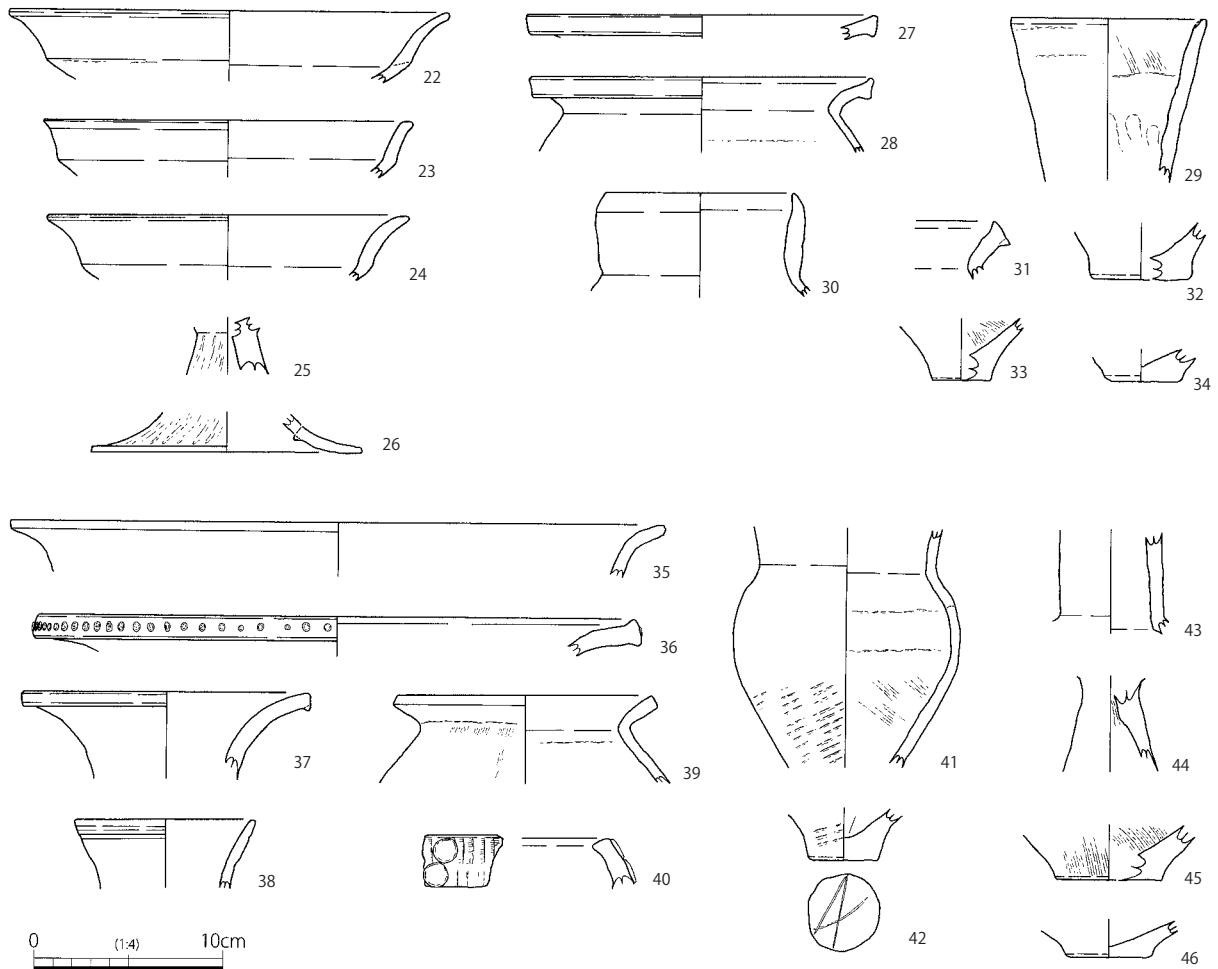


図 29 竪穴住居出土遺物（2）（170 竪穴住居）

遺跡分類における蛸壺は、いわゆる飯蛸壺であるが、今回の調査ではいわゆる真蛸壺も見られる。また、製塩土器については、小島北磯遺跡成果による宮地聡一郎氏の分類（「脚台式製塩土器について」『小島北磯遺跡』、2000年、（財）大阪府文化財調査研究センター）を使用する。時期判断については、宮地氏の見解に加え、積山 洋氏の「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」（『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学別冊14、2004年、雄山閣）も使用する。なお、複合口縁壺については、山陰地域における同呼称の壺との混同を避けるため、二重口縁壺と呼称する。

布留式については、西村 歩氏・池峯龍彦氏の「和泉地域」（『古式土師器の年代学』、2006年、（財）大阪府文化財センター）を使用し、布留1～4式の各呼称をする。可能であれば、古・新段階細分をも行う。詳細な時期判断が困難な場合、布留1～2式を布留式前半、布留3～4式を布留式後半とする。なお、同編年は形式呼称が記号なので、壺Aは大形直口壺、壺Bは複合口縁壺、壺Dは小形直口壺、甕Dは布留形甕、高坏Cは直口高坏、高坏Dは外反高坏、高坏Eは有稜高坏、鉢Bは有段口縁鉢と、称しておく。なお、甕Eは妥当な呼称ではないかもしれないが、小形甕としておく。なお、この両氏の編年が、須恵器出現以前までであり、須恵器出現以降の古墳時代の土師器については、辻 美紀氏の編年（「古墳時代中期・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』、1999年、大阪大学考古学研究室）を使用する。ただし、時期判断が困難な場合、同氏の編年に基づき、古墳時代中期・後期などと称する。

須恵器については、田辺昭三氏による編年（『須恵器大成』、1981年、角川書店）を使用する。

2. 竪穴住居

12 竪穴住居 (図 28 - 1 ~ 12)

1 は器台か。内外面とも大部分が剥離のため調整不明だが、外面中位にタテハケがわずかに残る。垂下した口縁端部には 5 条の沈線を施し、その上に円形浮文を付す。弥生時代後期前葉頃。2 ~ 4 は壺。2 は広口壺。口縁端部は上下に拡張し、面を持つ。弥生時代後期か。3 は、外面ハケ後ミガキで、底部 ~ 体部下半部にはハケ調整が比較的良好に残る。いずれも縦方向を基調とする。内面は工具によると思われる痕跡が良好に残るが、ハケとするには原体の単位が細かく、ナデと考えられる。弥生時代後期と考えられるが、詳細な時期は判断できない。4 は、外面タテ・ナメハケ後タテミガキで、底部および体部中位にハケ痕跡が残る。内面は横 ~ 斜め方向ナデで、底部にはナデを切って圧痕が見られる。この圧痕は、横 1.1 cm、縦 0.8 cm と指頭圧痕と判断するにはやや小ぶりであり、圧痕の縁部が比較的シャープに窪む。このため、指によるものではなく、棒状の工具によると考えられる。弥生時代後期か。5 ~ 7 は甕。5 は、口縁端部が拡張し、端部に明瞭な面を持つ。弥生時代中期後葉頃。6 は、外面右上がりのタタキ (3 条/cm)。内面は不明だがナデか。現状で、底部にクモの巣状ハケなどハケ調整は見られない。底部外面はドーナツ底。弥生時代後期。7 は 6 ほどタタキが明瞭に残存しないが、同様な右上がりのタタキである。内面にはわずかにハケが残る。なお、6・7 は鉢の可能性も考えられる。8 は高環。外面にはわずかにタテミガキと思われる痕跡が見られる。弥生時代後期中葉頃。9・10 は椀形高環。9 は坏部、脚部とも外面縦方向のハケ後ミガキ。内面は調整不明。脚部はほぼ完存するが、穿孔は見られない。10 は剥離のため内外面とも調整不明。脚部は緩やかに広がる形態のもので、残存部分では穿孔は確認できない。いずれも弥生時代後期前葉頃か。11 は高環。柱状形態で、外面にはタテミガキが施される。内面にはわずかにハケの痕跡が見られる。弥生時代後期前葉。12 は蓋か。口縁部が外方へ広がることから、蓋と判断した。地村編年第 IV 様式第 2 段階 (樋口編年和泉 III - 3 様式) の池上遺跡 S F 074 溝に類似しており、同様な時期と思われる。また、弥生時代後期前葉の観音寺遺跡 E - 26 号住居跡のように平板な形態ではなく、ここまで下るものではないだろう。

以上の遺物は、弥生時代後期中葉までの遺物としてよいと思われる。ただし、第 3 節で記したように住居に伴うと推測できる遺物は弥生時代後期前葉頃である。

115 竪穴住居 (図 28 - 13 ~ 18)

図化した遺物は、115 竪穴住居内の中央土坑である 83 中央土坑と、この東側に位置する 84 土坑から出土した遺物である。13・14 が 84 土坑、15 ~ 18 が 83 中央土坑出土遺物である。

13 は中形鉢。外面には縦方向の、内面には横方向の、それぞれミガキと思われる調整が見られる。体部から口縁の屈曲は、外面は鈍いものの、内面は明瞭に稜を持つ。14 は小形鉢。やや深手の椀形形態をとるものだろう。外面には接合痕が残り、タタキは観察できず、ナデか。内面は底部付近にハケ状工具の痕跡が残るが、のちナデか。以上の遺物は、概ね弥生時代後期中葉頃だろう。

15 は甕。外面には水平 ~ 右上がりのタタキ (2 条/cm) が施される。内面にはハケは見られず、ナデか。16 は広口壺。口縁 ~ 頸部外面には縦方向のミガキと思われる痕跡が見られる。内面は剥離のため調整不明だが、端部付近にはわずかにヨコナデの痕跡が残る。わずかに残存する頸部 ~ 体部の屈曲は鈍い。また、口縁 ~ 頸部の屈曲も鈍い。口縁端部が強いヨコナデにより上方に弱くつまみあげられる。17・18 は高環で、いずれも類似する形態である。外面は坏部、脚部ともにタテミガキで、17 は屈曲部分や坏部にハケがわずかに残る。脚裾部にはスカシが施される。17 の方向数は不明だが、3 方か。18 は 3

方。脚部は緩やかに外反する形態。弥生時代後期中葉頃だろう。

以上の遺物は、概ね弥生時代後期前～中葉頃と考えられる。

127 竪穴状遺構 (図 28 - 19 ~ 21)

19は椀形高坏。口縁部外面はヨコナデだが、これ以外の調整は不明。坏部はやや浅めで屈曲もほとんど見られない。弥生時代後期中葉頃か。20は広口壺。胎土は生駒山西麓産。口縁端部のみの小片で、調整も十分には観察できないが、端部外面には廉状文と思しき痕跡が見られる。内面の口縁部屈曲は比較的鋭い。弥生時代中期後葉頃。21は甕。外面はタタキのようにも見えるがはっきりしない。内面はナデか。

以上の遺物は、弥生時代中期後葉～後期中葉頃までと考えられる。

170 竪穴住居 (図 29 - 22 ~ 46)

図化した遺物は中央土坑である 191 中央土坑と、柱穴である 155・157・159・167・175・192・196 柱穴、柱穴以外の 199 土坑・169 溝等から出土した遺物である。

22～34は191中央土坑出土。22～26は高坏。22は口縁部にヨコナデが残るが、これ以外の調整は不明。坏部小片のため、土器の傾きが誤っている可能性もある。23は剥離のため調整不明。口縁端部を弱く外方へつまみだす。24は下層出土の高坏。剥離のため調整不明。25は脚部外面にタテミガキがわずかに見られる。坏部への屈曲部分は比較的シャープである。緩やかに外反する形態の脚部だろう。22～25は、いずれも弥生時代後期中葉頃だろう。26は外面タテミガキ、内面裾部付近はヨコナデ。穿孔が見られるが方向数は不明。端部には弱く面を持つ。弥生時代後期前葉～中葉頃だろうか。27は広口壺か。調整は不明。端部は弱く肥厚する。弥生時代後期前葉頃か。28は甕。剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的シャープで、端部は上下に拡張する。生駒山西麓産胎土。弥生時代後期か。29は上層出土の壺。外面には上半部に接合痕が残るが、ナデが施されているように見える。内面は口縁部付近にハケが見られるが、以下には指頭圧痕が見られ、ナデだろう。全体的に粗雑なつくりで、壺にしては内面の処理が雑である。形態からは、長頸壺の可能性も考えられなくもないが、断定しがたい。30は壺で、短頸壺か。剥離のため調整不明。口縁は短めで厚みを帯び、内湾気味である。時期はよくわからないが、弥生時代後期か。31～34は甕。33を除き、剥離のためいずれも調整不明。31は口縁部の小片で、頸部の屈曲は比較的シャープ。端部は上下に拡張する。弥生時代中期後葉頃か。32は外面に明瞭なタタキ痕跡は見られない。33は内面にはナナメハケが見られるが、外面は平滑で、タタキ痕跡は見られない。34は摩滅が著しく、底部からの立ち上がり部分が鈍くなっている。器面が剥落しているが、現状で外面にタタキ痕跡は見られない。32～34は、いずれも弥生時代後期前葉頃か。

35(196柱穴)は鉢か。剥離のため調整不明。口縁～頸部は強く外反し、端部は丸く収める。大形の鉢と考えれば、弥生時代後期前葉頃か。36(159柱穴)は器台か。口縁端部に径0.4～0.5cmの円形浮文を付す。全体的に剥離が著しく、調整不明。口縁端部は肥厚するが、明瞭に拡張した口縁部ではない。弥生時代後期前葉頃か。37(192柱穴)は広口壺。剥離のため調整不明。口縁端部は若干下部に拡張が見られる程度である。弥生時代後期。38(175柱穴)は壺。外面は、口縁部に強いヨコナデが施されており、凹凸状を呈する。以下はナデ。内面は調整不明。口縁端部は上方に弱く面を持つ。長頸壺かもしれないが、口縁がやや開きすぎに思える。長頸壺の一種とされる直口の口縁をもつやや小ぶりの壺ではないだろうか。弥生時代後期前葉頃と思われる。39(167柱穴)は甕。口縁部は内外面ともヨコナデと思われる。体部外面はわずかにハケが残る。内面は剥離のため、調整不明。また、外面頸

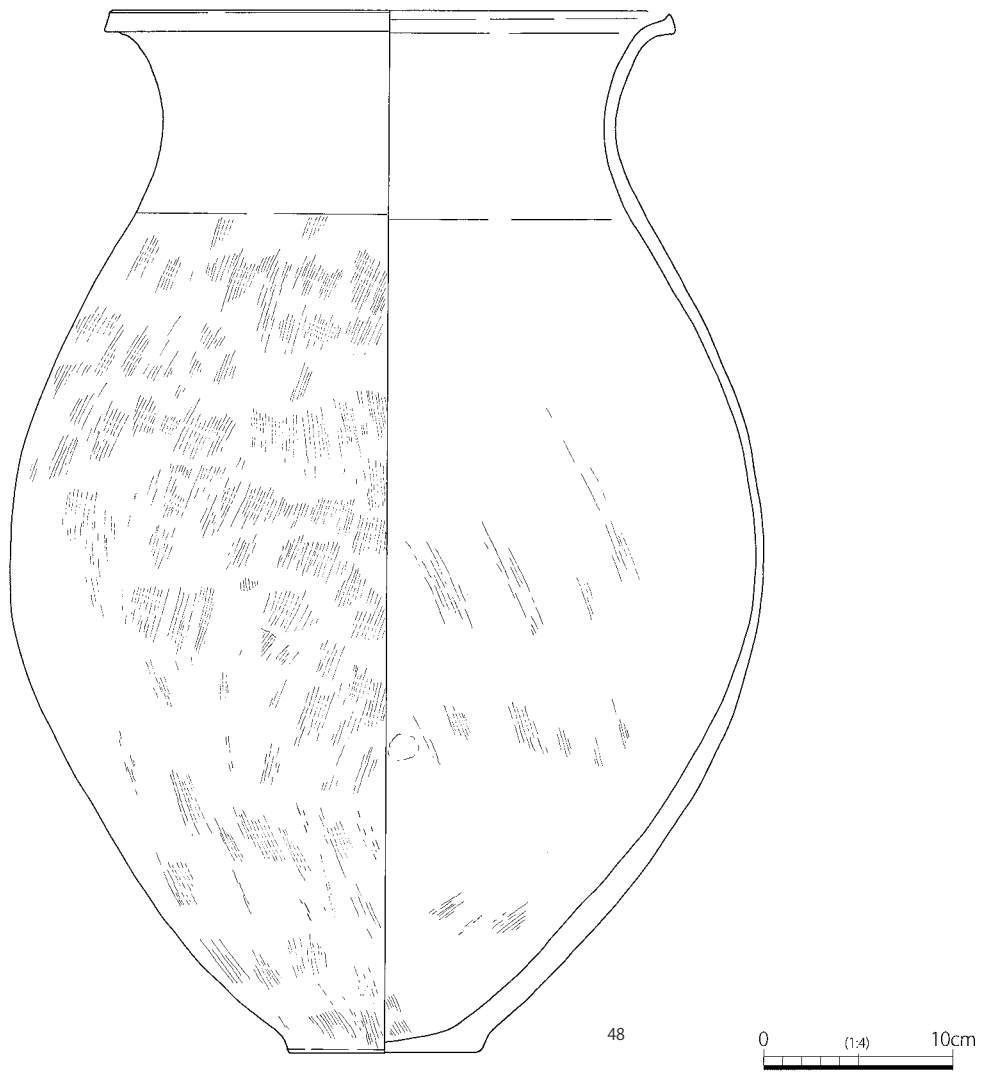
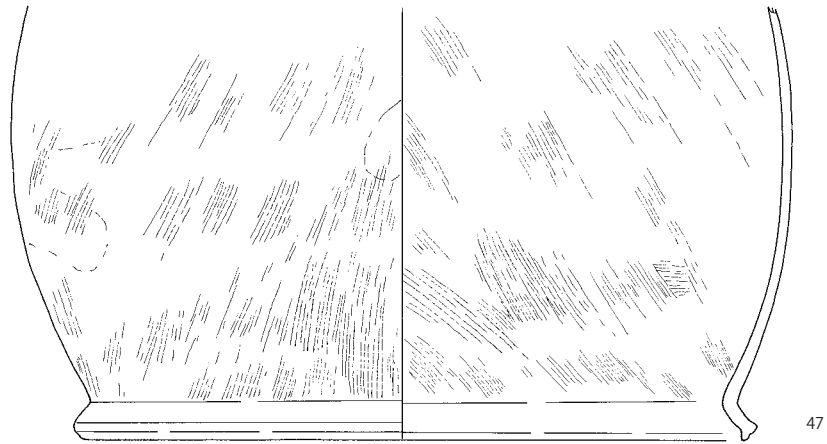


図30 土器棺墓出土遺物(1)(14土器棺墓)

部やや上と内面頸部やや下には接合痕が残る。頸部は比較的明瞭にくの字状に屈曲し、端部に面をもつ。弥生時代後期前葉頃だろう。40(155柱穴)は広口壺。外面は2段の廉状文を施した上に、円形浮文を2段に付す。廉状文原体の条数は不明。内面はナデ。内傾する付加状口縁部の小片で、破片下端は擬口縁状に接合面が残る。生駒山西麓産の胎土で、河内IV-1・2様式頃と思われる。41(199土坑)は長頸壺か。同じ170 竪穴住居の196柱穴出土土器片と接合。外面は下部に右上がりのタタキが施さ

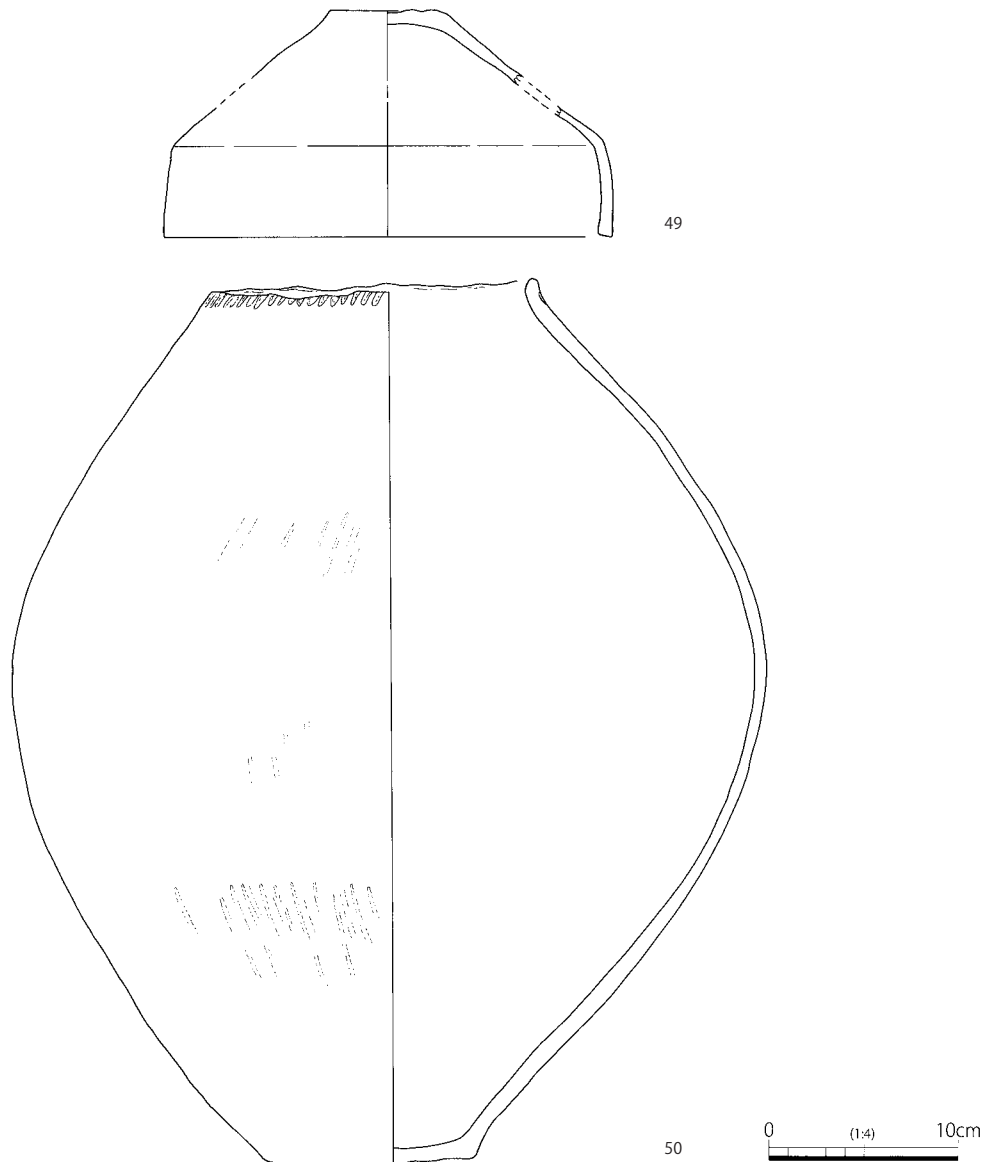


図31 土器棺墓出土遺物（2）（39土器棺墓）

れるが、残存状況は悪い。内面は下部にナナメハケが施される。やや肩が張るような器形である。短頸壺の可能性も考えられる。弥生時代後期前葉頃か。**42**（157柱穴）は甕。剥離が著しいが、体部外面には右上がりのタタキが、わずかに見られる。底部外面にはへら状工具による線刻（木の葉文？）が見られる。内面は板状工具の痕跡が見られ、ハケだろう。弥生時代後期前葉～中葉頃か。**43**（155柱穴）は高坏。内外面とも剥離のため調整不明。柱状の脚柱部下部の破片で、わずかに裾部への屈曲部分が残る。弥生時代後期前葉。**44**（169溝）は高坏。器面が剥離しており、調整は観察できないが、外面は本来ミガキが施されていたのだろう。わずかに、内面にシボリ目が残る。坏部への屈曲は鈍く、緩やかに外反する形態の脚部である。弥生時代後期中葉頃か。**45**（169溝）は甕。外面はタテハケ、内面はナナメハケ。弥生時代中期後葉頃か。**46**は甕。住居内は周辺の地山層に比べ、質の差異は明確に認識できなかったものの、若干濁ったような色調を呈していた。これは単なる変色もあるとは思えるが、若干の踏み込みなどを含む可能性があったため、当該部分を数cm下げた際に出土した遺物である。外面の調整は剥離のため観察できないが、内面はナデと思われる。外面にタタキは観察できない。弥生時代後期前葉頃か。

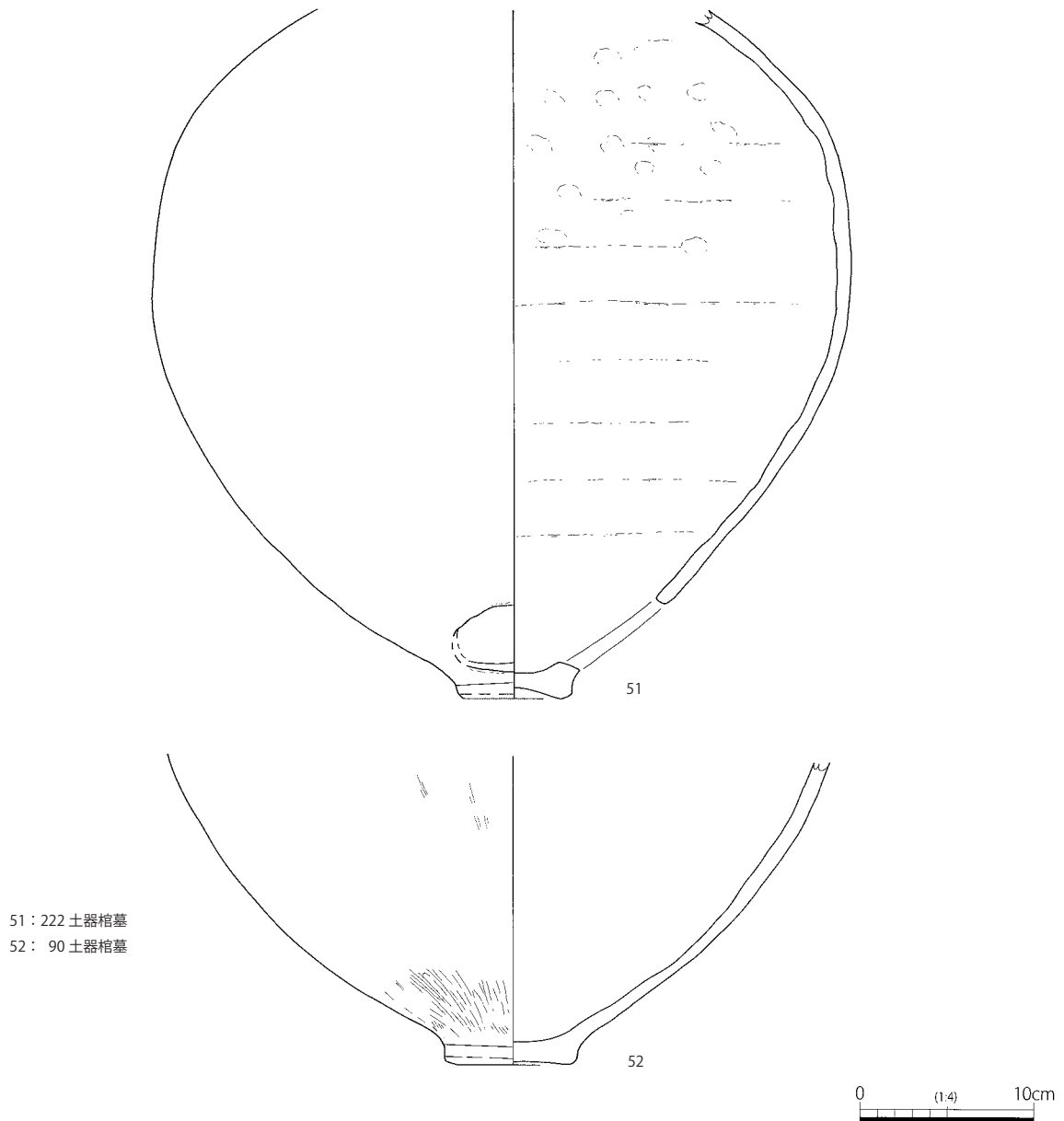


図 32 土器棺墓出土遺物（3）（90・222 土器棺墓）

以上の遺物は、いずれも弥生時代後期中葉頃までに収まるものと思われ、これが住居の廃絶時期を示していると思われる。

3. 土器棺墓

14 土器棺墓（図 30 - 47・48）

47 は棺蓋の甕。後世の攪乱により体部中位以下が欠如する。内外面とも口縁部はヨコナデ。体部外面は縦方向を基調としたハケ。内面は斜め方向のハケで、一部それ以前のヨコハケが見られる。頸部はくの字状に明瞭に屈曲し、口縁端部は上下に拡張する。この拡張は特に上方に顕著であり、端部外面は窪む。口径は体部最大径に及ばないものの、これに近づいている。以上から、弥生時代中期末、地村編年IV様式第3段階もしくは第4段階頃と考えられる。**48** は棺身の広口短頸壺。内外面とも、口縁部から頸部はヨコナデが施されている。体部外面は、縦方向を基調としたハケ。同内面は縦～斜め方向のハケが施されていると思われるが、不明瞭である。口縁端部は上下に拡張し、特に上方への拡張は明瞭であり、比較的シャープである。胴部最大径は同部中位にあり、肩は張らない。また、無文であること

から、弥生時代中期末、地村編年第IV様式第3段階もしくは第4段階頃と考えられる。

39 土器棺墓 (図 31 - 49・50)

49は棺蓋の鉢。内外面とも剥離のため調整不明。胴部中位の破片を欠くが、両者とも類似した胎土であり同一個体と判断した。外面に凹線など全く施されない。地村氏によれば、中期末の第IV様式第4段階でも鉢は加飾されるものが多いとする一方、文様の簡略化が著しいともされる。樋口編年和泉V-0様式の万崎池遺跡Ⅲ地区西側谷出土鉢や、弥生時代後期前葉とされる観音寺遺跡E-28号住居跡出土鉢との類似性からは、弥生時代後期初頭まで下る可能性が考えられるが、樋口編年和泉V-0様式資料は地村編年弥生時代中期末の第IV様式第4段階にも用いられており、弥生時代中期末～後期初頭頃と考えておく。50は棺身の壺。外面は一部でミガキ調整と思われる痕跡が見られるが、剥離のため全面では見られない。なお、残存部分上端の頸部には板状工具によると思われる刺突が施される。内面は剥離のため調整不明。なお、口縁部の破断面は比較的新しい。頸部以上を欠くが、広口短頸壺と思われる。無文化が進んでおり、体部最大径は胴部中位ほどに位置する。弥生時代中期末頃だろうか。

222 土器棺墓 (図 32 - 51)

51は壺。外面は剥離のため調整不明だが、縦方向の調整痕跡がうっすらと見える。タテハケだろうか。内面には3～4cm単位に接合痕が見られる。特に胴部最大径部分の接合痕は最も明瞭であり、これより上の肩部も接合痕も比較的明瞭で、当該部分には加えて指頭圧痕も見られる。明瞭な調整は見られないが、ナデだろうか。なお、胴部下端には円形に穿孔がなされている。胎土には角閃石などを含み、生駒山西麓産と思われる。14土器棺同様、広口短頸壺の可能性が考えられ、他の土器棺壺を考慮すれば弥生時代中期末頃と思われるが、内面の状況や器形からは、後期とすべきかもしれない。

90 土器棺墓 (図 32 - 52)

52は壺。外面はタテハケ後タテミガキだが、調整が残存するのは底部付近のみ。内面は剥離のため調整不明である。弥生時代中期か。

4. 土坑・井戸・落ち込み

139 土坑 (図 33 - 53～60)

53～55は甕。53は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は、左上がりのタタキが施されるが、弱くナデ消す。内面は、縦方向に工具痕跡が多数残り、カキトリだろうか。頸部の屈曲は内面で比較的シャープであり、口縁端部は窪む。口縁端部の拡張は弱く、外面のタタキも後期に一般的な右上がりではない。地村編年第IV様式第4段階、樋口編年和泉V-0様式の栄の池遺跡S X 002出土の甕と類似し、弥生時代中期末～後期初頭頃だろう。54は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はタテハケ。内面は不明瞭ながらナデだろう。頸部は特に外面が比較的明瞭にくの字状に屈曲する。端部は摩滅気味だが、弱く上方につまむ。胴部形態はうかがえないが、肩部はあまり張らないと思われる。弥生時代中期後葉頃。55は外面の大部分が剥離しており調整が十分に観察できないが、一部残存する胴部中位程では、斜め方向のケズリと思われる弱い砂粒の移動が見られる。内面はハケがうっすらと残り、体部下半では縦方向、中位では斜め方向である。胴部最大径は概ね中位にあると思われ、弥生時代中期後葉頃だろう。56は鉢。外面は口縁部に2条の凹線が施される。体部は下部に弱くケズリが見られるが、良好に残存しない。凹線が施されるあたりまでは及ばないようで、口縁部付近は横方向を基調としたナデが見られる。また、同箇所以下には縦方向の接合痕様のひび割れが見られ、内面から押し出されたようにも見える。内面は剥離のため調整不明。口縁部は弱く内湾気味である。弥生時代中期後葉頃。57は蓋。外面は剥

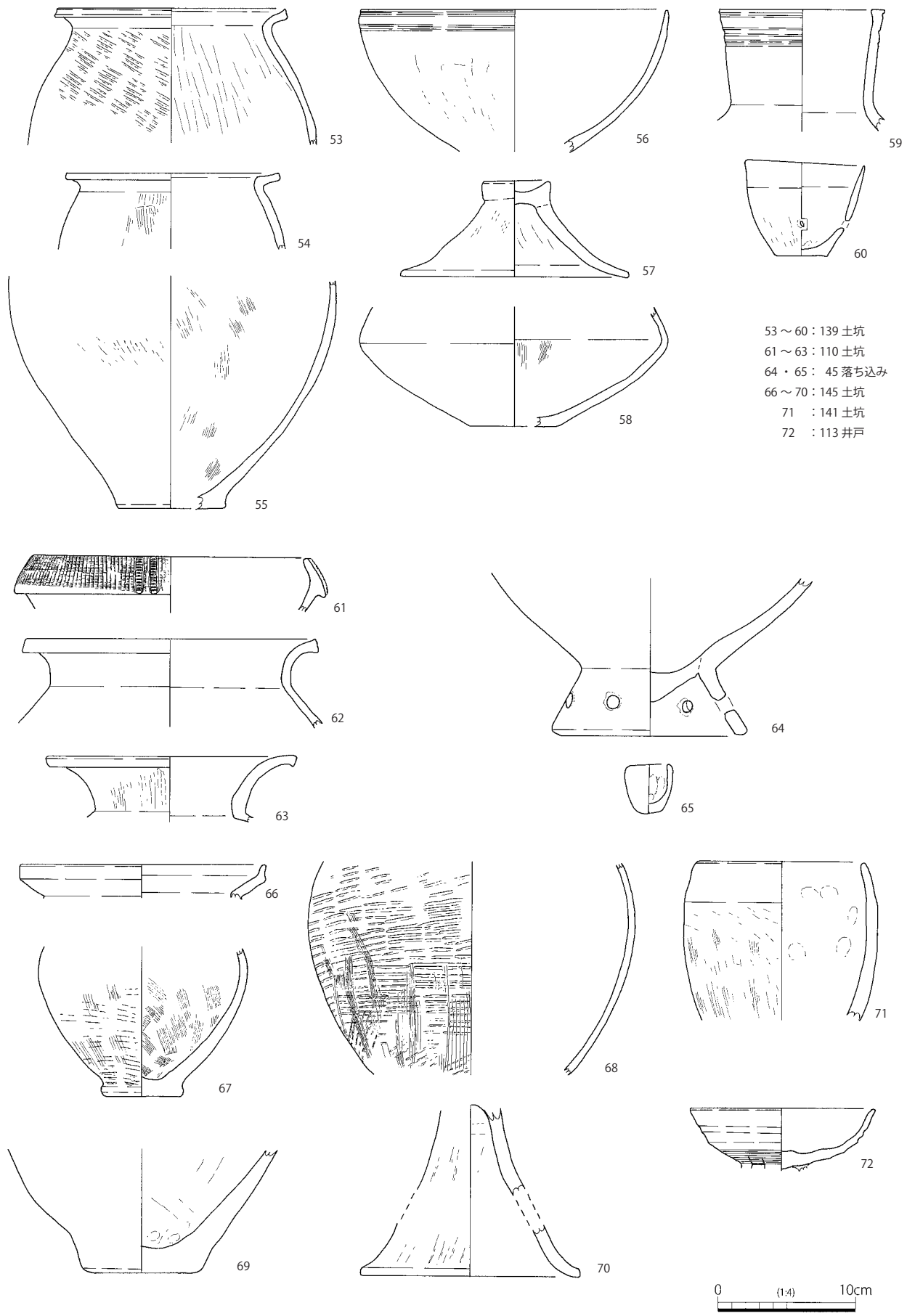


图 33 土坑等出土遺物 (1) (45 落ち込み、110・139・141・145 土坑、113 井戸)

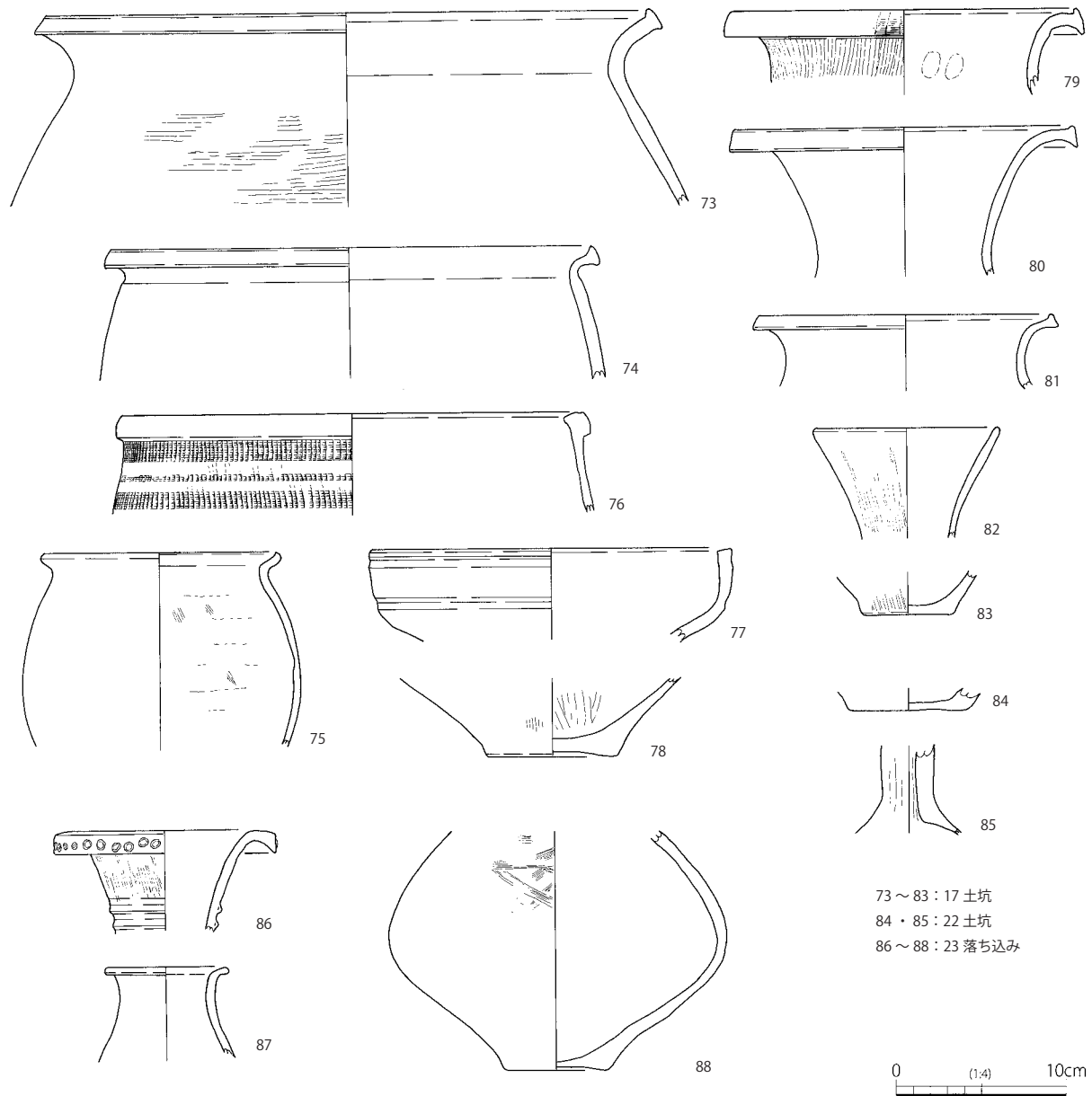


図 34 土坑等出土遺物 (2) (17・22 土坑、23 落ち込み)

離のため調整が十分に観察できないが、タテハケと思われる。内面は口縁部にヨコナデが施され、これより内側では板状工具痕が残る。ハケと思われるが、原体は良好に観察できない。つまみ部分はナデで、上部は窪む。端部は内外面とも約 2 cm の幅で媒の付着があり、外面つまみ部分は赤色に変色している。中期中葉までに見られるような器高の高いものではない。弥生時代中期後葉頃で、末までは下らないものだろう。58・59 は壺。58 の外面は剥離のため調整不明。内面は胴部屈曲部にわずかにハケが残るが、これ以外の調整は不明。胴部は強く横方向に張り出し、比較的鋭く屈曲する。下膨れ気味の広口壺と考えれば、弥生時代中期後葉頃か。59 は短頸壺か。外面は口縁部に凹線を施すが、これ以外の調整は不明。内面も調整不明。口縁端部は上端に面を持つ。弥生時代中期後葉頃。60 は小形鉢。内外面とも口縁部はヨコナデ。体部外面は下部～中位に砂粒の動きが見られ、ケズリと判断した。これより上はナデと思われる。内面はナメナデで、底部には指頭圧痕が見られる。甕形の鉢で、胴下部には焼成後の穿孔が一箇所に施される。他の類例では口縁端部を弱く外反させるなど、意識が見られる例があるように思えるが、本資料にはそのような意識は見られない。弥生時代中期後葉だろう。

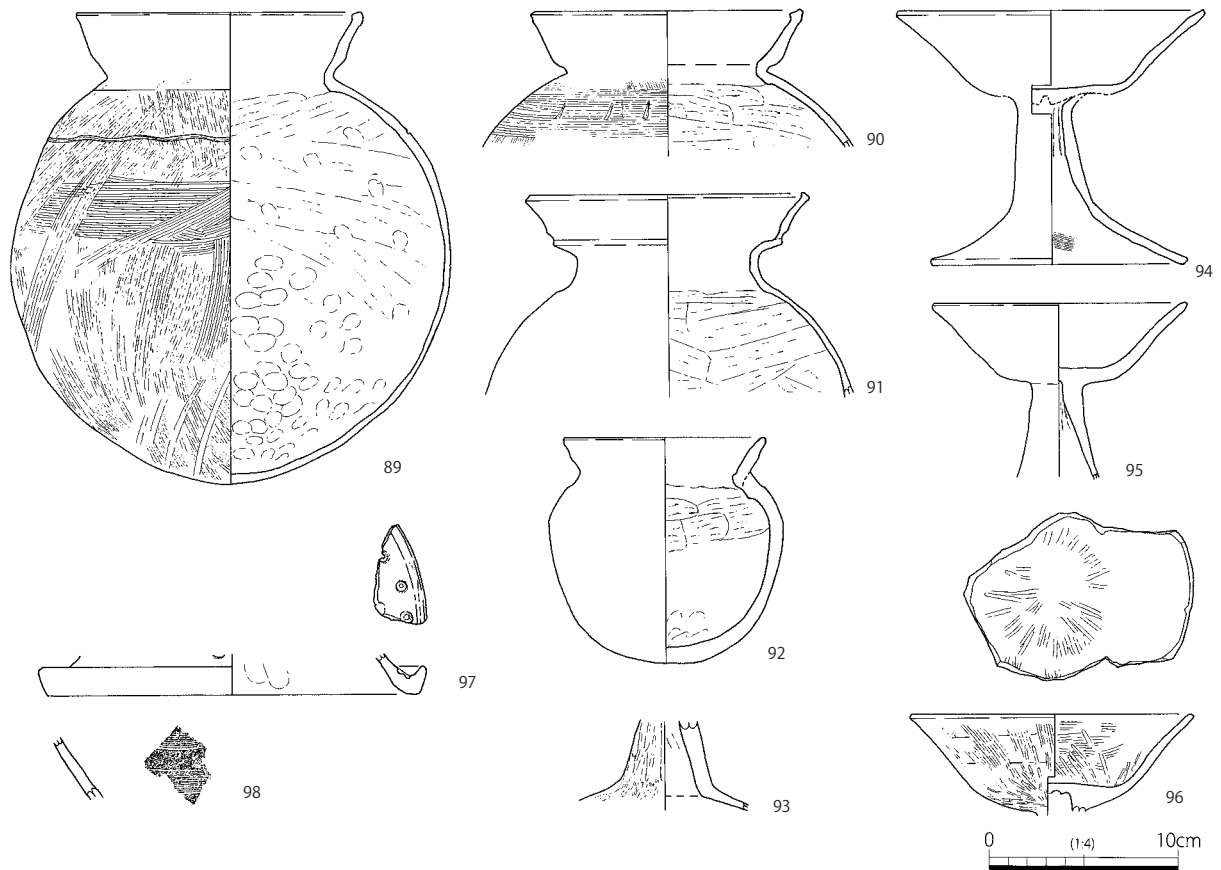


図 35 土坑等出土遺物（3）（18井戸）

以上の遺物は、弥生時代中期後葉頃、地村編年第IV様式第3段階を中心としていると思われるが、一部同4段階を含んでいると思われる。

110 土坑（図 33 - 61 ~ 63）

61 ~ 63は広口壺。**61**は、口縁端部外面に廉状文を施した上に、刻みを施した棒状浮文を付している。器面の摩滅のため、廉状文原体の条数は不明だが、約0.5 cmピッチで、2段に分けて施文していると思われる。棒状浮文は2個残存するのみで、これが一単位なのかは不明であり、その方向数も不明である。口縁部の小片のため、口径と傾きには、いささかの不安がある。生駒山西麓産の胎土で、搬入品。ただし、この器形で縦方向の凸帯はやや奇異である。弥生時代中期後葉頃。**62**は、広口短頸壺。内外面とも剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的シャープで、直線的に立ち上がる。口縁部には緩やかに屈曲し、端部は弱く拡張されている。口縁端部が、つまみあげ状の拡張ではなく、全体的に分厚くなっていく肥厚状であり、第IV様式第4段階よりも後出する要素と考えれば、後期初頭頃と思われる。**63**は、口縁部ヨコナデで、頸部外面にはわずかにタテミガキが見られるが、これ以外は剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的シャープで、頸部は逆ハの字状を呈する。口縁端部はごく弱く拡張する程度で、顕著ではない。弥生時代後期だが、詳細な時期は不明。

以上の遺物は、弥生時代中期後葉～後期初頭頃までと思われる。ただし、遺構の時期を示すものではない。

45 落ち込み（図 33 - 64・65）

64は台付鉢か。剥離のため内外面とも調整は不明である。台部分には、9方向に円形のスカシが穿たれる。和歌山県市脇遺跡2号住居の台付鉢（紀伊IV-2様式）を類例としてよければ、弥生時代中期

後葉頃だろうか。ただし、同例とは脚部の凹線の有無が異なる。**65**はミニチュア土器。時期は不明ながら、弥生時代中期か。

以上の遺物は、弥生時代中期後葉を中心としたものと思われる。この45落ち込みは、39土器棺墓に切られる。39土器棺墓が中期末と考えられ、矛盾しない。

145 土坑 (図 33 - 66 ~ 70)

66 ~ 68は甕。**66**は内外面ともヨコナデと思われるが、摩滅のためはっきりとしない。口縁端部を強くつまみあげる。全体的に分厚い。弥生時代後期前葉~中葉頃か。**67**は、外面が右下がり~水平方向のタタキ後タテハケ、内面が縦~斜め方向のハケ。外面のタタキは底部付近で比較的明瞭に残るが、上位はハケ消される。弥生時代後期前葉頃か。**68**は外面下部底部側が右上がりのタタキで、中位から上部が水平~右上がりのタタキ。一部に、タタキ後タテハケが施される。内面は剥離のため調整不明。胴部片のため、傾きや径にやや不安がある。弥生時代後期。**69**は壺か。外面は剥離のため調整不明。一部ハケとも思える痕跡が見えるが、不明瞭である。内面はナナメハケで、底部には一部指押さえと思われる窪みが見られる。弥生時代後期か。**70**は高坏。外面は剥離が著しいが、タテミガキがわずかに見られる。内面は調整不明。弥生時代後期前葉頃。

以上の遺物は、時期判断が難しいものも含むが、弥生時代後期前~中葉頃だろう。

141 土坑 (図 33 - 71)

71は蛸壺で、真蛸壺か。外面口縁部はヨコナデで、以下体部は上部が左上がり気味の下部が縦方向のケズリののち、縦方向を基調とした粗いハケと思われる。内面には随所に指頭圧痕が残り、ナデと思われるが、器面が剥離しており、十分に観察できない。全体的に厚いつくりである。外面のケズリからは、弥生時代中期中葉以降に見られる、外面ケズリの影響を考えたいが、当該期の真蛸壺は口縁端部が先細りではなく、面を持つものが一般的である。この点からは、蛸壺との判断が妥当ではない可能性もある。時期判断は難しいが、ひとまず蛸壺とし、外面にタタキが見られないことから、弥生時代中期後葉頃と考えておく。

113 井戸 (図 33 - 72)

72は須恵器無蓋高坏。内面から外面にかけて回転ナデが見られ、外面坏部下部はカキ目と考えられる。わずかに残る脚部には3方向の透しが穿たれている。透しに伴うへら状工具による鋭い調整がカキ目を切って見られる。坏部は浅く、外面に波状文などの文様は見られず、凸帯も不明瞭である。古墳時代後期、TK 10 型式か。

17 土坑 (図 34 - 73 ~ 83)

73 ~ 75は甕。**73**は体部外面にヨコハケ(もしくはタタキ?)と思われる調整が見られる以外、剥離のため調整不明。頸部の屈曲はやや鈍く、一旦垂直気味に立ち上がる。口縁端部は拡張し面を持ち、上方につまむ。弥生時代中期後葉。**74**は、外面頸部屈曲部分に、わずかにヨコナデが見られる以外、調整不明。口縁端部は上下に拡張し、頸部は比較的明瞭にくの字状に屈曲する。弥生時代中期後葉。**75**は内面にわずかに、1.5 cm前後間隔の接合痕と、左上がりのハケが見られる。口縁端部はつまみ上げられるが、丸みを帯びやや鈍い。頸部の屈曲は不明瞭で、肩部の張りもみられず、最大径は胴部中位にあると推測される。弥生時代中期中頃か。**76**は鉢。外面には約9条の廉状文が3段施される。口縁部外面の施文は剥離のため不明。上端面外側は弱く窪む。弥生時代中期後葉。**77**は高坏。口縁部は直立気味ながら弱く内湾し、口縁端部に面を持つ。体部外面、口縁端部下と、鈍い屈曲部に凹線を施す。

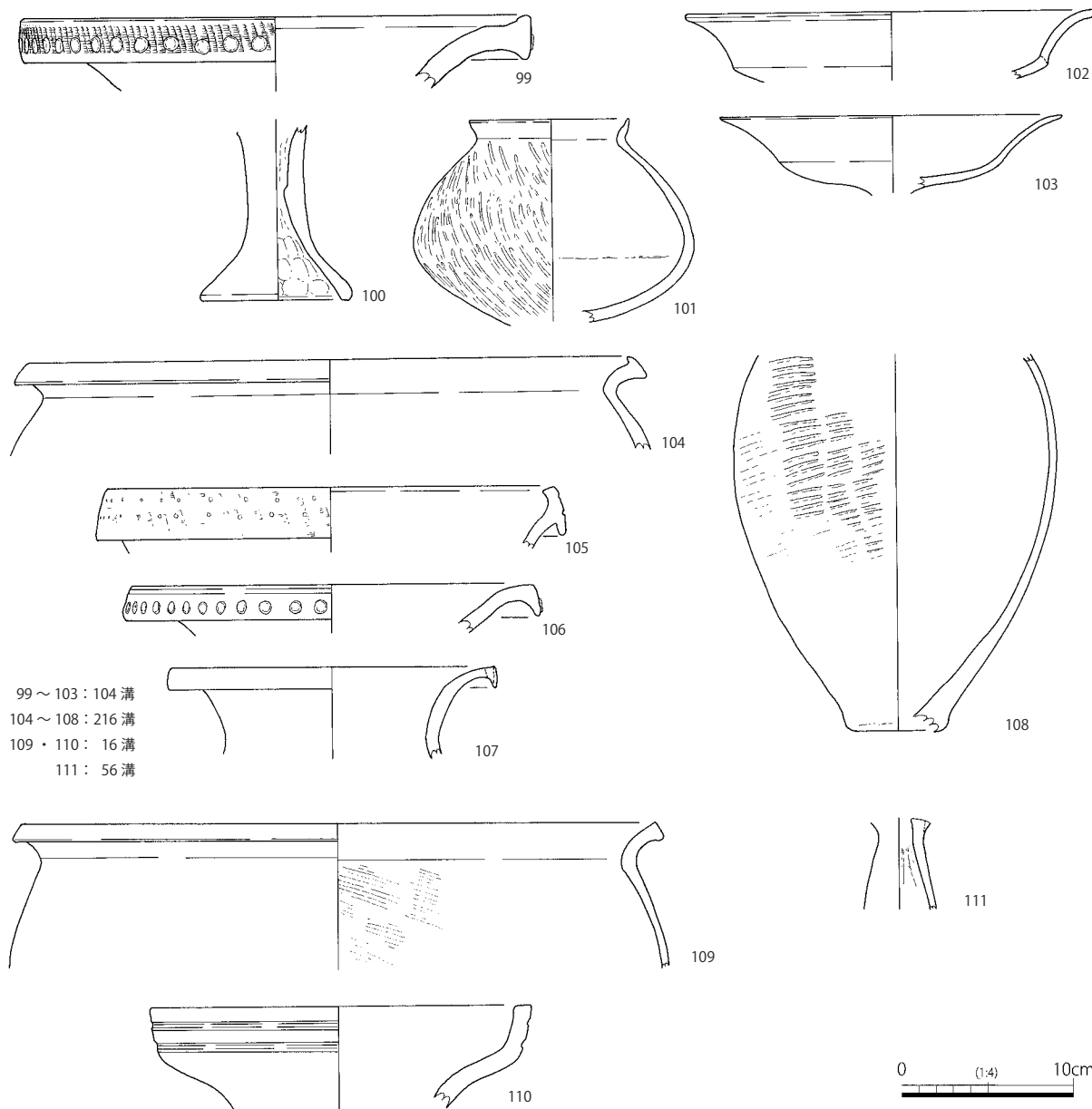


図36 溝出土遺物(1) (16・56・104・216溝)

弥生時代中期後葉頃。**78**～**82**は壺。**78**は体部外面にわずかにハケが見られる。内面にもハケは見られるが、原体幅が大きく異なり、ごく粗い。弥生時代中期と思われるが、詳細な時期は判断できない。**79**は広口短頸壺。頸部外面には粗いタテハケ(5～6本/cm)が施される。口縁部はヨコナデの後、端部外面に廉状文が施されているようにも見えるが、はっきりとしない。内面は頸部付近に指頭圧痕が見られ、ナデと思われる。口縁部は水平方向に近く開き、端部は上下に拡張されるが、下方への拡張が顕著である。弥生時代中期後葉。**80**は広口長頸壺。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面にはタテハケとも思える痕跡が見られる。端部は肥厚し面を持ち、上部につまむ。文様は見られず、無文化が進んだ段階、弥生時代中期後葉でも後半(第3段階頃)だろう。**81**は広口短頸壺。調整は口縁部内面のナデ以外、剥離のため不明。口縁部は水平方向に近く開き、端部はつまみ上げ面を持つ。弥生時代中期後葉頃。**82**は直口壺か。外面にタテハケと思われる痕跡が残る以外、剥離のため調整不明。**83**は甕。外面に若干タテハケと考えられる痕跡が見られる。弥生時代中期。

以上の遺物は、弥生時代中期後葉、地村編年第IV様式第3・4段階を中心に、一部これよりも遡る第

2段階や第Ⅲ様式をも含むものと考えられる。

22 土坑 (図 34 - 84・85)

84は甕か。内外面とも剥離のため調整不明。底部は薄手だが、体部に向かい分厚くなる。弥生時代中期。**85**は高坏。内外面とも剥離のため調整不明だが、内面脚柱部にはシボリ目が残る。脚裾部は端部に向かい薄くなるが、剥離が著しく本来はもう少し厚手であったと思われる。外面にも縦方向に筋状の痕跡があり、脚柱部を絞った際に生じた痕跡かもしれないが、やはり剥離が著しくはっきりしない。脚柱部から裾部への屈曲からは、弥生時代後期と推定する。

以上の遺物は、時期判断が難しいが、弥生時代中～後期と考えておく。

23 落ち込み (図 34 - 86～88)

86～88は壺。**86**は広口壺。外面はタテハケで、内面はヨコナデか。口縁端部外面には円形浮文が付される。また、頸部には断面三角形の突帯が残存部分で2条見られ、摂津系の土器とも考えられる。口縁端部が内面より下まで折り曲げられ、頸部はしまり気味であり、弥生時代中期中葉(Ⅲ様式後半?)頃だろうか。**87**は小形の広口短頸壺か。剥離のため調整不明。口縁端部はわずかに肥厚するが、端部の面も明瞭ではない。頸部の屈曲は鈍いが、内面の屈曲は比較的明瞭である。弥生時代中期中葉頃か。**88**は内外面ともナデか。肩部にはヨコハケとハケ状工具による斜格子文が施されるが、器面の剥離および残存部位の都合上、明瞭には観察できない。文様は播磨系の施文パターンとされるものだろうか。樋口編年では和泉Ⅲ-2様式以降一般的な存在になるとされ、同様な文様構成を持つものは地村氏の第Ⅳ様式には見られないようであることから、弥生時代中期中葉頃と思われる。

以上の遺物は、弥生時代中期中葉と考えられる。この23落ち込みは、中期末頃と考えられる14土器棺墓に切られており、時期的な矛盾はない。

18 井戸 (図 35 - 89～98)

89～96は図18の2層出土でいずれも布留式土器、**97**は4層出土で3～5層出土の**98**とも弥生土器である。

89・90は典型的な布留形甕(甕D)である。**89**は体部外面全面にタテハケが複数回施される。肩部に弱く残るほぼ垂直方向のタテハケは、当初のハケで、本来より下位にまで及んでいたものと考えられるが、その後、全体に残存する左下がりのナナメハケに切られ、肩部はヨコナデで消される。その後、肩部やや下がった部分にヨコハケが施されるが、さらにそれを切るようにナナメハケも見られる。ただし、タテハケほど密ではない。また、肩部にはへら状工具による若干波状を呈する調整が施されるが全周しない。一方、底部付近にはハケを切り、幅約0.4cmの擦痕状の細かい調整が見られる。体部内面は体部上半にケズリが施される。砂粒の動きが明瞭に観察できるのは肩部付近のみで、以下は工具痕が残る程度である。なお、中位から底部にかけては指頭圧痕が見られ、底部ほど密である。口縁端部は肥厚し、上端部に若干内傾する面を持つ。体部はほぼ球形である。**90**は体部外面の残存部分ほぼ全体にヨコハケが見られ、頸部や残存部分下位でそれ以前のタテハケが見られる。肩部にはハケ状工具による小口列点文が施され、3箇所が残る。また、頸部の強いナデにより、口縁部下部に典型的な段が形成されている。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部内面は基本的に時計回り方向のケズリが施される。ケズリは頸部下約0.8cm程度にまでおよび、同部分にはナデ調整が残る。口縁部はナデで、端部は肥厚し、内面に明瞭な面を持つ。なお、小口列点文は次山 淳氏により吉備系文様と評価されており(次山1997)、和泉地域で肩部に文様(列点文)が見られる遺跡としては、西浦遺跡、船尾西遺跡、豊中古池遺跡などがある。

る。**91**は複合口縁壺（壺B）。体部内面の時計回り方向を基本とするケズリ以外、剥離のため調整不明。一次口縁から二次口縁への屈曲は比較的シャープである。外面調整は観察できないが、本来ヨコハケが施されていた可能性が考えられる。なお、口縁端部には外傾する面を弱く持ち、内面上方につまみ上げる。**92**は小形甕（甕E?）。口縁端部はわずかに残存するのみなので、本来はより長い可能性もある。概ね直線的で、弱く内湾する。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はナデだろうか。体部内面は、肩部にケズリが施されるが、以下では見られず、後にナデを施したものと思われる。底部付近には指頭圧痕がわずかに見られる。**93**～**96**は外反高坏で、いずれも坏部は鈍く屈曲した後弱く外反し、端部に至る。**93**の脚柱～裾部への屈曲は、内面がより鋭い。脚端部は摩滅しており残存しないが、凶化した先端が概ね端部だろう。**94**は、脚・坏部接合部分に若干欠損がある。調整は剥離、摩滅のためほとんど不明だが、わずかに脚裾部内面にハケが残る。脚部の屈曲は不明瞭である。**95**は剥離のため調整不明。やや厚手である。**96**は外面に細かいが深い原体（7～9本/cm）によるタテハケ後、縦方向を基調としたミガキが施される。鈍い屈曲部分には、一部でわずかにミガキ以前の砂粒の移動が見られる。坏底部外面の脚部との接合部分には、棒状工具による径4mm程の刺突痕が見られる。内面はナデ後乱雑な暗文風ミガキを施す。

97は高坏。脚裾端部のみの残存だが、端部が上方へ拡張され、外面には竹管文が最低2段施される。**98**は壺で、肩部付近の小片。12条の櫛描直線文と残存部分で9条の櫛描直線文が施される。

以上、2層出土の布留式土器は、布留1式新段階～2式頃と考えられる。一方、4層出土の弥生土器は、弥生時代中期後葉頃だろう。

5. 溝

104 溝（図36－99～103）

99は広口壺。口縁端部には0.3～0.5cmピッチの廉状文（10条?）が施された上に、芯々間1.8cmピッチで径0.9cmの円形浮文を付す。以下の外面は剥離のため調整不明。内面は口縁端部付近がヨコナデで、以下はナデである。口縁端部は上下に拡張し、加飾度も強い傾向から、弥生時代中期後葉と思われる。**100**は高坏。脚柱～裾部への屈曲は不明瞭である。脚端部外面にごく弱く面を持つが、意図的なものではないと思われる。弥生時代中期中葉か。**101**は短頸壺もしくは無頸壺か。側溝出土ながら104溝に伴うと思われる遺物である。口縁部は内外面ともヨコナデで、体部外面は縦方向を基調とするミガキ。内面はナデだろう。残存しないが、脚付の可能性も考えられる。やや形態は異なるものの、樋口編年和泉V－3様式の池上遺跡SG108井戸の短頸壺は球形化が進行しているが、本例は胴中位やや下に最大径を持つ。弥生時代中期後葉の無頸壺、短頸壺は下膨れであり、その中間的形態と考えてよければ、弥生時代後期前葉頃だろうか。**102・103**は高坏。いずれとも、内外面剥離のため調整不明。二次口縁は強く外反するが、102はやや短く有稜高坏A2、103は比較的長く同A4か。102は坏部の小片のため、復元した傾きと口径にやや不安がある。102が弥生時代後期中葉、103が弥生時代後期末頃だろう。

以上の遺物は、弥生時代中期中頃～後期前葉、後期中葉、後期末と時期幅がある。しかし、布留式の18井戸、古墳時代の65溝西部に切られていることとは矛盾しない。なお、当遺構からは凶化し得なかったが、須恵器の出土も見られる。これは切り合いがある65溝の須恵器と同時期であり、ここからの混入と判断した。このため、今回凶化した遺物も混入の可能性があり、出土遺物から遺構の時期を評価しにくい状況である。

216 溝 (図 36 - 104 ~ 108)

104 は甕。内外面とも剥離のため調整不明。頸部の屈曲、端部のつまみ上げは鋭い。口縁端部は上下に拡張するが、上方への拡張が顕著である。弥生時代中期後葉。**105 ~ 107** は広口壺。**105** は付加状の口縁をもつ広口壺。生駒山西麓産胎土で、搬入品である。口縁端部外面には、廉状文とも見える痕跡が残るが、摩滅が著しく不明確である。また、上下二段に径 0.2 cm 程度の刺突痕が互い違いで約 2 cm 間隔に見られる。以下はナデだろう。内面の口縁端部付近はヨコナデ、以下がナデと思われるが、いずれも不明瞭である。口縁端部は上下に広く拡張し、弱く外傾気味の面を持つ。口縁端部下端は丸く収めるが、同上端は内傾気味の面を持ち、内側につまむ。弥生時代中期後葉。**106** は細頸の広口短頸壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部には約 1.5 cm 間隔に円形浮文を付す。円形浮文は中心部に弱い窪みが見られ、竹管文を施しているのかもしれないが、剥離や摩滅のため不明である。また、口縁端部外面上位には弱く沈線状の窪みが見られるが、意図的かはっきりしない。なお、色調は際立って赤味を帯び、二次的な被熱を受けている可能性がある。弥生時代中期後葉～後期中葉頃か。**107** は内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部付近には、径約 0.4 cm の 2 個の蓋孔が残る。1 箇所確認できたのみで、複数箇所が存在するのかは不明。頸部は逆ハの字状で、口縁端部は狭いが上下に拡張する。弥生時代中期後葉頃か。**108** は甕。外面は胴部中位以上に右上がりのタタキ (3 条/cm) を施すが、以下にタタキは見られない。底部付近に、タタキ痕の可能性もあるものの、板状工具の静止痕と考えられる痕跡がわずかに見られることから、タタキ後にハケ消した可能性が考えられる。なお、ハケ目は剥離のため観察できない。内面は、剥離のため調整不明。器形は細長く、タタキが部分的にハケ消されていることなどから、弥生時代後期前葉頃と考えられる。

以上の遺物は、弥生時代中期後葉～後期中葉頃までと思われる。

16 溝 (図 36 - 109・110)

109 は甕。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は剥離のため調整不明。内面は左上がりの粗いハケ。頸部の屈曲はやや鈍い。口縁端部は上下に拡張するが、さほど顕著ではない。弥生時代中期後葉～末頃か。**110** は段状口縁壺。内外面とも剥離のため調整不明だが、口縁部外面には 2 条の凹線が施される。口縁の段の屈曲は鈍く、全体的に厚手である。比較的小型で、段の屈曲も鈍い。弥生時代中期後葉～末頃。

以上の遺物は、図化し得た遺物は少ないが、弥生時代中期後葉でも末頃が中心と思われる。

56 溝 (図 36 - 111)

111 は高坏。内外面とも剥離のため調整不明。内面にはわずかにシボリ目と思われる痕跡が残るがはっきりしない。ケズリは確認できない。脚部は逆ハの字状で、全体的にシャープなつくりである。布留式の可能性が考えられる。

64 溝 (図 37 ~ 77 - 112 ~ 820)

64 溝は複数の調査区に跨り検出されており、まとまりごとに西部、中央部、東部にわけて記述する。

64 溝西部 (図 37 ~ 45 - 112 ~ 265)

112 ~ 181 は上層上部、**182 ~ 233** は上層下部、**234 ~ 259** は下層からそれぞれ出土で、**260 ~ 265** は出土層位不明である。

112 ~ 132・134 ~ 136 は壺。**112** は段状口縁壺か。複合口縁壺の可能性も考えたが、口縁部の立ち方、器壁の厚さから、段状口縁壺と判断した。内外面とも剥離のため調整不明。屈曲は比較的シャープで、

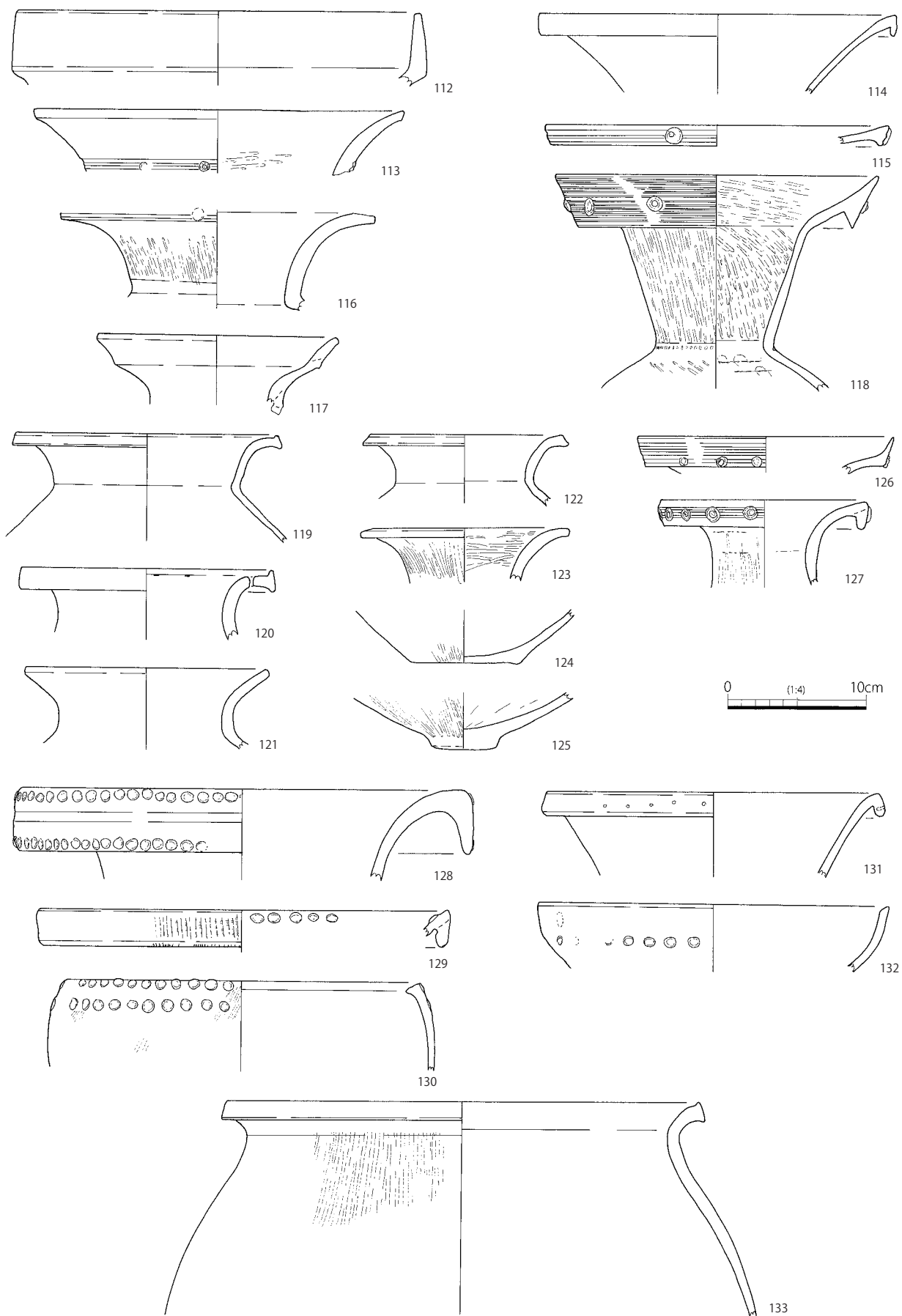
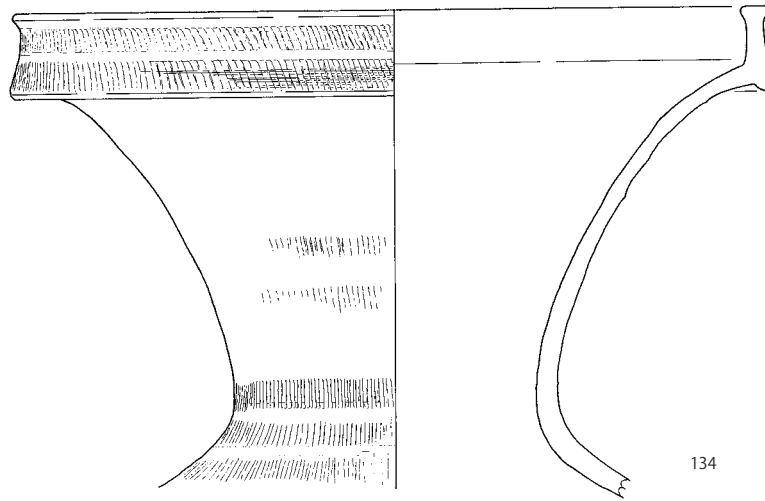


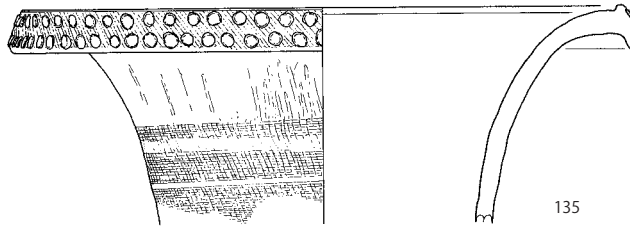
图 37 溝出土遺物 (2) (64 溝西部・上層上部 1)

口縁端部は上端部に鈍く面を持つ。弥生時代中期後葉頃。**113**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B）。外面は剥離のため器面が残存しない箇所が多いが、ヨコナデか。ミガキが施されているようにも見えるが、単位などはっきりしない。なお、屈曲部のやや上には沈線が推定2条施され、その上に円形浮文が付され、竹管文が施されている。浮文は2個が残存するのみで、両者の間隔は約5cmである。内面は、屈曲部付近にヨコミガキがわずかに見られるが、それ以前のヨコナデと思われる痕跡が目立つ。加飾傾向にあることから、庄内式と考えられる。**114**は広口壺。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部外面には凹凸が見られ、刺突などの装飾痕の可能性も考えられるが、剥離、摩滅のため不明瞭である。生駒山西麓産胎土。弥生時代中期後葉。**115**は広口壺（広口壺D）。口縁端部は拡張し、2条の凹線が施された上に円形浮文が付され、竹管文が施される。浮文は残存部位で1個が確認できるのみ。以下、外面はハケ、内面は調整不明である。弥生時代後期中～後葉頃か。**116**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺Ba）。頸部外面はヨコナデ後タテミガキだが、口縁端部付近まではミガキが至らず、ヨコナデのままである。頸部付近は帯状に剥離しており、肩部に凸帯が付されていた可能性が考えられる。一次口縁端部には、一部で凹線状の細い窪みが見られ、その上に円形浮文の残骸が見られる。内面は剥離のため調整不明で全体的に器面が荒れている。端部は、別の剥離をしており、上方へ二次口縁が付されていたと推測できる。体部から頸部が逆ハの字状に外反する。加飾傾向からは庄内式と考えられる。**117**は二重口縁壺（複合口縁壺A）。内外面とも調整が良好に観察できないが、口縁部はいずれもヨコナデだろう。以下は、外面はナデ、内面はナデかミガキと思われる。頸部は断面がやや厚く、凸帯が付されているものと思われる。体部から外反して一次口縁が伸びる。二次口縁が短いことから、弥生時代後期後葉頃と思われる。**118**は広口壺。口縁部外面には約12条の凹線が施され、その後12方向に円形浮文が付され、竹管文が施される。なお、円形浮文が剥落するものもある。以下、外面口縁部～頸部にかけてはタテミガキが施され、頸部屈曲部にはヘラ状工具による刺突が施される。体部は、調整の残存状況が悪いが、ナナメミガキである。内面は、口縁～頸部までいずれもミガキだが、口縁部は横～斜め方向、頸部上位は斜め方向、下位は縦方向である。体部はナデと思われ、接合痕が残る。頸部は比較的鋭く屈曲し、逆ハの字状に直線的に立ち上がり、再度比較的明瞭に屈曲し直線的に口縁が伸び、口縁端部は垂下する。時期はよくわからないが、弥生時代後期だろうか。**119・120**は広口短頸壺で、いずれも剥離のため調整不明。**119**は体部～頸部への屈曲、頸部～口縁部への屈曲はいずれもやや鈍い。口縁端部は拡張し、ややつまみ上げたように見える。弥生時代中期末頃か。**120**は口縁端部際に2個一対の穿孔が見られる。孔は径0.3cm弱で、孔間は約2cmである。穿孔位置から蓋孔と思われる。口縁端部は特に上方に明瞭につまみ上げられるが、端部外面の装飾については、摩滅もあり不明である。弥生時代中期後葉頃。**121～123**は広口壺で、**121・122**は剥離のため内外面とも調整不明で、広口短頸壺としてもよいかもしれない。**121**の頸部は比較的直線的だが、体部や口縁部との屈曲部分は鈍い。口縁端部は拡張しない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**122**の体部～頸部への屈曲は外面で比較的明瞭で、頸部は逆ハの字状に弱く外反する。頸部～口縁部への屈曲も、外面で比較的明瞭で、短い口縁が横方向に伸びる。口縁端部は外傾する面を持ち、強いヨコナデによってか、中央が窪む。弥生時代後期中葉頃。**123**の外面、口縁部はヨコナデか。以下、頸部はタテミガキで、口縁端部まで至らない。内面はヨコミガキ。口縁端部はやや丸みを帯びるが、弱く面を持つ。弥生時代後期頃。**124・125**は壺底部。**124**は内外面とも剥離が著しい。体部外面は、底部付近にミガキがわずかに残り、タテミガキだろう。底部外面と内面はナデだろう。弥生時代中期か。**125**の体部外面はタテミガキ。内面はハケだが、ハケ目は十分に観察

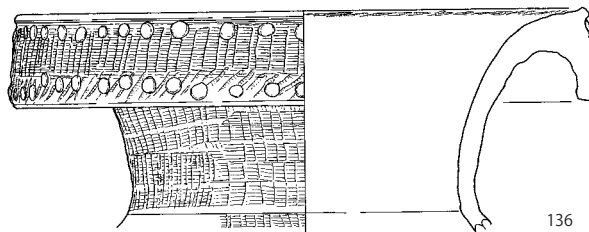
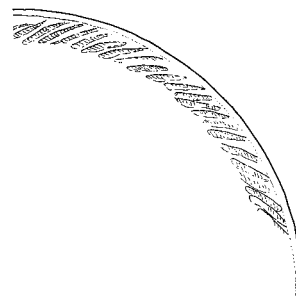
できない。底部から体部の立ち上がりからは、球形化が進んでいると推測される。弥生時代後期後葉～庄内式頃だろう。**126**は広口壺か。口縁端部が上方へつままれ、長めの受け口状を呈する。内外面とも剥離のため調整が不明だが、口縁端部外面には8条の凹線が施され、その上に竹管文を施した円形浮文が付される。浮文は残存部位で3個が見られるのみだが、3cm間隔で付されている。二重口縁壺とするには口縁部が短い。また、弥生時代後期後葉以降の広口壺は一般的に素口縁か、垂下口縁である。以上から、二重口縁壺出現前に見られる受け口状口縁の広口壺と思われ、弥生時代後期中葉頃と考えておく。**127**は広口壺（広口壺C）。口縁部外面はヨコナデの後、4条の櫛描直線文を施し、その上に竹管文を施した円形浮文を付す。円形浮文の間隔は、1.6cm～最大3.2cmとバラつく。頸部はタテミガキと思われる。内面は大部分が剥離しており十分に観察できないが、口縁部付近はミガキと思われ、頸部にはわずかにナデの痕跡が認められる。なお、頸部には一部1.5cm間隔で接合痕が見られる。頸部～口縁部の屈曲は、外面で比較的明瞭だが、内面は鈍い。この点からは、弥生時代後期中～後葉頃と考えられる。**128**は細頸の広口短頸壺。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部は垂下し拡張され、外面には上下端に円形浮文が付され、その間の中央部分は弱く窪む。十分には観察できないが、廉状文が施されていたようにも見える。弥生時代中期後葉頃。**129**～**131**は、弥生時代中期後葉の生駒山西麓産胎土の壺で搬入品である。いずれも、剥離、摩滅により調整不明である。**129**は広口壺。下方に垂下し拡張した口縁端部外面には、0.3～0.4cmピッチで廉状文が施される。剥離、摩滅のため、櫛目が確認できず、施文工具の静止単位が確認できるのみである。また、端部下端には刻み目が約0.2cmピッチで施される。内面、口縁端部際には、径約0.8～1cmの円形浮文が0.1～0.7cm程の間をあけ付される。**130**は太頸壺。口縁部外面には2段に円形浮文が付される。浮文は径約0.6～1cmで、下側がやや大きい。浮文の下や頸部には、櫛状工具による刺突文の可能性もある痕跡がわずかに見られる。**131**は広口壺。頸部～口縁は逆ハの字状に開き、口縁端部は垂下する。口縁端部外面には刺突文が見られ、残存部位で約2cm間隔5点連続後、約8cmの空白があり、1点が残る。**132**は高坏か。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面の鈍い屈曲部には、竹管文が1.7～2cm間隔で施される。弥生時代中期。**133**は甕。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、はっきりとはしない。体部外面はタテハケだが、残存状況は悪い。体部内面は剥離のため調整不明瞭だが、ハケだろうか。口縁端部は上下に拡張し、外面には櫛描文が施されているようにも見えるが、判然としない。弥生時代中期中葉頃か。**134**は段状口縁壺。内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面、口縁部には2段、頸部下から体部にかけても数段の、それぞれ廉状文が施されているようだが、良好に観察できず、廉状文原体の条数は不明である。なお、残存する部分で廉状文のピッチは0.3cm以下である。内面は調整不明。弥生時代中期後葉頃。**135**は広口壺。口縁部外面は廉状文の後上下二段に円形浮文を付す。摩滅のため廉状文の残存状況が悪く、櫛状工具による列点文の可能性もある。頸部外面はタテミガキの後に廉状文が施される。廉状文は0.1～0.4cmピッチで、バラつきがある。内面は、口縁端部付近に櫛状工具による列点文が施される。口縁端部は上下に拡張するが、上方へは短く、下方への垂下がやや強い。弥生時代中期後葉頃。**136**は細頸の広口短頸壺。口縁部外面は、まず櫛描直線文が施されているようで、口縁端部上端の円形浮文が付されている下のくぼみ部分に見られる。その後、廉状文が0.4～0.8cmピッチで施され、さらに口縁下部に櫛状工具による刺突文が施され、最後に円形浮文が上下二段に付される。頸部はタテミガキの後、廉状文が施される。内面は口縁端部に櫛状工具による刺突文が施されるが、以下は摩滅のため不明である。ただし、ミガキの可能性が考えられる。口縁端部の垂下は長く、弥生時代中期後葉でも後半だろう。



134



135



136

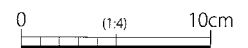


図38 溝出土遺物(3)(64溝西部・上層上部2)

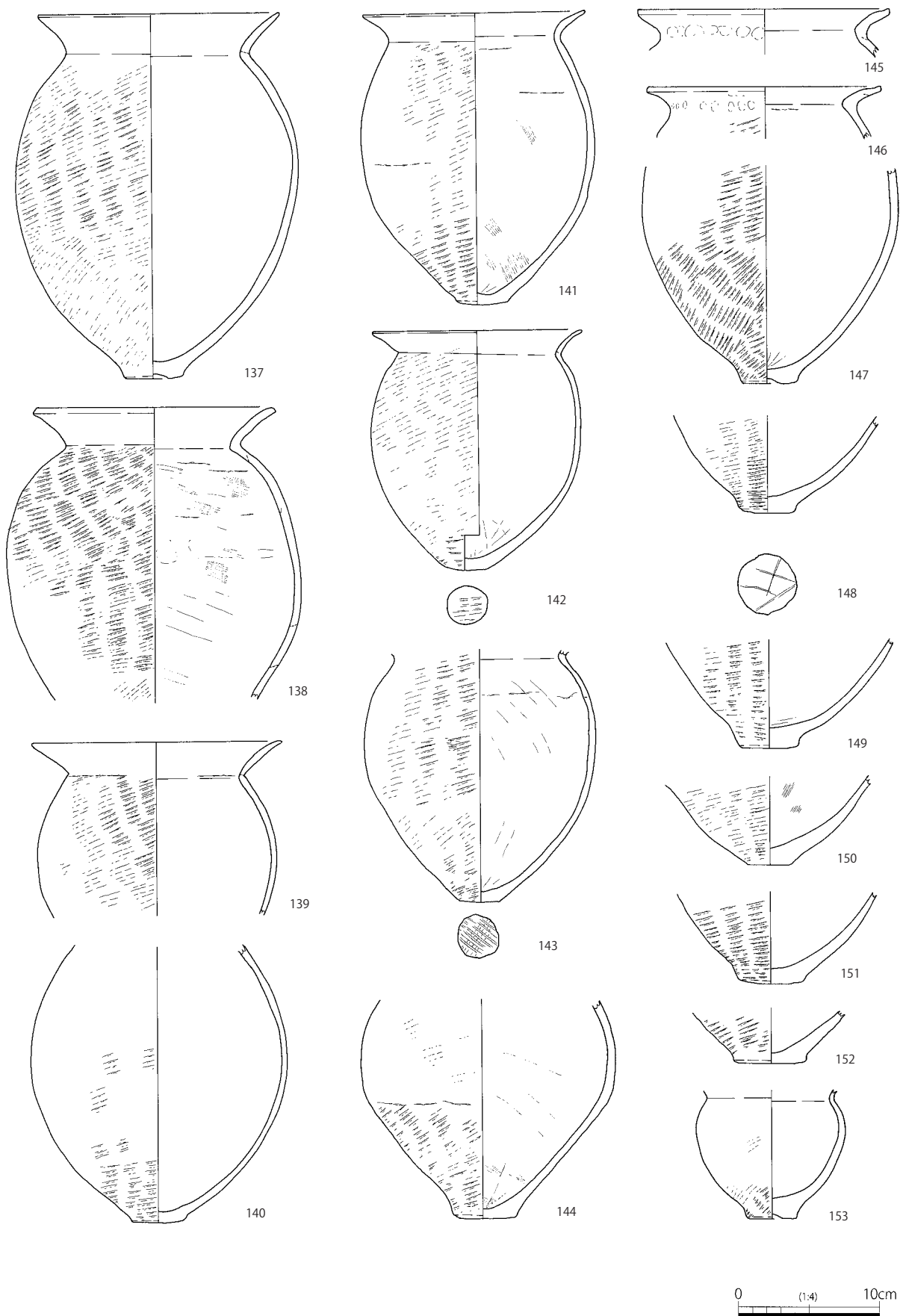


図 39 溝出土遺物 (4) (64 溝西部・上層上部 3)

137～153は甕で、いずれも弥生形甕である。器高を基準とした分類に従うと、137・138がA b、139～141・143・144がA c、142がA d、153がA eである。以下では、わかるものについては口縁形態による分類も記す。137は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は摩滅のため調整不明。底部はドーナツ底。頸部の屈曲は、特に内面で比較的明瞭である。球形化はあまり進んでいないが、下田遺跡成果によれば、弥生形甕A b hは、庄内式末まで球形化が進行していない。これからは、弥生後期後葉の範疇に収まると言い切れず、弥生時代後期後葉～庄内式頃と考えておく。138は口縁gか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は水平～右上がりのタタキ（4条/cm）。内面は横～斜め方向ハケだが、ハケ目の残存状況は悪い。比較的球形化が進んではいるが、弥生時代後期後葉頃だろう。139は口縁h。内外面とも剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、内面は良好に残存しない。体部外面は右上がりのタタキ（3.5条/cm）。内面は剥離のため不明。体部最大径は口径以下だが、これに近い。体部も球形化傾向にあり、弥生時代後期末～庄内式初頭頃か。140は内外面とも剥離が著しい。外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）だが、残存状況は悪い。底部外面にはへら状工具の擦痕が見られるが、意図的なものではないと思われる。内面は剥離のため調整不明。底部は平底。底部の突出はほとんどなく、体部の球形化も進行している。やや長細い器形だが、庄内式併行期と思われる。141は口縁h。全体的に剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は底部付近や体部中位などにわずかながらハケが見られる。底部は平底。底部の突出はほとんどないが、さほど球形化は進んでいない。ただし、胴部最大径が口径をわずかに上回っており、庄内式初頭頃だろう。142は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりを中心とするタタキ（3条/cm）だが、器面の剥離が著しく残存状況は悪い。底部外面は平底でタタキを施し、体部外面のタタキに先行して施されたように見える。体部内面は、底部に板状工具の静止痕跡が見られ、底部付近にはハケが残る。器壁は図上では薄いものの、剥離の影響が多分にある。底部の突出は見られないが、底部外面のタタキからは、平底志向のようである。胴部最大径と口径がほぼ同様であり、庄内式初頭頃か。143の体部外面は水平～右上がりのタタキ（3条/cm）だが、器面の剥離が著しく、残存状況は悪い。底部は平底でタタキを施す。142と異なり、複数回角度を変えてタタキを施しているが、体部外面のタタキに先行するのは同様である。体部内面はハケ。142同様、庄内式初頭頃か。144の外面は右上がりのタタキ（3条/cm）で、胴部最大径以下の鉢状部分で比較的明瞭に残存するが、これ以上での残存状況は悪い。内面は底部にクモノ巣状のハケメが見られるが、全面的に剥離が著しくハケが良好に観察できない。ただし、工具の擦痕が胴部各所に見られ、ハケ調整と考えられる。平底の底部は弱く突出気味で、球形化もあまり進んでいない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃だろう。145は口縁fか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は残存部分が小さくはっきりとはしないが、タタキと思われる。体部内面はナデだろう。なお、頸部には146同様の凹凸が見られる。出土地区も同じであり、胎土も類似することから、同一個体の可能性が考えられる。146は口縁fか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。体部内面はナデだろう。なお、頸部外面には約1cm間隔に0.5cm程の隅丸方形の窪みが見られる。凸部分がやや幅広であり縦方向のタタキ痕跡とも考えたが、凸部分は短い間隔で連続せず、タタキとは考えにくい。このことから、指押さえと判断したが、凹部分は狭く、棒状の工具によるものとも考えられ、接合部分の押さえ調整痕跡だろう。145とも、弥生時代後期後葉～庄内式前半頃か。147の外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は大部分が剥離しているが、底部付近

に板状工具痕が見られ、ハケだろう。底部は比較的明瞭に突出し、底部外面はドーナツ底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**148**の体部外面は水平～やや右上がりのタタキ（3条/cm）。底部外面は平底で、ヘラ状工具による沈線が施される。内面は剥離のため調整不明。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**149**の外面はタタキ（3条/cm）で、底部付近には一部右下がりのものも見られるが、概ね水平～右上がりである。内面は、ほとんど剥離しているが、底部にはわずかにハケが残る。底部は平底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**150**は内外面とも剥離のため、調整が十分には観察できないが、外面は水平やや右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は、わずかにハケが残る。底部外面の中央は弱く窪むが、明瞭な底部輪台技法ではない。底部はほとんど突出しない。平底。庄内式併行期か。**151**の外面は水平～右上がりのタタキ（3.5条/cm）。内面は剥離のため調整不明で、工具痕も観察できない。平底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**152**の体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面は剥離のため調整不明。底部の突出はさほど明瞭ではない。平底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃だろう。**153**の外面底部付近に右上がりのタタキ（3条/cm）が明瞭に見られるが、胴～肩部にかけては、剥離のため調整不明で、胴部最大径付近にわずかに右上がりのタタキと思われる痕跡が見られる程度である。内面は大部分が剥離のため、調整不明だが、器面が残る部分でもハケ目は見られず、ナデだろう。体部は比較的球形化しているが、明瞭に底部へ突出する。庄内式初頭頃か。

154～165は鉢で、内**161・165**は有孔鉢。**154・155**は中形鉢。**154**は、口縁の一部が片口状を呈する。口縁部外面はヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。体部上位はタタキ目が比較的良好に残存するが、下位の残存度は悪く、タタキ後ナデの可能性が考えられる。内面はヨコミガキ。やや下膨れ気味であり、弥生時代後期末～庄内式初頭頃だろう。**155**の口縁部外面はヨコナデだが、これ以外の調整は不明。体部の形状からは、比較的浅い形態と思われる。器面の剥離が著しく、十分に調整は観察できないが、タタキ目は確認できない。弥生時代後期後葉～庄内式頃と思われる。**156**は台付鉢。内外面とも調整不明。外面、口縁端部には、櫛状工具による刺突が密に施される。体部にはおそらく2段に廉状文が施された後、棒状浮文が付される。廉状文の単位は、摩滅のため不明である。棒状浮文は断面三角形で、5条を一単位としている。生駒山西麓産胎土で、弥生時代中期後葉、河内IV-2様式頃。**157**は小形鉢C b。外面は右上がりのタタキ（2条/cm）で、口縁端部はヨコナデ。内面はナデ。外面のタタキは、口縁端部付近まで見られる。浅手で、横広の器形である。頸部の屈曲は比較的明瞭で、口縁部はやや内湾ぎみながら直線的に伸び、端部はごく弱く面を持つ。弥生時代後期末前後頃だろう。**158**は台付鉢か。外面は、脚部、体部ともに右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面はいずれもナデと思われるが、剥離が著しく調整不明である。弥生時代後期後葉～庄内式頃だろう。**159・160、162～164**は小形鉢（小形鉢D 1）。**159**の口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキだが、残存状況は悪い。内面は底部付近に板状工具の痕跡が見られ、ハケと思われる。しかし、剥離を加味しても、調整の残存状況のやや良好な部分でもハケが良好には観察できないことから、ハケ後ナデの可能性がある。口縁部は短く、屈曲は鈍い。底部も小さく、庄内式中頃。**160**は外面から内面口縁部にかけて、剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は調整不明。内面はハケだが、良好に観察できるのは下部のみで、上半は板状工具の擦痕が見られる程度である。頸部の屈曲は、外面は鈍いが、内面は比較的明瞭で、弱く稜を持つ。底部は狭いながらも残る。庄内式中頃。**161**は有孔鉢。外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面はナデだろう。底部はあまり突出しない。弥生時代後期中葉～庄内式頃。**162**の口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面はタタキで、底

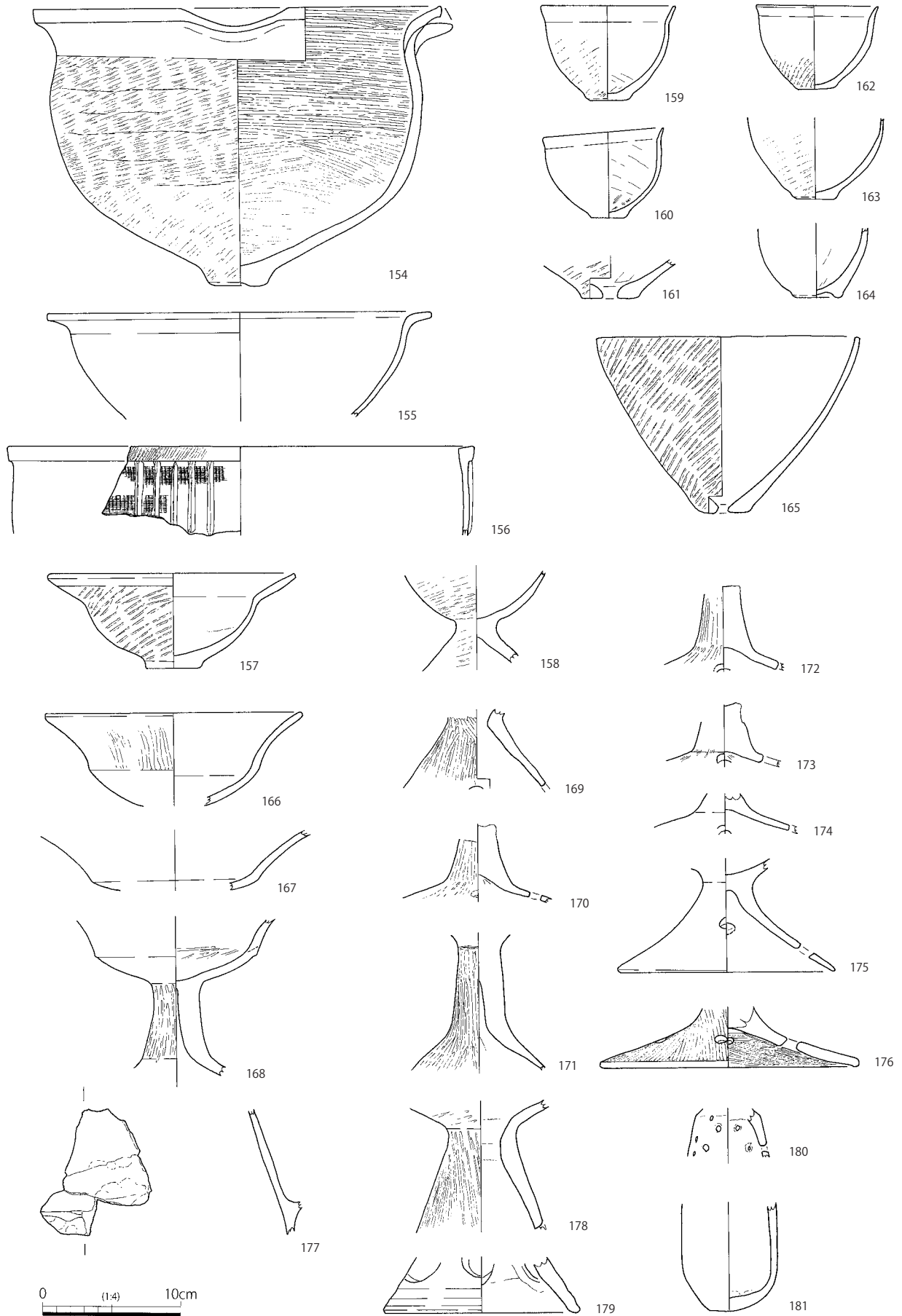


図40 溝出土遺物(5)(64溝西部・上層上部4)

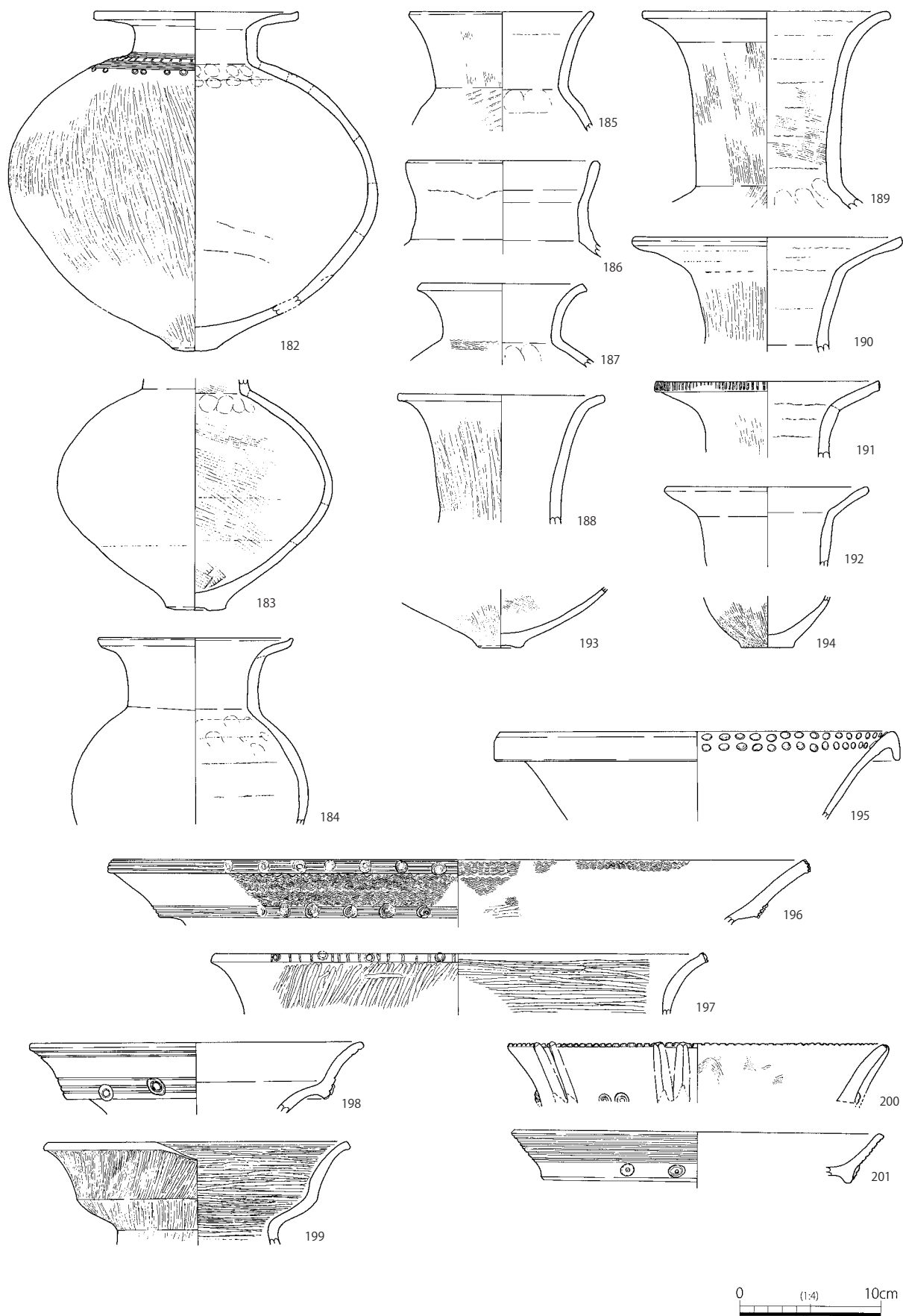


图41 溝出土遺物(6)(64溝西部・上層下部1)

部付近には明瞭に痕跡が残るが、上位は不明瞭である。摩滅のためもあるが、タタキ後ナデの可能性もある。内面はナデ。160と類似するが、体部の張りが弱い。庄内式中頃。163の外面は右上がりのタタキ（2条/cm）だが、残存状況は悪い。器面が剥離していることもあるが、タタキ後ナデの可能性もある。内面は剥離のため不明。160同様、庄内式中頃だろう。164は内外面とも摩滅が著しいが、外面はナデ、内面はハケと思われる。外面はタタキを施していた可能性もあるが、その痕跡は十分に観察できない。他の小形鉢と異なり、底部が明瞭に窪む。庄内式頃だろう。165は有孔鉢B a。外面は右上がりのタタキで、タタキ工具の接する面積がやや広めに思える。内面は剥離のため調整不明。口縁端部は特にナデなどが施されてなく、破断面にも思えるが、概ね水平であることから口縁と判断した。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃だろう。

166～168・170～176は高坏。166は有稜高坏A 4。内外面とも剥離が著しい。坏部外面の口縁部側は、器面の残存状況がよく、タテミガキが観察できる。坏底部外面は調整不明だが、おそらくミガキだろう。内面は調整不明である。比較的深い坏で、坏底部から口縁が外反し、比較的長く伸びる。端部は丸く収める。弥生時代後期末頃。167は有稜高坏A。内外面とも摩滅のため調整不明。坏底部は比較的浅い。口縁端部まで残存しないが、口縁は比較的長く、直線的である。庄内式前半頃だろう。168は有稜高坏A。坏部外面は剥離のため調整不明、内面はわずかに横・斜め方向のミガキが観察できるがやはり大部分が剥離のため不明瞭である。脚部外面はタテミガキが明瞭に観察でき、内面はナデだろう。坏部はやや深い。脚裾部への屈曲はやや鈍いが、屈曲は確認でき、弥生時代後期末頃か。169は小形器台か。外面はタテミガキ。内面は付着物のため調整が十分に観察できないのだが、ナデだろうか。脚部に穿孔が見られる。残存するのは1つの半分弱程度で、残存部位の都合もあり方向は不明だが、4方ではない。高坏の可能性もあるが、脚柱部がなくハの字状に開く点から器台と判断した。ただし、小形器台にしては分厚い。小形器台Aと思われるが、下田遺跡などの例では、短いながらも柱部が存在し、本例とは異なる。庄内式前半頃だろう。170の外面はタテミガキ。脚部内面は板状工具の静止痕が見られ、ハケだろう。裾部には穿孔がわずかに残るが、方向は不明。脚柱部は中実で、裾部への屈曲は比較的シャープだが、明瞭に稜を持つものではない。また、残存部分上端は、坏部へ挿入された部分で、六条山遺跡分類（寺沢1980）でいう挿入付加法である。庄内式前半頃。171の脚部外面はタテミガキ。内面、坏部は付着物のため不明で、脚部はナデだろう。脚柱～裾部への屈曲は不明瞭。弥生時代後期後葉頃。172の外面はタテミガキ。内面は脚部、坏部ともにナデだろう。裾部には穿孔がわずかに残るが、方向は不明。170同様、脚柱部は中実で、裾部への屈曲は比較的シャープだが、明瞭に稜を持つものではない。また、残存部分上端は、坏部へ挿入された部分で、挿入付加法による。庄内式前半頃。173は外面脚柱部～裾部屈曲部以下にハケが観察できる。脚柱部ではハケは観察できず、ハケ後ミガキかもしれないが、十分に観察できない。内面、脚部天井部分に板状工具痕が多数見られ、ハケだろう。坏部内面もわずかに残存し、ミガキと思われるが、十分には観察できない。裾部には穿孔がわずかに見られ、4方向と思われるが、不明確である。脚柱部は中実であり、庄内式。174は椀形高坏B。内外面とも剥離のため調整不明。脚裾部には穿孔がわずかに残り、4方向と推測される。脚部の屈曲は弱いが、比較的裾部が長いと推測できる。脚柱部が短く、中実である点から、庄内式初頭頃と思われる。175はおそらく椀形高坏A。剥離のため内外面とも調整不明。脚部には穿孔が見られる。残存部分で上段に2方向、下段に2方向で、それぞれ互い違いの位置である。ただし、上下2段に4方向に穿孔されていたのか、互い違いに4方向に穿孔されていたのかは不明。脚柱～裾部への屈曲は見られないが、短いなが

らも脚柱部が存在する。弥生時代後期末前後。176はおそらく椀形高坏B。内外面ともミガキ。裾部から脚柱部への屈曲は不明瞭だが。脚柱部は中実である。裾部も長く、比較的発展した段階で、庄内式。

177は手焙形土器か。覆部と推測する。調整は剥離のため内外面とも不明。凸帯部分の残存度も低い。傾きにもいささかの不安がある。弥生時代後期後葉～庄内式中頃。

178は器台か。外面、屈曲より上位は横方向、下位は縦方向の、それぞれミガキ。内面は剥離のため大部分の調整が不明だが、ナデと思われる。残存部端には穿孔が見られるが、1つが確認できるのみで、方向など不明。高坏の坏底部、円盤充填が剥離したものの可能性もあるが、現状で剥離痕は観察できない。弥生時代後期後葉頃か。179は器台か。外面、脚端部には凹線が2条施される。これ以外の調整は、器面の剥離のため十分に観察できないが、ナデだろう。比較的大形の穿孔（復元径約3.5cm）が施され、残存部位で2個が確認でき、等間隔であれば、6個と推測される。弥生時代後期前葉頃か。

180は穿孔が多く見られる高坏の脚と推測した。内外面とも剥離のため調整不明。穿孔がランダムに施される。天地逆で鉢の可能性も考えられる。弥生時代中期後葉頃か。

181は蛸壺。外面は器面の剥離のため調整不明。内面は底部付近に指頭圧痕が見られ、ナデと思われる。残存部位では胴部上位に見られるはずの穿孔は見られない。ごく弱いながら平底状だが、蛸壺Bとしてよいと思われる。庄内式だろう。

以上、64溝西部上層上部出土遺物は、弥生時代中期中葉～庄内式までの遺物を含み、弥生時代後期後葉～庄内式前半の遺物が上層上部の7割程度である。なお、弥生時代中期後葉と思われる遺物も一定量含む。

182～233は上層下部出土。

182～201は壺。182は広口壺か。口縁部、頸部は、内外面とも摩滅のため調整不明。体部外面はタテミガキだが、残存状況は良くない。内面は頸部付近に指頭圧痕が見られ、以下体部上位はナデと思われる。体部最大径以下は、板状工具と思われる痕跡が横・斜め方向に見られ、ハケだろうか。外面頸部には、5条の櫛描直線文が2段施され、その後両直線文間に刺突文が施される。原体はハケに用いる工具と同様のものによると思われるが、直線文を施した工具と同一かは、器面の剥離、摩滅のため十分に観察できない。また、下段の直線文の直下からやや直線文にかかる部分には、竹管文が施される。2個を一単位にしていると推測されるが、やや近接しているものもあり、また破損も見られるため、確実ではない。体部～頸部がほぼ垂直に立ち上がり、さらに口縁部が垂直に近く屈曲する。口縁端部内面は弱く窪んでおり、これより上に二重口縁部が付されていた可能性も考えられる。口縁部の屈曲、頸部外面の加飾からも、この可能性は考えられる。庄内式。183は壺。外面は剥離のため調整不明。内面は左上がりのハケが見られるが剥離が著しい。頸部下には指頭圧痕が残る。体部下には明瞭な接合痕があり、分割成形であることがわかる。底部は底部輪台技法による。頸部の屈曲は比較的鋭い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。184は広口壺（広口壺B）。内外面とも剥離のため調整不明。体部内面には接合痕が約2cm間隔で見られる。体部最大径部分にも接合痕が観察できるが十分にナデ調整が行われたのか、ごく弱く見られる程度で、これより上の肩部内面で明瞭に観察できる。また、同部分には指頭圧痕と思われる凹凸が確認できるが、不明瞭である。体部と頸部境の屈曲部からやや直線的に頸部が立ち上がり、比較的明瞭に口縁部が屈曲し、口縁端部はつまみ上げる。弥生時代後期後葉頃か。185は長頸壺。外面、口縁端部はヨコナデ、以下はタテハケと思われるが、不明瞭である。体部は右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面は剥離のため外面以上に調整が観察しにくい。ナデだろう。体部上位には指頭圧痕が見

られる。また、内面には数箇所に接合痕が見られ、成形には約2cm幅の粘土紐を使用したと推測される。弥生後期後葉頃。**186**は長頸壺（長頸壺B）もしくは短頸壺か。外面はナデと思われるが、剥離のため不明確である。内面は口縁部がヨコナデだが、以下の調整ははっきりとしない。ナデだろうか。頸部～口縁部への弱い屈曲部分には、外面に接合痕が残る。一部下へ垂れ下がるように見えるが、接合後に下方向へナデつけたのだろうか。内面の頸部から口縁部への屈曲は比較的明瞭である。弥生時代後期中～後葉頃。**187**は広口壺（広口壺A）。内外面とも剥離のため調整不明。頸部屈曲部直下外面には5条の波状文が施されるが、残存部以内でも剥離している部分では観察できず、全周するかは不明。弥生時代後期～庄内式頃。**188**は長頸壺か。広口長頸壺とすべきだろうか。外面、口縁部はヨコナデと思われるが、良好に観察できない。頸部はタテミガキだが、上位がどこまで至るのかは観察できない。内面は剥離のため調整不明である。弥生時代後期。**189**は広口長頸壺。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、剥離のため不明瞭。頸部は外面がタテハケで、内面は横方向を基調としたやや左上がりのハケである。体部は外面がタテハケと思われるが、残存部位が小さくはっきりとせず、ミガキの可能性もある。内面は指頭圧痕が見られ、指によるナデであろう。頸部内面には約2cm間隔で、接合痕が見られる。頸部屈曲部には接合痕が観察できないが、頸部最下段の接合痕は最も明瞭で、これより上位にハケ調整が見られる。内外面ともハケは口縁部側では剥離もあり明瞭ではない。内面のハケは、単位が短い一方、外面のハケは長く、頸部屈曲部から口縁部へ向かい一気に施されている。口縁部のヨコナデは、剥離のため不明瞭だが、ハケ後に施されたと思われる。ちょうど口縁部の外反がやや強くなる部分までヨコナデが及んでいるようで、ヨコナデによりさらに外反度合いを高めたのかもしれない。ヨコナデ時にも比較的可塑性があったのだろう。なお、口縁端部は丸く収める。弥生時代後期後葉頃。**190**は広口壺だが、広口長頸壺とすべきか。外面、頸部にはタテミガキが見られるが、これ以外の内外面の調整は不明。なお、接合痕が、頸部中位、頸部～口縁部への屈曲部、口縁部にそれぞれに見られる。頸部は逆ハの字状に開き、口縁部へと屈曲する。屈曲は極めて明瞭というわけではない。口縁端部の拡張は見られず、端部外面は摩滅もあってか丸みを帯びる。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**191・192**は広口壺（広口壺Bか）。**191**の外面、頸部はタテミガキだが、これ以外の調整は不明。口縁端部には約0.3cmピッチで刻み目が施される。内面も調整不明で、頸部に接合痕が約1.5cm間隔で見られる部分がある。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**192**は内外面とも剥離のため調整不明。頸部は逆ハの字状に立ち上がり、頸部から口縁部への屈曲はやや鈍い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**193**の外面はタテミガキ、内面は左上がり方向を基調とするハケだが、いずれも剥離が著しい。底部外面はナデ調整と思われるが、弱く窪み底状である。底部から体部の広がりから、球形化が進行していることが予想でき、庄内式頃だろう。**194**は体部外面が縦方向を基調とした細かいミガキ。内面は剥離のため不明瞭ながらナデだろう。外面調整が丁寧なミガキであり壺と推測したが、形状からは鉢の可能性も考えられる。弥生時代後期後葉～庄内式か。**195**は広口壺。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部内面には円形浮文が2段に0.2～0.5cm程の間隔をあけて付される。口縁端部外面には廉状文が施されていたのかもしれないが、観察できない。生駒山西麓産胎土で、弥生時代中期後葉。**196**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B）。残存部位が小さく、口径に少々不安があるが、大形であることは間違いない。内外面ともヨコナデと思われるが、その後の装飾と器面の剥離のため不明瞭である。外面は、口縁端部と一次口縁から二次口縁への屈曲部分に3条の沈線を施し、その後二次口縁部分に3段に分けて10条ほどの原体で、庄内式に良く見られる、山形を呈する櫛描波状文を施す。上から下の順で施文したと思われる。櫛描波状文は口縁端部から沈線

の間に概ね収まるが、一部沈線をかすめる。その後、一次口縁から二次口縁への屈曲部分の沈線上からやや波状文にかかる部分に、竹管文を施した円形浮文が付される。浮文は、2.2～2.8 cm間隔で付される。口縁端部の浮文も同様に竹管文を施したもののだが、波状文との前後関係は切り合いがなく不明ではある。しかし、屈曲部分の浮文と同時期に付されたのだろう。内面もおそらく外面の原体と同じもので波状文が施されているが、剥離のため一部分しか、観察できない。一次口縁部分にはヨコミガキが施されているが、波状文との切り合いは観察できない。庄内式。**197**の口縁部外面は、縦～斜め方向のミガキで、一部にヨコミガキが見られる。内面はヨコミガキ。口縁端部には、0.5～1 cm間隔に刻み目が施された後、3.8～5 cm間隔に円形浮文が付される。大形鉢にも思えるが、口縁端部の装飾からは、その可能性は考えにくい。また、二重口縁壺であれば、残存部分下端の破断面が平坦であることが多いと思うが、そのような状況でもない。これらから、大形の広口壺の可能性が考えられるが、断定しがたい。庄内式か。**198～201**は二重口縁壺。**198**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B a）。内外面とも調整不明。口縁部、二重口縁側の外面の上端と下端付近には、沈線が見られる。上側が2条、下側が3条だが、剥離が著しく、上側についても3条の可能性はある。なお、両者の間に沈線が施されていたようには見えない。下側の沈線には、その後円形浮文が付され、竹管文が施されている。現状で2点のみが残存し、両者の間隔は約4 cmである。さほど加飾度合いは強くない。弥生時代後期末～庄内式。**199**は外面縦方向、内面横方向のミガキ。口縁端部は器面が剥離するが、それ以外は比較的良好に器面が残存し、調整も観察できる。頸部～口縁部、口縁部一次口縁～二次口縁への屈曲は、やや鈍い。口縁部は一部片口状を呈するが、全体が残存せず形状は不明である。庄内式。**200**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B）。内外面とも剥離のため調整は不明だが、外面は縦方向の幅1 cm弱の断面三角形の凸帯が付される。2個を一単位とし、2箇所分が現存する。約45度間隔で、8方向と推測される。また、凸帯間には竹管文を施した円形浮文が2個一単位で付され、同様に2箇所分が現存し、8方向と復元できる。端部外面には0.5～0.7 cm間隔で刻み目が施される。内面は波状文がわずかに観察できる。最低5条は確認できるが、施文原体の条数や施文が2段なのか、といった点は不明である。なお、残存部分下端の破断面は、擬口縁状で平坦な面状である。このため、二次口縁の長さは、現存長＋一次口縁の粘土の厚み（約0.8 cm程度か）であろう。庄内式と思われるが、縦凸帯や口縁端部の刻み目はやや珍しいように思える。**201**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B）。ただし、加飾度はさほど強くない。内外面とも剥離のため調整不明瞭だが、内外面ともナデだろう。口縁部外面には8条の櫛描直線文が施され、その下部には竹管文を施した円形浮文が付され、2個が現存する。庄内式。

202～217は甕で、217を除き典型的な弥生形甕Aである。器高を基準とした分類に従うと、**202**がA b、**203・204**がA cで**205～209・212**もこの可能性があり、**210・211**がA dの可能性があり、**215**がA eの可能性がある。**202**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面はナデだろう。頸部の屈曲は比較的明瞭で、端部は丸く収める。体部は胴長気味で、球形度は低い。弥生時代後期末～庄内式。**203**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりの比較的細かいタタキ（3.5条/cm）だが、残存状況はあまり良くない。接合痕が観察できる。内面も、十分に調整が観察できないが、板状工具痕が多数見られ、ハケだろう。胴下部には外側からの焼成後穿孔が見られる。底部の突出はほとんど見られないが、球形化はさほど進んでいない。弥生時代後期末～庄内式初頭頃。**204**は口縁h。体部外面は左上がりのタタキ（3条/cm）だが、頸部までは施されていない。内面は右上がりのハケが体部中位以上を中心に見られる。中位以下底部に

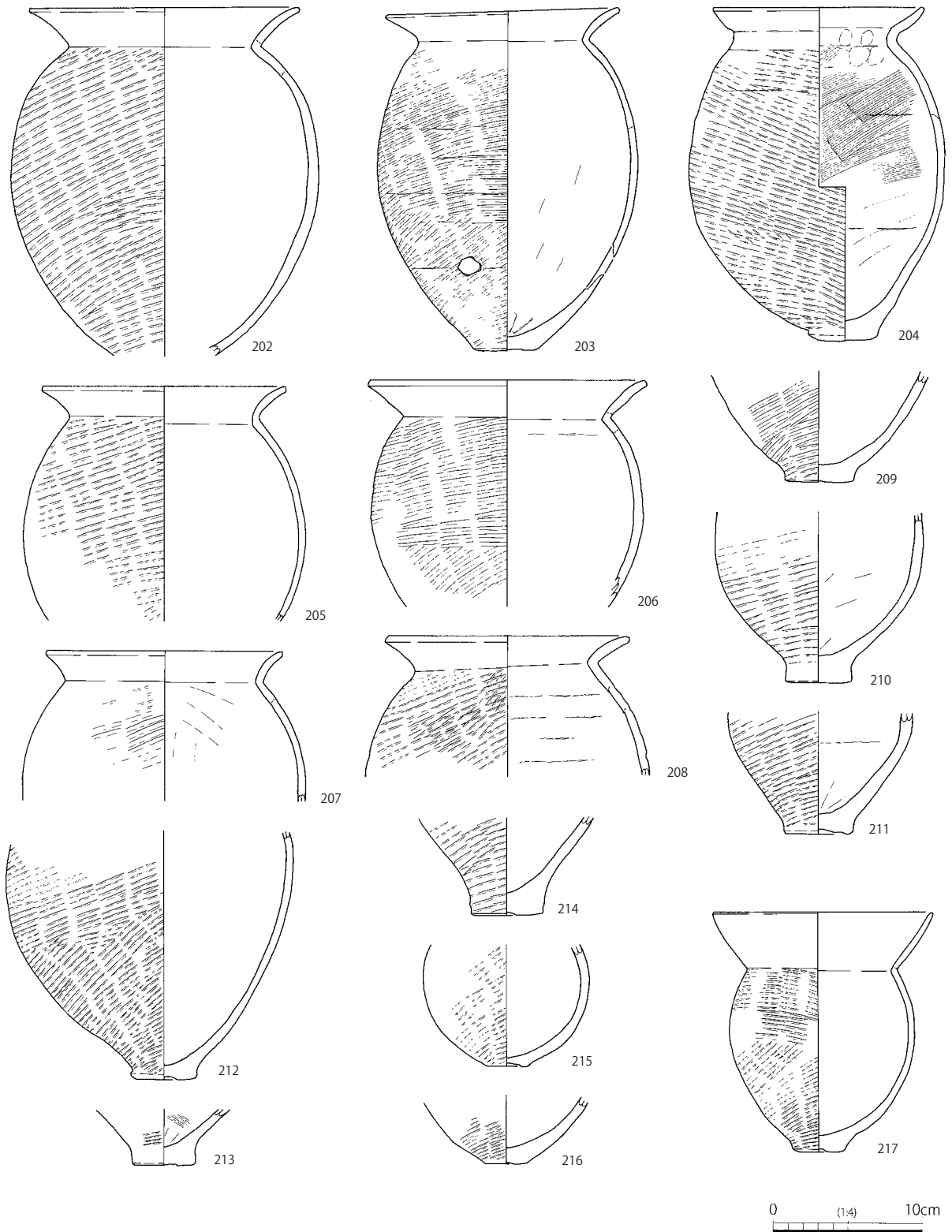


図42 溝出土遺物(7)(64溝西部・上層下部2)

かけては、明瞭なハケ目は見られないものの、板状工具痕が見られ、同様にハケと思われるが、ナデを後に施したとも考えられる。球形化はあまり進んでいない。頸部やや下までを成形し、タタキを施した後、口縁部用の粘土をすぐには接がず、一段頸部まで積み上げた後、口縁部を接いでいる。内面にはこの際の指頭圧痕が見られる。外面のタタキ、内面のハケともに、今回の調査で出土した資料で見られる多数のものと同方向が異なり、利き手が異なる作り手によるものだろうか。また、今回の出土遺物には数少ない、

ほぼ完形に近い資料であり、焼成時の状況が黒斑から、埋没時の状況が内面の付着物から、それぞれ窺うことができる資料である。弥生時代後期末前後頃だろう。**205**は口縁hか。口縁部はヨコナデと思われるが、剥離のため不明瞭。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）、内面は剥離のため調整不明。弥生時代後期末～庄内式初頭頃。**206**は口縁gか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面はナデで、頸部下にのみ接合痕が見られる。頸部の屈曲は比較的鋭い。口縁端部は弱く面を持つため、口縁gとしたが、口縁hかもしれない。弥生時代後期末～庄内式初頭頃。**207**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、剥離のため不明。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）だが、剥離が著しく残存状況は悪い。体部内面は工具痕が斜め・縦方向にわずかに見られ、ハケと思われる。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**208**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）、内面はナデ。なお、体部内面には接合痕が約1.6cm間隔で残る。頸部の屈曲は比較的鋭い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**209**の体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面は剥離のため不明瞭ながらナデだろう。底部外面はナデで、中央部分がごく弱く窪む。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**210**の体部外面は水平～右上がりのタタキ（2条/cm）だが、右上がりの角度は弱く水平ぎみである。内面のハケは十分に観察できないものの、板状工具の静止痕が底部のみならず胴部にも多数残存し、ハケだろう。底部外面はハケ後ナデかミガキと思われ、水平方向の工具痕が見られ、丁寧な仕上げである。底部が明瞭に突出し、分厚く、体部形態も胴長だが、下膨れ気味であり弥生時代後期末～庄内初頭頃だろう。**211**は鉢の可能性もあるが、残存部分上端は破損しており、さらに上へ器形は伸びると推定されることから、甕としておく。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。体部内面は底部付近に板状工具の静止痕が多数見られ、胴部にもわずかにハケ目が観察でき、ハケだろう。なお、内面には接合痕が見られる。いわゆる分割成形の痕跡で、鉢状部分を成形後、一段粘土紐を積み上げた箇所破損しているようである。底部はナデ調整で、中央部分が窪むが、明瞭な窪み底ではない。弥生時代後期後葉頃。**212**の外面は右上がりのタタキ（3.5条/cm）。内面は、剥離のため調整不明。底部付近は赤変し、胴部最大径付近には煤が弱く付着している。体部はややひしゃげており、残存部位の小ささから全体を十分には想定しにくい、比較的球形化が進んでありようにも見える。弥生時代後期末前後。**213**の体部外面は右上がりのタタキと思われるが、剥離が著しくほとんど観察できない。内面はハケだが、やはり剥離が著しい。底部外面はナデと思われる。中央部分がごく弱く窪むが明瞭ではなく、窪み部分は明瞭な調整は見られない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**214**の体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。底部外面と内面はナデと思われる。内面は、鉄分などの付着物が多く、良好に観察できない。底部外面は中央部分が窪むが不定形で、底部輪台技法のようには見えない。球形化も進んでなく、弥生時代後期中～後葉頃だろう。**215**の体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面は底部に板状工具の静止痕が見られ、ハケだろう。底部外面は明瞭な底部輪台技法で、底部の突出はない。球形化が進んでおり、庄内式中頃か。**216**は鉢の可能性も考えられる。体部外面は右上がりのタタキ（4条/cm）だが、残存部位上部では良好に観察できない。内面は剥離のため調整不明瞭だがナデか。底部外面は底部輪台技法で、突出は見られない。球形度合いから、庄内式中頃だろうか。**217**は通常の甕にしては口縁部が長い。製塩土器Dの初現的形態とするにもやや無理があるか。全体的に器面の剥離が著しく、調整不明瞭な箇所が多い。体部外面は概ね最大径以下が右上がりのタタキ、最大径以上が水平方向からやや右下がりのタタキである（いずれも3.5条/cm）。体部内面は、わずかに器面が残る部分で、ハケと思える痕跡が見られる。底部外面には底部輪台技法が見られる。口縁

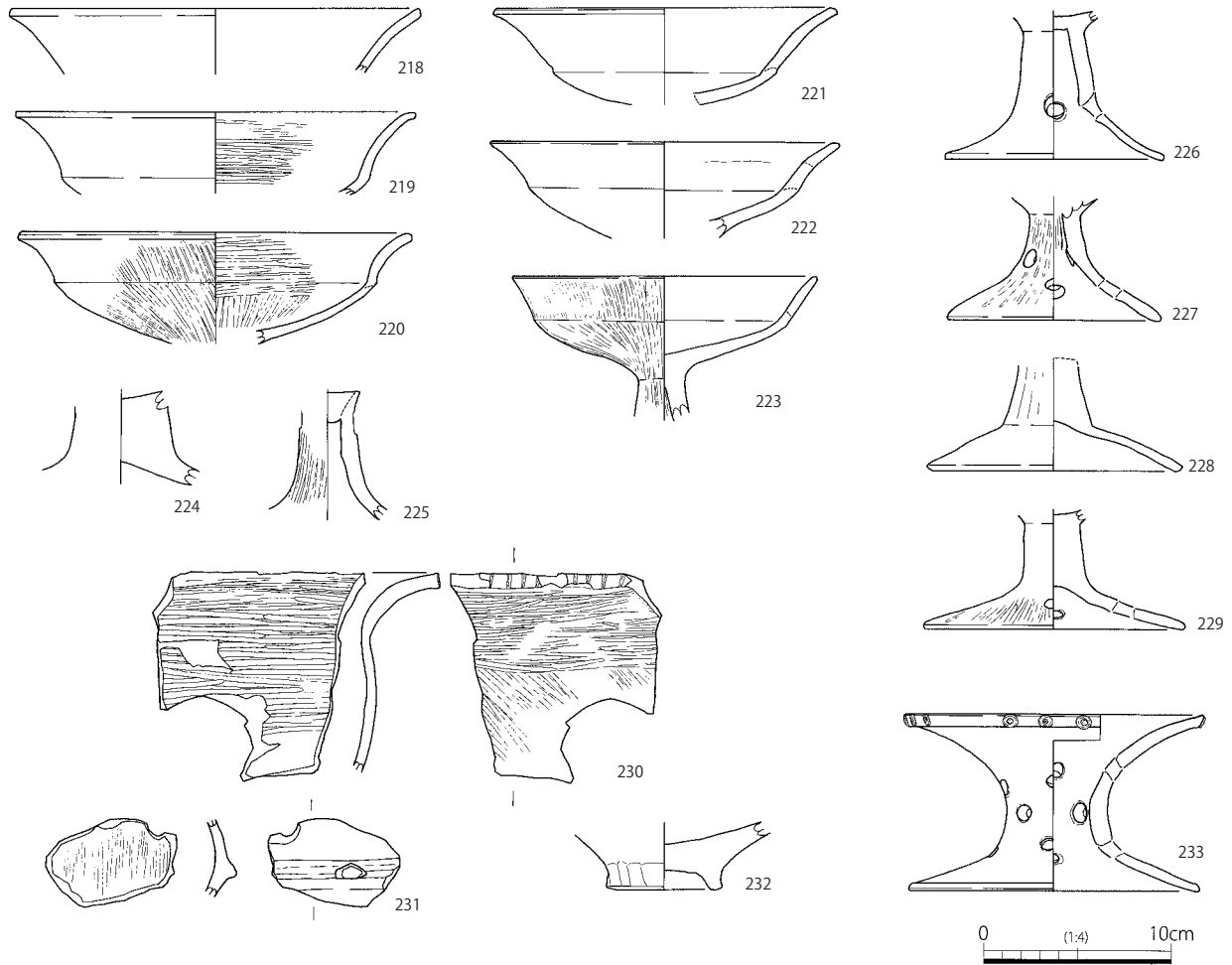


図43 溝出土遺物(8)(64溝西部・上層下部3)

を考慮せず、体部形態のみからは、庄内式初頭頃と考えられる。

218～229は高坏。**218～223**は有稜高坏A。**218**はA4か。内外面とも剥離のため調整不明。残存部位下端は坏底部との接合面で、平坦な擬口縁である。口縁端部は弱く面を持つが、概ね丸く収める。弥生時代後期末頃。**219**はA4。外面は剥離のため調整不明。内面はヨコミガキ。坏部形態から、弥生時代後期末頃と思われる。**220**はA3か。外面はタテミガキで、内面は坏底部側のタテミガキ後に坏口縁部側のヨコミガキ。口縁部は比較的短く、外反し、端部は丸い。弥生時代後期後葉。**221**はA4。内外面とも剥離のため調整不明。坏底部～口縁部への屈曲は比較的明瞭。口縁部は比較的明瞭に外反し、長めである。弥生時代後期末頃。**222**はA3か。内外面とも剥離のため調整不明。坏底部から口縁部への屈曲は比較的明瞭。口縁部は弱く外反するが、短い。弥生時代後期後葉。**223**はAのいずれかは不明。外面は坏・脚部ともタテミガキ。坏部内面は剥離のため調整不明。脚柱部内面はシボリ目が残る。坏部の底部～口縁部への屈曲はやや鈍く、口縁部は明瞭に外反しない。脚柱部から坏へは刺突痕が見られる。弥生時代後期後葉頃か。**224**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部から裾部への屈曲は鈍い。脚柱部は中実である。庄内式。**225**は外面タテミガキで、内面はナデだろう。外面上部は弱く剥離が見られるが、本来坏部が成形されていた箇所にあたる。上端部の破損部では、坏底部の粘土充填が良好に観察できる。六条山遺跡分類(寺沢1980)の円板充填法。弥生時代後期後葉頃か。**226**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部下端には4方向の穿孔が施される。脚柱部～裾部へは、ごく鈍く屈曲しているようにも見える。弥生時代後期後葉。**227**は脚部外面ハケ後タテミガキ。わずかに残る坏部の

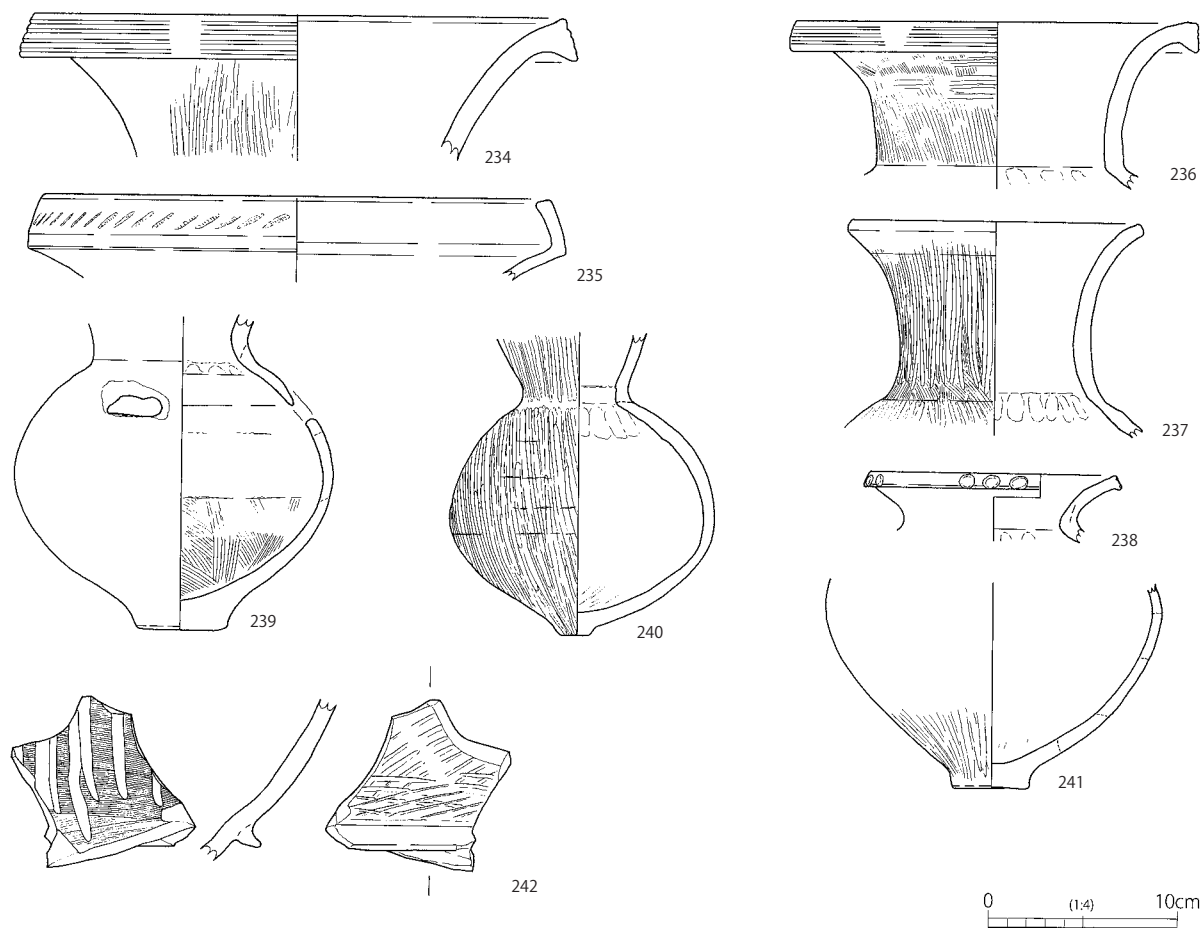


図44 溝出土遺物(9)(64溝西部・下層1)

調整は不明瞭だが、ミガキだろう。内面はナデと思われ、脚柱部にはわずかにシボリ目が残る。脚部の穿孔は2段で、上側脚柱部の穿孔は2方向で、下側裾部の穿孔は4方向に復元できる。弥生時代後期後葉。**228**は脚柱部外面にタテミガキがわずかに観察できる。確認できる原体幅は広めに見えるが判然としない。脚裾部の調整は不明。内面には板状工具の静止痕跡が見られ、ハケだろう。残存部位で裾部の穿孔は見られない。脚柱部と裾部の屈曲は比較的明瞭であり、庄内式前半。**229**は全体的に摩滅が著しい。外面、脚柱部の調整は不明。裾部は縦方向を基調としたミガキが施される。脚部内面はナデだろう。裾部には4方向に穿孔が施される。脚柱部は中実。脚柱部から裾部への屈曲はあまりシャープではない。庄内式前半。

230は鉢で、おそらく大形だろう。外面は口縁部がヨコミガキで、以下体部はナナメミガキ。内面はヨコミガキ。いずれも密に施される。口縁端部外面には刻み目が見られる。良好には観察できないのだが、ヘラ状の工具によるものと思われる。体部最大径は口径以下であり、弥生時代後期後半頃。

231は手焙形土器。鉢部分下部の、凸帯が付されている箇所破片と思われる。内外面ともナデと思われるが、内面はハケの可能性もある。弥生時代後期末～庄内式中頃。**232**は鉢か。内外面ともナデと思われるが、不明瞭である。高台を貼り付けていると思われ、同部分外面には指頭圧痕が見られる。弥生時代後期か。**233**は器台。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部には3個を一単位とした円形浮文が5方向に付される。各円形浮文には竹管文が施される。筒部には3段に穿孔が施される。いずれも4方向で、1段目と3段目がほぼ同じ位置、2段目はその間の中間である。器高が10cm弱と比較的小ぶりだが、いわゆる小形器台サイズからは程遠い。筒部に穿孔が多数見られ、口縁端部に装飾も

見られることから、弥生時代後期末まで下ることはないと思われる。弥生時代後期中葉～後葉頃だろう。

以上、64 溝西部上層下部出土遺物は、弥生時代後期後葉～庄内式前半までの遺物がほとんどである。

234～259 は下層出土。

234～241 は壺。**234** は広口壺。口縁端部には4条の凹線が施される。頸部外面はタテミガキだが、内面は剥離のため調整不明。口縁端部は垂下し拡張する。弥生時代後期中～後葉頃。**235** は段状口縁壺。内外面とも摩滅のため調整不明だが、口縁部外面下端には、弱く窪みが見られ、その上側には櫛状工具による刺突が見られる。いずれも良好には残存しない。口縁部、段状部分の屈曲は明瞭で、口縁端部はやや内傾気味の明瞭な面を持つ。弥生時代中期後葉頃。**236～238** は広口壺。**236** は広口壺C。外面、口縁部はヨコナデで、頸部は縦・斜め方向ハケ後ミガキだが、器面の剥離が著しく、ミガキは良好に残存せず、頸部中位でわずかに横方向に見られる程度である。内面は外面以上に器面が剥離し、調整が十分に観察できないが、一部残る器面にはミガキが観察できる。体部は指頭圧痕が見られ、ナデだろう。口縁端部は下方に拡張し、外面には3条の沈線が施される。弥生時代後期中～後葉頃。**237** は広口壺A。外面、口縁部はヨコナデ。以下、頸部はタテミガキで、頸部屈曲部付近にはミガキ以前の縦・斜め方向ハケが見られる。体部はわずかに残存するのみだが、ミガキである。内面、口縁部～頸部は剥離のため調整不明。体部には指頭圧痕が見られる。体部～頸部への屈曲は比較的明瞭だが、頸部は逆ハの字状に開き、口縁部との境はない。口縁端部は比較的明瞭な面を持つ。弥生時代後期後葉頃か。**238** は広口壺A。口縁部は内外面ともナデで、上下に弱く拡張した口縁端部外面には3個を一単位とした竹管文が5方向に施される。体部内面には指頭圧痕が残り、ナデだろう。弥生時代後期後葉頃。**239** は頸部下段までしか残存しないため、正確な形式は不明だが、広口壺だろうか。外面は剥離のため調整不明。内面は、接合痕が見られ、特に下段の鉢状部分の接合痕は明瞭である。なお、この底部の鉢状部分には、ハケが明瞭に見られる。これより上部の胴部内面は、ハケ目は見られずナデだろうか。なお、頸部直下には指頭圧痕が見られる。胴部最大径は中位にある。なお、肩部には焼成後の内面からの穿孔が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**240** は細頸直口壺。外面は、頸部、体部共にタテミガキ。内面、頸部はヨコナデで、体部は肩部に指頭圧痕が残り、以下はナデだろう。ただし、底部付近には工具痕が見られ、ナデ以前にハケが行われていたと思われる。体部はやや下膨れ気味で、ごく小さいながら底部が残る。口縁部もやや内湾気味である。庄内式初頭。**241** は外面ミガキだが、底部付近以外は剥離のため不明な部分も多い。内面はナデと思われる。底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**242** は形式不明の土器。外面の上部は右上がりのタタキと思われる調整で、下端部はナデ、凸帯部分には貼付時のヨコナデが見られる。内面はハケの後に一部ナデが見られる。時期もよくわからない。

243～247 は弥生形甕。器高を基準とした分類に従うと、**243・245** がA cで、**244** もその可能性があり。**246・247** はA eだろう。**243** は口縁h。口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面はナデで、接合痕が残る。最大径が胴部上位にあり、肩が張る器形である。底部は上げ底。弥生時代後期後葉。**244** の外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はナデと思われる。体部は球形化しているが、底部は明瞭に突出する。外面がタタキ調整ではあるものの、頸部がやや締め過ぎのようにも見え、弥生時代後期後葉の長頸壺の可能性も考えられる。**245** は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面はタタキ(3条/cm)で、底部付近は右上がり、体部中位は右下がり気味～水平、体部上位の肩部は右上がりである。内面は上位にヨコハケが見られるが、これ以外は

剥離のため不明である。頸部の屈曲は比較的鋭く、口縁部は内湾気味で、端部は丸く収める。胴部最大径が中位よりやや上にあり、球形化も進んでいないことから、弥生時代後期末と思われる。**246**は外面タタキ（3条/cm）で、底部付近が水平～右上がり、中位が右下がり、中位～頸部にかけて水平～右上がりである。底部付近はタタキ後、縦方向にナデを施す。口縁部はわずかに残存するのみだが、残存部分までタタキが及び、その後ヨコナデを施す。体部内面はナデと思われ、口縁部はヨコハケのようだが、強いヨコナデかもしれない。底部は、外面にナデを施すこともあり、明瞭に突出する。底部外面はやや上げ底気味である。庄内式初頭頃だろう。**247**は外面右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面は剥離のため調整不明。体部は比較的球形化しているが、底部は明瞭に突出する。弥生時代後期末頃。

248～250は鉢。**248**は中形鉢。全体的に剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデと思われる。体部外面はハケ後ヨコミガキで、ハケは頸部付近にわずかに見られる。内面は調整がほとんど観察できないが、ハケ後ミガキだろう。浅めの鉢で、口縁部が比較的強く横方向に伸び、口縁端部が摘まれる。底部の突出も明瞭であり、弥生時代後期後葉～末頃。**249**は小形鉢C a。外面はタタキ（3条/cm）で、右上がりを基調とするが、一部縦に近いタタキも見られ、口縁端部まで及ぶ。内面はハケで、頸部まで施した後、口縁部にも施しているが、口縁部のハケは残存状況が悪い。ハケ後に粗くナデを施したのかもしれない。頸部の屈曲は、外面では鈍いものの、内面は明瞭である。肩が張らない形態。弥生時代後期後葉。**250**は甕とすべきかもしれない。外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は、剥離しているが、ハケだろう。底部は突出せず、底部外面は窪む。弥生時代後期末頃。

251は器台。内外面とも調整は不明だが、外面端部付近には沈線が施される。また、径2.5cm程の孔が多数見られる。残存部分では全てが残存しないが、残存部分の下段の穿孔は6方向、上段の穿孔は7方向の可能性はある。弥生時代後期前葉頃。

252～259は高坏。**252**は有稜高坏A 3。外面はタテミガキ。内面もミガキと思われるが、摩滅のため単位が観察できない。坏底部から屈曲した口縁は強く外反し、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉。**253**は椀形高坏A 2。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部はわずかに残存するのみで、摩滅もあり、誤認の可能性もあるが、大きな誤差はないと考える。脚柱部内面にはシボリ目が見られる。弥生時代後期末頃。**254**は内外面とも剥離のため調整不明。外面は一部で器面が残存するが、当該部分にも付着物があり、調整が十分に観察できない。ただし、ミガキの可能性が考えられる。裾部には穿孔が見られる。残存部分で1方向のみだが、等間隔の4方向であれば存在すべき箇所に穿孔が見られないことから、3方向の可能性が考えられる。脚柱部は中実気味。庄内式初頭頃。**255**は脚部外面ハケ後ミガキで、脚柱部下部にはハケ目が残存し、中位より上にはミガキが施される。内面は裾部にハケ目が見られる。緩やかにハの字状に開く脚部。弥生時代後期中～後葉頃。**256**は内外面とも器面の剥離が著しい。脚部外面はタテミガキ、内面はナデと思われ。脚柱部内面には、シボリ目が見られる。脚部はハの字状に外反気味に開くが、短い。弥生時代後期中葉頃か。**257**の外面、坏部は剥離のため調整不明、脚部はわずかにタテミガキが観察できる。内面は、坏部、脚部とも剥離のため調整不明であるが、脚柱部内面には指頭圧痕が残る。坏部はわずかに屈曲後の口縁部が残るが、屈曲は鈍い。脚部はハの字状に直線的に伸び、裾部へ鈍く屈曲する。弥生時代後期前葉頃。**258**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部内面にはシボリ目が残る。穿孔は見られない。弥生時代後期前～中葉頃か。**259**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部は緩く屈曲する。弥生時代中期後葉頃。

以上、64 溝西部下層出土遺物は、弥生時代後期後葉を中心に、その前後の遺物がほとんどである。

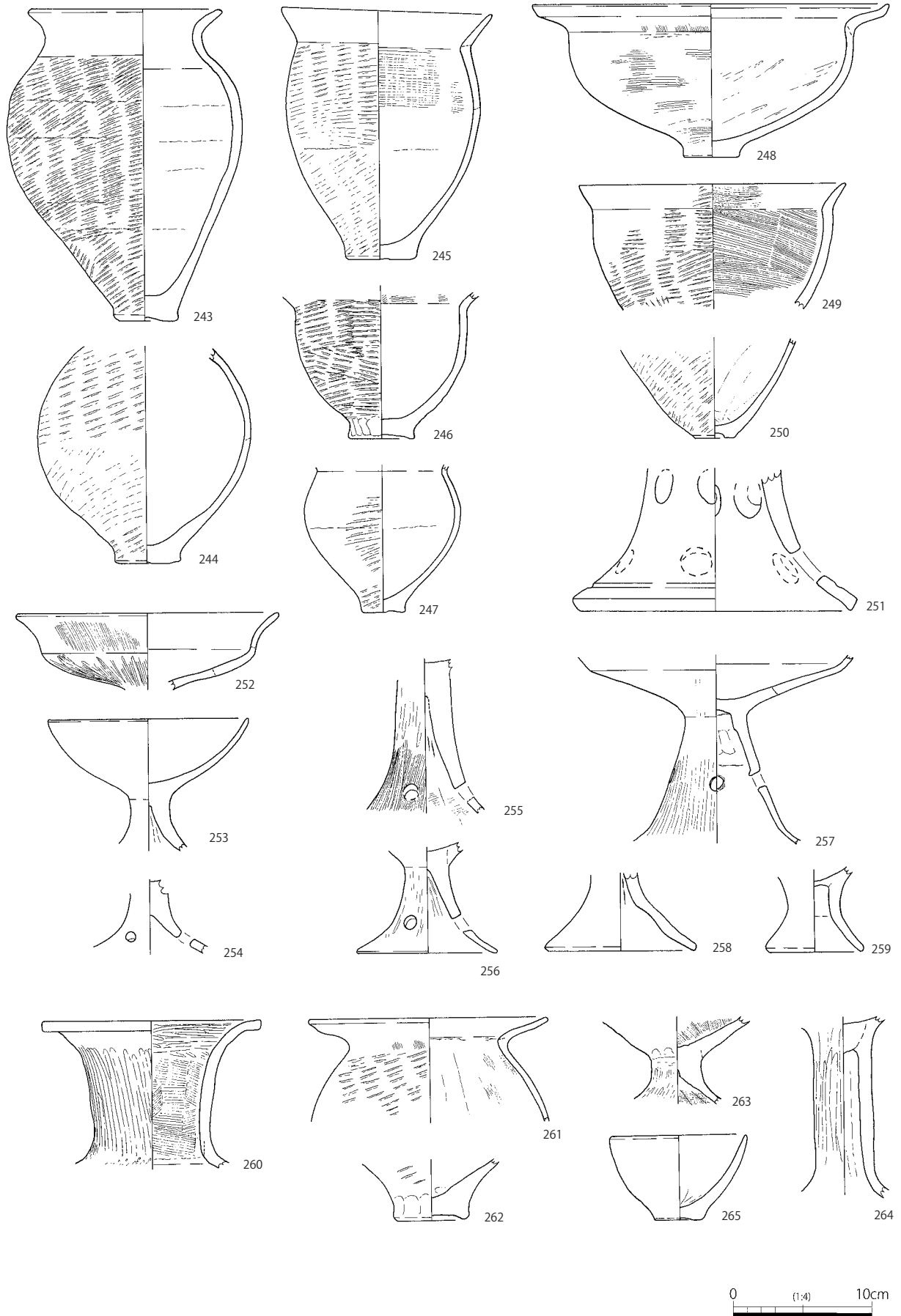


図45 溝出土遺物(10) (64溝西部・下層2・層位不明)

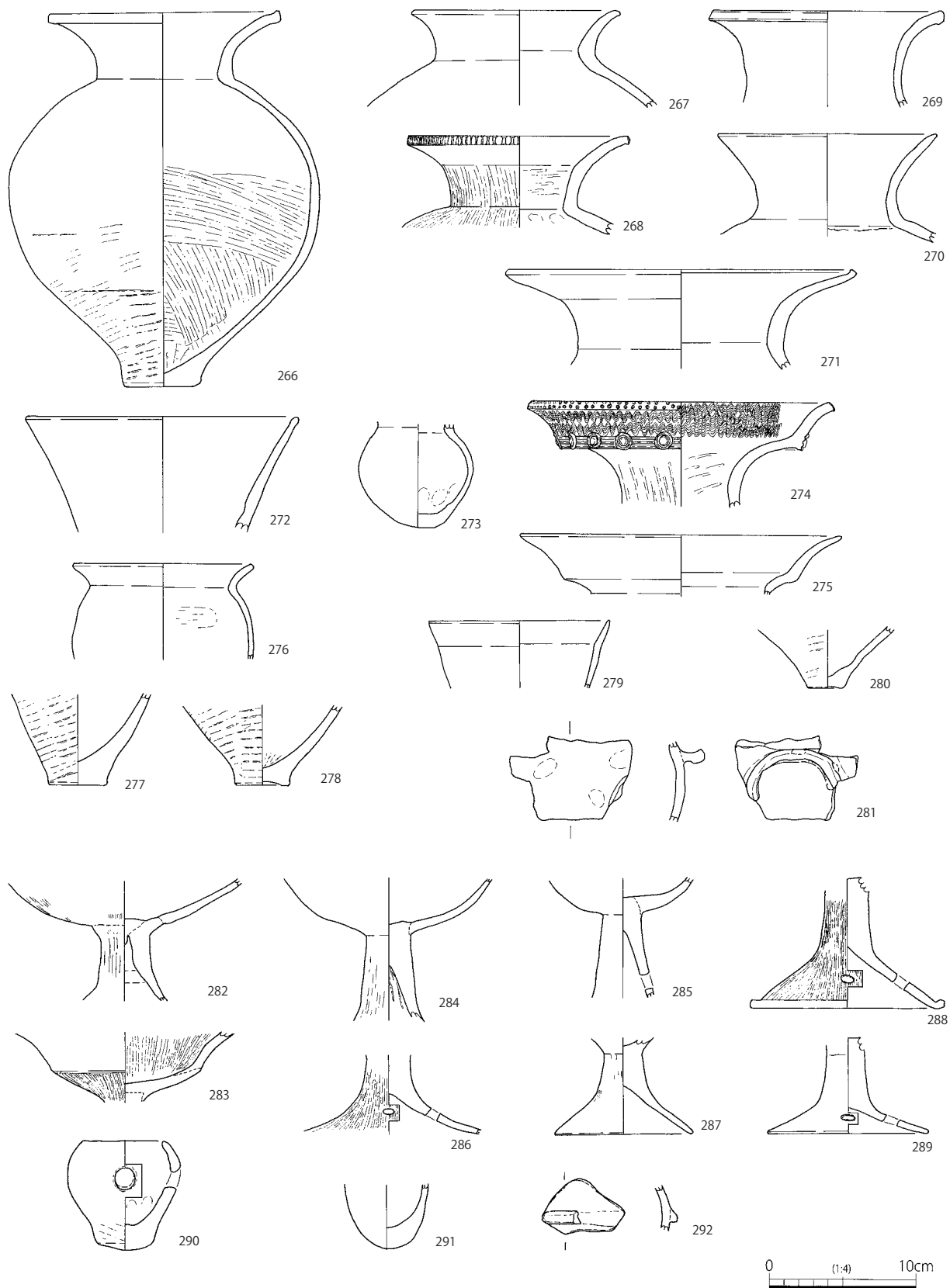


図46 溝出土遺物(11)(64溝中央部・上層上部)

260～265は、出土層位が不明なものである。

260は広口長頸壺。外面は、口縁部がヨコナデで、以下頸部はヨコナデ以後のタテミガキで、一部が端部付近まで至る。ミガキ原体は幅広である。わずかに残る体部もタテミガキと思われる。また、頸

部と体部の境には、ヘラ状工具による刺突が見られるが、残存部位が小さく、数点が見られるのみである。内面は、口縁部がヨコミガキで、以下頸部は横方向を基調としつつ斜め方向も見られるハケである。口縁部のミガキが一部頸部のハケを切る。頸部と体部の境には接合痕が見られ、以下の体部内面はナデと思われる。弥生時代後期中～後葉頃。**261**は弥生形甕A(Acか)(口縁h)。口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ(3条/cm)で、頸部にはタテハケ。体部内面はタテ方向を基調としたハケ。ハケは一部で見られるのみで、良好には残存しない。体部最大径はうかがえないが、口径を大きく上回ることはないと思われ、弥生時代後期後葉～庄内式初頭頃だろう。**262**は甕か。体部外面はわずかにタタキ目(2条/cm)が見られるが、底部付近には見られず、ナデである。比較的強いナデのようで、ナデ以前のタタキの有無は確認できなかった。内面は指頭圧痕がわずかに見られ、ナデとも思えるがはっきりとはしない。底部はやや上げ底で端部がナデでつままれる。このナデと底部外面のナデとが対応するのだろう。甕にしては底部形態がやや奇異な感があるが、内面には炭化物の付着が見られ、煮炊きに使用されたと推測でき、ひとまず甕と判断しておく。弥生時代後期後葉頃。**263・264**は高坏。**263**の外面、坏部は調整不明だが、脚部付近には指頭圧痕が見られる。脚部はタテミガキだが、幅広の工具静止痕が見られ、ミガキ以前はハケと思われる。内面、坏部はハケで、脚部もハケ。椀形高坏と考えれば、庄内式初頭頃か。**264**は脚柱部外面タテミガキ。内面はシボリ目が見られ、わずかに残る裾部はナデか。弥生時代後期前葉。**265**は鉢(小形鉢A)。外面はナデか。内面は底部付近にハケが残る。弥生時代後期後葉～庄内式中頃。

以上、64溝西部出土遺物は、弥生時代後期後葉～庄内式前半までの遺物が多数を占める。ただし、上層上部では、一定量の弥生時代中期後葉の遺物が含まれる。これは、最終的な埋め戻し時に、当該期の遺構を掘り返した土で埋め戻したためとも考えられる。

64 溝中央部 (図46～56 - 266～456)

266～292が上層上部、**293～419**が上層下部、**420～443**が下層、**444～456**が断面観察用に残したアゼから、それぞれ出土した遺物である。

266～275は壺。**266～271**は広口壺。**266**は広口壺Abか。外面、口縁部～体部上半は剥離や付着物のため調整不明。体部下半はタタキ(2.5条/cm)後ナデだろう。内面も、口縁部～体部上半は剥離のため調整不明。中位以下にはハケが残る。体部は球形で、やや横には張る。頸部への屈曲は比較的明瞭で、口縁部が強く外反する。弥生時代後期後葉頃。**267**は広口壺A。内外面とも剥離が著しいが、口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面の調整は不明だが、内面下部にはわずかにナデの痕跡が見られる。口縁部は短く外反する。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**268**は広口壺A。内外面とも口縁部はヨコナデと思われるが、摩滅気味で不明瞭であり、一部ミガキの可能性もある。頸部は、外面がタテミガキ、内面がヨコミガキである。体部は、外面がタテミガキ、内面は肩部にあたり、指頭圧痕が見られ、ナデだろう。口縁端部外面には刻み目が施される。体部から頸部への屈曲は明瞭だが、口縁部への屈曲はやや不明瞭である。端部は摩滅気味で不明瞭だが、明瞭な拡張はない。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**269**は広口壺Aか。内外面とも剥離のため調整不明。頸部から口縁部へは屈曲がなく、口縁端部は弱く拡張する。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**270**は広口壺A。内外面とも剥離のため調整不明。体部内面の屈曲部には接合痕が残る。頸部の屈曲はやや鈍く、口縁が緩やかに外反する。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**271**は広口壺A。内外面とも摩滅のため調整不明。口縁端部は弱くつままれる。体部から頸部、頸部から口縁部の屈曲は、いずれも鈍い。弥生時代後期後葉～庄内

式前半頃か。272は直口壺。内外面とも剥離が著しいが、いずれもヨコナデだろう。口縁部は直線的で、ごく弱く外反気味である。端部は若干肥厚しているようにも見えるが不明瞭である。布留式。後述する65溝南西部が近接する箇所での出土であり、同遺構に伴うと思われ、混入だろう。273は小形壺。内外面ともナデと思われるが、外面は摩滅と付着物のため不明瞭であり、ナデ以前にタタキが施されていたようにも見える。内面は、底部に指頭圧痕が残る。底部は突出せず、不安定ながら、狭い平底である。詳細な時期は不明だが、ほぼ丸底である点からは、庄内式頃と思われる。274は加飾二重口縁壺（複合口縁壺B a）。内外面ともヨコナデで、この後に口縁部外面は5条の波状文を2段に施し、屈曲部直上に3条の沈線を巡らし、この上に円形浮文をおそらく等間隔に付し、竹管文を施している。口縁端部外面には、2段に概ね互い違いに竹管文を施す。口縁部内面はおそらく外面の波状文と同一の原体で3段に波状文を施す。内外面とも頸部はミガキと思われるが、摩滅気味で明瞭には観察できない。おそらくいずれもまばらなミガキで、外面が縦方向、内面が横方向と思われる。庄内式。275は二重口縁壺（複合口縁壺A）。内外面とも剥離のため調整不明。一次口縁は短く、屈曲後二次口縁は弱く外反する。弥生時代後期後葉～庄内式頃。

276～278は甕。276は甕。内外面ともほとんど調整不明だが、体部内面の一部で、砂粒の移動が見られ、ケズリの可能性がある。ただし、全体で見られず、誤認の可能性もある。体部外面に、現状でタタキ痕跡は見出せない。器形は弥生形甕とさほど差異はないように思える。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。277・278は弥生形甕。277は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面はナデと思われるが、付着物のため不明瞭である。底部は平底。弥生時代後期中～後葉頃。278は外面右上がりのタタキ(2条/cm)。内面は、ハケで底部にはクモノ巣状のハケメが見られるが、体部は摩滅気味のためハケ目は良好には残存しない。底部は突出し、外面は上げ底である。弥生時代後期後葉頃。

279～281は鉢。279は小形鉢Dか。内外面とも摩滅のため調整不明。頸部の屈曲は内面でやや明瞭である。庄内式中頃。280は小形鉢Aか。内外面とも摩滅著しいが、外面にはタタキと思われる痕跡が見られる。内面の調整は不明。底部は小さく、上げ底である。弥生時代後期後葉。281は大形鉢か。把手部分の破片だが、内外面とも剥離のため調整不明。弥生時代後期後葉。

282～289は高坏。282は有稜高坏Aか。内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面の坏部、脚部ともタテミガキと思われる。内面は、剥離のため、坏部、脚部ともに調整不明。坏底部には円板充填が施されている。また、坏部下端にも接合痕が明瞭に残る。弥生時代後期後葉。283は有稜高坏A。外面、口縁部の調整は摩滅のため不明。下部はヨコミガキか。坏底部外面と内面はタテミガキ。外面屈曲部は明瞭に稜を持つが、内面は鈍く屈曲するのみである。坏口縁端部は残存しないが、さほど長くはない。弥生時代後期後葉頃。284は椀形高坏A。器面のほとんどが剥離し、坏部は内外面とも調整不明。脚部の器面は摩滅気味ながら残存し、外面はタテミガキと思われる。内面は、シボリ目が残る程度で、調整は不明。脚部と坏部の接合は挿入付加法である。庄内式初頭頃。285は椀形高坏A。内外面とも剥離のため調整不明。弥生時代後期後葉～末頃。286は全体的に摩滅気味である。外面は脚柱部にタテミガキが見られる。内面はナデだろう。脚柱部は中実で、裾部には4方向に穿孔が施されるが、孔の径は0.6cmと小ぶりである。庄内式前半頃。287は内外面とも器面の剥離が著しい。外面は脚柱部にわずかに残るのみで、当該部分にはタテミガキと思われる痕跡が見られる。内面は坏部、脚部ともに調整不明である。脚柱部は中実気味で、裾部へはごく鈍いながら屈曲する。なお、残存部分では、穿孔は見られない。庄内式初頭頃。288・289は有稜高坏の脚だろう。288の外面はタテミガキ。内面、坏部

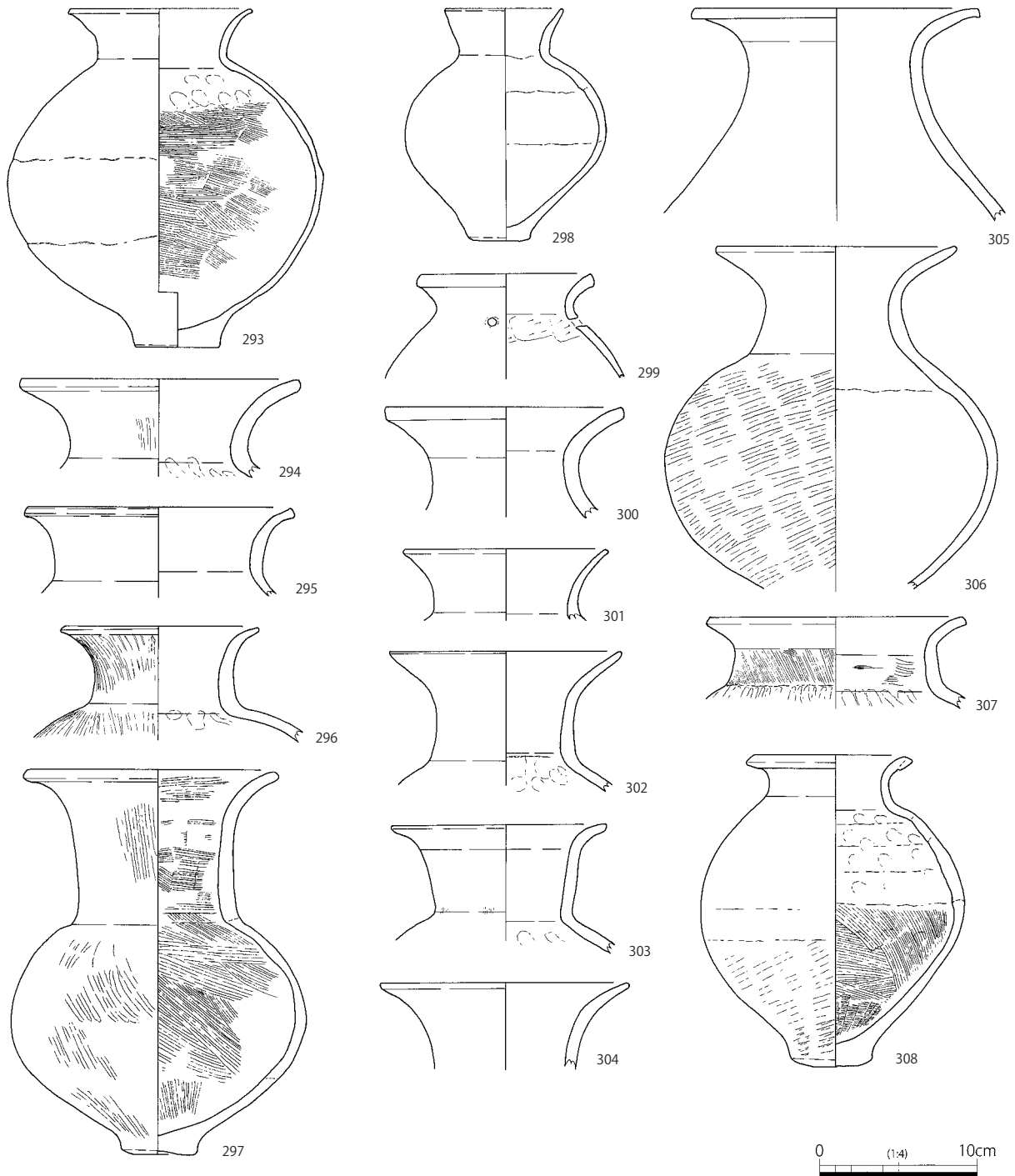


図47 溝出土遺物(12)(64溝中央部・上層下部1)

はミガキで、脚部はナデと思われるが、不明瞭である。脚裾部には4方向にスカシが穿たれる。脚柱部は中実であり、庄内式中頃か。**289**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部は中実で、裾部には4方向に穿孔が施される。庄内式。

290・291は蛸壺。**290**は蛸壺A。外面底部付近以外、器面が剥離している。底部付近には左上がりのタタキ(2条/cm)が見られ、本来は上部までタタキ調整であったと思われる。内面は、剥離及び付着物のため、調整不明瞭ながら、底部付近には指頭圧痕が残り、ナデだろう。口縁が強く内湾する。庄内式頃か。**291**は蛸壺Cか。内外面とも剥離のため調整不明だが、内面には凹凸が見られ、強いナデと思われる。庄内式頃だろう。**292**は手焙形土器。外面はナデ、内面は摩滅のため不明。凸帯部分

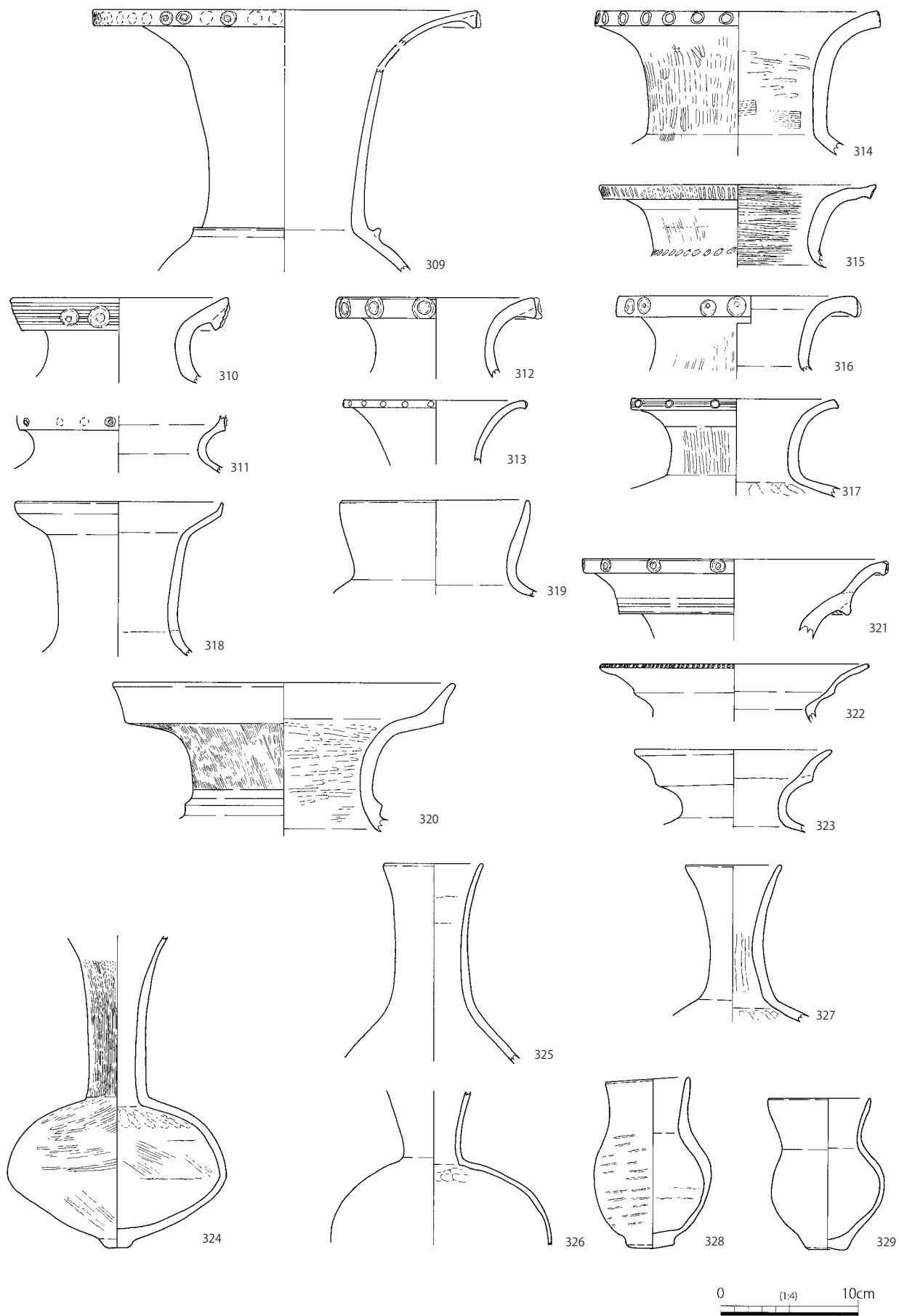


图 48 沟出土遗物 (13) (64 沟中央部・上層下部 2)

の小片。弥生時代後期後葉～庄内式中頃。

以上、64 溝中央部上層上部出土遺物は、弥生時代後期中葉～庄内式中頃までの遺物で、後期後葉～庄内式前半がそのほとんどである。

293～419 は上層下部出土。

293～341 は壺。293～308 は一部を除き加飾のない広口壺。293～296 は広口壺A。293 はAcか。外面は剥離のため調整が十分に観察できないが、口縁～頸部はヨコナデと思われる。体部は調整不明で、接合痕が見られるのみ。内面、口縁～頸部も剥離、摩滅のため調整不明だが、ヨコナデと思われる。体部内面はハケだが、肩部は指頭圧痕が残るのみで、ハケは施されていない。体部はやや横広がりの球形である。庄内式初頭頃か。294 は口縁部内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。外面、頸部はタテミガキと思われる。わずかに残る体部の調整は不明である。内面、頸部は横方向を基調としたナデだろう。体部には指頭圧痕が見られる。体部から頸部の屈曲はやや明瞭だが、頸部から口縁部へは緩やかに移行し、端部はごく鈍い面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式頃。295 は内外面とも剥離のため調整不明。体部から頸部、頸部から口縁部への屈曲は、いずれも鈍い。端部はごく弱く拡張し、鈍く面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式頃。296 は外面、口縁端部付近はヨコナデで、以下頸部、体部はタテミガキ。内面、口縁部～頸部は大部分の器面が剥離し、わずかに残る器面も摩滅のため調整不明。体部内面も摩滅しているが、屈曲部付近には指頭圧痕が見られる。屈曲は、いずれも鈍い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。297 は広口長頸壺か。外面、口縁部はヨコナデと思われるが、剥離のため不明瞭。頸部はタテミガキだが、やはり剥離部分が多い。体部もタテミガキ。内面、口縁部はヨコミガキで、以下頸部は横方向を基調としたハケ。体部内面もハケ。弥生時代後期中～後葉。298 は口縁がやや短い、細頸直口壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部は短く、緩く外反する。体部は球形化しているが、底部は明瞭に突出する。庄内式初頭頃か。299 は広口壺か。口縁部内外面ともヨコナデと思われるが、外面は摩滅のため不明瞭である。体部外面はナデと思われる。内面はナデで、後に頸部直下部分のみケズリ状の調整が施される。若干ながら砂粒の移動が見られることからケズリとしたが、器壁はさほど薄くない。体部最上部、頸部屈曲部下には、焼成前穿孔が施される。現状で1個しか残存しない。弥生時代後期か。300～307 は、302・303・307 が広口壺Bと思われるが、これを除き広口壺Aだろう。300 は内外面とも、剥離、摩滅のため調整不明。体部から頸部への屈曲は鈍いが、これに比べ、頸部から口縁部への屈曲は比較的明瞭である。端部は鈍く面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式頃。301 は内外面とも剥離のため調整不明。頸部は短いやや直立気味で、口縁が外反する。弥生時代後期後葉～庄内式頃。302 は内外面とも剥離のため調整不明だが、体部内面には指頭圧痕が残り、ナデだろう。体部から頸部への屈曲は比較的明瞭で、直立気味に頸部が立ち上がり、口縁が直線的に開く。弥生時代後期後葉頃か。303 は外面、口縁部はヨコナデ、頸部は剥離、摩滅のため不明ではあるが、ヨコナデのようにも見える。体部外面は摩滅のため不明。内面、口縁部～頸部はヨコナデのように見えるが、不明瞭である。体部は、肩部に指頭圧痕が見られる。弥生時代後期後葉頃か。304 は外面摩滅、内面は剥離しており、調整不明。頸部から口縁にかけて、若干の屈曲があるが、不明瞭であり、外反する口縁である。弥生時代後期後葉～庄内式頃。305 は内外面とも剥離のため調整不明。なで肩で、頸部へ緩やかに移行し、口縁部への屈曲も緩やかである。端部は鈍く面を持つ。弥生時代後期か。306 は全体的に器面の剥離が著しく、体部外面に右上がりの粗いタタキ（1.5条/cm）が見られる以外、調整不明。体部は横方向に張り、鈍く屈曲しハの字状の頸部に至り、やはり鈍く口縁が外反する。体部がタタキ仕

上げと粗いつくりである。弥生時代後期後葉～庄内式初頭頃か。**307**は外面、口縁部はヨコナデ、頸部はタテハケで、特に下端には静止時の粘土のはみ出しが明瞭に残る。上部の一部でも同様な痕跡は見出せるが、タテハケの後に施されたと思われる口縁部のヨコナデにより、多くが平滑にされている。体部はタテミガキで、頸部のハケとの切りあいはないが、上述の粘土のはみ出しが一部上位に押し上げられているようにも見えることから、頸部のハケの後に施されたと推測される。内面、口縁部は剥離のため調整不明。ただし、外面との対応や頸部から口縁部への屈曲などを考えれば、ヨコナデだろう。頸部はヨコハケ後ナデ。体部は指頭圧痕が残る。体部から頸部、頸部から口縁部の屈曲は比較的明瞭である。弥生時代後期末頃か。**308**は口縁部が肥厚しており、広口壺Dとすべきかもしれないが、やや奇異である。口縁～頸部、外面はヨコナデと思われるが、内面は剥離のため調整不明。体部外面は、少なくとも底部鉢状部分には右上がりのタタキ（3条/cm）が見られるが、これより上位については、調整不明である。タタキの後にナデが施されたのかもしれない。体部内面、下半はハケが明瞭に残るが、これより上位はナデで、接合痕も1.5～1.8cm程の間隔で、比較的明瞭に残る。体部はあまり球形化していない。口縁端部は折り返すことで弱く肥厚している。弥生時代後期後葉頃か。**309**は広口長頸壺。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部には竹管文が施された円形浮文が付されているが、現状で3個が残存するのみである。わずかながら剥離したような痕跡も見られ、一単位4個の可能性はあるが、等間隔に付されていたのか、4個一単位で数方向に付されていたのかなど、不明である。頸部には断面三角形の凸帯が付される。口縁部と頸部の破片が接合できず、図上で復元した。弥生時代後期後葉頃。**310**は広口壺Cか。内外面とも摩滅のため調整不明だが、ミガキのようにも見える。ただし、単位は認識できない。口縁端部は弱く垂下し、外面には4条の沈線を施した上に、竹管文を施した円形浮文を付す。2個を一単位としているようだが、方向数は不明である。現状で一単位は確認でき、残存部端で円形浮文の可能性のある粘土塊があり、これを浮文とし、等間隔であるとすれば、5方向の可能性が考えられる。弥生時代後期後葉頃。**311**は広口壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部は残存しないが、外面には円形浮文が付され、その上に竹管文が施されていたと推測されるが、摩滅のためはっきりしない。また、浮文の間隔についても、2cm弱の等間隔に付されていた可能性があるが、明瞭に残存するものが少なく、はっきりしない。弥生時代後期か。**312～317**は広口壺で、いずれも口縁に装飾が施される。**312**は広口壺Cか。内外面とも剥離のため調整不明。外面頸部～口縁部の屈曲部分にわずかに器面が残存するが、摩滅で調整不明。口縁端部は接合部分で剥離しており、端部の成形方法がわかりやすい。端部は粘土を付加し弱く垂下させることで拡張している。また、端部には口縁端部幅を上回るような、やや大振りな円形浮文が付される。多く見られるような竹管文を施したのではなく、中央部分を窪ませるものである。弥生時代後期後葉頃か。**313**は内外面とも剥離のため調整不明。なお、口縁端部には円形浮文が付されているようだが、良好には残存せず、竹管文が施されていたのかは不明である。弥生時代後期か。**314～317**は広口壺Aか。**314**は外面、頸部はタテミガキで、体部との屈曲部にはハケが見られ、ハケ後ミガキだろう。口縁部は摩滅のため調整不明で、明瞭なヨコナデ痕跡は見られない。内面は口縁部が剥離のため調整不明で、以下も摩滅気味ながら、頸部にはヨコミガキが見られる。ただし、体部との屈曲やや上にはヨコハケが見られ、外面同様ハケ後ミガキと思われる。頸部の屈曲は外面では比較的明瞭だが、内面はごく鈍く、頸部から口縁部への屈曲も鈍い。口縁端部は面を持ち、外面には竹管文が施されるが、摩滅のため良好には残存しない。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**315**は外面、口縁部はヨコナデで、頸部はタテミガキと思われるが、摩滅気味ではっきりしない。内面はヨコ

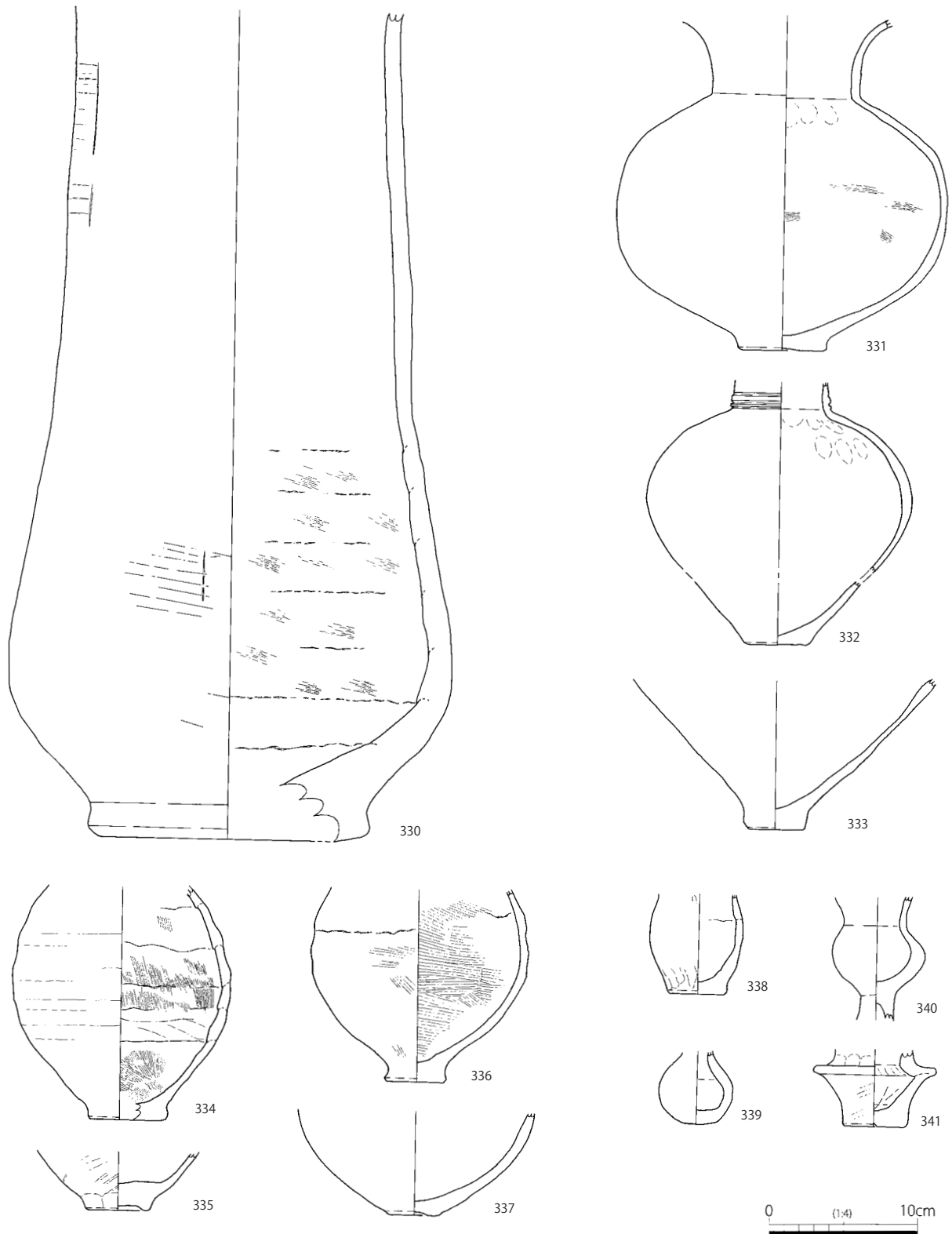


図49 溝出土遺物 (14) (64 溝中央部・上層下部3)

ミガキが密に施される。口縁部は弱く拡張し、外面には刻み目が施される。また、頸部下端の体部との屈曲部にも粒状の列点文が施される。弥生時代後期後葉頃か。316は内外面とも、摩滅に加え多数の附着物のため調整が観察しにくく、頸部外面がタテミガキである以外は不明である。なお、口縁部外面はヨコナデだろう。口縁端部外面には2個を一単位として8方向に円形浮文が付される。体部～頸部、頸部～口縁部への屈曲は、外面では鈍いものの、内面では比較的明瞭である。弥生時代後期後葉～庄内

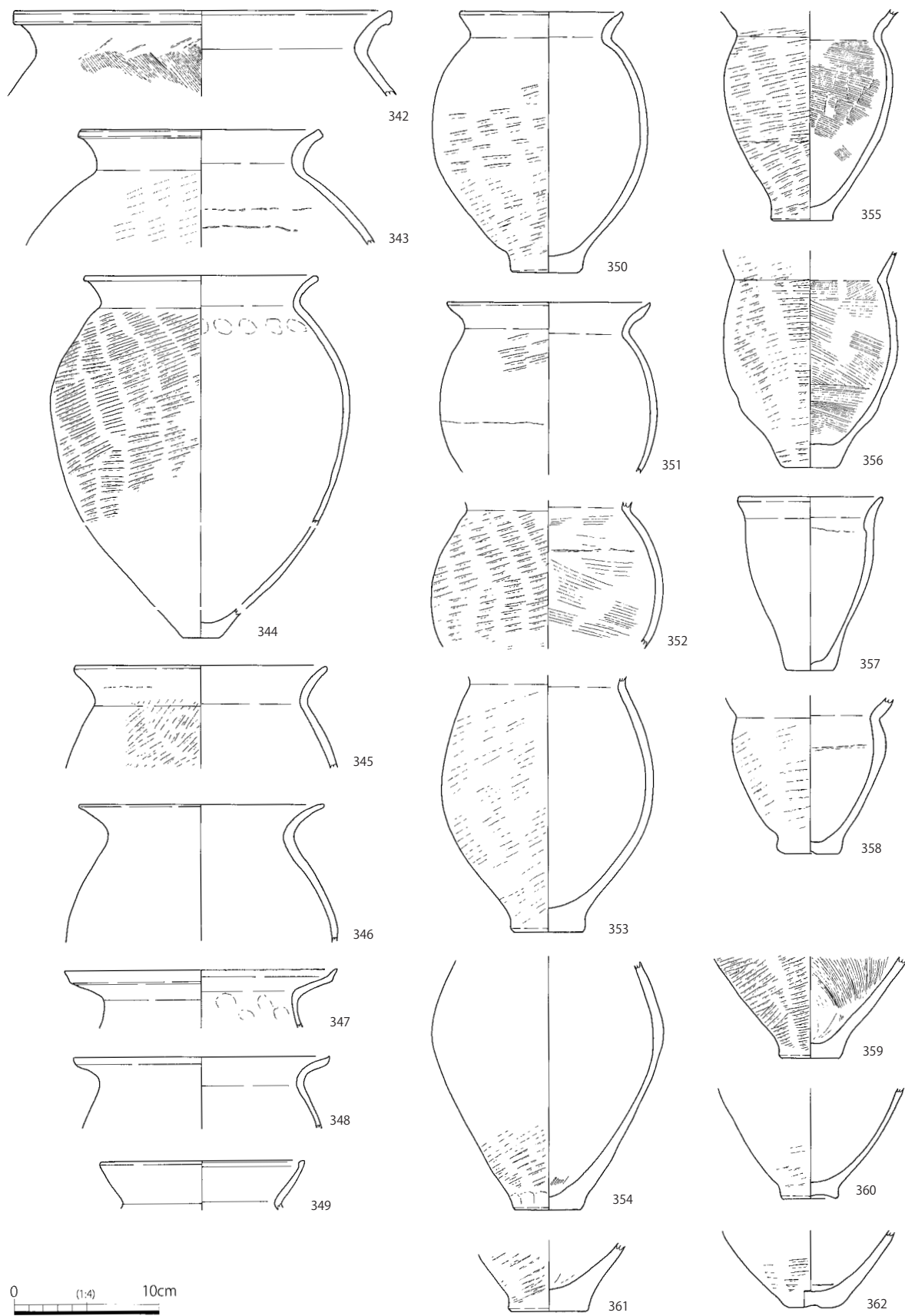


図50 溝出土遺物 (15) (64 溝中央部・上層下部4)

式頃。**317**は外面、口縁部はヨコナデ。頸部はタテミガキだが、いずれも摩滅気味で、調整は十分には観察できない。体部は剥離のため調整不明。内面は、剥離のため調整不明だが、体部内面には指頭圧痕が残る。体部～頸部への屈曲は比較的明瞭だが、頸部～口縁部への屈曲は鈍い。口縁端部は拡張しないが面を持ち、櫛状工具によるとも考えられる2条の沈線が見られ、この上に竹管文が施されるが、大部分が剥離し、詳細は不明である。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**318**は広口長頸壺。内外面とも剥離のため調整不明。体部～頸部への屈曲は鈍い。頸部は逆ハの字状に概ね直線的に立ち上がり、比較的明瞭に口縁が屈曲し、端部はつまみあげる。弥生時代後期中～後葉頃。**319**は広口直口壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部は弱く内湾気味。弥生時代後期末～庄内式頃か。**320**は二重口縁壺か。外面、口縁部はヨコナデだろう。頸部はタテハケ。内面、口縁部は剥離や摩滅のため不明瞭ながら、外面に対応するヨコナデだろうか。以下、頸部は横方向を基調としたミガキで、体部際にはヨコハケが見られることから、ハケ後ミガキだろう。口縁部の屈曲は内面ではやや鈍いが、上方に拡張し、二重口縁状を呈する。頸部下端には断面やや鈍い三角形の凸帯が付され、周辺はヨコナデが施されている。他地域の影響を受けているのだろうか。弥生時代後期後葉頃か。**321～323**は二重口縁壺(複合口縁壺A)。**321**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明だが、まず口縁端部には円形浮文が付される。摩滅のため不明瞭ながら、竹管文が施されているようである。等間隔であれば、12方向に付されていると推測できる。一次～二次口縁への屈曲部外面には、凹線風の2条の沈線が施されていたようであるが、これも良好には観察できない。口縁端部についても同様に沈線が施されていた可能性も考慮されうるが、現状では見出すことはできない。庄内式前半頃。**322**は内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面、口縁部は器面が残存するが、摩滅気味であり、調整が十分に観察できないが、ヨコナデと思われる。ただし、ヨコミガキのようにも見える。これ以外の内外面とも調整不明である。口縁端部には刻み目が施されるが、摩滅のため残存状況は悪い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**323**は内外面とも剥離のため調整不明。ただし、頸部外面にはヨコナデと思われる痕跡が見られ、口縁部の一次口縁と二次口縁の接合痕は一部で明瞭である。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**324～327**は細頸壺で、いずれも弥生時代後期中葉頃か。**324**は外面、頸部はタテミガキ。体部は上半が横、斜め方向、下半が縦方向のミガキと思われるが、下半については、摩滅や付着物のため良好に観察できない。内面、頸部は剥離のため調整不明。体部は肩部に指頭圧痕、ナデが見られ、接合痕が消されている。以下の体部上半にはハケと思われる痕跡が見られるが、ナデのようにも見える。体部下半はナデだろう。底部はごく小さく、体部が横方向に強く張り、頸部へ向かいしまる。頸部は直立気味で弱く逆ハの字状を呈し、口縁が緩やかに開く。**325**は内外面とも摩滅のため調整不明。下層の428と胎土は異なるものの器形が類似し、脚付の可能性もある。また、428で後述するが、紀伊の影響を考えるべきかも知れない。**326**は内外面とも剥離のため調整不明。ただし、体部内面肩部には指頭圧痕と接合痕が見られる。体部は丸みを帯び、頸部は逆ハの字状に直線的に伸びる。**327**は内外面とも剥離のため調整不明だが、頸部内面にはシボリ目残り、体部内面、肩部には指頭圧痕がうっすらと見られる。**328・329**は長頸壺(長頸壺C)でいずれも弥生時代後期後葉頃。**328**は内外面とも剥離が著しい。外面、口縁部は調整不明で、体部は水平方向のタタキとも考えられる調整が剥離した器面に見られるが、一部わずかに残る器面ではタタキ痕跡は明瞭に観察できず、タタキ後ナデだろうか。内面、口縁部は剥離のため調整不明。体部は摩滅のため調整不明。**329**は内外面とも剥離のため調整不明。体部から頸部への屈曲は鈍く、口縁部は内湾気味である。

330は壺か。内外面とも剥離、摩滅が著しい。このため外面は調整不明で、内面も体部側にわずか

にハケが残る程度である。なお、外面には頸部と体部にヘラ描き（線刻）と思われる痕跡が見られる。いずれも先端の細い工具で、横方向に複数の線を描き、その後縦方向に1本の線を加えるというものである。残存部分の都合、縦の線が果たして1本なのか、複数なのかは不明である。なお、頸部の線刻と体部の線刻は、同一面上にはない。このため、土器の正面にのみ線刻を描いたのではないと思われる。なお、頸部、体部とも、複数方向に描かれていたのかは、残存部分と器面の剥離のため、不明である。絵画風のものであるとしても、画題は不明である。時期不明だが、弥生時代後期頃だろうか。**331**は広口壺A。外面は摩滅のため調整不明。内面、頸部は同様に摩滅のため調整不明で、体部も同様ながら、中位にわずかながら横方向を基調としたハケが見られる。胴部は横に強く張り、やや下膨れ気味である。頸部の屈曲は比較的明瞭で、頸部は上方に直線気味に伸びた後、緩やかに外反する。庄内式頃か。**332**は内外面とも剥離のため調整不明。ただし、内面肩部には指頭圧痕が残り、頸部外面には3条の沈線を巡らす。底部片と胴部片を図上復元したものだが、肩が張る器形である。弥生時代後期か。**333**は甕の可能性もある。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面は右上がりのタタキのようにも見える。底部は明瞭に突出し、底部外面は平底。弥生時代後期後葉頃か。**334**は短頸壺か長頸壺だろうか。外面は摩滅や付着物のため調整不明。ミガキのようにも見える。内面はハケ、ナデで、接合痕が明瞭に残る。体部はさほど球形化せず、長細い器形である。弥生時代後期か。**335**は体部外面右上がりのタタキ（2条/cm）だが、摩滅著しい。底部付近には指押さえが見られる。内面は剥離のため調整不明。底部は高台状で、鉢の可能性も考えられるが、内面が焼成不良気味で黒色を呈しており、壺と判断した。弥生時代後期。**336**は体部形態から、長頸壺の可能性も考えられる。外面は、体部中位にヨコハケ、下位にタテハケと思われる痕跡が見られるが、摩滅気味で不明瞭である。内面はハケ。体部は球形で、底部は突出する。弥生時代後期後葉頃。**337**は壺か。内外面とも剥離のため調整不明。底部はドーナツ底だが、突出しない丸みを帯びた形態である。庄内式頃か。

338～**341**はミニチュア土器類。**338**は壺か。外面は剥離のため器面が良好に残存しないが、底部付近に残る器面にはミガキの可能性のある痕跡が見られる。内面はナデ。小形の鉢とすべきか。**339**は壺か。外面は器面の大部分が剥離しており、調整不明。内面は頸部付近に比較的明瞭にヨコナデが見られ、以下の体部もナデだろう。丸底風だが座りはよく、平底としておく。丸みを帯びる体部で、頸部は急激にすぼまる。頸部以上の形態は不明だが、さほど長くない頸部なのではないだろうか。**340**は脚付壺か。内外面とも剥離のため調整不明。なお、外面下部は器面が残存するものの、付着物のため調整不明。壺部分の形態は、長頸壺にも似るか。**341**は異形土器とでも呼んでおく。外面底部側には右上がりのタタキとも思える痕跡が見られるが、不明瞭である。口縁側も含め、ナデで仕上げられているものと思われる。内面、底部にはハケと思われる痕跡が見られるが、外面同様口縁部も含めナデで仕上げられているものと思われる。なお、内面口縁部側にはシボリ目が見られる。これらは、いずれも時期不明だが、弥生時代後期後葉頃と推測しておく。

342～**362**は甕で、**342**・**349**を除き弥生形甕Aだろう。器高を基準とした分類に従うと、**344**がA b、**350**がA c、**355**・**356**がA d、**357**・**358**がA eである。**342**は口縁部内外面ともヨコナデだが、内面は端部付近の器面が残存するのみで、頸部側については調整不明。なお、外面にはヨコナデ後の工具痕が見られる。これは、体部外面ハケ調整の静止痕跡と思われる。ただし、体部からのハケと連続しないものが多く、最終的に体部外面に施されたハケ以前に施されたハケによる痕跡と思われる。規則性はなく、装飾的な意図はないと思われる。体部内面は剥離のため調整不明。体部外面にハケ以前

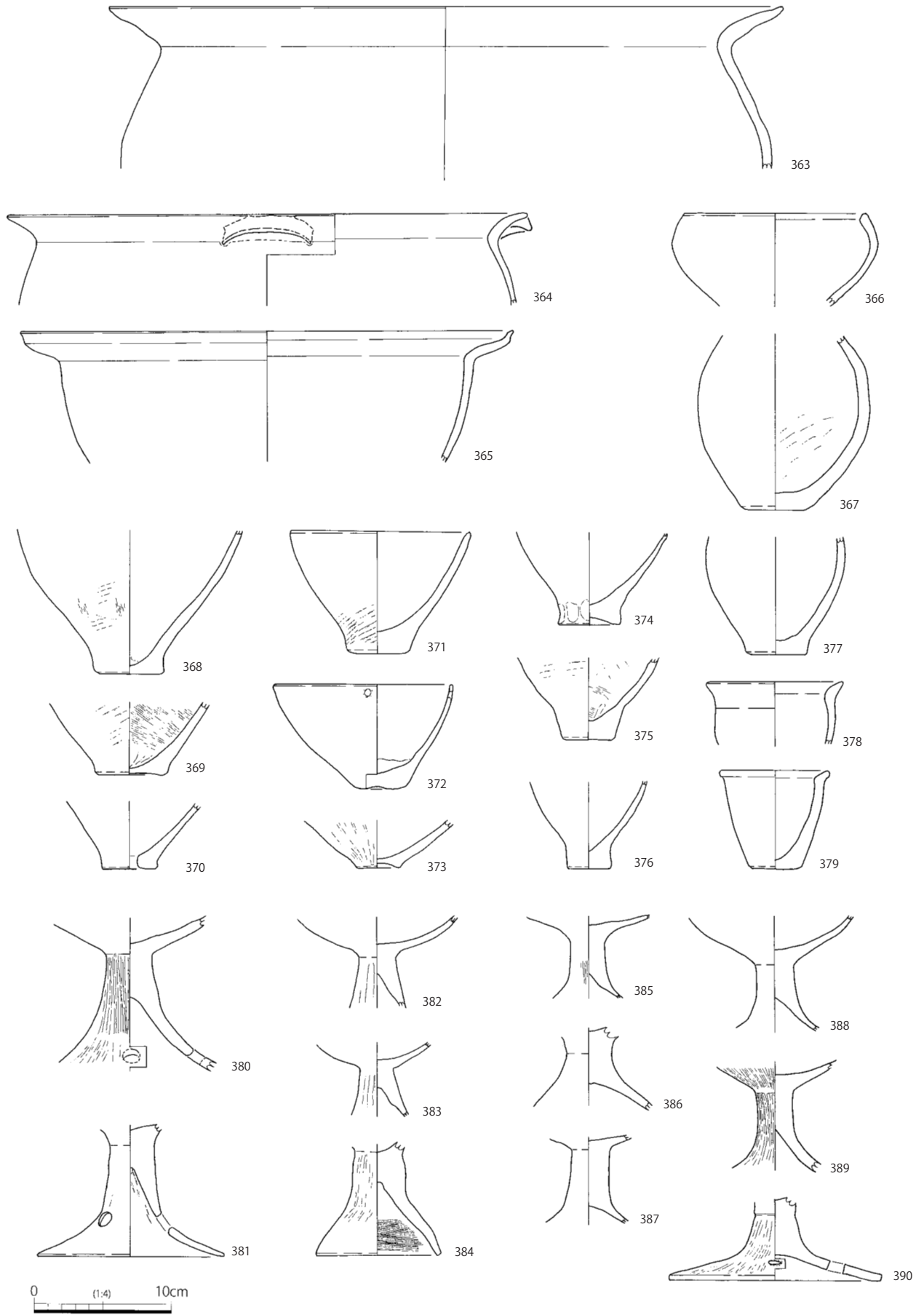


図51 溝出土遺物 (16) (64 溝中央部・上層下部5)

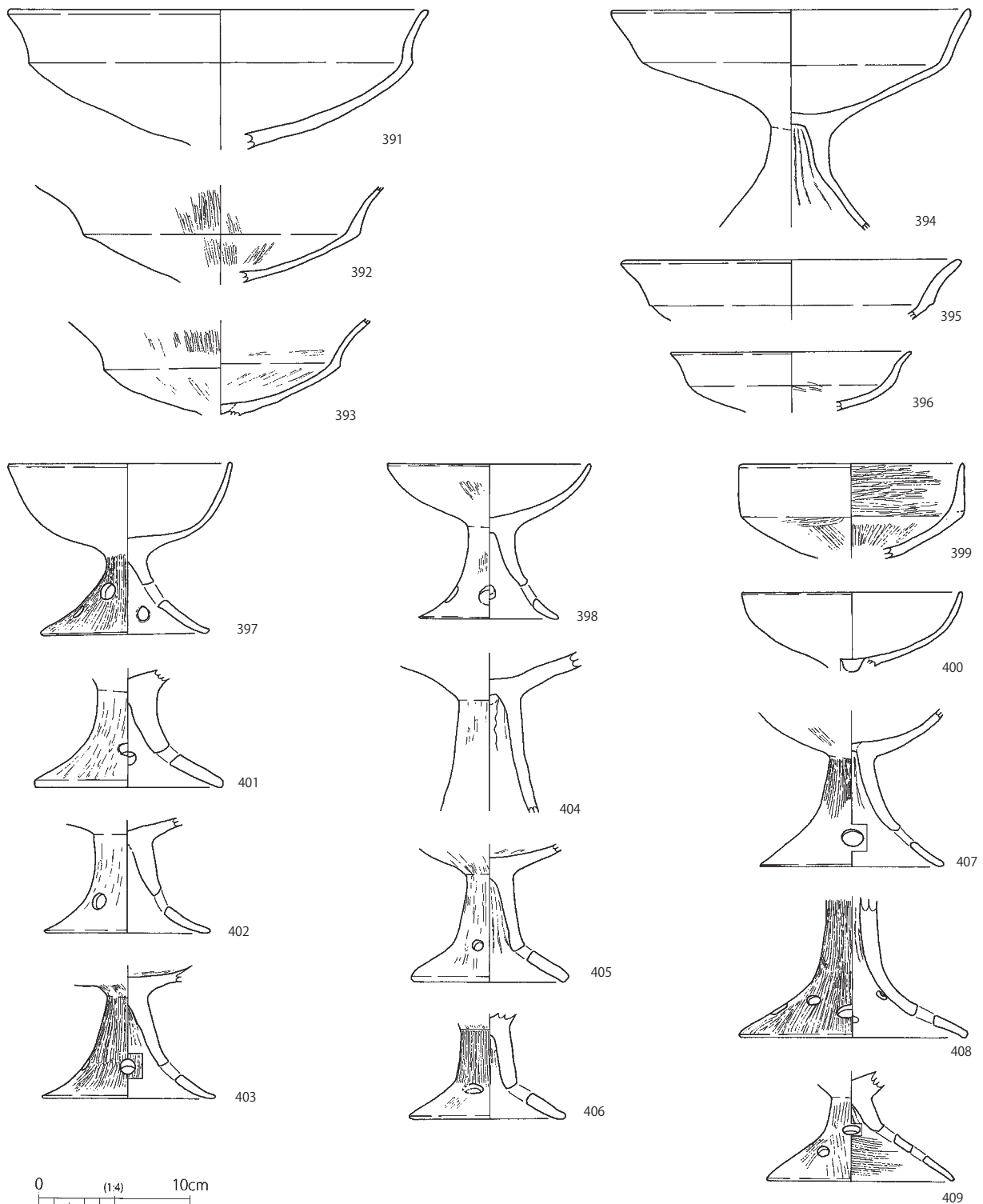


図52 溝出土遺物(17)(64溝中央部・上層下部6)

のタタキ痕跡は明瞭には確認できないが、うっすらと右上がりのタタキが施されているようにも見える。弥生時代後期中葉頃か。**343**はA aの可能性があり、口縁gか。口縁部内外面ともヨコナデと思われるが、内面は剥離のため十分には観察できない。体部外面は右上がりの粗いタタキ(2条/cm)だが、剥離のため残存状況は悪い。体部内面は調整不明で、接合痕が約1.8cm間隔で見られる。頸部の屈曲は鈍く、口縁は外反し、端部は明瞭な面を持つ。弥生時代後期中～後葉頃。**344**は口縁hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は、右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は摩滅のため調整不明だが、

肩部には指頭圧痕が残る。胴部片と底部片とを図上復元したものだが、やや肩が張る器形で、底部は摩滅のためもあるが丸みを帯びた小さい平底である。胎土は生駒山西麓産である。弥生時代後期後葉頃。**345**は口縁h。外面、口縁部はヨコナデで、下端まで体部外面のタタキが至る。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は、摩滅のため調整不明瞭で、口縁部はヨコナデと思われるが、体部については不明である。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**346**は口縁h。内外面とも摩滅のため調整不明。頸部の屈曲は鈍く、口縁は弱く外反する。弥生後期後葉～庄内式前半頃。**347**は内外面とも摩滅のため調整不明だが、体部内面には指頭圧痕が残る。頸部の屈曲はやや鈍いが、口縁端部は明瞭につまみあげる。庄内形甕を若干思わせる口縁端部形態だが、これ以外は異なる。**348**は内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部は弱く摘み、外面は庄内形甕を思わず形態ではある。しかし、頸部の屈曲はごく鈍い。器壁は薄めだが、剥離を考慮しなければならず、やや薄い程度だろう。庄内式頃か。**349**は布留形甕。内外面とも摩滅のため調整不明だが、ヨコナデだろう。口縁端部は弱く肥厚するが、内傾する面は持たず、上端部に狭く面を持つ。古相の布留形甕で、当遺構の他の遺物の時期よりも新しい。この遺物が出土した部分は、須恵器が出土した65溝に切られている部分であり、65溝にとっても混入ではあるが、一定量布留形甕を含む様相からは、65溝からの混入と考えられる。**350**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、摩滅のため不明瞭。体部外面は、右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は剥離、摩滅のため調整不明。底部は明瞭に突出するが、体部最大径が口径を上回り、体部は比較的球形化している。口縁部は短いが、端部が摩滅気味のため、本来はもう少し伸びる可能性も考えられる。庄内式前半頃。**351**は口縁hか。剥離のため調整の残存は悪い。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキと思われるが、わずかに肩部に残るのみである。体部内面の調整は不明。体部は比較的球形化している。口縁部は弱く内湾気味である。庄内式初頭頃。**352**は外面右上がりのタタキ（3条/cm）。内面はハケ。体部は比較的球形化しており、頸部の屈曲は比較的明瞭である。庄内式前半頃か。**353**は外面右上がりのタタキ（2.5条/cm）だが、剥離のため弱く見える程度である。内面は剥離のため調整不明。球形化は見られず、底部も明瞭に突出する。弥生時代後期後葉。**354**は内外面とも剥離が著しく、体部外面下部、鉢状部分に右上がりのタタキ（3条/cm）がわずかに見られる以外調整不明。体部最大径はやや張るが、体部自体は長胴気味で、球形化は見られない。底部外面は平底。弥生時代後期後葉。**355**は口縁部内外面ともヨコナデで、端部は残存しない。体部、外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、口縁部下部まで及ぶ。内面はハケ。底部は明瞭に突出し、外面は平底である。体部は球形化してなく、細長い。弥生時代後期後葉。**356**は全体的に剥離、摩滅が著しい。体部外面は水平～右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、口縁部まで及ぶ。内面、口縁部はヨコナデで、体部はハケ。頸部の屈曲は明瞭で、口縁も直線的に伸びる。端部は残存しないが、残存部端より程なく口縁端部であると予想できる。体部は長胴気味で、球形化の傾向は見られないが、底部へは突出しない。底部外面は平底である。弥生時代後期末。**357**は内外面とも剥離が著しい。外面口縁部付近に器面が残り、口縁部外面はヨコナデ、体部は板状工具痕が残りハケと思われる。現状で、剥離もあり体部外面にタタキ痕跡は確認できない。内面、口縁部はヨコナデと思われるが、体部の調整は不明。細長い器形で、鉢の一種なのかもしれない。弥生時代後期後葉。**358**の口縁部の調整は内外面とも摩滅のため不明。体部外面は水平～右上がりのタタキだが、摩滅のため不明瞭。体部内面の調整は不明。底部外面は中央部付近がやや窪むが、不整形である。弥生時代後期後葉頃。**359**は外面右上がりのタタキ（4条/cm）で、弥生形甕にしては細かい。内面はハケ。底部は平底。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**360**は内外面

とも剥離が著しい。外面は右上がりのタタキ（3条/cm）、内面は調整不明。底部は上げ底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**361**は外面右上がりのタタキ（3条/cm）だが、摩滅のため不明瞭。内面は板状工具の静止痕跡が見られ、ハケだろう。底部は明瞭な突出ではない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**362**は内外面とも剥離が著しいが、外面は水平方向のタタキ（3条/cm）が見られる。内面は調整不明だが、底部やや上に接合痕が残る。底部はドーナツ底で、底部への突出は見られない。鉢の可能性も考えられる。弥生時代後期末～庄内式。

363～379は鉢。**363～365**は大形鉢。**363**は内外面とも摩滅のため調整不明。頸部の屈曲はやや鈍いが、口縁は極めて直線的で、端部をごく弱くつまむ。体部は残存部下端やや上で屈曲が見られる。体部最大径が口径を上回っており、庄内式頃か。**364**は内外面とも剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的明瞭で、把手が口縁部外面に付される。現状で、1点のみの残存である。庄内式頃か。**365**は内外面とも大部分が剥離のため調整不明。口縁部内面はヨコナデ。頸部の屈曲は比較的明瞭で、口縁が概ね直線的に外方へ伸び、端部をつまみあげる。口径が体部最大径を凌駕する。弥生時代後期後葉頃か。**366**は鉢か。内外面とも摩滅のため調整不明。口縁端部も摩滅しており、実際ももう少し上方へ伸びる可能性もある。弥生時代後期～庄内式頃か。**367**は鉢か。底径がやや大きいように見え、長頸壺とは考えなかったのだが、その可能性もある。内外面とも摩滅気味で、外面の調整は不明である。平滑に仕上げられているが、明瞭なハケ目やミガキの単位などは確認できない。内面は、ナデと思われるが、一部で砂粒の移動が見られ、ケズリとも考えられる。しかし、器面は分厚い。体部はやや球形化しており、底部は突出しない。弥生時代後期～庄内式頃か。**368・369**は小形鉢A。**368**は外面右上がりのタタキ後ハケか。器面が剥離しており、十分に観察できない。内面は剥離のため調整不明。底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉頃。**369**は外面大部分が剥離するが、右上がりのタタキが観察できる。内面も同様に剥離しているが、ハケが比較的明瞭に観察できる。底部は上げ底で、薄く、鉢と判断した。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**370**は有孔鉢。内外面とも剥離のため調整不明。底部は突出しない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**371～373**は小形鉢A。**371**は外面底部付近に右上がりのタタキ（3.5条/cm）が見られるが、上半は剥離のため調整不明。おそらく同様な右上がりのタタキだろう。内面は剥離のため調整不明。底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉頃か。**372**は内外面とも剥離のため調整不明。底部やや上に接合痕が残る。口縁部には穿孔の可能性もある小穴が見られる。**362**と成形方法、胎土、内面底部の接合痕など類似する。庄内式前半頃か。**373**は壺の可能性もある。外面はタテミガキだが、器面の剥離も著しい。内面は剥離のため調整不明。底部は上げ底。庄内式初頭頃。**374**は小形鉢B。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面底部付近にはナデが見られる。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**375・376**は小形鉢Aか。**375**は外面タタキ後ナデもしくはハケと思われるが、器面剥離のため、調整不明瞭。内面はハケ。底部は平底で、明瞭に突出する。甕の可能性も考えたが、外面調整と、体部のすぼまり具合から鉢と考えた。弥生時代後期中～後葉。**376**は内外面とも摩滅のため調整不明。底部は分厚く、体部もあまり開かない。弥生時代後期中～後葉頃。**377**は甕形の鉢と思われるが、小形の甕とすべきかもしれない。外面は摩滅、内面は剥離のため、調整不明。外面にはタタキとも思える痕跡が見られるが、不明瞭である。底部は平底。弥生時代後期か。**378**は鉢。口縁部は内外面ともヨコナデだが、体部の調整は摩滅のため内外面とも不明。弥生時代後期後葉頃。**379**は鉢か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部は短くつまみ出される。底部は平底で、体部は弱く内湾気味だが、口縁へ向かい概ね直線的に伸びる。弥生時代後期後葉頃。

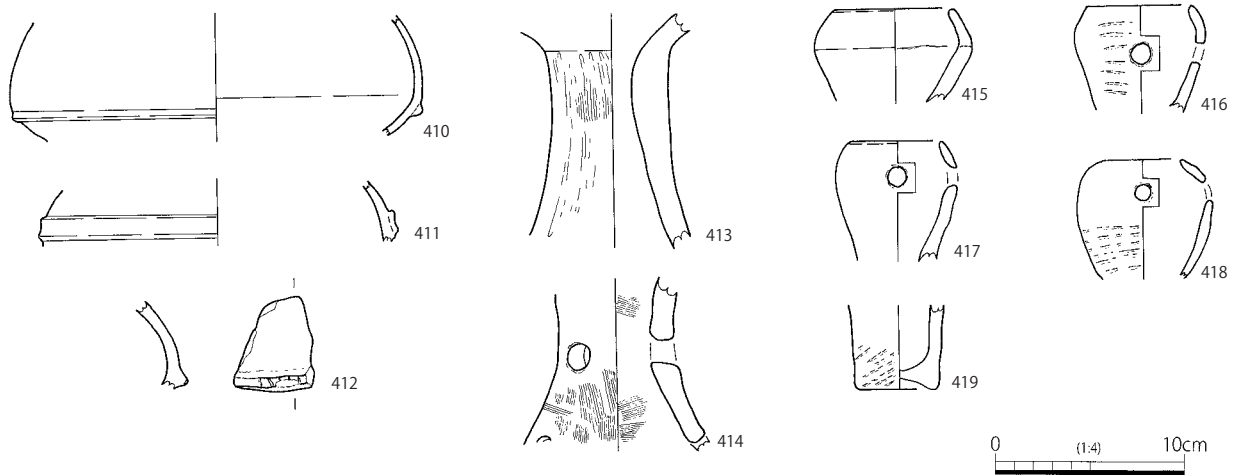


図53 溝出土遺物(18)(64溝中央部・上層下部7)

380～409は高坏。**380**は内外面とも器面が摩滅し、外面脚部がタテミガキである以外、調整不明。裾部には推定4方向にスカシが施される。坏～脚部への屈曲は明瞭だが、脚柱部と裾部の屈曲は不明瞭である。やや中実気味であり、庄内式初頭頃か。**381**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部内面にはシボリ目が残る。裾部には3方向にスカシが穿たれる。脚柱～裾部への屈曲は緩やかで、裾部は比較的長めである。中実気味であり、庄内式初頭頃か。**382**は椀形高坏。外面、坏部は摩滅のため調整不明、脚部はタテミガキがわずかに見られる。内面は、坏部、脚部ともに摩滅のため調整不明である。後述する398と同様な形態だが、これよりも脚柱部が中実気味であり、庄内式初頭頃。**383**は脚部外面を除き、剥離のため調整不明。脚部外面はタテミガキ。脚～坏部への屈曲は明瞭である。中実気味であり、庄内式初頭頃。**384**は脚部外面脚端部付近が剥離のため調整不明で、これより上位はタテミガキと思われる。内面、杯部はナデと思われるが、剥離、摩滅のため不明瞭である。脚部はハケか。脚柱部はやや中実気味で、脚部は内湾気味である。中実気味である点からは庄内式初頭頃と思われるが、内湾気味の脚部は奇異である。**385**は内外面ともほとんどの器面が剥離しており、調整不明だが、外面、脚柱部から裾部分に残る器面ではタテミガキと思われる調整痕跡が見出せる。脚柱部は中実で、庄内式前半頃。**386**は内外面とも摩滅のため調整不明。脚柱部は中実気味。庄内式。**387**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。坏～脚部への屈曲は比較的明瞭で、脚柱～裾部への屈曲も鈍いながらも比較的明瞭である。脚柱部は中実。庄内式。**388**は椀形高坏か。内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部は中実気味であり、庄内式前半頃。**389**は高坏。外面は坏部、脚部ともに密なタテミガキ。内面は坏部剥離、脚部摩滅のため調整不明である。脚柱部は他例よりもやや細身で、中実気味である。庄内式頃。**390**は高坏。内外面とも摩滅気味で、調整が十分に観察できないが、外面はタテミガキ。内面、坏部はミガキ、脚部はナデだろう。外面上端は、坏部が剥離し、挿入付加法による。脚柱部は中実で、裾部が長く開く。ただし、脚柱部から裾部への屈曲は不明瞭である。脚裾部には穿孔が施されるが、1方向が残存するのみで、方向数は不明である。庄内式。**391～396**は有稜高坏A。**391**はA2か。内外面とも剥離のため調整不明。坏部は比較的深く、大形である。弥生時代後期後葉。**392・393**はA4か5。**392**は内外面とも縦方向を基調とするミガキ。口縁端部まで残存しないが、残存部位より程なく端部に至ると予想できる。やや口縁部が長く、庄内式にかかる可能性も考えられる。**393**は外面と内面底部は縦方向、内面口縁部は横方向を基調としたミガキ。口縁端部まで残存しないが、残存部端より程なく端部に至ると推測される。屈曲後の口縁はやや長めである。坏底部は円板充填法による。弥生時代後期後葉～庄内式初頭頃。

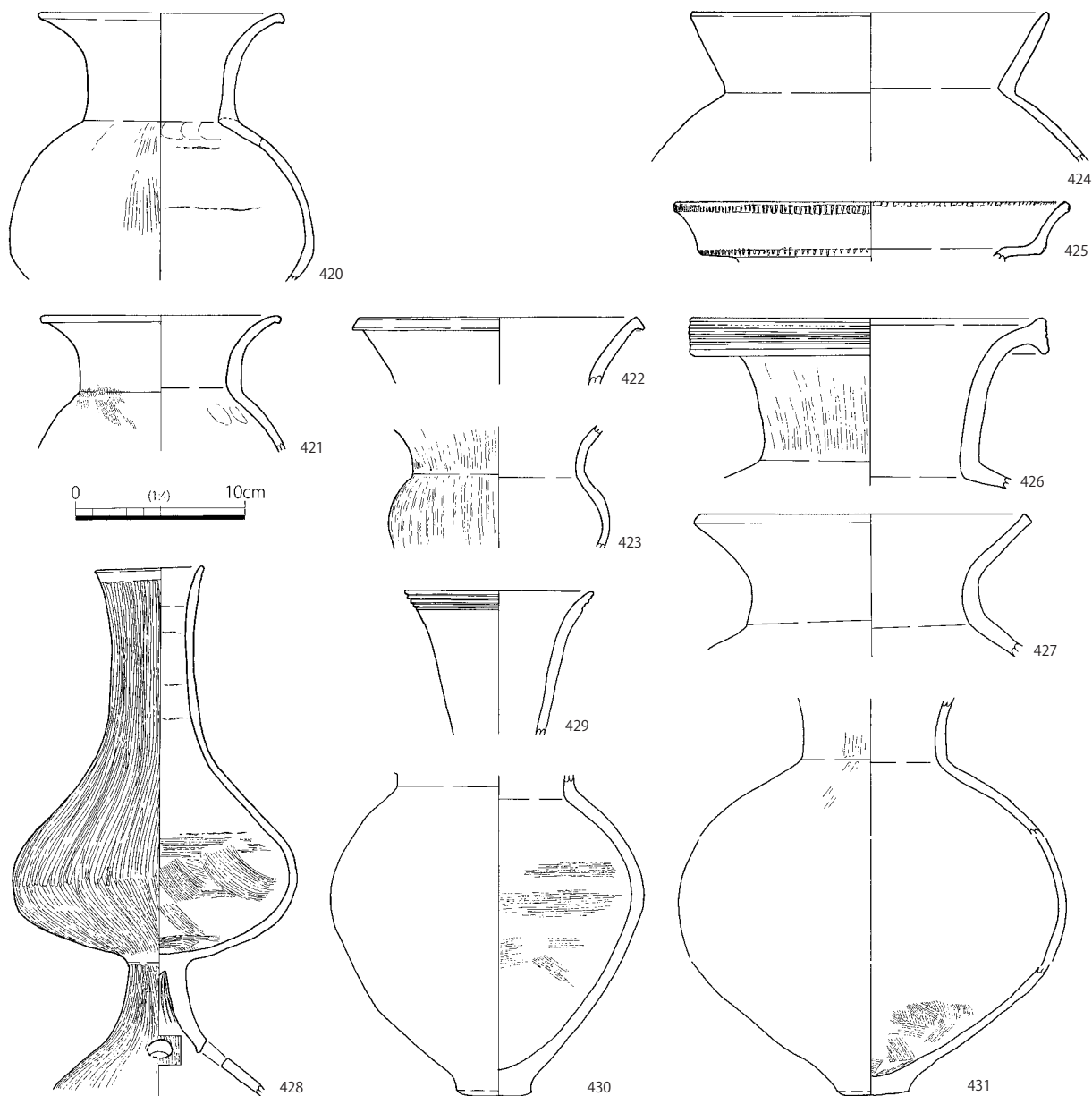


図 54 溝出土遺物 (19) (64 溝中央部・下層 1)

394 は A 2 か。脚柱部内面を除き、内外面とも器面剥離のため調整不明。脚柱部内面にはシボリ目が残る。脚部は脚柱～裾部へ弱く屈曲するが、さほど明瞭ではない。坏部は底部、口縁部とも比較的直線的ではある。ただし、屈曲後の口縁は比較的短く、弥生時代後期後葉頃。**395** は A 2 か。内外面とも剥離のため調整不明。坏部形状から、弥生時代後期後葉と思われる。**396** は外面剥離のため調整不明。内面は大部分が剥離するが、屈曲部に残る器面にはヨコミガキと思われる痕跡が見られる。ただし、附着物のため良好には観察できない。弥生時代後期後葉。**397・398** は椀形高坏。**397** は全体的に摩滅気味である。坏部は内外面とも調整不明。脚部外面はタテミガキで、内面は調整不明。脚部には互い違いの位置で 2 段に 3 方向の先行が施される。脚部は中空で、弥生時代後期末頃。**398** は外面、坏・脚部ともタテミガキだが、器面の大部分が剥離している。内面は剥離のため、坏・脚部とも調整不明。脚部には 4 方向にスカシ。脚部は裾部が短く、坏部は浅い椀形で屈曲しない。弥生時代後期後葉頃。**399** は坏部外面、口縁部は剥離のため調整不明。坏底部はミガキで縦方向が主だが、屈曲部際には横方向の

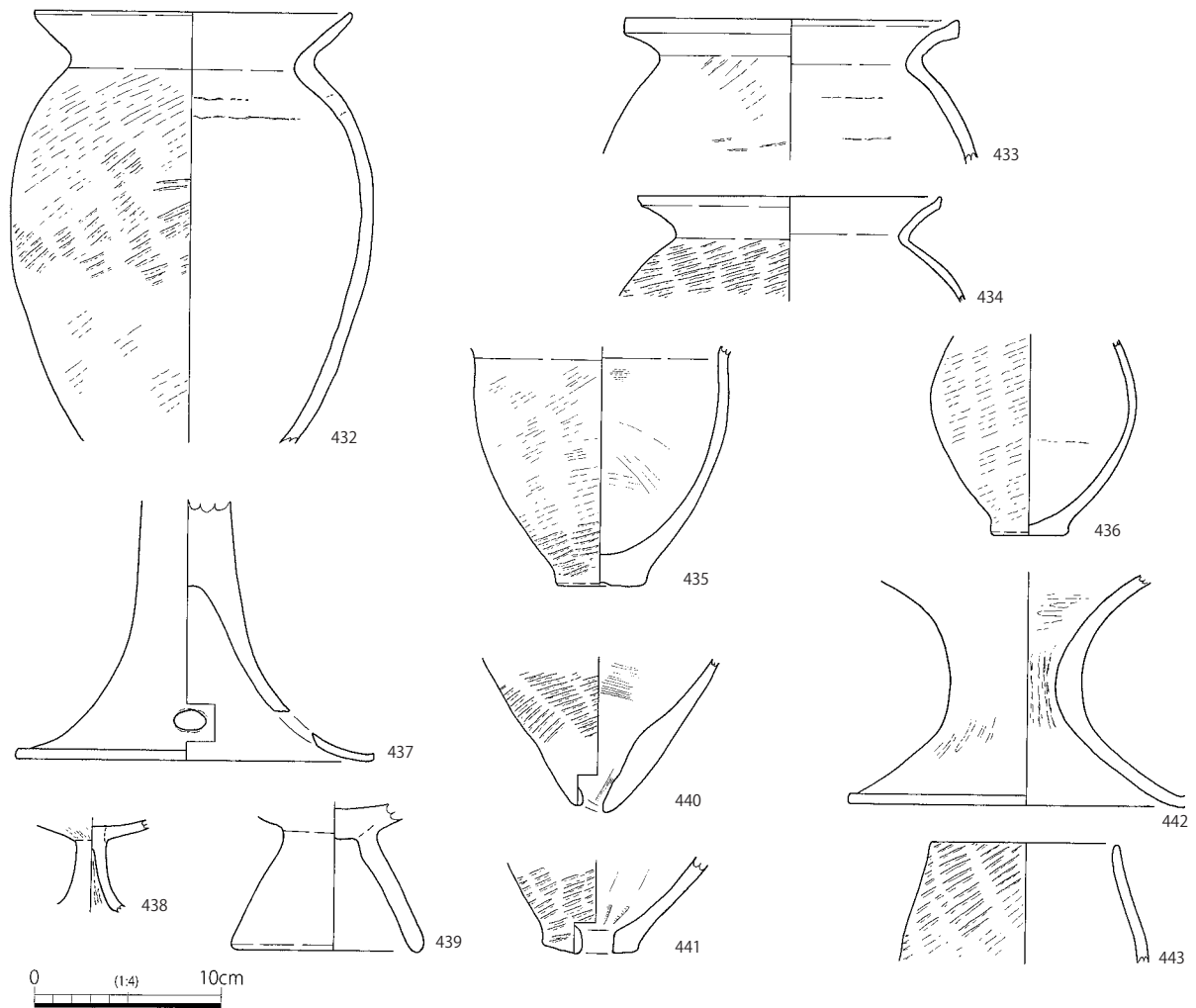


図 55 溝出土遺物 (20) (64 溝中央部・下層 2)

ミガキも見られ、口縁部側もヨコミガキであった可能性がある。内面、口縁部側はヨコミガキ、屈曲以下の底部はタテミガキだが、いずれも残存状況はやや悪い。屈曲後の二次口縁が直立する。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**400**は椀形高坏。内外面とも剥離のため調整不明。坏底部には円板充填が見られ、脚部側にへそ状の突出があり、脚柱部は中実ではない可能性がある。弥生時代後期末頃。**401**は坏部外面摩滅及び付着物のため調整不明。脚部はタテミガキ。内面は、坏部、脚部ともに摩滅のため調整不明。脚部には4方向にスカシが穿たれる。中実ではないが、厚みの割には重い土器である。弥生時代後期後葉。**402**は内外面とも剥離が著しいが、脚部外面にはわずかにタテミガキと思われる痕跡が見られる。脚部の穿孔は3方向。脚部は裾部が短く広がり、弥生時代後期後葉。**403**は外面坏・脚部ともタテミガキで、わずかにミガキ以前のハケも見られる。内面、坏部はミガキ、脚部はナデか。脚柱部内面にはシボリ目が残る。裾部には4方向に穿孔が施される。裾部は短く、脚柱部からの屈曲も見られない。弥生時代後期後葉。**404**は内外面とも摩滅が著しく、外面脚柱部にタテミガキと思われる調整が見られる以外、調整不明。なお、脚柱部内面にはシボリ目が残る。脚部は中空で、坏部への屈曲は明瞭である。弥生時代後期中～後葉。**405**は外面坏・脚部ともタテミガキだが、摩滅のため不明瞭。内面、坏部はミガキだが、脚部は調整不明で、脚柱部にシボリ目が残る。脚柱～裾部への弱い屈曲部には3方向に径が小さい穿孔が施される。弥生時代後期後葉。**406**は外面坏・脚部ともタテミガキ。ただし、剥離が著しく、特に脚裾部は大部分が剥離している。内面、坏部はミガキと思われる。脚部は一部器面が剥離

するが、ハケのようにも見える、強いヨコナデが裾部に施される。裾部には穿孔が施され、現状で2方向が残存する。位置からは、3方向と推測される。脚柱部は中空だが、裾部への屈曲は比較的明瞭である。全体的に分厚いつくりである。弥生時代後期後葉。407は椀形高坏か。内外面とも器面の剥離が著しい。外面は、坏・脚部ともタテミガキだが、坏部の残存部端や脚裾部は剥離のため不明。内面は、坏部が剥離のため調整不明、脚部も同様ながら、ナデか。裾部には3方向に穿孔が施される。脚柱部は中空で、弥生時代後期後葉。408は外面密なタテミガキ。内面は、摩滅のため良好に調整が観察できないが、ナデだろう。脚柱部内面にはシボリ目が弱く残る。裾部には、2段に互い違いで4方向に穿孔が施される。弥生時代後期後葉。409は坏部内外面とも摩滅のため調整不明。脚部外面はタテミガキ、内面はハケ。脚部には上下2段に穿孔が施される。上段は2方向と思われるが、下段の方向数は不明である。残存部分での位置関係は、特に互い違いではない。脚柱～裾部への屈曲は、やや明瞭だが、脚柱部はやや中空気味である。庄内式初頭頃か。411は壺。細頸壺の体部だろうか。内外面とも摩滅のため調整不明。体部最大径付近の凸帯が付された部分の破片。弥生時代後期後葉頃。

410・412は手焙形土器。410は内外面とも剥離のため調整不明。凸帯上には刻み目が施されているようにも見えるが、剥離のため不明。弥生時代後期後葉～庄内式頃。412は内外面ともナデと思われるが、外面摩滅、内面剥離のため、不明瞭。凸帯上には刻み目が施される。弥生時代後期後葉～庄内式頃。

413・414は器台か。413は外面タテミガキ、内面はナデか。器台にしてはやや縮まりすぎているようにも思うが、上端に円盤充填がなされてなく、また剥離した痕跡も見出せず、器台とした。弥生時代後期後葉頃か。414は外面縦・斜め方向のハケ、内面は横方向を基調としたハケが見られるが、外面上部は剥離のため調整不明。筒部の最も縮まった部分には3方向に穿孔が施される。また、残存部端にも孔が見られ、2個のそれぞれ一部が残存する。穿孔位置は、上記の穿孔の位置と一致しており、3方向と推測できる。弥生時代後期後葉頃か。

415～418は蛸壺で、いずれも口縁が強く内湾する。415は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明だが、内面口縁部付近はナデだろう。屈曲部分には接合痕が残る。残存部分で孔は見られない。417と内湾形態はやや異なるが、胎土は類似する。416は内外面とも摩滅が著しい。外面は水平方向のタタキと思われる痕跡が見られる。内面はナデか。417は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。418は外面水平方向のタタキ(2.5条/cm)が屈曲部以下に見られるが、全体的に剥離、摩滅が著しく、屈曲部より上位の調整は不明。内面はナデだろう。孔は他例に比べ小さい。これらはいずれも庄内式中頃だろうか。419は蛸壺か。外面は右上がりのタタキ(3条/cm)、内面はナデか。口縁は広がらず、コップ状の器形である。時期不明。

以上、64溝中央部上層下部出土遺物は、弥生時代後期との判断しかできない遺物を含むが、弥生時代後期後葉～庄内式前半を中心とした遺物が出土している。特に、弥生時代後期後葉と考えられる遺物が多い。

420～443は下層出土。

420～431は壺。420・421は広口壺A。420は外面、口縁部剥離のため調整不明、体部は一部でタテミガキが見られる。内面は剥離のため調整不明だが、肩部には指頭圧痕が残り、体部には一部に接合痕が見られる。体部はやや横張りの球形で頸部は逆ハの字状に開いた後、口縁が外反する。端部はごく弱く拡張する。弥生時代後期後葉～庄内式頃。421は内外面とも摩滅気味。外面、口縁部はヨコナ

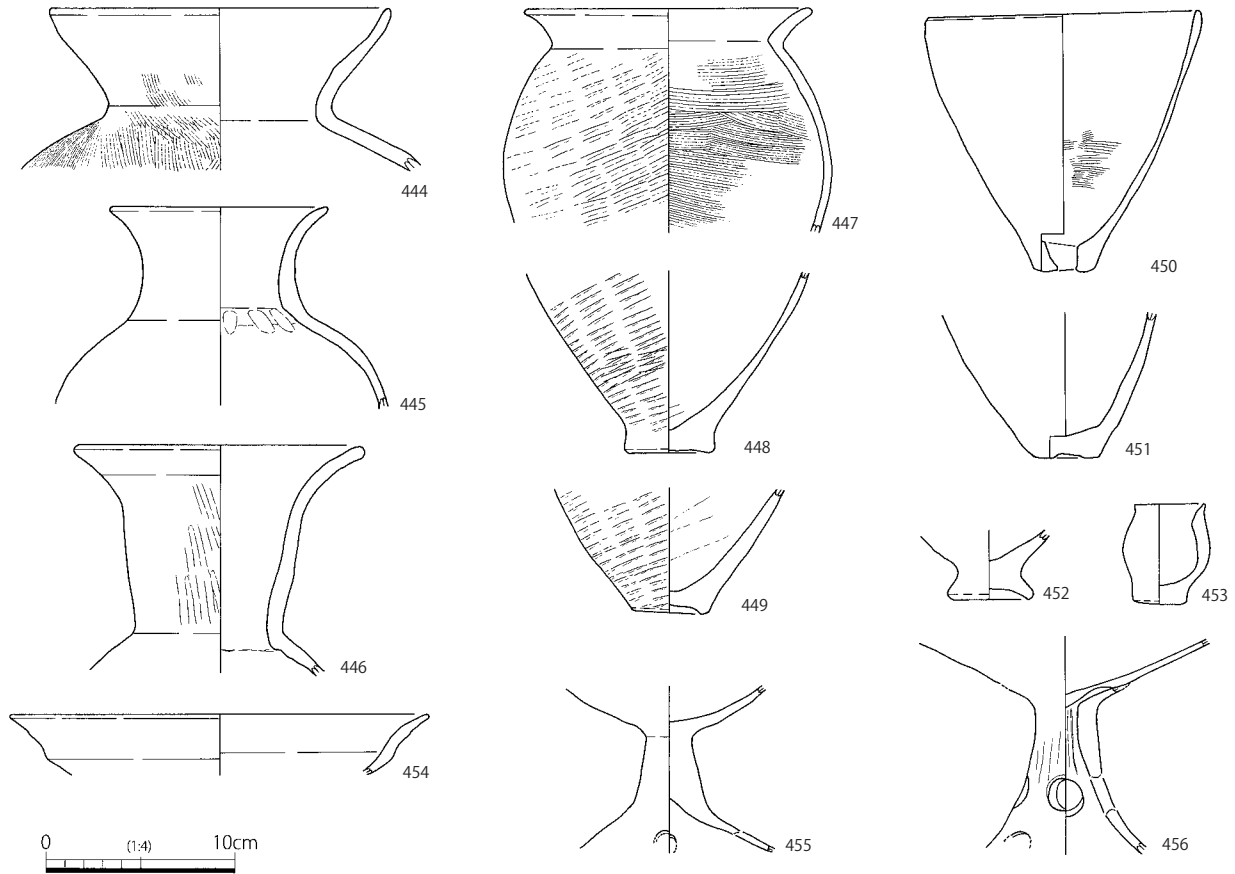


図 56 溝出土遺物 (21) (64 溝中央部・アゼ)

デだろう。頸部から体部の屈曲部付近には、タテハケがわずかに見られる。体部はハケの下にタタキのような痕跡も見られるが、不明瞭。内面は、摩滅のため調整不明。頸部はやや直立気味だが、口縁部への屈曲は鈍い。口縁端部は一部下側へ垂れ下がるような部分がある。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**422** は広口壺 D か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部は明瞭に面を持つ。弥生時代後期後葉頃。**423** は外面タテミガキ。内面は口縁部がヨコナデ、体部がナデだろう。やや横長風の器形で頸部の屈曲も鈍めである。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**424** は広口直口壺か。内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。頸部の屈曲は明瞭で、口縁は直線的であり、端部は丸く収める。庄内式。**425** は二重口縁壺（複合口縁壺 B b）。内外面ともヨコナデと思われるが、摩滅気味であり、外面頸部際の明瞭なヨコナデ以外、はっきりとしない。ミガキの可能性もあるが、単位は明瞭に観察できない。外面の口縁端部と一次口縁から二次口縁への屈曲部、内面の口縁端部には、それぞれ刻み目が施される。庄内式。**426** は広口壺 C。内外面とも剥離が著しく、外面頸部にタテミガキが観察できる以外、調整は不明。上下に拡張した口縁部外面には 5 条の沈線を巡らす。頸部の屈曲は比較的明瞭である。弥生時代後期中～後葉。**427** は広口壺 A。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部は直線的に伸び、端部は明瞭な面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**428** は脚台付細頸壺。口縁部は内外面ともヨコナデ。外面、頸部以下、体部、脚部ともにタテミガキ。内面、頸部はナデで、一部に接合痕が残る。体部内面、肩部もナデと思われ、以下がハケ。脚部内面はナデと思われ、脚柱部にはシボリ目が残る。なお、脚部には穿孔が施されるが、残存部分では方向数は不明である。脚部形態は通常の後期に見られる高坏と同様である。体部は横方向に強く張り、頸部との境は不明瞭で、緩やかに移行する。頸部は直立し、口縁が緩やかに外反する。在地では見出しがたい形態と考えられ、外来系の可能性が考えられる。紀伊 V-4 様

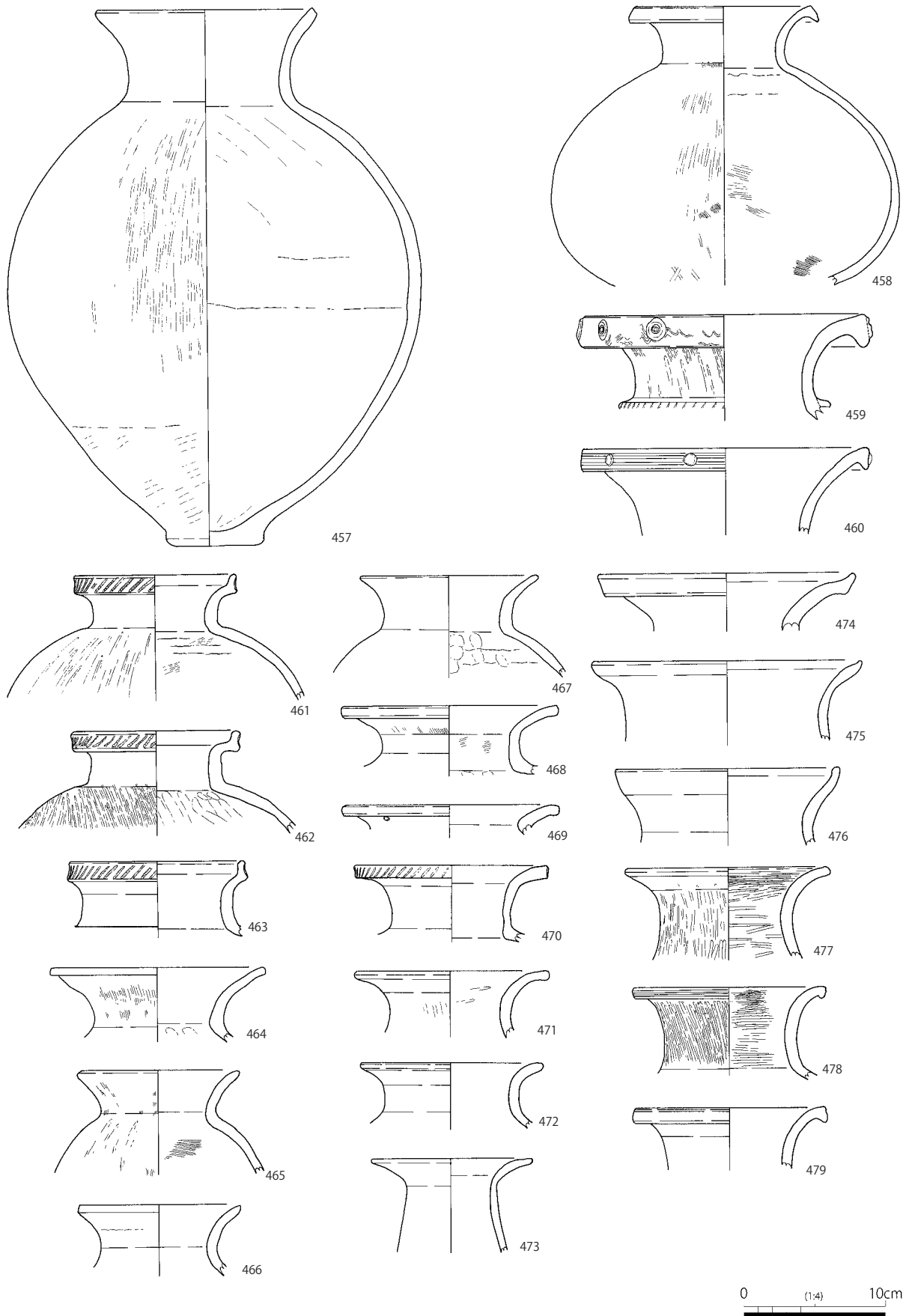


図 57 溝出土遺物 (22) (64 溝東部・上層上部 1)

式の船岡山遺跡竪穴住居跡 S B 07 例と脚部形態が類似し、同 V-5 様式の亀川遺跡第 4 次第 IV・V 層の例と体部形態がやや類似する点から、紀伊からの影響が考慮される。この判断が妥当であれば、弥生時代後期後葉頃だろう。**429** は長頸壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁部外面には、4 条の沈線が施される。逆ハの字状に開く頸部で、口縁部は短く外反する。口縁部の形状からは、長頸壺ではないようにも見える。長頸壺であれば、弥生時代後期後葉頃。**430・431** は広口壺か。**430** は外面摩滅のため調整不明。内面はハケ。体部はやや肩が張る器形で、底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉頃。**431** は内外面とも剥離が著しい。外面は、頸部下部和体部外面肩部、底部付近にのみ、わずかに器面が残る程度である。これらにはタテミガキと思われる調整痕跡が見られる。内面は、頸部から体部上半にかけては調整不明で、底部付近にハケが見られる。胴部中位の破片を欠き、図上にて復元している。弥生時代後期後葉～庄内式頃。

432～436 は甕。**432** は弥生形甕 A b h。全体的に摩滅気味。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は、右上がりのタタキ（3 条/cm）だが、残存状況は悪い。体部内面は調整不明で、肩部には接合痕が残る。長胴気味であり、弥生時代後期後葉。**433** は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5 条/cm）だが、摩滅のため残存状況は悪い。内面は剥離のため調整不明で、接合痕が残る程度。口縁端部は弱く拡張し、鈍く面を持つ。弥生時代後期中葉～後葉。**434** は口縁 e。口径から、弥生形甕 A b の可能性が考えられる。外面、口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ（3 条/cm）。内面は剥離のため調整不明。剥離のためもあるが、体部の器面は薄い。頸部の屈曲も明瞭である。口縁端部付近は、外面も剥離しているのだが、端部をつまんでいる。体部外面のタタキも比較的細かく、庄内形甕の影響を受けているようにも見える。庄内式頃か。**435** は弥生形甕 A d か。外面は右上がりのタタキ（3.5 条/cm）だが、摩滅のため良好には残存しない。内面は、わずかにハケ目が残る。底部外面はドーナツ底で、中央部が小さく窪む。体部はやや丸味を帯びているが、底部は明瞭で、口縁部は残存しないが、口径が体部最大径を上回るだろう。弥生時代後期後葉。**436** は弥生形甕 A e か。体部外面右上がりのタタキ（3 条/cm）。内面は、剥離のため調整不明。体部はやや球形化しており、底部への突出も顕著ではない。弥生時代後期末頃。

437・438 は高坏。**437** は内外面とも摩滅のため調整不明。裾部に穿孔が見られるが、1 方向が残存するのみで、方向数は不明。脚部は緩やかに開き、脚柱部から裾部への屈曲はない。中実気味であり、庄内式初頭頃。**438** は外面坏部タテミガキだろう。脚部外面もミガキと思われるが、単位は確認できない。内面は、脚・坏部共に調整不明。細い脚柱部である。弥生時代後期後葉頃。**439** は台付鉢の台部か。内外面とも剥離のため調整不明。底部は円板充填による。全体的に鈍重なつくりである。弥生時代後期か。**440・441** は有孔鉢。**440** は有孔鉢 B b。外面右上がりのタタキ（3 条/cm）だが、底部付近には見られない。摩滅のため十分には観察できないが、底部付近はもともとタタキを施していなかったと思われる。内面はわずかにハケが残る程度で、ハケ後ナデだろう。なお、底部の孔部分にはシボリ目が見られる。底部の外面にタタキが施されていない部分と内面で分厚い部分とは一致する。このことから、底部を絞り込んで成形した後、上部に粘土を積み上げ、タタキを施していったと推測できる。庄内式前半。**441** は体部外面右上がりのタタキ（2.5 条/cm）で、底部はナデ。内面は全体的に摩滅気味だが、弱くハケと原体の静止痕が見出せる。底部の穿孔は内側から外側へ施されており、底部外面には孔の周囲に粘土がはみ出したままになっている。底部は突出しており、弥生時代後期後葉か。**442** は器台。外面は大部分の器面が剥離するが、裾部にわずかに残る器面でタテミガキが観察できる。内面

は受部上部、口縁部付近にはヨコナデが、これより下には横方向を基調としたミガキが、それぞれ見られる。筒部には弱くシボリ目が残る、以下、脚部は調整不明である。穿孔は見られない。弥生時代後期後葉。443は蛸壺。外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、端部まで至る。内面は大部分の器面が剥離しているが、わずかに残る器面にはヨコナデが見られる。庄内式か。

以上、64溝中央部下層出土遺物は、弥生時代後期中葉～庄内式前半にかけての遺物が出土し、後期後葉～庄内式の遺物がほとんどである。この傾向は、上層下部と同様と考える。

444～456は断面観察用に残したアゼよりの出土だが、大部分が上層下部相当である。

444～446は壺。444は広口直口壺か。内面及び口縁部上半は、剥離のため調整不明。口縁下部～体部外面はハケ。口縁は内湾。庄内式初頭頃か。445は広口壺A。内外面とも剥離のため調整不明だが、内面肩部には指頭圧痕が残る。弥生時代後期後葉～庄内式。446は広口長頸壺。外面、口縁部はヨコナデ、頸部はタテミガキだが、摩滅のため良好には観察できない。わずかに残る体部の調整は不明。内面は、口縁部が剥離し、以下頸部、体部とも摩滅や付着物のため調整不明である。弥生時代後期後葉。

447～449は甕。447は弥生形甕A c hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）だが、剥離が著しく、残存状況は悪い。体部内面はハケ。頸部の屈曲は比較的明瞭で、口縁は他のものより短いように思える。体部は比較的球形化している。弥生時代後期後葉～庄内式。448は外面右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面は、底部にわずかながらハケの痕跡が残る。底部は明瞭に突出し、外面は鈍いドーナツ底である。弥生時代後期後葉。449は鉢の可能性もある。外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面はハケだが、良好に残存せず、工具痕が見られる程度。体部は球形化していないことが予想される。底部は上げ底。弥生時代後期後葉。

450は有孔鉢B。内外面とも、摩滅が著しく、内面中位にヨコハケがわずかに観察できる以外は調整不明である。ただし、外面はごく粗い凹凸がみられ、タタキの可能性はある。口縁があまり開かず、細身の器形である。弥生時代後期後葉～庄内式前半。451は小形鉢Aか。内外面とも摩滅のため調整不明。底部は中央が弱く窪む不明瞭なドーナツ底で、体部はあまり開かない。弥生時代後期後葉～庄内式。452は小形鉢B。内外面とも剥離のため調整不明。底部は上げ底。弥生時代後期後葉～庄内式頃。453はミニチュア壺。内外面とも摩滅のため調整不明。摩滅のため誤認の可能性もあるが、口縁部は生きていたと考えた。長頸壺を模しているようにも見える。この判断が妥当であれば、弥生時代後期後葉頃だろう。454は有稜高坏A。内外面とも剥離のため調整不明。杯部、屈曲後口縁が外反するが、途中で強く外反する。弥生時代後期中～後葉。455は椀形高坏か。内外面とも剥離のため調整不明。坏～脚部への屈曲は比較的明瞭で、脚柱部から裾部へも鈍いながら屈曲する。脚柱部は中実気味である。脚裾部には穿孔が施されるが、その上端部が残るのみながら、4方向と思われる。庄内式。456は有稜高坏Aか。内外面とも剥離が著しく、脚部外面にわずかに残る器面にタテミガキと思われる痕跡が見られる以外、調整不明。ただし、脚柱部内面にはシボリ目が残る。脚部には4方向のやや径の大きいスカシが施される。これより下位の残存部下端にも、スカシが施されているようだが、ほとんどが残存しない。ただし、上部のスカシと互い違いの位置に4方向に施されていたと推測される。坏部と脚部とを図上復元したものなのだが、坏部外面の脚部との接合部分はへそ状に突出しており、円板充填と推測できる。弥生時代後期後葉。

以上、64溝中央部出土遺物は、弥生時代後期中葉～庄内式中頃までの遺物を含み、後期後葉～庄内式初頭、もしくは前半までがそのほとんどである。

64 溝東部 (図 57～77 - 457～820)

457～572が上層上部、573～719が上層下部、720～790が下層、791～820が断面観察用に残したアゼなどから出土した遺物である。

457～494は壺。457～479は広口壺。457は広口壺A a。全体的に剥離、摩滅が著しく、調整不明瞭。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部は外面底部付近に右上がりのタタキ痕が、体部中位にはタテミガキが見られる。内面は底部付近と肩部に板状工具痕が観察でき、ハケだろう。体部は中位付近に最大径を持つものの、全体的に長細く、中位に張りがある形態ではない。弥生時代後期後葉。458は広口壺Cか。全体的に剥離、摩滅が著しい。やや垂下する口縁部外面には中央部分に沈線とも見えるごく弱い窪みが見られるが、器面が剥離しており、不明瞭。以下頸部まで内外面とも調整不明である。頸部直下の体部外面にはごくわずかにハケが見られる。他に、体部外面には部分的にハケが見られ、一部でミガキがこれを切り、体部外面はハケ後タテミガキだろう。体部内面は肩部に接合痕が残る。以下、体部最大径部分や下部にはハケがわずかに観察できる。頸部の屈曲は外面では比較的明瞭だが、内面は鈍い。頸部はやや内湾気味に伸びた後外反し、口縁部は垂下する。体部はやや下膨れ気味である。弥生時代後期後葉頃。459は広口壺Cか。頸部外面はハケ後ミガキで、口縁部付近にはミガキが及ばず、ハケが明瞭に残る。口縁端部は波状文を施した後、12方に円形浮文を付し、竹管文を施す。波状文の条数は器面の剥離のため十分には観察できない。頸部下には粘土紐をめぐらせ、刻み目を施す。内面は、剥離のため調整不明。弥生時代後期後葉。460は広口壺C。内外面とも器面剥離のため調整不明。口縁端部は下方に垂下し、外面には3条の沈線を施した後、円形浮文を付す。弥生時代後期後葉。461～463は、いずれも受け口状口縁で、上端に弱く面を持ち、口縁部外面に櫛状工具により刺突が施される広口壺。461は内外面とも剥離、摩滅が著しい。頸部はヨコナデ、体部はタテミガキだろう。内面は、口縁端部付近に強いヨコナデが見られるが、これ以下は剥離が著しく、調整不明。体部の肩部付近には接合痕が見られ、わずかにハケと思われる痕跡が見られる。口径はやや異なるが、調整が同様であり、463と同一個体の可能性が高い。ただし、接合できない。色調も異なるが、これは埋没時の状況に起因するものかもしれない。462は口縁～頸部内外面ともヨコナデ。体部外面は斜め方向のミガキで、内面はナデで、指頭圧痕が見られる。頸部はややハの字状に直線的に立ち上がり、横方向に屈曲した後、再度上方向につままれ、分厚い受け口状を呈する。463は口縁外面ヨコナデ。以下頸部の外反部分まで比較的明瞭にヨコナデが見られる。以下、頸部は器面が剥離する部分では縦方向のナデもしくはハケのような痕跡が見られ、器面が残る部分ではヨコナデと思われる痕跡が見られるが、いずれも不明瞭ながら、タテハケ後ヨコナデの可能性はある。頸部と体部の境目には、沈線が施されているようだが、残存部位が小さく不明。内面は大部分が摩滅しており、調整が十分に観察できないが、口縁端部はヨコナデだろう。これ以下は、調整不明。これらは、在地で該当する器形と施文を持つ土器は思いつかず、広義の近江系もしくは山城系などとされるものだろうか。そうであれば、山城Ⅳ-3様式、弥生時代中期後葉頃か。ただし、体部の厚みなどからは、後期前葉まで下る可能性も考えられる。464～467は広口壺A。464は外面タテハケ後ヨコナデ、内面は剥離が著しいが口縁～頸部はヨコナデで、体部は指頭圧痕が残り、ナデだろう。頸部の屈曲は鈍く、頸部は逆ハの字状に外反しながら開き、口縁端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。465は口縁部外面タテハケ後ヨコナデ。体部外面はタテハケ後ミガキと思われるが、ミガキは不明瞭。口縁部内面はヨコナデ、体部はハケだが、器面の剥離が著しく、一部しか残存しない。頸部の屈曲はやや鈍く、口縁部が逆ハの字状に外反する。口縁部は短い。弥

生時代後期後葉～庄内式。**466**は内外面とも剥離のため調整不明。体部～頸部への屈曲は鈍く、逆ハの字状の短い頸部から弱く口縁部が外反する。口縁端部は丸く収めるが、弱く上方につまむようにも見える。弥生時代後期中～後葉。**467**は内外面とも剥離のため調整不明。体部内面には約1.7cm間隔で接合痕が見られ、指頭圧痕も見られる。外面は、体部～頸部、頸部～口縁部への屈曲が、それぞれやや鈍く、明瞭な稜は持たない。内面も同様だが、外面よりは屈曲が明瞭ではある。弥生時代後期後葉～庄内式。**468**は広口壺B。口縁部は内外面ともヨコナデ。外面は頸部～口縁部にタテハケが施されるが、良好に残存するのは頸部～口縁部への屈曲部分など一部のみ。このことから、ハケ後ナデの可能性もある。わずかに残る体部の調整は不明である。内面は頸部にヨコハケがわずかに観察できる。体部には指頭圧痕が見られ、ナデだろう。体部～頸部、頸部～口縁部への屈曲は、内面で明瞭だが、外面はさほど明瞭ではない。口縁端部は下方向への強いヨコナデによるものか、ごく弱く垂下する。弥生時代後期後葉～庄内式。**469**は甕とすべきか。口縁部内外面ともヨコナデだろう。口縁部外面の端部際には、竹管文とも思われる痕跡が見られるが、残存部位が小さく等間隔に付されている文様状のものか、意図せざる痕跡かは不明。口縁端部は明瞭に面を持つ。弥生時代後期前葉頃。**470～472**は広口壺A。**470**は内外面とも剥離のため調整不明だが、口縁端部外面には櫛状工具による刺突が約0.5cm間隔に施される。体部から頸部への屈曲は、比較的明瞭で、これに比べれば鈍いが、頸部から口縁部への屈曲も明瞭である。口縁部は弱く拡張する。弥生時代後期後葉～庄内式。**471**は剥離のため調整不明瞭ながら、外面口縁部はヨコナデ、頸部はタテミガキだろう。内面はわずかにヨコミガキが残る。頸部～口縁部への屈曲はやや鈍い。口縁端部は外面に弱く面を持つようにも見える。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**472**は内外面とも剥離のため調整不明。外面は、体部～頸部、頸部～口縁部への屈曲部分が比較的明瞭である。弥生時代後期後葉～庄内式。**473**は広口壺Bか。内外面とも剥離のため調整不明。ハの字状の頸部から比較的明瞭に口縁部が屈曲し、口縁端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**474**は広口壺Dか。内外面とも剥離のため調整不明だが、内面にわずかに残る器面にはヨコナデが見られる。頸部から逆ハの字状に口縁が開き、端部は上につまむことで拡張している。弥生時代後期後葉か。**475**は広口壺Aか。内外面とも剥離、摩滅が著しく、口縁部内外面のヨコナデ以外、調整不明。直立気味の頸部から口縁部が鈍く外反し、口縁端部はヨコナデにより、やや内湾気味である。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**476**は内外面とも剥離のため調整不明。一度外反した頸部から内湾気味の口縁部が立ち上がり、端部は肥厚する。弥生時代後期か。**477～479**は広口壺A。**477**は口縁部外面ヨコナデか。頸部外面は密なタテミガキ。内面は、口縁部がヨコミガキ。頸部の調整は十分に観察できないが、ヨコナデか。体部～頸部、頸部～口縁部への屈曲は、それぞれ鈍い。弥生時代後期後葉～庄内式。**478**は口縁部外面ヨコナデ、頸部タテミガキ。口縁～頸部内面はヨコミガキ。体部～頸部の屈曲は比較的明瞭。頸部～口縁部への屈曲は不明瞭で、口縁部は短い。口縁端部は拡張し、下側へ巻き込む。狭いが拡張した口縁端部外面には、櫛描直線文が施される。弥生時代後期後葉か。**479**は内外面とも剥離のため調整不明だが、外面口縁部はヨコナデ、頸部は縦方向の調整と思われる。口縁端部は拡張するが、上下端に沈線が弱く施される以外、特に装飾は施されない。弥生時代後期後葉。**480～482**は二重口縁壺。**480**は剥離のため内外面とも調整不明。頸部には凸帯が付され、刻み目が施されるが、残存状況はきわめて悪い。二次口縁部分外面下端には、円形浮文が付される。頸部から強く外反し、さらに二次口縁が弱く外反する。庄内式。**481**は剥離のため内外面とも調整不明。二次口縁は比較的直線的であり、庄内式か。**482**は内外面とも剥離が著しく調整不明。外面は、二次口縁上に3条の沈線を施し、口縁

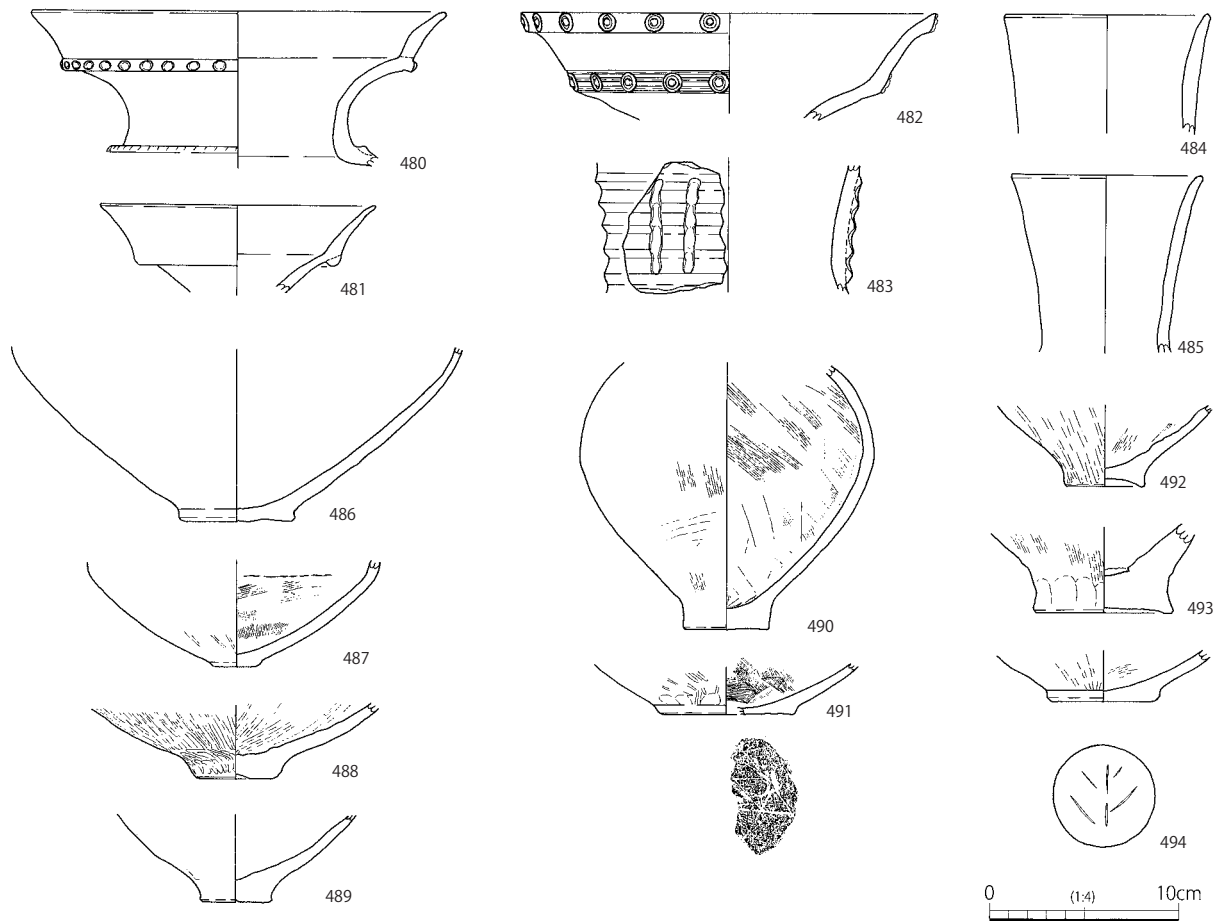


図 58 溝出土遺物 (23) (64 溝東部・上層上部 2)

端部と屈曲部に円形浮文を付し、竹管文を施す。残存部位は口縁部の5分の1程度だが、口縁部の浮文は約3cm間隔、屈曲部の浮文は約2.5cm間隔で付され、加飾傾向にある。頸部への屈曲はうかがえないが、頸部の径を推定すれば、残存部位のすぐ先で頸部へ屈曲することが予想でき、比較的シャープに頸部へ屈曲すると思われる、複合口縁壺Bとも考えられる。また、残存部位下部である頸部から屈曲した一次口縁部分は、弱く外反はするものの、比較的直線的であり、二次口縁も途中まで直線的で、最終的に強く屈曲している。庄内式初頭頃か。**483**は内外面とも剥離のため調整は不明だが、外面には残存部分で5条の凸帯を付し、さらに縦方向に2条の棒状浮文が付される。摂津地域など瀬戸内地域の影響を受けた直口壺か。弥生時代中期後葉頃。**484・485**は長頸壺で、いずれも剥離のため調整不明。**484**は分厚く、やや雑なつくりである。**485**は口縁が弱く外反気味。いずれも弥生時代後期後葉。**486**は内外面とも剥離のため調整不明。底部外面は弱く窪む。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**487**は外面大部分が剥離しているが、わずかに残る器面にはタテミガキが見られる。内面はハケ。底部はごく小さく、急激に横方向に広がるような体部で、直口壺か。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**488**は外面タテミガキ。内面はやや摩滅気味であり調整不明瞭ながらハケ。底部付近の破片だが、体部の球形化が進んでいるものと思われる、庄内式頃か。**489**は内外面とも摩滅のため調整不明だが、外面はミガキのようにも見える。底部外面は中央部分が若干狭く窪む程度。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**490**は体部外面下位にタタキと思われる痕跡がわずかに残る。また、ハケ痕跡も見られ、タタキ後ハケだろう。内面は、板状工具痕が底部に見られるが、ハケは良好に観察できず、底部～体部下半は、ハケ後ナデだろう。ただし、胴部最大径付近～上部は、ハケが明瞭に観察できる。器形からは長頸壺の可能性が考えられ、妥当であれ

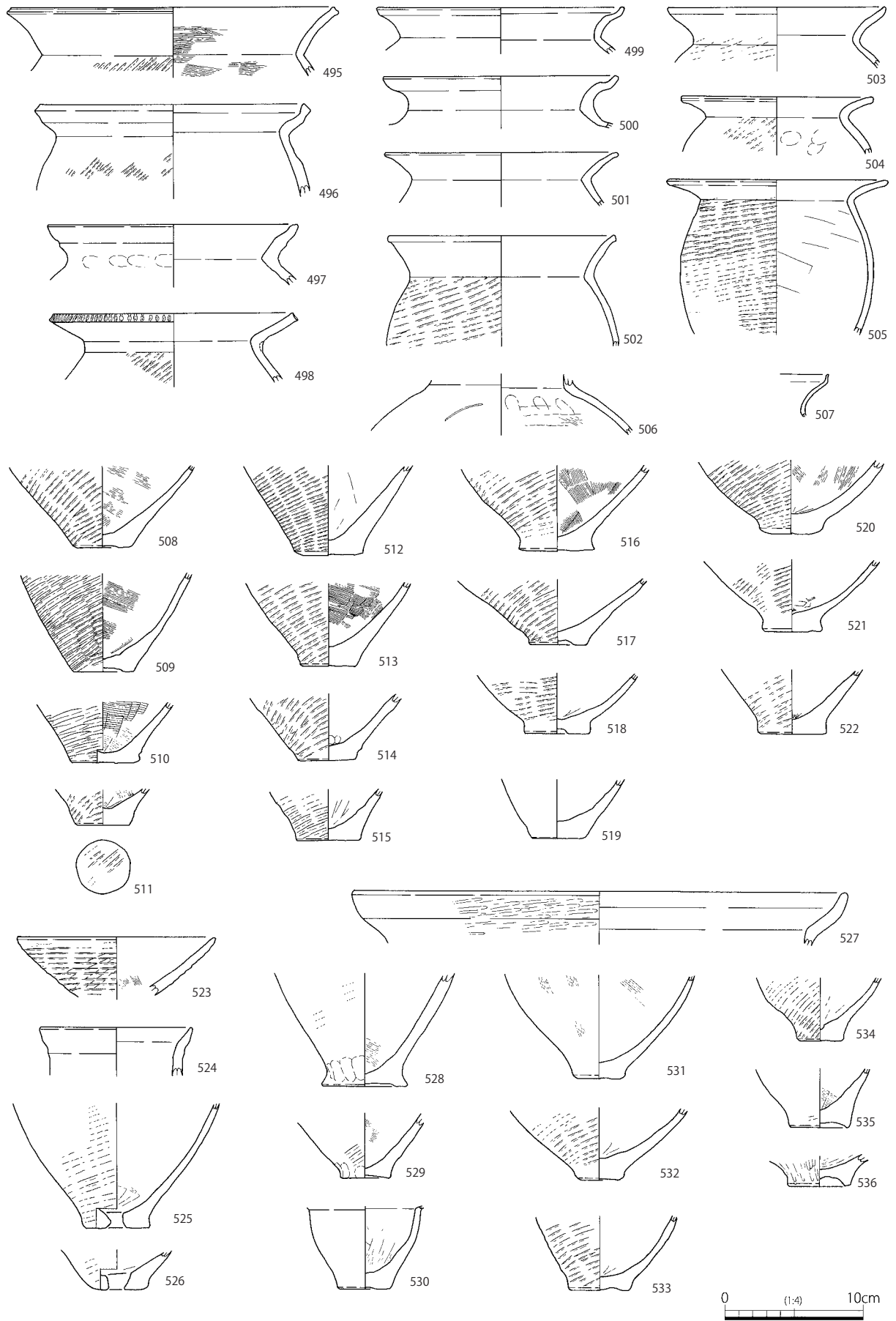


図 59 溝出土遺物 (24) (64 溝東部・上層上部 3)

ば弥生時代後期後葉。**491**は外面摩滅気味だが、タテミガキ、内面はハケ。薄手の底部外面には、複数方向の木の葉文が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**492**は外面がタテミガキであり、壺と推測した。内面は剥離が著しいが、わずかにハケが見られる。底部は上げ底気味。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**493**は体部外面ハケで、底部付近にはその後のナデが見られる。器面の剥離で、調整不明瞭。内面はナデだろう。接合痕が明瞭に残る。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**494**は体部外面タテミガキだろう。内面はわずかにハケが見られる。底部外面には木の葉文が見られる。いずれも、器面の摩滅のため十分には観察できない。弥生時代後期後葉～庄内式頃だろうか。

495～**522**は甕。全体をうかがえる資料がなく、器高を基準とした分類には適合させられないが、弥生形甕A cかA dを中心とした資料だろう。**495**は弥生形甕A bの可能性があり、口縁gか。口縁部外面はヨコナデ、内面は頸部際にハケが見られ、ハケ後ヨコナデだろうか。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）で、頸部直下までである。内面はハケ。頸部は比較的明瞭に屈曲し、口縁はほぼ直線的で、口縁端部は強いヨコナデによるものか、窪む。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**496**は口縁Cか。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（4条/cm）だが、中位にわずかに残存するのみである。内面は剥離のため不明。口縁部は二段にヨコナデが施され、弱く受け口状を呈する。口縁端部は内側に摘まれ、外傾する面を持つ。弥生時代後期中～後葉頃か。**497**は口縁部内外面ともヨコナデで、口縁部下外面には指頭圧痕が見られる。体部は内外面ともナデと思われるが、残存部位が小さく、摩滅もあり不明瞭。外面に明瞭なタタキ痕跡は見られない。頸部の屈曲は特に内面で明瞭で、口縁部は弱く内湾気味である。上部で強いヨコナデが施され、内外面とも弱く屈曲し、やや器壁が薄くなる。全体的に鈍重なつくりで、奇異な感のする土器である。弥生時代後期か。**498**は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）、内面はナデだろう。頸部外面にはタタキ後、粘土が付されており、強くヨコナデが施されている。口縁部は弱く内湾気味で、端部には刻み目が施される。弥生時代後期中～後葉か。**499**は内外面とも剥離のため調整不明。頸部～口縁部が外反し、端部は受け口状を呈するが、外面の屈曲は鈍い。弥生時代後期中～後葉。**500**は内外面とも剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部は内外面とも調整不明である。わずかに残る体部にタタキ痕跡は見られない。頸部から口縁部が外反し、端部がつまみ上げられ、受け口状を呈する。弥生時代後期中～後葉。**501**は口縁h。内外面とも剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的鋭く、弱く外反気味ながら概ね直線的に口縁が伸びる。口縁端部は丸く収めるが、若干下方へ垂れ下がる。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**502**は口縁hか。全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、内面は調整不明。頸部の屈曲は特に内面でシャープである。なお、頸部外面には接合痕が見られ、これ以下でのみタタキが観察できる。口縁部は弱く外反し、端部は概ね丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**503**は口縁fか。全体的に剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキと思われる。内面は調整不明。体部外面のタタキは頸部やや上まで及ぶ。口縁部は弱く外反気味で、端部はごく弱くつままれる。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。**504**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキだが、残存状況は悪い。内面はナデで、指頭圧痕が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**505**は口縁h。内外面とも口縁部ヨコナデ。体部外面は右上がり～水平のタタキ（2.5条/cm）で、口縁部下端にまで及ぶ。内面はハケだが、工具痕が残る程度。口縁部は横方向に広がる。口縁部径が体部最大径を上回り、体部もさほど球形化が進んでいない。弥生時代後期後葉頃。**506**はわず

かに残る口縁部内外面ともヨコナデだろう。体部外面は剥離のため調整不明だが、ヘラ状工具による線刻と思しき痕跡が見られる。体部内面には短い単位で接合痕が見られる。調整は明瞭には観察できないが、ハケがわずかに見られる。調整はやや異なるが、上層下部の641同様の甕で、庄内式頃か。507は口縁部の小片だが、薄手で口縁端部が明瞭に摘まれ、庄内形甕を思わせる。ただし、口縁部は外反し、頸部の屈曲も鈍く、端部の摘み上げも長すぎるようにも思える。庄内形甕の影響を受けている可能性はあり、庄内式頃としておく。508は体部外面右上がりの連続ラセンタタキ(2.5条/cm)、内面はハケ。底部外面には、成形の際についたと思われる、木の葉の圧痕が見られる。底部の突出は見られない。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。509は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)、内面はハケ。底部への突出はなく、底部外面は中央部が明瞭に窪む。弥生時代後期後葉。510は外面、右上がりのタタキ(2条/cm)、内面はハケで、明瞭に残る。底部は明瞭には突出しない。弥生時代後期後葉。511は外面右上がりのタタキ(3条/cm)で、底部外面にもタタキを施す。内面はハケ。弥生時代後期後葉。512は外面右上がりのタタキ(3.5条/cm)、内面はわずかにハケ目が残る。底部は明瞭に突出しない。底部外面は平底で、明瞭な窪みは見られない。弥生時代後期後葉。513は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)、内面は細かいハケ。底部は明瞭には突出しない。弥生時代後期後葉。514は外面右上がりのタタキ(3条/cm)。内面はナデで、底部には指頭圧痕も見られる。底部は突出せず、外面は平底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。515は体部外面右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は板状工具の静止痕跡が見られ、ハケだろう。底部外面はナデで、中央部分がごく弱く窪む。弥生時代後期後葉。516は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面は斜め方向のハケ。底部外面は平底だが、中央部分が弱く窪む。なお、底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉～庄内式前半。517は外面右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は、剥離のため調整不明だが、ハケ目とも思われる痕跡がわずかに観察できる。底部外面は中央部分が明瞭に窪む。弥生時代後期後葉～庄内式。518は体部外面タタキ(4条/cm)で、比較的細かい原体を使用している。残存部位では右上がりを中心としているようではあるが、水平や左上がりなども見られる。内面は底部にクモの巣状ハケが見られる。底部外面は中央部が明瞭に窪む。弥生時代後期後葉～庄内式。519は内外面とも調整不明。外面はタタキとも思えるが、剥離、摩滅のため不明瞭。底部は突出せず、外面は平底。弥生時代後期後葉。520は外面右上がりのタタキ(4条/cm)。内面はハケ。底部の突出は弱い。弥生時代後期後葉～庄内式。521は外面右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は摩滅しているが、底部にわずかながらハケが残る。底部は明瞭に突出し、外面は平底。弥生時代後期後葉～庄内式。522は外面右上がりのタタキだが、摩滅気味。内面は器面が剥離しており、調整が十分に観察できないが、ハケだろう。底部は比較的明瞭に突出し、外面は平底で窪みは見られない。弥生時代後期後葉。

523～536は鉢。523は小形鉢AかB。外面は右上がり後水平のタタキ(2条/cm)。内面は大部分が剥離しており、調整が良好に観察できないが、下端部でわずかにハケが観察できる。浅い鉢状の形態で、端部は丸く収める。庄内式頃か。524は小形鉢Dか。内外面とも、口縁部ヨコナデ、体部ナデと思われる。垂直に近い体部から口縁がヨコナデにより逆ハの字状に伸び、端部に向かい先細り気味となっている。庄内式中頃か。525は有孔鉢B。体部外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はハケ。いずれも、剥離のため残存状況は悪い。弥生時代後期後葉～庄内式前半。526は有孔鉢。内外面とも摩滅が著しい。外面は右上がりのタタキ、内面はハケと思われるが不明瞭。庄内式の有孔鉢Aか。527は大形鉢。外面はヨコミガキで頸部にはこれ以前のヨコナデが見られる。内面は剥離のため調整不明。

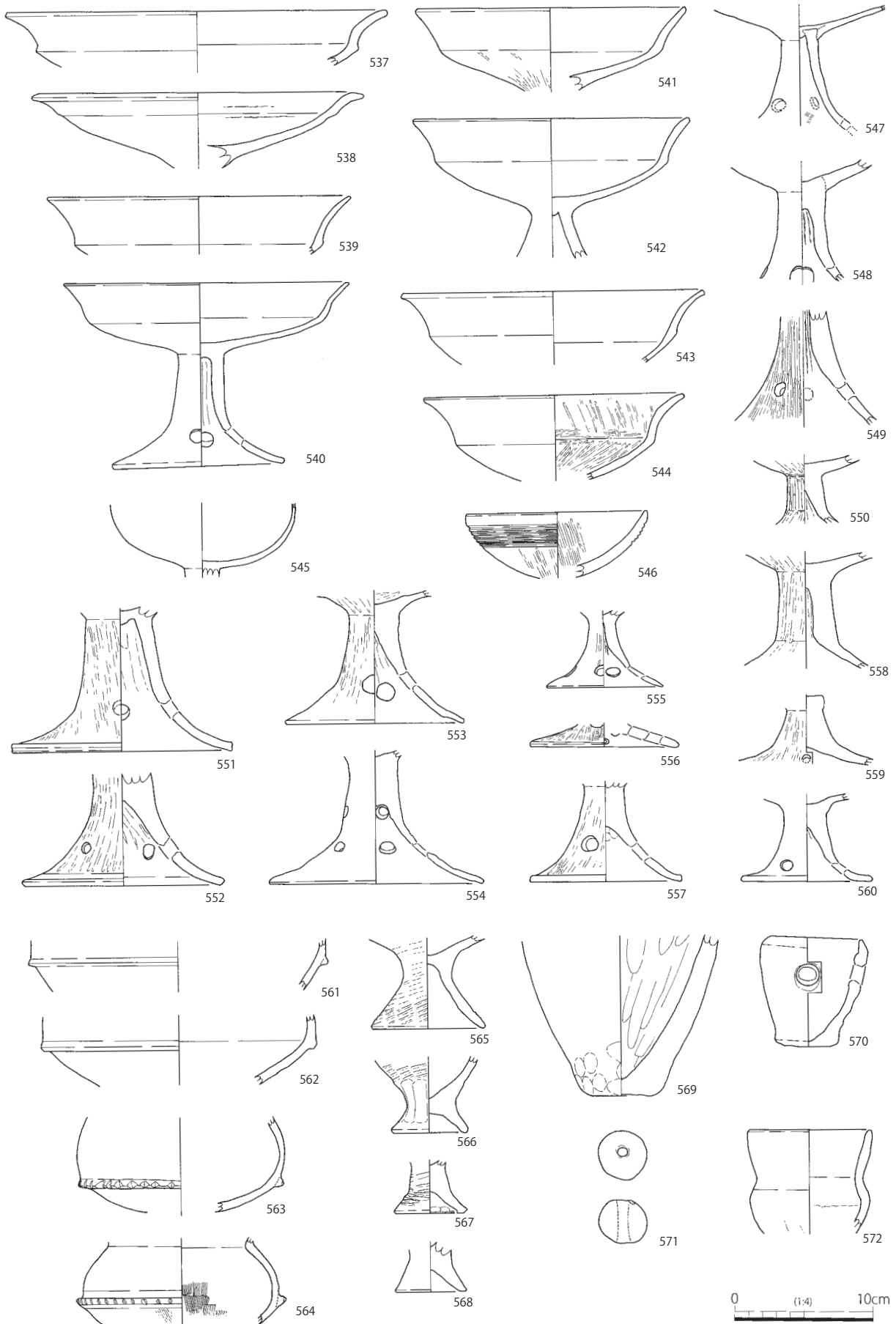


図60 溝出土遺物(25)(64溝東部・上層上部4)

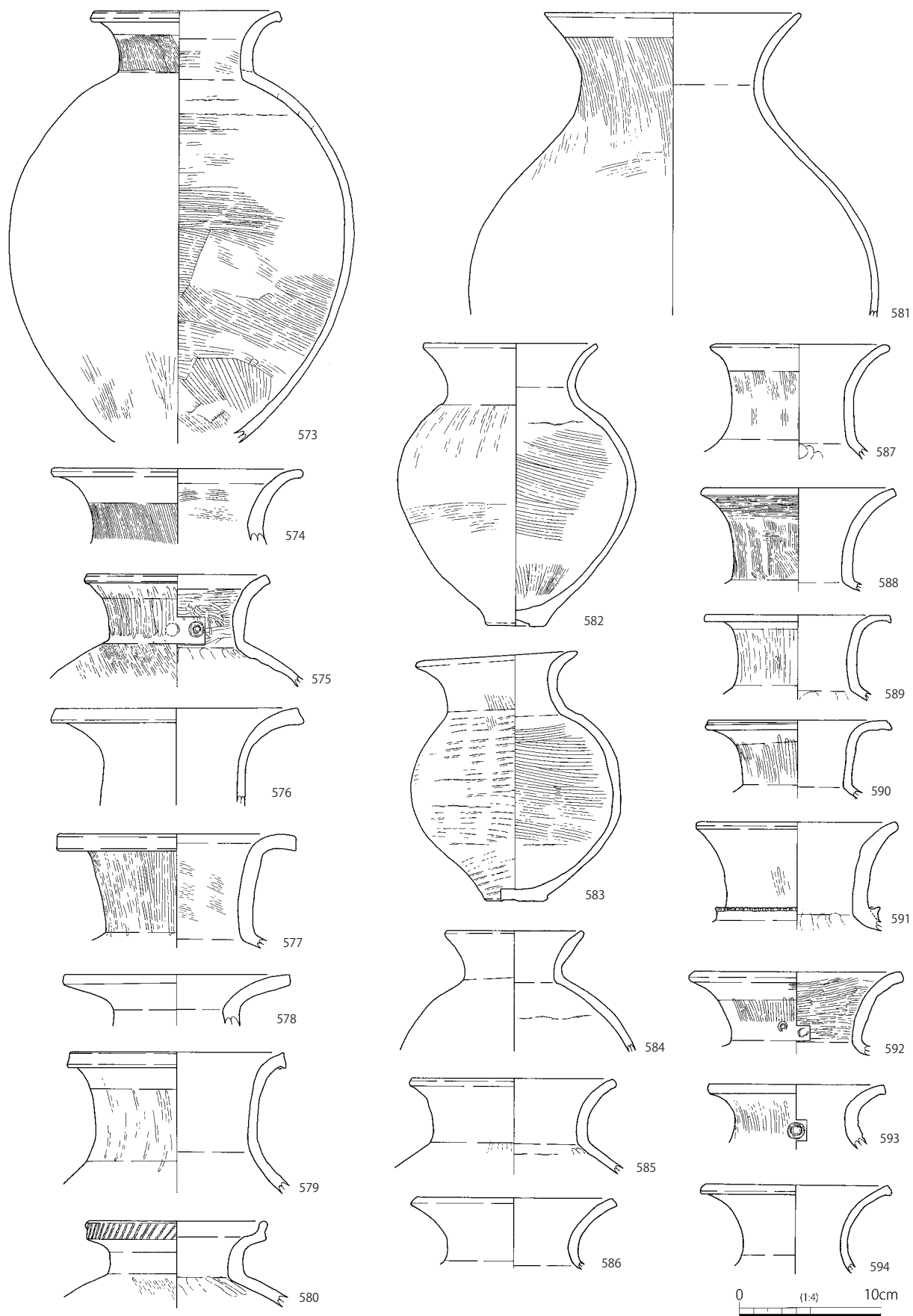


図 61 溝出土遺物 (26) (64 溝東部・上層下部 1)

内湾気味の口縁部片で、受け口状を呈するが、屈曲はごく鈍い。弥生時代後期後葉か。528は小形鉢Bか。外面には、わずかに右上がりのタタキと思われる調整が一部で見られ、タタキ後ナデだろう。なお、底部付近には指頭ナデが見られる。内面は底部付近にはハケ目が見られ、全面では不明ながら、ハケと思われる。底部付近を中心に二次焼成を受けており、甕の可能性もある。弥生時代後期中～後葉か。529は小形鉢Aか。外面は摩滅が著しいが、わずかに右上がりのタタキ(2条/cm)が確認できる。なお、底部付近にはナデが施される。内面は大部分が剥離しているが、わずかに残る器面にはヨコハケが見られる。底部外面は中央に向かい徐々に窪む。弥生時代後期後葉～庄内式。530は外面摩滅のため調整不明。タタキ痕跡は確認できない。内面は底部付近にハケ目が残る。底部外面は中央部が弱く窪むが不明瞭である。64溝中部上層下部の379と同様なものだろうか。弥生時代後期後葉頃。531～534は小形鉢Aか。531は外面残存部位上端部にハケ目がわずかに見られ、ハケ後ナデだろう。内面はナデで一部ハケが見られる。調整が比較的丁寧であり、壺の可能性もある。弥生時代後期後葉～庄内式頃。532は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面は、剥離のため調整不明だが、底部にわずかながら板状工具の静止痕が見られる。底部径が小さめであり、鉢と考えたが、甕の可能性もある。弥生時代後期後葉～庄内式。533は外面右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面は、底部付近にハケが残るが、これ以外は剥離のため不明。底部外面は弱く窪むが、中央部が明瞭に窪む状況ではない。甕の可能性もある。弥生時代後期後葉。534は外面右上がりのタタキ(3条/cm)。内面は板状工具の静止痕が見られ、ハケと思われる。底部は小さめで、体部も内湾気味であることから、鉢とした。弥生時代後期後葉。535・536は小形鉢Bか。535は甕の可能性も考えられる。内外面とも剥離が著しいが、外面にはわずかにタタキと思われる痕跡が見られる。内面には底部付近にハケが残る。底部外面は上げ底。弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。536は内外面ともミガキで、底部外面はナデ。底部外面は明瞭に窪む。胎土は密だが、成形はやや粗い。弥生時代後期後葉～庄内式頃。

537～560は高坏。537～544は有稜高坏Aで、特に記さない限り、剥離のため内外面とも調整不明である。537はA2か。口縁部は明瞭に外反する。弥生時代後期後葉。538は坏底部～口縁部への屈曲部分に、接合痕が見られる。外反する口縁は短く、端部を横方向につまみ出すようにも見える。坏部はごく浅い。弥生時代後期中～後葉か。539～542はA3か。539の屈曲後の口縁は、短めで弱く外反気味である。弥生時代後期後葉。540の坏部は浅めだが、坏底部から外反する口縁は短い。脚柱部は中実ではなく、脚裾部への屈曲も明瞭ではなく、裾部も短めである。脚部には4方向の穿孔が見られる。弥生時代後期後葉。541は外面脚部側にわずかながらタテミガキが見られる。坏部はやや深めで、坏底部から屈曲後の口縁は外反するが、比較的直線的である。弥生時代後期後葉。542は坏部、屈曲後の口縁は短く、弱く外反する。弥生時代後期後葉。543・544はA4か。543は坏部が比較的深いと予想できる。屈曲後の口縁は弱く外反し、端部は方形の面を持つ。弥生時代後期末。544は外面剥離のため調整不明だが、おそらくミガキだろう。内面は、口縁端部側に縦方向の、口縁下部の屈曲部付近には横方向のミガキがそれぞれ見られる。両者に切りあいは十分には観察できないが、横方向後縦方向の順と思われる。坏底部はタテミガキ。屈曲後の口縁は外反し、やや長めではあるが、弥生時代後期末。545・546は椀形高坏。545は内外面とも剥離のため調整不明。口縁部が明瞭に内湾するが、坏底部と口縁部との境は不明瞭である。庄内式初頭頃。546は内外面ともミガキで、外面には6条の沈線が巡る。口縁はさほど内湾しない。弥生時代後期後葉か。547～560は脚部。547は内外面とも剥離が著しく、大部分の調整は不明だが、脚部内面にはわずかにハケが残る。脚柱部はナデだろう。

部にはおそらく2段に穿孔が施されていると推測されるが、いずれも部分的に残存するのみである。上側は2方向と思われるが、下側の方向数は不明。坏部と脚部の境は比較的明瞭に屈曲する。脚部と坏部の接合が良好に観察でき、脚部上端側面に粘土を付し坏部を成形するが、脚部頂部にも粘土を充填する円板充填法である。弥生時代後期後葉。548は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部内面にはシボリ目が残る。胎土は砂粒を多く含み粗い。脚裾部のスカシはいずれも部分的な残存で、4方向に復元できる。坏部と脚部の接合部分は比較的シャープである。接合方法は挿入付加法。庄内式初頭頃。549は脚部外面タテミガキ、内面は剥離のため調整不明だが、脚柱部にはシボリ目が残る。3方向にスカシを穿つ。脚柱部～裾部へは屈曲がない。弥生時代後期中葉。550は椀形高坏。外面は坏部と脚部の境目や、脚部にハケが残り、ハケ後タテミガキ。内面、坏部は剥離のため調整不明で、脚部はハケだろう。坏部と脚部の屈曲は明瞭で、脚柱～裾部への屈曲も比較的明瞭である。庄内式前半。551は外面、脚部は左上がり気味のタテミガキで、わずかに残る坏部の調整は不明だが、おそらくミガキだろう。内面坏部の調整は摩滅のため不明で、脚部はナデ。スカシが推定4方向に施される。脚端部は強いヨコナデによってか、弱く窪む。脚柱～裾部への屈曲は鈍い。弥生時代後期後葉。552は外面タテミガキで、脚端部はヨコナデ。内面はナデで、脚柱部にはシボリ目が見られ、脚端部はヨコナデだろう。脚部の穿孔は5方向。脚部はハの字状に弱く外反する。弥生時代後期中～後葉。553は外面、坏・脚部ともタテミガキ。ただし、器面の剥離は著しい。内面、坏部はミガキと思われる。脚部は剥離のため調整不明だが、脚柱部にはシボリ目が残る。脚柱～裾部の変換点付近に穿孔が見られ、4方向に復元できる。中実気味であり、庄内式初頭頃。554は内外面とも剥離のため調整不明。脚部には2段に穿孔があり、上が3方向、下が5方向。脚柱部は穿孔部分直上より中実である。庄内式。555は内外面とも剥離が著しいが、外面はタテミガキ。脚部内面はナデと思われるが、わずかに残る坏部は調整不明である。裾部には等間隔ではないが、4方向に穿孔が施される。弥生時代後期後葉。556は外面タテミガキだが、内面は剥離のため調整不明。穿孔が2段に見られ、下段は概ね残存し4方向だが、上段は部分的に残存しないものの2方向に復元できる。脚柱部への屈曲部分がわずかに残存するが、屈曲は鈍い。弥生時代後期後葉。557は外面タテミガキ、内面は剥離のため不明瞭ながらナデか。脚部はハの字状に緩く外反し、端部は鈍い面を持つ。中実気味であり、庄内式初頭頃。558は外面坏・脚柱部ともタテミガキで、脚裾部も同様と思われるが、不明瞭である。内面は、坏部がミガキ、脚柱部はシボリ目が見られ、裾部は摩滅のため調整不明だが、ナデか。脚柱～坏部への屈曲は比較的明瞭で、これより不明瞭だが脚柱～裾部への屈曲も比較的明瞭である。脚柱部は中実ではない。弥生時代後期後葉。559は椀形高坏か。外面タテミガキ、内面はナデだろう。裾部には穿孔が見られるが、その一部が見られるのみで、方向数は不明。残存部位上端側面は、坏部が剥がれ落ちており、挿入付加法によるものだろう。脚柱部は中実で、庄内式。560は内外面とも剥離のため調整不明。ただし、脚裾部外面にはタテハケとも思われる痕跡が見られるものの、調整なのか不明。小形の高坏脚部で、坏部と脚部との屈曲は鈍い。裾部には穿孔も見られ、一部破損するが3方向に復元できる。弥生時代後期中葉頃か。

561～564は手焙形土器で、いずれも鉢形部分の凸帯が付されているものである。561は調整不明。小片のため、復元径にやや不安がある。562は外面剥離のため調整不明。内面は屈曲部にわずかにヨコナデと思われる痕跡が残るが、これ以外は摩滅のため調整不明。現状で、凸帯上に刻み目など見られない。563は内外面とも調整不明。凸帯上には刻み目が見られる。564は内外面とも剥離が著しい。外面凸帯以上は調整不明、同以下はハケだろう。凸帯上にはD字型の刻み目が施される。内面は外面の

凸帯部分以下にタテハケが見られ、これより上位では斜め方向のナデと思われる。これらはいずれも、弥生時代後期後葉～庄内式頃だろう。

565～567は製塩土器。565は外面体部、脚部ともタタキだが、脚柱部の残存状況は悪い。内面は体部、脚部ともナデと思われる。一見高坏にも見えるが、脚部にタタキが施され、脚部長が短く、製塩土器と判断した。脚台Ⅰ式bで、弥生時代後期後葉～庄内式前半頃。566は体部外面右上がりのタタキ、脚部はナデ。内面は体部がハケ、脚部がナデだろう。脚台Ⅱ式aか。庄内式。567は脚部外面タタキが見られるが、脚端部には見られず、脚柱部のタタキもあまり明瞭ではない。内面はナデか。脚台Ⅱa式か。庄内式。568は脚台。内外面とも調整不明。外面には明瞭なタタキ調整は観察できない。製塩土器とも考えたが、形態、調整などやや異なる印象があり、ひとまず脚台としておく。製塩土器でよいのであれば、脚台Ⅱa式で庄内式か。569・570は蛸壺。569はいわゆる真蛸壺。内外面ともナデだろう。時期はよくわからないが、庄内式頃だろうか。570は蛸壺A。内外面とも剥離のため調整不明。外面にタタキ痕跡は確認できない。弥生時代後期後葉頃か。571は土錘。572は小形丸底壺か。口縁部は内外面ともヨコナデと思われる。体部外面は、縦方向のナデと思われるが、不明瞭。体部内面は、中位に接合痕が明瞭に残り、この上にごく弱くヨコナデが見られる。分厚く、粗いつくりの土器であり、精製器種の小形丸底壺とは異なる形式と思われる。長頸壺の最終的な型式の可能性もある。時期はよくわからないが、弥生時代後期後葉～庄内式頃か。

以上、64溝東部上層上部出土遺物は、弥生時代中期後葉の遺物を若干含むものの、弥生時代後期後葉～庄内式（初頭）の遺物が大多数である。

573～719は上層下部出土。

573～627は壺。573～601は広口壺で、特に記さない限り、広口壺Aである。573は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケだが、摩滅のため残存状況は悪い。体部外面は、肩部付近には比較的明瞭にタテミガキが認められるが、全体では良好に残存しない。しかし、器面の状況からは、全面が縦方向を基調としたミガキだろう。内面は横・斜め方向のハケ。胴部はやや縦長気味で、球形化はあまり進んでいない。口縁端部は強いヨコナデによって、外傾する弱い面を持つ。弥生時代後期後葉。574は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面はタテハケ、内面はヨコハケだが、内面は剥離が著しく、残存度は悪い。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。575は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部外面はタテミガキで、内面は横方向を基調としたミガキ。体部外面はハケ後縦方向を基調としたやや斜め方向のミガキで、頸部との屈曲部分にはヨコナデが施される。ミガキはいずれも、口縁部などのヨコナデ後に施される。体部内面はナデ。頸部下には推定2個を一単位とした竹管文が施される。頸部は約4分の3が残存するが、1方向にのみ施されていると推測される。口縁部は頸部から短く外反し、端部は面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。576は広口壺Dか。内外面とも調整不明。直線的もしくはややハの字状の頸部から口縁部への屈曲は鈍く、端部は肥厚する。弥生時代後期後葉。577は広口壺Bか。口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面はタテミガキで、内面はヨコハケ。体部調整は不明。口縁部は横方向に強く張り出し、端部は明瞭に面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。578は内外面とも剥離のため調整不明。頸部～口縁部への屈曲はさほど明瞭ではないが、鈍く屈曲した後、口縁が横方向に伸び、端部は外面に鈍く面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。579は広口壺Dか。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、内面は剥離のため調整不明。頸部外面はタテミガキで、わずかに残る体部外面はミガキと思われるが方向など不明。内

面は口縁部同様、剥離のため調整不明。体部から頸部の屈曲は極めて鈍く、頸部は逆ハの字状に立ち上がり、再度短く屈曲し口縁端部へ至る。口縁端部は上下に小さく拡張するが、外面に装飾などは見られない。弥生時代後期後葉。580は口縁～頸部内外面ともヨコナデだろう。体部外面は縦方向を基調としたミガキと思われるが、器面の剥離が著しく、十分には観察できない。体部内面も同様に剥離のため調整不明だが、肩部には指頭圧痕が見られる。口縁部は受け口状を呈し、摘みあげられた口縁部外面には、櫛状工具により刺突が施される。64溝東部上層上部の461などと類似する器形であり、同様に弥生時代中期後葉、もしくは後期前葉の広義の近江系、山城系とされるものか。581は口縁部外面ヨコナデ。以下、頸部から体部上位にかけては、縦方向を基調とするハケで、肩部付近までは観察できる。以下の体部は、摩滅のため調整不明だが、ミガキの可能性はある。内面は、剥離のため調整不明。体部から頸部への屈曲は滑らかでハケ調整も連続しており、明瞭な境目は見出せない。64溝中部上層下部の305と類似するが、口縁がこれよりも短い。弥生時代後期か。582は全体的に摩滅気味。口縁部～頸部は、内外面ともヨコナデ。体部外面、肩部はタテミガキだが、最大径やや下には粗いヨコハケが見られる。これ以下は調整不明。基本的に、体部外面調整はハケ後ミガキだろう。体部内面はハケ。底部外面は中央部が明瞭に窪む。体部下半の球形度合いが低く、弥生時代後期後葉。583は口縁～頸部内外面ともヨコナデだが、外面頸部下端から体部上端にかけては、ヨコナデの後に一部タテハケが施される。体部外面はタタキで、底部の鉢状部分は右上がりだが、上部に向かいタタキが明瞭には観察できなくなる。さらに上位には、右下がり気味のタタキが見られ、上に向かい水平～やや右上がり方向となる。内面はハケだが、底部の鉢状部分では剥離もあり不明瞭。ただし、接合痕より上位では比較的明瞭にハケ目が観察できることから、底部付近はナデで仕上げられているのかもしれない。底部外面は弱く中央部が窪む。体部は比較的球形化しており、頸部は一部直立気味の部分もあるが、内湾気味の部分もあり、口縁が外方に開く、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。584はやや小形。内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。口縁部は弱く外反する。弥生時代後期後葉～庄内式前半。585は口縁～頸部内外面ともヨコナデだろう。体部外面から頸部下端にかけて、わずかにタテハケが見られるが、ナデ消される。体部内面は指頭圧痕も見られ、ナデだろう。また、接合痕も残る。体部～頸部への屈曲はやや鈍く、弱く外反し、頸部と口縁部の境は不明瞭で、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。586は内外面とも器面の剥離のため調整がほとんど不明だが、内面にごく一部器面が残存する部分では、ヨコナデが観察できる。口縁部は弱く外反気味で、端部は外傾する鈍い面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。587は口縁部内外面ともヨコナデと思われるが、内面は不明瞭。頸部外面はタテハケだが、頸部最下部～体部は調整不明。頸部内面は横・斜め方向のナデで、わずかに残る体部には指頭圧痕が見られる。体部～頸部、頸部～口縁部、いずれの屈曲も鈍い。口縁端部は丸く収める。弥生時代後期後葉か。588は口縁部外面ヨコハケか。ヨコナデかもしれないが、ハケのようにも見える。頸部は縦・斜めハケで、その後の口縁部ヨコハケが頸部中位まで及ぶ部分もある。内面は、摩滅のため調整不明瞭ながら、ヨコナデかヨコハケだろう。頸部の屈曲はやや鈍く、口縁部は外反する。弥生時代後期後葉～庄内式。589は広口壺Bか。口縁部外面はヨコナデ、頸部はタテミガキだが、残存状況は悪い。わずかに残る体部の調整は不明。内面は、摩滅のため調整不明だが、頸部はナデだろうか。体部は指頭圧痕が見られる。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、頸部から口縁部への屈曲は鈍い。口縁は横方向に強く張り出し、端部は狭い面を持つ。全体的に薄手である。弥生時代後期後葉。590は小形の広口壺Bか。内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面、口縁部は不明瞭ながらヨコナデだろう。以下の頸部はタテミガ

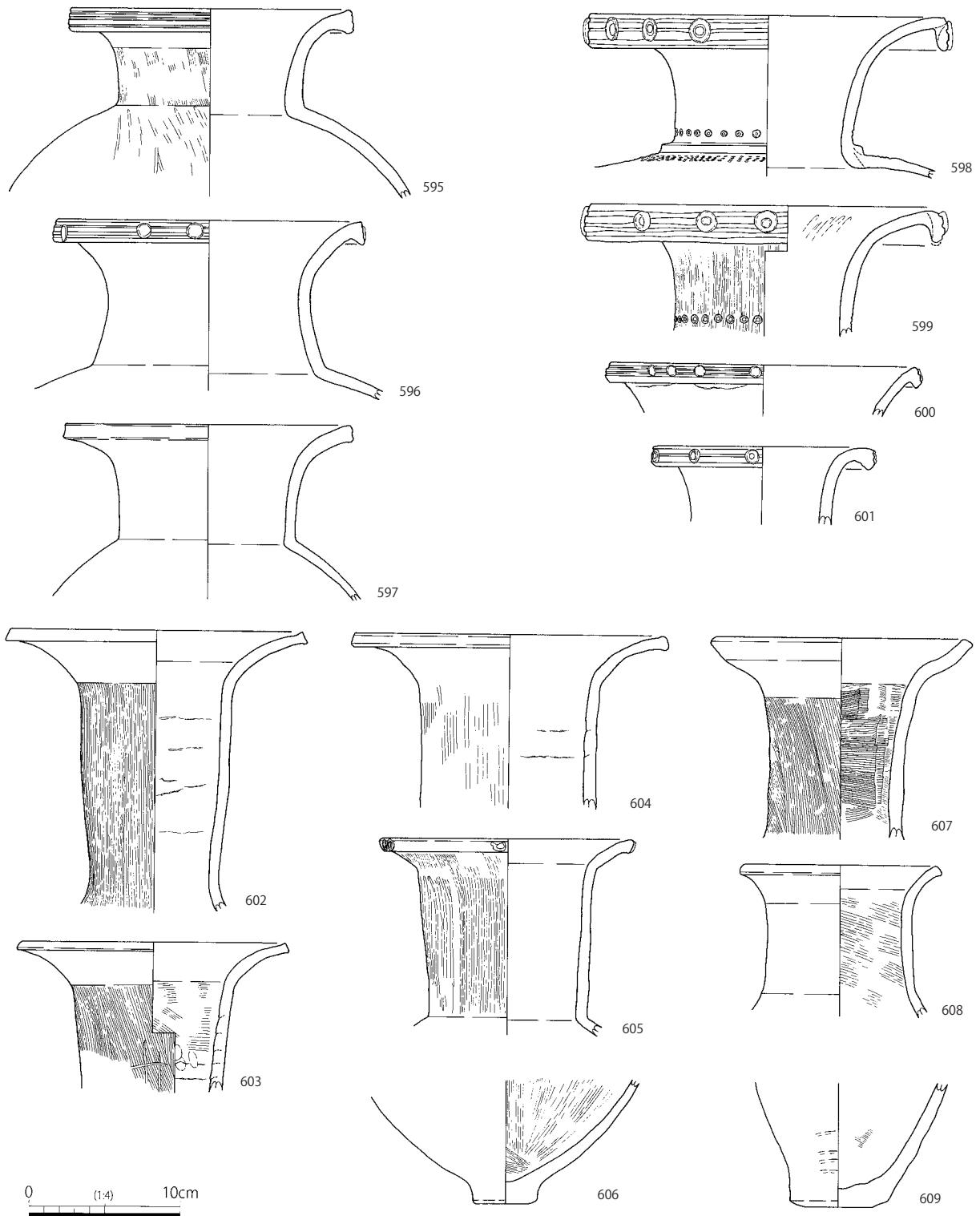


図62 溝出土遺物(27)(64溝東部・上層下部2)

キで、体部との境部分にはヨコナデが施される。内面は調整不明。体部から頸部への屈曲は明瞭で、頸部から口縁部が強く横方向に伸びる。口縁端部は外傾する面をもち、一部垂下する部分もあるが摩滅のため全体では確認できない。また、端部の一部では沈線とも見られる狭い窪みが見られるが、これも全体では確認できず、ヨコナデ時に偶然残ったものかもしれない。弥生時代後期後葉～庄内式前半。591は外面の剥離が著しいが、頸部にわずかに残る器面にはミガキが観察できる。内面、口縁部は器面が剥離し、頸部は摩滅及び器面への付着物のため調整が十分に観察できない。体部内面肩部には、指頭圧痕

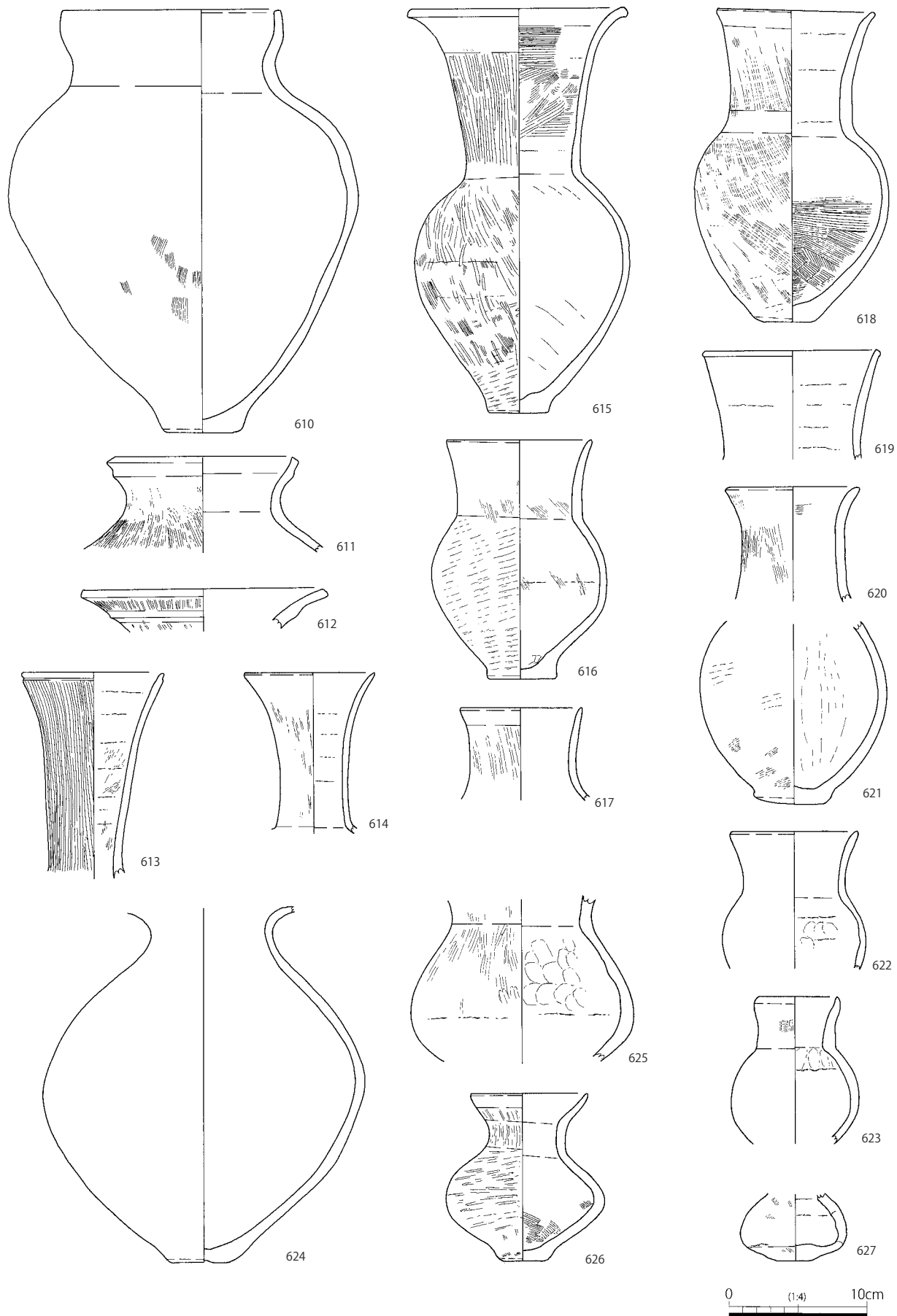


图 63 溝出土遺物 (28) (64 溝東部・上層下部 3)

が残る。外面頸部下端には断面三角形の凸帯が付され、上端部に刻み目が施される。口縁端部は大部分が残存せず、残存箇所についてもごく一部で、さらに剥離のため、摩滅した破断面を口縁端部と誤認している可能性もある。しかし、他の破断面とは様相が異なることから、図面で表現した口縁端部形態でよいと考える。弥生時代後期後葉頃。**592**は外面タテミガキで、口縁部と頸部下端の体部との屈曲部は強いヨコナデ。内面はヨコミガキで、口縁部は強いヨコナデ。頸部下端には2個一単位の竹管文が1方向にのみ見られる。口縁端部外面は、ごく弱く面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。**593**の外面口縁部はヨコナデだろう。頸部は、剥離が著しいが、わずかに残る器面にはタテミガキが観察できる。内面は剥離のため調整不明。頸部下端には竹管文が施される。2個を一単位とすることが多いように思うが、本例は1個のみである。頸部から口縁部への屈曲は鈍いが、口縁部は短いながらも、比較的強く横方向に伸びる。弥生時代後期後葉～庄内式。**594**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。体部から頸部、頸部から口縁部とも屈曲は鈍い。口縁端部は弱く拡張し、外傾する面を弱く持つ。305、581などと類似する形態であり、弥生時代後期か。**595～601**は**597**を除き、口縁部を肥厚、垂下させる型式で、**595**が広口壺D、**597**が広口壺Aで、これ以外は広口壺C。**595**は口縁部外面強いヨコナデ。頸部はタテハケで、一部タテミガキとも思える痕跡も見られる。体部はハケ後タテミガキ。内面は、いずれも剥離のため調整不明。口縁部は緩やかに外反し、端部へ向かい再度屈曲する。端部は上下に拡張し、外面には3条の沈線が施される。弥生時代後期中～後葉。**596**は内外面とも剥離のため調整不明。体部～頸部の屈曲は比較的明瞭で、ハの字状の頸部から、逆ハの字状に口縁が強く開く。口縁端部は若干垂下し拡張し、3条の沈線とその上に円形浮文が付される。浮文は現状で3個が残存する。2個を一単位としていた可能性があり、そうであれば4方向か5方向に付されていたと推測される。弥生時代後期中～後葉。**597**は内外面とも剥離のため調整不明。体部～頸部の屈曲は明瞭で、頸部は弱くハの字状を呈し、口縁が強く開く。端部は若干拡張される。弥生時代後期後葉～庄内式。**598・599**は、いずれも類似する器形、施文であり、垂下し拡張した口縁端部外面に3条の沈線を施した後、竹管文を施した円形浮文が3個を一単位として推定5方向に付される。また、頸部下端には竹管文が施される。**598**の頸部は剥離のため調整不明だが、一部残る器面には縦方向の調整痕跡がわずかに認められ、タテミガキもしくはタテハケだろう。頸部下端には断面三角形の凸帯が付され、この上側には竹管文が、下側の肩部には櫛状工具によると思われる刺突が、それぞれ施される。内面は、隔離のため調整不明。**599**は口縁部が一部欠落するため推定だが、等間隔ではなく、3個を一単位としているところが明瞭な部分と、連続しているように見える部分とがあり、レイアウトが雑である。以下、口縁部はミガキにも見えるが不明瞭。頸部はタテハケ。頸部下端の竹管文と口縁端部の円形浮文上に付される竹管文とは、ほぼ同様の径である。内面は剥離が著しい。口縁部ではわずかにタテミガキと思われる調整が見られるが、頸部については摩滅も加わり調整不明である。いずれも弥生時代後期後葉。**600**は内外面ともナデと思われる。口縁端部は垂下し、外面には2条の沈線を施し、その後円形浮文を付す。円形浮文は、残存部位で4個が見られ、1個と残り3個の間がやや開く。このため、等間隔に付されていたものではないと思われるが、単位は不明である。なお、頸部外面、口縁部やや下には接合痕が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**601**は内外面とも剥離のため調整不明だが、外面頸部～口縁部屈曲部分には、一部でタテハケが見られる。口縁端部外面には、2条の沈線が施され、この上に竹管文を施した円形浮文が11方向に付される。弥生時代後期後葉頃。**602～605・607・608**は広口長頸壺で、いずれも弥生時代後期中～後葉。**602**は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部は外面がタテハケで、内面がナデで、

接合痕が残る。頸部は直立し、口縁がハの字状に開く。**603**は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部は、外面がタテハケ、内面はヨコハケで下部はナデか。頸部内面下部のハケが十分に施されていない部分を中心に、接合痕が見られる。約1cm程度の短い単位である。頸部下外面には、ごく弱いながら、ヘラ状工具による記号と考えられる痕跡が見られる。頸部は逆ハの字状に弱く開く、口縁が強く外反し、端部は鈍く面を持つ。**604**は内外面とも摩滅のため、内面と口縁部外面の調整は不明。頸部外面はタテミガキか。内面には一部で接合痕が、約1.8cm間隔で見られる。頸部はほぼ直立し、口縁が外反する。端部は若干拡張する。**605**は外面口縁部、頸部共にタテミガキだが、わずかに残存する体部の調整は不明。口縁端部には2個一単位の竹管文を施した円形浮文が推定4方向に付される。内面は剥離のため調整不明である。体部～頸部、頸部～口縁部の屈曲は比較的明瞭で、口縁端部はごく弱く垂下し、拡張気味である。弥生時代後期後葉頃だろう。**607**は口縁部内外面ともヨコナデ。頸部は、外面がタテハケ、内面がヨコハケである。口縁部のヨコナデは明瞭に残り、頸部のハケよりも後に施されたものである。直立気味の頸部から、口縁が内湾気味に立ち上がる。口縁端部は外傾する鈍い面を持つ。**608**は口縁部内外面ともヨコナデだろう。頸部外面は摩滅のため調整不明だが、縦方向の調整痕跡がごく弱く観察できる。タテハケもしくはタテミガキか。内面は横・斜め方向ハケ。頸部～口縁部への屈曲は鈍いが、これ以上に頸部～体部への屈曲は鈍い。頸部内面は屈曲が認識できず、調整のハケも連続的に施される。一方の口縁部は、緩やかに屈曲した後、口縁端部には面を持つ。一部弱く垂下するように見える部分もあるが、部分的なもので、意図的なものではないと思われる。**606**は壺か。外面は平滑であり、ナデもしくはミガキと思われるが、ミガキの単位は観察できない。内面はハケ。外面調整からは、壺と推測するが、詳細な器形は不明。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**609**は壺か。内外面とも摩滅が著しい。外面は一部にタタキとも考えられる痕跡が見られるが、不明瞭である。内面はわずかにハケが残り、板状工具痕も見られることから、ハケだろう。体部が張らない器形出ると予想でき、蛸壺の可能性も考えられる。弥生時代後期か。**610**は広口壺か。内外面とも剥離、摩滅が著しく、体部下部にわずかにタテハケが見られ、内面底部に板状工具の静止痕跡が見られる以外、調整は不明である。体部はやや肩が張り、口縁は内湾し、端部は鈍く面を持つ。体部形態からは弥生時代後期後葉以前と思われる。**611**は広口壺か。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。頸部～体部外面は縦方向を基調としたハケ。内面は摩滅のため調整不明。体部から頸部への屈曲は鈍い。口縁部は鈍く受け口状もしくは二重口縁状を呈し、端部には外傾する面を明瞭に持つ。弥生時代後期後葉か。**612**は二重口縁壺。外面はタテミガキで、弱い凸帯部分はヨコナデ。内面は剥離のため調整不明。二重口縁壺だが、一次口縁と二次口縁の屈曲は鈍く、外面では強いナデにより比較的明瞭に認識できるものの、内面は全体的に外反気味であるのみで、屈曲は認識できない。弥生時代後期後葉か。**613・614**は細頸壺。**613**は外面タテミガキで、端部際には1条の浅い沈線を巡らす。内面は、口縁部端部にわずかにヨコナデが見られるが、大部分は剥離しており、調整不明。しかし、接合痕が約2cm間隔で見られ、一部ハケが認められる。**614**は全体的に摩滅が著しく、頸部外面のタテミガキ以外、調整が良好に観察できない。頸部内面には約1.7cm間隔に接合痕が見られる。体部から頸部へは、比較的鋭く屈曲し、やや内湾しながら直線的に途中までのび、口縁部は外反する。いずれも、弥生時代後期後葉頃か。**615～620**は長頸壺。**615**は大形。口縁部は内外面ともヨコナデ。頸部外面は、タテハケ後タテミガキ。同内面は、横・斜め方向のハケで、短い単位で雑に施す。ハケが十分でないためか、接合痕が内面では約1.7～2cm間隔で見られる。外面もこれに対応して器面に凹凸が見られる。体部外面は右上がりのタタキ(3条/cm)後タテハケを施し、最終

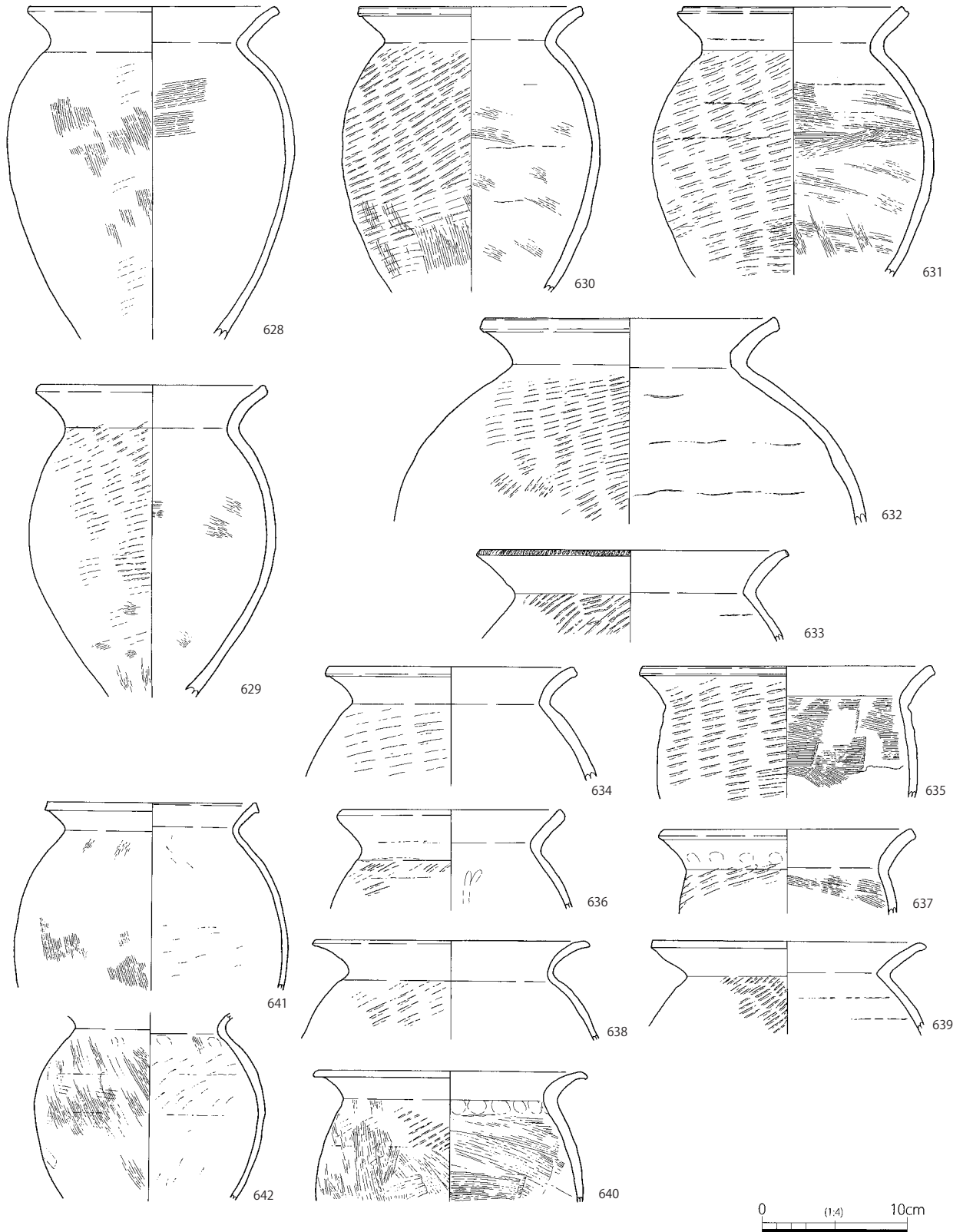


図64 溝出土遺物(29)(64溝東部・上層下部4)

的にタテミガキで仕上げる。タタキは底部付近では比較的明瞭に残り、底部の鉢状部分にも、弱く残存する。なお、体部外面には底部側に約2.5cm間隔で接合痕が見られる。同内面はハケだが、良好に残存しない。調整がやや雑だが、頸部も長く、口縁は鈍いながらも面を持ち、やや古い様相といえる。弥生時代後期中葉か。616の口縁端部は剥離のため調整不明。頸部外面は縦方向を基調とするハケ、内面

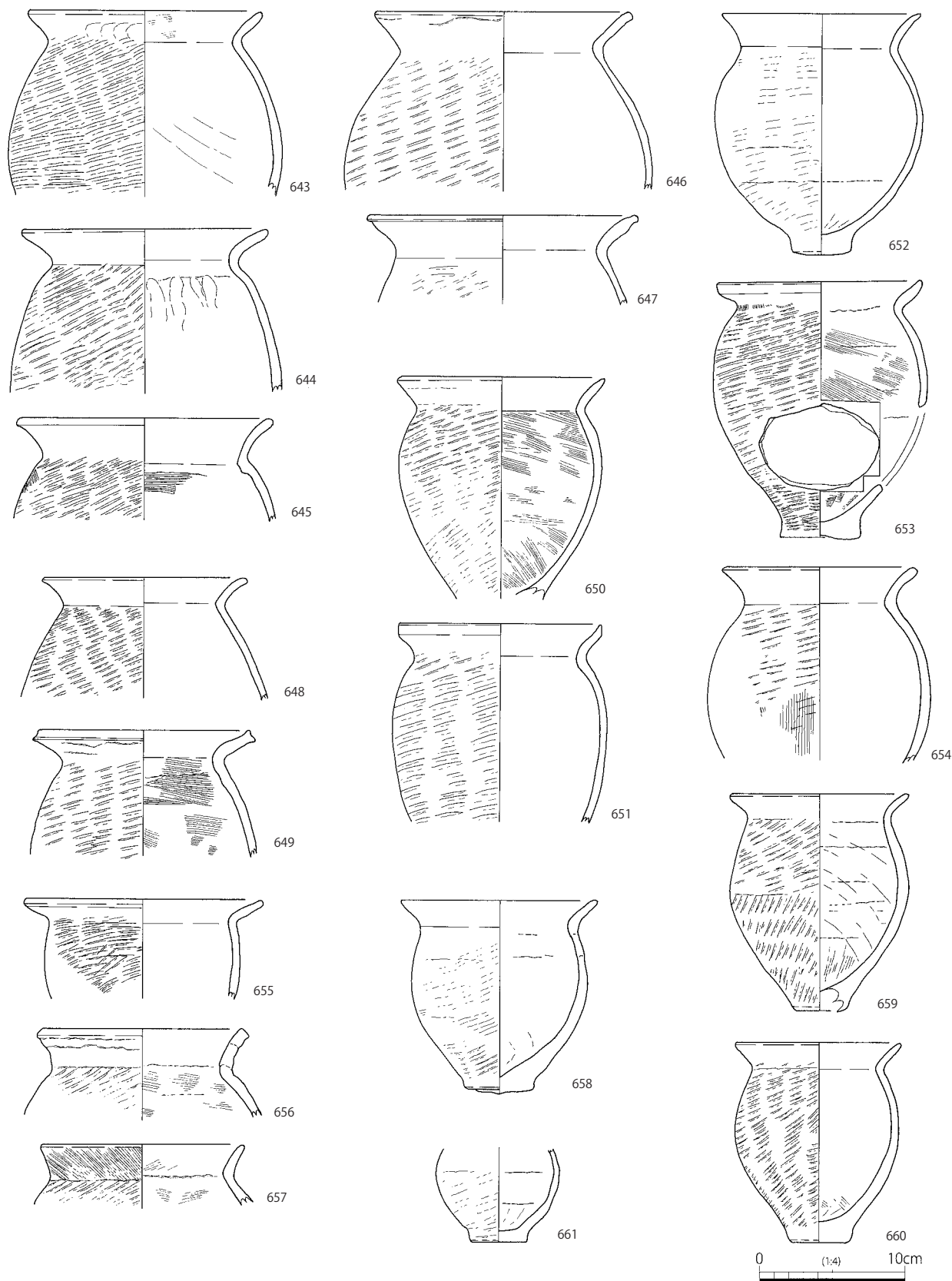


図 65 溝出土遺物 (30) (64 溝東部・上層下部 5)

は横方向を基調とするハケ。体部外面は水平～右上がりのタタキ (2.5 条/cm) だが、残存状況はやや悪い。摩滅のためかもしれないが、タタキ後ナデの可能性もある。内面は剥離のため調整不明瞭ながら、底部に板状工具痕が見られる他、体部中位にもハケ痕跡が見られる。ただし、肩部については観察でき

ず調整不明である。弥生時代後期後葉。**617**は外面口縁部ヨコナデで、以下の頸部はタテミガキ。内面は摩滅のため調整不明。体部は残存しないが、おそらく緩やかに頸部に移行し、ゆるく外反する口縁だろう。弥生時代後期後葉。**618**は外面底部付近に右上がりのタタキ痕跡が見られる。少なくとも底部の鉢状部分ではタタキが用いられていたと思われる。この後、斜め～縦方向のハケを全面に施し、頸部と口縁端部をヨコナデで仕上げている。内面は体部にハケが見られるが、肩部内面は剥離もあり不明。口縁部はナデで、端部は外面同様ヨコナデを施す。口縁部は弱く外反するが、丸く収める。体部から口縁部への屈曲は鈍い。底部は明瞭に突出しない。口縁部高より体部高の方が長く、外面の調整もハケ仕上げである点などから、弥生時代後期後葉と思われる。**619**は内外面とも摩滅のため調整不明瞭だが、いずれもナデだろう。なお、特に内面では接合痕が多数あり、約1.5cm間隔で見られる。口縁端部は外側に折り込むように肥厚する。残存部下端で屈曲気味であり、本来の頸部高が抑えられ、比較的短めといえる。弥生時代後期後葉か。**620**は内外面とも剥離が著しい。外面はタテハケ、内面はヨコハケと思われるが、器面が良好に残存しないため、口縁部のヨコナデなどは不明である。弥生時代後期後葉。**621**は長頸壺か。外面は横・右上がり方向のタタキと思われる痕跡が見られる。また、底部付近には横方向のハケが見られ、タタキ後ハケだろう。ただし、ハケは良好に残存せず、ナデを併用した可能性もある。内面は縦方向に細い凹凸が見られ、指による強いナデと思われる。体部は丸味を帯び、底部への突出もほとんどない。底径がやや大きいようにも思えるが、体部形状から長頸壺の可能性が考えられ、弥生時代後期後葉と思われる。**622**は長頸壺か。口縁部外面はヨコナデだが、これ以外は摩滅のため調整不明。ただし、体部内面には指頭圧痕が見られ、ナデだろうか。体部～頸部への屈曲は鈍く、口縁部は緩やかに外反する。弥生時代後期後葉か。**623**は長頸壺Cにしてはバランスが悪いように見える。内外面とも摩滅が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、外面は一部わずかにナデ以前のタテハケが見られる。体部外面は調整不明、内面は肩部に指頭圧痕がみられ、以下もナデだろう。口縁端部は摩滅しており、本来はもう少し伸びる可能性もあるが、残存部分で内湾傾向にあり、ごく薄くなっているため、口縁端部と判断した。体部は球形化しており、詳細な形式は不明だが、庄内式頃だろうか。**624**は口縁端部が残存しないが、口縁が残存部分よりもう少し伸びると思われ、広口壺A bか。内外面とも剥離のため調整不明。底部の明瞭な突出は見られない。頸部は短いがハの字状に近いようである。弥生時代後期後葉～庄内式。**625**は外面タテミガキだが、体部下部は剥離のため不明。内面はナデで、体部内面下部はナデ痕跡が明瞭に残る。これより上の内面肩部は指頭圧痕が多数見られる。頸部はやや摩滅気味ながら、ナデだろう。頸部の屈曲は内面でやや明瞭な部分があるが、多くは鈍い。体部は下膨れ気味であり、弥生時代後期後葉よりも新しい可能性もあり、庄内式頃か。**626**は小形の広口壺Bか。外面、口縁部はヨコナデ、頸部はタテミガキ、体部は横方向を基調としたミガキ。ただし、底部付近は剥離のため十分には観察できず、底部際にはミガキ以前のタテハケが見られる。内面、口縁部はヨコナデだろう。頸部はナデと思われるが、丁寧なナデではない。体部は体部付近を中心にハケ目が残る。肩部の調整は不明。体部は横方向に張り出し、直立気味の頸部から口縁部が内湾気味に開き、弱く受け口状を呈する。詳細な時期は不明だが、弥生時代後期後葉～庄内式か。**627**はミニチュア壺か。外面はナメハケ後ナデ。内面はナデ。残存部上端は摩滅のため、生きているのか良好に観察できないが、さほど長い口縁が伸びるとも考えにくく、無頸壺のような器形とも推測できる。底部は平底。無頸壺を模したとすれば、弥生時代後期中葉頃となるが、詳細な時期は不明である。

628～668は甕。**641・642**を除き弥生形甕である。器高を基準とした分類では、**632**がA a、

628・629・633がおそらくA b、630・631や634～640・643～649・653などがおそらくA c、652・659がA d、658・660・661がA eである。628は口縁aか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はタタキ後、縦方向を基調とするハケ。内面は摩滅のため調整不明瞭だが、横方向を基調とするハケだろう。頸部の屈曲は比較的シャープで、口縁部は直線的に伸び、端部は明瞭に面を持つ。体部の球形化は進んでいない。弥生時代後期中葉。629は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）で、口縁部下部まで及び、底部付近は後ハケ。内面は器面の大部分が剥離しているが、器面が残存する部分ではハケが観察できる。頸部の屈曲は鈍く、口縁は弱く外反気味で、端部は鈍く面を持つ。球形化は進んでなく、弥生時代後期後葉。630は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、部分的にその後ハケを施す。内面はハケだが、剥離、摩滅のため良好には残存しない。口縁部は弱く外反し、端部は鈍く面を持つ。体部の球形化は弱く、弥生時代後期後葉。631は口縁aか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）。内面はハケで、横～斜め方向を基調とし、下部には一部タテハケも見られる。口縁部はほぼ直線的で、端部は明瞭に面を持ち、弱く窪む。内外面とも接合痕が随所に観察できる。弥生時代後期中葉か。632は口縁a。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）、内面は剥離のため調整不明。ただし、内面には接合痕が残る。残存部下端も接合部と考えられ、これより上に約3cm間隔に接合痕が見られる。体部は球形化が進んでいると推測できる。口縁端部は明瞭に面を持つ。弥生時代後期中葉。633は口縁gか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）。体部内面は摩滅のため調整不明。頸部は比較的明瞭に屈曲し、口縁部は弱く外反する。端部には鈍く面を持ち、刻み目が施される。甕にしてはやや口径が大きい。弥生時代後期中葉。634は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりの粗いタタキ（1.5条/cm）。内面は接合部分に指頭圧痕が見られる以外調整不明だが、ナデか。口縁端部は鈍く面を持ち、一部粘土が垂れ下がる。弥生時代後期中葉。635は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）で、口縁端部付近まで及び、口縁部叩き出し技法が用いられている。内面はヨコハケで、残存部位下部には接合痕が残る。口縁部は弱く外反気味で、端部は鈍い面を持つ。口縁径が体部径よりもやや大きく、体部は球形化していないと思われる。弥生時代後期後葉まで収まるものだろう。636は口縁gか。全体的に剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）、内面はナデだろう。頸部の屈曲はやや鈍い。分厚い口縁は直線的にのび、口縁端部は外側にごく鈍く面を持つ。弥生時代後期中葉。637は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）、内面はハケ。口縁部は分厚く、ほぼ直線的で、端部は鈍く面を持つ。弥生時代後期中葉。638は口縁h。全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部は内外面ともナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）だが、残存状況は悪い。内面は調整不明。頸部の屈曲は鈍く、口縁部は弱く外反し、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。639は口縁hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的シャープで、口縁部は弱く外反気味であり、端部は横斜め方向につまみ出し、丸く収める。庄内式頃か。640は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）後、タテハケ。体部内面は頸部直下に指頭圧痕が見られ、これ以下は剥離が著しいがナメハケ。体部上位～口縁部は分厚い。屈曲後の口縁は外反し、口縁端部は下方につままれるようで、ごく鈍い外傾する面を持つ。体部外面調整、口縁端部形態とも、やや奇異であり、詳細な時期判断も難

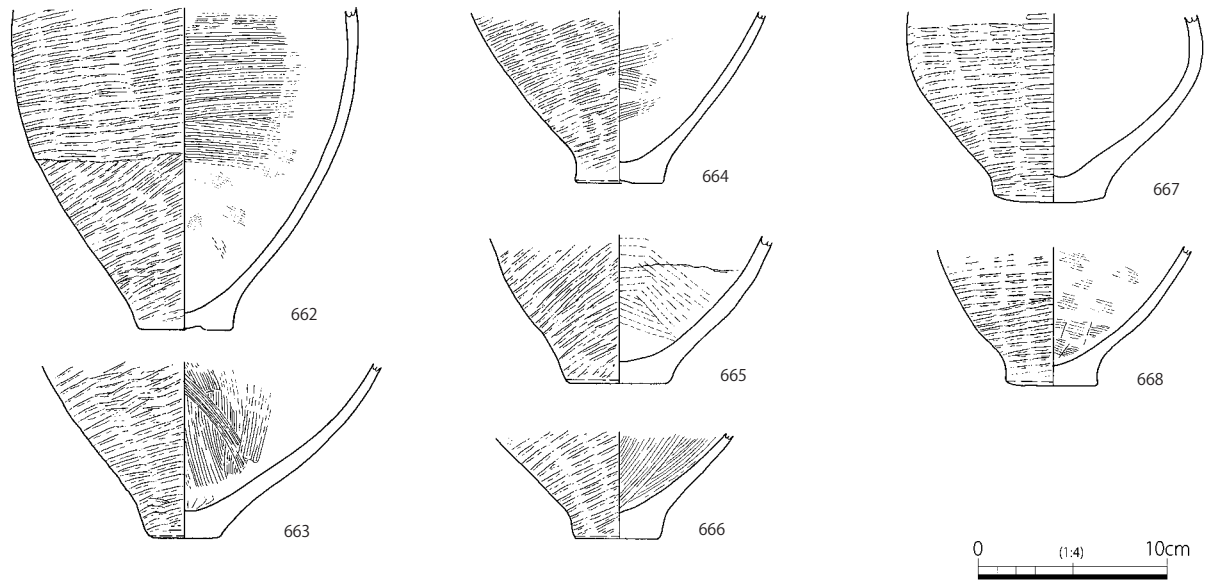


図 66 溝出土遺物 (31) (64 溝東部・上層下部 6)

しいが、体部形態は球形化してなく、弥生時代後期後葉か。**641** は布留式祖形甕とされるものだろうか。口縁 1 か。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は、ほとんどが剥離しているが、わずかに縦方向を基調とする細かいハケ (9~11 条/cm) が見られる。内面も同様に剥離しているが、残存部位の下位と頸部付近にわずかながら砂粒の移動が観察でき、ケズリの可能性がある。ケズリの単位や正確な範囲は不明だが、頸部までは及ばない。口縁部は概ね直線的で、端部は弱く上下に拡張する。全体的に薄手のつくりであるが、胎土には最大 0.5 cm 程の礫を含み、やや粗い印象を受ける。いわゆるタタキ甕と異なり、庄内形甕でもない。また、口縁端部形態からは布留形甕とも言えず、庄内式に見られる、奇異な甕の一例だろうか。**642** は体部外面左上がりのタタキ後タテハケ。内面は不明瞭ながら砂粒の移動が見られ、頸部付近には縦方向のハケも見られることから、ケズリ後ハケと思われる。ただし、器壁は最大で 0.6 cm であり、薄さは達成されていない。体部はやや肩が張る器形である。641 同様、庄内式における奇異な甕の一例だろうか。**643** は口縁 h。口縁部は内外面ともヨコナデで、外面下部には指頭圧痕が見られる。体部外面は右上がりのタタキ (2.5 条/cm) で、口縁下部まで及ぶ。内面はナデか。やや球形化傾向にある。庄内式か。**644** は口縁 h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ (2 条/cm) で、頸部直下までに収まる。なお、頸部にはわずかにタテハケが見られる。体部内面は肩部に強いナデの痕跡が見られる以外、不明である。なお、頸部直下には接合痕が明瞭に残る。体部の球形度合いは低く、長胴気味に見え、弥生時代後期後葉か。**645** は口縁 h か。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、明瞭なナデは見られない。体部外面は右上がりのタタキ (3 条/cm)。内面の頸部屈曲部以下はナデと思われるが、以下はハケ。頸部下にハケ調整時に形成されたと思われる段差があり、頸部までをケズリ上げない庄内形甕の模倣とも考えられなくもないが、口縁端部の処理などは異なり、積極的にその方向で評価はできない。なお、体部外面のタタキは、わずかながら頸部屈曲より上まで見られ、わずかに口縁部叩き出し技法を用いているようである。口縁部は弱く外反し、端部は基本的には丸く収めるが、やや下向き気味にナデを施したのか、端部外面が垂下とまではいかないまでもやや垂れ下がっている。弥生時代後期後葉~庄内式。**646** は口縁 h か。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ (2 条/cm) で、一部口縁部下部まで及んでいるようにも見えるが、摩滅のためはっきりとしない。内面は、剥離のため調整不明。頸部の屈曲は内面一部で比較

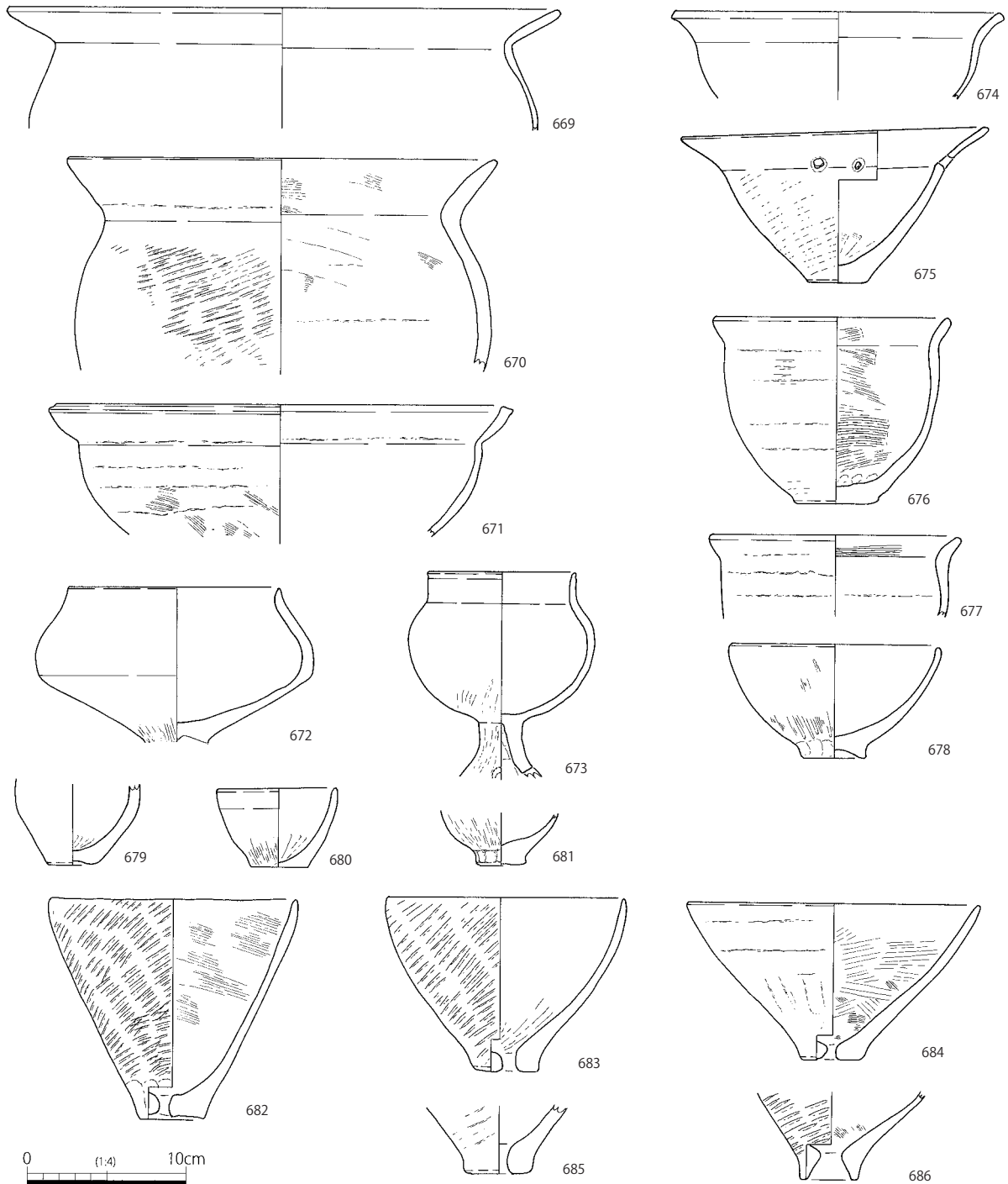


図 67 溝出土遺物 (32) (64 溝東部・上層下部7)

的明瞭だが、鈍い部分が多い。口縁はほぼ直線的に伸び、端部は外方に弱くつまみ出し、面は持たない。球形化が進んでおり、庄内式か。**647** は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）だが、摩滅のため良好に残存しない。体部内面はナデか。口縁部は端部に向かい一度膨らむが、端部は強いヨコナデによってか、急激に薄くなり、外面は強く窪む。弥生時代後期後葉～庄内式か。**648** は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。連続ラセン状タタキで、一部でこれ以前の傾きの異なるタタキ痕跡が見られる。内面は剥離のため調整不明。体部外面のタタキは頸部までで、口縁部には見られず、口縁部叩き出し技法は採用されていない。口縁端部はやや横方向につまんだような形態だが、単純に丸味を帯びるのみである。肩部形状から、球形化

はさほど進んでいないことが予想でき、弥生時代後期後葉か。**649**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）。内面はハケ。口縁端部は中央が窪む。弥生時代後期中葉か。**650**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）で、口縁下部まで及び、底部の鉢状部分はややきつめの右上がりである。なお、胴部中位は摩滅のためタタキが十分には残存しない。内面はハケで、底部の鉢状部分のハケはややきつめの左上がりである。頸部までハケ上げており、頸部の屈曲が比較的シャープとなっている。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**651**は口縁dか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）で、頸部やや上まで見られる。内面は、剥離のため調整不明。体部は球形化してなく、頸部からごく弱く口縁が外反し、端部は弱くつままれる。弥生時代後期後葉。**652**は口縁h。全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデと思われる。体部外面は右上がり、水平方向のタタキ。内面は、底部付近に板状工具の静止痕が見られ、ハケと思われる。底部は明瞭に突出するが、全体的に球形化が進んでいる。庄内式前半。**653**は口縁hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）で、頸部にはタテハケがわずかに見られる。内面はハケ。口縁部は弱く内湾気味で、やや受け口状を呈し、端部は丸く収める。底部外面は中央部がごく弱く窪む。なお、体部には焼成後穿孔がなされた可能性がある。底部は突出するが、比較的球形化は進んでいるが、体部下部の球形化はあまり進んでいない。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**654**は口縁gか。外面、口縁部はヨコナデ、体部は右上がりのタタキ（2条/cm）で、下部は後タテハケ。内面は摩滅のため調整不明。体部は比較的球形化が進んでおり、頸部の屈曲は鈍い。弥生時代後期後葉～庄内式初頭か。**655**は口縁hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）で、口縁部下部まで及び、口縁部叩き出し技法による。体部内面は剥離、摩滅のため調整不明。口縁端部は一部面を持つように見える部分もあるが、丸く収めているように見える部分もある。口縁部が甕とするよりも急激に横方向に伸びており、鉢の可能性も考えられる。弥生時代後期後葉か。**656**は口縁aか。口縁部は内外面ともヨコナデ。ただし、外面には2段の、内面には頸部際の接合痕が、それぞれ明瞭に残り、雑なナデである。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）で、口縁部最下端にまで及ぶ。体部内面はハケだが、摩滅気味で不明瞭。口縁端部には強いナデが施されたようで、外面に粘土素地が垂れ下がる部分もあるが、外傾する鈍い面を持つ。弥生時代後期中葉か。**657**は口縁h。外面、体部は右上がりのタタキ（2条/cm）で、口縁部は左上がりのハケ。内面は剥離気味だが、口縁部、体部共にハケ。頸部に明瞭な接合痕が見られ、体部のタタキ調整を施した後に、粘土を接合し口縁をつくり、内外面にハケ調整を施したと思われる。口縁部にハケ調整を施す例は少ないように思える。弥生時代後期後葉～庄内式。**658**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）。なお、頸部付近にはタテハケがわずかに見られ、肩部のタタキの残存度も悪い。頸部付近のみならず、肩部にかけてもタタキ後ハケかもしれない。内面は摩滅のため調整が十分に観察できないが、底部付近に板状工具痕が残り、ハケだろう。口径がわずかに体部最大径を凌駕する。体部はやや球形化が進んでいる。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**659**は口縁h。剥離や摩滅が著しいが、口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面はハケだろう。体部の球形化も進んでなく、弥生時代後期後葉。**660**は口縁h。内外面とも剥離、摩滅著しく、体部外面の右上がりタタキ（2.5条/cm）以外、調整不明。なお、体部外面のタタキは口縁部下部まで及ぶ。また、内面底部には、わずかに板状工具痕が見られ、少なくとも底部付近はハケだろう。体部の球形化は進んでなく、弥生時代後期後葉。**661**は体部外面に右上がりのタタ

キ（2条/cm）が弱く観察でき、タタキ後の可能性が考えられる。なお、残存部位の上部、頸部付近には、タタキがはっきりとは見られない。内面は底部付近にわずかに横方向を基調とするハケの痕跡が残るが、この後に縦方向のナデが施されている。庄内式初頭頃。**662～668**は底部片。**662**は体部外面右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面は横～斜め方向のハケ。体部下位には接合痕が明瞭に残る。また、底部は中央部分が明瞭に窪む。胴部形態は細身で、丸みを帯びていない。弥生時代後期後葉。**663**は外面水平～右上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面はハケで、底部にはクモノ巣状のハケメが見られる。底部は突出し、外面は平底である。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**664**は内外面とも摩滅しているが、外面は右上がりのタタキ（4条/cm）。内面はわずかにハケが見られる。底部は明瞭に突出し、外面中央部分が窪む。弥生時代後期後葉。**665**は外面右上がりのタタキ（3条/cm）で、内面は粗い原体のハケ。底部は平坦で窪みは見られない。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**666**は外面右上がりのタタキ（2条/cm）、内面はハケ。底部は不明瞭ながら突出する。底部外面は中央部分がごく弱く窪む。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**667**は外面水平方向のタタキ（2条/cm）。内面は、摩滅のため調整不明。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**668**は外面水平～やや右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は摩滅気味ながらハケ。底部は突出し、外面中央部分が弱く窪む。弥生時代後期後葉～庄内式前半。

669～686は鉢。**669**は大形鉢。内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。体部外面にタタキ痕跡は確認できない。頸部の屈曲は外面で鋭く、口縁部は直線的であり、器壁も薄いことから、全体的にシャープな印象を持つ。庄内式。**670・671**は中形鉢。**670**は口縁部外面ヨコナデ、体部外面は右上がりのやや細かいタタキ（3条/cm）だが、肩部はその後ナデで、タタキがほとんど残存しない。口縁部内面は横、斜め方向のハケ後、ヨコナデ。体部内面はハケ。内外面とも接合痕が約3.3cm間隔で見られる。口縁部外面下部の接合部分は十分にナデが施されていないためか、布留形甕の口縁部外面のような弱い段を持つ。庄内式中頃か。**671**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケ、内面はナデだろう。内外面の頸部や体部外面には接合痕が約1.4cm間隔で残る。やや浅手の体部で、口縁部は内湾気味に開き、端部は強いヨコナデにより上下にやや拡張気味で、中央が窪む。外面側はややつまみ出されたように見え、粘土が垂れ下がっている部分があるが、さらにナデで仕上げることはない。胎土は密なのだが、粗雑なつくりの感がある。弥生時代後期後葉～庄内式と思われるが、後期に収まるものかもしれない。**672**は台付鉢か。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面底部にはタテミガキと思われる調整が見られる。横方向に強く張る体部から、内湾した後、再度弱く外反する。弥生時代後期か。**673**は台付鉢か。全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面、脚部外面とも縦方向を基調としたミガキと思われるが、不明瞭。内面は体部、脚部ともにナデだろう。口縁端部外面は弱く窪むが、意図的な沈線というよりも端部の強いヨコナデによるもののように思われる。口縁部は体部から鈍く屈曲して直線的に立ち上がる。脚部の残存端には穿孔の一部が残る。方向数は不明。脚部成形からは弥生時代後期後葉頃か。**674・675**は小形鉢C b。**674**は内外面とも摩滅のため、調整不明だが、口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部内面はミガキの可能性はあるが、不明瞭。体部～口縁部への屈曲は、鋭くはないが、比較的明瞭である。口縁端部は弱く外面に面を持ち、下へ垂れ下がる。底部形態は不明だが、やや深手である。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**675**は全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部は内外面とも調整不明。体部外面は右上がりのタタキだが、残存状況が悪く、タタキ後ナデの可能性もあるが、単なる摩滅かもしれない。内面は底部付近にハケは見られる。底部から体部が逆ハの字状に急激に開く。頸部の屈曲は、外面で鈍く、内面で一部明瞭な部分がある。なお、この屈

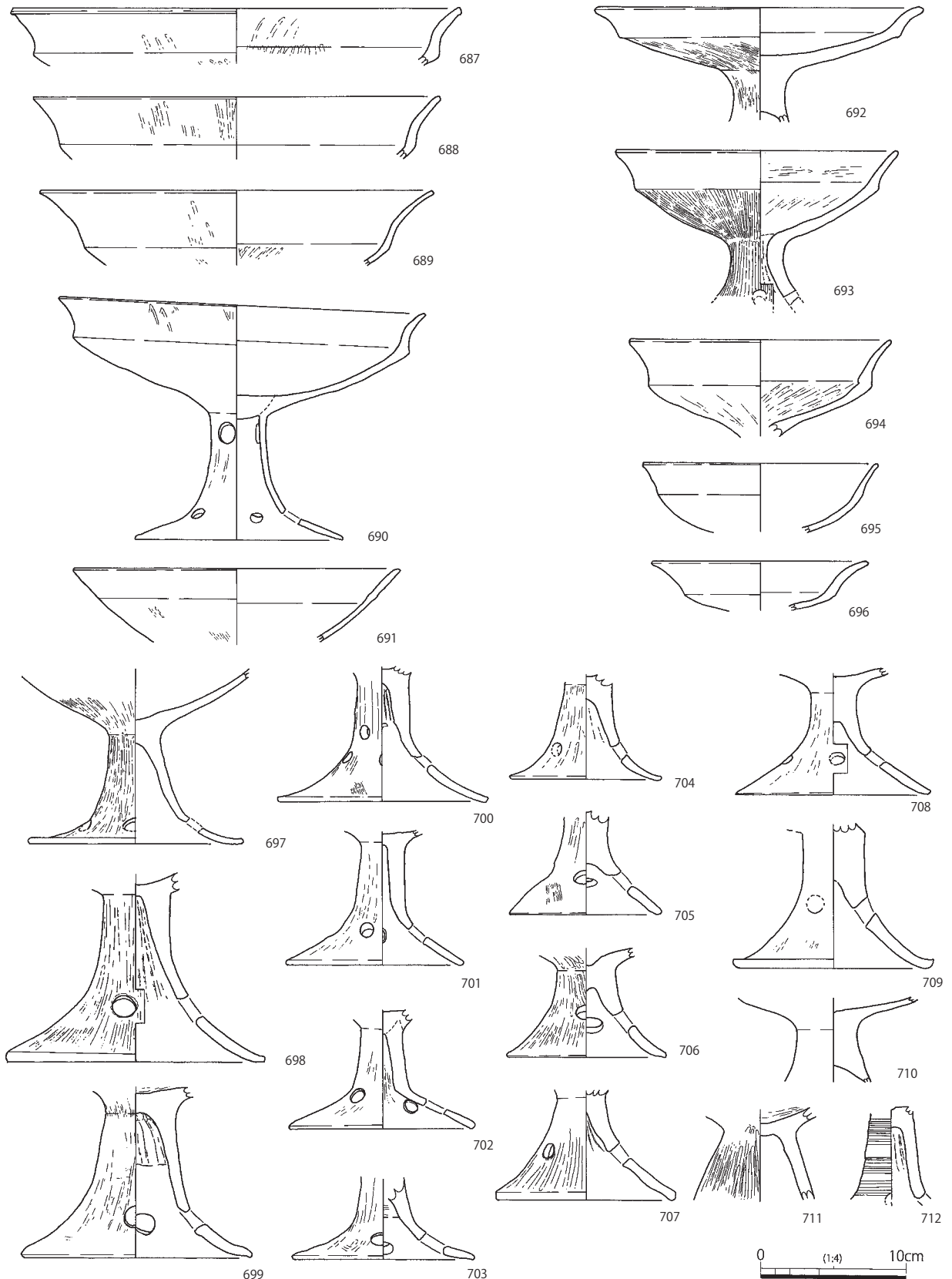


図 68 溝出土遺物 (33) (64 溝東部・上層下部 8)

曲部には不明瞭ながら穿孔が施される。2個が残存し、2個一単位と思われるが、このうちの片方はやや不整形である。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**676・677**は小形鉢D 1。**676**は外面体部上位の肩部付近や底部付近など、わずかにタタキと思われる痕跡が見られ、後にナデで仕上げていると思われ

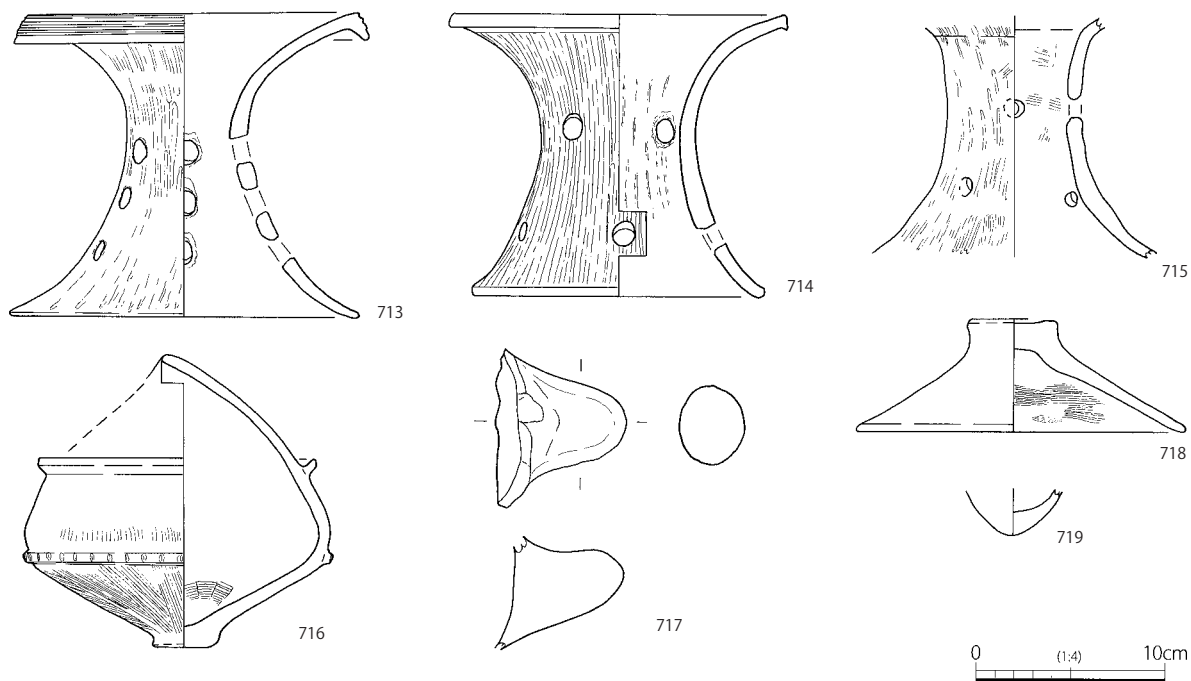


図 69 溝出土遺物 (34) (64 溝東部・上層下部 9)

る。内面は底部に強い指頭圧痕がみられ、これより上位は横方向を基調としたハケで、口縁部にも見られる。ただし、口縁部は後にヨコナデである。口縁部外面もヨコナデと思われるが、摩滅のため不明である。底径は小形の鉢にしてはやや大振りに思える。全体的に粗いつくりであり、横長気味の寸胴なプロポーションである。庄内式前半。**677** は内外面とも摩滅のため十分に調整が観察できないが、ナデを基調としているだろう。口縁部内面の頸部よりには、わずかながらヨコハケが見られる。頸部の屈曲は、内面が比較的明瞭である。内外面ともに接合痕が見られ、粗いつくりである。庄内式前半。**678** は小形鉢 B。外面はタテハケ後タテミガキで、底部付近はナデ。内面は、摩滅のため不明瞭ながら、ナデか。底部は上げ底気味。口縁部は内湾気味である。やや浅手であり、庄内式か。**679** ~ **681** は小形鉢 A か。**679** は外面摩滅のため調整不明だが、ナデか。内面は底部にハケが残るが、のちナデ消される。弥生時代後期後葉~庄内式。**680** は口縁部外面ヨコナデで、以下の体部はハケ後ミガキと思われるが、不明瞭。内面は剥離が著しく調整不明瞭ながら、わずかに底部付近にハケの痕跡が見られる。底部からやや内湾ぎみに体部が立ち上がる。調整が十分には観察できないものの、比較的丁寧なつくりである。明瞭に底部が残り、詳細な時期は不明だが、庄内式か。**681** は調整が丁寧であり、壺の可能性もある。外面は縦方向を基調としたミガキで、底部はナデ。内面はナデだろう。弥生時代後期後葉~庄内式か。**682** ~ **686** は有孔鉢。**682** は有孔鉢 B。体部外面は右上がりのタタキ (2.5 条/cm) で、底部付近はナデ。内面はハケだが、底部側はハケ調整が見られず、ナデか。全体的に細長い器形である。弥生時代後期後葉~庄内式前半。**683** は有孔鉢 B か。外面は右上がりのタタキ (2.5 条/cm)。内面は底部に板状工具痕が多数見られ、ハケだろう。底部は弱く突出する。弥生時代後期後葉~庄内式前半。**684** は有孔鉢 A か。外面はナデと思われる。ハケ、タタキの可能性もあるが、剥離、摩滅のため不明瞭。接合痕が多数残存するが、1.5 ~ 2 cm 程とばらつきが見られる。なお、下部には縦方向のヒビ状の痕跡も見られ、下部については内側から弱く押し出したのかもかもしれない。内面は粗いハケ。原体も粗いが、調整方法も粗い。弥生時代後期後葉~庄内式前半。**685** は体部外面右上がりのタタキだが、摩滅著しい。内面は摩滅のため調整不明。弥生時代後期後葉~庄内式前半。**686** は体部外面右上がりのタタキ (3

条/cm)。内面は底部付近にわずかにハケが見られる。底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉～庄内式前半。

687～712は高坏。**687～696**は有稜高坏Aで、以下の脚部についても多くが有稜高坏だろう。**687**はA2か。内外面とも、ヨコナデ後ミガキで、ミガキは部分的に残存するのみ。口縁は短く外反し、端部は鈍い面を持ち、強いヨコナデにより下部へ粘土が弱くはみ出したかのように垂れ下がる。弥生時代後期後葉。**688**はA3か。内外面とも摩滅が著しく、外面にわずかながらタテミガキが観察できる以外、調整不明。屈曲後の口縁は、短く外反する。弥生時代後期後葉。**689**はA3か4。全体的に剥離が著しいが、わずかに残る器面から、内外面とも縦方向を基調とするミガキ。口縁は外反し、端部は丸く収める。薄手のつくりである。弥生時代後期後葉～末。**690**はA2。内外面とも剥離が著しい。坏部口縁部外面はヨコナデ後、暗文風のミガキ。脚裾部はわずかにタテミガキが見られる。これ以外は、調整不明。坏部口縁部は短い、強く外反する。脚柱部と坏部の接合は円板充填法。スカシは、脚柱部には3方、裾部に5方である。弥生時代後期後葉。**691**は内外面とも大部分が剥離し、外面下部に残るわずかな器面にタテミガキが見られるのみ。坏部の屈曲は鈍い。器壁も薄い、剥離を考慮すべきであろう。弥生時代後期中～後葉。**692**は坏部外面、口縁部がヨコナデ、坏底部はハケ。脚部タテハケ。坏・脚部内面は、摩滅のため調整不明。口縁は短く外反し、端部は丸く収める。弥生時代後期中葉。**693**はA2か3。坏部外面、口縁部はヨコナデで、ミガキは見られない。坏底部はタテミガキで、脚部も同様にタテミガキ。内面坏部は、口縁部が横方向、底部が縦方向のミガキと思われるが、摩滅気味で不明瞭。脚部内面はシボリ目が残る。現状で、坏部と脚部が筒抜けだが、坏部内面底部は図面の点線部分以下にはミガキが施されてなく、弱く段差も観察でき、この部分に円板充填がなされていたと思われる。なお、残存部脚端部には穿孔がわずかに確認できる。1箇所のみで他の部分は脚部が残存しないため、方向数は不明である。弥生時代後期後葉。**694**はA3か。内外面ともミガキと思われるが、剥離、摩滅が著しく、坏底部の放射方向のミガキが比較的明瞭に観察できる以外は、調整不明。坏底部と口縁部の接合部分で明瞭に剥離しており、接合方法が良好に観察できる。また、坏底部も器面が剥離しており、円板充填部分が剥離したと思われる。口縁は短い。弥生時代後期後葉。**695**はA3か。内外面とも剥離のため調整不明。坏部はやや深く、屈曲後の口縁は短く、弱く外反する。弥生時代後期後葉。**696**はA4か。剥離のため内外面とも調整不明。坏部外反後の口縁部は比較的長い。弥生時代後期末。**697**は外面坏・脚部ともタテミガキ。内面は剥離のため調整不明。脚部には現状で3方向のスカシが残存し、等間隔ではないが推定4方向と思われる。脚柱～裾部への屈曲は明瞭ではないが、裾部が比較的長い。坏部形態は不明だが、残存部位で屈曲する兆候は見られず、屈曲後の口縁は比較的短いと予想される。弥生時代後期後葉～末。**698**は坏部内外面とも摩滅のため調整不明。ただし、外面坏～脚部への屈曲部分には、わずかながらタテハケが見られる。脚部外面はタテミガキ。脚部内面は、器面の剥離が著しく調整不明だが、脚柱部にはシボリ目が残る。脚部には4方向に、径約1.5cmとやや大きめの穿孔が施される。坏部と脚部の屈曲は明瞭で、脚部はハの字状に緩やかに外反する。弥生時代後期後葉。**699**は脚部外面タテミガキと思われるが、摩滅のため不明瞭。脚部内面は脚端部にヨコナデが見られ、端部際が弱く窪むが、これ以外の調整は不明。脚柱部にはシボリ目が残る。坏部外面は、脚柱部との境目部分にタテハケが見られる。坏部内面はミガキと思われるが、摩滅のため不明瞭である。緩やかに外反する脚部4方向にスカシが穿たれ、脚柱～裾部への屈曲は不明瞭である。弥生時代後期中葉～後葉。**700**は外面タテミガキで、脚端部にはミガキ以前のハケがわずかに残る。脚部内面は裾部の器面が剥離しており、調

整不明だが、脚柱部にはシボリ目が残る。坏部調整は不明だが、ミガキか。穿孔は、脚柱部に2方向、裾部に4方向と2段に施されている。上下の穿孔は、一致するでもなく、ちょうど真ん中に位置するのでもなく、やや中途半端な感がある。なお、上側の穿孔の片方は、外面の穿孔が極めて明瞭な円形ののだが、完全には内面まで突き抜けていない。このため、図では三日月状の表現になっている。脚柱部は中空で、裾部への屈曲も明瞭ではないが、裾部が長めである。弥生時代後期後葉。**701**は内外面とも器面が剥離しており、調整不明瞭ながら、外面はタテミガキ、内面はナデだろう。坏～脚柱部、脚柱～裾部への屈曲はそれぞれやや鈍い。裾部には等間隔ではないが、4方向のスカシが施される。脚柱部は中実ではない。弥生時代後期末頃。**702**は内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面も大部分の器面が残存しないが、わずかに残る器面からタテミガキと推測される。内面は調整不明。穿孔は6方向だが、上から見ると3個一単位が線対称で2列に配されているかのように穿たれている。脚柱部は中空だが、脚柱部から裾部への屈曲は比較的明瞭である。脚部と坏部の接合は円板充填法。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**703**は内外面とも剥離気味である。外面は縦方向を基調とするミガキ。内面はナデと思われる。4方向に径約1.5cmとやや大きめのスカシが穿たれる。脚柱部は残存部分よりやや上で、中実となると思われる。庄内式前半か。**704**は外面タテミガキだが、内面は剥離のため調整不明。脚柱部にはシボリ目が見られる。脚柱～裾部への屈曲部分には穿孔があり、3方向と推測される。脚柱～裾部への屈曲は不明瞭で、裾部も長くない。弥生時代後期中～後葉。**705**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明瞭。外面は脚裾部にハケ、脚柱部にタテミガキと思われる痕跡が見られ、ハケ後ミガキだろう。内面はナデと思われる。スカシは4方。脚柱部は中実で、庄内式か。ただし、脚裾部が短い。**706**は外面、脚部とわずかに残存する坏部とも、タテミガキ。内面は剥離のため調整不明。脚部には推定4方向のスカシが施され、3方向が残存する。坏部内面底部は窪み、本来はここに粘土が充填されていたのかもしれない。弥生時代後期中～後葉。**707**は外面タテミガキ、内面は摩滅のため調整不明だが、脚裾部はナデだろう。なお、脚柱部には弱くシボリ目が残る。3方向にスカシが穿たれる。緩やかにハの字状に開く脚部で、弥生時代後期中葉～後葉。**708**は内外面とも剥離が著しいが、外面はタテミガキだろう。内面は調整不明。脚部には推定4方向にスカシが施され、3方向が残存する。脚柱部は中実気味であるが、脚柱～裾部への屈曲は不明瞭。庄内式初頭頃。**709**は内外面とも摩滅のため調整不明だが、外面脚部にタテミガキと思われる痕跡が見られ、脚端部はヨコナデと思われる。穿孔は3方向と推測される。脚柱部は中実気味だが、脚柱部から裾部への屈曲は鈍い。庄内式前半頃。**710**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。ただし、脚柱部が中実であり、庄内式だろう。**711**は外面タテミガキ。内面は、坏部がミガキ、脚部がナデと思われる。逆ハの字に脚部が開き、弥生時代後期前葉。**712**は外面に6条を単位とする櫛描直線文が4段に施される。これに先行する調整は十分に観察できないが、タテミガキと思われる。内面は脚柱部にシボリ目残り、以下はナデだろう。穿孔部分もわずかに残存し、4方向であることは確認できる。弥生時代後期後葉。

713～715は器台で、いずれも大形器台A。**713**は外面タテミガキで、垂下した口縁端部外面には凹線文が施される。剥離のため不明瞭ながら、3条の可能性が考えられる。内面は調整不明。筒部には縦方向3段のスカシが3方に穿たれる。スカシの径はいずれも1.3cm程である。弥生時代後期中～後葉。**714**は外面タテミガキで、口縁端部と脚端部はヨコナデだが、脚端部のヨコナデは良好に残存しない。内面は、筒部にシボリ目が見られる以外は、摩滅のため調整不明だが、脚部にはわずかにナデと思われる痕跡が見られる。口縁端部は若干拡張し、面を持つ。2段に穿孔が施され、上側筒状部分が4方向、

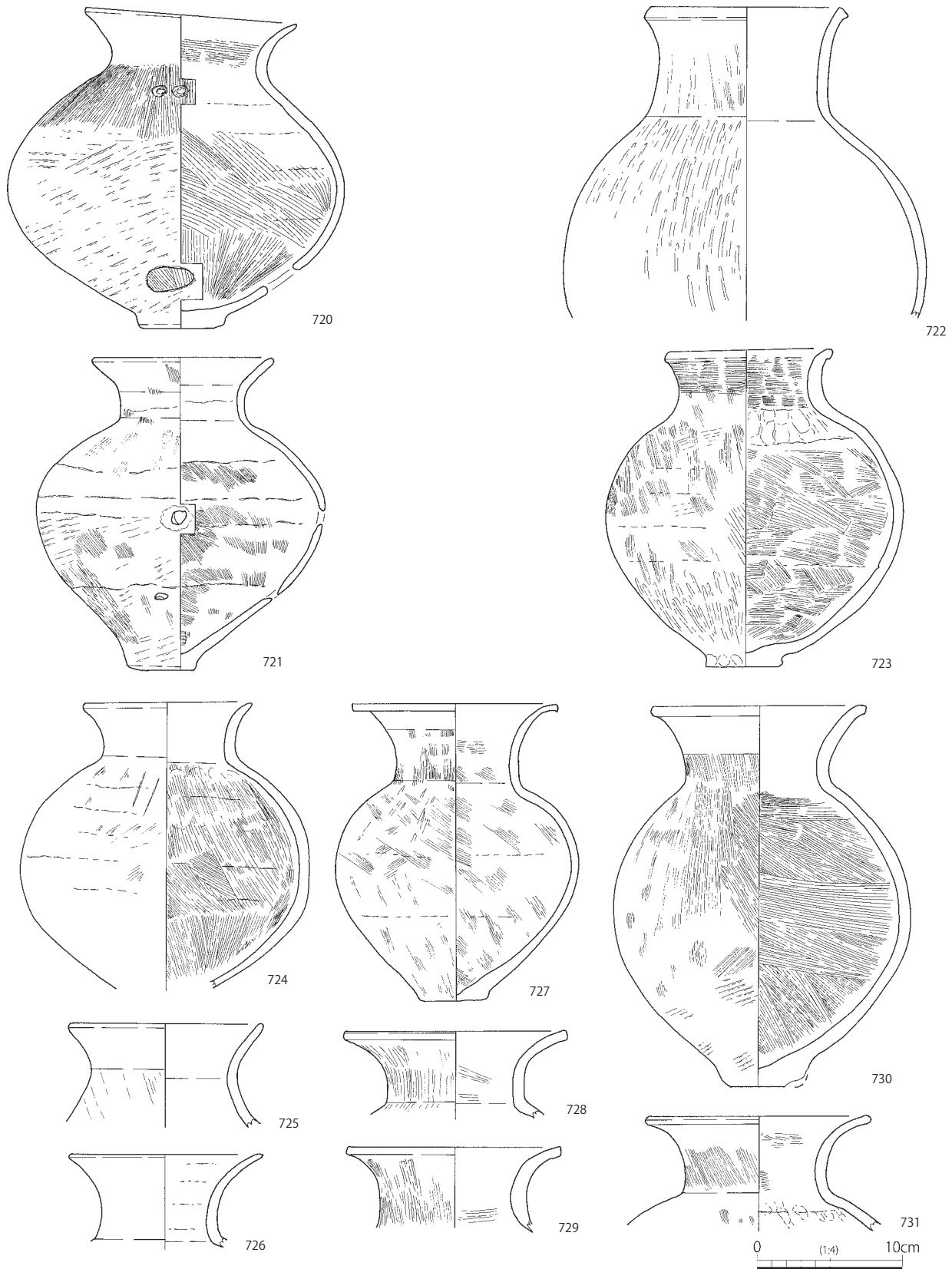


図70 溝出土遺物 (35) (64 溝東部・下層1)

裾部分が5方向と推測される。弥生時代後期後葉。715は外面縦・斜め方向ハケ後タテミガキ。内面は横・斜め方向ハケ後ナデだが、裾部ではハケは明瞭に観察できない。筒部の中位と下部にはそれぞれ4方向のスカシが互い違いに施される。裾部へは緩やかにハの字状に開き、口縁部へは比較的明瞭に屈曲する。

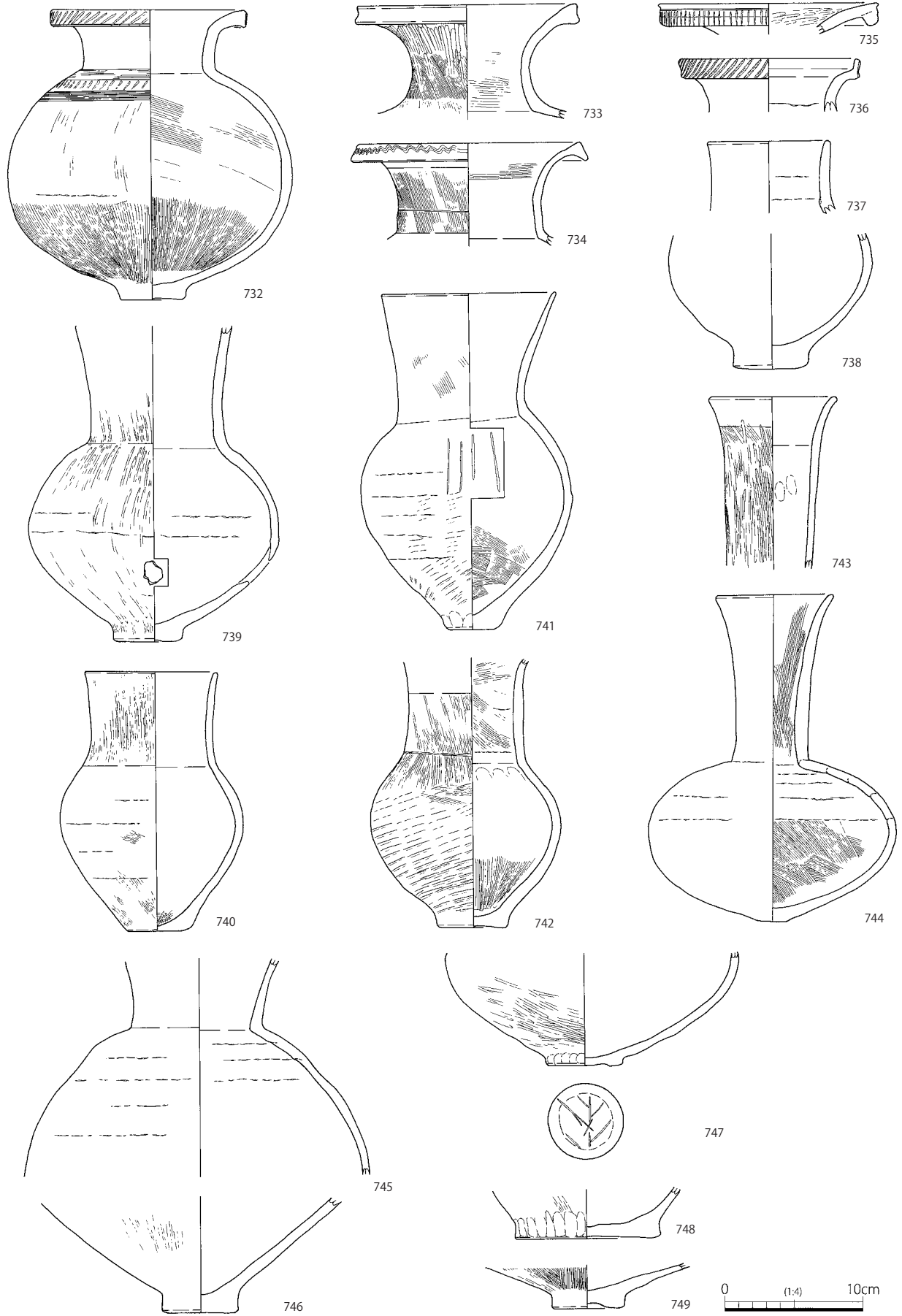


图 71 溝出土遺物 (36) (64 溝東部・下層 2)

弥生時代後期後葉。

716は手焙形土器。覆い部は剥離のため、内外面とも調整不明。受け部外面は強いヨコナデだが、内面は剥離のため調整不明。おそらくは同様にヨコナデだろう。体部は外面にわずかにタテハケが見られるが、これ以外の調整は内外面とも不明。底部は内外面ともハケで、外面は縦方向、内面は横方向をそれぞれ基調とする。凸帯には刻み目が施される。弥生時代後期後葉～庄内式頃。**717**は把手。ナデ調整と思われる。いずれの把手かもわからず、時期不明。**718**は甕用の蓋。外面は剥離のため十分に調整が観察できないが、ナデだろうか。内面はわずかにハケが残る。つまみ部分頂部は弱く窪む。後期には少なく、型的な位置づけも難しいため時期不明ながら、後期の可能性もある。なお、当遺構からは一定量の中期後葉頃の土器が混入しており、その一例なのかもしれない。**719**は蛸壺（蛸壺Cか）。底部の小片で、調整はいずれも不明。尖底気味であり、体部形態はうかがえない。庄内式頃と思われる。

以上、64 溝東部上層下部出土遺物は、わずかに弥生時代中期後葉や後期前葉の遺物を含むが、弥生時代後期中葉～庄内式前半までであり、後期後葉～庄内式初頭（もしくは前半）までが大多数である。

720～790は下層出土。

720～749は壺。**720～736**は広口壺。**720**は広口壺A。口縁部は内外面ともヨコナデで、外面は頸部までヨコナデである。体部は右上がりのタタキ（2.5条/cm）後タテハケだが、摩滅気味のためハケは良好には残存しない。肩部から頸部までは、ハケが比較的良好に残存する。内面、頸部はヨコハケ、体部は縦・斜め方向のハケだが、肩部は接合痕が多数残存し、粗いナデであろう。なお、接合痕は約2.7cm単位で見られる。外面肩部には竹管文が2個を一単位として一箇所施される。また、体部下部の孔は外側からの意図的な焼成後穿孔の可能性がある。体部形態はやや横に張り、底部への突出も明瞭ではない。庄内式前半か。**721**は広口壺Ab。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、摩滅のため不明瞭。外面は、胴部中位や底部付近にタタキが残る。全体的にはハケが見られ、肩部には良好にタタキ目が観察できないが、タタキ後ハケだろう。頸部はわずかにタテハケが見られる。体部内面は、ナメハケ。頸部内面はナデか。内外面とも接合痕が多数見られる。また、胴部中位と下部には焼成後の穿孔が見られる。胴部中位の穿孔は0.7cm程で比較明瞭だが、下部の穿孔はこれよりもやや小さく0.4cm程である。なお、胴部の最大径は中位よりやや上にあり、肩が張るように見えることから、やや古相を思わせる。弥生時代後期後葉。**722**は広口壺Dか。口縁部はヨコナデと思われるが、摩滅のため不明瞭である。外面頸部下～体部はタテミガキ。内面は口縁部、頸部、体部ともナデと思われるが、摩滅のため調整不明。弥生時代後期後葉か。**723**は広口壺Aか。口縁端部外面はヨコナデだろう。頸部は内外面ともヨコハケ。体部外面は水平～右上がりのタタキ後ハケ後タテミガキ。タタキ痕は部分的に確認できる程度だが、胴部中位や肩部などに見られる。その後、タタキを消してタテハケが施され、最終的にタテミガキが施される。なお、ミガキは底部付近で確認できる程度である。内面はハケで、底部は縦方向、胴部中位程より上は横方向を基調とする。肩部は接合痕が残り、指頭圧痕も見られ、明瞭なハケ目は観察できず、粗いナデで仕上げられたのだろう。底部外面は、中央部分に向かい弱く窪む。体部～頸部へ鈍く屈曲し、直線気味に頸部が立ち上がり、口縁部が外反する。端部は外側に巻き込むように丸く収める。口縁端部形態や、頸部調整など、やや奇異な感のある壺である。なお、内面には炭化した木材が付着している。弥生時代後期後葉か。**724～731**は広口壺A。**724**は口縁～頸部内外面ともヨコナデだろう。体部外面は、剥離、摩滅のため調整が十分に観察できないが、わずかにタテハケが見られる。また、胴部中位には右上がりのタタキ痕跡も見られ、外面はタタキ後ハケだろう。体部内面

はハケで、肩部には指頭圧痕が見られる。なお、胴部外面の肩部には、細く浅いものの、ヘラ状工具による沈線が2条施される。ハケ工具の静止痕跡と考えるには違和感があり、意図的と判断した。胴部はやや張る。体部から頸部への屈曲は比較的明瞭で、頸部が直線気味に立ち上がり、口縁が弱く屈曲するように見える部分もある。内外面とも接合痕が約2cm間隔で見られ、特に胴部最大径部分の接合痕は明瞭である。庄内式初頭頃。**725**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケだが、工具痕が観察できる程度。内面はナデだろう。体部～口縁部への屈曲は、当該部分が接合部分であることもあって、比較的明瞭である。口縁端部はごく弱く内湾気味にも見えるが、不明瞭で、丸く収める。なで肩と予想できる。弥生時代後期後葉か。**726**は内外面とも剥離のため調整不明だが、頸部外面に縦方向、口縁部内面に横方向の調整痕跡がわずかに見られる。頸部外面はタテハケもしくはミガキ、口縁部内面はヨコナデだろうか。なお、内面には約1.7cm間隔で接合痕が見られる。頸部の屈曲は内外面とも比較的明瞭だが、鋭い屈曲ではない。弥生時代後期後葉～庄内式。**727**は口縁部内外面ともヨコナデだが、内面は摩滅のため不明。以下、頸部は外面がタテハケ、内面が横もしくは斜め方向のハケ。体部は外面が縦～斜め方向のハケで、後にミガキが施されているようだが不明瞭。内面はナナメハケで、底部には工具痕が明瞭に残る。体部～頸部がやや垂直気味に立ち上がるようにも見え、広口長頸壺とすべきだろうか。口縁端部は丸く収めず、やや面を持つ。体部は概ね中位に最大径があるが、胴下部があまり張らないため、肩が張るようにも見える。弥生時代後期中～後葉。**728**は口縁部内外面とも剥離のため調整不明。頸部外面はタテミガキで、わずかに残る体部外面も同様にタテミガキ。内面、頸部は大部分が剥離するが、屈曲部際に残る器面には、横方向を基調としたミガキが残る。体部内面は剥離のため調整不明。頸部の屈曲は比較的明瞭で、頸部が立ち上がり、緩やかに外反する口縁に移行する。端部には面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。**729**は内外面とも器面の剥離が著しい。口縁部外面はヨコナデ。頸部外面はタテミガキで、ヨコナデを切る。内面、口縁部は器面が残存せず、調整不明。頸部は下部にわずかながら器面が残存し、当該部分ではヨコミガキが見られる。口縁端部は鈍い面を持つ部分が見られるが、器面の剥離もあり、口縁部全体では観察できない。弥生時代後期後葉～庄内式。**730**は口縁部外面ヨコナデ。頸部は口縁部ヨコナデ以前のタテハケ。以下、体部も縦方向を基調とした、縦・斜め方向のハケだが、底部の鉢状部分は右上がりのタタキ(2.5条/cm)が見られる。内面、口縁部は摩滅のため調整が観察できないが、ヨコナデだろう。頸部はわずかにヨコハケが見られる。以下、体部はハケで、良好に残存する。体部は縦長で、球形化は進んでなく、比較的明瞭に頸部で屈曲し、ハの字状に頸部が開き、口縁部が弱く外反し、端部は鈍い面を持つ。弥生時代後期後葉。**731**は口縁部内外面ともヨコナデだろう。外面、頸部はタテハケで、ミガキは見られない。体部もハケ。内面、頸部はヨコミガキだが、ハケとも思える痕跡も見られ、ハケ後ミガキだろう。体部には接合痕と指頭圧痕が見られ、雑なナデと思われる。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、頸部～口縁部へは緩やかに移行し、端部はやや面を持つが、丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式。**732・733**は広口壺Dか。**732**は内外面とも剥離、摩滅が著しい。口縁部外面はヨコナデと思われる。頸部も同様であろう。体部はタテミガキと思われるが、底部付近で比較的明瞭である以外は不明瞭である。ミガキ以前には右上がりのタタキが施されていたようで、部分的に弱く残存する。なお、頸部直下には原体の条数不明だが、櫛描直線文が施され、その下部には櫛状工具(原体の条数は7条か)による刺突文、さらに下部に7条の櫛描直線文が施される。体部はやや下膨れ気味。なお、口縁端部にも櫛状工具による刺突文が施される。口縁端部、肩部の刺突文は、いずれも上部が太く、下部に向かい細くなっており、上部に強く押し当てたと推測される。一方、口縁部

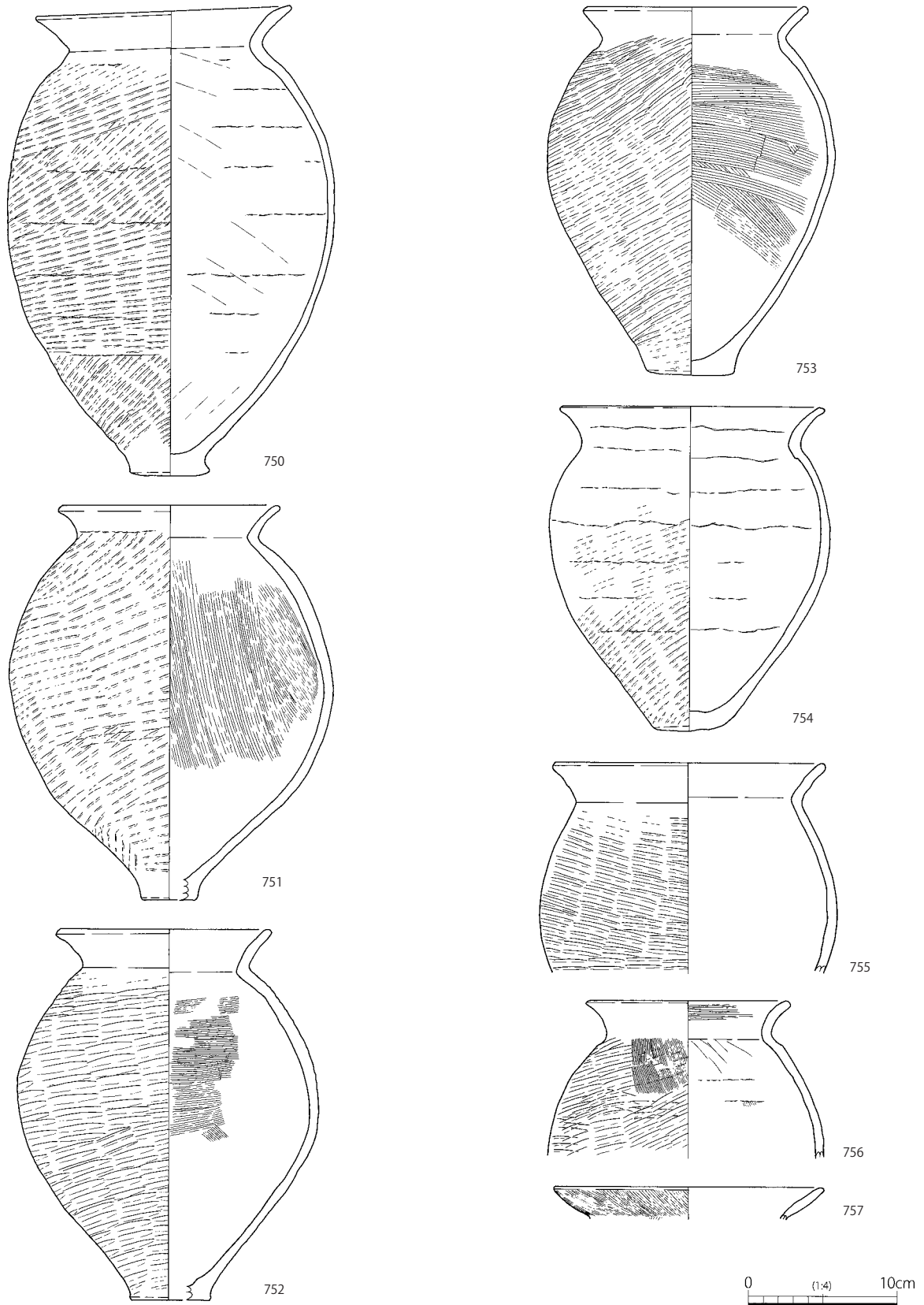


図72 溝出土遺物(37)(64溝東部・下層3)

内面の調整は摩滅のため不明。体部はハケで、底部は縦方向、中位より肩部は横方向を基調とする。頸部の屈曲は比較的明瞭で、頸部が概ね直線的に立ち上がり、口縁が強く外反し、端部は弱く拡張する。弥生時代後期後葉か。**733**は外面タテハケ後タテミガキで、頸部下位にはハケが多数残存する。内面は、

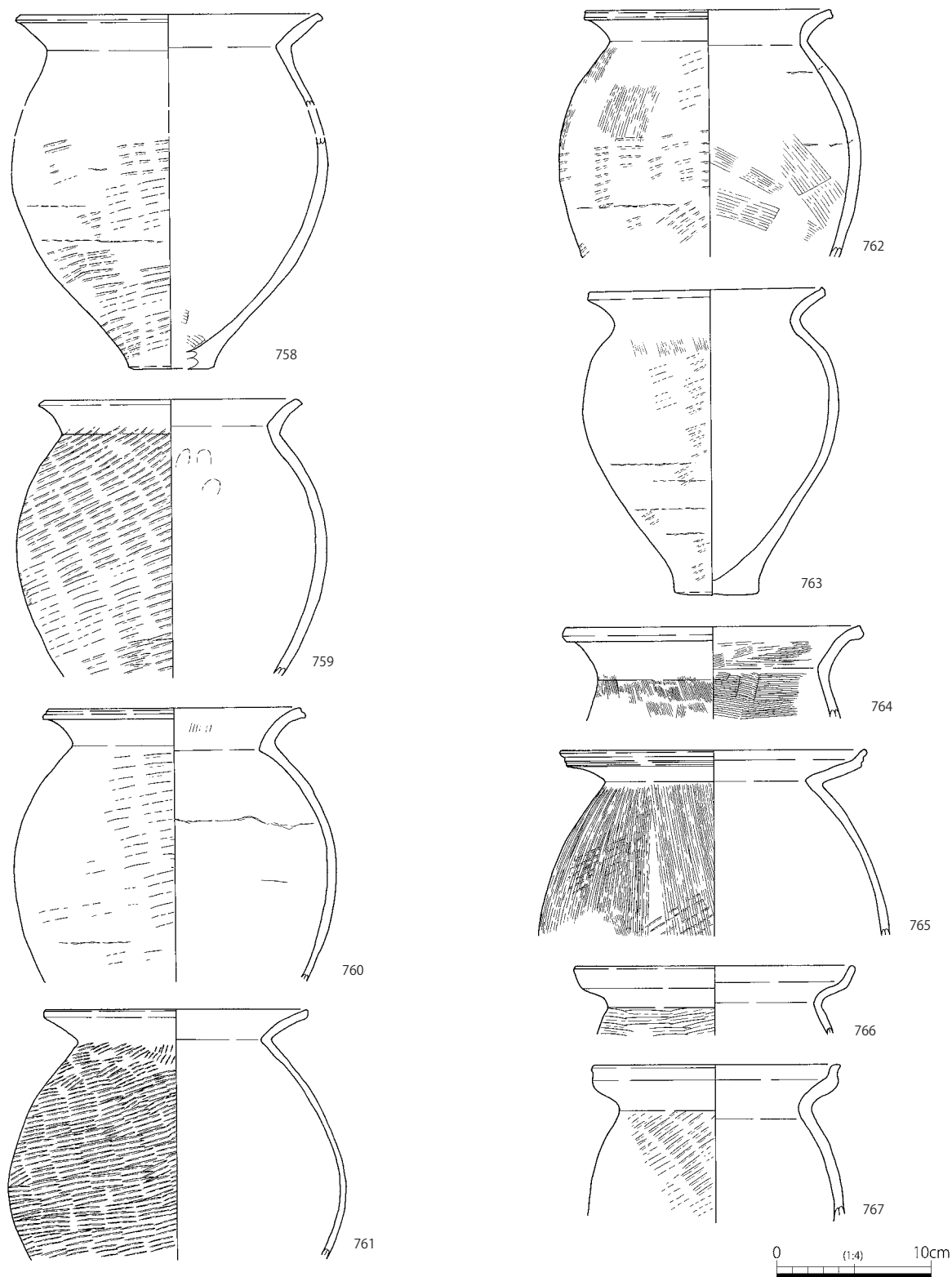


図 73 溝出土遺物 (38) (64 溝東部・下層 4)

剥離のため器面が残存しない部分も多いが、ヨコミガキ。頸部の屈曲は、内面では比較的シャープである。口縁端部は弱く下方に拡張し、強いヨコナデにより、中央が窪む。弥生時代後期後葉。734は広口壺Cか。口縁部外面はヨコナデ。頸部はタテハケ。中央やや下には横方向にハケを切る痕跡が見られるが、ごく細く、ヘラ状の工具より先の細い工具による。ただし、意図的な文様のようにも思えない。わずかに残る体部の調整は不明だが、ナデか。内面、口縁部は剥離のため調整不明。頸部はヨコハケがわずかに残

る。体部は調整不明。口縁端部は垂下し拡張し、外面には稚拙な波状文が施されるが、残存部位でも、途中で途切れる。弥生時代後期中～後葉か。**735**は広口壺Cか。外面調整は不明瞭ながら、ミガキか。内面はミガキ。垂下する口縁端部外面には、上端部に1条の沈線を施した後、0.3～0.4 cm間隔で刻み目が施される。なお、内面の口縁端部際は、赤色に強く発色している。図面では十分に表現できなかったが、外面の残存部分端部は屈曲気味である。弥生時代後期後葉。**736**は広口壺。頸部外面から口縁部内面はヨコナデ、頸部内面はナデと思われる。口縁部は受け口状を呈し、摘みあげられた口縁部外面には、櫛状工具により刺突が施される。なお、内面の頸部下には接合痕が明瞭に見られる。上層上部の461、上層下部の580などと類似する器形で、同様に弥生時代中期後葉、もしくは後期前葉の広義の近江系、山城系とされるものだろうか。**737～742**は長頸壺。**737**は内外面とも摩滅のため調整不明。口縁は弱く外反気味ながら、直線的に上方にのび、口縁端部は丸く収める。内面には接合痕が見られる。弥生時代後期後葉。**738**は内外面とも摩滅のため調整不明だが、外面底部付近はミガキの可能性はある。弥生時代後期後葉。**739**は外面頸部、体部とも縦方向を基調としたハケの後、タテミガキと思われるが、器面が剥離している部分があり不明瞭。内面は摩滅のため調整不明である。頸部の締まりが弱い。胴部下位には外側からの焼成後穿孔が見られる。弥生時代後期中～後葉。**740**は剥離のため調整不明瞭ながら、外面の器面が残存する部分にはハケが見られ、頸部と体部下部は縦方向、体部最大径付近は斜め方向である。内面は、頸部がナデと思われる。体部は、底部にクモの巣状ハケが見られる。底部外面には木葉痕が見られる。頸部～体部への屈曲は鈍く、明瞭な屈曲は見られない。体部外面には接合痕が約2 cm間隔で見られる。底部は突出せず、全体的に粗いつくりである。弥生時代後期後葉。**741**は全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁端部調整は不明。外面頸部はハケ。体部は右上がりのタタキ後ハケ。内面、頸部は一部にナデが見られる。体部はハケ。頸部の屈曲は、外面は鈍いものの、内面はこれよりやや明瞭である。なお、外面肩部には4条の縦方向のヘラ描き沈線が施される。弥生時代後期後葉。**742**は頸部外面タテハケ。口縁端部は残存しないが、残存部分の上端ではヨコナデが見られ、破損している上端部は口縁端部に近いと思われる。体部外面は、肩部が右上がりのタタキ後ハケで、頸部付近は縦方向、胴部最大径やや上部分には横方向である。なお、図化できていないが、頸部直下には竹管文が2個一単位で施される。これより下部は右上がりのタタキ(2条/cm)で、胴部最大径に向かい残存状況が悪くなる。当該部分は、タタキ後ナデかもしれないが、明瞭なナデ痕跡は見られない。単に、摩滅しただけかもしれない。内面、頸部は横・斜め方向のハケ。体部は縦方向を基調とするハケだが、肩部は指頭圧痕が施されている。底部は明瞭に突出し、外面は中央が弱く窪む。体部から頸部への屈曲はやや鈍い。弥生時代後期後葉。**743・744**は細頸壺。**743**は口縁部内外面ともヨコナデで、内面はやや下部まで及ぶ。頸部外面はタテハケ後タテミガキ、内面は粗いナデのようで、指が静止した際に生じたと思われるしわ状の器面の荒れが見られる。弥生時代後期中葉頃か。**744**は外面摩滅のため調整不明。内面頸部は縦方向のハケがわずかに残る。体部内面は胴部最大径やや上以下がハケ、これより上の肩部は接合痕が明瞭に残り、ナデだろう。接合痕が約2.1 cm間隔で、頸部まで4段分が明瞭に観察できる。底部はごく小さい平底。横方向に強く張り出す体部で、頸部は直線的に上方に伸び、口縁が緩やかに外反する。弥生時代後期中葉か。**745**は広口壺か。内外面とも摩滅のため調整不明。内外面とも体部には接合痕が多数残存する。頸部は弱く外反気味ながら逆ハの字状に開く。残存部分上端まで緩やかに外反するのみで、二重口縁壺が想定されるような明瞭な屈曲は見られない。弥生時代後期後葉～庄内式。**746**は体部外面には縦方向の調整が見られ、ハケかミガキと思われるが不明瞭。内面は摩滅のため調整不明

である。底部は明瞭に突出する。残存部分上端は、口縁端部のように揃っている。ただし、内面に剥離痕跡があり、これより上部に体部が存在したことが予想でき、壺底部の鉢状部分の破片と思われる。弥生時代後期後葉～庄内式か。**747**は体部外面横方向を基調とするミガキだが、残存部分上位は剥離のため不明。底部付近にはナデも見られる。内面は剥離のため調整不明。底部外面は中央部分が窪み、主にこの部分にヘラ状工具による木葉痕が見られる。体部は横方向に強く張り出し、球形化が進行していることが予想できる。弥生時代後期後葉～庄内式。**748**は外面の剥離、摩滅が著しいが、わずかにハケが見られる。なお、底部付近はナデが後に施される。内面は、摩滅のため調整不明瞭ながらナデだろう。弥生時代後期後葉～庄内式か。**749**は体部外面が細かいタテミガキ。内面は剥離のため調整不明。底部外面は中央部分が明瞭に窪む。底部は明瞭に突出するが、体部が急激に横方向に伸びており、球形化していることが予想できる。弥生時代後期後葉～庄内式。

750～769は甕。器高を基準とした分類に従えば、**750**がA a、**751～753**がA bで**768・769**もその可能性があり、**754**がA cで**755・756・758・759・767**などもその可能性がある。**750**は口縁h。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）。内面は摩滅が著しいが、わずかにハケが見られる。外面のタタキは頸部付近で不明瞭となる。これは、器面摩滅のためでもあるが、この部分に接合痕が見られ、そこまでをタタキにて成形し、その後、以下のものよりも、やや細身の粘土紐を数段積み上げて、口縁までを成形したとも考えられる。体部は胴長で、頸部の屈曲は内面が比較的鋭く、端部は丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**751～753**は弥生形甕A b h。**751**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）で、口縁部下端まで及ぶ。内面はハケ。底部は明瞭に突出するが、残存部分が小さく、底部外面の形状は不明。頸部の屈曲はやや鈍く、口縁は外反気味で、端部は丸く収める。体部はやや球形化が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**752**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）。内面は剥離が著しいが、胴部中位に横方向を基調としたハケが見られる。底部は一部しか残存せず、外面形状は不明だが、残存部分では単純な平底である。体部形態は細長い印象を受け、**751**よりも体部下部の膨らみがやや弱い。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**753**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりの粗いタタキ（2条/cm）。内面は左上がり、水平方向のハケ。底部は弱く突出し、定径はやや広め。口縁端部はごく弱く外面に面を持つようにも見えるが、丸く収める。**751・752**よりも体部下部が膨らまず、やや肩が張る。弥生時代後期後葉。**754～756**は弥生形甕A c h。**754**は口縁部内外面ともヨコナデと思われるが、摩滅のため不明瞭である。体部外面は、肩部の器面が剥離し調整が十分に観察できないが、以下は右上がりをもととするタタキ（3条/cm）。全体的にタタキの残存度は良くないが、底部の鉢状部分は比較的明瞭である。内面は剥離のため調整不明。内外面とも接合痕が随所に見られる。胴部の接合痕からは、2.5 cm程の粘土紐を積み上げていたと推測できる。器形は、底部の突出は見られないものの、最大径が胴部やや上位にあり、肩が張り気味である。弥生時代後期後葉。**755**は外面、口縁部はヨコナデ。体部は左上がりのタタキ（2条/cm）で、頸部付近は摩滅のため良好には残存しないが、頸部直下までは施されているようである。なお、残存部下端ではほぼ水平方向である。内面は、剥離のため調整が観察できないが、口縁部はヨコナデだろう。頸部の屈曲は、内面の一部で比較的シャープではある。口縁は弱く外反気味ながら、概ね直線的に伸び、口縁端部は丸く収める。体部最大径は口径をわずかに上回る。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**756**は口縁部内外面ともヨコナデで、外面端部側には一部強いナデによると思われるハケにも似る痕跡が見られる。体部外面は

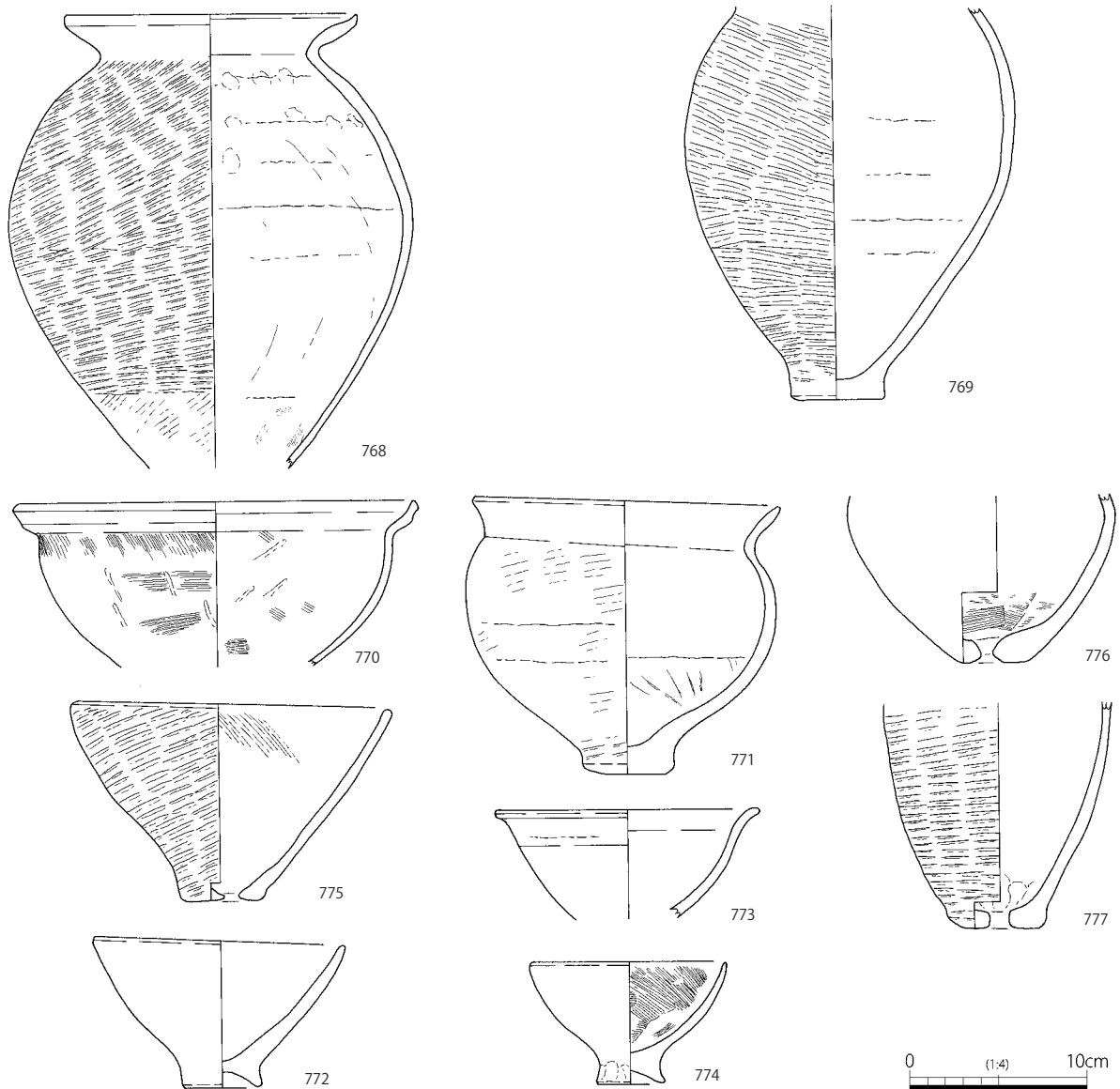


図74 溝出土遺物(39)(64溝東部・下層5)

右上がりのタタキ(2.5条/cm)で、一部をハケ消す。ハケは一部口縁部下部まで至り、口縁部のヨコナデ以降に施されたものである。タタキは右上がりを基本とするものの、水平方向のものも散見でき、丁寧な連続ラセンタタキではない。内面は剥離のため調整不明瞭ながら、わずかにハケや工具痕が見られ、全面ハケと思われる。体部最大径は口径を上回る。庄内式。**757**は外面ハケで、口縁部は左上がり、わずかに残る体部は右上がりである。内面は摩滅のため調整不明。ハケが口縁端部まで至り、上層下部の657と類似するが、口縁の傾きは異なる。弥生時代後期後葉～庄内式頃か。**758**は口縁hか。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面はハケだが、底部にわずかに見られる程度である。頸部の屈曲は内面で比較的鋭く、口縁が弱く外反し、端部には鈍い面を持ち、下部に弱く垂れ下がるような部分もある。底部は全てが残存しないが、残存部分では平底である。明瞭に突出する底部ではなく、体部の球形化も進行しており、庄内式初頭頃。**759**は口縁g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ(2条/cm)で、口縁部下位まで及び、口縁部叩き出し技法である。体部内面の調整は摩滅のため不明瞭だが、一部で指頭圧痕が見られ、ナデだろう。口縁部は弱く外反し、端部は比較的明瞭に面を持ち、下端はシャープである。体部は比較的球形化している。

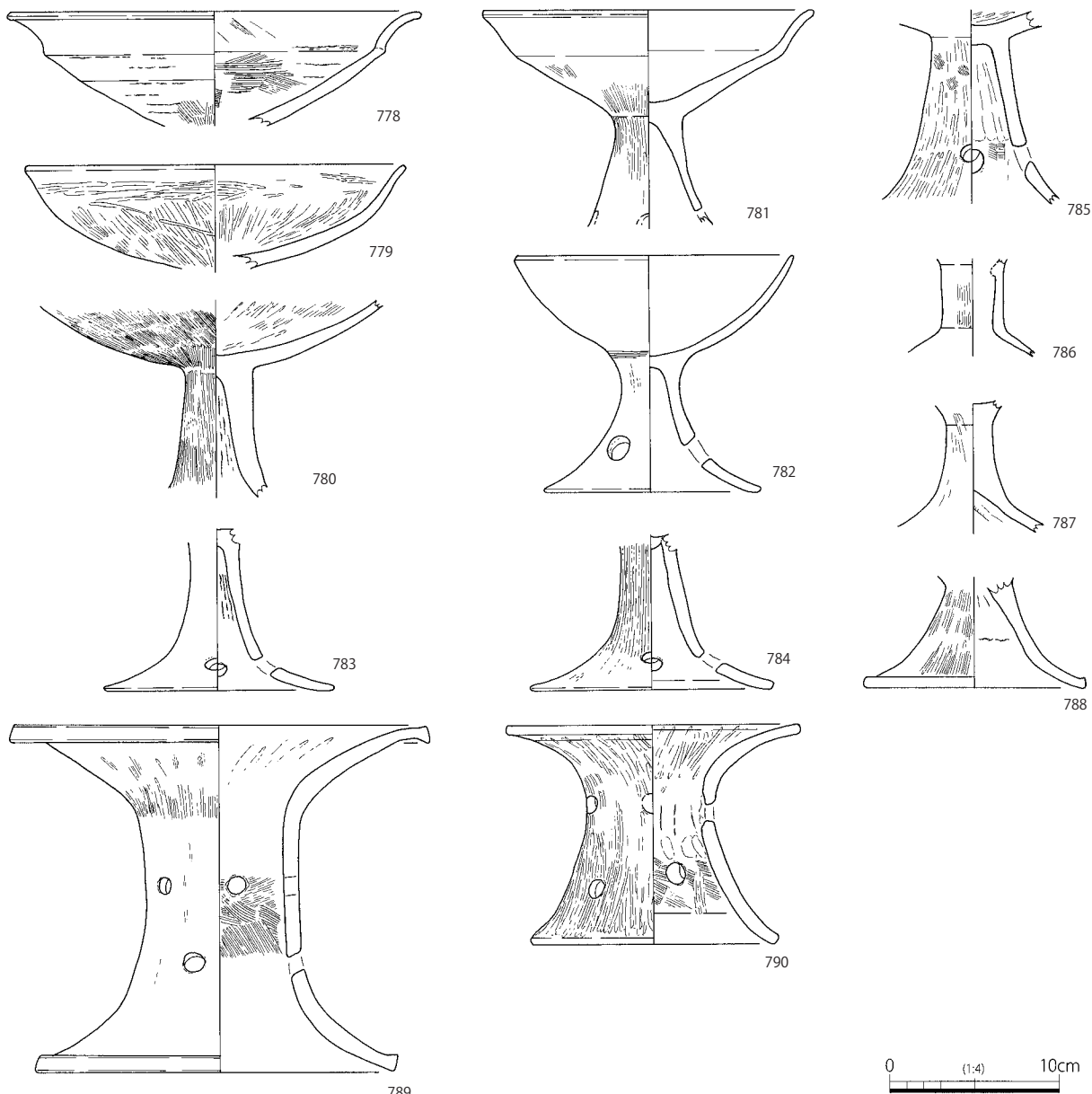


図 75 溝出土遺物 (40) (64 溝東部・下層 6)

庄内式初頭頃。**760** は口縁 a か。口縁部外面はヨコナデ、体部外面は水平～右上がりの粗いタタキ（2条/cm）だが、いずれも摩滅気味で良好には残存しない。内面は摩滅のため調整不明だがナデか。なお、肩部内面には接合痕が明瞭に残る。頸部の屈曲は比較的明瞭で、口縁は外反し、端部は明瞭に面を持つ。体部は比較的球形化しているが、口縁端部の成形は古手と思われ、弥生時代後期後葉か。**761** は口縁 g もしくは f か。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は比較的細かい水平～右上がりのタタキ（4条/cm）。内面は剥離、摩滅のため調整不明。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、庄内河内形甕のようではない。口縁部はほぼ直線的に伸び、端部は若干つままれているようにも見えるが、明確ではない。ただし、外面に比較的明瞭な面を持つ。頸部の屈曲、細めのタタキ、口縁部形態など、庄内形甕の影響を受けているようにも見える。少なくとも、体部の球形化は進んでいると見られ、庄内式中頃だろう。**762** は口縁 g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は、水平～右上がりのタタキ（2条/cm）後タテハケ、内面はハケ。口縁部は、短めで外反し、端部は面を持つ。体部は球形化傾向にある。弥生時代後期後葉～庄内式。**763** は口縁 g。内外面とも剥離が著しい。口縁部は内外面ともヨコナデと思われる。

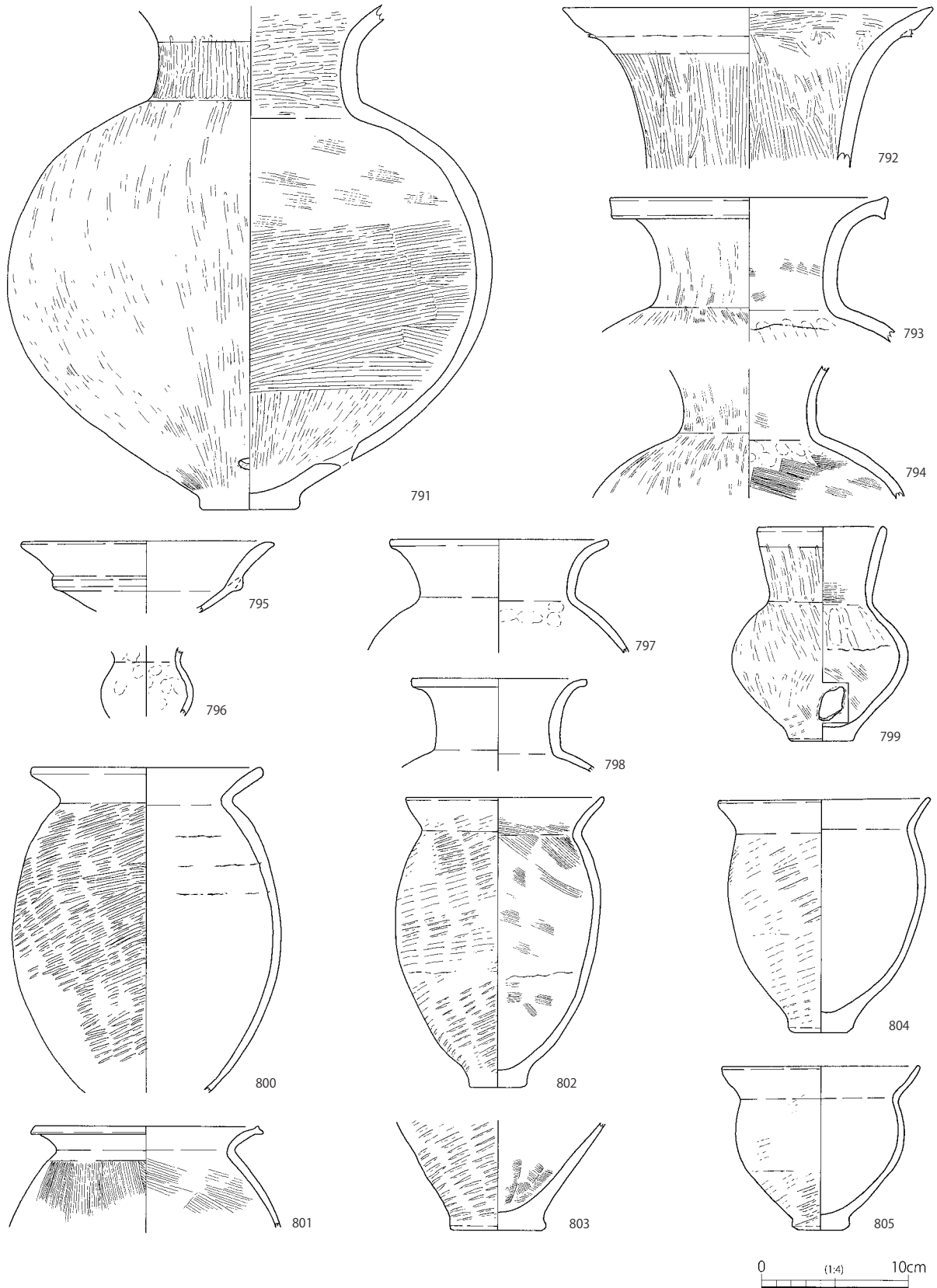


図76 溝出土遺物(41)(64溝東部・アゼ1)

体部外面は右上がりのタタキがごく弱いながらも観察できる。この後に、肩部付近にはハケが見られるが、全体に及ぶかは不明である。内面はナデかハケと思われる。口縁部は弱く外反し、口縁端部はごく弱くつまみ上げられている。外面をハケ消しており、弥生時代後期中葉頃。**764**は口縁部外面ヨコナデ、

体部外面は縦方向を基調とするハケ。ハケ以前にタタキが施されていたようにも見えるが、はっきりとしない。内面、口縁部はヨコハケ後ヨコナデで、ハケが部分的に残存する。体部内面はヨコハケ。頸部の屈曲は、内面で比較的明瞭で、ハの字状に口縁が開き、端部がさらに外反する。端部は部分的に分厚くなる。口縁端部形状が奇異である。弥生時代後期か。**765**～**767**は口縁部が受け口状で、口縁bか。**765**は口縁部内外面ともヨコナデだろう。体部外面は右上がりのタタキ(2.5条/cm)の後にタテハケ。内面は剥離が著しく調整不明である。拡張した口縁部に沈線が二条施される。**766**は口縁部内外面ともヨコナデだが、内面は剥離のため十分には観察できない。一方、外面は強いヨコナデが良好に残存する。体部外面は水平～右上がりのタタキ(2.5条/cm)。内面は剥離のため不明。口縁部受け口の屈曲は鈍い。**767**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。体部内面は摩滅気味で、調整不明瞭ながら、現状でハケは見られず、ナデだろうか。全体的に分厚い。頸部の屈曲は鈍い。口縁端部は外方につまみ出し、内面上端には弱く面を持つ。いずれも弥生時代後期中葉。**768**は口縁f。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は水平～右上がりのタタキ(3条/cm)。底部の鉢状部分のタタキは器面の剥離のため、ごく弱く残存する程度である。これより上のタタキは明瞭に残存する。内面は摩滅のため十分に観察できないが、底部付近にはわずかにハケが見られる。また、体部中位にも板状工具の擦痕が見られ、同様にハケと思われる。なお、一部砂粒が動いている部分が見られるが、庄内形糞に見られるような明瞭なケズリとは異なる。器壁も薄くなく、ケズリとして意図されていないと推測し、影響についても積極的に考えにくい。体部内外面には、随所に接合痕が見られ、概ね3cm間隔である。なお、体部外面のタタキは、頸部下の接合痕が明瞭に残存する箇所以下までである。口縁部は中位にやや膨らみを持ち、口縁端部はごく弱くつまみ上げる。胴部最大径は概ね体部の中位にあるが、底部の鉢状部分の膨らみが弱く、肩が張っているようにも見える。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**769**は外面水平～左上がりのタタキ(2条/cm)。内面は摩滅気味で調整不明瞭ながら、ナデか。内外面とも底部の鉢状部分より上側に、約2.3cm間隔で接合痕が見られる。底部は平底で明瞭に突出し、体部は長胴気味。弥生時代後期後葉～庄内式。

770～**777**は鉢。**770**は小形鉢C b。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部は内外面とも、ハケ後ミガキだが、ミガキは良好には観察できない。深手の体部から内湾し口縁部が立ち上がり、屈曲外反し、外傾する鈍い面を持つ端部に至る。弥生時代後期後葉。**771**は小形鉢C a。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は水平～右上がりのタタキ後ナデだろう。内面は板状工具の静止痕が一部で放射状に見られるが、これから連続するようなハケ目は観察できない。この静止痕はその上にある接合部で切れており、鉢状部分の調整時に残された痕跡だろう。また、底部付近にわずかながらハケと思われる痕跡が見られるが、連続しない。ハケ後ナデと思われる。これより上位の体部は横・斜め方向のナデだろう。糞状だが、体部は横方向に張り出し、鉢と判断した。体部径が口径を凌駕し、球形化が進んでいる。庄内式前半。**772**は小形鉢B。内外面とも剥離のため調整不明で、外面にタタキ痕は観察できない。底部は突出し、外面は明瞭に窪む。庄内式初頭頃。**773**は小形鉢E。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はナデだろう。ヒビ状のしわが多数見られ、内面から押し出された可能性が考えられる。内面は剥離のため調整不明。体部～口縁部への屈曲は鈍く、口縁端部はややつまみ出し気味ながら、丸く収める。弥生時代後期後葉～庄内式初頭。**774**は小形鉢B。外面は剥離が著しく、わずかにハケが見られるが、後にナデ消しているように見える部分もある。底部付近はナデが見られる。内面はハケ。底部は上げ底。弥生時代後期後葉。**775**～**777**は有孔鉢。**775**は外面右上がりの粗いタタキ(2条/cm)。内面はハ

ケが口縁部側にわずかに見られる程度で、下部は不明。底部穿孔はやや小さい。底部は明瞭に突出する。弥生時代後期後葉～庄内式。**776**は底部内面にハケが観察できる以外、調整不明。底部への突出はなく、体部は残存部上端で内湾する。底部に穿孔がなければ、壺としたくなる器形である。弥生時代後期後葉～庄内式。**777**は有孔鉢B。全体的に摩滅気味である。外面は水平からやや右上がり気味のタタキ（2条/cm）。内面は底部に指頭圧痕が見られるが、これ以外の調整は不明。ナデだろうか。体部が片側しか残存しないが、鉢にしては口が開かないと現状では推測される。庄内式か。

778～788は高坏で、**778～781**は有稜高坏A、**782**が椀形高坏Aである。**778**はA2か。外面、口縁部～底部上端はヨコナデで、以下の底部付近がハケ。内面は口縁端部がヨコナデだが、これ以外は横・斜め方向のハケ。外面には接合痕が約1.2cmとやや短い間隔で残り、ハケで仕上げられ、粗雑なつくりである。やや深手の坏部で、口縁が強く外反し、端部はごく鈍い面を持つ。弥生時代後期中～後葉頃。**779**は椀形高坏とすべきか。坏部内外面とも、屈曲部より上の口縁部はヨコミガキ、同以下の底部はタテミガキ。坏部の屈曲は鈍く、屈曲後も明瞭な外反は見られないが、口縁端部が外反する。弥生時代後期後葉。**780**は外面坏部、脚部ともタテミガキ。内面は、坏部が縦方向を基調としたミガキで、脚部はナデで、シボリ目が残る。坏部残存部端でも口縁部への屈曲は見られず、屈曲後の口縁は短いことが予想される。脚部は残存部端で弱く外反するようにも見えるが、明瞭な屈曲があるとは考えにくい。弥生時代後期後葉。**781**はA2か。坏部外面口縁部は剥離のため調整不明。坏底部はタテミガキで、脚部もタテミガキ。内面は坏・脚部とも剥離のため調整不明。深手の坏部で、口縁が短く外反する。脚部はハの字状で、中空である。残存部端には4方の穿孔の一部が見られる。弥生時代後期後葉。**782**は内外面とも剥離のため調整不明だが、脚部外面には縦方向の調整痕跡がわずかに見られ、タテミガキと思われる。また、坏部下端には、2条の沈線が施される。脚部は緩やかにハの字状に開き、3方にスカシが穿たれる。坏部との接合部分に明瞭な屈曲はない。弥生時代後期後葉。**783～788**は脚部。**783**は内外面とも剥離のため調整不明。脚柱部は中空で、裾部への屈曲は不明瞭である。裾部には4方向の穿孔が施される。弥生時代後期後葉。**784**は脚部外面ハケのようにも見えるが、タテミガキか。裾部は摩滅のため調整不明。内面は脚端部がヨコナデだが、これ以上の調整は剥離のため不明。スカシは4方向に施される。脚柱～裾部への屈曲は鈍く、脚柱部は中空である。弥生時代後期後葉。**785**は外面、脚部ハケ後ミガキで、いずれも縦方向を基調とする。坏部は調整不明だが、おそらく脚部と同様だろう。内面、坏部はミガキ。脚部は脚柱部にシボリ目が見られ、下部にはわずかにハケ目が残る。最終的には脚柱部下部～裾部はナデで仕上げているのだろう。4方にスカシが穿たれる。弥生時代後期中～後葉。**786**は脚柱部タテミガキだが、これ以外の調整は不明。脚柱部から裾部への屈曲は明瞭だが、脚柱部は中空である。弥生時代後期後葉か。**787**は内外面とも剥離、摩滅が著しい。外面はタテハケ後タテミガキだろう。内面、坏部は調整不明で、脚部は弱くハケが見られ、ハケ後ナデと思われるが、単にハケが摩滅しただけかもしれない。脚柱部は中実だが、裾部への屈曲は不明瞭である。庄内式前半。**788**は外面、脚部タテミガキで、わずかに残る坏部は調整不明。内面は摩滅のため調整不明瞭ながら、ナデだろう。ハの字状に外反する脚部で、端部は明瞭に面を持つ。弥生時代後期前～中葉。

789・790は器台。**789**は内外面とも剥離、摩滅気味。外面、口縁部はヨコナデだろう。以下、筒部との弱い屈曲部分にはタテハケが見られる。ハケ後ミガキが施されているようだが、ミガキは良好には観察できない。内面口縁部はヨコナデで、以下屈曲部まではナデ後ミガキと思われる。筒部の中央部分以下屈曲部までにはハケが残るが、上部はナデ消されている部分も見られる。脚部は調整不明だが、

ナデか。筒部には2段にそれぞれ4方向で互い違いに穿孔が施される。筒部～脚部への屈曲は比較的緩やかである。逆に、口縁部側への屈曲は、これに比べると明瞭に見える。口縁端部は弱く拡張する。弥生時代後期後葉。790は外面タテミガキで、口縁端部はヨコナデ。内面は口縁部がタテミガキで端部はヨコナデ。いずれもヨコナデ後ミガキである。筒部はナデが施されるが、シボリ目が残る。脚部はハケ後ナデだが、ハケが多数残存する。端部はヨコナデ。穿孔が筒部と裾部にそれぞれ4方向、互い違いに施される。口縁端部には面を持つ。弥生時代後期後葉。

以上、64溝東部下層出土遺物は、弥生時代中期後葉や後期前葉の遺物を含むが、弥生時代後期後葉～庄内式の遺物がその大多数である。

791～815は断面観察用に残したアゼよりの出土だが、大部分が上層下部相当である。

791～799は壺。791は広口壺Aで、下層出土。口縁部外面はヨコナデで、以下の頸部はタテミガキ。体部外面もタテミガキだが、付着物などのため良好には観察できない。内面、口縁～頸部はヨコミガキで、体部内面はハケ。内面肩部に接合痕は目立たない。体部は横にやや張る器形である。なお、体部下端には、完存しないが外面からの焼成後穿孔が見られる。弥生時代後期後葉～庄内式。792は広口壺C。口縁端部外面は、本来付加されていた垂下口縁が剥離している。これ以下の口縁部外面は、この剥離した口縁を貼り付けた際のヨコナデが見られる。以下頸部は、タテミガキである。内面、口縁部はヨコミガキ、頸部はタテミガキであるが、頸部ミガキの下にはハケが一部で見られ、ハケ後ミガキである。弥生時代後期後葉。793は広口壺Dか。口縁部は内外面ともヨコナデ。外面、頸部以下はタテハケ後タテミガキで、頸部の屈曲部などにハケが残る。内面、頸部は特に下部にハケが見られるが、ハケ後ナデのようである。体部内面は肩部に接合痕が残り、指頭圧痕が施される。弥生時代後期中～後葉。794は広口壺Aか。頸部外面はタテミガキで、一部でミガキ以前のタテハケが見られる。体部外面はタテミガキだが、摩滅気味。内面、頸部は剥離が著しいが、一部残る器面に横・斜め方向のハケが見られる。体部内面はハケだが、頸部直下までは及ばない。肩部内面には指頭圧痕が見られ、接合痕は目立たず、比較的丁寧なつくりである。体部は比較的球形化しているようであり、頸部が概ね直立した後、口縁が外反するが、端部までは残存しない。弥生時代後期後葉～庄内式。795は二重口縁壺（複合口縁壺A）。内外面とも摩滅のため調整不明。屈曲部には凸帯が付される。弥生時代後期後葉～庄内式。796はミニチュア壺。内外面とも指頭圧痕が見られる。口縁部内外面とも調整不明。体部は指頭圧痕の後ナデだろう。小形丸底壺とするには、やや粗い。弥生時代後期後葉頃か。797は広口壺A。内外面とも剥離のため調整不明だが、内面肩部にはわずかに指頭圧痕が残る。体部～頸部への屈曲は、外面で比較的明瞭だが、内面は鈍い。頸部は逆ハの字状に開き、口縁部へ緩やかに移行する。口縁端部は、ごく鈍い面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。798は広口壺A。内外面とも剥離のため調整不明。体部は比較的薄手で、頸部への屈曲は比較的明瞭である。頸部は逆ハの字状に伸び、口縁が短く外反し、端部には鈍い面を持つ。弥生時代後期後葉～庄内式。799は長頸壺か。口縁部外面はヨコナデで、この後頸部にタテミガキが施される。体部外面は底部付近にわずかにタタキ痕、ハケが見られ、タタキ後ハケ後タテミガキである。口縁～頸部内面は摩滅気味で調整が良好に観察できないが、頸部下部の屈曲部やや上にヨコハケがわずかに見られ、ヨコハケ後ナデだろう。体部内面は最大径のやや上に接合痕が明瞭に残り、これより上位の肩部はナデ、以下はハケである。体部下部には不定形な焼成後穿孔が見られる。弥生時代後期後葉。

800～805は甕。800は弥生形甕A b g。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）だが、内面は剥離のため調整不明。体部の球形度は弱く、やや長胴気味である。弥生

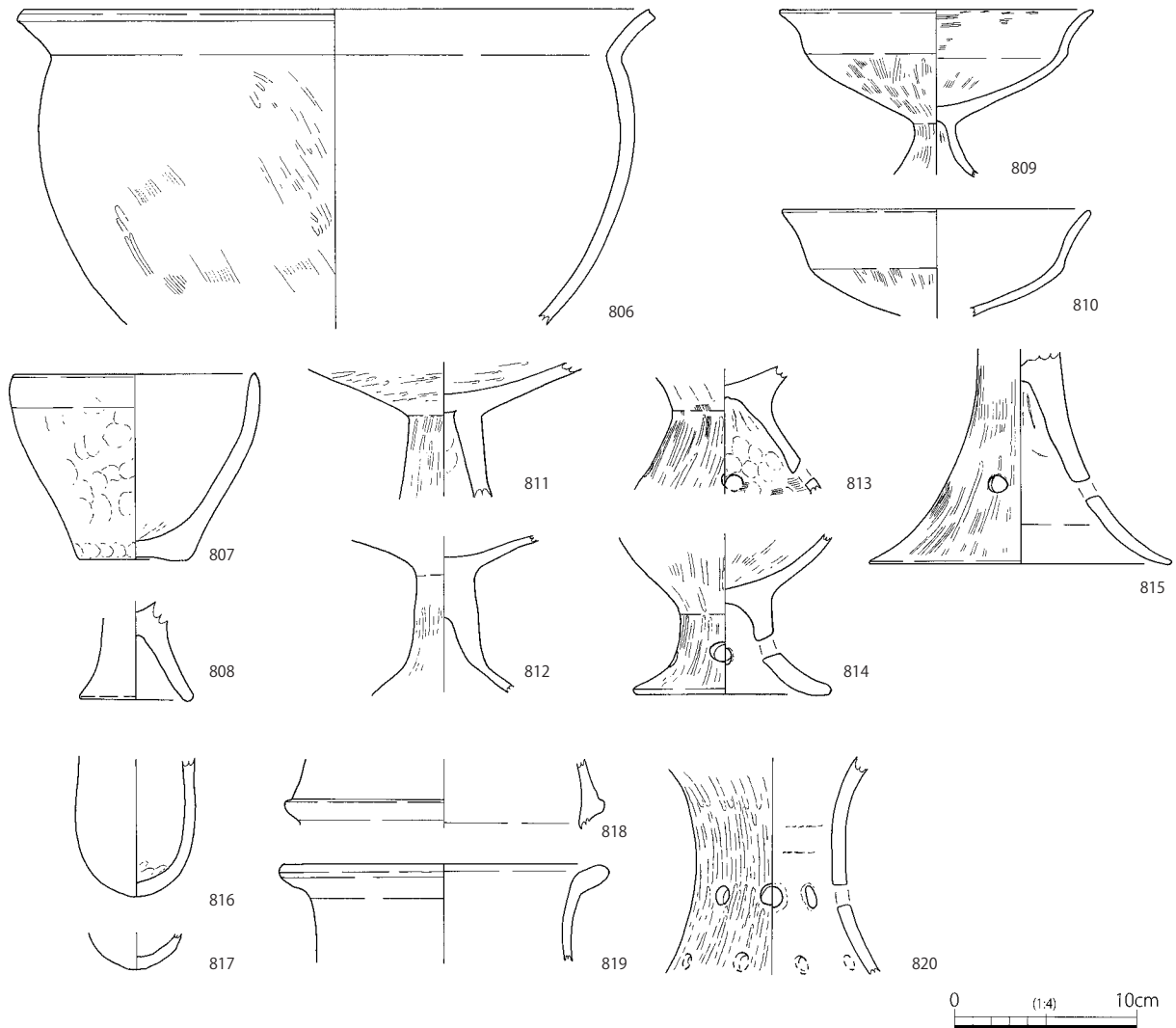


図 77 溝出土遺物 (42) (64 溝東部・アゼ 2・その他)

時代後期後葉。**801** は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はタテハケで、内面はナナメハケ。肩部内面には接合痕がわずかに残る。頸部の屈曲は明瞭で、口縁端部は明瞭に面を持ち、中央が弱く窪む。弥生時代後期中葉頃か。**802** は弥生形甕 A c h。体部外面は右上がりのタタキ (3条/cm) で、口縁部まで及ぶ。口縁部外面は、この後に弱くヨコナデが施される。体部内面はハケで、口縁部内面もハケ。このために、頸部の屈曲が明瞭となっている。体部は細長く、球形化は見られない。弥生時代後期後葉。**803** は外面右上がりのタタキ (2.5条/cm)、内面はハケ。底部は平底で、体部が直線的に伸び、体部は球形化していないと推測される。弥生時代後期後葉。**804** は弥生形甕 A d h。全体的に器面のほとんどが剥離している。外面、口縁部はわずかに残る器面にヨコナデが見られる。体部は右上がりのタタキ (2条/cm)。内面は剥離のため調整不明。口径が体部最大径を凌駕し、球形化があまり進んでいない。弥生時代後期後葉。**805** は弥生形甕 A e。口縁 h か。全体的に剥離、摩滅が著しい。口縁部外面は調整不明。体部外面は右上がりのタタキだが、底部付近以外はわずかに観察できるのみである。内面の調整は不明。体部は球形化しており、口縁部は内湾する。弥生時代後期末～庄内式初頭。

806・807 は鉢。**806** は大形鉢。外面、口縁部はヨコナデ、体部はミガキだが、全体的に摩滅気味である。内面は剥離、摩滅のため調整不明。頸部の屈曲は内面で比較的明瞭で、口縁部はごく弱く外反し、端部は明瞭に面を持つ。体部上部の肩部に膨らみを持つ器形である。弥生時代後期末～庄内式初頭。**807**

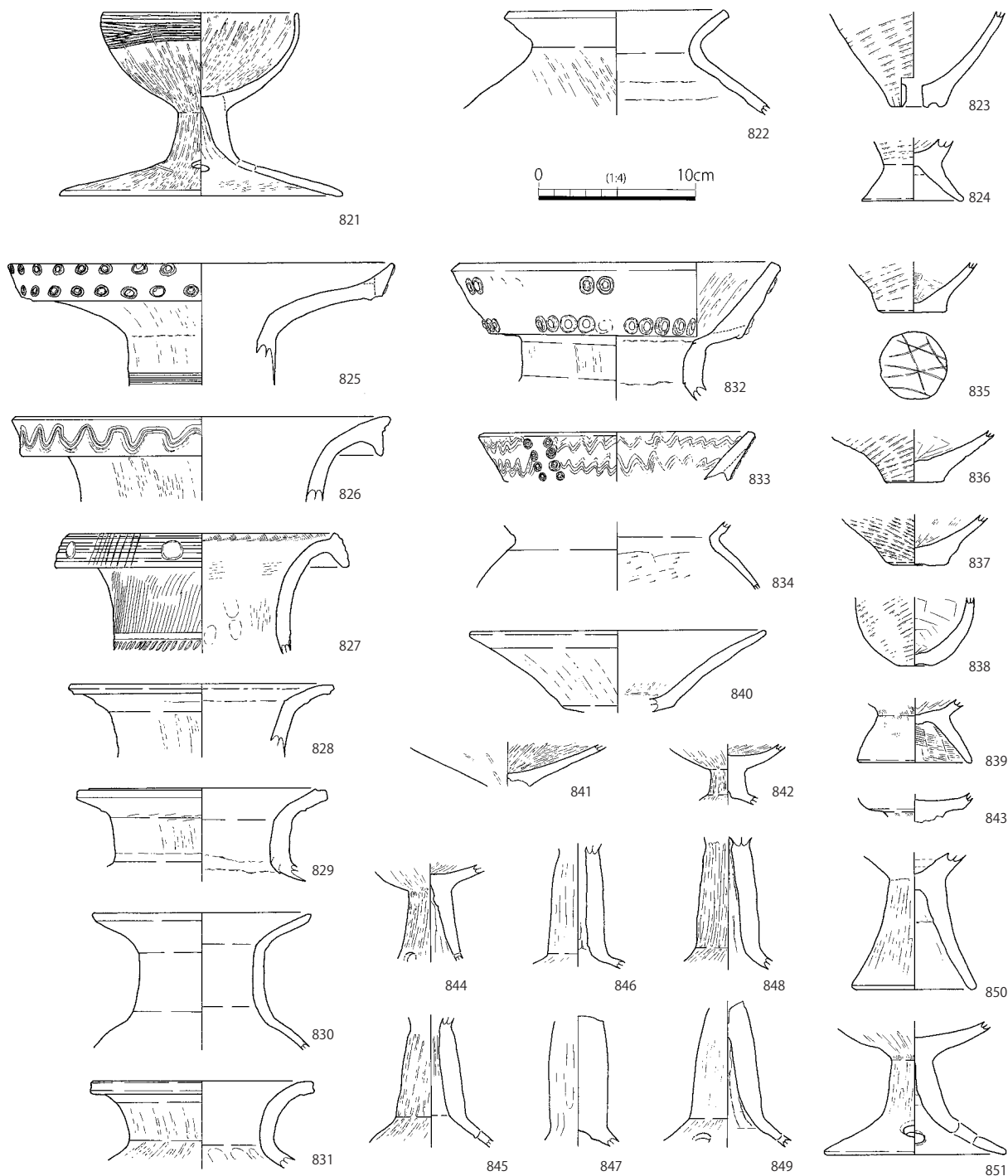


図78 溝出土遺物(43)(120溝中央部)

は小形鉢A。口縁部外面はヨコナデ、以下の体部外面はナデだが、縦方向にミガキとも思える痕跡が見られる。また、口縁部付近には縦方向のヒビ状痕跡が見られる。内面はハケのちナデと思われる。器壁が分厚く、雑なつくりの感がある。口縁部は内湾傾向にある。弥生時代後期後葉～庄内式。

808は脚台。製塩土器か。内外面とも摩滅のため調整不明。摩滅のためもあってか、他の製塩土器に見られるような、脚端部の折り返しは良好に観察できない。残存部上部の破断面は強く赤色に変化し、わずかに残る内面も二次焼成を受けたためか、白色化している。製塩土器であれば、脚台I式bで、庄内式だろう。

809～815は高坏で、809・810は有稜高坏A。809はA3か。外面、坏部口縁部はヨコナデと思

われるが、摩滅のため十分に観察できず、ミガキの可能性もある。坏底部～脚部はタテミガキ。内面、坏部口縁部はヨコミガキ、坏底部はタテミガキと思われるが、残存状況は悪い。脚部内面は剥離しており、調整不明ながら、ナデか。なお、脚柱部にはシボリ目が残る。坏部は比較的深く、口縁部は強く外反する。脚は端部まで残存しないが、短いと予想できる。弥生時代後期後葉。**810**はA4か。内外面とも剥離が著しい。外面、屈曲部上下にわずかに器面が残存し、口縁部側はヨコナデ、底部側がタテミガキ。やや深手で、口縁部は弱く外反する。弥生時代後期後葉～末。**811～815**は脚部。**811**は坏部内外面ともミガキで、いずれも横方向を基調とする。脚部外面はタテハケ後タテミガキ、内面はナデだろう。摩滅気味ながら、シャープな印象を受ける。円板充填法による。弥生時代後期後葉。**812**は内外面とも剥離が著しく、脚部外面の一部に残る器面にタテミガキが見られる以外は調整不明。脚柱部は中実気味で、脚柱～裾部への屈曲も比較的明瞭である。庄内式初頭。**813**は外面、坏・脚部ともタテミガキと思われるが、坏部側は残存部分が小さく、明瞭にミガキが観察できない。脚部のミガキもやや雑で、一部でミガキ以前のハケが見られ、ややカキトリ気味にも見える。内面、坏部はハケが残るが、後にナデが施された可能性もある。脚部は残存部端部にわずかにハケが見られ、ナデ消される部分が多い。脚柱部にはシボリ目が残るが、後にナデが施される。脚部には推定4方向のスカシが施されていたようで、3方が残存する。全体的に調整がやや雑な感がある。脚部はハの字状に開く。弥生時代後期中葉か。**814**は台付鉢の可能性もある。外面は坏・脚部ともタテミガキ。坏部内面は、摩滅気味ながら、ハケ後ミガキと思われる。脚部内面は剥離のため調整不明。脚柱部には4方向に穿孔が施される。弥生時代後期前～中葉か。**815**は外面タテミガキ。内面は脚端部がヨコナデで、これより上の脚部はナデだろう。脚柱部上端にはシボリ目が残る。なお、3方向に穿孔が施される。弥生時代後期中～後葉。

816～820は出土層位不明である。**816・817**は蛸壺B。**816**は内外面ともナデと思われるが、底部内面に指頭圧痕が見られる以外、摩滅のため調整不明。残存部分では孔は確認できない。**817**は内外面とも剥離のため調整不明。いずれも、庄内式か。**818**は手焙形土器。鉢部分の口縁端部、受け部分の破片と思われる。内外面とも摩滅のため調整不明。庄内式か。**819**は鉢か。口縁部は内外面ともヨコナデだが、これ以外の体部の調整は摩滅のため不明。ほぼ直線的な体部（もしくは頸部）から分厚い口縁部が外反する。時期不明。**820**は器台。外面はタテミガキ。内面の残存部分下部、裾部はヨコナデだが、これ以外の内面の調整は不明。胴部最大径やや下には6方向、残存部下端、裾部にはこれと位置を違って6方向に、それぞれ穿孔が施される。弥生時代後期後葉。

以上、64溝東部出土遺物は、弥生時代中期後葉の遺物を少量含むが、弥生時代後期後葉～庄内式の遺物がその大多数である。一部庄内式中頃の遺物を含むが、前半の範疇に収まるもので、庄内式の未までに下るものではない。

64溝全体では、約9割が弥生時代後期後葉～庄内式と考えられる遺物である。より絞った時期判断は難しいが、この中でも弥生時代後期後葉と判断できる遺物が最も多く、後期後葉～庄内式と考えられる遺物がこれに続く。庄内式でも後半～末に下るものはないといってよく、弥生時代後期後葉～庄内式前半程度の時期幅で考えられることができる資料であろう。なお、全体に占める割合は少ないが、弥生時代中期後葉の遺物が含まれる。中でも受け口状口縁を呈する、広義の近江系・山城系と考えられる遺物（461など）、紀伊の影響が考慮される遺物（428）の存在は、時期判断が妥当かもやや危ういが、当遺構にとっては混入であるものの、生駒山西麓産胎土を有する中河内の土器同様、交流を考える上で、有効な資料であろう。

120 溝 (図 78 ～ 80 - 821 ～ 894)

120 溝は複数の調査区に跨って検出されており、まとめりごとに、中央部、南東部、南西部に分けて記述する。

120 溝中央部 (図 78 - 821 ～ 851)

中央部についての断面図はないが、**821** は図 25 の 120 溝北西部断面の 4 層相当層と 5 ～ 7 層相当層からの出土遺物が接合、**824** は同 4 層相当層 (灰色粘土層) 出土で、これ以外は同 5 ～ 7 層相当層 (砂礫層) 出土である。

821 は椀形高坏 B 2。坏部外面はヨコナデ後口縁部ヨコハケ後タテミガキ。当初のヨコナデは、口縁部のヨコハケ直下部分に残る。口縁部のヨコハケは、6 条程の原体で 2 段に施されるが、稚拙な感がある。その後のタテミガキは、一部ヨコハケを切るが、大部分はヨコハケ以下に留まっており、結果として当該部分にヨコナデが見られる。ミガキ部分には、一部砂粒の動きが観察できる部分があるが、ケズリを意図したものではないようである。坏部内面はヨコナデ後タテミガキ。ミガキは坏底部では密だが、口縁部側では密度がやや粗く、ヨコナデが観察できる。脚部外面はタテミガキが密に施される。脚部内面は、脚柱部にシボリ目が残る、脚裾部にはナナメハケ、ナデが見られる。脚部の穿孔は 3 方が残存しており、4 方向と推測される。脚柱部～裾部への屈曲はさほど鋭くないが、裾部が比較的長い。庄内式中頃。**822** は甕か。全体的に器面が剥離しているが、口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面は、左上がりのミガキと思われる痕跡が見られる。タタキは確認できない。内面には、約 2 cm 間隔で接合痕が明瞭に残る部分があるが、のち弱くナデが施されているようである。頸部の屈曲は鈍い。口縁部は比較的直線的で、端部はやや丸味を帯びるが、弱く外傾する面を持つようにも見える。外面ミガキであることから、壺とするべきかもしれない。弥生時代後期か。**823** は有孔鉢。体部外面は右上がりのタタキ (2 条/cm) だが、底部付近には一部分のみながら縦方向のタタキが見られる。内面は剥離のため調整不明。弥生時代後期後葉～庄内式。**824** は台付鉢か。体部外面はほぼ水平方向のタタキと思われる痕跡が見られる。内面は、板状工具の静止痕が見られ、ハケだろう。脚部は内外面ともナデだろう。弥生時代後期か。

825 ～ 833 は壺。**825 ～ 831** は広口壺。**825** は内外面とも剥離が著しく調整は不明瞭だが、体部外面には縦方向の調整痕が見られ、タテミガキの可能性もある。口縁部外面には、上下 2 段に互い違いに、円形浮文を付し、竹管文を施す。内面は調整不明。頸部から口縁部への屈曲はシャープであり、外面には接合痕が残る。頸部内面の器面の剥離は阿波系に特徴的なもののように見えるが、装飾については阿波系としてよいか不明。口縁端部は、拡張口縁の付加が明瞭に観察できる。実際は、口縁端部下部へも粘土が付加されていた可能性もある。庄内式。**826** は全体的に剥離が著しく、内面の調整は不明。外面は頸部に縦方向の調整痕が残る、ミガキだろう。口縁部はヨコナデと思われ、端部は下方に拡張する。外面には 3 条のへら状工具による稚拙な波状文が見られる。弥生時代後期後葉。**827** は広口壺 C か。口縁部は内外面ともヨコナデと思われ、のち口縁端部外面に 4 条の凹線を施した後、円形浮文とタテハケが施される。円形浮文と縦方向のハケは交互に施され、いずれも 8 方向と思われる。ハケは 9 条もしくは 10 条だが、全てのハケ目が平行しないことから、9 条か 10 条の原体が使用されたのではなく、5 条程度の原体で 2 度施したと考えられる。頸部は縦方向を基調としたハケが施され、その後頸部下部のための沈線とその下の刺突文が施される。刺突文はシャープで、0.4 ～ 0.5 cm ピッチで施される。刺突内にハケは観察できず、爪による可能性も考えられる。内面は口縁端部付近に扇形文が施される。以

下の頸部は、上部にヨコハケが、下部にタテハケがわずかに観察できる。また、頸部下部には指頭圧痕も残る。指頭圧痕は粘土紐の接合時のものだろう。なお、タテハケとヨコハケの切りあいは確認できない。弥生時代中期後葉頃。**828**は広口壺Bか。内外面とも剥離が著しいが、外面屈曲部以下はタテミガキ、内面はナデか。なお、口縁端部付近外面、図面で段差が表現され徐々に口縁が薄くなる部分は、器面の剥離が著しい。口縁端部では、別の粘土が付加されているように見える部分もある。また、口縁端部付近内面でも、図面で若干の段差が表現されているのだが、この部分から上位にさらに粘土が付加されていた可能性がある。このことから、広口壺ではなく、二重口縁壺や口縁端部が大きく肥厚する広口壺などの可能性も考えられる。弥生時代後期後葉～庄内式。**829**は広口壺Bか。内外面とも剥離が著しいが、外面屈曲部以下はタテミガキと思われる。屈曲部には板状工具の静止痕が多数見られ、ミガキ以前にハケが施されたと思われる。内面の調整は剥離のため不明だが、ナデか。内面頸部には接合痕が見られる。また、外面頸部やや上には小さな粘土素地の突出が見られ、この上下で器面の状態が異なり、上側はミガキと思われる調整のためやや光沢を帯びる一方、下側はやや荒れ気味である。このことから、頸部に凸帯が付加されていた可能性が考えられる。口縁端部では外面で端部より約1.5cm部分に、内面でも端部より約0.8cm部分に、それぞれ小さな粘土の突出が見られることから、二重口縁壺や口縁端部が大きく肥厚する広口壺の可能性も考えられる。弥生時代後期後葉～庄内式頃だろう。**830**は広口壺Bか。内外面とも剥離のため調整不明。体部～頸部への屈曲はやや鈍いが、これより頸部～口縁部への屈曲はシャープである。頸部はほぼ垂直に立ち上がる。弥生時代後期後葉～庄内式。**831**は広口壺A。口縁部はヨコナデで、端部外面は弱く窪む。頸部と体部外面はタテミガキ。内面は剥離のため調整不明瞭だが、口縁部はヨコナデで、以下頸部はナデもしくはミガキだろう。肩部内面には頸部を絞り込んだ際に生じたと思われる痕跡、ナデなどが見られる。頸部の屈曲はやや鈍い。弥生後期後葉～庄内式。**832**は加飾二重口縁壺（複合口縁壺Ba）。口縁部外面は強いヨコナデが施され、その後竹管文を施した円形浮文が付される。この浮文は口縁部に上下二段に付され、上段は2個を一単位とし、6方向に付される。下段は上段と互い違いの位置に6方向に付されるが、4個を一単位とするものと5個を一単位とするものがある。残念ながら、一箇所が破損しており、それぞれの数はわからないが5個一単位が2箇所、4個一単位が3箇所にあり、破損している部分は5個の可能性が考えられる。外面、頸部はタテミガキと思われるが不明瞭。頸部から屈曲した一次口縁部外面部分は調整不明。一次～二次口縁への屈曲部分は粘土が弱く垂れ下がったままで、丁寧には仕上げていない。内面、二次口縁部はタテミガキと思われる。一次口縁部分もミガキと思われるがはっきりとしない。頸部や体部はナデと思われる。体部～頸部、頸部～一次口縁部分には、それぞれ接合痕が明瞭に残る。器形は頸部～一次口縁への屈曲などはシャープだが、調整は雑な印象を受ける。庄内式前半。**833**は加飾二重口縁壺で、口縁が垂下する形式だろう。内外面ともヨコナデと思われるが不明瞭。のち外面は波状文（6条?）が2段に施され、その後竹管文を施した円形浮文が縦方向に4個を、2列を一単位として付されている。円形浮文が口縁全体で何方向に付されていたかは不明である。内面は、同様に波状文が2段に施される。内外面とも波状文は滑らかではなく、やや稚拙な庄内式によく見られるものである。口縁部下端は破損しており、円形浮文の片方が半分ほど欠落する。本来は垂下口縁が付されていたと考えられる。庄内式。

834～837は甕。**834**は布留形甕。口縁部は内外面ともヨコナデで、外面のヨコナデは頸部下まで及ぶ。外面体部は剥離のため調整不明。内面の頸部はナデで、体部は時計回りのケズリ。口縁端部が残存せず、体部外面の調整が観察できないため、時期の判断は難しいが、布留式前半頃。**835**は体部外

面右上がりのタタキ（2条/cm）。底部外面はヘラ描き沈線が見られる。図面の左下－右上の2条のヘラ描き、下（右下）－上（左上）の2条のヘラ描き、右下－左上の3条のヘラ描きの順に施文されている。前二者については、施文の方向が十分に観察できないが、最後の3条の沈線については、上2条が右下から左上方向への、下の1条が左上から右下方向への施文と思われる。内面は、ハケで、工具の静止痕とわずかなハケ目が観察できる。弥生時代後期。836は体部外面右上がりのタタキ（3条/cm）で、連続ラセン状タタキ。タタキ工具の接する幅は底部付近では1.5～2cm程と狭い印象を受け、底部付近は狭い単位でタタキを施したようである。内面はハケで、底部にはクモノ巣状のハケメが明瞭に残る。底部は平底。弥生時代後期後葉～庄内式。837は体部外面左上がりのタタキで、原体もやや細かい（4条/cm）。内面はハケで、底部にはクモノ巣状のハケメが見られる。底部外面は中央部がわずかに窪む。弥生時代後期後葉～庄内式。

838は小形鉢。体部外面は右上がりのタタキ（2.5条/cm）後ナデ。底部はナデで、若干の凹凸がある。内面は良好に残存しないがハケ。底部付近には工具の静止痕が比較的良好に観察できる。底部はごく小さい。庄内式中頃。839は台付鉢か。外面は、台部とわずかに残る体部のいずれもハケ後ナデで、特に屈曲部に明瞭にハケが観察できる。接合部分に密に施されたものだろうか。なお、タタキは観察できない。体部内面底部は、剥離のため不明瞭ながら、板状工具痕が多数確認でき、ハケだろう。台部内面は頂部以外がハケ。頂部は器面が荒れており、軽くなでられた程度だろう。底部は円板充填により成形されたと考えられる。弥生時代後期か。

840～851は高坏。840は有稜高坏A7か。内外面とも調整は不明瞭だが、口縁部外面にはヨコナデが見られる。以下の坏部外面には左上がり気味の調整痕が残り、ミガキだろう。屈曲部以下は、残存部位も小さく調整不明。内面は調整不明部分が大部分だが、屈曲部分にわずかにミガキが残る。坏底部側はヨコミガキ、これ以上はタテミガキと思われる。全体的にやや厚手だが、坏底部径が狭く、大きく口縁が開き、庄内式後半。841は外面がほとんど剥離しているが、わずかに残る器面にはミガキが見られる。内面は坏部底部付近に一部ハケ調整が見られるが、これ以外は密にミガキが施されている。脚柱部との接合部分は、坏部底部外面が凹状であり、刺突痕が見られる。ミガキの方向は縦だが、庄内式後半～布留式前半。842は椀形高坏B。外面は、坏・脚部ともタテミガキ。内面は坏部がミガキ、脚部はナデと思われる。脚柱～裾部への屈曲はシャープで、脚柱部は中実。庄内式。843は内外面とも剥離のため調整不明だが、外面の坏部と脚部の屈曲部分にはハケと思われる痕跡が見られる。坏部の屈曲は比較的鋭い。庄内式。844は全体的に剥離が著しい。外面、坏部と脚部はタテミガキで、接合部分にはミガキ以前のタテハケが見られる。内面、坏部はミガキ、脚部はナデで、脚柱部にはシボリ目が残る。弥生時代後期後葉。845は外面、脚・裾部ともタテミガキ。内面は脚柱部にシボリ目が残る、裾部はナデと思われるが、剥離のため不明瞭。脚部残存部分上端のミガキが施されていない部分は、坏部にはめ込まれていた部分で、円板充填法による成形だろう。脚裾部にはわずかに穿孔が見られるが、方向は不明。ミガキは縦方向だが、脚柱～裾部への屈曲は比較的シャープであり、庄内式前半か。846は内外面とも剥離が著しい。外面はタテミガキだろう。内面はシボリ目が見られ、裾部はナデと思われる。脚柱～裾部への屈曲は比較的シャープであり、弥生時代後期後葉～庄内式。847は内外面とも剥離のため調整不明瞭ながら、外面はタテミガキ、内面はナデだろう。脚柱部は中実で、中位に膨らみを持つ。庄内式。848は脚柱部およびわずかに残存する裾部外面には、原体はやや太めだが、密なタテミガキが施される。内面は、脚柱部にシボリ目が残る。裾部は残存部位が小さく調整不明瞭ながら、ナ

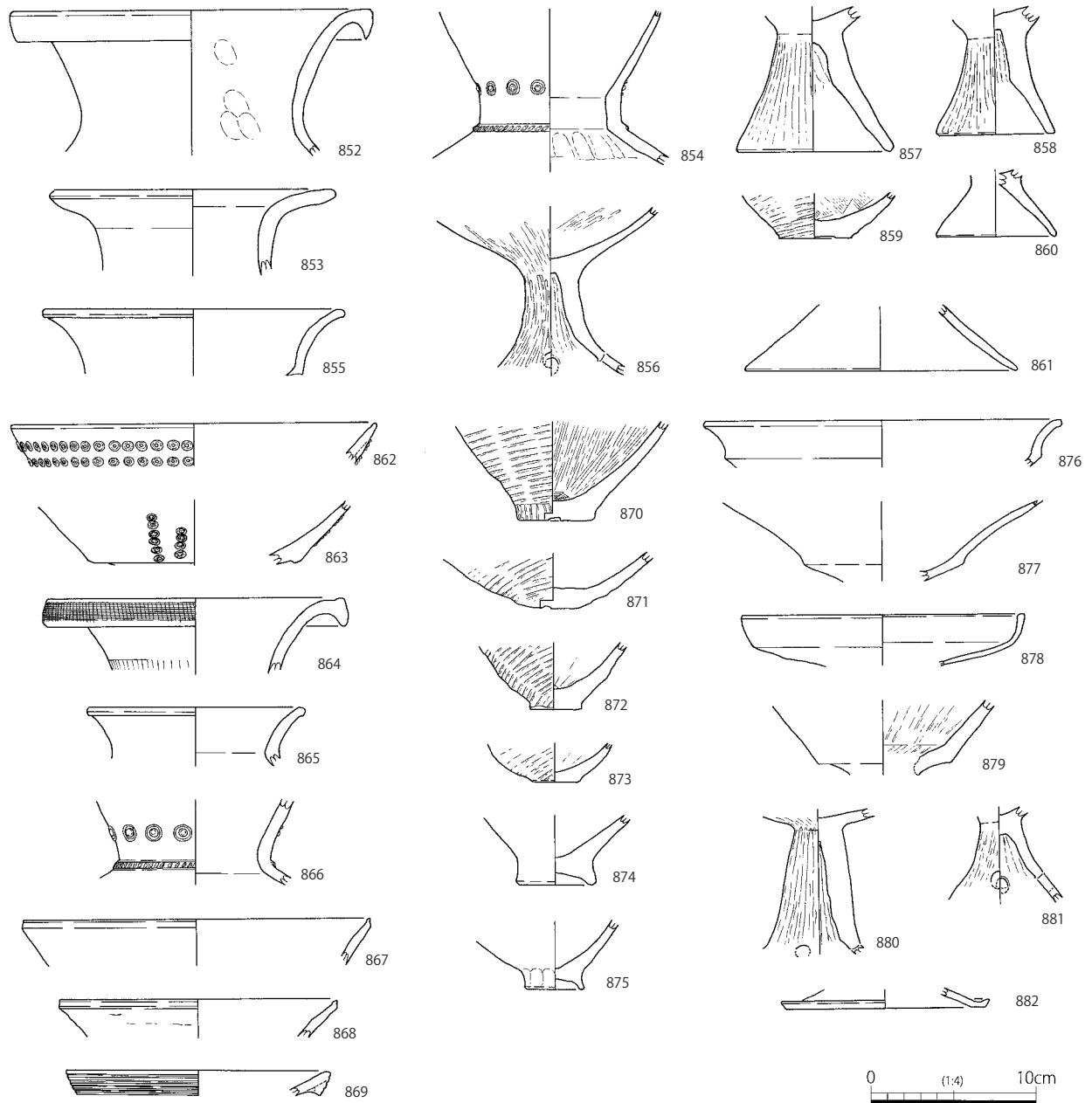


図 79 溝出土遺物 (44) (120 溝南東部)

デと思われる。弥生時代後期後葉。**849** は内外面とも剥離のため調整不明瞭。外面はタテミガキだろう。内面は脚柱部にシボリ目が残り、裾部はナデと思われる。脚柱部～裾部への屈曲は比較的シャープであり、裾部にはおそらく3方向にスカシが穿たれる。脚頂部には刺突痕が見られる。脚柱部は中実気味であり、庄内式。**850** は坏部外面の調整不明。脚部外面には縦方向の約0.5 cm幅の調整痕が見られる。一見ごく粗い原体のハケにも見えるが、ハケとするには原体の単位が観察できず、ミガキだろう。内面は坏部、脚部ともナデと思われる。ハの字状に直線的に開く脚部で、弥生時代後期前葉。**851** は内外面とも剥離のため調整不明瞭だが、坏部と脚柱部外面はタテミガキ。脚裾部はミガキだろう。内面は坏部、脚部とも不明瞭ながら、脚裾部はナデと思われる。裾部には推定4方向のスカシが穿たれる。坏部～脚部の屈曲はシャープで、脚柱～裾部への屈曲も比較的鋭い。中実気味でもあり、庄内式初頭頃。

以上、120 溝中央部出土遺物は、実測対象とした遺物が下層に見られる砂層出土資料がほとんどで、これ以外もその直上に見られる層からの出土である。上層の比較的暗色を呈する層からの出土遺物は少

なく、実測対象とした遺物はない。さて、これらの遺物は、弥生時代中期後葉～後期前葉に遡る資料も見られるが、多くが弥生時代後期後葉以降である。量的に一番多いものは、弥生時代後期後葉～庄内式と考えられる遺物だが、庄内式後半～布留式前葉までの遺物も少ないながら見られる。布留式の遺物は近接する遺構からの混入の可能性は考えられず、この遺構に伴うと判断でき、布留前半までの遺物を含む遺構と考えてよいと思われる。

120 溝南東部 (図 79 - 852 ~ 882)

852 が図 25 の 2 層、853 が同 4 層、858 が同 5 層、860・862 ~ 882 が同 5 ~ 6 層出土で、これ以外は側溝掘削時の出土である。

852 ~ 854 は壺。852 は広口壺 C か。内外面とも剥離のため調整不明で、内面にわずかに指頭圧痕が見られる。体部～頸部への屈曲は鈍く、頸部は逆ハの字状に広がり、口縁端部は垂下する。弥生時代後期中～後葉。853 は広口壺 A。内外面とも剥離のため調整不明。頸部は垂直気味に立ち上がり、再度口縁部が外反する。口縁端部は丸く収める。頸部～口縁部への屈曲は比較的鈍い。弥生時代後期後葉～庄内式。854 は広口壺か。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面頸部上には、竹管文を施した円形浮文が付される。頸部には断面三角形の凸帯が付され、刻み目が施されている。この部分の装飾は 64 溝東部上層下部の 598・599 と類似するが、頸部形態は異なる。内面は体部に指頭ナデ状の痕跡が残る。これは、頸部を細く締めた際に生じた痕跡だろうか。また、同箇所には接合痕も見られる。頸部でくの字状に屈曲するのではなく、一度垂直方向に伸びた後に外反する。弥生時代後期後葉か。

855 ~ 858 は高坏。855 は内外面とも剥離のため調整不明。残存部分下端には平坦な剥離面があり、シャープである。高坏と考えたが、二重口縁壺の可能性も考えられる。弥生時代後期後葉～庄内式。856 は外面坏・脚部ともタテミガキ。坏部内面はミガキがわずかに見られるが、本来は全面ミガキだろう。脚部はシボリ目残り、裾部の調整は不明ながらナデか。脚裾部には 4 方向に穿孔が施されるが、いずれも完存せず、穿孔の下端は確認できない。脚部～坏部への屈曲は鈍い。弥生時代後期中～後葉。857 は全体的に剥離が著しい。外面、坏部は調整不明。脚部はタテミガキだろう。内面、坏部は調整不明。脚部は坏部側でシボリ目が見られるが、以下は不明ながらナデか。ハの字状に直線的に開く脚部で、弥生時代後期前葉。858 は脚部外面タテミガキだろう。内面は脚柱部にシボリ目が残るが、これ以下は調整不明。坏部も、剥離のため調整不明。脚端部は生きてると判断したが、本来はより裾部が広がるものを誤認している可能性もある。弥生時代後期前葉。

859 は甕。外面は水平から右上がりのタタキ (3 条/cm)。内面はハケ。底部輪台技法による成形で、タタキは底部際まで施されて、底部形状が円ではなく多角形状を呈する。底部付近のみの破片ながら、球形化の進んだ段階であることが想像できる。弥生時代後期後葉～庄内式。860 は脚台。内外面とも剥離が著しく、外面は調整不明。内面は上端部にシボリ目残り、以下はナデと思われる。外面が赤変しており、二次的な被熱を受けているようである。なお、脚部残存部分の体部側、破損部分より下に 0.8 cm 位までの部分は赤変していない。破断面は上位にあるが、この部分にも体部の粘土素地が付加されていたのかもしれない。時期不明。861 は高坏か。内外面とも剥離のため調整不明。庄内式か。

862 ~ 866・869 は壺。862・863 は加飾二重口縁壺で、いずれも剥離のため内外面とも調整不明。862 は口縁端部外面に 2 段の竹管文を施した円形浮文が付される。残存部分で屈曲は見られないが、内面は概ね残存部位から屈曲していたと思われる。また、拡張している口縁端部は、円形浮文の残存状況からは、より下位へも拡張していたと思われ、上下に拡張した口縁部を有する型式だろう。庄内式。

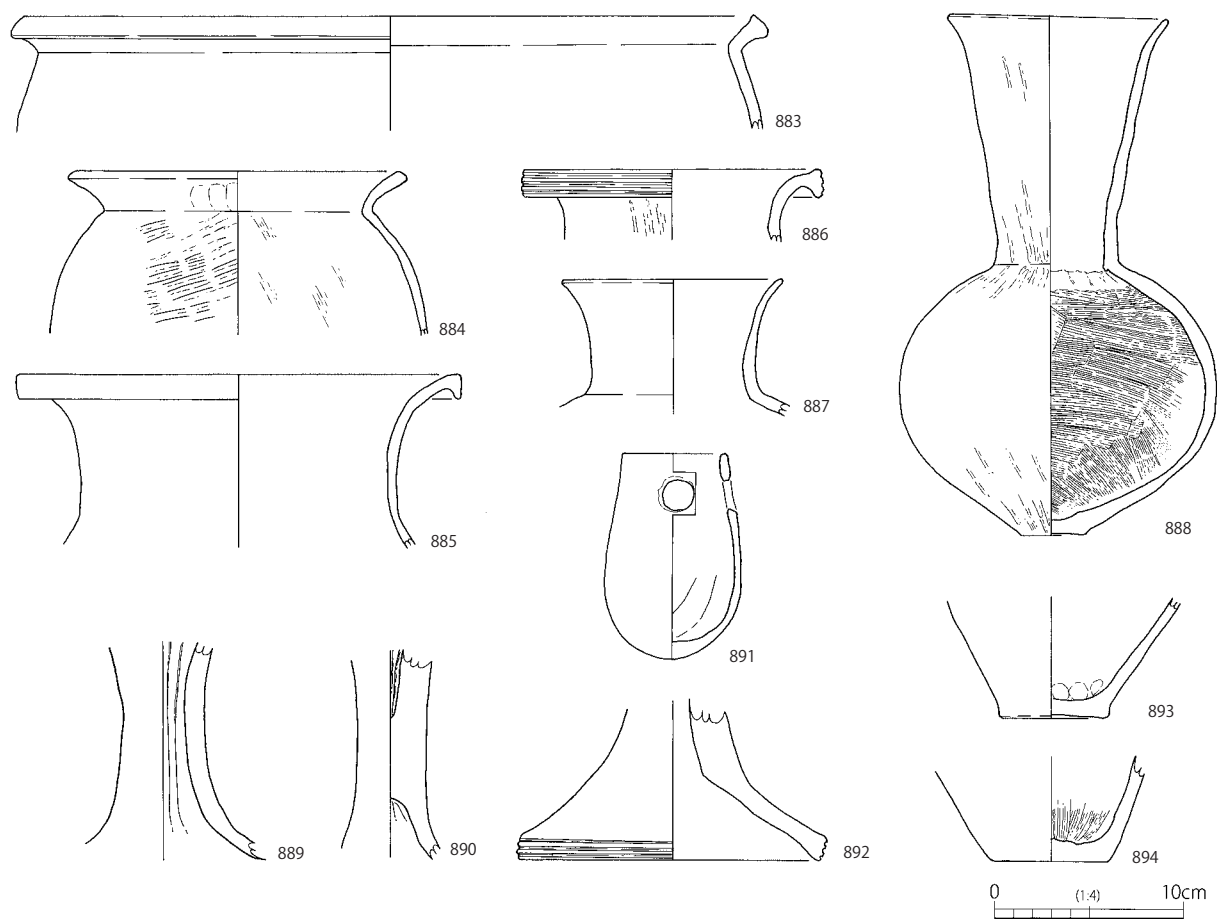


図80 溝出土遺物(45)(120溝北西部)

863 は口縁部外面に縦方向に2列の竹管文を施した円形浮文を付す。口縁端部が欠損するため、右列の浮文は4個のみ図化だが、本来は左右対称なのだろう。また、口縁部に残存率が低いため、2列の浮文の方向数は不明。口縁部下部についても、本来は垂下する口縁があった可能性がある。庄内式。**864** は広口壺。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部外面には9条の廉状文が0.2～0.3 cmピッチで施される。また、頸部下部にも廉状文と思しき痕跡が見えるが、不明瞭である。口縁端部は拡張し、下方へは粘土素地が付加されている。上方は、ヨコナデによりつまみあげ状にされており、内面端部手前には弱い窪みが生じている。弥生時代中期後葉。**865** は広口壺か。内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部は弱く外方へつまみ出すような形態。頸部の屈曲は内面で比較的鋭い。弥生時代後期か。**866** は広口壺か。内外面とも剥離のため調整は不明だが、外面頸部やや上には、竹管文を施した円形浮文が、芯々間約2 cm間隔で付されている。また、頸部に貼付凸帯が付され、その上に刻み目が施されている。854と類似するが、胎土、肩部の凸帯の状況、頸部形状や刻み目が異なり、別個体である。弥生時代後期後葉か。**869** は端部外面には4条の沈線が施される。以下の口縁部外面はナデと思われ、指頭圧痕が残る。内面はヨコナデ。弥生時代後期後葉か。

867・868・870・871 は甕。**867** は内外面とも剥離のため調整不明だが、ヨコナデの可能性が考えられる。口縁端部は上方につまみ上げられており、外面は弱く窪む。庄内形甕とすべきかもしれないが、胎土は生駒山西麓産ではない。つまみ上げも明瞭ではなく、典型例とは考えにくい。影響の可能性は考えられる。庄内式か。**868** は甕。口縁部片で、内外面ともヨコナデ。直線的に伸び、端部はつまみ上げ、端部外面は中央が窪む。途中には接合痕が見られる。胎土は生駒山西麓産ではないが、形態は庄内形甕

に類似し、庄内形甕の影響を受けた甕と考えられる。庄内式か。**870**は外面水平～右上がりのタタキ。底部付近には、体部全体のタタキの後に、縦方向のタタキ工具が当たった跡が見られるが、全面ではなく意図的なものかは不明。内面はハケで、底部にはクモノ巣状のハケメが見られる。弥生時代後期後葉～庄内式。**871**は体部外面右上がりのタタキ（3条/cm）で、連続ラセンタタキ手法である。内面はナデと思われるが、剥離のため不明瞭。底部の突出はほとんど見られない。底部外面には、ヘラ状工具が当たったと思われる痕跡が見られる。球形化が進んでいることが推測できる。庄内式後半。

872～875は鉢。**872・873**は底径が小さいことから判断した。**872**は外面右上がりの粗いタタキ（3条/cm）で、連続ラセンタタキ。内面は底部にクモノ巣状のハケメが見られるが、ハケの残存度は悪い。タタキは底部まで及ぶが、タタキ後に平置した際に若干ひしゃげたようで、底部からの粘土がタタキを覆うようになっている部分がある。タタキ前には底部はもう少し小さく、ある程度可塑性のある時期にタタキが施されたのだろう。弥生時代後期後葉～庄内式前半。**873**は体部外面に右上がりのタタキが弱く残る。内面には板状工具の静止痕があり、ハケだろう。底部の突出がほとんど見られない。弥生時代後期後葉～庄内式。**874・875**は小形鉢Bか。いずれも、剥離のため内外面とも調整不明。**874**の底部は、ナデ成形と推定できるが粗雑で、底部は正円ではない。**875**は底部外面に脚状部分を作り出した際のナデが見られる。いずれも、弥生時代後期後葉～庄内式。

876～882は高坏。**876**は有稜高坏A 2。内外面とも剥離のため調整不明。坏部一次～二次口縁の屈曲は、外面で特に鋭く稜を持つ。弥生時代後期後葉。**877**は有稜高坏A 7か8か。内外面とも剥離のため調整は不明。坏部外面の屈曲は明瞭で、わずかに外反気味ながら直線的に長く外方にのびる。庄内式後半。**878**は内外面とも剥離のため調整不明。坏部の屈曲はやや鈍く、外側へ広がり、端部は肥厚する。薄手なつくりである。生駒山西麓産胎土。弥生時代中期後葉。**879**は高坏か。外面は剥離のため調整不明。内面は縦方向を基調とするミガキである。外面の屈曲は比較的鋭く、弱く稜を持つが、内面は鈍い。高坏にしては径が小さめに思え、別器種の可能性も考えられるが、残存部分で脚部との接合部分が見られることから、高坏と判断しておく。庄内式か。**880**は外面、坏・脚部ともタテミガキ。内面は坏部調整が剥離のため不明で、脚柱部にはシボリ目が残る。坏～脚部への屈曲はシャープである。弥生時代後期後葉。**881**は内外面とも剥離のため調整不明瞭ながら、外面坏部～脚柱部はタテミガキだろう。内面は脚柱部にシボリ目残り、以下脚裾部はナデと思われる。坏部内面は調整不明。脚部には4方向のスカシが見られるが、いずれも下端は残存しない。弥生時代後期後葉。**882**は内外面ともナデと思われる。脚端部は比較的鋭くつまみ上げる。生駒山西麓産胎土。弥生時代中期後葉。

以上、120 溝南東部出土遺物は、ひとまず出土層位を記したが、明確な時期差はないため、一括して評価する。南東部についても、中央部同様、弥生時代中期後葉に遡る遺物が見られるが、多くの遺物は弥生時代後期後葉以降である。中央部と異なり、明らかに布留式と考えられる遺物の出土は、図化対象外遺物についても見られず、庄内式後半までである。

120 溝北西部（図 80 - 883～894）

884・887・888が図 25 の1～4層、**883・885・890・892**が同5層、**891・894**が同6・7層、**886・889・893**が断面観察用のアゼから、それぞれ出土したものである。

883・884は甕。**883**は内外面とも口縁部ヨコナデだが、体部の調整は不明。頸部の屈曲はシャープで、口縁端部は上下に拡張する。弥生時代中期後葉。**884**は口縁gか。内外面とも口縁部はヨコナデで、外面には指頭圧痕が残る。体部外面は右上がりのタタキ（2条/cm）。内面は、剥離が著しいが、

左上がりのハケだろう。口縁端部は比較的明瞭に面を持ち、頸部の屈曲もシャープである。頸部上の口縁部に指頭圧痕が施されるため、口縁端部にむかい肥厚するように見えるが、全体的には必ずしもそうではない。弥生時代後期後葉～庄内式。**885～888**は壺。**885**は広口壺Cか。内外面とも剥離が著しく調整不明。口縁端部は下方に拡張する。頸部は弱く直線的ながら外反する。弥生時代後期中～後葉。**886**は広口壺D。体部外面は調整不明瞭ながら、タテミガキだろう。口縁部には3条の凹線が見られる。内面は口縁端部付近がヨコナデと思われるが、以下は不明である。弥生時代後期中～後葉。**887**は広口壺Aか。内外面とも調整不明。外面の頸部屈曲は、内面に比べれば鋭いが、明瞭な屈曲ではない。弥生時代後期後葉～庄内式。**888**は長頸壺。外面は、口縁・体部ともタテミガキで、底部付近にはミガキ以前のタテハケが残る。内面、口縁部は調整不明だが、体部は密なハケで、肩部に見られる接合痕以下で見られる。この接合痕は頸部以下に2段見られるのみで、以下はハケで消されているのだろう。なお、頸部下内面にはシボリ目も見られる。器形は、頸部は長く、弥生時代後期前葉～中葉頃だろうか。**889・890・892**は高坏。**889**の外面は剥離が著しく調整不明。内面は脚裾部側では目立たないが、シボリ目が残る。裾部への屈曲は鈍いと思われる。弥生時代後期前葉。**890**の外面は剥離が著しく調整不明。内面は、上側には比較的明瞭にシボリ目が残る一方、下側には板状工具の痕跡が残り、ハケだろう。脚柱部は中実であり庄内式か。**892**は内外面とも剥離が著しく調整不明だが、脚端部には3条の沈線(凹線?)が見られる。脚裾～脚柱部への屈曲は、外面では鈍いが、内面では比較的シャープである。全体的に分厚く、鈍いつくりである。弥生時代中期後葉か。**891**は蛸壺B。外面と内面上位は調整不明。内面底部には強く粘土を掻き取ったような痕跡が見られる。砂粒の移動は見られないことから、ケズリとは判断できないが、カキトリ状のナデだろうか。胴部上位の穿孔は一方で、胴部は下膨れである。全体的に剥離しているものの、これを差し引いても薄手である。庄内式か。**893・894**は甕。**893**は内外面とも調整不明。外面に明らかなタタキ痕は見られない。**894**は外面剥離のため調整不明。内面底部は、カキトリ状のハケ調整が残り、ごく粗い。いずれも弥生時代中期後葉頃か。

以上、120溝北西部出土遺物は、上記の中央部や南西部よりもやや古い時期の遺物が多く、弥生時代中期後葉が一定量を占める。しかし、これが下層の砂層で純粹に見られるのではなく、同層から庄内式と考えられる遺物も出土している。総数は少なく、庄内式後半～布留式は含まないものの、包含する遺物の傾向は、概ね同様と思われる。

さて、120溝全体についてだが、まず、一定量の弥生時代中期後葉～後期前葉頃の遺物が含まれる。しかし、時期的に連綿と庄内式までの遺物が見られるのではなく、後期中葉の遺物はほとんど見られない。量的に最も多いのは、弥生時代後期後葉～庄内式ではあるが、類似する時期の遺物が出土している64溝よりもやや新しい傾向の遺物が見られ、64溝には見られなかった庄内形甕の可能性が考えられる遺物(867)が見られることから、出土遺物の時期の一点として庄内式後半の時期が考えられる。また、点数は少ないが、確実に布留式と考えてよい遺物(834)も見られる。このことから、遺物の時期としては布留式前半までと考えられる。

65溝(図81～83－895～973)

65溝は、複数の調査区に跨って検出されており、まとまりごとに南東部、南部、南西部、東部、西部に分けて記述する。65溝については、図25に南東部断面が示されている。大きく、上層(4～8)と下層(9～17)に区分され、上層は褐色土層(6)、黒色土層(7)、粘土層(8)に、下層は砂層(12)、最下層(13・17)に、それぞれ細分されている。出土層位がわかるものについては、以上の区分で記

述する。

65 溝南東部 (図 81・82 - 895 ~ 954)

895 ~ 905・949 ~ 954 が出土層位不明、906 が 65 溝上面、907 ~ 909 が上層、910 が褐色土層、911 ~ 923 が黒色土層、924 ~ 930 が粘土層、931・933 が下層、932・934 が砂層、935 ~ 948 が最下層出土である。

895 ~ 899 は須恵器。895 は坏蓋。外面は回転ナデで、天井部は粗いケズリ。内面は回転ナデ。口縁端部に弱く段を持つが、天井部と体部境の稜は鈍くなっている。MT 15 型式。896 ~ 898 は坏身。896 は底部反時計回りの回転ケズリ。口縁端部は外へつまみ、内傾する面を持つ。TK 23 型式。897 の口縁端部段は弱い。MT 15 型式。898 は内外面とも回転ナデ。口縁端部に段を持つ。TK 23 型式。899 は有蓋高坏。坏部外面のケズリは比較的上位まで及ぶ。脚部の方形透しは 3 方。TK 23 型式。900 ~ 903 は弥生土器もしくは土師器。900 ~ 902 は上面出土の可能性がある。900 は大形鉢。口縁部は内外面ともナデで、口縁部内面にはヨコミガキが見られる。体部外面はナデと思われるが、ミガキの可能性もある。体部内面はナデ。頸部~口縁部、口縁部の屈曲は、比較的シャープである。弥生時代後期後葉。901 は複合口縁壺(壺 B)。内外面とも調整不明瞭ながら、いずれもヨコナデとナデだろう。口縁端部は上部に鈍く面を持つが、全体的にやや丸味を帯び、肥厚しない。一次~二次口縁の屈曲は鈍いものの、内面には強いナデによるくぼみが見られ、外面には断面三角形の凸帯が貼り付けられる。布留式前半か。902 は二重口縁壺。外面はタテミガキだが、残存状況は悪い。一次口縁と二次口縁の屈曲部分および口縁端部に、竹管文(径約 0.6 cm)が 1 ~ 1.3 cm ピッチで施される。内面は、剥離のため調整不明。一次口縁と二次口縁の接合部分は、破断面で明瞭に確認できる。なお、内面は器面が剥離しているため、ナデやミガキにより沈み込まれた砂礫が多数確認でき、外面以上に胎土の粗さがうかがえる。弥生時代後期後葉~庄内式。903 は壺。内外面ともヨコナデと思われるが、調整不明瞭。口縁部は外面に粘土を付加することで二重口縁状を呈する。庄内式か。904・905 は蛸壺で、904 は上面出土の可能性があり、905 は側溝出土のため層位不明である。904 は蛸壺 B か。内外面とも剥離のため調整不明瞭だが、いずれもナデと思われる。なお、底部内面には指頭圧痕が見られる。胴部上位には穿孔が見られるが、残存状況は悪く、その全形はうかがえない。底部がわずかに平底状を呈する。庄内式か。905 は蛸壺 B。底部は完存するものの、口縁部は約 30% しか残存せず、残存部分で胴部上位の穿孔は確認できない。外面は剥離のため調整不明。内面は底部から口縁方向へのタテナデが確認できるが、口縁部付近の調整は不明である。弥生時代後期末~庄内式初頭か。

906 は 65 溝上面出土の須恵器高坏。外面は回転ナデで、脚部には長方形の透し孔を持つ。現状で 2 方向のそれぞれ一部分が残存するのみだが、4 方向と復元できる。なお、孔上部の坏部外面には、孔に対応する位置にヘラ描きが見られる。内面はナデ。TK 216 ~ 208 型式か。

907 ~ 909 は上層出土。907 は広口壺。外面は剥離のため調整不明瞭。口縁部はヨコナデと思われ、端部には約 0.3 cm 間隔で幅 0.1 cm 程度の細い刻み目が施される。口縁部のヨコナデの際に、端部中央が弱く窪んでいたため、刻み目が端部中央部分では見られない部分がある。刻み目の残存度もあまり良くなく、比較的乾燥した段階で施文されたのかもしれないが、単にごく弱く工具を当てただけなのかもしれない。頸部は縦方向を基調とするミガキだが、その上端は不明。体部との境には約 0.8 cm 間隔で刻み目が施される。内面はヨコミガキが密に施される。弥生時代後期後葉~庄内式。908 は甕。長胴気味の甕の底部だろうか。外面はハケで、ハケ以前のタタキ調整は観察できない。内面は底部に多数の指頭

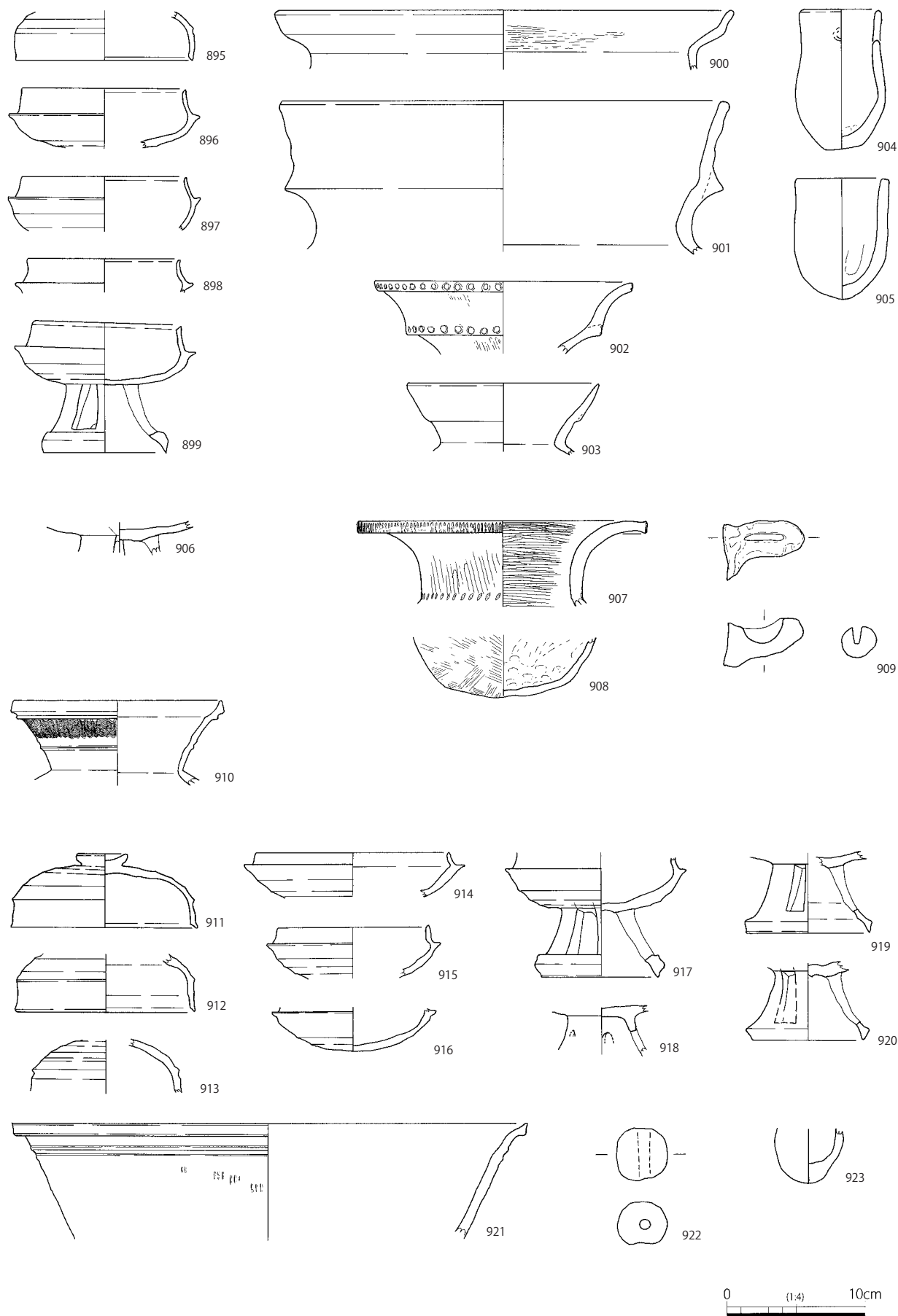


図81 溝出土遺物(46)(65溝南東部1)

圧痕が見られる。指頭圧痕内にはハケ調整が見られ、ハケの後に指押さえが施されたと思われる。また、胴部にはややまばらなケズリが施され、底部まで至らない。ごく一部でケズリの上に指頭圧痕が見られることから、ケズリ後指押さえと思われる。ケズリとハケの前後関係は、ハケ→ケズリの順である。指押さえ時に、意図的なものかは不明ながらナデも施されたようだが、全面ではなく指が擦れただけかもしれない。ただ、このナデ状の調整もケズリを切っている。辻編年4段階か。同時期は須恵器の時期でTK208型式併行とされる。**909**は把手で、韓式系土器の甌か。内外面ともナデ調整。断面形は円形で、上部に幅0.5cm、深さ最大1.3cmの切込みを持つ。体部との接合部分が残存し、挿入による接合であることがわかる。京嶋氏による分類(京嶋1992)でA相当、TK73型式頃か。

910は褐色土層出土で、須恵器壺か。内外面とも回転ナデ。頸部外面には口縁端部下と中位やや下に凸帯がめぐり、この間には16条の波状文が施される。TK208～47型式頃か。

911～923は黒色土層出土。**911～921**は須恵器。**911**は高坏蓋か。外面は回転ナデ、回転ケズリ。内面は回転ナデ。外面ケズリは反時計回り。天井部と体部境の稜、口縁端部ともに鋭い。天井部がやや丸みを帯び、新しい様相と思われる。TK23型式。**912・913**は坏蓋。**912**は外面回転ナデで、天井部回転ケズリ。内面は回転ナデ。天井部と体部境の稜は鈍い。口縁端部も丸く、段状ではあるものの、段内側の屈曲も鈍い。MT15型式。**913**は外面回転ナデで、天井部ケズリ。内面は回転ナデ。稜は明瞭である。ケズリはやや高い。TK47型式。**914～916**は坏身。**914**は内外面とも回転ナデで、残存部分下端にわずかにケズリが見られる。口縁端部は丸く収める。TK10型式。**915**は外面回転ナデ、回転ケズリ。内面は回転ナデ。外面のケズリはやや高いが、器面が摩滅気味のため誤認している可能性もあり、本来はもう少し低い位置かもしれない。たちあがりは短く、端部は丸く収める。TK10型式。**916**は外面回転ナデ、回転ケズリ。内面は回転ナデ。ケズリはやや低い。内面の色調は、灰色ではなくにぶい赤褐色(2.5Y5/3)を呈する。口縁部は残存しないが、受け部の径などからTK47型式か。**917**は有蓋高坏。外面は回転ナデで、坏部下部は回転ケズリ。内面、坏部は回転ナデとナデ、脚部は回転ナデ。脚部には方形の透しが3方向に穿たれ、坏部下端には透しに対応する箇所にごく細かいへら描きが見られる。TK23型式か。**918～920**は高坏。**918**は内外面とも回転ナデで、脚部には円形の透し孔が穿たれる。現存2方向でそれぞれごく一部が残存するのみだが、3方向と復元できる。**919**は内外面とも回転ナデで、脚部には方形の透し孔が穿たれる。現存2方向だが、3方向と復元できる。透しの下端は、破損のため不明である。**920**は脚部内外面とも回転ナデ。わずかに残る坏部は回転ナデとナデ。脚部には3方向に方形の透しが穿たれるが、残存部位が小さく、透しの下端は不明である。脚端部の形状は927と同様だが、内面の屈曲はやや鈍い。いずれも、TK47型式か。**921**は高坏形器台。内外面とも回転ナデだが、外面には一部ナデ以前のタタキと思われる痕跡が見られる。このタタキ目と思われる痕跡は縦方向に見られるもので、4条/cm程の原体を使用していると思われる。外面に櫛描波状文などの装飾は見られないが、口縁部下には削り出し凸帯状の装飾が施される。凸帯の上側は幅狭の0.2cmの沈線で、下側は0.45cmとやや幅広で、沈線というよりも窪みといった調整である。TK47型式か。**922**は土錘。孔は径約0.7cm。器面はやや荒れ気味だが、雑なナデだろう。時期不明。**923**は蛸壺(蛸壺B)か。ミニチュア土器の可能性もある。剥離のため調整不明瞭だが、内面はナデか。底部は分厚い。庄内式か。

924～930は粘土層出土。**924～928**は須恵器。**924**は坏蓋。内外面とも回転ナデで、外面天井部はごく粗いケズリ。一部外面に自然釉が見られるほか、別個体の粘土片の付着も見られる。全体的に

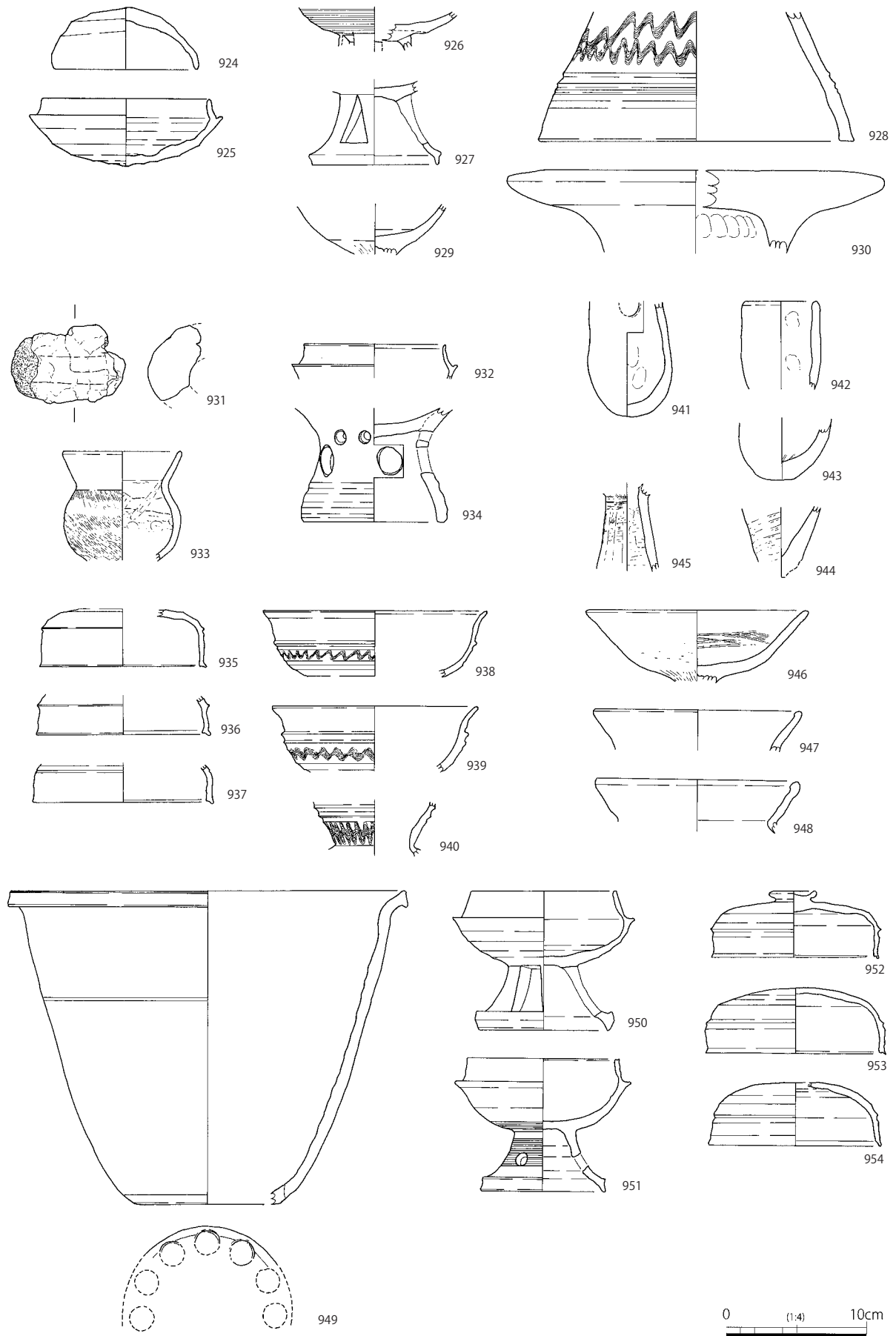


図82 溝出土遺物(47)(65溝南東部2)

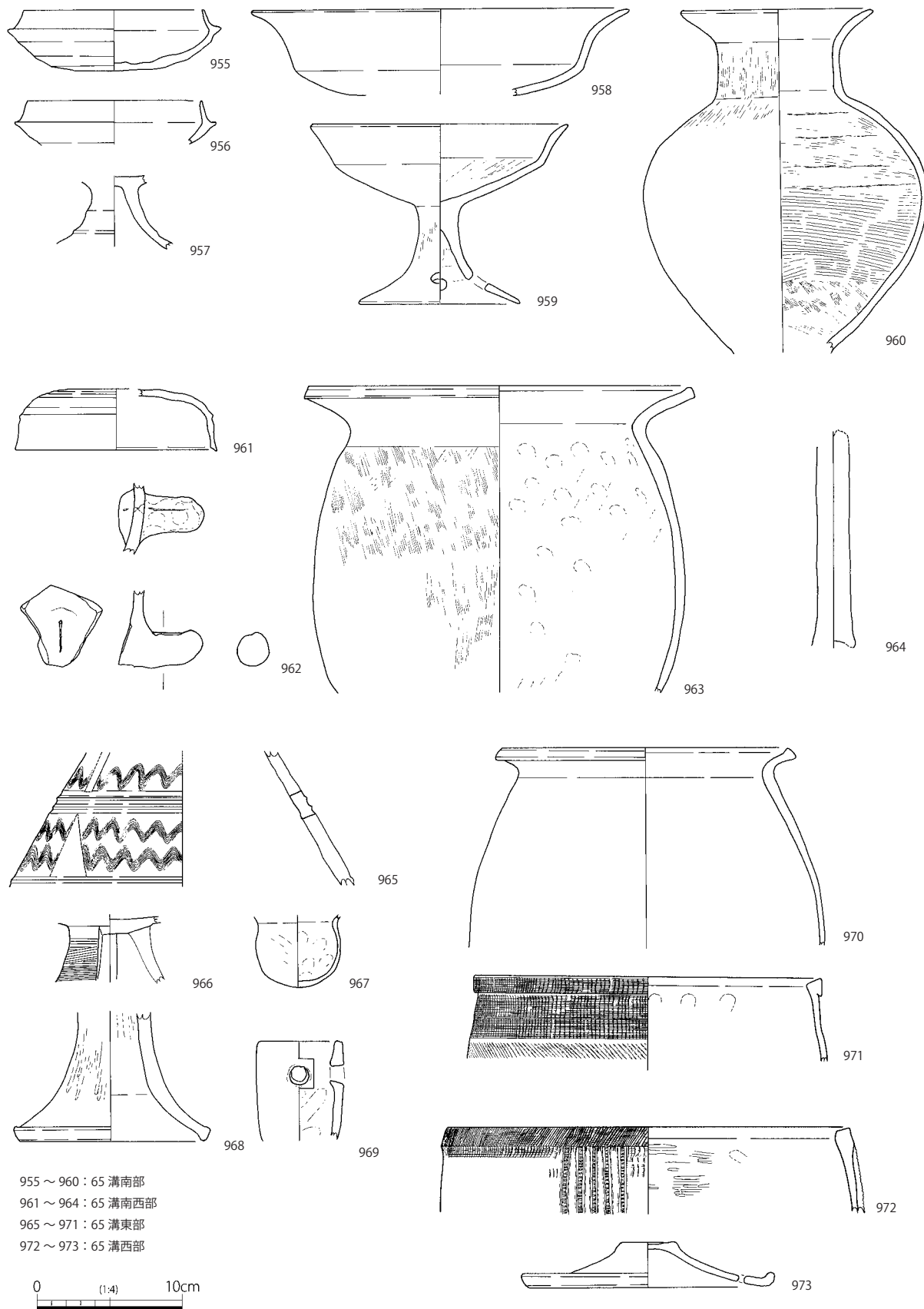
粗雑なつくりである。TK 217 型式。**925** は坏身。外面は回転ナデと回転ケズリ。内面は回転ナデ。外面のケズリはやや低い。内面は凹凸が激しい。口縁端部は丸く収める。TK 10 型式。**926・927** は高坏。**926** は坏部外面カキ目、内面は回転ナデ。脚部はほとんど残存せず調整不明。脚部には方形の透しが3方向に穿たれる。透しに対応し、坏部外面にはヘラ描きが見られる。TK 23～47 型式か。**927** は脚部外面回転ナデ。カキ目にも見えるが、摩滅もあり不明瞭。脚部内面は回転ナデだが、上部は接合痕と思われる痕跡が見られ、ナデが十分になされていない。なお、3方向に三角形の透しを穿つ。わずかに残る坏部の内面は回転ナデとナデが施されていると思われる。TK 47 型式か。**928** は器台。内外面とも回転ナデ。外面には残存部上位に波状文が2段に施される。原体は7条で下の波状文の後、上の波状文を施す。波状文の下には強いナデによると思われる3条の凸帯状の隆起が見られる。上側ほど明瞭に断面三角形状を呈し、下部は凹線状である。また、以下にも不明瞭ながら弱い凹凸が脚端部より上へ約1.5 cm部分まで見られる。これもナデによるものだろう。なお、波状文部分には、わずかに透しの一部が見られる。その下端は確認できるものの、上端は不明である。形状は三角形と推定される。脚径がやや小さく、TK 23～47 型式か。**929** は土師器、**930** は弥生土器。**929** は高坏。外面は剥離のため調整不明瞭ながら、脚部付近はタテミガキと思われる。内面、口縁部側はヨコナデで、見込み部分の調整は不明瞭ながらナデか。なお、口縁部のヨコナデが見込み部分のナデを切っているように見える。坏部には軸芯孔がわずかに確認できる。布留式前半。**930** は台形土器。剥離のため調整不明部分が多く、外面の調整は不明。ただし、台上面のわずかに残存する器面は滑らかである。内面の台部と脚部の接合部分には指頭圧痕が見られる。弥生時代中期後葉頃。今回の調査での出土は多くないが、過去の調査では多量の台形土器が出土したことが知られる。

931・933 が下層、**932・934** が砂層出土。**931** は羽口。先端部にはガラス質になった滓が付着するが、特に垂れ下がっている状況ではない。挿入角度は不明。外面は大部分が灰白色(5 Y 7 / 1)を呈し、還元状態にあったと推測され、炉壁内部分の破片と推測される。なお、明瞭な面は有さない。全容は窺えないが、弱くハの字状を呈する形態だろう。**932** は須恵器坏身。全体的に摩滅気味である。内外面とも残存部分に関しては回転ナデである。口縁端部は摩滅もあり、段はごく弱い。TK 23～47 型式か。**933** は小形丸底壺(小型丸底壺E)。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は左上がり方向を基調としたハケ。底部ではわずかに砂粒の移動が見られる。内面は下位がナデで、中位にはケズリが見られる。ナデがケズリを切っている部分があり、ケズリの範囲は不明だが、ケズリのちナデの順である。上位の肩部内面は一部ケズリが達するが、ごく一部に留まり、同部分にケズリを施す意図はなかったと思われる。同部分は、器面が荒れており、十分にナデ調整も行われていないようである。ミガキが見られず、布留3式。**934** は台付鉢か。内外面とも剥離が著しいが、ナデだろう。台部下端には、幅広の3条の凹線が施される。また、台部には中位に径1.6 cm前後の穿孔が施され、現存からの推定で5方向と復元できる。上位には、径0.6 cm前後の穿孔が施され、現状で2つが残存する。中位の穿孔が等間隔と推定されるのに対し、この穿孔は2個を一単位としているようではあるが、その方向数は不明である。なお、実測図では両穿孔の位置関係を示すために外面側を図化しており、断面からの展開位置での図化ではない。弥生時代中期後葉。

935～948 は最下層出土。**935～940** は須恵器で、**935～937** は坏蓋。**935** は内外面とも回転ナデで、外面天井部は時計回り方向の回転ケズリ。体部がやや長めで、天井部は平坦である。口縁端部は外側につまみ、内側に明瞭な鋭い段を持つ。TK 208 型式。**936** は内外面とも回転ナデ。外面の稜、

口縁端部の段ともにシャープである。TK 23 型式。937 は内外面とも回転ナデ。外面の稜は鈍いが、口縁端部は比較的明瞭に段を有する。MT 15 型式。938・939 は無蓋高環。938 は内外面とも回転ナデで、外面下部は時計回りの回転ケズリ。口縁端部は屈曲し、内面には段を有する。坏部外面中位には凸帯があり、その下に4条の波状文を施し、その下は鋭いながら弱い凸帯状を呈する。ケズリはこの凸帯のすぐ下まで及ぶ。TK 208 型式か。939 は内外面とも回転ナデで、外面下部は回転削り。坏部外面中位には2条の凸帯をめぐらし、その下に10条ほどの波状文を施す。耳状把手は、残存部位が小さいせいもあって見られない。口縁部は外反気味である。TK 23 型式か。940 は甕。内外面とも回転ナデで、頸部外面には8条の波状文を施し、その上には残存部分で2条の凸帯をめぐらす。TK 23 型式。941～943 は蛸壺。941 は蛸壺Bか。内外面ともナデだろう。内面には、指頭圧痕が見られる。残存部分上端に、わずかながら穿孔部分が残る。やや下膨れ気味で、底部は丸い。庄内式か。942 は剥離、摩滅のため調整不明瞭ながら、内面には指頭圧痕が見られ、器面が比較的平滑に仕上げられており、内外面ともナデだろう。庄内式か。943 は蛸壺Bか。内外面とも剥離のため調整不明瞭ながら、内面底部には工具痕が見られる。ハケというよりも端部がやや細いへら状工具による痕跡にも見える。全体的に分厚い。底部はわずかに平底状である。庄内式か。944 は製塩土器か。外面は右上がりのタタキ(2条/cm)。内面はナデと思われる。わずかに脚台の内面頂部が残存し、被熱のためか赤変している。破損部分だが、図面下部はへそ状に突出する。脚部と体部の接合は、高環同様であるとされており、いわゆる付加法によって成形されていると推測される。このことから天地を図のように想定した。脚台I式と考えられるものの、脚部からの体部の立ち上がり之急で、横方向に広がるようには見えないことから、天地逆の可能性、製塩土器以外の可能性も考えられはする。製塩土器であれば、弥生時代後期後葉頃か。945～948 は土師器。945・946 は高環(高環Cか)。945 の外面は、タテハケが坏部との屈曲部分を中心に見られ、ハケ後密なヨコミガキ。弱くメントリ風である。内面は横～やや斜め方向のケズリ。布留1式。946 は口縁部内外面ともヨコナデ。外面はヨコナデ以下に、砂粒の移動が見られ、横方向のケズリと思われる。坏部下部の脚部際には縦方向の粗いハケが見られる。内面は、横方向のミガキが見られるが、あまり密ではない。坏底部～口縁部への屈曲は鈍く、明瞭な稜は持たない。全体的に分厚い。脚部は残存しないが、接合部分には刺突痕が残る。布留2式か。947・948 は甕。947 は内外面ともヨコナデ。端部は摩滅気味ではあるが、丸く肥厚し、面は持たないように見える。布留2式頃か。948 は内外面ともヨコナデ。内面はわずかに体部が残存するが、ケズリ調整は及んでいない。口縁端部は肥厚し、内傾する面を持つ。布留2式頃か。

949～954 は64溝と遺構が切りあう部分で、64溝に混入して出土した遺物であり、正確な層位は不明である。いずれも須恵器である。うち、950・952 は黒色土層、951・953 は褐色土層出土の可能性がある。949 は甕。やや焼成不良気味である。内外面とも摩滅のため調整不明だが、胴部中位やや上には1条の沈線が施される。底部には径1.7cm程の孔が穿たれる。3個のそれぞれ一部が残存するのみながら、12個と復元できる。口縁部は外反し、端部は拡張する。TK 216 型式頃か。950～952 は有蓋高環。950 は坏部外面回転ナデと回転削り。内面は回転ナデ。脚部には方形の透しが3方向に穿たれる。口縁端部は丸い。TK 10 型式。951 は坏部内面～外面は回転ナデで、外面下部～脚部にかけてはカキ目。脚部には円形の透しが3方向に穿たれる。口縁端部は鈍く段状を呈する。TK 47 型式。952 は蓋。外面天井部は反時計回りの回転削り。外面口縁部から内面は回転ナデ。端部はシャープで段状を呈する。TK 47 型式。953・954 は坏蓋。953 の内面～外面にかけては回転ナデで、外



955 ~ 960 : 65 溝南部
 961 ~ 964 : 65 溝南西部
 965 ~ 971 : 65 溝東部
 972 ~ 973 : 65 溝西部

图 83 溝出土遺物 (48) (65 溝東部・南部・南西部・西部)

面天井部は時計回りの回転削り。口縁端部は明瞭に段状を呈し、外側へつまみ出す。全体的にシャープなつくりである。TK 208 型式。954 の外面天井部は反時計回りの回転削りで、以下内面にかけては回転ナデ。口縁端部は段状を呈する。TK 47 型式。

以上の、65 溝南東部出土遺物は、上層に TK 217 型式と考えられる須恵器が見られる。他に、同時期の遺物は見られないものの、混入の可能性は考えにくいことから、上層の埋没時期が当該期になる可能性が考えられる。これ以外の上層出土遺物は、TK 10 型式を下限とし、TK 23 型式以降の須恵器が見られる。下層の時期幅は、TK 208～MT 15 型式であり、出土層位不明資料には TK 216 型式に遡るとされる須恵器も見られる。下層からは轆羽口(931)の出土も見られる。なお、下層からは布留3式と思われる小形丸底壺が出土しているが、須恵器の時期との整合性がとれず、混入と考えられる。

65 溝南部 (図 83 - 955 ~ 960)

いずれも出土層位は不明である。

955～957 は須恵器。955・956 は坏身。いずれも口縁端部は丸く、底部外面の削りの範囲も狭い。TK 10 型式。957 は高坏。脚部は内外面とも回転ナデで、坏部内面の調整は観察しにくいナデだろう。TK 73～216 型式か。958～960 は弥生土器もしくは土師器。958 は高坏 A 5。内外面とも剥離のため調整不明だが、本来はミガキであろう。坏底部から口縁部が大きく外反し、比較的長い。庄内式初頭頃。959 は高坏 A 3 か。外面、坏部は剥離のため調整不明だが、ミガキだろう。脚部は脚柱部にわずかながらタテミガキが観察できる。裾部は剥離のため調整不明。内面、坏部は口縁部側が剥離のため調整不明だが、底部側にはわずかにタテミガキの痕跡が残る。脚部は脚柱部にシボリ目が見られるが、裾部は不明。脚部には穿孔が見られ、残存している穿孔部分から4方向と推定される。脚柱～裾部への屈曲はやや鈍い。弥生時代後期後葉。960 は広口壺。外面、口縁部はヨコナデ、頸部はタテハケ後タテミガキ。頸部タテミガキと口縁部ヨコナデとの前後関係は不明。なお、頸部と体部境には、ハケが比較的良好に観察できる。体部は、肩部にタテミガキが見られるが、以下は剥離のため調整不明。内面、口縁部～頸部は、剥離のため調整不明瞭だが、口縁部はヨコナデで、頸部はナデだろう。体部内面はハケ。底部から体部下位のハケは他より細かい(10条/cm)が、この細かいハケ以前に他と同様の粗いハケが施されている。体部中位のハケは最も残存度がよく、横～斜め方向である(4条/cm)。体部上位のハケも同様の原体を使用しているようだが、残存度はやや悪い。いずれも成形時に施されたものと思われ、鉢状の底部までを成形した段階、胴部中位やや上までを成形した段階、頸部までを成形した段階の、3段階でハケをそれぞれ施しているものと思われる。体部上位には接合痕が約2.6cm単位で見られるが、ハケは一単位ごとではなく頸部まで積み上げた段階で施されているようである。各段階のハケは、一部で下段のハケ調整を切る。なお、底部の胴部中位との接合部分付近には、上述のとおり他と異なる細かいハケが見られるが、このハケはピッチの短いものである。他と同様の粗いハケで全体を平滑にした後も、この部分にはやや凹凸があったため、別に調整を施したのかもしれない。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、頸部から口縁部への屈曲はやや鈍い。体部は横に張らず、底部下部が膨らまないため、やや肩が張るように見える。弥生時代後期後葉。

以上の65 溝南部出土遺物は、出土層位不明ながら、上記の65 溝南東部の時期幅と矛盾しない。

65 溝南西部 (図 83 - 961 ~ 964)

961・962 は上層、964 が最下層より出土したもので、963 は出土層位不明である。

961 は須恵器環蓋。外面は回転ナデと、天井部の回転削り。内面は回転ナデ。口縁端部はやや丸味を帯びるが、段の内側は鋭い稜を持ち、天井部と体部境も鋭い稜を持つ。天井部の回転削りは、範囲は広いが反時計回りであり、新しい様相といえる。TK 208 型式と考えたが、TK 23 型式に下るものだろうか。962 は須恵器把手。内外面とも回転ナデの後に把手を差し込み、この際にナデを施している。また、把手自体にも指頭圧痕が見られる。内面には縦方向の浅い切込みが見られる。把手の上側にも、同様に浅い切込みが見られる。京嶋氏分類(京嶋 1992)の A 1 としてよければ、TK 216 ~ 208 型式か。963 は土師器甕。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、内面は剥離のため十分に観察できない。体部外面は縦方向を基調とするやや左上がりのハケ。頸部下などごく一部で右上がりのタタキと思える痕跡が見られる。内面は剥離のため十分に観察できないが、随所に指頭圧痕が見られる。また、残存部位下位や中位などでわずかにケズリ調整と思われる砂粒の移動が見られる。ただし、内面全体をケズリ調整したのではないようであり、また器壁を薄くする意図も弱いように思える。ケズリと指頭圧痕の前後関係は、良好には確認できないものの、わずかに指頭圧痕がケズリをナデ消すかのように見える部分があり、ケズリ後指頭圧痕だろう。ただし、指頭圧痕内にケズリ調整が見られる部分は見当たらない。明瞭なハケ目は見られず、指頭圧痕はナデの際につけられたものではないだろうか。頸部の屈曲は内外面ともやや鈍い。口縁端部は面を持ち、上方に弱くつまむ。辻編年 5 段階くらいだろうか。同時期は MT 15 型式併行とされる。964 は棒状土製品か。剥離のため調整不明瞭ながら、内外面ともナデか。端部は摩滅しているのだが、上下端とも破断面と思われ、図面で点線で表現した部分がそれである。可能性として、下端の破断面からは斜め方向に粘土素地が付加されていたことが予想できる。また、上端の破断面からは上及び横方向に粘土素地が付加されていたことが予想できる。このことから、やや不安定ながら、極細の高環脚部の可能性も考えられる。いずれにせよ、単なる棒状ではない。時期不明。

以上の、65 溝南西部出土遺物は、いずれも 65 溝南東部の時期幅との矛盾はない。

65 溝東部 (図 83 - 965 ~ 971)

965 が上層出土で、これ以外の出土層位は不明。

965・966 は須恵器。965 は器台。内外面とも回転ナデ。外面には、凸帯が残存部分の中位に 2 条、下端に 1 条見られる。また、凸帯の上部に 1 段、凸帯間に 2 段、それぞれ 8 条の波状文が施される。その後、透しが穿たれるのだが、残存部分でその一部が残存するのみで正確な形状は不明である。ただし、それぞれの平面形は、下側が三角形、上側が方形と思われる。TK 23 ~ 47 型式か。966 は高環。脚部外面にはカキ目が見られる。脚部は完存しないが、残存部位から透しは方形で 4 方と推測される。TK 208 型式。967・968・970・971 は土師器もしくは弥生土器。967 は小形鉢か。いわゆる精製器種ではないと思われる。全体的に剥離、摩滅が著しい。外面には左上がりの調整痕が残り、一見タタキにも見えたが、ハケかナデと思われる。内面は指頭圧痕が多数見られ、ナデだろう。底部はごくわずかに平底状を呈する。庄内式か。968 は高環。外面はタテミガキ、内面はナデと思われる。脚柱部内面にはシボリ目が残る。脚柱~裾部への屈曲はなく、脚端部は上下に弱く拡張する。弥生時代中期中葉。970 は甕。剥離、摩滅のため調整不明だが、口縁部は内外面ともヨコナデだろう。体部外面はタテハケの可能性はあるが、不明瞭。口縁端部は上下に拡張するが、いずれもさほど顕著ではない。頸部の屈曲もやや鈍く、内面にごく弱く稜を持つ程度である。胴部最大径は胴部中位程にあると推測される。弥

生時代中期後葉。**971**は台付鉢。外面は口縁部に10条程の廉状文、体部に13条程の廉状文が2段施され、廉状文の下位には櫛状工具による刺突文が施される。廉状文、刺突文はいずれも約0.3cmピッチである。なお、これら装飾以前の調整は不明。内面は指頭圧痕が見られるが、最終的な調整は不明。ヨコハケかミガキと思われる。生駒山西麓産胎土で、弥生時代中期後葉。**969**は蛸壺。内外面ともナデと思われ、特に内面は強くナデが施される。庄内式か。

以上の、65溝東部出土遺物は、数量は少ないものの、65溝南東部の時期幅との矛盾はない。

65 溝西部 (図 83 - 972・973)

972は下層、**973**は上層出土。

972は台付鉢。外面は当初ナデと思われるが、不明瞭。口縁端部外面に0.1cmピッチの廉状文が施される。上下二段の可能性もあるが、十分に観察できない。体部は少なくとも口縁端部下に廉状文が施されているようだが、摩滅のため不明瞭である。後に5個を一単位とした刻み目を施した棒状浮文が付されるが、方向数は不明。内面はヨコミガキと思われる。生駒山西麓産胎土で搬入品。弥生時代中期後葉。**973**は蓋。内外面とも器面剥離のため、調整不明。口縁端部際には、径0.4cm程の孔が、2個を一単位として2方向(対面)に施される。一単位の孔の間は、約2cmである。生駒山西麓産胎土と思われる。弥生時代中期後葉か。

65溝全体について、今回実測対象としたのは主に須恵器ではあるが、須恵器以上に多く出土したのは弥生土器である。その一部については図化し、例えば65溝西部では須恵器の出土は見られたものの、図化し得たのは弥生土器のみだった。当初に記したように、当遺構は大きく上層と下層に区分される。65溝南東部では、上層最下部の粘土層よりTK 217型式と思われる須恵器が出土しており、上層の埋没時期をこの時期と判断した。下層については、MT 15型式を下限とする。

6. 流路

210 流路 (図 84・85・90)

210流路は複数の調査区に跨って検出されており、まとまりごとに、中央部、南部、北部に分けて記述する。

210 流路中央部 (図 84 - 974 ~ 997・図 85 - 1004・1005)

974 ~ 988は、**975・977・986**を除き下層出土で、**974・978・979・981 ~ 985・987**は下層下部出土。**975・977・986**と**989 ~ 997**は上層出土で、**977・986・991・996**は上層上部、**994**は上層下部出土。**1004・1005**は出土層位不明だが、おそらく下層に伴うと思われる。

974は有段口縁の広口壺。内外面とも剥離のため調整不明瞭ながら、口縁部はいずれもヨコナデだろう。外面にはその後口縁部上端より、廉状文(11条、0.5 ~ 0.8cmピッチ)、ハケ状工具による列点文、廉状文(11条?、約0.8cmピッチ)が施される。廉状文と列点文の前後関係は、列点文と下側の廉状文とに切り合いがあり、廉状文→列点文の順であることがわかるが、器面剥離のため、上側の廉状文との前後関係は不明である。しかし、上下の廉状文を施した後に、その間に列点文を施した可能性が考えられる。なお、廉状文と列点文は、同一の原体を使用したと思われる。頸部にも櫛描直線文が見られるが、剥離のため条数は不明である。しかし、施文範囲が口縁部の廉状文の幅とほぼ同一であることから、同一の原体を使用した11条の可能性が考えられる。内面、口縁部以下は調整不明。弥生時代中期後葉。**975**は大形鉢。内外面とも口縁部はヨコナデ。体部外面はナデで、頸部~体部にはナデ以前のタテハケが見られ、特に頸部で比較的明瞭に観察できる。内面はナナメハケと思われるが、残存状況

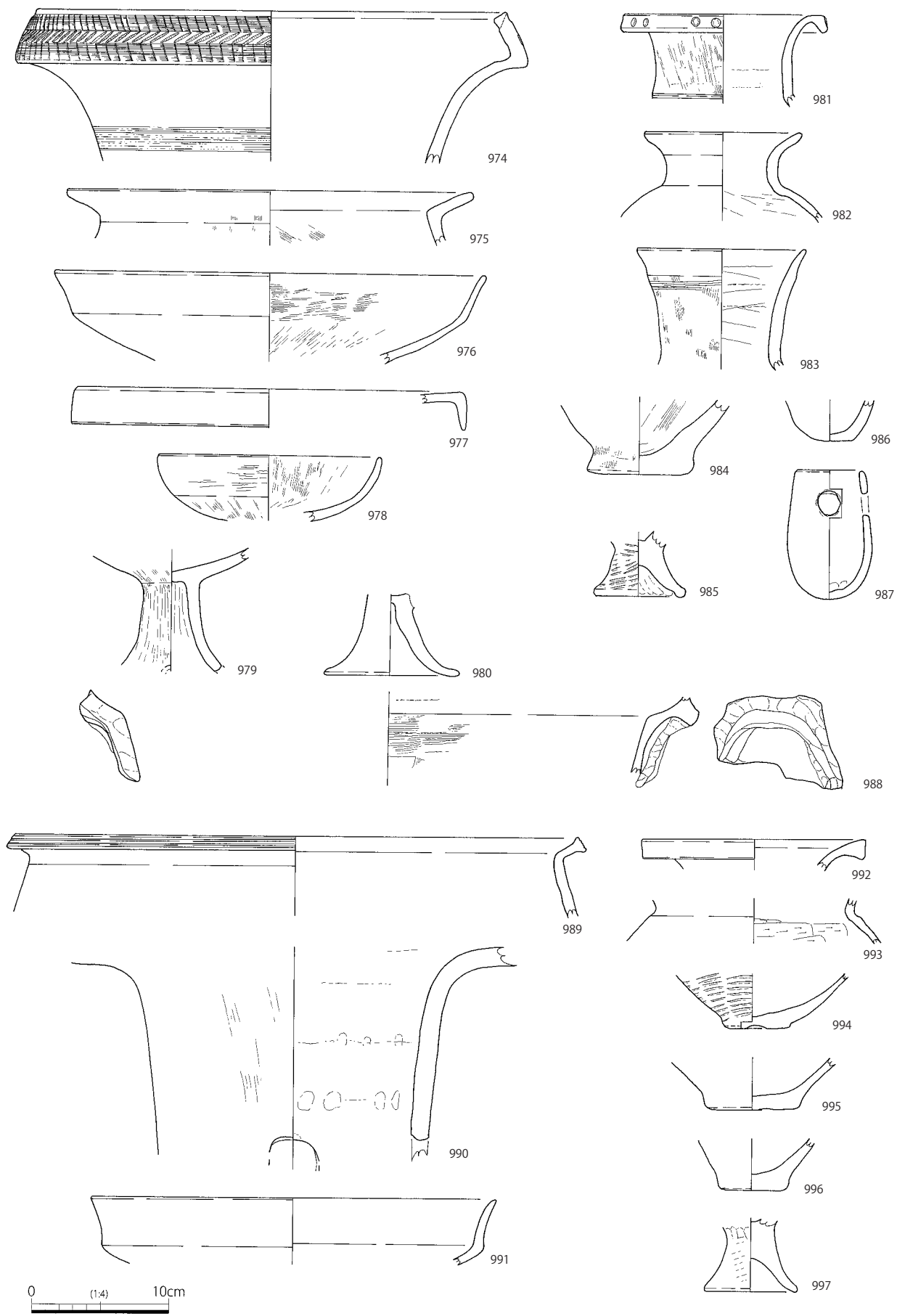


图 84 流路出土遺物 (1) (210 流路中央部)

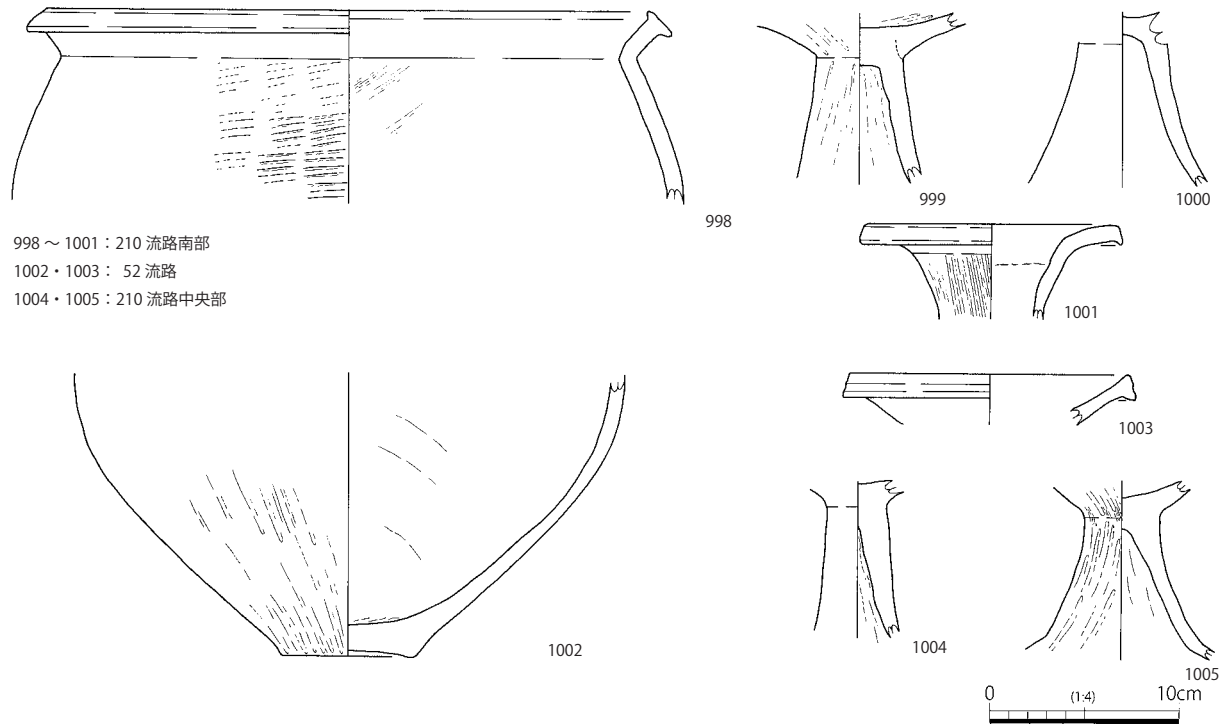


図85 流路出土遺物(2)(52流路、210流路中央部・南部)

は悪い。頸部の屈曲は鋭い。弥生時代後期後葉か。**976～980**は高坏。**976**は有稜高坏A 3か。外面は剥離のため調整不明。内面は、口縁部側が横方向、坏底部側が縦方向のミガキである。坏底側が長く、それから屈曲した口縁部側は短い。弥生時代後期後葉。**977**は水平口縁の高坏。内外面とも調整不明。弥生時代中期後葉。**978**は椀形高坏。外面は、上位が横方向、下位が縦方向のミガキ。内面は上位、下位ともタテミガキ。坏部途中の屈曲は鈍い。弥生時代後期後葉。**979**は有稜高坏Aか。外面は坏部、脚部ともタテミガキだが、坏部と脚部の屈曲部分はミガキ以前のタテハケが残る。内面、坏部は剥離のため調整不明。脚柱部はシボリ目が残り、わずかに残存する裾部はナデだろう。坏部と脚部の屈曲はシャープだが、脚柱～裾部への屈曲はやや鈍い。弥生時代後期後葉。**980**は内外面とも剥離のため調整不明。脚部高は低めで、脚柱部と裾部の区分も難しい。弥生時代後期前葉。**981**は広口壺C。口縁部は内外面ともヨコナデで、口縁端部外面には2個一単位の円形浮文が付される。2方向が残存するのみだが、等間隔であれば8方向と思われる。頸部外面はタテハケ後、縦～やや斜め方向のミガキが施される。頸部～体部への屈曲部分には沈線が1条見られる。沈線の上側に幅0.1cm程の粘土素地の隆起が見られるが、シャープに削りだされたものではない。沈線を施した際に生じたものと思われる。なお、沈線内には静止痕と思われるごく小さな凹凸が見られ、沈線が一気に施文されたのではないようである。また、この隆起は部分的に途切れており、頸部のハケに先行して施されたものと思われる。内面調整は不明。また、内外面とも頸部に接合痕が残る。1.3cm程を単位としており、比較的細身の粘土紐が使用されたと推測される。弥生時代後期中葉か。**982**は広口壺A。内外面とも剥離のため調整不明瞭だが、口縁部は内外面ともナデだろう。内面、体部はハケ。頸部の屈曲は比較的鋭いが、頸部～口縁部への屈曲はやや鈍い。口縁端部は丸く収めるのみである。弥生時代後期後葉か。**983**は長頸壺。口縁部は内外面ともヨコナデ。以下、外面には細かいタテハケが施された後、上部に4条の櫛描直線文が施される。なお、その後やや粗いタテハケにより一部が切られているが、意図的な施文ではないと思われる。内面は、横～斜め方向のハケが施される。なお、一部に接合痕が約1.4cm間隔で確認できる。調整は雑な傾向が

ある。弥生時代後期後葉。**984**は壺。外面は底部付近にタテハケが見られる。本来はこのハケの後にミガキなどの調整が施されたのかもしれないが、剥離のため不明。底部外面はナデだろう。内面はハケで、底部には工具の静止痕跡が見られる。弥生時代後期か。**985**は製塩土器。外面はタタキ（3条/cm）で、脚部に右上がりのタタキを施した後に、体部側のタタキがこれを切る。脚部内面は、ナデと思われるが、径1cm弱の棒状の工具で横方向に連続して押さえつけたように見え、棒状工具オサエ相当か。体部内面はハケと思われる。脚台Ⅱ式で、庄内式か。**986**は蛸壺か。内外面とも剥離のため調整不明で、外面にタタキ痕は見られない。底部はごく狭い。庄内式か。**987**は蛸壺（蛸壺B）。内外面とも剥離のため調整が不明だが、底部内面には指頭圧痕が見られる。胴部上位の穿孔は一方向である。やや下膨れ気味で丸底だが、細身の器形ではない。庄内式頃か。**988**は大形鉢。外面はナデで、内面は口縁部がヨコナデ、体部がヨコハケ。外面には逆U字型の把手が付されている。口縁端部はわずかに欠損していると思われる。内面には約1.4cm間隔で接合痕が見られる。弥生時代後期後葉。

989は甕。内外面とも口縁部はヨコナデだが、これ以外は剥離のため調整不明。頸部の屈曲は外面で特に鋭い。口縁端部は上下に拡張し、3条の凹線を施す。弥生時代中期後葉。**990**は器台。内外面とも剥離が著しいが、外面にはわずかにタテハケと思われる痕跡が見られる。内面には接合痕が残り、同部分を中心に指頭圧痕が見られるので、ナデだろう。なお、接合痕は約4cm単位で見られ、比較的幅広の粘土帯を使用したとも思われる。器台は、二次的な変形を伴わないと考えられる形式であり、幅広で分厚い粘土帯を積み上げて成形したのだろう。残存部分下端には、円形のスカシが見られる。胴部約3分の1の破片であり、スカシの方向数は不明だが、現状では1方向のみである。スカシは径3.5cm。弥生時代後期前葉か。**991**は有稜高坏A2か。内外面とも剥離のため、調整不明。小片のため、口径に誤りがある可能性があるが、残存部位からはこのように復原し得た。弥生時代後期後葉。**992**は広口壺か。剥離のため調整が不明瞭ながら、口縁部付近はヨコナデ、以下はナデだろう。口縁端部は下方に拡張する。弥生時代後期中葉か。**993**は布留形甕。口縁部外面はヨコナデで、肩部に比較的明瞭な稜が残る。体部外面は調整不明。内面は頸部より上はナデと思われ、同以下は時計回りのケズリ。ケズリは、胎土に含まれる砂粒が粗いこともあってか、粗い。また、ケズリ調整ではあるものの、体部の薄手化はさほど達成されていない。布留式前半か。**994**は甕。体部外面は右上がりのタタキ（3条/cm）で、連続ラセンタタキ。底部はナデと思われる。内面は剥離のため調整不明。底部は輪台技法で、中央部が弱く窪む。底部の突出は顕著ではなく、比較的球形化していると思われる。なお、底部外面は二次焼成のため赤変している。弥生時代後期後葉～庄内式。**995**は壺か。内外面とも剥離のため調整不明だが、外面底部付近にはタタキとも思われる痕跡が見られる。弥生時代後期か。**996**は甕。内外面とも剥離のため、調整不明。弥生時代後期か。**997**は脚部。製塩土器か。外面は右上がりのタタキ（2条/cm）と思われる痕跡がわずかに見られる。また、屈曲部には接合痕が残り、この部分にはナデの痕跡が見られる。外面は全体的にナデ調整で仕上げているのだろう。内面は、剥離のため調整不明。製塩土器であれば、脚台Ⅰ式bで、弥生時代後期後葉～庄内式頃か。

1004・1005は高坏。**1004**は外面調整不明瞭だが、タテミガキだろう。内面はシボリ目が残る、ヨコナデの痕跡も見られる。弥生時代後期後葉。**1005**は外面タテミガキだが、坏部～脚部への屈曲部分にミガキ以前のタテハケが残る。坏部内面は調整不明瞭だが、ミガキだろう。脚部内面は、板状工具の痕跡が残り、ヨコハケか。脚柱～裾部への屈曲は鈍い。弥生時代後期頃だろう。

210 流路南部 (図 85 - 998 ~ 1001)

998・1001 が下層出土、**999・1000** が出土層位不明ながら、上層に伴うと思われる。

998 は甕。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は、水平～やや右上がりのタタキ。内面はナナメハケ。口縁端部は上下に拡張する。頸部の屈曲も比較的シャープである。弥生時代中期後葉。**999** は高坏。外面は坏部、脚部ともタテミガキと思われるが、残存状況は悪い。坏部内面も同様な状況ながら、ミガキと思われる。脚部内面は、弱くシボリ目が残し、後にナデが施されていると思われる。脚部～坏部への屈曲はシャープである。脚部上部側面に坏部を付加する状況が良好に観察できる。弥生時代後期中～後葉。**1000** は高坏。内外面とも剥離のため調整不明。逆ハの字の脚部で、弥生時代後期中～後葉。**1001** は広口壺Dか。外面口縁部はヨコナデで、頸部はそれ以前のタテハケ。口縁端部～内面は剥離のため調整不明。一部に接合痕が明瞭に残る。口縁端部はごく弱く垂下する。内面から口縁端部への屈曲は極めて鈍い。頸部から口縁部への屈曲は、これに比べると比較的明瞭である。弥生時代後期か。

210 流路北部 (図 90 - 1124 ~ 1131)

いずれも下層出土で、**1124 ~ 1126** が下層上部、**1127 ~ 1131** は下層下部出土。

1124 は台形土器。外面はナデ。内面、中央部は粘土が剥離しているものと思われる。下池田遺跡の第1次調査では多数の台形土器が出土したようだが、今回の調査では少なく、本例が最も残存状況が良好な例である。弥生時代中期後葉。**1125** は小形丸底壺。体部外面、最大径より下部は細かいハケ。同上部にハケ目は見られずナデだろうか。体部内面はケズリ。わずかに残る口縁部はヨコナデである。横に強く張る体部で、口縁部形態が不明ながら、布留式前半だろう。**1126** は製塩土器。外面は右上がりのタタキ (2.5 条/cm)。内面は摩滅が著しいが、ナデだろう。脚端部の処理は雑で、内外面に粘土がはみ出している。脚台I式bで、庄内式だろう。

1127 は直口壺。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケだが、残存状況は悪い。摩滅もあるが、後に軽くナデが施されたのかもしれない。体部内面はナデか。少なくともケズリではない。肩部には接合痕が残る。体部は球形で、口縁部は直線的である。布留2式か。**1128・1129** は高坏。**1128** は外面摩滅のため調整不明。内面、口縁部～屈曲部はヨコナデ、坏底部はミガキだろうか。坏の屈曲はやや鈍く、口縁は概ね直線的だが、ごく弱く外反する。布留1式頃。**1129** は外面ミガキで、脚柱部にはわずかにミガキ以前のタテハケが残る。ミガキは縦方向と思われるが、脚柱部上部には横方向とも思われる痕跡が見られる。内面、裾部はナデ、脚柱部はケズリで、上端部にはシボリ目が残る。布留式前半。**1130** は壺で、細頸壺か。外面は摩滅のため調整不明。内面はナデだろうか。胴部最大径部分には、幅1 cm程の平らな凸帯が付され、その上に縦方向で幅0.3 cm程の小さな棒状の浮文が付される。残存部分で2個が見られるのみである。等間隔であれば、存在が予想される部分に見られないことから、必ずしも等間隔ではないと予想できる。数個を単位として、複数方向に付されていた可能性もある。東部瀬戸内地域の影響を受けたもので、弥生時代後期だろうか。**1131** は蛸壺。内外面ともヨコナデだろう。孔は全体の約4分の1が残存する。庄内式頃。

以上の210溝出土遺物は、多くが弥生土器である。中央部では、上層で弥生時代中期後葉～布留式、下層で弥生時代中期後葉～庄内式との時期幅であり、多数を占めるのは下層では弥生時代後期後葉だが、上層では上記の各時期が少ないながらも満遍なく出土している。南部では量は少ないものの、上層で弥生時代後期中～後葉、下層で中期後葉～後期で、実測対象外の破片も含め、庄内式以降の遺物の出土は見られない。北部は、いずれも下層出土遺物で、中期後葉～後期以外に、庄内式～布留式の遺物がこれ

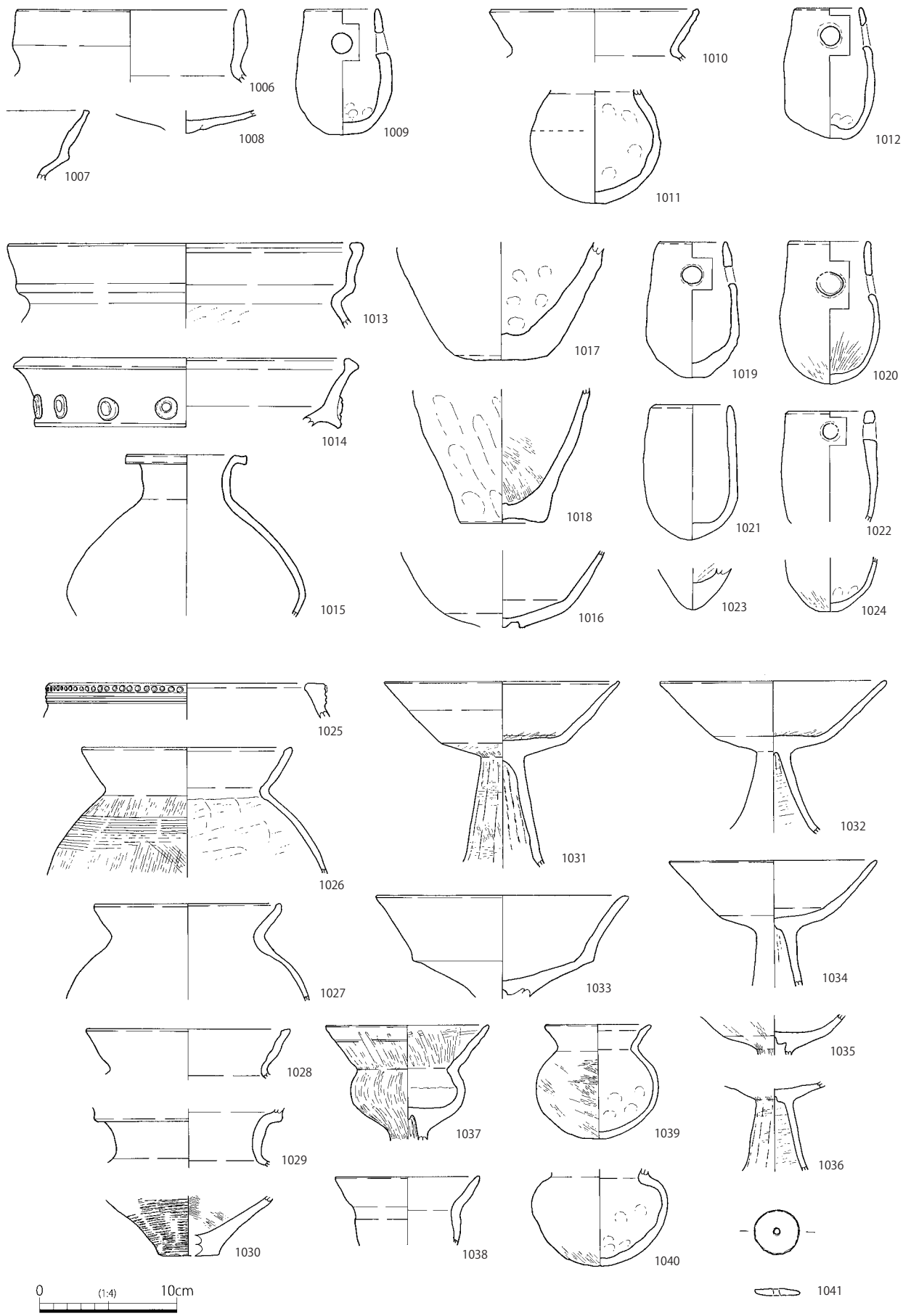


图 86 流路出土遺物 (3) (128 流路南東部 1)

らの中では比較的まとまって出土した。これらから、210 溝に含まれる遺物の時期幅として、上下層とも布留式前半頃までと考えてよいと思われる。

52 流路 (図 85 - 1002・1003)

1002 は図 25 断面図の 47 層出土、1003 は同 5～8 層出土である。

1002 は壺。外面はタテミガキだが、胴部中位での残存状況は悪い。内面は底部に板状工具の痕跡が多数見られ、胴部にもわずかに工具痕が斜め方向に見られることから、ハケと思われる。底部はやや上げ底気味である。弥生時代中期か。1003 は壺。内外面とも調整不明。口縁端部外面は、弱く窪み、沈線状を呈する。弥生時代中期か。

52 流路に含まれる遺物は、実測対象外遺物を含め、弥生時代中期を主体とする。

128 流路 (図 86～90)

128 流路は複数の調査区に跨っており、まとまりごとに、南東部、東部、南西部、西部、北西部に分けて記述する。

128 流路南東部 (図 86～88 - 1006～1088)

1006～1009・1041 が埋没後層、1010～1012 が上層、1013～1088 が下層出土である。下層出土のうち、1013～1049 (1041 を除く) が下層上部、1050～1088 が下層下部である。

1006 は複合口縁甕か。内外面ともヨコナデだろう。口縁部下部が分厚く、全体的に鈍重なつくりである。布留式か。1007 は複合口縁壺 (壺 B) か。内外面とも摩滅のため調整不明。口縁端部上端に鈍く面を持つ。布留 1～2 式か。1008 は高坏。内外面とも摩滅のため調整不明。脚部との接合部は、坏底部がへそ状に突出する。布留式。1009 は蛸壺。内外面ともナデで、内面底部には指頭圧痕が見られる。丸底。弥生後期後葉～庄内式か。1041 は紡錘車。摩滅のため調整不明。弥生時代か。

1010～1012 は上層出土。1010 は布留形甕。口縁部は内外面ともヨコナデだろう。わずかに残る体部、外面の調整は不明で、内面はケズリと思われるが、摩滅のため良好には観察できない。口縁部は内湾し、端部はごく弱く肥厚する。内傾する明瞭な面はない。布留 1 式か。1011 は小形の壺 (壺 D) か。内外面とも摩滅のため調整不明。外面はナデか。わずかに残る口縁部はヨコナデと思われる。内面は指頭圧痕が見られ、外面同様ナデか。小形丸底壺とするには分厚く、大きめで、小ぶりの直口壺か。布留式前半頃か。1012 は蛸壺。内外面とも摩滅しているが、ナデか。底部内面には指頭圧痕が見られる。弥生後期後葉～庄内式か。

1013～1049 は 1041 を除き下層上部出土。以下では、取上げ時の細分層ごとに記述する。

1013～1024 は図 25 の 20 層出土。1013 は複合口縁甕か。摩滅気味ながら、外面から内面口縁部はヨコナデで、体部内面はケズリ。口縁部下部は外側へ張り出すが、ごく鈍い。口縁端部は上端に鈍く面を持ち、内側へ折り返すが、折り返した内面の処理は雑である。布留式前半か。1014 は複合口縁壺か。内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。一次口縁～二次口縁への屈曲部外面は下方に垂下し、竹管文が施された円形浮文が付される。口縁端部は内外につままれ拡張する。庄内式か。1015 は広口壺。内外面とも剥離のため調整不明。頸部の屈曲は鈍く、直立気味に頸部が伸び、口縁部が強く外反する。端部は面を持つ。弥生時代中期後葉か。1016 は高坏。内外面とも摩滅のため調整不明。坏部の屈曲は鈍く、口縁は内湾気味である。脚部との接合部分の坏部外面は、へそ状に弱く突出する。布留式前半か。1017～1024 は蛸壺。1017・1018 はいわゆる真蛸壺。1017 は外面剥離のため調整不明。内面は指頭圧痕が見られ、ナデか。全体的に鈍重なつくりで、胎土も粗い。1018 は外面の摩滅が著しい

が、筋状の明瞭な凹凸が見られ、強いナデだろう。内面はハケ。いずれも庄内式頃か。**1019**～**1024**はいわゆる飯蛸壺で、**1023**が蛸壺Cと思われる以外は、蛸壺B。**1019**は内外面とも剥離のため調整不明。**1020**は内外面とも底部付近にハケ目が見られる。これ以外の調整は不明ながら、ナデだろうか。孔は約4分の3が残存する。**1021**は内外面とも剥離のため調整不明。残存部分では穿孔は見られない。**1022**は内外面とも剥離のため調整不明。口縁端部上端に鈍い面を持つ。穿孔は約4分の3が残存する。**1023**は外面ナデだろう。内面は、幅の狭い窪みが見られ、ヘラ状工具によるカキトリ風ナデか。底は分厚い尖底。**1024**は外面底部にはタテハケと思われる調整が見られる。内面は底部に指頭圧痕が見られ、ナデだろう。他の蛸壺に比べ薄手である。これらはいずれもさほど細身ではなく、庄内式頃か。

1025～**1040**は図25の21・25・26層出土。**1025**は鉢か、内外面ともヨコナデで、口縁端部外面には3条の沈線が施され、上端部に径0.5cm程の円形浮文が密に付される。弥生時代中期後葉か。**1026**～**1028**は布留形甕。**1026**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はやや粗いハケで、頸部以下のタテハケ後、肩部のヨコハケが施されるが、その後このヨコハケを切るように縦・斜め方向のハケが再度施される。体部内面はケズリ。口縁端部は肥厚し、内傾するやや長めの面を持つ。同一片と推定される底部片があるのだが、接合できない。布留1～2式か。**1027**は口縁部内外面ともヨコナデだろう。体部、外面調整は不明。内面は肩部より薄くなっておりケズリと思われるが、摩滅のため砂粒の移動は観察できない。頸部屈曲部の上下が分厚い。口縁部はごく弱く内湾し、端部はごく弱く肥厚する。磨滅のため十分には観察できないが、内傾する面を持つようにも見える。ただし、面は狭い。布留1～2式か。**1028**は口縁部内外面ともヨコナデで、わずかに残る体部内面は頸部やや下の屈曲もシャープでありケズリと思われるが、砂粒の移動は見られない。口縁部は弱く内湾気味で、端部は内傾する面を明瞭に持つ。布留2式か。**1029**は二重口縁壺。口縁～頸部は内外面ともヨコナデ。体部外面もヨコナデと思われるが、内面は残存部分も小さく、摩滅気味であり調整不明。頸部は屈曲部に向かい薄くなる。布留式前半。**1030**は弥生形甕。弥生時代後期後葉～庄内式頃と思われるのだが、外面のタタキが非常に細かく(5条/cm)、古相の庄内河内形甕のそれを思わせる。内面はハケ。**1031**～**1036**は高坏で、**1031**・**1032**・**1034**が直口高坏、**1033**が有稜高坏。**1031**は坏部外面、口縁部はやや低い位置までヨコナデを施す。以下、屈曲部までの調整は良好に観察できないが、ナデだろうか。屈曲以下はわずかに砂粒の移動と思われる痕跡が見られ、ケズリの可能性があり、その後ミガキが施されているようである。坏部内面、底部はナデの後ミガキが暗文風に施されているようだが、良好には観察できない。口縁部はヨコナデと思われる横方向に連続する痕跡が見られる。ハケにも見える調整である。脚部外面はメントリ風で、横方向のミガキ、ナデ、ナナメハケなどが見られる。脚部内面は、シボリ目が残る弱いナデと思われる。刺突痕は見られない。坏部の屈曲は鈍く、屈曲後の口縁は弱く内湾気味である。端部は細く丸く収めるが、内面は強いヨコナデによってか、狭く窪む。布留1式。**1032**は外面剥離のため調整不明。内面も剥離が著しく、口縁部の調整は不明。屈曲部やや上はヨコナデと思われるが、ハケにも見える。坏底部はナデ後ミガキだろう。脚部内面はケズリ。脚部の屈曲は鈍くごく弱く内湾気味である。脚部は、やや外反気味に開いており、明瞭な屈曲ではない脚部形態であろう。布留1式。**1033**は内外面とも摩滅のため調整不明。坏底部と口縁部との接合部分で一部剥離しており、接合方法が良好に観察できる。坏部の屈曲は明瞭で口縁は緩く外反する。脚部との接合部分の坏部外面には、刺突痕が見られる。布留2～3式。**1034**は外面剥離のため調整不明瞭だが、ハケか。内面、坏部は大部分の器面が剥離しているが、口縁部下部～坏底部は器面が残存し、口縁部下部はヨコナデ、坏底部はナデと思われる。脚

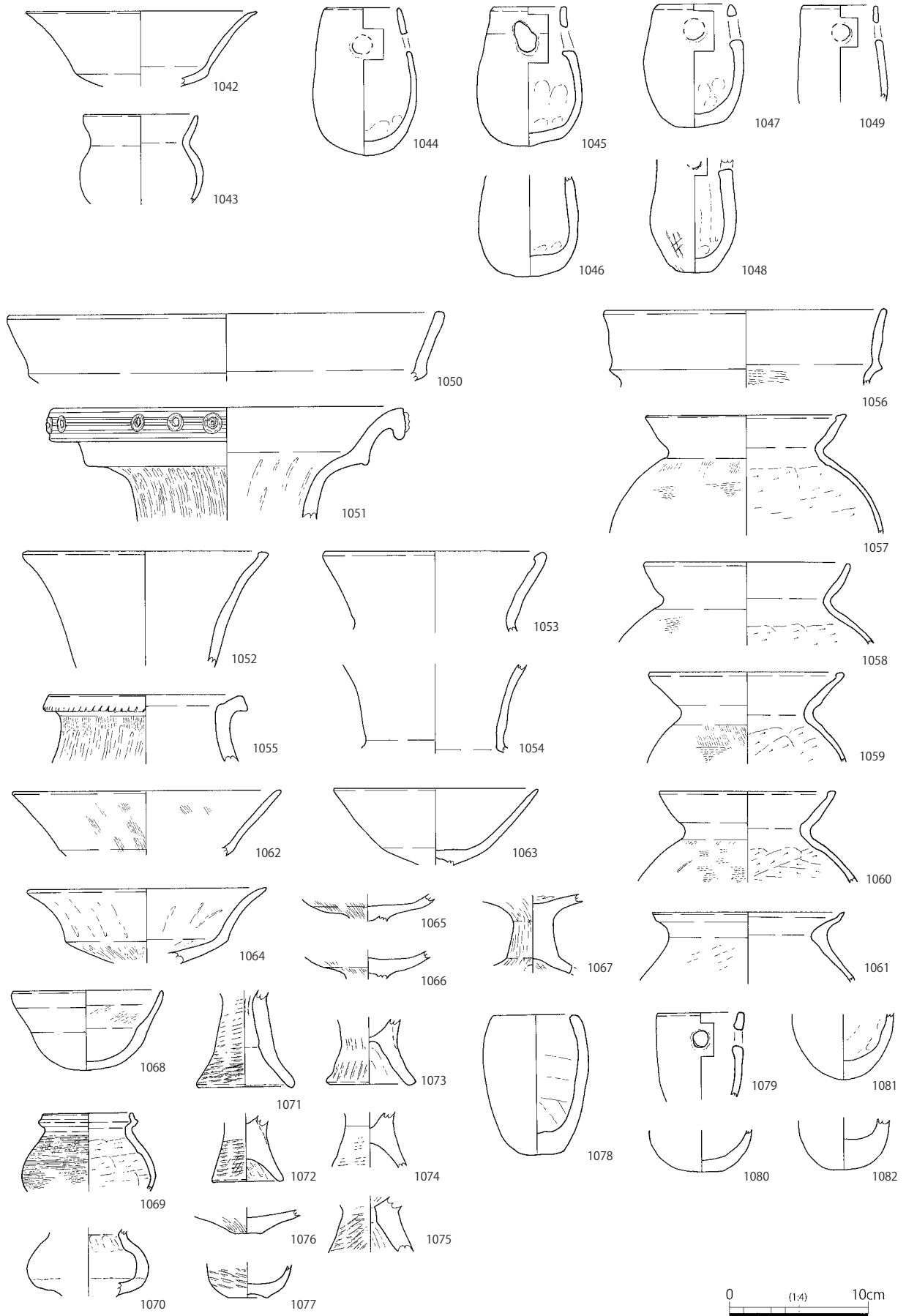


図 87 流路出土遺物 (4) (128 流路南東部 2)

柱部内面はナデか。砂粒の移動は見られない。坏部との接合部分には刺突痕が見られる。坏部の屈曲は鈍い。布留2式。**1035**は外面縦方向を基調とするハケ、内面は摩滅のため調整不明瞭ながら、ナデか。屈曲は鈍い。脚部との接合部分には、刺突痕が見られる。布留2式。**1036**は坏部内外面とも摩滅のため調整不明。外面の脚部との接合部分にはハケが見られる。脚部外面はメントリ風で、横方向のミガキと思われる調整が見られる。内面はケズリで、坏部との接合部分には刺突痕が見られる。布留1式。**1037**は脚付小形壺。外面はいずれも縦方向を基調とするミガキだが、頸部の屈曲部や体部から脚部の屈曲部にはミガキ以前のハケがわずかに見られる。なお、口縁部中位にはミガキ以前の沈線が見られる。ヨコナデによって生じた意図的な沈線ではない可能性も高い。内面、口縁部は外面同様タテミガキだが、口縁端部付近にはヨコミガキと思われる痕跡が見られる。ただし、タテミガキ以前の調整であり、ヨコナデの誤認の可能性もある。体部はナデで、肩部には明瞭に接合痕が残る。脚部内面はシボリ目が残る。脚部形態は不明だが、体部は横長で強く張り出し、口縁は直線的に伸び、口径は体部最大径を凌駕する。器形のみを小形丸底壺と比較すれば、布留1～2式頃とも考えられるが、調整が異なり、本例はタテミガキである。このため、時期判断が難しいが、布留式前半頃と考えておく。**1038～1040**は小形丸底壺。**1038**は口縁部内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともナデと思われるが、やや摩滅気味である。頸部外面はやや幅広の範囲が窪み、頸部内面の屈曲は鈍い。やや粗雑な感がある。布留2式か。**1039**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は斜め方向のハケ。内面は指頭圧痕が見られ、ナデだろう。口縁部は短く、途中で鈍く外反する。小形丸底壺Eで布留3式頃か。**1040**は直口壺の可能性もある。外面は底部付近にハケがわずかに見られるが、これ以外の調整は摩滅のため不明。内面は指頭圧痕が多数見られる。体部はやや肩があり、やや鈍重な感がある。布留3式頃か。

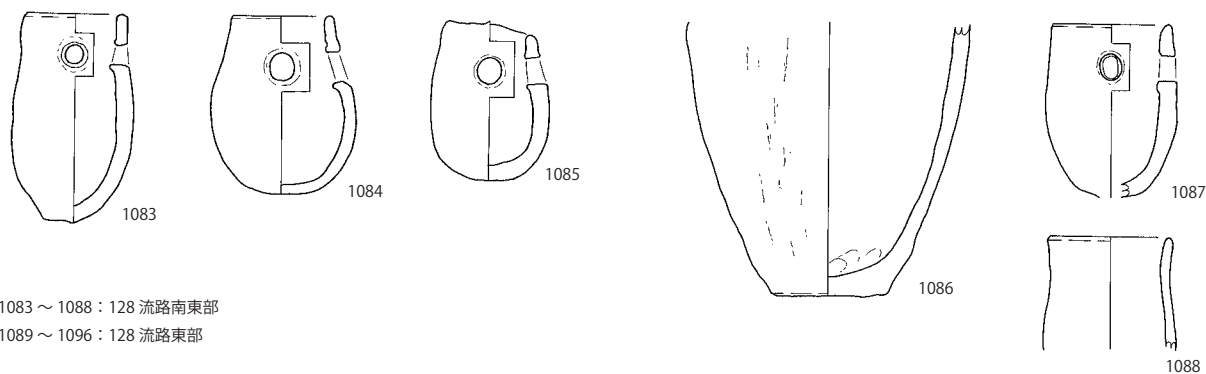
1042～1044は図25には見られないが、22～26層と27層の間で部分的に見られた層出土。**1042**は高坏。内外面とも摩滅のため調整不明。屈曲は明瞭で、口縁が緩やかに外反する。庄内式。**1043**は小形丸底壺。口縁部は内外面ともヨコナデと思われるが、これ以外は摩滅のため調整不明。体部最大径が口縁部径を凌駕する。胎土は、小形丸底壺にしては粗い。布留式後半か。**1044**は蛸壺。外面は剥離のため調整不明。内面は底部に指頭圧痕が見られ、ナデか。穿孔は約4分の1が残存する。庄内式か。

1045～1049は下層上部と下層下部の混在層出土で、いずれも蛸壺（蛸壺B）。**1045**は口縁部にヨコナデが明瞭に見られる。体部外面の調整は剥離のため不明。内面はナデだろう。孔は向って左上方向に広がっており、紐ズレだろう。**1046**は外面剥離のため調整不明。内面は底部に指頭圧痕が見られ、ナデか。平底気味。残存部分に孔は見られない。**1047**は外面剥離のため調整不明瞭ながら、ナデか。内面は底部に指頭圧痕が見られ、ナデだろう。平底気味。孔は約半分弱が残存する。**1048**は外面剥離のため調整不明瞭ながら、ナデか。下部には格子目状のヘラ描きとも考えられる痕跡が見られる。内面は底部に指頭圧痕が見られ、縦方向に指による強いナデによるものと思われる凹凸も見られ、ナデだろう。平底気味。孔は約半分弱が残存する。**1049**は内外面とも剥離のため調整不明だが、内面の一部に残る器面には縦方向のナデと思われる調整が見られる。孔は約半分が残存する。やや細身である。これらはいずれも庄内式頃か。

1050～1088は下層下部出土。以下では、取上げ時の細分層ごとに記述する。

1050～1082は図25の27層出土。**1050～1054**は壺。**1050**は複合口縁壺か。内外面とも強いヨコナデ。口縁端部上端に明瞭な面を持つが、特に肥厚はしない。布留式前半。**1051**は二重口縁壺。外面、

口縁端部には4条の沈線が施され、その上に竹管文を施した円形浮文が付される。以下、屈曲部までの口縁外面はヨコナデ、頸部はヨコナデ後タテミガキが密に施される。内面は、剥離のため調整不明瞭ながら、口縁部はヨコナデで、タテミガキの可能性もある。頸部はタテミガキがわずかに残る。頸部は、逆ハの字状に開き、途中で強く外反し屈曲部に至り、再度ハの字状に開き垂下する口縁端部へ至る。庄内式。**1052**～**1054**は直口壺。**1052**は口縁部内外面ともヨコナデと思われるが摩滅気味であり、内面は器面が一部剥離しており、良好には観察できない。口縁部は弱く外反し、口縁端部は上端に鈍い面を持つ。布留2式。**1053**は口縁部内外面とも強いヨコナデ。口縁は直線的で、端部は肥厚し、内傾する面を明瞭に持ち、その中央が弱く窪む。布留3式。**1054**は内外面ともヨコナデで、わずかに残る体部内面はケズリで、頸部まで削り上げる。口縁部は弱く外反する。端部は残存しないが、外反度合いは**1052**に類似する。布留2式か。**1055**は広口壺か。外面口縁部はヨコナデ。体部はタテハケ後タテミガキで、頸部付近にはハケが残存する。内面は剥離のため調整不明。口縁部は若干垂下し拡張され、下端には刻み目が施される。内面は、頸部の屈曲部間に弱く窪みが見られるが、器面が荒れており明瞭ではない。時期不明ながら、弥生土器か。**1056**～**1061**は甕。**1056**は複合口縁甕。内外面とも強いヨコナデで、わずかに残る頸部内面はハケ目が見られる。外面、口縁下部の突出もシャープである。口縁端部上端には鈍い面を持つが、特に肥厚はしない。布留式前半。**1057**～**1060**は布留形甕。**1057**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、頸部下部はタテハケで、肩部にヨコハケが見られるが、摩滅のため良好に残存しない。内面はケズリで、ケズリ上端はやや低め。口縁端部は肥厚し、比較的広めの面を持つ。布留2式。**1058**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケだが、摩滅のため十分に調整が残存せず、わずかに肩部付近にヨコハケが見られる程度である。内面はケズリだが、ケズリ上げがやや低めである。口縁部は内湾するが、端部の明瞭な肥厚は見られない。胎土はやや粗めである。布留1式。**1059**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、頸部下部はタテハケで、肩部にヨコハケが見られる。内面はケズリで、頸部やや下まで削り上げる。口縁は比較的直線的で、口縁端部は肥厚し、丸味を帯びるが内傾する鈍い面を持つ。布留1～2式。**1060**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、頸部直下はタテハケで、以下肩部にかけてヨコハケが見られる。残存状況が悪いためか、ハケというよりナデにも見える。内面はケズリで、頸部やや下まで削り上げる。口縁部は弱く内湾気味で、口縁端部は肥厚し、内傾するやや幅広の面を持つ。布留2式。**1061**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部は内外面ともナデと思われ、外面はハケ以前に右上がりのタタキが施される。頸部の屈曲は比較的明瞭だが、分厚い。口縁は若干外反気味で、端部は外側へ明瞭につまみ上げ、受け口状を呈する。後期形甕の一種だろうか。庄内式頃か。**1062**～**1067**は高坏。**1062**は内外面ともナメハケ後ナデ。口縁部は直線的ながら、端部が弱く外反する。屈曲は鈍い。布留2式頃。**1063**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。坏部の屈曲は鈍く、口縁は直線気味ながら弱く内湾する。坏部外面の脚部との接合部分には刺突痕が見られる。布留式前半。**1064**は内外面ともタテミガキ。坏部の屈曲は明瞭で、口縁は弱く外反する。庄内式。**1065**は外面縦方向を基調とするハケ。内面は摩滅のため調整不明。坏部の屈曲は鈍い。坏底部外面、脚部との接合部分は、へそ状に膨らむ。布留式。**1066**は外面縦方向を基調とするハケ。内面は摩滅のため不明。坏部の屈曲は鈍い。刺突痕が見られる。布留式。**1067**は外面、坏部、脚部ともタテミガキ。内面、坏部はミガキで、脚部はハケ。脚柱部は中実で、裾部への屈曲は比較的明瞭である。庄内式。**1068**は小形丸底壺か。鉢とすべきか。口縁端部は内外面ともヨコナデ。以下、口縁部内面はハケ。内外面の体部はナデだろうか。体部外面には、内側から押し出したかの



1083 ~ 1088 : 128 流路南東部

1089 ~ 1096 : 128 流路東部

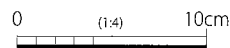
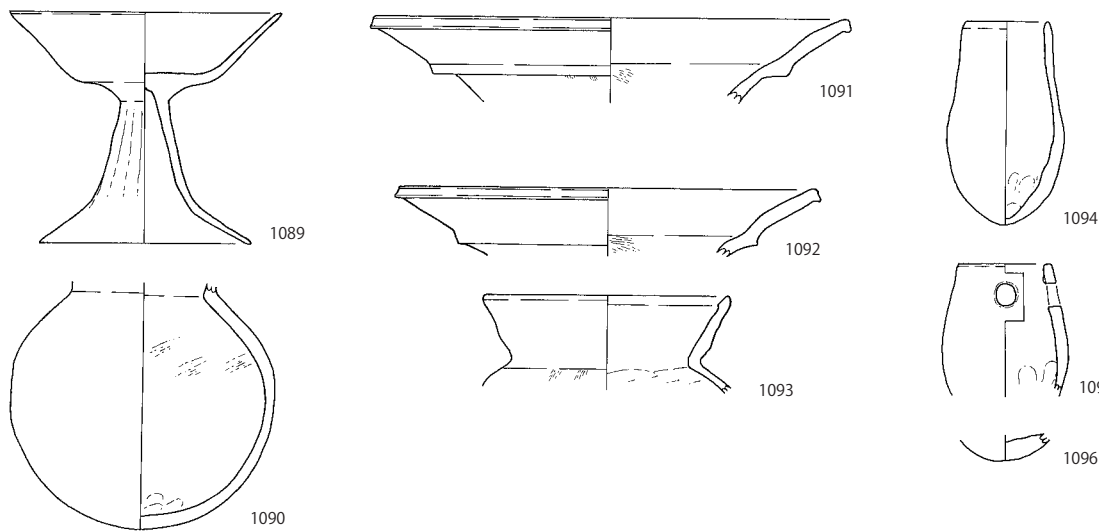


図 88 流路出土遺物 (5) (128 流路南東部 3・東部)

ようなヒビが見られる。鈍重なつくりで、粗製である。布留 3 式か。**1069** は小形甕。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はタテハケ後ヨコハケ。体部内面はケズリで、頸部やや下まで至る。口縁部が外傾し、内湾する受け口状口縁様だが、体部内外面の調整は布留式と同様で、外面のハケも布留式によく見られる細かく、深いものである。他地域の影響を受けているものだろうか。布留式か。**1070** は台付(脚付)壺か。外面は摩滅のため調整不明瞭だが、ナデか。内面はナデで、肩部には指頭圧痕が見られる。また、底部から体部の屈曲部分は接合痕が明瞭である。体部は横方向に強く張り、口縁へ急激にすばまる。胎土は生駒山西麓産の可能性もある。弥生時代後期～庄内式頃か。**1071**～**1075** は製塩土器。**1071** は外面水平～右上がりのタタキ(3条/cm)で、上部は後ナデ消す。内面、脚部はごく粗いナデ。脚端部は内面に巻きこむように見え、丁寧なナデもなされていない。残存状況は中空だが、本来は上端に充填がなされていたのだろう。脚台 I 式 b と思われ、庄内式。**1072** は外面脚部水平～右上がりのタタキ(3条/cm)で、わずかに残る体部はナデか。脚部内面はハケ、体部内面はナデだろう。外面上部は体部が剥離しており、この剥離面でもタタキが認められ、脚部をタタキで成形した後、上部側面に体部用の粘土素地を貼り付けて成形したことがわかる。体部には上記のようにタタキは見られない。脚台 II 式 a と思われ、庄内式だろう。**1073** の脚部外面下部は縦方向のタタキと思われるが、残存状況が悪く、粗い原体によるハケの誤認の可能性もある。これより上はハケと思われるが、さらに上位は摩滅のため不明である。内面は、脚部、体部ともナデと思われる。脚部外面のハケ調整部分は、**1072** 同様、体部を成形した際の調整で、その下部のタタキとは異なる段階の調整と思われる。脚台 II 式 a と思われ、庄

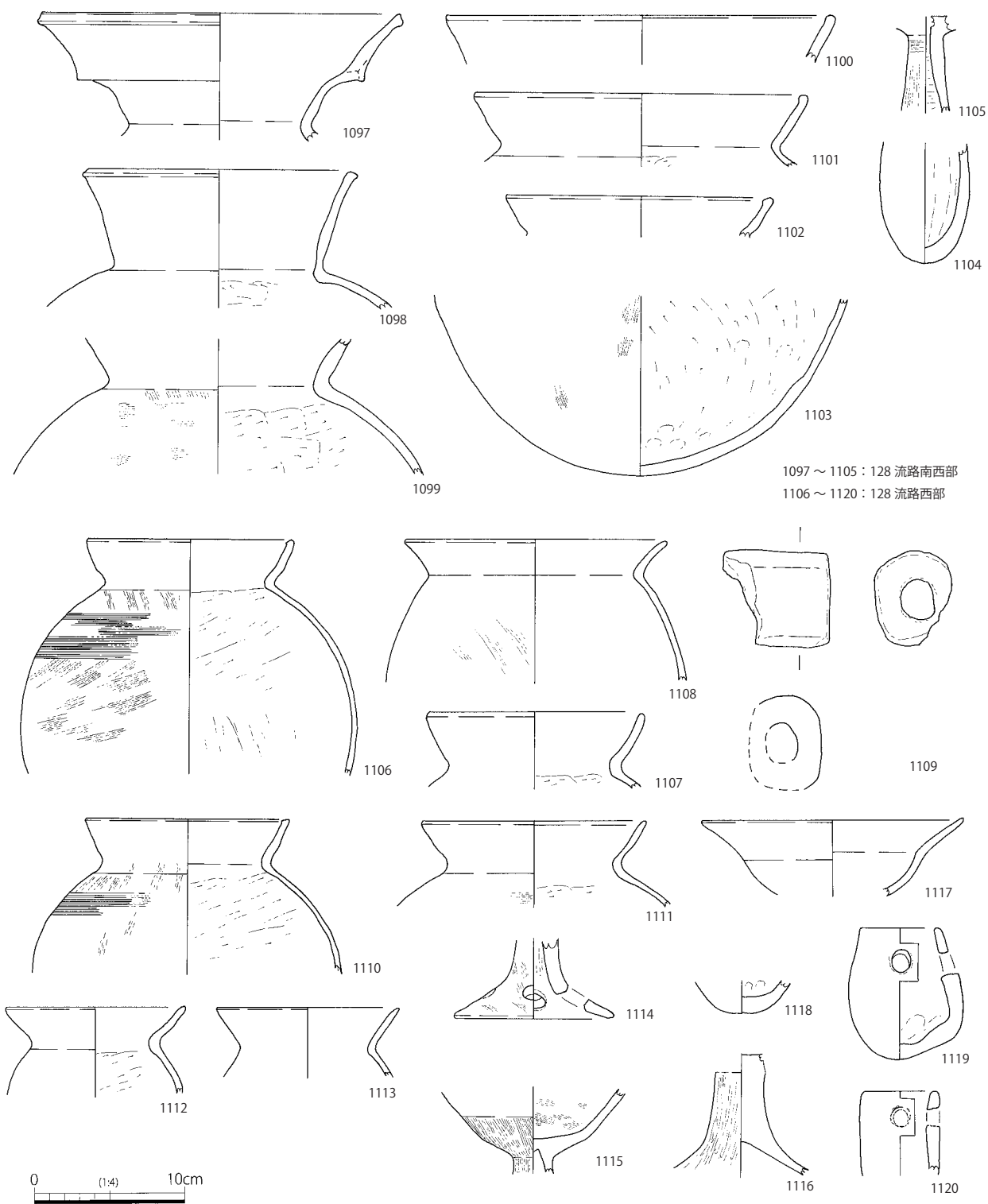
内式。**1074**は外面右上がりのタタキだが、摩滅気味であり、また脚端部を除きナデ消されているように見える。内面は、脚部、体部ともナデだろう。体部は脚部からの屈曲はないようである。脚台Ⅰ～Ⅱ式頃で、庄内式だろう。**1075**は外面右上がりのタタキ（2.5条/cm）。脚部内面はハケ、体部内面はへら状の先が細目の工具による調整で、棒状工具オサエだろう。現状で中空だが本来粘土が充填されていたのだろう。脚台Ⅰ式と思われ、庄内式。**1076**は壺。外面はミガキ、内面は剥離のため調整不明。底部はごく小さく、中央部が窪む。中形か小形の直口壺底部で、布留式か。**1077**は小形壺か。外面は左上がりのタタキ（2.5条/cm）。内面はナデと思われるが、先の細い工具の擦痕と思われる痕跡も多数見られる。底部は上げ底状を呈する。残存部より上位の器形は不明。庄内式頃か。**1078～1082**は蛸壺。**1078**は外面摩滅のため調整不明、内面はナデ。残存部分で孔は見られない。不明瞭ながら、平底である。**1079**は内外面ともナデと思われるが、摩滅のためはっきりとしない。**1080**は内外面ともナデ。底部は不明瞭ながら平底である。蛸壺と判断したものの、調整は丁寧である。**1081**は外面剥離のため調整不明。内面は強いナデ。**1082**は内外面ともナデと思われるが、外面のナデは不明瞭。底部は分厚い。いずれも庄内式頃か。

1083～1088は図25には見られないが、27層以下に見られた層出土で、いずれも蛸壺。**1083**は剥離、摩滅気味ながら、内外面ともナデだろうか。**1084**は内外面とも摩滅のため調整不明。他の蛸壺よりやや胴部が横に広がるように見える。**1085**は剥離、摩滅気味ながら、内外面ともナデだろうか。やや小ぶりに見える。いずれも庄内式頃と思われるが、1083は細身であり、やや新しいものかもしれない。**1086～1088**は1083～1085よりもやや下位に見られた層出土で、いずれも蛸壺。**1086**は真蛸壺か。外面は摩滅のため調整不明だが、内側から押し出したかのような、縦方向のヒビ状のしわが多数見られる。内面はナデと思われ、底部には指頭圧痕が見られる。全体的に鈍重な感がある。**1087**は内外面ともナデと思われるが、摩滅のためはっきりとしない。**1088**は内外面とも剥離、摩滅のため調整不明。残存部分に孔は見られない。いずれも庄内式頃だろうか。

128 流路東部（図88－1089～1096）

1089は下層下部間、**1090**は埋没後層と上層上部出土遺物が接合したものである。**1091～1093**が下層下部、**1094～1096**が下層上部出土である。

1089は高坏。内外面とも剥離のため調整不明だが、脚部外面はメントリ風である。また、坏部外面の脚部との接合部分には、刺突痕が見られる。坏部の屈曲はやや不明瞭で、鈍く屈曲し、口縁は直線的である。脚部高が坏部高よりも長い。布留1～2式。**1090**は直口壺か。体部外面の調整は剥離、摩滅のため不明。内面は肩部にハケが、底部には指頭圧痕が、それぞれわずかに見られるが、外面同様摩滅が著しい。頸部の屈曲は比較的明瞭である。胴部は球形で、横に張るような形状ではない。やや鈍重な感はある。布留2式頃か。**1091・1092**は二重口縁壺。**1091**は内外面とも、屈曲部より上はヨコナデ。同以下は、外面がタテハケ後ヨコナデ、内面は斜めハケ後ヨコナデである。1092と同様だが、胎土がやや異なり別個体と判断した。布留2式。**1092**は外面ヨコナデ。内面の屈曲部より上もヨコナデで、同以下は横・斜め方向のハケのちナデ。ヨコナデ、細かく深いハケともに、布留式によく見られるタイプである。口縁が大きく開き、端部は明瞭に面を持つ。屈曲部外面は明瞭につままれる。布留2式。**1093**は布留形甕。口縁は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケだが、摩滅によりほとんど残存しない。体部内面はケズリ。口縁端部は内傾するやや広めの面を持つ。布留2～3式か。**1094～1096**は蛸壺。**1094**は蛸壺Cか。内外面とも剥離のため調整不明だが、底部内面には指頭圧痕が見られる。残存部分



1097 ~ 1105 : 128 流路南西部
1106 ~ 1120 : 128 流路西部

図 89 流路出土遺物 (6) (128 流路南西部・西部)

で孔は見られない。細身。庄内式。**1095** は外面ナデか。内面底部側にはナデの痕跡がわずかに残る。庄内式。**1096** は内外面ともナデと思われる。底部の小片だが、内面は指頭圧痕と思われる弱い凹凸が見られる。胎土は粗い。庄内式か。

128 流路南西部 (図 89 - 1097 ~ 1105)

1097 ~ 1104 が下層下部出土、**1105** は出土層位不明である。

1097 ~ 1099 は壺。**1097** は二重口縁壺。内外面ともヨコナデで、頸部以下内面のケズリは、残存

部分では確認できない。頸部は逆ハの字状に開き、屈曲部分は布留形甕の口縁部下部と同様な形状である。一次口縁と二次口縁の接合は、断面で良好に観察できる。端部は外傾する面を持ち、強いナデにより弱く窪む。布留2式。**1098**は直口壺。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面は剥離のため調整不明だが、ハケだろう。体部内面はケズリで、屈曲部近くまで削り上げる。口縁部は弱く外反気味で、端部は外傾する面を持ち、外側に弱くつまみ出す。布留2式か。**1099**は口縁部が端部まで残存せず、形状不明だが、甕とするには分厚いため壺とした。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、頸部直下にはタテハケが、肩部には横、斜め方向のハケが弱く残存する。内面はケズリ。布留式だが、詳細な時期は不明。他と同様、布留2式頃か。**1100**～**1102**は布留形甕。**1100**は口径が大きく鉢の可能性もあるが、同時期の鉢の口縁とは異なると思われ、甕としておく。口縁部の小片で、内外面ともヨコナデ。端部は上端に面を持つ。布留1～2式か。**1101**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケと思われるが、摩滅のため不明瞭。体部内面はケズリで、屈曲部下0.7 cm程の部分まで削り上げる。口縁部は弱く内湾気味で、端部は内傾する面を持つが、やや丸みを帯びる。布留2式。**1102**は口縁部の小片で、内外面ともヨコナデ。口縁部は弱く内湾気味で、端部は内傾する面を持つ。布留2～3式か。**1103**は壺か。甕の可能性もあるが、大形のため壺としておく。外面はハケだが、剥離、摩滅のため良好には残存しない。内面はケズリで、部分的に指頭圧痕が見られる。布留式だが、詳細な時期は不明。**1104**は蛸壺（蛸壺C）。外面は摩滅のため不明瞭ながら、ナデか。内面は縦方向のナデ。残存部分で孔は見られない。細身。庄内～布留式か。**1105**は高坏。脚部外面はミガキ。屈曲部付近はヨコミガキで、以下はタテミガキに見えるが、不明瞭である。脚部内面はケズリ。わずかに残る体部は摩滅のため調整不明。布留1～2式か。

128 流路西部（図 89 - 1106 ～ 1120）

1106～**1108**は上層、**1109**～**1114**・**1117**・**1119**は下層上部、**1115**・**1120**は下層、**1116**・**1118**は下層下部出土。

1106・**1107**は布留形甕。**1106**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、肩部にはヨコハケだが、残存状況は悪い。内面はケズリだが、剥離のため良好には残存しない。口縁部は内湾し、端部はやや狭いが内傾する面を持つ。布留1～2式。**1107**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は摩滅のため調整不明。体部内面はケズリ。口縁部は内湾するが、端部は肥厚しない。布留1式か。**1108**は甕。口縁部は内外面ともヨコナデ。体部外面には、斜め方向のハケが見られるが、残存状況が悪く、のちナデが施されたのかもしれない。体部内面はナデだろう。頸部の屈曲は比較的明瞭で、口縁部は弱く外反気味で、端部はごく鈍く面を持つ。生駒山西麓産胎土のようにも見える。時期不明だが、布留式だろうか。

1109～**1114**・**1117**・**1119**は下層出土。**1109**は不明土製品。高坏の脚にも見えるが、断面形状が楕円形であり、残存部上端は破損面ではなく、生きており、高坏とは考えられない。摩滅のため調整不明瞭ながら、外面はナデだろう。胎土は他の土器と同様であり、他地域からの搬入とも考えにくい。時期不明。**1110**～**1112**は布留形甕。**1110**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、頸部直下にはタテハケ、肩部にはヨコハケが見られるが、剥離、摩滅のため良好には残存しない。体部内面はケズリ。口縁部は弱く内湾し、端部は狭いが内傾する面を持つ。布留1～2式。**1111**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は摩滅のため調整不明瞭ながら、ヨコハケが肩部に見られ、これより上位の屈曲部まではヨコナデと思われる。明瞭なタテハケは見られない。内面はケズリだが、削り上げがやや

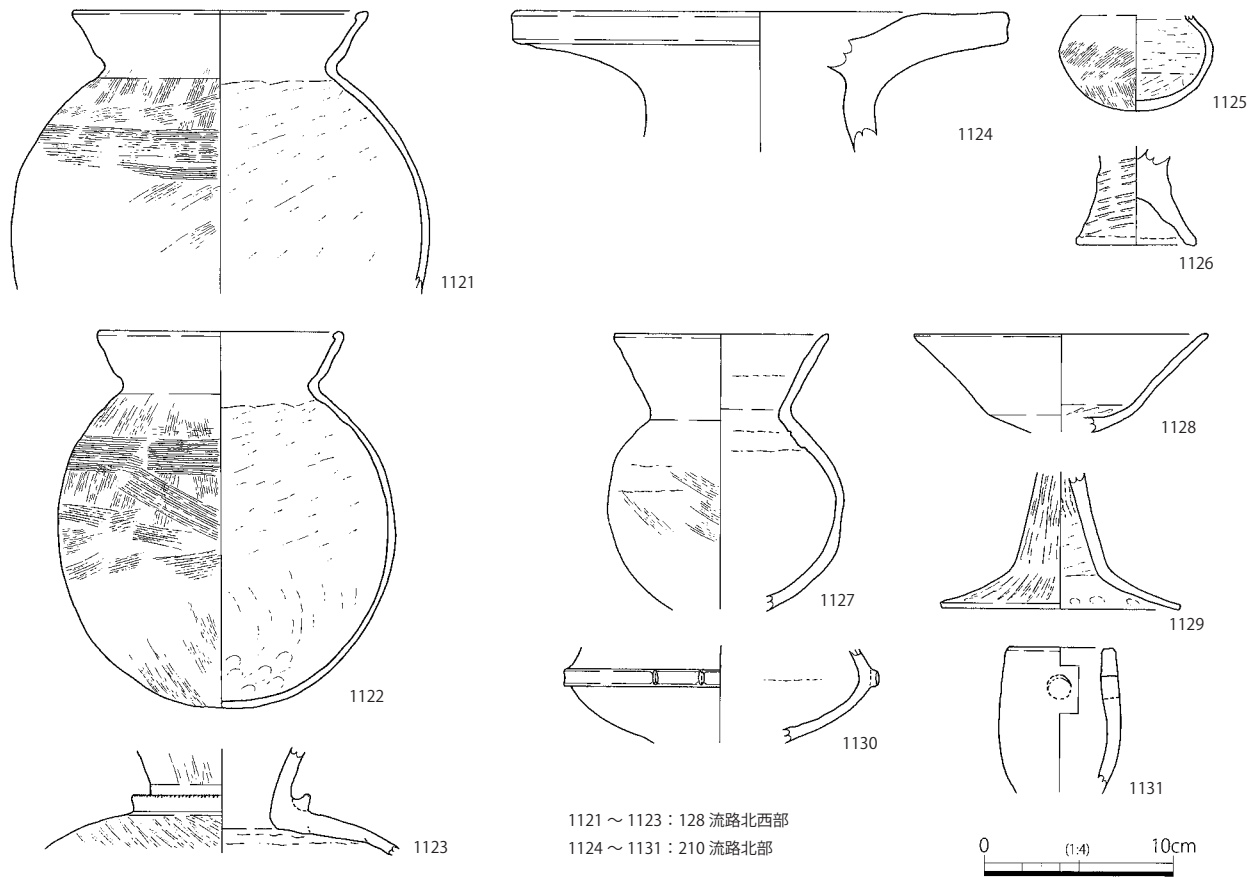


図90 流路出土遺物(7)(128 流路北西部、210 流路北)

低い。口縁部は弱く内湾気味で、端部は摩滅のためもあるかもしれないが、肥厚は見られず、弱く内傾する面を持つ程度である。布留1~2式。**1112**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面は摩滅のため調整不明だが、ハケだろう。体部内面はケズリだが、砂粒の移動は摩滅のため不明瞭。口縁端部は肥厚しない。布留1式か。**1113**は甕か。内外面とも摩滅のため調整不明。ただし、体部内面はわずかに砂粒の移動が見られ、器面が薄いことから、ケズリだろう。口縁部は概ね直線的で、端部は尖り気味に丸く収める。頸部のナデも見られず、布留形甕に見られる口縁部下部の鈍い屈曲も見られない。ただし、胎土は他と同様である。素口縁の壺であろうか。布留式前半だろう。**1114**は高坏。外面はハケ。内面は摩滅のため調整不明だが、脚柱部にはシボリ目が残る。裾部には4方向のやや大きめの穿孔が施される。弥生時代後期後葉か。**1117**は鉢。内外面とも摩滅のため調整不明。体部は浅いと予想でき、体部から口縁への屈曲は外面ではごく鈍いものの、内面では比較的明瞭である。精製器種とするには胎土は粗く、有段鉢とは考えにくい。底部形状が不明ながら、小形鉢C b、もしくは逆に粗製化した有段鉢だろうか。詳細な時期は不明ながら、布留式だろう。**1119**は蛸壺。内外面ともナデと思われるが、摩滅のため不明瞭である。ただし、底部内面には指頭圧痕が見られる。弥生時代後期後葉~庄内式前半頃か。

1115・1120は下~最下層出土。**1115**は高坏。坏部外面上部はヨコナデ、下部から脚部はハケ。内面は屈曲部より上位にはナメハケが見られるが、坏底部には見られずナデだろうか。脚柱部内面はナデと思われるが、わずかに砂粒が移動しているように見える部分もあり、ケズリの可能性もある。なお、坏部と脚部の接合部分には、刺突痕が見られる。坏部の屈曲はやや鈍めである。布留2式か。**1120**は蛸壺。内外面ともナデだろう。孔は約4分の1が残存するのみ。細身と予想される。庄内~布留式頃か。

1116・1118は最下層出土。**1116**は高坏。外面はタテミガキ。内面、坏部はミガキと思われるが、

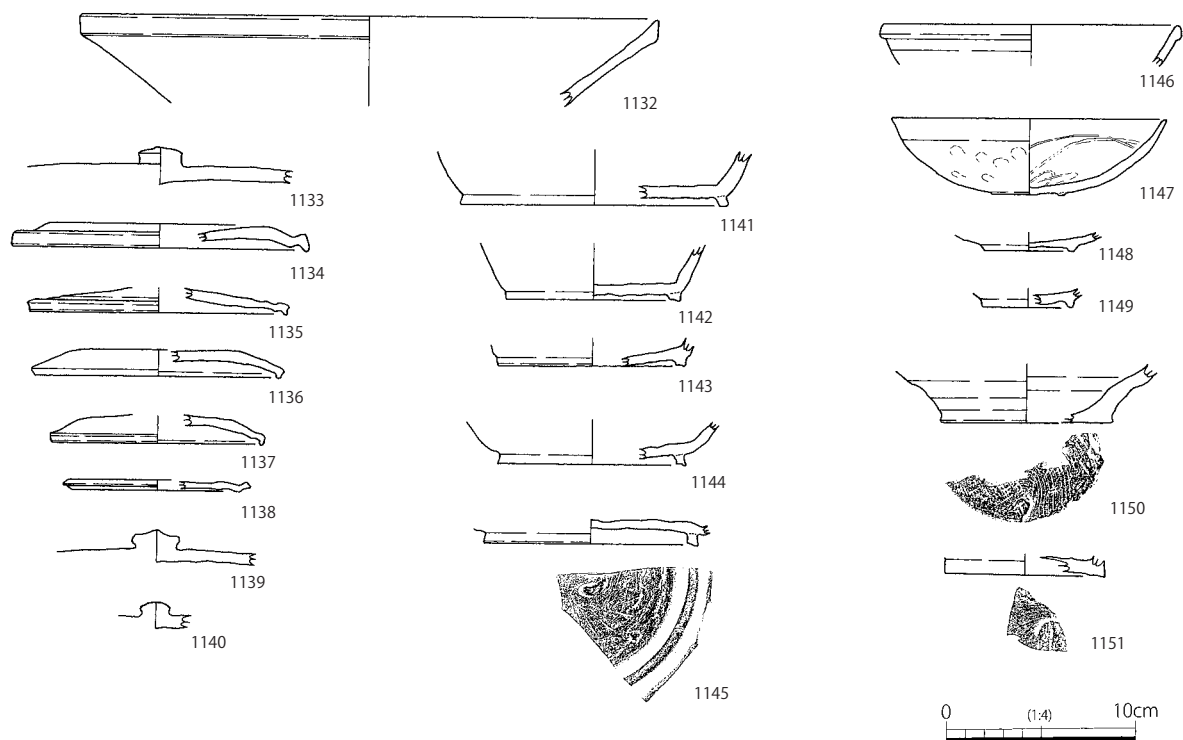


図91 古代以降遺物（1）

明瞭な痕跡は見られない。脚部は板状工具痕が見られ、ハケだろう。残存部上端部側面は、坏部の粘土素地が剥離している。脚柱部は中実だが、裾部への屈曲は鈍い。庄内式。**1118**は蛸壺。内外面ともナデと思われ、内面底部には指頭圧痕が見られる。不明瞭ながら、ごく小さい平底である。庄内式か。

128 流路北西部（図90 - 1121 ~ 1123）

いずれも下層下部出土。

1121・1122は布留形甕。**1121**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、肩部には不連続ながらヨコハケも見られる。頸部以下はタテハケ、ヨコハケ以下は斜め方向のハケである。内面はケズリ。口縁部は内湾気味で、端部は内傾し、弱く丸みを帯びるが面を持つ。布留2式。**1122**は口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面はハケで、肩部にはやや不連続ながらヨコハケも見られる。ヨコハケ以前はタテハケで、ヨコハケ以下にも見られるが、ヨコハケ以下には、ナナメハケも見られる。なお、一部ながら肩部のヨコハケを切るナナメハケも施される。内面はケズリで、底部には指頭圧痕も見られる。口縁部は内湾気味で、端部は内傾し、弱く丸みを帯びるが面を持つ。布留2式。**1123**は広口壺か。頸部外面はタテミガキ。体部は斜め方向のミガキで、頸部凸帯部分はヨコナデ。凸帯端部には刻み目が施される。内面、頸部はナデ、体部もナデと思われるが、接合痕が残り、雑なナデであろう。庄内式か。

128 流路出土遺物は、各層に明瞭な時期差はない。最も遺物量が豊富な下層上部で、布留3式までの遺物を含み、下層下部も同様である。南東部では庄内式が多数を占めるが、これは蛸壺の時期を庄内式頃と考えた点が大きく影響している。蛸壺を除外し時期を考えると、布留式以降が主である。以上から、128 流路に含まれる遺物は、布留式以降を中心に布留3式までと推測される。上述のように、128 流路からは多数の蛸壺が出土している。層位と型式が良好な関連を持たないと考えられ、この点では残念だが、他の遺構よりも明らかに多数の蛸壺が出土している点は注意される。

(2) 古代以降

古代以降の遺物は、その多くが遺構に伴った出土ではない。個々の遺物の出土層・遺構は以下のと

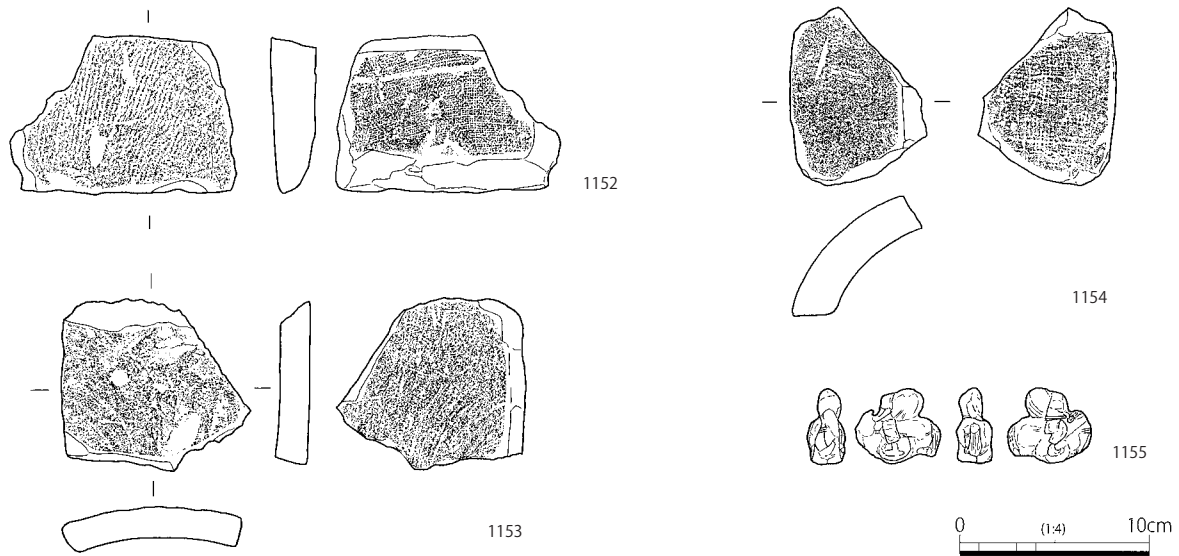


図92 古代以降遺物（2）

おりである。**1132・1136・1147・1148**が図6のP 19 第1層上部、**1134・1135・1142・1154**が同第1層下部、**1133・1137・1139・1141・1144**が同P 9 第1層、**1138**が224 落ち込み直上包含層、**1145**が図6のP 17 第1層、**1149**が184 大畦畔上層、**1150**が図6のP 16 第1層、**1151**が図5のP 2 第1層、**1152**が24 流路、**1155**が146 井戸からの出土である。また、**1140・1143・1146・1153**が側溝出土で、**1140**は図6のP 9 第1層に伴う可能性が、**1146**が基本層序1層に伴う可能性が、それぞれ考えられる。

須恵器（図91 - 1133～1145・1150・1151）

奈良～平安時代の須恵器は、極めて微量である。図化した資料は、須恵器蓋8点、須恵器坏B 4点、須恵器壺3点である。

須恵器蓋の破片には、擬宝珠つまみを有し端部付近が緩やかに湾曲する**1133・1134・1136・1137**と全体的に扁平な**1135・1138・1139**の二者がある。端部の形態は、前者は下方へ屈曲する**1136・1137**とZ字状の**1134**、後者も同様に**1135**と**1138**の2形態がある。**1136**の端部内外面には、明瞭な重ね焼き痕が残る。**1140**は小形坏Bの蓋か。

須恵器坏Bの高台は、底部やや内側に取り付く**1144・1145**と、底部端に取り付く**1142・1143**がある。**1145**の内底面は研磨されたかのごとく平滑で、外底面には製作時の圧痕が残る。

須恵器壺は、やや厚めで内湾する体部から壺と判断した**1141**と、底部に回転糸切り痕のある**1150・1151**がある。

これらは概ね奈良時代の所産であるが、**1135・1138・1139**や**1142・1143**は奈良時代末～平安時代初頭の可能性があり、**1150・1151**は平安時代初頭の所産。

須恵質土器（図91 - 1132）

須恵質土器は**1132**のみで、口縁端部を上下に拡張する。12世紀末～13世紀初頭。

瓦器（図91 - 1147～1149）

瓦器は細片も含めて若干量出土したが、図化できたのは**1147～1149**の3点。底部片**1148・1149**はいずれも磨耗が激しく、見込みの暗文は不明。高台の形状から見て13世紀前半。**1147**は見込みに雑な連結輪状暗文を施し、矮小化した高台をもつ。13世紀中頃～後半。

磁器 (図 91 - 1146)

中世の輸入陶磁器で図化しえた資料は、玉縁状口縁を有する **1146** の白磁碗 1 点のみである。11 世紀後半～12 世紀前半の所産。

瓦 (図 92 - 1152 ~ 1154)

比較的残りの良い平瓦 2 点 **1152・1153** と丸瓦 1 点 **1154** を図化した。これら出土量は極めて少ない。狭端面の破片 **1152** は、凸面に離れ砂の付着した縄叩き、凹面に細かな布目が残る。側縁の破片 **1153** は凹凸面とも離れ砂が付着する。丸瓦片はかなり磨耗しており、凹面にかろうじて布目が残る。これらは古代末～中世にかけての瓦片であろう。

土人形 (図 92 - 1155)

土人形 **1155** は縦半分ずつの型合わせによる成形で、型接合部分の一部に稜が残る。中実で、刻印などはない。下部は馬で上に人物が乗っているモチーフと思われる。馬の後足、前足、首、人物の首などが欠損する。人物は、武装しているように見え、上半身肩部には大袖、下半身には草摺と思われる表現が見られる。背中には袋を背負っているようである。馬には、鐙、胸懸などの表現が見られ、腹部分が俵状を呈するが、これも馬具表現だろうか。近世と思われ、江戸時代後半期の甲冑表現という点を 18～19 世紀頃の復古的な思想と関連するとすれば、その頃のものだろう。

第 2 項 絵画土器

2 点の弥生時代の絵画土器が出土している (図 93 - 1156・1157)。

1156 は 128 流路北西部、104 溝付近の側溝掘削中に出土したもので、帰属遺構は不明だが、後者に伴う可能性も考えられる。壺の肩部片と考えられ、外面は左上がり方向を基調としたミガキ、内面はナデと思われる。詳細な器種は不明だが、頸部径は比較的大きいことが予想でき、長頸壺の類ではなく、広口壺などではないかと思われる。絵画は頸部やや下に描かれている。2 本の線で表現されており、上側の線は上からやや左下へ描かれ、一度工具が静止し、再度左側へ線を描く。その先は欠損するが、約 90 度折れ曲がり、下側へ線が連続すると予想される。下側の線は、明瞭な静止痕跡は見られず、逆 S 字状に線が描かれるが、横方向から下方向へ向う屈曲部分の線が、やや弱い。両方の線とも、上端は残存し、概ね接するようではあるが、下端については、欠損のため不明である。上下の線の順番は、切り合いがなく不明だが、下の線が滑らかであることから、こちら側を先に描き、これと接触しないように上の線を描いたため、途中で静止したり、やや稚拙とも思える直線的な表現になっていたりするのも

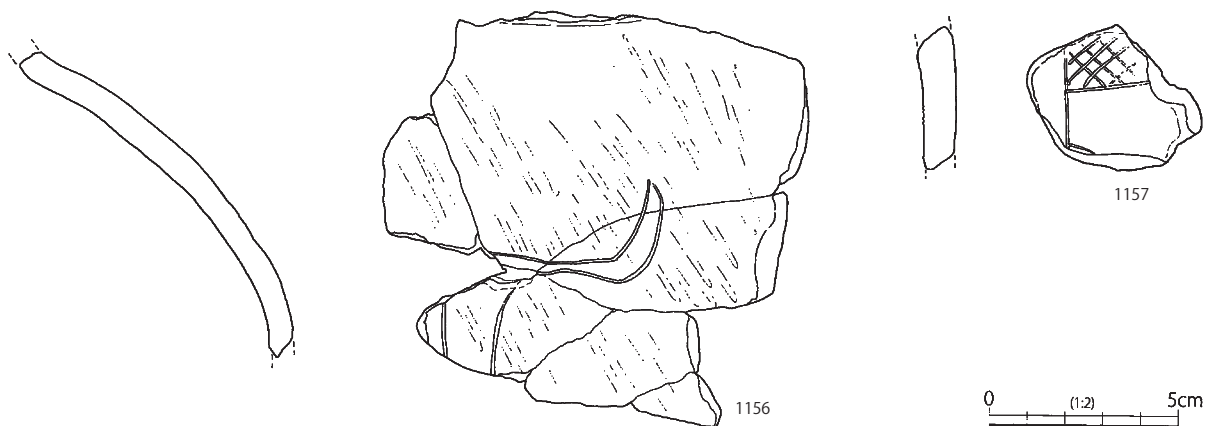
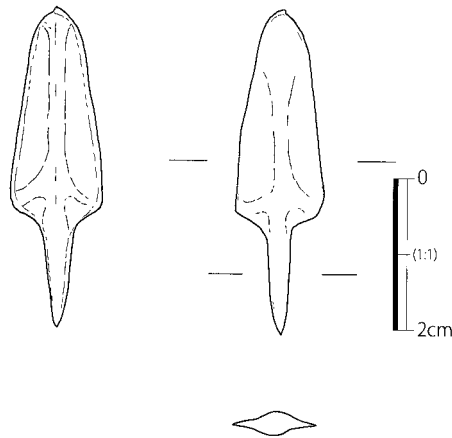


図 93 絵画土器



○ 1158

図 94 銅鍬

しれない。足と考えられる表現は見られず、鹿とは考えにくい。ヒレ状の表現はないが、龍もしくは龍を模した記号状の文様だろうか。土器の詳細な時期は不明だが、弥生時代後期頃だろうか。なお、当遺跡では過去に龍を描いたとされる絵画土器の出土がある（永野・岡本編 2009、27 頁）。本例も龍とすれば、この例と頭の向きは同様であるが、ヒレ状の表現の有無が異なる。なお、本例はこれに比べ、比較的器面の残存状況が良好であり、線もはっきりしている。

1157 は 64 溝東部埋没後に残った浅い窪み状部分に堆積した層からの出土で、この遺物と同じ層位より出土した遺物には、弥生土器のほかに須恵器も含んでいる。ただし、一定量の 64 溝に含まれる遺物と同様の時期の遺物も見られることから、64 溝から巻き上げられたと考えておく。外面は摩滅のため調

整不明で、内面はナデと思われるが不明瞭である。壺片と思われるが、不明確である。なお、摩滅のため調整の方向が判断できず、図の上下左右についても妥当か否か、確かではない。外面の摩滅もあり、線の残存状況も悪いが、施文工具の先端がややためであったのかもしれない。線は、まず縦線を描き、次に横線、続いて左上から右下への斜め線、最後に左上から右下への斜め線の順である。なお、残存部分下端にも横方向やや右下向きの線が描かれているが、これは縦線の後である。この残存部分下端の斜め線がなければ、単純に斜格子で屋根を表現した家屋絵画と考えられるが、この斜め線のため、断言できない。土器の時期は不明だが、弥生時代中期後葉だろうか。

第 3 項 銅 鍬

64 溝中央部北西端付近より 1 点の銅鍬が出土している（図 94 - 1158）。

1158 は柳葉形で、長さ 4.1 cm、幅 1.25 cm である。切っ先には幅 0.1 cm 弱、長さ 0.05 cm 程の突起がわずかに残っており、連鑄式と推定される。鍬身部分は長さ 2.9 cm で、表裏両面とも中央部分の稜は鈍く、断面は丸みを帯びた菱形を呈する。茎部分は幅 0.25 cm、厚み 0.2 cm で、やや楕円形状である。なお当遺跡では、過去の第 1 次調査で、鑄造後切り離しをしていない未製品と考えられる銅鍬の出土が見られる（岸和田市史編さん委員会編 1979、巻頭図版）。本例は、切っ先に突起が残るが、逆の茎部分端部が切り落としたままの状態ではなく、整形がなされている。切っ先の突起も、鑄造時上側の茎下端を単純に切り落としただけとするには明らかに細い。このことから、鑄造後個々の銅鍬を切り落としただけの段階ではなく、その後研ぎなど一定の整形がなされた段階の資料と考えられ、未成品ではないと判断する。ただし、他の例で切っ先に同様な突起が見られる例は少ないと思われ、整形が粗かったのか、あまり使用されなかったのかもしれない。各地の銅鍬は、中期の出土例は少なく、後期には確実に存在し、古墳時代初頭には見られなくなるようである（田中 1986、93 頁）。64 溝の時期は、弥生時代後期後葉～庄内式前半を中心としており、これと矛盾しない。

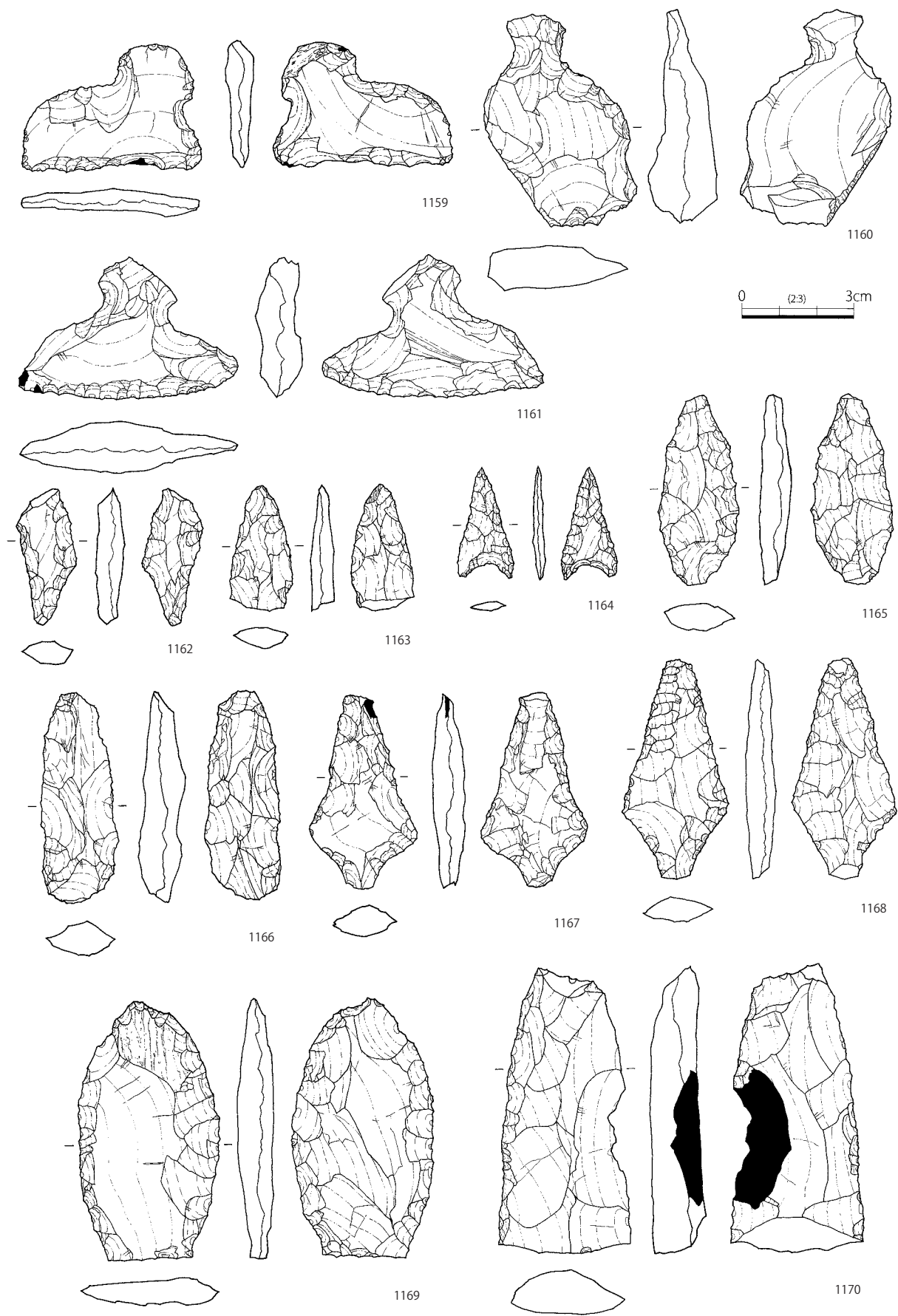


図95 石器（1）（打製石器1）

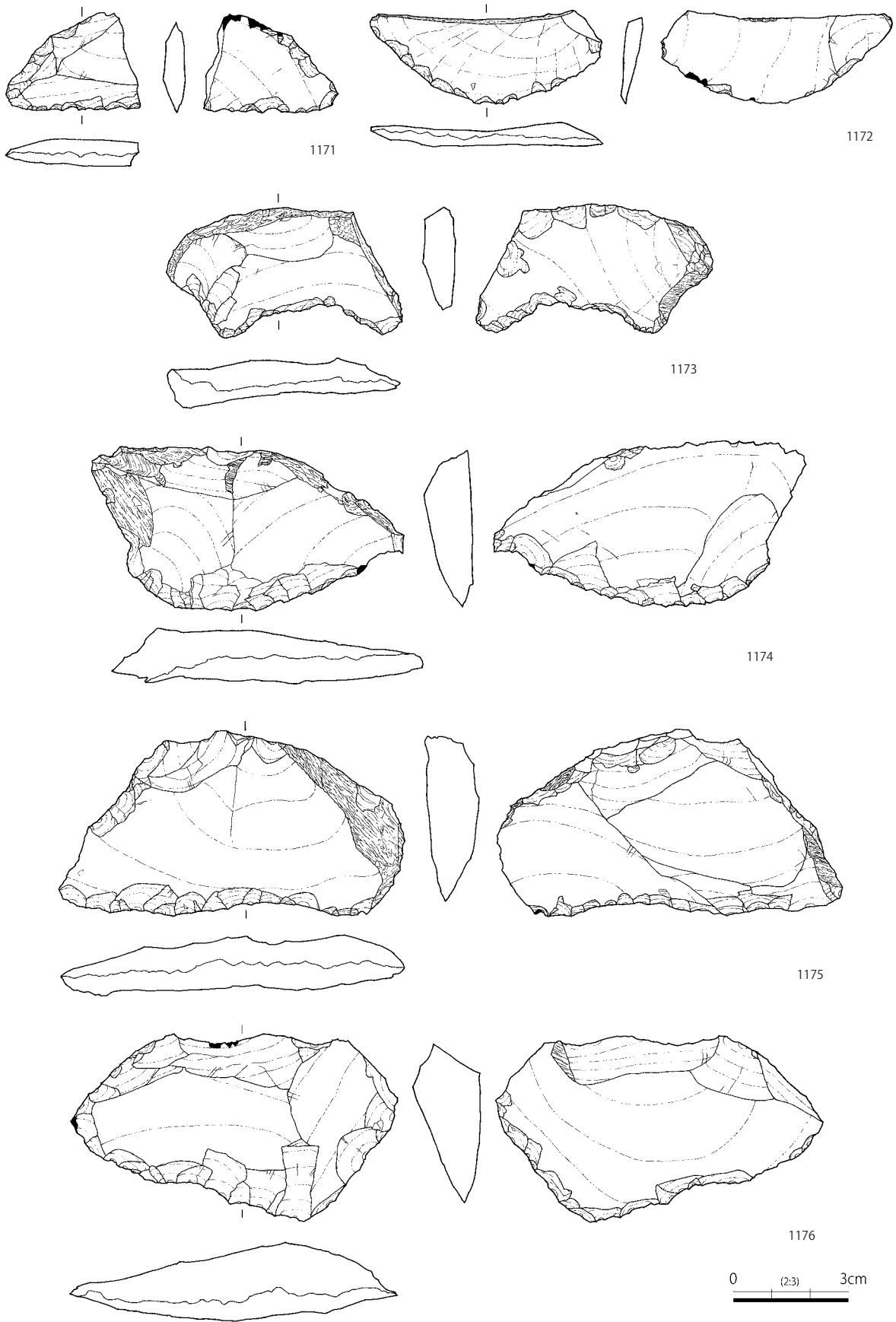


图 96 石器 (2) (打製石器 2)

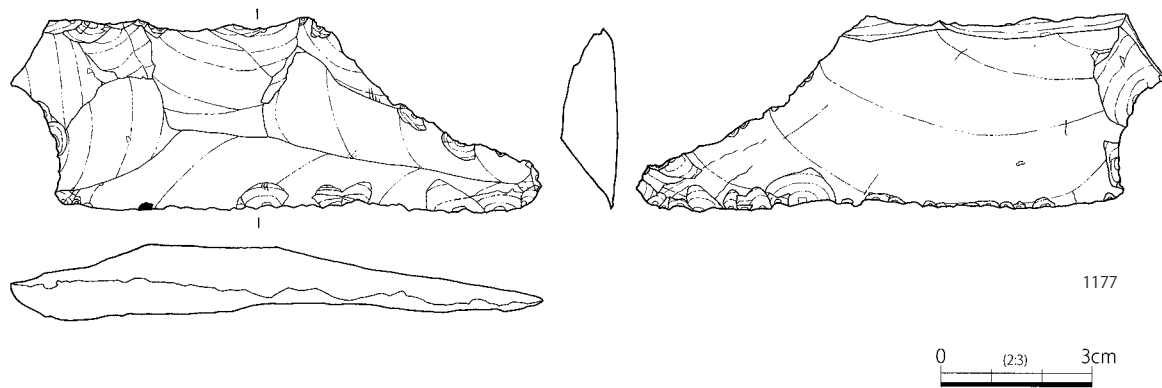


図97 石器(3)(打製石器3)

第4項 石器

(1) 打製石器

打製石器は、石匙・石鏃・尖頭器・石剣・石錐・スクレイパーなど計19点を図化した(図95～97-1159～1177)。**1159**は110土坑(古墳時代前期?)、**1160**は図6 P 19の2層、**1161**は65溝東部(古墳時代)、**1162・1165**は図5 P 2の1層、**1163**は12竪穴住居(弥生時代後期前葉頃)、**1164**は64溝中央部(弥生時代後期後葉～庄内式頃)、**1166**は64溝東部、**1167**は22土坑(弥生時代中～後期頃)、**1168**は図6 P 18の2層、**1169**は210流路北部下層下部(古墳時代前期)、**1170**は128流路南東部下層上部(風化礫層)(古墳時代前期前半)、**1171**は128流路南東部、**1172**は64溝西部、**1173**は図5 P 3旧耕作土、**1174**は図6 P 9の1層、**1175**は図6 P 16の1層、**1176**は14区(図2参照)側溝、**1177**は128流路北西部からの、それぞれ出土である。

石匙(図95-1159～1161)

縄文時代の石匙**1159・1160・1161**はいずれも横長剥片を素材としたもので、**1161**はかなり風化が進む。**1160**はつまみを作出する主要剥離面の剥離が、風化度合いからやや新しい感があること、一側縁に分厚い原礫面が残ること、他方も調整剥離が不十分なことから、調整剥片の可能性はある。

石錐(図95-1162)

表面がやや風化した石錐**1162**は、尖端を欠損する。

石鏃(図95-1163～1168)

石鏃は円基式**1163**、凹基式**1164**、凸基有茎式**1167・1168**、尖基無茎式**1165**がある。このうち風化の進んだ**1164**は他の石鏃に比べ薄く小形。縄文時代の所産であろう。**1163**は先端に原礫面が僅かに残り、基部は欠損。**1167・1168**さらに**1165**は、いずれも先端・基部が欠損する。

尖頭器・石剣・スクレイパー(図95～97-1169～1177)

1169は横長剥片を素材とする尖頭器で、基部及び尖端付近に原礫面が残る。同様に横長剥片を加工した**1171**は、その多くを欠損しており、やや磨耗した感がある。**1166**は両側縁に大まかな調整を加えたもので、石鏃もしくは尖頭器の未成品であろうか。石剣**1170**は過半を欠損するが、一側縁に意識的な刃潰しを、さらに端部を作出するような剥離を施すことから、基部片であろう。

スクレイパーは縦長剥片**1172・1173・1177**、横長剥片**1174・1175・1176**の一側縁に刃部を付けたもので、原礫面を残すもの**1172・1173・1174・1175**がある。なお**1177**は尖端の両側縁に

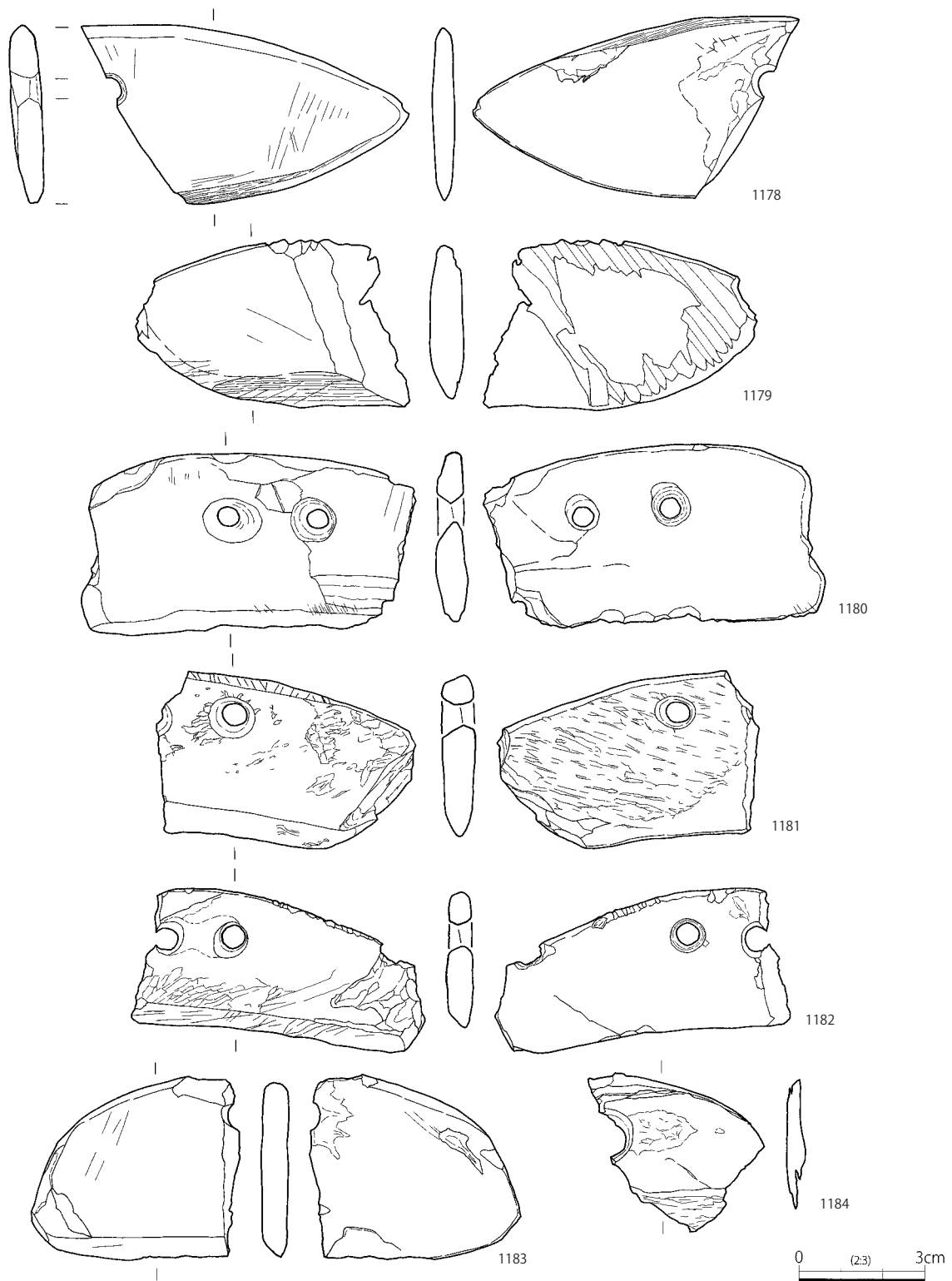


図98 石器（4）（磨製石器1）

調整を施す。

以上は、石匙 1159・1160・1161 及び石鏃 1164 以外、弥生時代の所産であろう。

（2）磨製石器

各遺構、包含層から石庖丁 8 点、大型石庖丁 1 点、石鏃 1 点、柱状片刃石斧 3 点、扁平片刃石斧 1

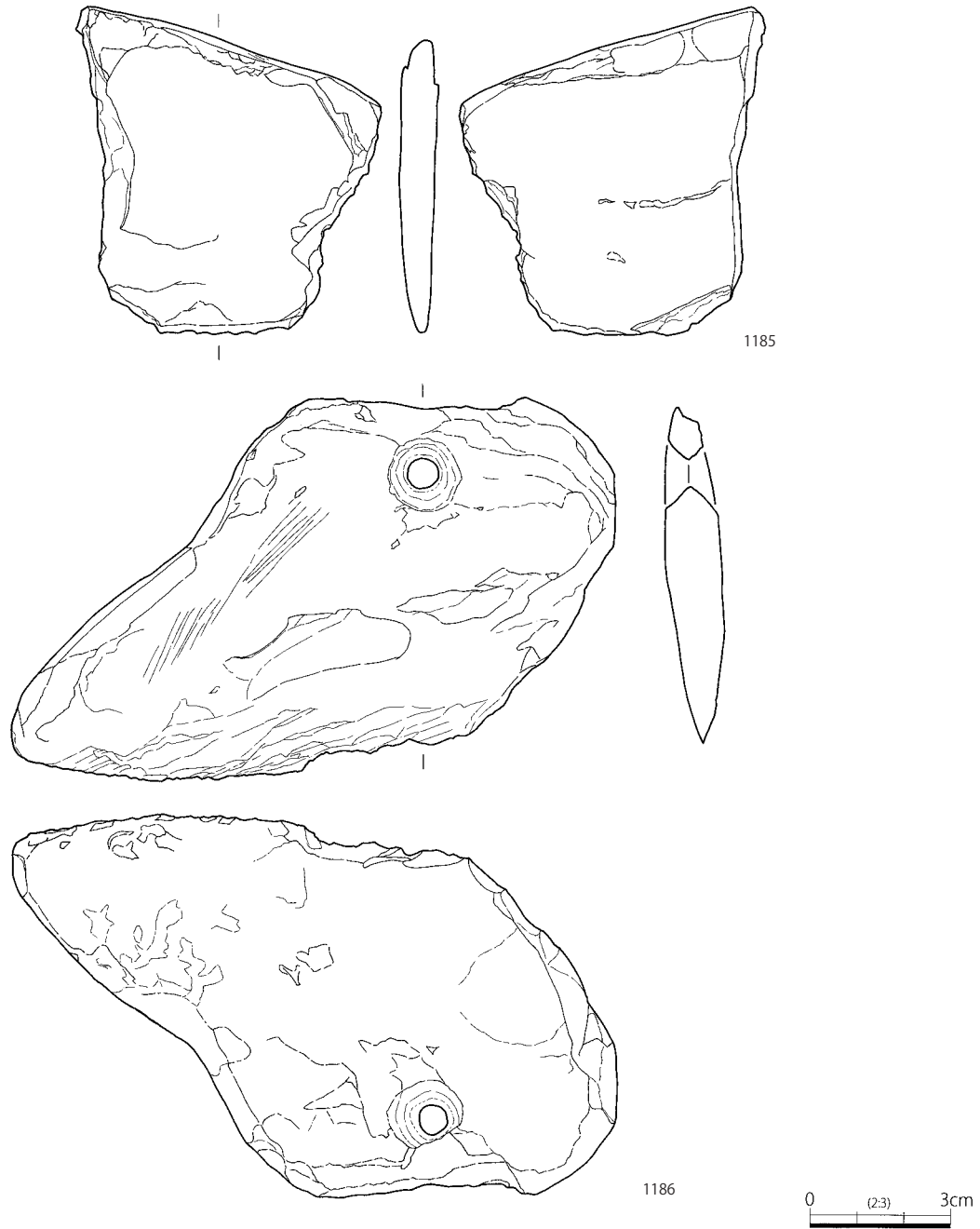


図99 石器(5)(磨製石器2)

点が出土している(図98～100－1178～1191)。**1178**は216溝(弥生時代中期後葉～後期中葉頃)、**1179**は64溝中央部(弥生時代後期後葉～庄内式頃)、**1180・1184**は183粘土採掘坑(近代)、**1181**は65溝西部上層(古墳時代)、**1182**は128流路南東部(古墳時代前期前半)、**1183**は図6 P 9の1層、**1185**は104溝(弥生時代後期中～後葉)、**1186**は128流路南部、**1187**は64溝中央部、**1188**は141土坑(弥生時代中期後葉頃)、**1189**は128流路西部下層、**1190**は128流路南西部下層上部(風化礫層)、**1191**は128流路南西部下層下部からの、それぞれ出土である。

石庖丁(図98・99－1178～1185)

石庖丁は大きく外湾型**1178・1179**、内湾型**1181・1182**、直線型**1180・1183・1185**の3形態が見られた。



図100 石器(6)(磨製石器3)

1178は、多くの部分で厚さ0.5 cmを測り、最大厚0.8 cmを有する。表面は平滑に仕上げられており、製作時における研磨がほとんど見られない。裏面も平滑に仕上げられているが、穿孔付近では礫面を残している。背部は丸く、刃部は片刃に仕上げている。完成品であったと見られ、欠損は使用時におけるものである。**1179**の刃部には使用痕と考えられる擦り減りが認められた。穿孔部分は認められないが、完成品が欠損したものと推定される。

1181は、最大幅0.8 cmを測る。素材である片岩の変成度が弱く表面が粗いため、調整痕などは認められなかった。背面には潰しが行われ、明瞭な面を持つ。片刃である刃部には中央で窪む部分が認められた。使用時における擦り減りと考えられる。**1182**も、背部は潰しが行われ面を持ち、片刃に仕上げる。表面の穿孔間に若干の窪みが認められることから、紐ズレ痕である可能性を指摘しておきたい。

1180は、最大厚は0.7 cmを有する完成品である。背面は丸く、刃部は片刃に仕上げられる。裏面には剥離痕が認められ2次利用か使用時における剥離が考えられる。**1183**は、最大厚0.7 cmで、表裏面

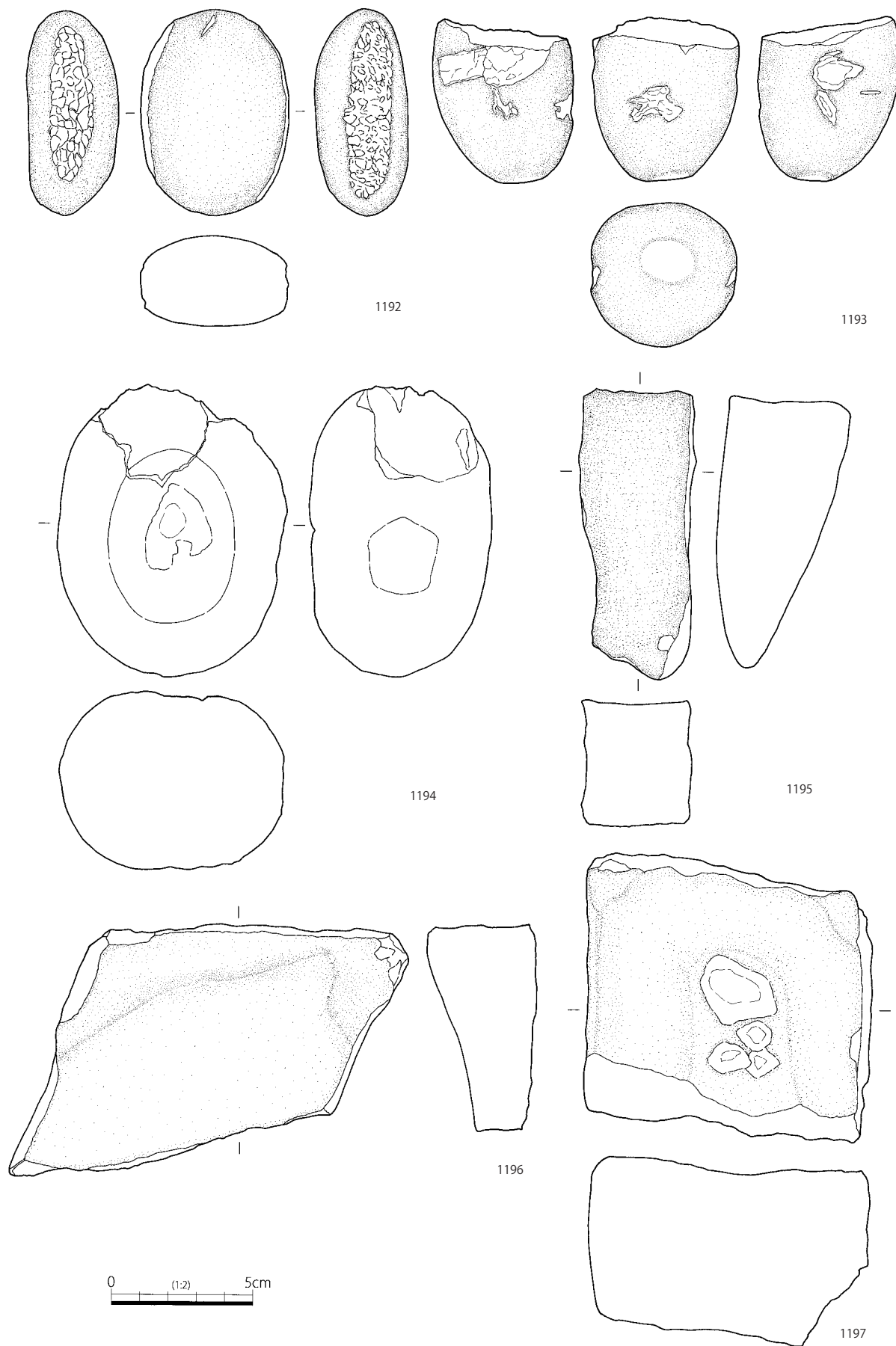


図101 石器(7)(礫石器1)

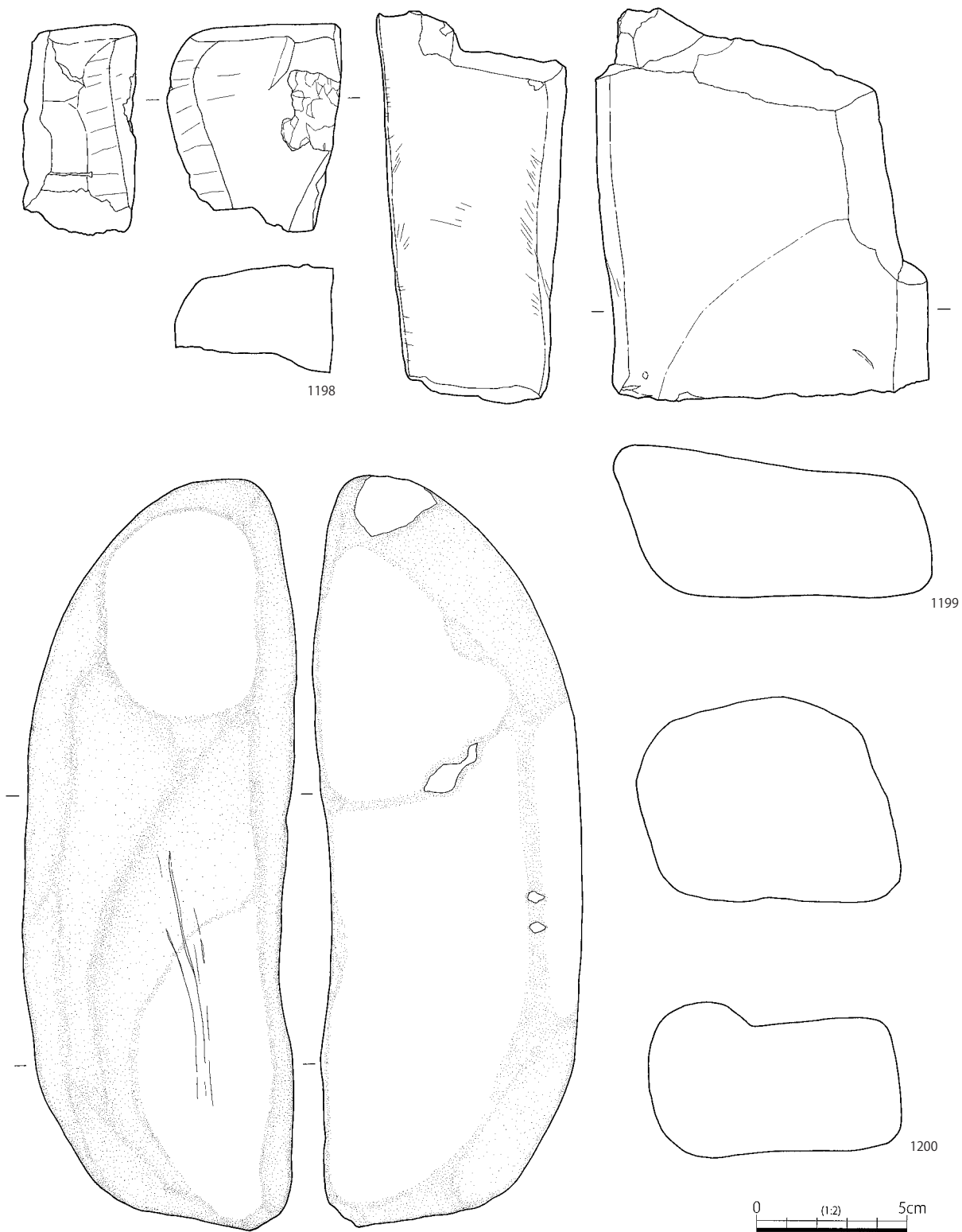


図 102 石器 (8) (礫石器 2)

は丁寧に研磨されており、背面は丸く片刃に仕上げている。**1185**は、最大厚 0.8 cm を測る。背面は丸く仕上げられているが、刃部は明確に形成されていない。穿孔部分が欠損しているため完成品とは確定しがたく未製品の可能性もある。**1184**は、穿孔が大きいことから、比較的大型であったと推測される。

大型石庖丁（図 99 - 1186）

大型石庖丁 **1186** は、最大幅 1.2 cm を測る。背面は、端部に向かう一部で面を持つ箇所が認められるが、ほとんどが丸く仕上げられている。表面も研磨が認められるが明瞭な刃部を形成せず、体部から直線的に薄くなることにより両刃が作り出されている。

石鎌（図 100 - 1187）

石鎌 **1187** は、最大幅 0.7 cm を測り、両端は使用時における折損が認められる。研磨痕から、外形を作り出すにあたり中央部において研磨の角度を変え、同時に刃部を形成したものと思われる。その結果、中央部分にはにぶい稜の鑄が作り出され、断面は菱形を呈する。

石斧（図 100 - 1188 ~ 1191）

石斧は、柱状片刃石斧 **1188・1189・1190**、扁平片刃石斧 **1191** が見られた。

1188 は、全面が研磨によって仕上げられているが、裏面において素材の関係から礫面を残す。裏面においては基端面に至る部分において角度を変えて研磨して面をもつ。刃部は折損している。**1189** は、長軸に沿って真っ二つに割れている。前主面の刃部には細かな研磨が認められる。主面から側面にかけて緩やかな窪みが形成されている。**1190** は、全面が非常に平滑に研磨されており、研磨痕は認められなかった。使用による磨滅のためか、鋭角な刃部はなく平滑な面を持つ。基端面に近い前主面では、紐をかけるために角が落とされる。

1191 は、刃部と主面を欠損している。基端面、側面、主面のいずれも丁寧に仕上げられており、明瞭な研磨痕は側面部分のみで認められた。

いずれの磨製石器も弥生時代の所産であろう。

（3）礫石器

9点を図化した（図 101・102 - 1192 ~ 1200）。**1192** は 128 流路南西部下層下部（古墳時代前期前半）、**1193** は 210 流路北西部（古墳時代前期）、**1194** は図 5 P 2 の 1 層、**1195** は 128 流路東部、**1196** は 12 竪穴住居（弥生時代後期前葉）、**1197** は 64 溝中央部（弥生時代後期後葉～庄内式頃）、**1198** は 128 流路東部、**1199** は 65 溝南東部上層粘土層（古墳時代）、**1200** は 127 竪穴状遺構（弥生時代中期後葉～後期中葉）からの、それぞれ出土である。

砂岩製石錘 **1192** は、両側面に無数の敲打がなされ面が形成される。砂岩製磨石 **1193** は、端部が平滑になっており磨石として使用している。また、3か所で敲打痕が認められ、平坦な面を利用して敲石としても使用している。

1194 は、長さ 10.3 cm、幅 8.1 cm、厚さ 6.3 cm を測る礫岩である。平坦な面において敲打痕と思われる浅い凹みを持つことから、凹石や台石の可能性はある。**1197** は、幅 10 cm、最大幅 5.8 cm の砂岩である。端部は欠損しているが中央に敲打痕による浅い凹みが認められ、凹石か台石の可能性はある。

1195 は、中央に向かって緩やかな曲面を持つ砂岩である。この曲面が平滑になっていることから、石皿または砥石の可能性はある。**1196** も同様で、中央部分に向かって緩やかな曲面を持つ。石皿か砥石の可能性はある。

1198 は、側面から上面にかけては線状痕が観察され、上面中央部では敲打痕が見られる。付近では産出しない安山岩で、砥石の可能性はある。**1199** は、側面において研磨が認められ、上面では浅い凹みを持つ部分がある。これも安山岩で砥石や石皿としての機能が考えられる。**1200** は、1か所に大きな凹みを持ち、平坦な面は平滑になっている砂岩である。自然礫の可能性もあるが、凹みの部分で線状

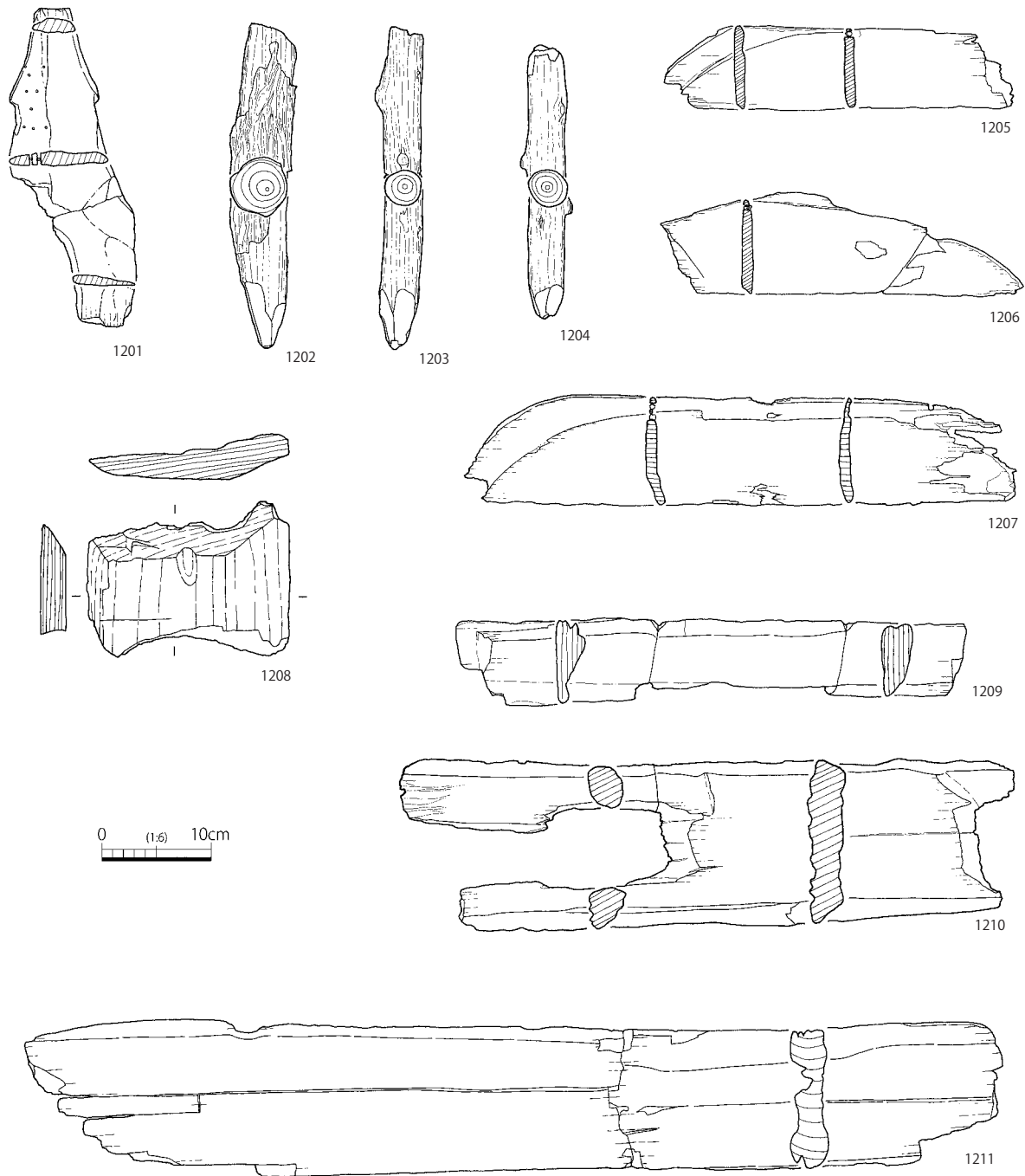


図 103 木器

痕があり平坦な面が平滑になっていることから、砥石または石皿として使用していたと考える。

第5項 木器

11点を図化した(図103-1201~1211)。**1201**は128流路東部(古墳時代前期・布留式)、**1202~1204**は65溝東部下層(古墳時代中~後期・TK208~MT15型式頃)、**1205~1207**は65溝南東部、**1208**は210流路中央部下層下部(古墳時代前期・布留式)、**1209**は120溝南東部(庄内~布留式)、**1210・1211**は65溝南東部上層からの、それぞれ出土である。

1201は曲柄又鍬である。笠下部のくびれから外半しながら幅を広げ、刃部の途中で屈曲し、刃部が直線的に伸びていく。樹種は、アカガシ亜属である。

1202～1204は護岸施設用の杭で、先端が尖るように削られる。樹種は、いずれもコナラ亜属である。

1205～1207は曲物容器の底板で、大型1207と小型1205・1206がある。大型品は底板と側板の結合において並列した2つの孔が穿たれるが、小型品に関しては上端の欠損により不明である。いずれも側板をはめ込む溝は、底板の側面から斜め下に切り込み垂直に立ちあがる形状である。周縁の形状は楕円を呈すが、1205・1207においてはL字に加工する部分がある。樹種は、いずれもヒノキである。

1208は4つの面を持ち、2側面以外はすべて欠損している。形状から、長方形平底の槽または盤と考えられる。樹種は、アカガシ亜属である。

1209は長さ47cm、幅7cm、厚さ3cmを測る棒状品である。断面形状は三角形を呈する。明確な加工痕が認められないが、平坦な面を持つことから用途不明ではあるが製品と考えられる。樹種は、アカガシ亜属である。

1210・1211は部材。1210は、長さ10cm、幅7.2cmの孔が2つ開けられており、孔の距離は29.4cmになる。両端が欠損しており全形については不明であるが、大きさから建築部材の可能性はある。樹種は、コナラ亜属である。同一地点で出土した板材1211は、一面が焼け焦げ、両端が欠損している。樹種は、アカガシ亜属である。

第6項 その他の遺物

(1) 暗渠

1212は184畦畔に埋設されていた185暗渠に使用されていた土管の一つである(図104)。断面形はやや楕円形であり、外径長径15.0cm・短径14.5cm、内径長径12.4cm・短径11.7cm、接合部の外径長径21.0cm・短径20.5cm、内径17.5cmである。長さは63.5cmで、重さは約8kg。柿田富造氏の分類(柿田1992)ではF5形にあたる。ソケット部内面には、櫛状工具により5条の沈線状の櫛描が見られる。ただし、一部で上側へはみ出した部分もあり、この部分では4条である。また、ソケット部内面下端、屈曲部付近にも、これと別に1条の沈線が半周弱ほど施されている。ソケット部の口縁端部はやや外傾する面を持ち、上下逆側、円筒部の口縁部は平坦な面である。円筒部とソケット部との間に接合痕が見られる。全面に黒色の釉が施され、筒状部分は内外面とも調整不明である。ただし、内面の受け口状部分以下接合部下までには、ヨコナデが施されていることが確認できる。円筒部には明瞭な接合痕は確認できないことから機械成形と考えられ、これにソケット部を後に接合したのだろう。

同じF5形の類例として、ソケット部内面の櫛描の有無、規格の違いなどがあるが、禁野本町遺跡例がある(駒井編2006、86頁)。これは明治以降とされる。その他、中田遺跡第48次調査でも土管に

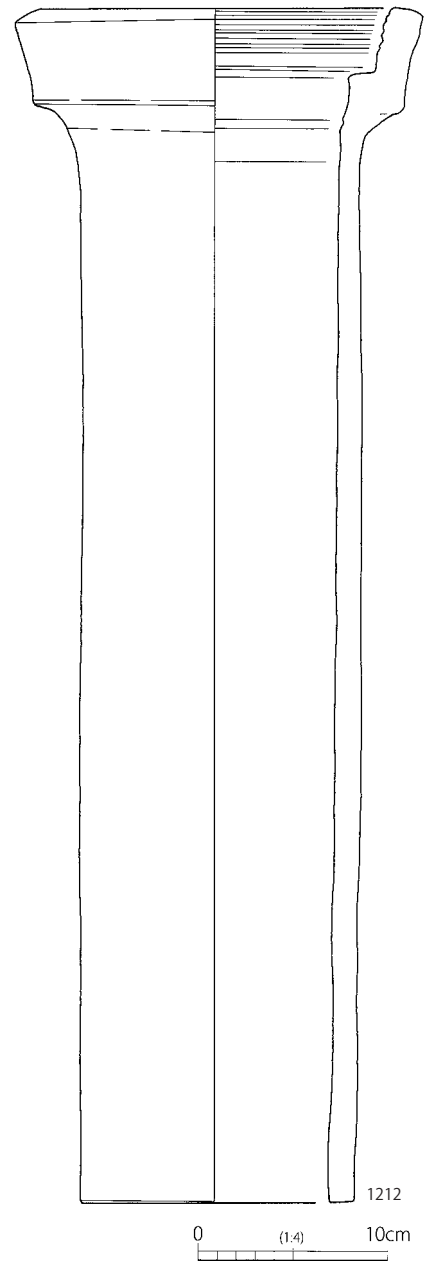


図104 土管

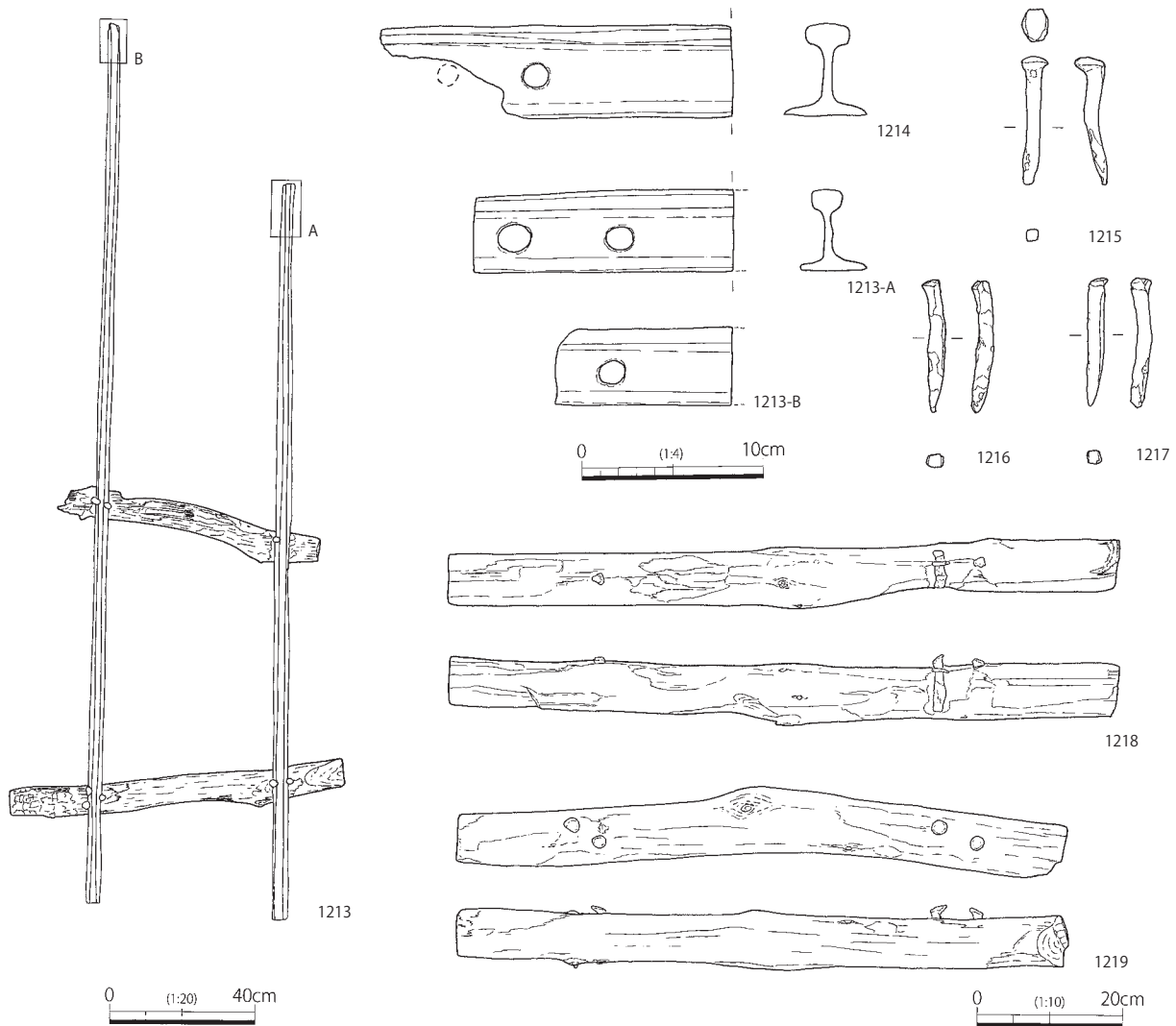


図 105 粘土採掘坑関連遺物（1）

よる用水施設の報告があり（滔 2002）、土管の形状不明だが、池島・福万寺遺跡では江戸末～大正時代頃と考えられる第1面坪境では、土管による67暗渠が検出されている（廣瀬編 2007、30頁）。

土管の機械成形には、ピストン式、スクリュー式、ローラー式があるようだが（柿田 1996）、それぞれがどのような痕跡を製品に残すかが不明であり、本例の成形様式は不明である。なお、柿田氏によれば、ソケット部内面などに櫛目をつける行為は、明治20（1887）年前後から始まったとされる。また、本例の釉薬はマンガン釉と考えられるが、この使用は明治34（1901）年頃とされている。さらに、本例は円筒部とソケット部が別つくりだが、ソケット付土管が一発で成形できるロール式土管機の普及は大正初期以降のようである（柿田 1994 a）。また、常滑で本格的に食塩釉が使用されるのが、大正11（1922）年以降とされる（柿田 1994 b）。以上から、明治末～大正前半頃に生産されたものと思われる。

（2）粘土採掘坑関連遺物

1. 軌道関連遺物（図 105 - 1213 ~ 1219）

1213 ~ 1219 は、1217 を除き、粘土採掘坑に関係する軌道関連遺物である。

1213 は 148 粘土採掘坑底部から出土したレール 1、1214 は 183 粘土採掘坑から出土したレール 2 である。1215・1216 は側溝出土だが 183 粘土採掘坑に伴うと考えられる。1217 は 226 畦畔南西部東側の側溝より出土したもので、粘土採掘坑には伴わないが、付近に存在した可能性も考えられる。

1218・1219 は 183 粘土採掘坑からの出土である。

軌道関連遺物は、頭部が楕円形を呈する亀甲形犬釘 3 本 **1215・1216・1217**、レール **1214**、枕木付きレール **1213** がある。

犬釘のうち、**1217** は頭部・先端を欠損するが、ほぼ完形品の **1215・1216** によれば、全長 6.9～7.3 cm、頭部長径 1.8 cm・同短径 1.4 cm。

148 粘土採掘坑出土の枕木付きレール **1213** は、調査区端で切断したため全長は不明であるが、一端にはレール締結用の孔が残る。長い方のレールの先端には孔が 1 箇所あり、端部がやや破損したかのようである (**1213 - B**)。短い方のレールは先端の約 15 cm 程度がやや曲がり、2 箇所の締結孔がある (**1213 - A**)。遺存状態は比較的良好である。レールは、頭部最大幅 1.81 cm・底面最大幅 3.64 cm・高さ 4.4 cm を測る。日本工業規格にあてはまらないが、4 kg レールとでも言えるものである。このレールは、一部樹皮の残り油漬けされた径 7～8 cm のアカマツ製の枕木 (丸太) に、内外各 1 箇所ずつ犬釘で固定する。枕木の長さは、92 cm と 74 cm で、軌間は 50.8 cm。枕木間の間隔は芯々間の距離で 66 cm を測る。**1214** のレール 2 は、60 粘土採掘坑肩部から出土したものの一部である。頭部最大幅 2.4 cm、底面最大幅 4.55 cm、高さ 5.1 cm。6 kg レール。

1218・1219 は枕木。いずれも、1213 の枕木同様、樹皮が残り油漬けされたアカマツ製で、明瞭な加工は見られない。**1218** は径 5.5～8.5 cm で、長さ 92 cm。**1219** は径 6.5～9.0 cm で、長さ 84 cm。いずれも犬釘が残り、軌間は約 50 cm。

2. 粘土採掘坑に混入した遺物 (図 106 - 1220～1243)

1 粘土採掘坑 (図 106 - 1220～1222)

1220 は須恵器坏蓋。外面天井部は回転ケズリ。方向は十分に観察できない。以下と内面は回転ナデ。TK 23 型式。**1221** は須恵器坏身。底部は回転ケズリ。方向は十分に観察できない。以上と内面は回転ナデ。蓋受け部には、焼成時に重ね焼きをした蓋の一部が付着する。TK 23 型式。**1222** は蛸壺。内外面とも調整は不明瞭だが、ナデだろうか。弥生時代後期後葉～庄内式。

148 粘土採掘坑 (図 106 - 1223～1227・1235～1240)

1223～1226 は弥生土器。**1223** は高坏。内外面とも調整不明。口縁端部はやや拡張し、若干内傾気味に面を持つ。外面残存部下部の、屈曲部付近には沈線状の凹線が見られる。弥生時代中期後葉。**1224** は広口壺 (広口壺 D)。内外面とも調整不明。口縁端部は上下に拡張し、外面には 3 条の凹線が施される。弥生時代後期中～後葉。**1225** は広口壺。内外面とも調整不明。口縁端部は下方に拡張し、外面上端には弱く沈線状の窪みがあるが、意図的なものではないように思える。なお、付加口縁の内側部分には粘土が付着している。当該部分には特にナデなどの調整は見られず、やや荒れ気味である。生駒山西麓産胎土。弥生時代中期後葉頃か。**1226** は高坏。内外面とも調整不明。脚部端部は弱く拡張し、外面に面を持つ。摩滅のため、端部はやや丸味を帯びるが、比較的シャープなつくりである。残存部分では脚部の穿孔は見られない。弥生時代中期後葉。**1227** は蛸壺 (蛸壺 C?)。内外面とも調整不明瞭だが、ナデか。底部は残存しないが、丸底と思われる。細身であり、庄内式か。**1235** は須恵器坏身。内面～外面は回転ナデ、底部外面は時計回りの回転削り。TK 23 型式。**1236** は高坏。水平口縁を持ち端部が垂下するタイプ。外面は剥離のため調整不明だが、垂下した端部には、上下端付近に凹線がそれぞれ見られる。弥生時代中期後葉。**1237** は壺。口縁端部のみの小片で、外面には 9 条の沈線を施した後、縦方向に 4 つの竹管文を施した円形浮文を付す。残存部分では 1 箇所に見られるのみである。これ以外

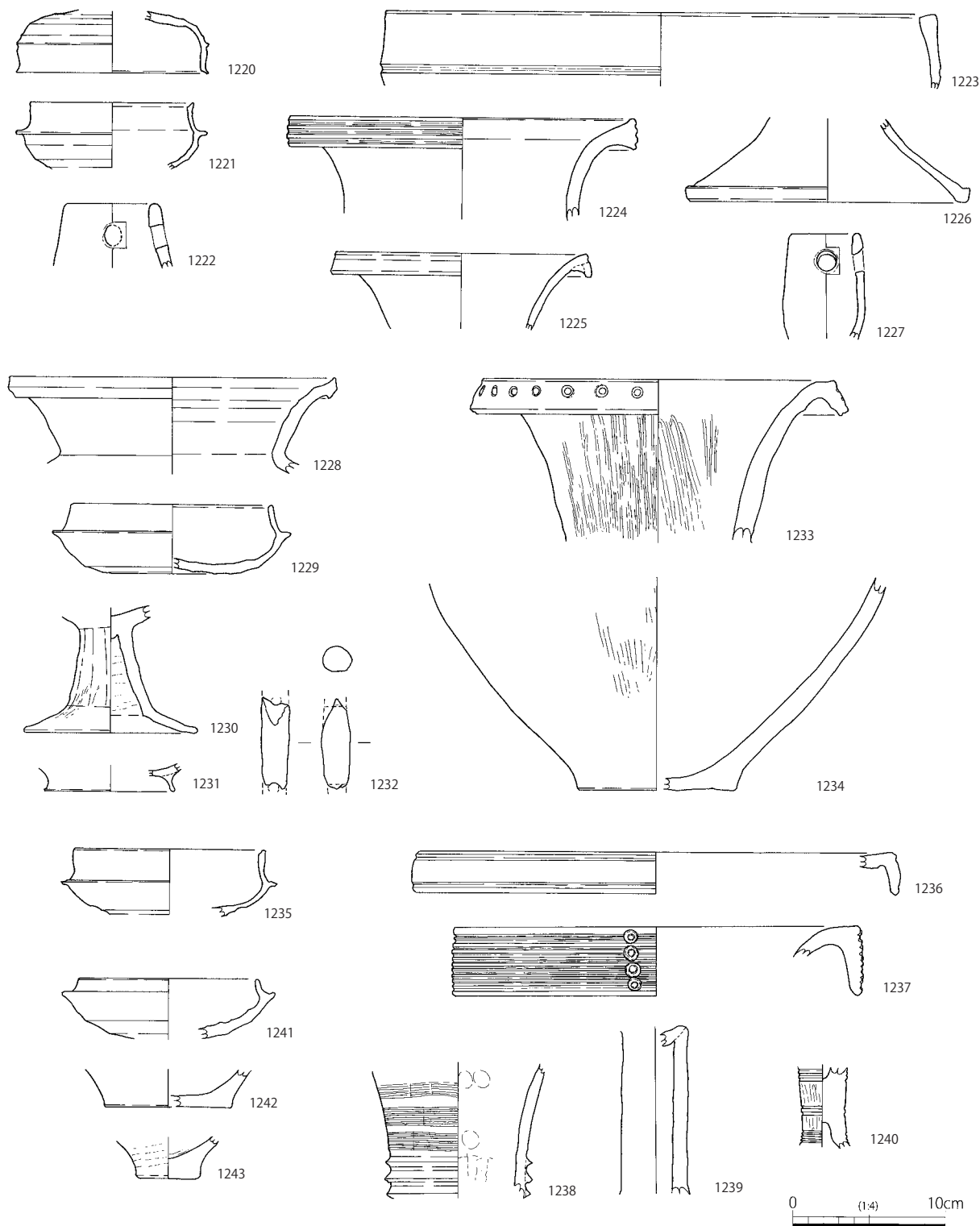


図 106 粘土採掘坑関連遺物 (2)

の調整は不明である。弥生時代中期後葉か。**1238**は壺。外面は調整不明だが、その後9条の櫛描直線文を残存範囲内で3段施し、その下部に断面三角形の貼付凸帯を付し、摂津系だろう。内面には、上部に指頭圧痕がわずかに見られ、ナデと思われるが、下部には丁寧に施されない。弥生時代中期中葉か。**1239**は高坏。外面は調整不明だが、タテミガキが施されていたと考えられる。内面はナデ。脚柱部みの破片だが、上端部には坏部底部に施された円板充填の痕跡が比較的明瞭に見られる。筒状の脚柱部であり、弥生時代後期前葉。**1240**は高坏か。外面は縦方向のミガキのち、3段の沈線(3条以上・2条・

4条以上)を施す。内面はナデと思われる。他地域系とも考えられる。時期も不明確だが、弥生時代後期後葉頃だろうか。

183 粘土採掘坑 (図 106 - 1228 ~ 1234・1241 ~ 1243)

1228 は須恵器壺。頸部は内外面とも回転ナデ。体部はわずかに残存するのみだが、ナデと思われる。頸部外面の屈曲部付近には、自然釉が見られる。なお、口縁部内面上位は、やや赤味を帯びる色調(赤灰5R6/1)である。TK 208 ~ 47 型式頃か。**1229** は須恵器坏身。外面は回転ナデで、底部には回転ケズリが反時計回りに施される。内面は回転ナデで、底部付近はナデ。受け部端部、口縁端部とも丸く仕上げられる。TK 10 型式。**1230** は高坏。脚端部は内外面ともヨコナデと思われる。脚柱部内面はケズリ。脚柱部外面は縦方向のミガキが施されているようだが、はっきりとしない。わずかに残存する坏部内面は、ナデだろうか。脚柱部から裾部への屈曲は比較的シャープであり、特に内面は脚柱部にケズリが施されることもあり、明瞭に屈曲する。布留1~2式か。**1231** は黒色土器A類椀。細く高い逆三角形を呈した高台のある底部片で、10世紀代。**1232** は土錘。ナデ調整だろう。上下端とも破損しており、穿孔はそれぞれ半分ずつ程しか残存しない。時期不明。**1233** は広口壺。口縁部は内外面ともヨコナデで、端部外面には竹管文が芯々間2.2~2.5cmピッチで施される。体部外面はタテミガキで、口縁部屈曲部やや下まで比較的密に施される。内面もタテミガキだが、口縁端部付近は剥離のため調整不明である。外面に比べてやや密度が粗い。やや外反気味に伸びた口縁部は、端部直前で比較的明瞭に屈曲する。口縁端部は垂下し、上方にやや弱くつままれる。垂下口縁下端部に明瞭な面を持つ。弥生時代後期前~中葉か。**1234** は壺。外面は大部分が剥離のため調整不明だが、残存部分上位に見られる黒斑部分にはタテミガキが残存する。内面は調整不明。弥生時代中期か。**1241** は須恵器坏身。外面は回転ナデで、底部には回転削りが反時計回りに施される。内面は回転ナデで、底部付近はナデ。受け部端部、口縁端部とも丸く仕上げられる。TK 10 型式。**1242** は甕か。内外面とも調整は不明。生駒山西麓産胎土と思われる。弥生時代中期だろう。**1243** は甕。内外面とも調整が良好に残存しないが、外面は右上がりのタタキ。内面は底部にわずかながら板状工具痕が見られ、ハケと思われる。底部は平底。弥生時代後期。

【参考文献】

- 柿田富造 1992 『土管』使用の変遷—古代から明治まで— 『常滑市民俗資料館研究紀要V』常滑市教育委員会
 柿田富造 1994 a 『土管』製作技法の変遷—近代常滑を中心として— 『常滑市民俗資料館研究紀要VI』常滑市教育委員会
 柿田富造 1994 b 「わが国の土管の歩み」 『土管の歴史展—飛鳥から現代まで—』常滑市民俗資料館
 柿田富造 1996 「近代における内外土管成形機の歴史」 『産業遺産研究』第3号 中部産業遺産研究会
 岸和田市史編さん委員会編 1979 『岸和田市史』第1巻 自然・考古編 岸和田市
 京嶋 覚 1992 「古墳時代後半期における土師器の機種構成」 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ 財団法人大阪市文化財協会
 駒井正明編 2006 『禁野本町遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第140集 財団法人大阪府文化財センター
 田中勝弘 1986 「銅鏝」 『弥生文化の研究』9 弥生人の世界 雄山閣
 玉谷 哲 1996 「第二章 第三節 岸和田地方の条里」 『岸和田市史』第2巻 古代・中世編 岸和田市
 次山 淳 1995 「波状文と列点文」 『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集
 次山 淳 1997 「初期布留式土器群の西方展開—中四国地方の事例から—」 『古代』第103号 早稲田大学考古学会

都出比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第 20 卷第 4 号 考古学研究会

寺沢 薫 1980 『六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書第 34 集 奈良県立橿原考古学研究所

永野 仁・岡本智子編 2009 『倭人が見た籠』大阪府立弥生文化博物館図録 40 大阪府立弥生文化博物館

奈良国立文化財研究所編 1993 『木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所史料第 36 冊 奈良国立文化財研究所

廣瀬時習編 2007 『池島・福万寺遺跡 3』(財)大阪府文化財センター調査報告書第 158 集 財団法人大阪府文化財センター

道 斎 2002 「中田遺跡 (第 48 次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告』73 財団法人八尾市文化財調査研究会

第4章 総括

第1節 発掘調査成果

今回の調査を通して、当遺跡に関する基礎的内容を少しではあるが明らかにすることができた。そこで、ここでは今回の調査で得た内容を時代ごとに記述するとともにこれまでに行われている当遺跡の調査成果との関係について検討を加え、現段階での当遺跡の実態を把握する。また、そこから今後の調査における課題と展望を整理してまとめとしたい。

(1) 今回の調査成果 (表3)

1. 縄文時代

遺構は不明ながら、縄文時代に属する石匙など石器の出土が見られた。

2. 弥生時代中期前～中葉

この時期まで遡る遺構を検出することはできなかったが、当該時期に属する遺物が少量ながら出土している。23 落ち込みからは、摂津または播磨系と考えられる土器 (86) が出土しており、地域的な交流を探る上で重要なものとなる。また、粘土採掘坑への混入資料ながら、これとは別の摂津系と思われる土器も見られた (1238)。

3. 弥生時代中期後葉

14・90・39・222 土器棺墓、216 溝、17・139・141 土坑があり、今回の調査では最も遺構の数が多い時期であった。4 基の土器棺墓は、それぞれが密集することなく単独で埋設されている。222 土器棺墓の棺身に生駒山西麓産胎土の土器を使用していることは、出自などの被葬者の関係性を反映している可能性がある。ただし、222 土器棺墓は、後期に下る可能性がある。なお、遺物では他地域産もしくは、その影響を受けたと思われる土器が見られた。生駒山西麓産の胎土を有する、中河内からの搬入品は、この時期のものがほとんどである。今回掲載したのは 20 点ほどだが、実測していないものの中にも見られ、溝や流路への混入品も多い。このほかに、近江・山城系と考えられる土器も数点見られ (461～463・580・736)、摂津もしくは東部瀬戸内地域の影響を受けたと考えられる土器も 1 点見られた (483)。ただし、近江・山城系と考えられる土器は、後期前葉まで下る可能性もある。また、中葉のものも含め摂津系と考えられるものは、台形土器などの分布も含め両地域の近縁性が考えられ、在地の中で捉えてもよいかもしれない。また、絵画土器のうち 1 点 (1157) は 64 溝上での出土だが、埋土上層上部でこの時期の遺物が比較的まとまって出土していることも鑑みれば、この時期の遺物である可能性が考えられる。このほか、第 1 次調査では多数出土した台形土器は、今回の調査では極めて少ない (930・1124)。居住域のなかでも、限定的な地点で出土するものなのかもしれない。

4. 弥生時代後期前葉

12・115・170 竪穴住居、145 土坑、104 溝がある。12 竪穴住居は短期間の存続で、115 竪穴住居に関しても同様の様相と考えている。この他にも、53 柱穴があることから周辺の未調査部分に対となる柱穴があり、竪穴住居か掘立柱建物になる可能性が高い。170 竪穴住居はこの頃に構築されたと考えている。住居が集中した調査区北側部分では大規模な粘土採掘や近世の耕作地化にともなう削平によって失われた住居が複数あったと推測される。

表3 遺構変遷

時期 遺構	弥生時代						古墳時代							
	中期			後期			庄内式期		前期		中期		後期	
	前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
17土坑			■											
141土坑			■											
216溝			■	■	■	■								
139土坑			■											
16溝			■											
14土器棺墓			■											
90土器棺墓			■											
39土器棺墓			■											
222土器棺墓			■											
170竪穴住居			■	■	■	■								
12竪穴住居				■	■	■								
115竪穴住居				■	■	■								
145土坑					■	■								
127竪穴状遺構					■	■								
104溝						■	■							
52流路							■	■						
64溝					■	■	■	■						
120溝								■	■	■				
210流路								■	■	■				
110土坑									■	■				
18井戸									■	■				
56溝									■	■	■			
128流路									■	■	■			
65溝												■	■	■
113井戸													■	■

5. 弥生時代後期中葉

170 竪穴住居、127 竪穴状遺構、145 土坑、64 溝がある。170 竪穴住居はこの頃に廃絶し、今回の調査では竪穴住居はこの時期で途絶える。104 溝が埋没した後に長大な 64 溝が掘削されたと考えられる。遺物では、確実にこの時期かは不確定ながら、紀伊地域の影響を受けていると思われる土器が見られた(325)。

6. 弥生時代後期後葉

64 溝がある程度埋没した後、再び掘削され土器が廃棄され始める。64 溝の土器は、一定の時期幅を有しており、器種に分布的な偏りが認められない状況から、一度に廃棄されたのではなく断続的廃棄の集積結果であると判断ができる(第4章第2節)。64 溝出土土器には、比率的には多くないが、胴部に穿孔を施した土器が一定量見られた。また、他地域系の土器は少なく、生駒山西麓産と考えられる胎土を有する土器(1070)、紀伊地域の影響を受けた土器(428)、東部瀬戸内地域の影響を受けた土器(1130)、外来系の可能性のある土器(1240)が見られる程度であった。外来系ではないが、大形の土器(330)や、口縁が長い甕形の土器(217)、異形土器とした奇異な器形の土器(341)、絵画土器のうち1点(1156)も概ね後期の範疇で捉えられるものだろう。なお、672・673のような土器を在地系として捉えてよいのかは、今後の検討課題である。また、銅鏃(1158)もこの時期と考えられる。

□ 98-115

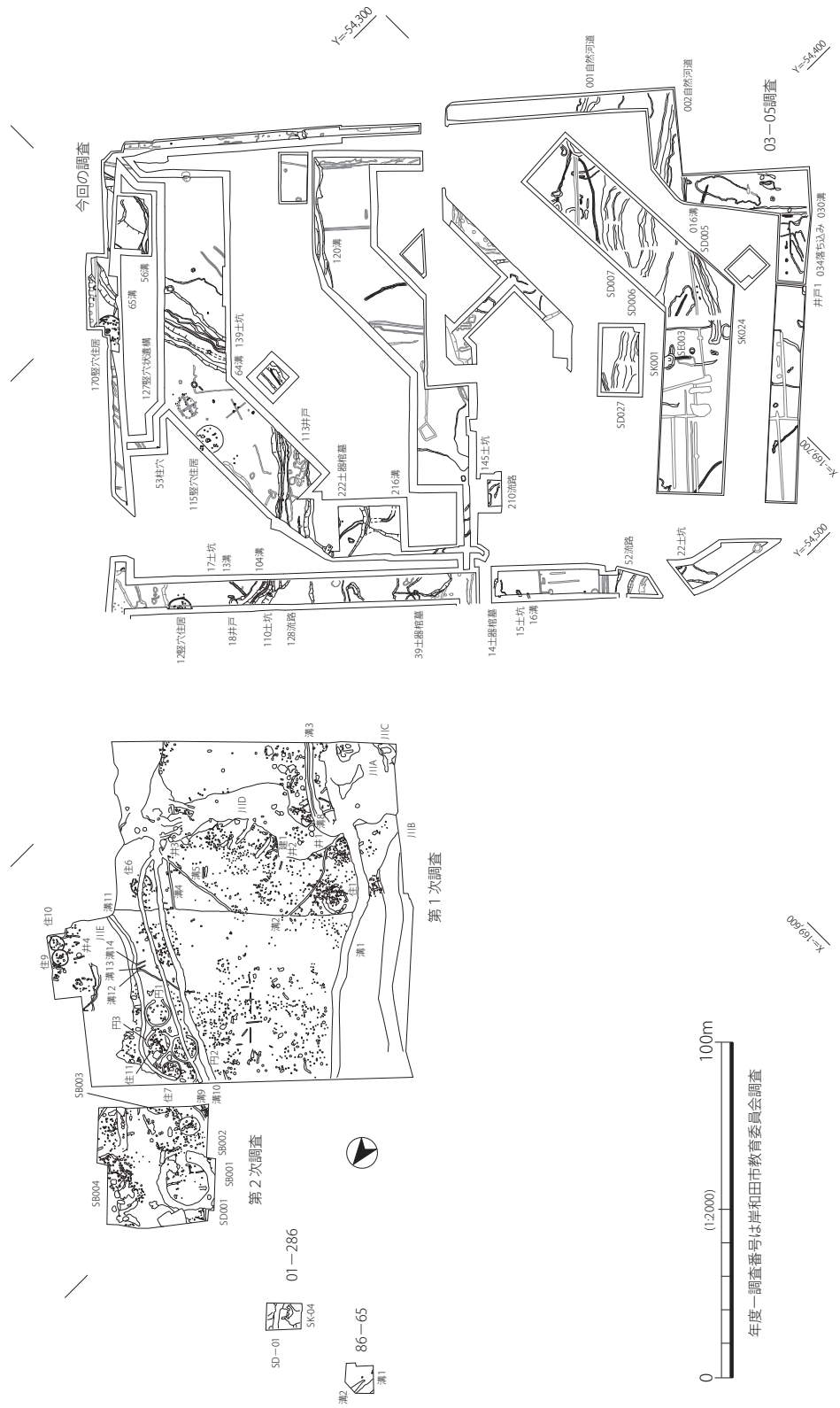


図107 既往の調査と今回の調査

7. 庄内式期

前半には64溝が埋没する。そして、南東部分において直線的な52流路が走行する。当該時期の遺構からの出土ではないが、型式から当該時期と考えられる飯蛸壺、真蛸壺、製塩土器が一定量認められた。この頃の集落における生産活動の一環として海の生業を積極的に行っていた様子がうかがえる。後半には、120溝が掘削され、210流路が南から北へと走行をはじめたと考えられる。庄内式期前～後半にかけての住居址を検出することができなかったが、120溝の掘削と土器の出土状況から付近での人の居住が想定できる。この頃、近畿地方では、地域間交流が活発になり、中河内などでは他地域産もしくはその影響を受けたと見られる土器が多く出土する。しかし、今回の調査では、明らかに外来系と考えられるものはほとんど見られず一部で庄内形甕と思われる土器(867)、阿波系の可能性が考えられる土器(825)が見られる程度であった。こうした状況から、「伝統的Ⅴ様式」圏の社会の中で集落が形成されていたと判断できる。なお、弥生時代後期後葉～庄内式の土器については、第3章第4節第1項で記したように、西村氏の下田編年を使用し、わかる限り型式も記した。しかし、この作業から、当遺跡の特性などを抽出する作業は行えておらず、今後の課題である。

8. 古墳時代前期

前期前半には128流路が走行しており、210流路と共に調査区を東から西へと大きく蛇行しながら走行する。徐々に堆積が進み前期後半には流水はほとんどなく、浅い窪地状の地形になったと考えられる。前半に18井戸を構築していることから付近に人が住んでいたことが想定されるが、その規模や居住域に関しては判明しなかった。なお、小形の甕(1069)は、この時期もしくはやや先行する時期と思われ、外来系の可能性がある。古墳時代前期でも前半の遺物が多く出土した。なお、この時期かは不明ながら、128流路出土の不明土製品(1109)についても、今後の検討課題である。

9. 古墳時代中期前半～後期

中期後半に65溝、後期前半に113井戸が掘削される。65溝は終末期には埋没して機能を停止する。65溝からは、鞆羽口(931)と砥石と考えられる石器(1199)が出土したことにより、付近で小規模な鍛冶工房の存在が想定される。井戸や溝を掘削していることから付近で集落が営まれていた可能性があるが実態については判然としない。なお、中期後半～後期の遺物以外に、韓式系土器の可能性のある把手(909)や初期須恵器段階かこれに若干後続する時期と考えられる須恵器(906・949・957)など、わずかに中期前半と思われる須恵器の出土も見られた。

10. 古代～近世

210流路の上部で耕作土と考えられる直上包含層から古代・中世の遺物が出土しており、この頃には付近一帯は耕作地化していたと考えられる。既往の調査である03-05調査において当該時期の溝や井戸を検出し、多量の瓦の出土から寺院などの施設が存在が推定されており、人為的な痕跡を示す遺構は遺跡の南側へと移動する。これまで一貫して、210流路以北で集落が経営されていたが、南東側に小栗街道が位置するようになり生活の中心が道沿いとなった結果、街道から少し離れた当遺跡周辺は耕作地へと変化したと考えられる。中世包含層を削って184・225畦畔が形成されることから、13世紀前半以降に付近一帯の水田区画が整備され、北から約45度西に振った現行条里へと景観は一変したと考えられる。

近世には、146井戸が掘られ、24流路が走行する。24流路は、現在暗渠となって南東から北西へと流れる用水路の前身となるものであろう。近世においても付近一帯は水田であったことがうかがわれる。

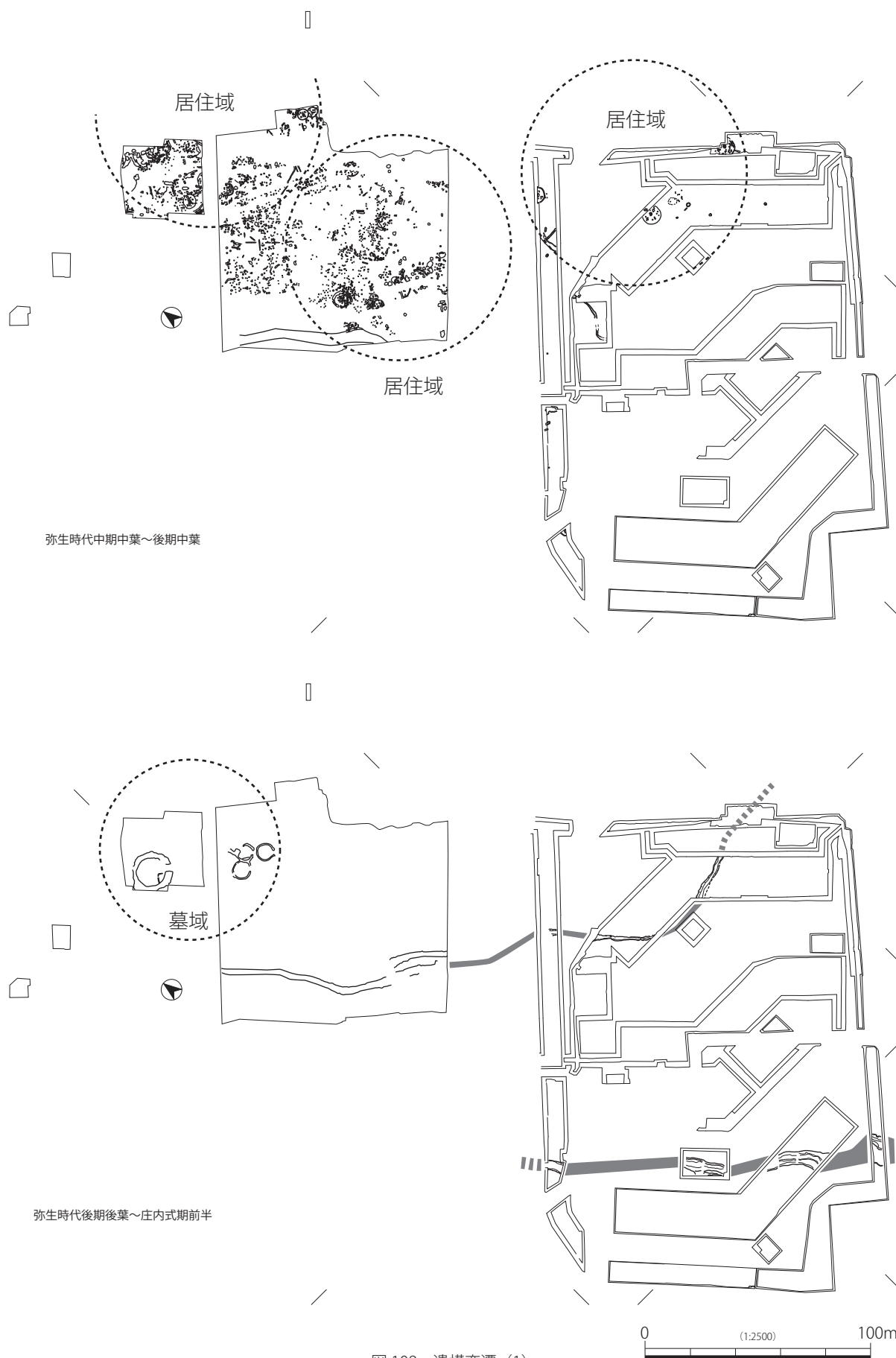
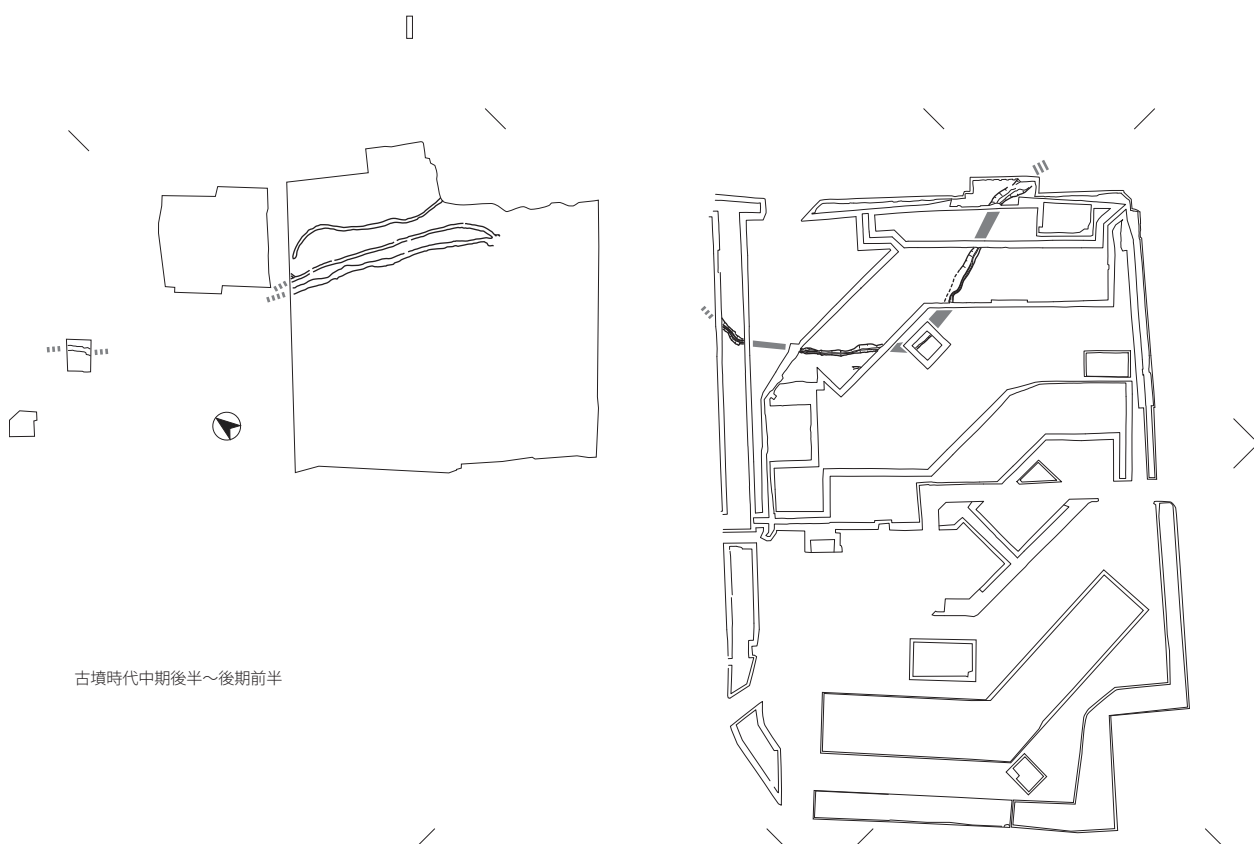
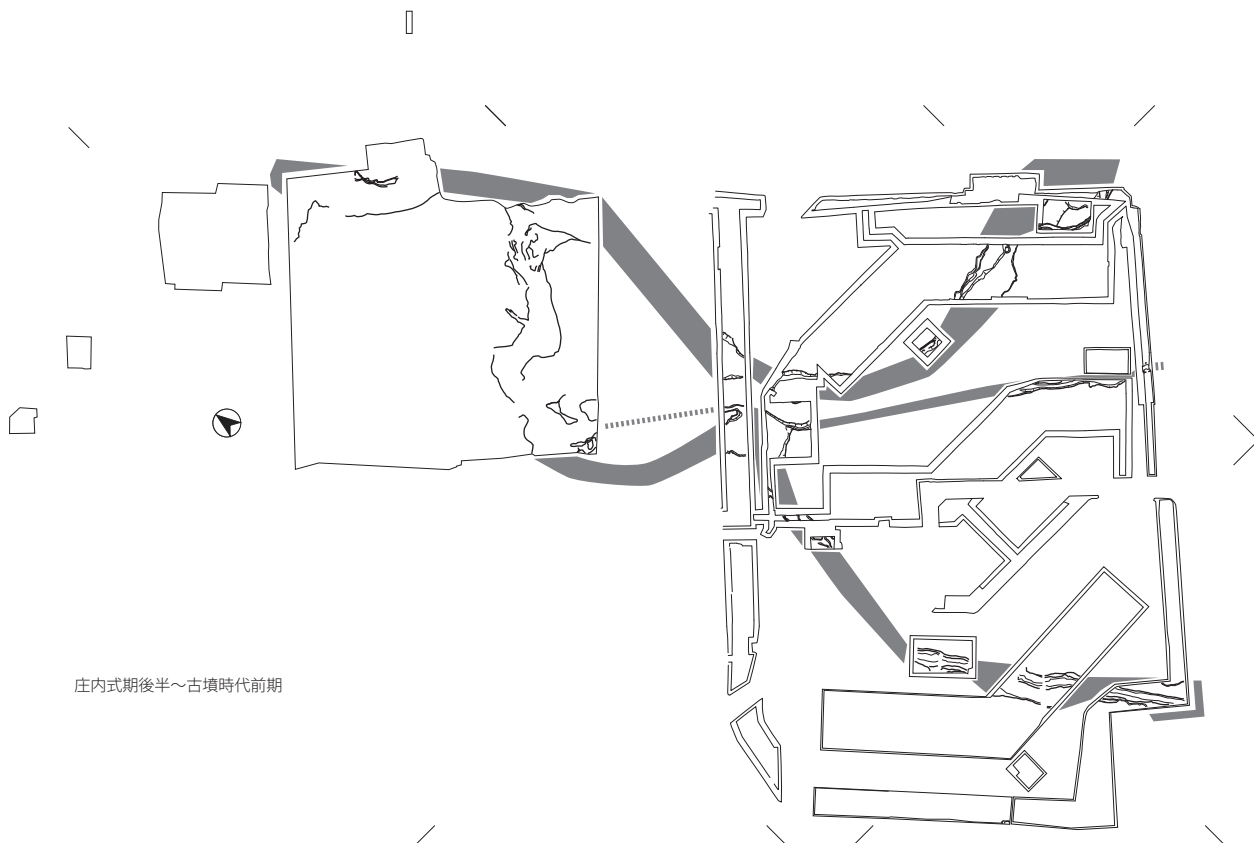


図108 遺構変遷(1)



0 (1:2500) 100m

図109 遺構変遷 (2)

11. 近代～現代

煉瓦製造に伴う大規模な粘土採掘が一帯で行われる。粘土採掘坑上部にも旧耕作土が形成されていることから、粘土採掘をした後は、一度に埋め戻しを行い再び水田として利用していたようである。185暗渠は、明治～大正に設置されたものであり、この頃も一帯は水田であったと考えられる。1966年の府営久米田第四住宅建設に伴って耕作地は破棄され、多量の盛土によって現在の地表面となり、府営久米田第四住宅が建設される。

(2) 既往の調査との関係について

第3章第1節でも触れているように、これまでに当遺跡では大規模な調査としては3度の発掘が行われている(図107)。第1次調査は1976年の八木北小学校建設に伴う発掘調査である。この調査では、竪穴住居10棟以上、掘立柱建物1棟、井戸4基、溝14条、円形周溝墓3基、流路5条を検出し、さらに多数の土坑、ピットを検出している(第1次調査で名付けられた遺構名に関して以下では「」を付す)。この調査によって、当遺跡が弥生時代の集落遺跡であることが確認され、周知のところとなった。この調査で発見された遺物は、弥生時代中期から後期の土器や石器が大半で、他に台形土器、「太鼓胴型木製品」、「二連式銅鏃」、瓢箪、堅果類など実に多種多様な遺物が出土している。この調査に関しては、報告書が刊行されていないため遺構の時期や出土遺物等の詳細な検討は不可能な状況となっている。しかし、断片的な情報からは、7m前後の住居、5m前後の住居、さらに小型の住居の大きく3種類に分かれ、その多くが中～後期であることが指摘されている(石部1979)。また、北西部に集中する円形周溝墓は古墳時代以降とされる「溝9」に切れ、後述する前方後円形周溝墓との関係から弥生時代後期～庄内式期と考えられている。他にも、調査区中央を東西に流れる「川D」からは弥生時代中～後期の遺物が出土しており、この時期の所産と捉えられている。

第2次調査は1986年の八木北小学校内のプール設営に伴う発掘調査である(中村1987)。この調査では、円形の竪穴住居3棟、方形の竪穴住居1棟、前方後円形周溝墓1基、井戸1基、土坑、ピット群を検出している(第2次調査で名付けられた遺構に関して以下では『』を付す)。この調査で検出された竪穴住居は、出土遺物がいずれも小破片であるため、詳細な時期を特定することができない。ただ、包含層や遺構混入の遺物の様相を概観すると弥生時代中期後葉～後期中葉に収まるものであり、間接的ではあるがこの時期に属する遺構である必然性が高い。前方後円形周溝墓は周溝から出土した土器が後期後葉～庄内式期のものであり、方形の住居を切って構築されていることから、庄内式期と推測される。

3度目の大規模調査は、2003～2005年にかけての府営久米田第四住宅建替に伴う調査である(03-05調査。この調査で名付けられた遺構に関して〈〉を付す)。この調査では、主に古代以降の遺構が検出されており、明確に弥生時代にまで遡る生活痕跡を示す遺構は検出されなかった(西口ほか2007)。調査区の南東から北西へと流れる〈SD006〉〈SD007〉2条の流路が弥生時代後期～庄内式期とされる。

これまでの調査によって当遺跡は弥生時代中～後期にかけての集落跡で、前方後円形や円形の周溝墓を築造する遺跡であることが判明しており、この地域の中核的な集落として位置付けられてきた(池峰2006)。しかし、最も遺構の集中する第1次調査の成果が公表されていないことにより、個々の住居址の所属時期や遺構の時期的な並存関係といった集落構造に関する基礎的な内容が不明で、当遺跡の詳細な実態を把握することができていない。このような状況下において、今回の調査成果によって、既往の調査で得られた情報を検討することが可能となった。そこで以下では、今回の調査成果と既往の調査と

表4 周辺の遺跡変遷

番号	遺跡	時期	弥生時代						庄内式期		主要遺構
			中期			後期			前半	後半	
			前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉			
1	和気遺跡・寺田地区									方形住居	
2	和気遺跡・今福地区										
3	寺田遺跡		■							円形住居	
4	観音寺山遺跡	松尾川				■				円形・方形住居	
5	今木・軽部池西遺跡					■				円形・方形住居	
6	山ノ内遺跡						■			方形住居	
7	田治米宮内遺跡							■		方形住居	
8	上フジ遺跡	牛滝川					■			大型円形・方形住居	
9	箕土路遺跡										
10	西大路遺跡						■	■		円形・方形住居	
11	大町遺跡										
12	岡山八ツ川遺跡										
13	尾生遺跡						■			多角形住居	
14	どぞく遺跡						■	■		円形・方形住居	
15	下池田遺跡	天の川		■	■	■	■	■	■	円形・方形住居・周溝墓	
16	栄の池遺跡		■				■			円形住居	
17	上松中尾遺跡	春木川				■	■			円形住居	
18	土生遺跡						■	■		方形住居	
19	畑遺跡	津田川	■							円形住居・周溝墓	

■ 遺構検出 ||||| 遺物出土

の対応関係について述べていきたい。

まず、竪穴住居に関しては今回の調査で検出された竪穴住居がいずれも弥生時代後期前～中葉に位置づけられることから、第1次調査、第2次調査で検出された円形住居に関してこの時期までに形成されていたものと推測される。後述する弥生時代後期後葉～庄内式期前半の「溝1」に切られる円形住居があることも、この推測と矛盾しない。一部で切り合い関係を有している竪穴住居があり、今回の調査で弥生時代中期中葉の土器が出土していることから、集落の形式時期は弥生時代中期中葉にまで遡ると推測される。

また、約500m東に位置する西大路遺跡では、後期後葉～庄内式期に円形から方形へと平面形態を変化させており、約1.7km南に位置する山ノ内遺跡でも後期後葉～庄内式期前半に方形住居を構築している。この地域では後期中葉までは円形住居を構築し、後期後葉以降に方形住居へと住居形態を変化させていることを読みとることができる。

以上のことから、個別の住居址に関する時期比定は現段階では不可能であるが、状況証拠から円形住居は弥生時代中期中葉～後期中葉にかけて形成されたものであり、最も盛行するのは、後期前葉と考えられる。

「溝1」は、土器の出土状況や今回の調査で検出した64溝が予想される走行方向の延長上に位置することから、64溝の延伸部分と考えられる。今回の調査と合わせると総延長が約270mにもなる溝となる。

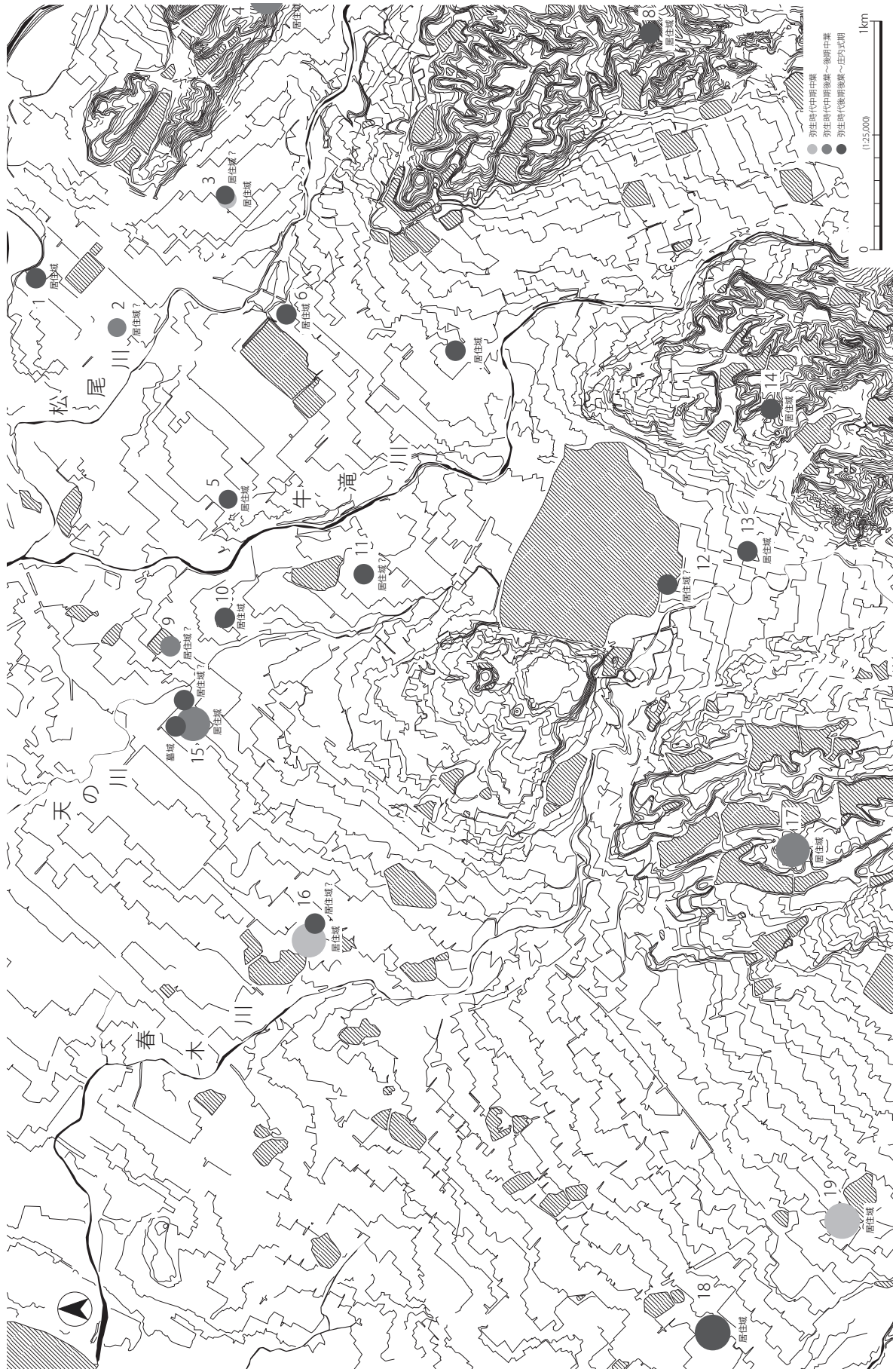


図 110 周辺の遺跡変遷

周溝墓については「円形周溝3」が「住居跡11」を切っていること、さらに前方後円形周溝墓の時期が庄内式期と考えられることから、3期の円形周溝墓はこの頃の所産と推定できよう。

また、流路については埋土の状況を比較することができていないが、想定される流路の走行方向から今回の調査で検出された流路を基準として考えた場合、「川A」は120溝、〈002自然河道〉・〈SD006〉・〈SD027〉が210流路とつながり「川D」へと走行する。「川E」は128流路、〈001自然河道〉・〈SD007〉・〈SD027〉は52流路に連なるものと考えられる。

以上の推測から得られた結果を、変遷図（図108・109）としてあらわしておく。

（3）課題と展望

かなりの推定を含むものとなったが、当遺跡の様相について一定の内容を把握することができた。そこで得られた結果から、今後の課題と展望について述べておきたい。

1. 当遺跡は弥生時代中期中葉～後期にかけての集落遺跡であると考えられてきた（石部1979・池峰2006）。この見解がある程度正しいことが今回の調査によって証明されたが、短期間の存続ではなく弥生時代中期中葉～古墳時代後期にかけてほぼ途切れることなく営みつづける集落遺跡であることが判明した。特に、弥生時代中期中葉～後期中葉にかけては、竪穴住居が多数構築されており、多くの人々が集住していたと考えられる。弥生時代中期中葉に衰退する栄の池遺跡と期を一にして当遺跡での集落が活発に形成されることは、栄の池遺跡から当遺跡へと人が移動したことを示すものと考えられ、後期前葉に集落が形成される箕土路遺跡とともに広域的な集落を形成していたと考えられる。

集落内の様相については、既往の調査によって検出された竪穴住居と今回の調査で検出した竪穴住居との間で距離が離れており、居住域が異なると想定される。今回の居住域を1つの単位として考えるならば、遺構の分布状況から径80m前後の5～9棟を単位とした居住域を想定することができる。各居住域が1つの集団をあらわしていると捉えることが可能であるならば、当遺跡は複数の集団による集住形態であったと考えられる。

2. 高地性集落と低地集落との対応関係から南東の約3kmに立地するどぞく遺跡との関係が指摘されている（駒井2001）。これまでどぞく遺跡は弥生時代中期後葉～後期の集落とされてきたが、方形住居が構築されていること、さらに公表されている遺物から後期後葉に属するものと判断できる。今回の調査によってどぞく遺跡で住居が営まれている頃、当遺跡では64溝に土器が廃棄されはじめた時期に該当し、当遺跡においても集落が経営されていると推測する。

この時期に集落が形成されはじめるのは、どぞく遺跡だけに認められるものではなく、春木川右岸地域の西大路遺跡、尾生遺跡でも集落が形成され、牛滝川右岸地域の今木・¹⁾軽部池西遺跡、山ノ内遺跡、田治米宮内遺跡、上フジ遺跡でも集落が形成される。ただ、いずれの集落も竪穴住居数棟程度の小規模な集落という特徴が認められ、その規模は当遺跡でみられた居住域の1単位程度に相当すると考えられる。

このような状況は、これまで低地集落と高地集落の間にあるとされてきた集落の解体に伴う近隣丘陵への人の移動といった単純な図式で捉えることはできないことを示している。むしろ、小規模な集落が多数出現するのは丘陵や扇状地といった低地以外の立地に居住域を求めた結果と考えられる。集落の動態から各集落が独立的に存在していたとは考えにくく、相互に関係を持って営まれていたことが想定できる。後期前葉～後葉の、当遺跡を含めた周辺の集落動態を概観すると、弥生時代後期後葉には、松尾川と春木川に囲まれた地域において各集落が相互に関係をもった地域的なまとまりが新たに認められる

のである。

松尾川以北の様相については、後期に小規模な居住域と墓域をセットで持つ集団が分散的に居住している池上曾根遺跡、後期を通じて大規模集落を形成する観音寺山遺跡、当遺跡と同じように後期後葉から庄内式期の土器が多く入る溝がある府中遺跡などが存在する。ここでは詳細な分析は行わないが、松尾川を挟んで北側の後期の集落動態は異なるようである。

3. 今回の調査で発見された銅鏃は、これまでに当遺跡で発見されている銅鏃と同様の連鑄式を示す銅鏃であった。かつて当遺跡で発見された「二連式銅鏃」は、鑄造に関する遺構や遺物が発見されていないことから、未成品での流通が想定できるとされ（高田 2002）、弥生時代における銅鏃の生産と流通のあり方を考察する上で重要な資料となっている。残念ながら今回の調査でも鑄造遺構やそれに関連する遺物を発見することはできず、その当否については結論付けることはできなかった。この点に関しては、今後の調査の進展に委ねるしかないが、銅鏃が検出された 64 溝から一片も鑄造に関する遺物を発見することができなかったことは、当遺跡での銅鏃生産の可能性は低くなり未成品での流通の可能性が高くなったと考えられる。ただ、銅鏃の未製品での流通が近畿地方で普遍的に行われていたものなのか、それとも当遺跡にだけ認められる現象であるのかといった流通体制については、さらなる検討が必要である。

4. 以上のように当遺跡の実態を把握することが可能と考えるが、なお推定が多いのは当遺跡北東部分における調査がなされていないことに大きく起因する。今回の調査も合わせたこれまでの調査区では、集落範囲の概ね南半分を明らかにしたにすぎない。庄内式期や古墳時代の集落は今回の調査地よりも北側にあると推測され、水田といった生産域も未発見である。箕土路町側まで含めた部分において調査が進めば上述した推定の正否を判断できるだけでなく、和泉地域における弥生時代中期から古墳時代の社会を考える上で重要な成果を得ることができる。

註

- 1) 今木遺跡と軽部池西遺跡は、異なる遺跡として区分されているが、隣接する調査区で住居址を検出している。ここでは、一体の居住域として捉え、「今木・軽部池西遺跡」とする。

【参考文献】

- 池峯龍彦 2006 「和泉北部地域における弥生時代集落の動向」『みずほ』第 40 号 大和弥生文化の会
- 駒井正明 2001 「高地に作られたムラ」『弥生時代の集落』学生社
- 高田健一 2002 「弥生時代の銅鏃の地域性と変革」『古代武器研究』Vol.3 古代武器研究会・滋賀県立大学考古学研究室
- 若林邦彦 2006 「丘陵上弥生集落と複合社会の拡大」『古代文化』第 58 号第 II 号 古代学協会
- 大阪府教育委員会文化財保護課 2007 『寺田遺跡現地公開資料』
- 第 2 章第 2 節において記した遺跡の報告書名は割愛した。

第2節 64 溝出土土器の計量的分析と検討

(1) はじめに

今回の調査では、64 溝より多数の遺物が出土した。遺物の時期は、第3章第4節で記したように、弥生時代後期後葉～庄内式前半を中心とすると考えられる。出土遺物の多くは大小さまざまな破片であり、調査時には完形品の比率が低いと考えていたが、復元作業の結果、完形もしくはこれに近く復元しえたものも見られた。しかし、残存状況の不良な口縁部片や、体部が残存しない底部片、高環の脚柱部のみなど、実測対象としなかった遺物も多数ある。また、時間的都合により、やむなく実測を断念した遺物もある。このため、多数の破片を含めた溝出土資料を活かすため、出土土器の計量的分析を行うこととした。また、分析の対象とした64 溝は、複数の調査区に分断されて検出されている。このため、巨視的ではあるが、地点ごとの様相差の有無についても検討できる可能性があると考えた。

(2) 目的と方法

今回の計量分析の対象は、64 溝出土土器で、概ね2 cm以下の小片については、対象とはしなかった。これは、全ての2 cm以下の小片について、器種が判断できないためである。

また、分析による一次的な目的は、以下のとおりである。

- ① 64 溝出土遺物の組成の把握
- ② 64 溝の西部、中央部、東部の地点ごとの様相比較と、地点ごとの差異の有無の判断
- ③ 64 溝の総延長の推定と、そこに含まれる土器の総数の推定
- ④ 64 溝と他遺跡の遺構との組成比較、遺構ごとの組成差の検討

次に方法であるが、この計量的分析では、宇野隆夫氏や小森俊寛氏の研究（宇野 1992、小森 2005）を参考にした。あくまでも参考であり、方法においては異なる点が多い。これは、独自性というよりも、分析者の限界による。

さて、上記の対象について、基本的な器種である、壺、甕、鉢、高環、器台、手焙り形土器、その他（蛸壺、製塩土器など）に区分し、それぞれについて、完形品の数、口縁部の数、底部・脚部の数、総破片数、総重量を計測した。明らかに中期と考えられる遺物は除外したが、必ずしも除外しきれていないと思われる。なお、前3者の「数」とは、完形品は当然1である。口縁部、底部、脚部については、それぞれの残存度から、2分の1を0.5個、3分の2を0.66個、3分の1を0.33個、4分の1を0.25個、5分の1を0.2個、6分の1を0.16個、8分の1を0.13個、12分の1を0.08個、24分の1を0.04個として、個数を推定復元し、口縁部数、底部数、脚部数を数えた。この作業を、登録番号ごとに行い、64 溝の分断された地点ごとに集計を行った。破片数は、上記のとおり対象とはしていない2 cm以下の破片を除く各器種の総破片数である。重量は、ザルトリウス社電子上皿天秤（U 4600 P+）を使用し、小数点第一位を四捨五入し、グラム（g）単位で測定した。

なお、集計は、完形の個数+口縁部数、完形の個数+底部・脚部数、完形の個数+口縁部数+底部・脚部数、各総破片数、各総重量数をまとめた。

(3) 結果

計測結果は、表5・6のとおりである。

1. 各計測値について

これらのうち、点数と重量については、参考程度に掲げた。言うまでもないが、点数は、破片の大小

表5 64 溝個別計測値一覧

完形+口縁部数

	壺	甕	鉢	高杯	器台	手焙	蛸壺	土鍾	小丸	製塩	合計
合計 (615.89)	264.50	254.64	19.91	63.18	2.20	1.20	8.01	1.00	0.25	1.00	615.89
	42.95%	41.35%	3.23%	10.26%	0.36%	0.19%	1.30%	0.16%	0.04%	0.16%	100.00%
東部 (293.63)	133.8	112.56	10.63	29.04	2	1.2	2.15	1	0.25	1	293.63
	45.57%	38.33%	3.62%	9.89%	0.68%	0.41%	0.73%	0.34%	0.09%	0.34%	100.00%
西部 (109.39)	37.88	53.46	5.33	11.11	0.2	0	1.41	0	0	0	109.39
	34.63%	48.87%	4.87%	10.16%	0.18%	0.00%	1.29%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
中央部 (212.87)	92.82	88.62	3.95	23.03	0	0	4.45	0	0	0	212.87
	43.60%	41.63%	1.86%	10.82%	0.00%	0.00%	2.09%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
標準偏差	4.76	4.40	1.23	0.39							

完形+底部数

	壺	甕	鉢	高杯	器台	手焙	蛸壺	土鍾	小丸	製塩	合計
合計 (2116.06)	588.43	787.52	170.20	562.41	2.50	1.00	2.00	1.00	0.00	1.00	2,116.06
	27.81%	37.22%	8.04%	26.58%	0.12%	0.05%	0.09%	0.05%	0.00%	0.05%	100.00%
東部 (823.15)	238	284.25	74.1	221.3	2.5	1	0	1	0	1	823.15
	28.91%	34.53%	9.00%	26.88%	0.30%	0.12%	0.00%	0.12%	0.00%	0.12%	100.00%
西部 (266.40)	34.7	145	21.8	63.9	0	0	1	0	0	0	266.40
	13.03%	54.43%	8.18%	23.99%	0.00%	0.00%	0.38%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
中央部 (1026.51)	315.73	358.24%	74.3	277.71	0	0	1	0	0	0	1,026.51
	30.76%	34.90%	7.24%	27.01%	0.00%	0.00%	0.10%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
標準偏差	6.89	8.05	0.62	1.21							

完形+口縁部数+底部数

	壺	甕	鉢	高杯	器台	手焙	蛸壺	土鍾	小丸	製塩	合計
合計 (2679.69)	827.88	1031.99	183.6	623.51	2.7	1.2	6.56	1	0.25	1	2679.69
	30.89%	38.51%	6.85%	23.27%	0.10%	0.04%	0.24%	0.04%	0.01%	0.04%	100.00%
東部 (1086.74)	356.8	391.81	81.73	248.3	2.5	1.2	2.15	1	0.25	1	1,086.74
	32.83%	36.05%	7.52%	22.85%	0.23%	0.11%	0.20%	0.09%	0.02%	0.09%	100.00%
西部 (364.44)	70.53	193.62	24.12	74.97	0.2	0	1	0	0	0	364.44
	19.35%	53.13%	6.62%	20.57%	0.05%	0.00%	0.27%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
中央部 (1228.51)	400.55	446.56	77.75	300.24	0	0	3.41	0	0	0	1,228.51
	32.60%	36.35%	6.33%	24.44%	0.00%	0.00%	0.28%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
標準偏差	5.46	6.91	0.44	1.38							

点数

	壺	甕	鉢	高杯	器台	手焙	蛸壺	土鍾	小丸	製塩	合計
合計 (54547)	19,436	32,444	372	2,243	11	12	26	1	1	1	54,547
	35.63%	59.48%	0.68%	4.11%	0.02%	0.02%	0.05%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
東部 (18166)	7,813	9,266	176	888	9	6	5	1	1	1	18,166
	43.01%	51.01%	0.97%	4.89%	0.05%	0.03%	0.03%	0.01%	0.01%	0.01%	100.00%
西部 (9099)	2,274	6,493	56	268	1	3	4	0	0	0	9,099
	24.99%	71.36%	0.62%	2.95%	0.01%	0.03%	0.04%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
中央部 (27282)	9,393	16,685	140	1087	1	3	17	0	0	0	27,282
	34.27%	61.16%	0.51%	3.98%	0.00%	0.01%	0.06%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
標準偏差	6.37	7.29	0.17	0.69							

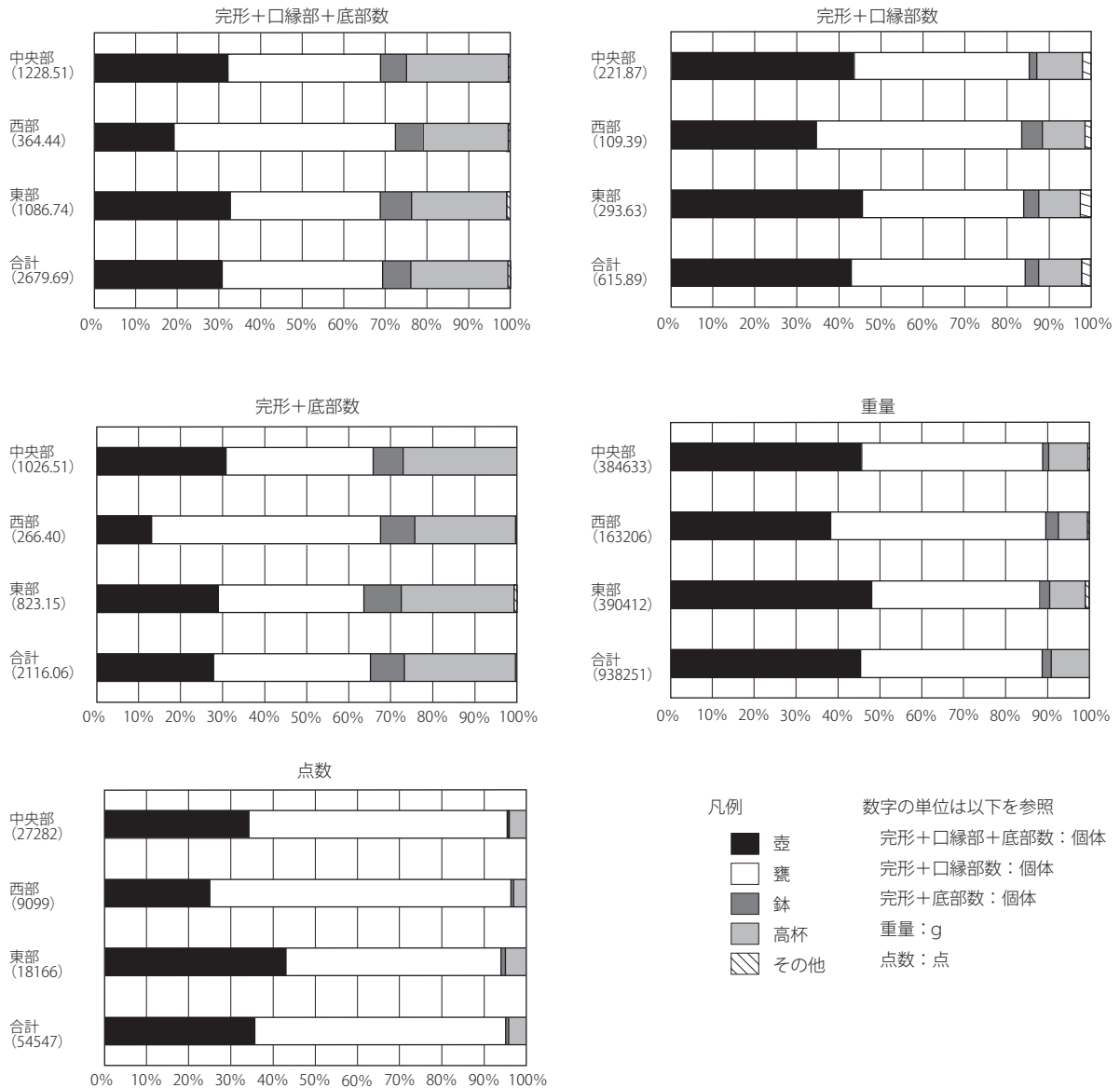
重量 (単位:g)

	壺	甕	鉢	高杯	器台	手焙	蛸壺	土鍾	小丸	製塩	合計
合計 (938251)	425,981	407,144	19,824	81,533	2,040	635	973	30	48	43	938,251
	45.40%	43.39%	2.11%	8.69%	0.22%	0.07%	0.10	0.00%	0.01%	0.00%	100.00%
東部 (390412)	187,708	156,869	9,370	33,511	1,749	531	553	30	48	43	390,412
	48.08%	40.18%	2.40%	8.58%	0.45%	0.14%	0.14%	0.01%	0.01%	0.01%	100.00%
西部 (163206)	62,423	83,892	5,053	11,517	171	56	94	0	0	0	163,206
	38.25%	51.40%	3.10%	7.06%	0.10%	0.03%	0.06%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
中央部 (384633)	175,850	166,383	5,401	36,505	120	48	326	0	0	0	384,633
	45.72%	43.26%	1.40%	9.49%	0.03%	0.01%	0.08%	0.00%	0.00%	0.00%	100.00%
標準偏差	3.63	4.10	0.60	0.87							

にかかわらず、いずれも1片であれば1としてカウントするのみである。このため、もともとの点数が多く、認識しやすく、破片になりやすい甕が多い傾向となっている。重量は、相対的に大形であり、分厚い壺が多くなる傾向がある。ちなみに、今回計測した総破片数は54,547点、総重量は938.251 kgである。

各集計値とも、西部の値（特に壺と甕の比率）が他と少々異なる傾向がある。これは、今回の計測作業を西部資料より開始したことに起因するもので、作業当初の器種の誤認が含まれる可能性を考えてい

表6 64溝個別計測値の地点ごとの傾向



る。ただし、他の地点に比べ、検出面積が狭いこともあり、実態を反映している可能性も皆無とは言い切れない。この点については、以下でも検討する。

さて、完形+口縁部数、完形+脚部・底部数、完形+口縁部+脚部・底部数だが、完形+口縁部+脚部・底部数の場合、同一口の口縁部と底部を重複してカウントしている可能性もあり、問題はあるかもしれない。しかし、重複は、当然差異はあるにせよ、壺、甕、鉢、高杯など、いずれにも起こりうることである。このため、全ての値が上乘せされることとなり、比率上の問題はあまり生じないと思われる。ただし、表5を見ても明らかなように、当然ながら、完形+口縁部+脚部・底部数が最大値を示す。このうち、壺、甕、鉢、高杯などは明瞭だが、器台以下については、完形+口縁部数・完形+脚部・底部数と、完形+口縁部+脚部・底部数とに、明瞭な違いが見出しにくい。このため、壺、甕、鉢、高杯の比率がより上昇する結果となってはいる。しかし、いずれの計測方法による数値でも、器台以下はそれぞれほぼ全てが1%未満であり、比率上の大きな問題はないと考える。なお、高杯や製塩土器の場合、口縁部が認識しにくく、脚部は認識が容易であり、脚部の値がより実態に近いと思われる。一方、手焙形

土器や蛸壺の場合、口縁部のほうが認識は比較的容易である。このように、各形式により認識における差がまずあり、実態を活かす計測値を各々採用すべきだったかもしれない。しかし、各形式においても、口縁だけや底部だけが認識しやすいのではなく、個々のものによっても認識しやすさに差異があると考え。このため、少なくとも比率については、完形+口縁部+底部数の値を、今回の作業で得られた溝64の計測値として、ひとまず採用することとする。すなわち、64溝全体で、壺30.89%、甕38.51%、鉢6.85%、高坏23.27%（以上で、99.52%）、器台0.1%、手焙形土器0.04%、蛸壺0.24%、土錘0.04%、小形丸底壺0.01%、製塩土器0.04%である（表5）。

なお、完形+口縁部+底部数の値と完形+底部数の比率は、類似する傾向を示すと考える。この感覚が妥当なのかについて、統計的に両者の比率が類似するとしてよいかを確かめるために、両者の壺・甕・鉢・高坏の復元合計値を使用してカイ2乗検定を行ったところ、カイ2乗値は0.48、自由度が3であった。カイ2乗分布表において、自由度3で5%の確率のときのカイ2乗値は7.81であり、これよりも明らかに小さい値であり、両者に差はないとしてよい。

さて、前者（完形+口縁部+底部数の値）については、上述のとおり計測における同一個体の重複の可能性が考えられ、このためここで得られた個体数を推定個体数として使用することはできない。そこで、同様な比率を占め、少なくとも同一個体の重複の可能性はない、完形+底部数で得られた個体数を、各器種を含め計測値より推定復元した個体数としておく。すなわち、64溝全体で、壺588.43個、甕787.52個、鉢170.20個、高坏562.41個、器台2.50個、手焙形土器1.00個、蛸壺2.00個、土錘1.00個、製塩土器1.00個である。なお、この場合、手焙形土器、蛸壺、土錘、製塩土器、小形丸底壺と蛸壺に、明らかに実測・掲載点数と異なる部分で、問題が生じる。

また、上記したとおり、器台以下の各形式は1%以下であり、以下でもっばらとりあげる形式は、壺、甕、鉢、高坏の主要四器種とする。

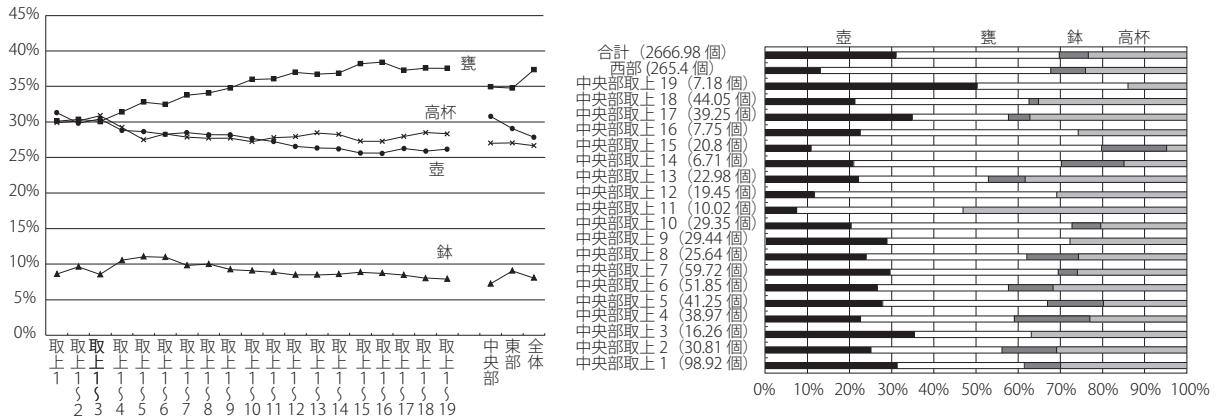
2. 地点ごとの差異について

地点ごとの様相差であるが、西部値の特異性については以上に述べたとおりである。ここに問題はあるが、各地点でどの程度のばらつきがあるのだろうか。このばらつきを調べるために、まず、地点ごとに各形式の比率について、標準偏差を算出した。これは、東部、中央部、西部の各値を使用した。結果は、表5に示したように、完形+口縁、完形+底部、完形+口縁+底部数で、壺が4.76～6.89、甕が4.40～8.05、鉢が0.44～1.23、高坏が0.39～1.38である。標準偏差は数値が大きいくほど、ばらつきが大きいとされているから、相対的に、壺と甕はばらつきが大きく、鉢と高坏のばらつきが少ないといえる。ただし、比率を使用したものであり、比率自体が小さければばらつきも当然小さくなる。このため、全体に占める割合が低い鉢と高坏の標準偏差が小さくなるのは当然ともいえる。

それでは、比率ではなく、実際の復元個体数を使用したほうが差異を把握するためには妥当であるかもしれない。では、その基準となる範囲（面積）はどの程度が妥当なのだろうか。つまり、どの程度の範囲の復元個体数が、全体を反映しているのかを知る必要がある、と考える。

今回の調査では、一部の地区で約1㎡を単位としたグリッド単位での取りあげを行っており、このそれぞれのグリッドを加算し、どの程度で安定的な数値が得られるのかを検討することとし、作製したのが図7左である。これは、中央部の一部で行ったもので、完形+底部数からの復元個体数を比率に直したものである。1～19のそれぞれの取上番号での個体数で、左端は取上1のみの組成比率、2列目が取上1+2の組成比率、という具合で19列目が1～19までの加算値の組成比率である。なお、図の

表7 64溝中央部・各取上番号積上げ値での器種組成変化傾向（左）と各取上番号の器種組成（右）



右端3者は、中央部、東部、全体それぞれの組成比率である。この3者についても、ばらつきが見られ、壺では27.91～30.79%（2.88%の範囲）、甕では34.76～37.35%（2.59%の範囲）、鉢では7.25～9.06%（1.81%の範囲）、高杯では26.67～27.03%（0.36%の範囲）である。また、約19㎡分の加算値からの割合である連続する折れ線グラフの右端と、グリッド単位で取上げた以外の出土資料をも含めた41.7㎡（中央部の面積）の復元総個体数とも差がある。大雑把には、復元総個体数の場合、壺の比率が増加し、これ以外の比率が低下する結果となっている。また、全体として示した数値も、ここでは完形+底部数からの比率であり、上記した64溝全体の数値として採用するとした完形+口縁部+底部数とも一致しない。ただし、両者が類似することは、上述のとおりである。このため、問題を多数はらんでいるのだが、図7左から、どの程度の面積で、数値の安定が見られるのかを推測しておく。ここでは、前の値に対する変化の割合を考えておく。前の値から次の値への変化の割合を「変化率」と考え、その変化率の差の大小を計算し、差が5%未満になった時を安定値とひとまず仮定すれば、壺で7㎡以上、甕で9㎡以上、鉢で10㎡以上、高杯で7㎡以上において、概ね安定値と考えられる。これから、各形式の比率が安定して見られる可能性が高くなるのは、10㎡以上の範囲で溝の中に土器が出土している場合と推定することができる。このため、小規模な調査で溝の一部が検出された場合、そこに見られる組成は、溝全体に敷衍できるものではないと推測できる。

さて、ここで集計した中央部の一部における、10㎡以上における各形式の数値の幅は、壺で25.60～27.24%（平均26.23%）、甕で36.07～38.40%（平均37.29%）、鉢で7.92～8.87%（平均8.50%）、高杯で27.27～28.51%（平均27.99%）となる。上記したように、64溝全体で、壺32.60%、甕36.35%、鉢6.33%、高杯24.44%をひとまず採用したところなので、これとは一致しない。なお、上記平均値と、64溝全体の値との差は、壺で6.37%、甕で0.94%、鉢2.17%、高杯で3.55%である。そこで、サンプル数は少ないが、東部・完形+口縁部数、東部・完形+口縁部+底部数、中央部・完形+口縁部数、中央部・完形+口縁部+底部数、中央部・取上げ1～19の計5サンプルにおける、壺・甕・鉢・高杯の各比率の信頼区間を求めた。結果は以下のとおりである。

- 確率95%で母平均を含んでいる信頼区間
 - 壺 26.82～33.70%、甕 34.38～37.37%、鉢 6.39～8.81%、高杯 23.16～28.65%
 - 確率99%で母平均を含んでいる信頼区間
 - 壺 24.55～35.96%、甕 33.39～38.36%、鉢 5.59～9.61%、高杯 21.35～30.46%
- 採用値としている64溝全体での数値は、確率99%であれば含まれており、矛盾しない。10㎡以下

のため採用しなかった西部 (5.47 m²) は、鉢以外の値が不一致である。小規模な調査で溝の一部が検出された場合、そこに見られる組成は、溝全体に敷衍できるものではないと上記したところだが、中でも壺と甕については、特にばらつきが大きいと推測できる。

さて、今回検出された溝の面積は、いずれも概数で、西部が 5.47 m²、中央部が 41.7 m²、東部が 40.18 m²である。西部値の特異性については、上記しているところだが、検出範囲の狭さも特異な数値の原因であると、ここからは推測される。すなわち、西部では壺はあまり多く捨てられず、甕が多く捨てられ、鉢は一般的で、高坏はやや少ない、ということになる。なお、上記の中央部における 1 m²ごとの取上げ単位で、どの程度組成に差があるのかは表 7 右のとおりである。ここからも、細かい地点ごとでは多数のばらつきがあることがわかる。

それでは、完形+脚部・底部数と、完形+口縁部+脚部・底部数との比率が類似するとしたのと同様に、東部の値と中央部の値との比率が類似するとしてよいのか否かについて、調べておく。まず、比率について。何れも自由度 3 で、カイ 2 乗値は完形+底部値で 0.25、完形+口縁部+脚部・底部数で 0.16 であり、上記のとおり自由度 3、確率 5% のカイ 2 乗値は 7.81 であり、いずれも差はないとしてよい。次に、復元値だが、両者の面積が異なるので、東部の値を基準として、中央部の値を東部の面積と同値の場合とし、面積の比率である 0.96 をそれぞれにかけた値を中央部計算値とし、これを東部値と比較した。結果、自由度 3 で、カイ 2 乗値は 2.26 であり、同様に差はないとしてよい。ここから、10 m²以上の面積を対象とした場合、各地点で甕と鉢については多少のばらつきがあるものの、概ねいずれも地点でも同様な組成であると推定される。

さて、今回検出された溝の面積は、上述のとおりで、計約 87.35 m²である。第 4 章第 1 節でも記したように、今回の調査以前の第 1 次調査でも、この溝の延長部分が検出されている。これらも含め、北西端を第 1 次調査の検出端、東端を今回の調査では 128 流路と重複しているため検出されなかったと推定した 15 区部分までとし、第 4 章第 1 節でも記したように、推定総延長 270 m と推定復元できる。溝の幅は各検出地点で平均約 2 m であり、以上から、溝の面積を 540 m² と推定できる。そして、今回の調査では、このうちの約 16% が検出されていることになる。上記のように、今回調査の 64 溝全体で、壺 588.43 個、甕 787.52 個、鉢 170.20 個、高坏 562.41 個、器台 2.50 個、手焙形土器 1.00 個、蜻壺 2.00 個、土錘 1.00 個、製塩土器 1.00 個と推定しており、現状で確認されている溝形状の範囲中には、概数 (小数点以下切り捨て) で壺 3677 個、甕 4922 個、鉢 1063 個、高坏 3515 個、器台 15 個、手焙形土器 6 個、蜻壺 12 個、土錘 6 個、製塩土器 6 個の土器が含まれている可能性が考えられる。ただし、器台以下については、計量時の見落としが多数あることが予想され、実測点数がこれよりも多いこともあり、問題がある数値と考える。なお、両端とも更に延長する可能性があり、溝に含まれる遺物は更に多いことが想像できる。なお、これも概数ながら現状で検出されている範囲 (87.35 m²) における推定土器数から、1 m²あたりの数量を計算すると、壺 6.74 個、甕 9.02 個、鉢 1.95 個、高坏 6.44 個である。これは、最低 10 m²以上では使用できるかもしれない。

(4) 比較と検討

以上の 64 溝組成は、他遺跡との比較においてどのような位置を占めるのだろうか。

まず、64 溝と他の和泉地域の溝出土遺物の組成を比較したのが表 8 である。まず、弥生時代後期前葉～布留式前半を対象とした。ここでわかることは、時期が下るごとに、壺の比率が低下し、甕の比率が増加すること、鉢の比率が増加し、高坏の比率が低下すること、といったところである。

上記の通り、64 溝は弥生時代後期後葉～庄内式前半に時期の中心があると考えられる。和泉地域において、同様な組成を有する資料は不明だが、次に、弥生時代後期後葉～庄内式前半の溝出土遺物の組成を比較し、どの程度のズレがあるのか、ないのかを確認しておく。まず、表の中で類似した割合を示すものとして、八尾南遺跡流路1砂礫層が挙げられる。これを同様としてよいのか、カイ2乗検定を行ったところ、自由度が3でカイ2乗値は0.81であり、両者に差はないとしてよい。時期的にも、八尾南遺跡流路1砂礫層は弥生時代後期後葉であるので、同様な時期の組成として矛盾はない。ただし、同様に類似すると判断しうる資料に、弥生時代後期前半とされる弓削遺跡溝資料がある。このため、この組成が後期後葉に限定できるものではない。

ともあれ、これ以外については、数値が少なからず異なる。例えば、弥生時代後期後葉～庄内式前半の例として、今回の溝64と、久宝寺南SD51・251、八尾南遺跡溝40、八尾南遺跡流路1砂礫層、神山遺跡溝3001のそれぞれ壺・甕・鉢・高杯をサンプルとし、これらから推定しうる組成の確率95%での信頼区間を計測すると、壺が12.96～33.38%、甕が36.66～52.05%、鉢が5.36～22.31%、高杯が12.65～24.43%となり、あまりにも幅広い。これであれば、ほぼ全てを網羅することになり、無意味である。

このため、現状では概ね同様な時期の各溝から、絞り込んだ、時期ごとに汎用性のある組成を導き出すことは不可能といえる。とはいえ、同様な組成が同様な行為によるものとは断定できず、日常的行為自体ランダムな点も当然あり、もし別々の遺跡でかなりの度合いで一致する組成ということが起こるのだとすれば、これも奇異といえど奇異である。また、例えばカイ2乗検定で全てでのばらつきを出すとしても、上記の信頼区間からは、かなりのばらつきが容易に想像できる。個別どうしのばらつきを出すことも可能だが、個別に比較がさほど有意とも思えない。そうせずとも、一定の幅の同様な時期の溝出土土器の組成は思いのほか類似し、時期をたがえて一定の傾向を持って組成が変化するように思える。

表8 各遺跡器種組成と遺跡ごとの傾向

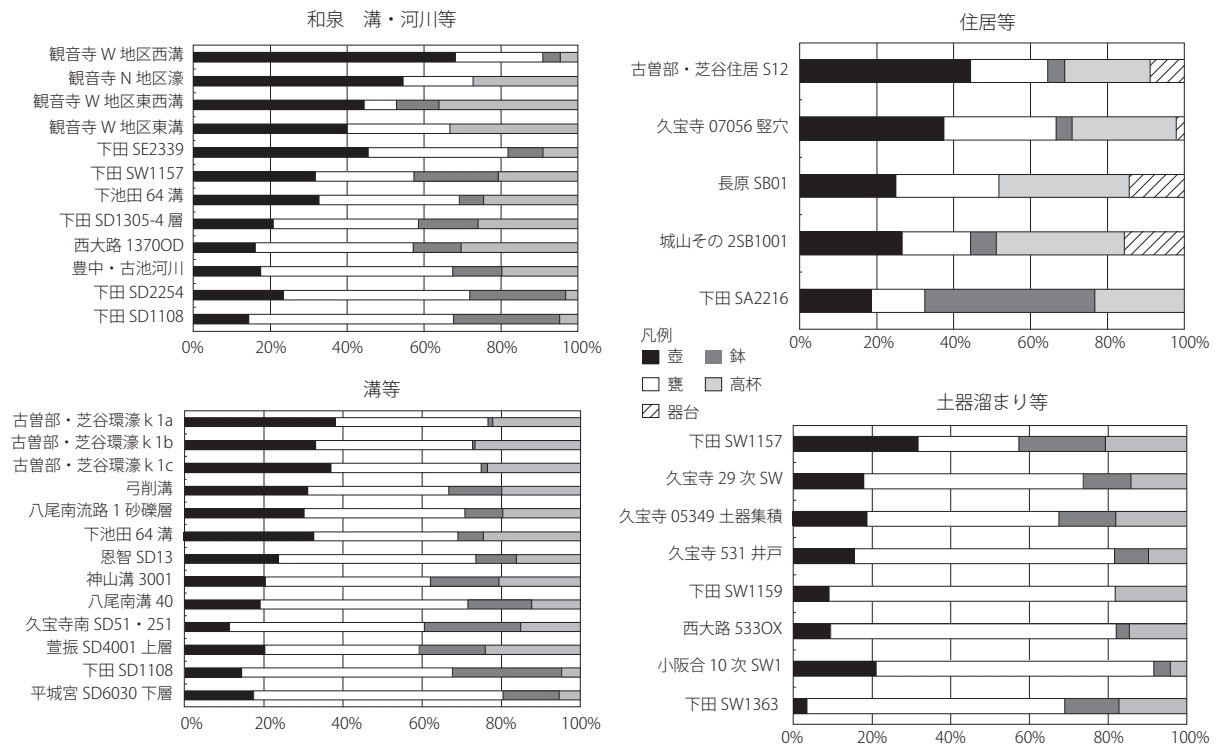


表9 各遺跡器種組成集計

住居

遺跡名	壺	甕	鉢	高坏	器台	主要器種数
古曾部・芝谷住居S12 (後・初)	20	9	2	10	4	45
	44%	20%	4%	22%	9%	100%
久宝寺07056竪穴 (後・初)	18	14	2	13	1	48
	38%	29%	4%	27%	2%	100%
長原5B01 (後・前)	14	15	0	19	8	56
	25%	27%	0%	34%	14%	100%
城山その25B1001 (後・中)	12	8	3	15	7	45
	27%	18%	7%	33%	16%	100%
下田SA2216 (後・後)	8	6	19	10		43
	19%	14%	44%	23%		100%

溝

遺跡名	壺	甕	鉢	高坏	主要器種数
古曾部・芝谷環濠K1a (後・初)	116	117	4	67	304
	38%	38%	1%	22%	100%
古曾部・芝谷環濠K1b (後・前)	167	200	3	134	504
	33%	40%	1%	27%	100%
古曾部・芝谷環濠K1c (後・前)	382	391	17	242	1032
	37%	38%	2%	23%	100%
弓削溝 (後・前)	30%	34%	13%	19%	96%
	31%	35%	14%	20%	100%
八尾南流路1砂礫層 (後・後)	120	161	38	78	397
	30%	41%	10%	20%	100%
下池田64溝 (後・後～庄・前)	32.6	36.35	6.33	24.44	99.72
	33%	36%	6%	25%	100%
恩智SD13 (後・後)	87	183	38	59	367
	24%	50%	10%	16%	100%
神山溝3001 (後・後)	20%	41%	17%	20%	98%
	20%	42%	17%	20%	100%
八尾南溝40 (後・後～庄・初)	40	111	34	26	211
	19%	53%	16%	12%	100%
久宝寺南SD51・251 (庄・初)	24	105	52	32	213
	11%	49%	24%	15%	100%
萱振SD4001上層 (庄・中)	11	21	9	13	54
	20%	39%	17%	24%	100%
下田SD1108 (布・初)	12.2	45.2	23.4	4.0	84.8
	14%	53%	28%	5%	100%
平城宮SD6030下層 (布・中)	12.9	46.2	10.6	3.8	73.5
	20%	39%	17%	24%	100%

※は報告書にある器種組成比率を使用し、上記の主要器種で換算したものの

和泉 溝等

遺跡名	壺	甕	鉢	高坏	主要器種数
観音寺W地区西溝 (後・前)	15	5	1	1	22
	68%	23%	5%	5%	100%
観音寺N地区濠 (後・前)	6	2	0	3	11
	55%	18%	0%	27%	100%
観音寺W地区東西溝 (後・前)	16	3	4	13	36
	44%	8%	11%	36%	100%
観音寺W地区東溝 (後・前)	6	4	0	5	15
	40%	27%	0%	33%	100%
下田SE2339 (後・後)	10	8	2	2	22
	45%	36%	9%	9%	100%
下田SW1157 (後・後)	26	21	18	17	82
	32%	26%	22%	21%	100%
下池田64溝	32.6	36.35	6.33	24.44	99.72
	33%	36%	6%	25%	100%
下田SD1305-4層 (庄・初)	28	51	21	35	135
	21%	38%	16%	26%	100%
西大路1370OD (庄・初)	9	23	7	17	56
	16%	41%	13%	30%	100%
豊中・古池河川 (庄・後)	15	43	11	17	86
	17%	50%	13%	20%	100%
下田SD2254 (庄・後)	15	31	16	2	64
	23%	48%	25%	3%	100%
下田SD1108 (布・前)	12.2	45.2	23.4	4.0	84.8
	14%	53%	28%	5%	100%

土器溜まり

遺跡名	壺	甕	鉢	高坏	主要器種数
下田SW1157 (後・後)	26	21	18	17	82
	32%	26%	22%	21%	100%
久宝寺29次SW (後・後)	34	106	23	27	190
	18%	56%	12%	14%	100%
久宝寺05349土器集積 (後・末)	31	81	24	30	166
	19%	49%	14%	18%	100%
久宝寺531井戸 (庄・初)	27	115	15	17	174
	16%	66%	9%	10%	100%
下田SW1159 (庄・初)	2	16	0	4	22
	9%	73%	0%	18%	100%
西大路533OX (庄・初)	28	214	10	43	295
	9%	73%	3%	15%	100%
小阪合10次SW1 (庄・後)	20	67	4	4	95
	21%	71%	4%	4%	100%
下田SW1363 (庄・後)	1	19	4	5	29
	3%	66%	14%	17%	100%

つまり、当たり前ながら、別々の遺跡の同様な時期の溝は、個別原理のみで捉えられるのではなく、画一的な原理でのみ捉えられうるものでもないように思える。

では、なぜ一定の、ある程度類似する比率となるのだろうか。溝から出土する土器を廃棄と仮定し、考えられるのは、廃棄行為が類似するためであり、そのためには廃棄以前の土器様式をも類似している必要がある。まず、土器様式については、一定の地理的空間の中で類似することが知られており、その様式圏の中であれば、ひとまず上記の十分条件は満たされる。大雑把ながら、大枠で従来言われる畿内様式圏に含まれるとしてよい、表8・9に記した各遺跡は、この点で問題はない。次に廃棄行為だが、まず、後期の溝への土器の大量廃棄とされる現象は、各地で見られ、今回の64溝も、状況的にはその一例として数えることができる。つまり、64溝は時期的にも地域的にもイレギュラーな存在ではない。では、このような大量廃棄現象が各地でなぜ同時期に生じるのかという疑問が生じる。これについては、64溝からだけではわからず、明確な見解を持ちえてなく、ひとまず措かざるをえない。少々話がそれたが、ここでの問題は類似する比率、である。これには、類似する現象が類似する行為の反映なのかは不確定ながら、廃棄行為の内容が検討されなければならない。

その前に、そもそも、単純な廃棄としてよいのだろうか。使用に耐えなくなったため、廃棄した、というのがありうる見解ではある。しかし、これを裏切るとも考えられる、完形品の多さは常々説かれているところである。つまり、必ずしも使用に耐えなくなっても廃棄する、ということである。ただ、今回の64溝では当初の予想よりは完形品が多かったものの、それでも他遺跡で言われている完形品の高さという印象に比べれば、あくまでも印象レベルだが、少ない印象を持つ。このため、使用に耐えなくなったものの、廃棄と考えた方が妥当に思える。一方、他の遺跡でも、写真図版を見る限りでは、復元がなされているものがほとんどのように思える。このため、少なからず破損しているものなのだと思うが、問題はこれが溝への投棄時に破損したのか、破損していたものを投棄したのかとなる。出土状況図などからは、投棄時の破損と思われる資料が一定量存在することが予想できる。しかし、これらについても「ほぼ」完形といったところではなかろうか。となると、どの程度の破損が投棄の対象たりうるのか、となる。胴部の破損は致命的で、このような資料が見られるものの、単に接合作業が十分でなかったための可能性もある。となると、破損部分の摩滅度などが考慮されうるかもしれないが、摩滅しているのであれば、破損後投棄までに一定の時間が考えられ、また別の話だろう。また、「民俗例からすると、ひびが入れば捨てることもあるから、完形で出土したと考古学でみなす土器も、実は壊れた土器だったかもしれない」との見解もある(佐原2002)。廃棄といえば、単純に使い込んで使用できなくなったためと、こんなところにだけ「もったいない」感を抱きがちのようにも見えるが、廃棄にいたる思いはこの感覚とは異なる、「そういうものだ」といったところのようである。つまり、我々の感覚では使い込まなくとも廃棄ということも考えられうるということだが、使い込む土器と使い込まない土器があるのか、それが個々の土器レベルなのか、我々の言う形式レベルなのか、といった点は疑問として残る。

さて、単純に一定期間に保有している土器を、器種ごとで異なると思われる土器が使用されうる期間を無視して廃棄したのであれば、竪穴住居出土遺物の組成と、溝出土遺物組成とは類似するはずである。しかし、そうではないことは表8・9からも明らかである。ここから、器種ごとで異なる土器の使用されうる期間によって、土器が廃棄されている可能性が考えられる。つまり、我々の合理的視点から見ても、さほど違和感を持たない行為の結果であると、推測できる。ただし、先述のとおり、使い込み(利

用頻度)における感覚、破損の感覚は異なるかもしれない。使用から廃棄への過程は、少なくとも器種ごとで異なるのだろう。この背景には、器種ごとの異なる破損状況があり、一定の傾向を示すとすれば、これは類似する破損率が存在する可能性が考えられる。なお、ここでは住居と溝とを直接的に捉えすぎており、使用を住居、廃棄を溝と単純化しすぎているきらいはある。

使用の一形態である、住居からの良好な一括資料の出土例は少なく、今回の作業のために集成したのも表8・9だけだった。このため、これが一般的傾向なのか、地域色は考慮しないのでいいのか、といった問題が当然生じる。特に、弥生時代後期後葉の下田遺跡S A 2216の鉢の多さは、一般的と解釈していいのか疑問ではある。小山田宏一氏によれば、椀系小形鉢が後期後半から目立つようになるとされるが(小山田1994)、ここまでの組成比率は示さない。このため、これはひとまず措くとして、溝の組成と、住居の組成とで、壺比率の傾向は他に比べれば、比較的類似する。すなわち、後期初頭で住居40%前後・溝35%、後期前葉で住居25%・溝30%、後期後葉で住居20%・溝20~30%である。さて、これに対し、甕などの比率が大きく異なる。ここから、単純には、壺は破損しにくく、甕の破損率が他に比べ高かったと推測される。また、壺の数量からのべ住居数の概数を復元しうる可能性も考えられる。これについては後述する。なお、住居における甕の比率は、14~27%程度だが、溝では36~50%であり、溝出土の甕は住居出土の甕の倍ほどの比率となる。また、鉢と高坏の比率は、後期初頭の古曾部・芝谷遺跡住居S 12で2点:10点、同遺跡環濠K 1 aで4点:67点で、高坏の比率が高い点は一致する。住居資料では、後期中葉まで、概ね高坏は鉢の約5倍が見られるようである。一方、溝資料は、後期中葉の資料がないが、後期前葉で高坏は鉢の約14~44倍が見られる。ここから、単純には高坏は鉢の3倍以上、壊れやすかったということになる。

なお、住居、溝とも壺の比率が類似する点から、弥生時代後期の範疇で、壺を1としたときの比率は、傾向程度ながら、以下のとおりである。

住居 壺1 : 甕0.7 : 鉢0.1~0.2 : 高坏0.5~1.3

(但し、甕で、古曾部・芝谷0.45、長原1.07、鉢で長原0、下田2.38をそれぞれ除く)

溝 壺1 : 甕1~2.78 : 鉢0.01~0.85 : 高坏0.57~0.75

溝と住居の壺を基準にした比較では、高坏も同様である。ここからは、壺のみならず、高坏からものべ住居数の概数を復元しうる可能性も考えられる。時期が異なるため不適切ではあるが、各住居の壺と高坏の平均値を出すと、壺14.4個、高坏13.4個となる。現状で確認されている64溝及びその延長部分に含まれると推定される土器数(壺:2942個、高坏2812個)をこれらで割ると、壺でのべ204棟、高坏でのべ209棟と推定できる。

しかし、これは、いくらなんでも多すぎるように思える。この検証のため、多量の土器が出土し、住居址も確認され、居住域が概ね検出されていると思われる古曾部・芝谷遺跡(宮崎編1996)を例にして考える。同遺跡は大きく3つの地区に分けられ、このうちの古曾部地区についてだが、古曾部地区の各住居がその地区の環濠に土器を廃棄したと仮定する。1期(撰津V-0~1様式)における環濠出土壺は116点、高坏は67点で、上記の平均値壺14.4個、高坏13.4個を使用すると、壺で約8棟、高坏で5棟と推定でき、壺の数値の場合、古曾部地区で検出されている竪穴住居数8棟に一致する。2期(撰津V-1~2様式)における環濠出土壺は167点、高坏は134点で、同様に壺で11.5棟、高坏で10棟と推定でき、検出数の20棟には一致しない。3期(撰津V-2様式)における環濠出土壺は382点、高坏は242点で、同様に壺で26.5棟、高坏で18棟と推定でき、検出数の11棟には一致しない。ち

なみに、観音寺山遺跡（辰巳編 1999）の場合、W地区各溝（後期前葉）出土壺が 37 点、高坏 19 点で、同様に壺で 2.6 棟、高坏で 1.4 棟と推定でき、検出数 3 棟に近いといえば近い程度である。

これらから、上記の可能性（壺・高坏からの住居数の推定）は妥当ではないと判断できる。なお、これらは出土土器の数を扱っており（とはいえ扱わざるを得ないのだが）、この時点でノイズが大きい。また、全ての土器をとある溝に捨てるに限らない。このため、小さい値が出るのが予想される。ただし、古曾部・芝谷遺跡 3 期では検出数より多い推定がなされた。古曾部地区だけで考えず、全体で考えれば 25 棟である。しかし、この推定の場合、各時期の廃棄行動が異なることとなり、その理由を説明する必要があるので、妥当ではなかろう。別の理由が必要だが、ここではひとまず方法の非妥当性を指摘するにとどめる。

以上のように、比較的集落状況が捉えやすい高地性集落でこのような状況であるから、状況がわかりにくい低地の遺跡では、なおさらのノイズが考えられる。では、64 溝出土土器が、多いのはなぜか。単純に比率の比較自体が誤っている可能性もある。しかし、ひとまず推定が妥当だとした場合、上記の推定のような竪穴住居からのみの廃棄以外に、土器量を増加させる他の要素があることになる。ここで容易に推測できるのは、墓であるが、これも憶測の域を出ない。まずもって、弥生時代後期の墓様相については不明であり、下池田遺跡においても同様である。2 次調査など、過去の調査で検出されている墓も、溝出土遺物と重複しつつやや新しい時期のものだろう。周辺地域も含め、墓の土器組成が不明であり、墓の土器がどのように処理されるのかわからないため、不明な部分が多い。ただし、八尾南遺跡の溝 40 で報告書において推測されているように、この溝が葬送儀礼などに用いた土器を入れたのであれば、この組成はやや甕が多い印象を持つ以外（これが大きいのかもかもしれないが）、さしたる違和感はない。墓から出土する土器が少なく、時期決定が難しいという話は、よく耳にするが、これが片付け行為によるものであるのなら、八尾南遺跡溝 40 の推定は妥当に思え、今回の 64 溝も一部であれ全体であれ、そのような機能をも担っていたのかもかもしれない。この推測を多少なりとも進めるには、個別の溝について、集落域等を含めた位置づけを行う必要がある。その個別の溝の個性などが抽出されれば、その上で組成の類似性などについての議論もより意味深いものになると思う。なお、土器量を増加させる要素については、再度後述する。

ちなみに、土器がどのくらいの頻度で破損するのかについての研究は少ない。律令期における役所という集団生活で使用された食器がどのくらい壊れたのか、という研究が田中 琢氏により行われており（田中 1966）、これによれば月当たり 1 割 5 分～2 割の高い消費率であったという。今回は、上記したように、高坏は鉢の 3 倍壊れやすい可能性などを指摘できたが、個々の土器の使用サイクルについてはわからない。住居における組成がわかったとし、この組成がある期間継続していたとしても、比率の中でどの程度の個体が変わったのかを知るすべが思いつかない。

ともあれ、このように個々の溝に個性はあるにせよ、ある程度の普遍性を持った破損状況であるために、類似する傾向が見られる可能性が考えられる。これには、当初に記したように、土器様式が概ね同様であったという側面もある。なお、傾向程度でこれらが一致しないのは、不慮の破損の存在や、同様な土器を製作しても、製作のための材料の有する物理的特性、製作技術の差異による破損のしやすさ、しにくさ、といった点も考えられる。

では、この溝廃棄の時期幅はどの程度なのだろうか。今回の調査範囲では、溝出土遺物と同時期の遺物が出土する居住にかかわると推定できる遺構の検出はない。このため、64 溝からやや距離がある箇

所（とはいえ、せいぜい 100 m 程度かもしれないが）から、土器を持参し投棄したと考えられる。溝埋土は大きく上層、下層に分けられるが、両層に含まれる遺物に明瞭な時期差は考えにくい状況であった。ただし、遺物の時期幅は多少なりとも見られ、概ね弥生時代後期後葉～庄内式前半頃と考えられる。『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』（（財）大阪府文化財センター編 2003）巻末の暦年代（案）によれば、64 溝の大まかな時期である下田編年 I-2～II-2 は、紀元 150～230 年頃だろうか。しかし、最近の C 14 測定値によると、池島・福万寺遺跡（国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ 2007）や瓜生堂遺跡（小林ほか 2004）における、下田 I-2 直前併行の河内 V-3 様式について、紀元 90 年までに収まるものが多い。また、久宝寺遺跡（パレオラボ AMS 年代測定グループ 2007）における庄内式古相頃の年代で紀元 120～240 年との結果もある。ただし、下田遺跡 S D 1108 資料の年輪年代測定結果を考えれば、庄内式古相がこの年代幅の後半になるとは考えにくい。このため、紀元 150～230 年頃よりは全体的にやや前倒しになるか、やや前へ伸びる可能性も考えられる。大まかに、80 年～100 年間ほどの幅というところだろうか。

問題は廃棄行為が連続的に行われたのか、断続的に行われたのか、一時に集中して行われたのか、ということになる。時期差がどの程度かは不明だが、断面観察からは少なくとも 2 回は、投棄行為が行われたと推測できる。ただし、完形品が比較的多い投棄の中心は上層下部とした一群である。下層の土器量は基本的に少なく、下層としたものの中にも一定量上層下部とすべきものが含まれていると思われる。また、上層上部としたものは破片が多い。土器の分布は、若干の空白域はあるものの、図 21 に示したように面的とでも表現できる状況である。これは、群が連続することで形成されたと思われる。時期幅のみならず、土器総量もかなりの量となる。これをまとめてどこかに仮置きし、ある一時に溝に投棄するには、別の説明が必要であろう。このため、やや長期間の断続的投棄の結果と推定しておきたい。ただ、どの程度の実際の年代幅を有するのかの推定が、いかにすれば可能かについても思いが至らない。土器様式の年代幅と同一なのかもしれないが、まったくもって不明である。

溝への土器投棄が集中する時期であるこの時期のほかの遺構も見ておく（表 8・9）。

八尾南遺跡溝 40（森屋・正岡編 2008）は、最下部に細砂～極粗砂の堆積が薄く見られ、その上層に粗粒シルトが見られる。ただし、写真図版 39 では明瞭な砂層は見られない。写真図版から判断すると、土器の完形率は 64 溝よりも高く、遺物の分布においても粗密が見られる。垂直的にかなりの幅があり、一定の時期幅があるとされており、断続的な投棄行為の結果との解釈と思われる。上記したところだが、葬送儀礼などに用いた土器が含まれているとされる。

神山遺跡溝 3001（上林編 1989）は、断面図では八尾南同様に最下部に砂礫層などの堆積が見られ、その上部に粘土やシルトなどが見られる。ただし、写真図版（P L 4）で見る限り、下部の砂層はさほど明瞭ではない。一括廃棄とされ、一度にまとめて廃棄された状況のものも見られるともされる。また、土器は割れた土器が投棄されたのではなく、溝内部で破片になっている、とされる。遺物出土状況図では、遺物がいくつかの群をなしているようにも見えるが、写真図版ではやや細かい破片が面的に散乱しているようにも見える。さらに、土器はほとんど同時期（上六万寺式及び北鳥池式併行）で、短期間の投棄とされている。ただし、土器がシルト、微砂、砂礫等が混在する中で検出されていることから、溝内部が流水や滞水を繰り返したとも記されており、これは土器投棄後の溝の状況を解説したものと考えられる。居住に伴い使用されたものの廃棄とされている。

久宝寺南 S D 51・251（一瀬編 1987）は、埋土の詳細は不明だが、写真図版（概報 P L 107）を

見る限りだが、上層は泥で埋まっているようであるが、埋め戻しかは不明である。列をなして群を構成しているようにも見える、とされ、写真図版でもこの状況はうかがえる。時期は庄内式初頭頃で、投棄の時期幅についての見解は不明である。

萱振遺跡 S D 4001 (広瀬編 1992) は、上・下層に大別することができるかとされるが、断面図のいずれがいずれに該当するのかわからない。写真図版 28 からは、下層に砂層が見られ、これよりも上層はシルトが見られるが、その途中で数回の砂礫層が挟まるようである。ただし、溝の下は流路であり、下層とした砂層はこの一部を含んでいるのかもしれない。土器は、比較的一括性は高いとされる。写真図版ではやや粗密が見られる部分もあるが、列状に間断なく土器が見られる部分もある。

これらは、溝の埋没状況においても差があり、組成において当然ながら差異は見られる。組成の幅を見ると、壺 11～31% (幅 20%)、甕 39～50% (幅 11%)、鉢 7～24% (幅 17%)、高坏 12～23% (幅 10%) である。なお、弥生時代後期後葉～庄内式中頃と時期幅もある。

なお、組成不明ながら、当遺跡に比較的近い府中遺跡でも概ね同時期と考えられる溝が検出されている。大阪府教育委員会による昭和 59 年度調査 S D 09 (松村編 1985)、およびこれと同じ溝と考えられる昭和 61 年度調査 S D 02 (藤沢編 1987)、またこれらに近接し同時期の遺物が見られる和泉市教育委員会昭和 62 年度調査 87-2 (灰掛編 1988) である。この溝には方形周溝墓が近在するが、これは弥生時代後期前～中葉のもので、溝の時期より古い。同時期の遺構としては、61 年度調査での S B 04 があるが、この居住域の展開は不明である。居住域の評価如何にかかわるが、本章第 1 節で記したように、下池田遺跡に近接する地域の動向の中でも類似する現象が見られるようである。

さて、投棄の時間幅を比較的に長く見ていると思われる八尾南遺跡溝 40 は、他に比べやや甕が多い。これが長期間のためか、墓に伴う土器を含むためかは類例の調査が不十分で不明ではある。ただし、この溝 40 の時期幅は、今回の 64 溝と類似する。このため、組成差が溝の性格差を反映している可能性もある。なお、甕と高坏に 10% 弱の差はあるが、神山遺跡溝 3001 に類似しないでもない。この、比較的短期間とされる神山遺跡溝 3001 は、若干垂直の幅があるようにも見えるが、遺物の時期幅は弥生後期末前後で短いと見てよからう。また、後続する時期の遺構が見られないようであり、移動時の短期間における廃棄の一例として捉えられる可能性もある。ただし、短期間とはいえ一小様式に収まるほど短くはなく、このため数十年ほどの継続が安直ながら見込まれる。この期間中に、土器がまったく破損しないとは考えにくく、少なからず廃棄すべき土器が存在したはずである。この廃棄はどこになされたのだろうか。この点は後述する。また、例えば、溝出土土器を型式学的に区分すれば、前後差が存在し、ここからの時期差の判断はできるのだが、様式的には同時使用の可能性も捨てきれない。この点で、ごく短期間なのか、これよりは長く見積もるべきなのかの判断は難しい。ただ、もし比較的であれ長期間に及ぶのであれば、その溝が廃棄場所として継続していたこととなり、長期間の初めから溝の機能が停止していたとも考えられうる。廃棄の時間設定は難しい。また、土器が折り重なっていても、複数回の投棄の間に明瞭な自然堆積層が少なくとも見られなければ、それが連続的か、断続的か、集中的かの判断は難しい。ともあれ、出土遺物の時期幅が短く、土器投棄後にも流水があるとされることから、埋め戻しがなされていないと推測され、これらから居住域廃絶に伴う廃棄と考えれば、この溝出土組成は、居住域の様相を反映している可能性がある。なお、神山遺跡溝 3001 は、萱振遺跡 S D 4001 と組成が比較的類似する。ただし、後者は居住域廃絶に伴うようではない。このように、時期も、廃棄状況も異なり、個性として捉えるべきものかもしれない。ただ、上記のように、属性のいくつかで、類似する溝

は見られる。属性として考えられるのは、遺物の時期と時期幅、遺物の組成、遺物の層位、遺物の分布とその密度・粗密、投棄の時期差、溝の埋没状況、後続する遺構の存在の有無、溝に関連する遺構の有無とその性格などである。これらのいずれが有機的関係を有するのかは今後の課題としておく。また、現状で類例が少なく、蓄積の必要を感じている。なお、溝の性格が組成から明瞭に言及し得ないのは、資料の少なさもさることながら、単純な一機能、用途のみでは捉えられないからかも知れず、多用途集積の結果として、比較的類似した傾向を示すのかもしれない。

なお、当該期の墓形態が、久宝寺遺跡・竜華地区などのような方形周溝墓であったとし、また集落内の構成員全てがこの墓に葬られていないのだとすれば、墓が営まれ、土器が供献される回数は、感覚的ながらさほど多いとは考えにくい。このように考えれば、土器量を増加させる要素として、墓を加味しても、いまだ増加の理由には不十分かもしれない。

この64溝に土器を投棄した集団規模はどの程度だったのだろうか。64溝出土遺物の時期以前には、弥生時代後期中葉頃までの居住域の存在が今回も含めた下池田遺跡で確認されている。64溝出土遺物の時期になると、当遺跡での居住域の様相は不明ながら、当遺跡に隣接する周辺遺跡にも新たに遺跡が見られるようになる。いずれも居住域の詳細は不明ながら、遺跡数の増加からは、後期中葉までに当遺跡にあった居住域が、分散した可能性も考えられる。そう考えると、64溝にごく近在し居住した分散した残りともいえる集団が土器を投棄したのであれば、これ以前の土器量より少なくなるはずであるが（とはいえ64溝以前の時期に土器がまとまって出土する溝はないのだが）、実態はそうではない。このため、周辺遺跡をも含めた土器投棄の可能性が考えられる。この周辺遺跡は、後期中葉まで下池田遺跡に居住していたものの分散したものと推測する。周辺遺跡での墓域の様相は明らかでなく、当遺跡においても64溝出土遺物の時期の墓域様相は、不明瞭なのだが、64溝出土遺物の時期に重複しつつやや新しい墓域の存在を評価し、分散後も下池田遺跡にのみ墓域が営まれていたと憶測すれば、このような点も64溝の土器量の多さの背景にあるとも考えられる。

ところで、土器はいかに運ばれたのだろうか。この疑問に答えることは難しい。土器を運ぶ道具については簡易なザックのようなものを民族例に見ることができるが、これほど念入りである必要はないし、現状で土器をまとめて運んだ道具の例を知らない。ネットのようなものを簡易に作成し、これを今回の廃棄の場合ごみ袋のように使用したのかもしれないが、非実証的であり憶測の域を出ない。手で運んだというのが憶測の最大限かもしれないが、この場合大量の土器を一時に一括投棄するとなると、かなりの人手が必要になる。では、どの程度の人間が存在したのだろうか。若林邦彦氏による弥生時代集落に関する研究によると、径100～200m程度の基礎生活領域を形成する人間集団を数百人規模と見積もられている（若林2001）。あくまでも参考ながら、これらが総動員なのであれば一人当たり1～2個として、一度に200個程度の土器を運ぶことはできるかもしれない。ただし、個別の住居ごとによるものであれば、住居には4～5人が居住していたとされ、一度に10個弱程度であろう。廃棄がどのような単位で行われたのかの推定は難しいが、小規模・小期間であれば後者、大規模であれば前者とは推測できる。

では、なぜ溝が廃棄の対象となったのだろうか。常識的に考えられれば、溝の機能が失われたために、ゴミ捨て場（廃棄場）として使用した、ということが考えられる。しかし、逆に溝の機能を失わせるために、土器を廃棄した可能性も考えられるが、このような意図までは判断しがたく、ここでは前者と仮定する。ただ、いずれにせよ、溝は埋められる。集落廃棄の場合、溝は完全に埋める必要はないかも知

れず、神山遺跡溝 3001 の状況は、この一例かもしれない。さておき、溝以外に廃棄行為が行われうる場所には、集落内のある場所や穴ぼこなどが考えられる。前者は土器たまりなどとされるものを含むだろうし、後者は土坑とされるものだろう。ただし、これらの場合、廃棄可能な容量が小さく、短期間、小規模投棄によるものと思われる。なお、土器たまりの組成は、一括することが妥当ではないかもしれないが、甕が多い傾向がある（表 8・9）。これは、甕が破損しやすい傾向があることの反映かもしれない。さておき、この点で比較的広い面積を占める溝が大量投棄時には選択されたのかもしれない。なお、川という選択肢もあったと思われ、実際に流路の機能時の堆積と思われる砂層中から土器の出土は見られるが、機能中の廃棄行為は盛んでなく、八尾南遺跡流路 1 に見られるように、やはり埋まりゆく中での投棄である。この点でも、当初の機能を失った遺構への廃棄と読み取れる。

また、この溝への廃棄行為が、集落の移動と関連するものか、との疑問が生じる。上記したように、神山遺跡溝 3001 は関連する可能性がある一例だろう。特に、投棄したままで埋め戻しをしていないようであることは、重要と思われる。ただし、なぜ例えば住居に土器を置いたままにしなかったのか、という疑問もある。神山遺跡の住居については不明だが、住居からのまとまった土器の出土は表 8・9 のとおりで、あるものの少ない。一定の傾向はあるものの、必ずしも固定的な規則に縛られていたとも限らないと考えることが許されれば、住居は片付けられることが一般的であったと考えられる。片付けた土器の行き先が溝であったのかもしれない。

今回の調査では、64 溝の時期に後続する庄内式後半以降の遺構(120 溝)が検出されている。このため、集落が移動したとは言い切れないので、移動時に所持品を軽くするために、移動先でも調達可能な土器を投棄していった、という解釈は成り立ちにくい。ただし、64 溝と同時期の居住にかかわる遺構が検出されてなく、移動の有無については、実際的な痕跡から掴むことができないのが現状である。また、別々の遺構の時期が連続するとしても、これがいずれも同一集団による行為の結果とは断定できないし、どのような方法をもって肯定、否定がなせるのかもわからない。当該期の水田は未検出ながら、水田とこれを可能たらしめる灌漑手段、経路に規制されている側面もある一定範囲の集団が使用しうる空間は、ある一定の範囲内で固定的であったとも考えられる。ひとまず、近接する箇所概ね連続するとしてよい遺構が見られる点を評価し、連続的な同様な箇所での居住を推測しておく。ただし、64 溝と 120 溝とで、期待された役割は異なる可能性がある。これは、溝形状、堆積状況から推定される。64 溝には、砂層の堆積がなく、泥と土器で埋まったように見える。そして、機能時は空堀とでもいえる状況であったに思える。一方、120 溝は下層に砂層が見られる。また、64 溝のように多量の土器が出土する状況ではない。当然ながら、溝への大量の土器の投棄が、集落の移動にかかわるとは断定できないが、単純に景観の差異もあるし、差こそあれ変化は生じており、様相や消長にかかわる可能性は考えられる。この点で、溝への廃棄行為はどの居住域でも起こりうる可能性がある。ただし、同様な溝への投棄行為は、後続する時期では盛んではないように思える。

(5) まとめ

以上をまとめておく。

まず、64 溝の計量的分析を行い、各計測結果を示し、地点ごとの比較を統計的な方法を利用しつつ行った。計測結果は省略するが、地点ごとの比較では、組成に大きな違いはないことがわかった。また、溝出土遺物から組成を把握する場合、溝の検出範囲が 10 m²以上で安定した数値が得られる可能性を指摘した。この組成を踏まえ他遺跡との比較を行った。まず、同様な時期の溝出土土器から、絞り込んだ、

汎用性のある組成を抽出することは不可能であると考えられた。しかしながら、ある一定の類似する比率を示すと考えられ、この理由について考えた。なぜ、ある程度類似する比率となるのかについては、廃棄行為が類似するためではないかと考え、このためには土器様式の類似が十分条件であると考えた。また、廃棄の前提として、使用状況を考え、使用から廃棄へいたる過程は、少なくとも器種ごとで異なるかと推測した。そして、この背景には器種ごとの異なる破損状況があり、異なる破損率の可能性を考えた。使用から廃棄へいたる過程の差異を把握するために、それぞれを住居と溝に代表させ、両者の組成が不一致であることを指摘したが、壺組成は類似すると考えた。この比率比較から、住居数の推定の検討を行ったが、比較は妥当ではなかった。想定よりも溝出土遺物が多い理由として、その候補をひとまず墓に求めた。墓の器種組成は不明な点が多いが、八尾南遺跡溝40をひとまずその一例として考えた。また、これらから、溝を集落の中で位置づける重要性を指摘した。廃棄の時期幅について、その実年代幅は不明な点が多いが、短期間、断続的、連続的などの可能性を考慮しつつ、今回の64溝と他の遺跡とを比較、検討した。組成と溝の性格の関係については、十分に検討できなかったが、溝の正確の多様性はあるものの、類似する傾向は指摘できた。溝は単純な用途で考えることはできず、しかしこのために類似する傾向を生み出しているのかもしれない可能性を考えた。また、廃棄場所としての溝について、なぜ対象となったのかについては、多量廃棄の空間的必要性を考えた。同様に、川をも考え、廃棄が当初の機能を失った遺構に対し、行われたと考えた。廃棄行為と集落の関係については、レベルの差こそあれ、集落の動態に影響する可能性を考えた。

後半は、統計的処理も不十分であるし、前半部分も含め妥当ではない使用方法を含んでいる恐れが拭えない。冗長な割には、64溝の性格、投棄時期幅と間隔など、あまりにも不明な点が多い。類例調査による更なる比較検討の必要性を実感している。また、十分には触れることができなかったが、土器の生産からをも含めた過程の検討も当然必要と考える。

【参考文献】

- 一瀬和夫編 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
- 宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
- (財)大阪府文化財センター編 2003『古墳出現期の土師器と実年代シンポジウム資料集』財団法人大阪府文化財センター
- 上林史郎編 1989『神山遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
- 国立歴史民俗博物館・年代測定研究グループ 2007「大阪府池島・福万寺遺跡出土試料の14C年代測定」『池島・福万寺遺跡3』(財)大阪府文化財センター調査報告書第158集 財団法人大阪府文化財センター
- 小林謙一・春成秀爾・今村峯雄・坂本 稔・陳建立・松崎浩之・秋山浩三・川瀬貴子 2004「大阪府瓜生堂遺跡出土弥生～古墳時代土器の14C年代測定」『瓜生堂遺跡1』(財)大阪府文化財センター調査報告書第106集 財団法人大阪府文化財センター
- 小森俊寛 2005「研究方法 出土土器群の整理調査と比較研究」『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
- 小山田宏一 1994「高杯型銘々食器群成立の史的意義」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 坂口昌男・吉川和則・酒井龍一・正富博行・芋本隆裕・杉本朝美 1976『豊中・古池遺跡発掘調査概要そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会
- 佐原 眞 2002「土器」『日本考古学事典』三省堂
- 辰巳和弘編 1999『大阪府和泉市観音地山遺跡発掘調査報告書』同志社大学歴史資料館調査報告書第2冊 同志社大学歴史資料館
- 田中 琢 1966「土器はどれだけこわれるか」『考古学研究』第12巻第4号 考古学研究会

- 永島暉臣編 1982 『長原遺跡発掘調査報告（改訂版）』財団法人大阪市文化財協会
- 西村 歩編 1996 『下田遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 18 集 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 灰掛 薫編 1988 『府中遺跡群発掘調査概要・Ⅷ』和泉市教育委員会
- 橋本高明編 1988 『西大路遺跡』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第 23 輯 財団法人大阪府埋蔵文化財協会
- 原田昌則・坪田真一・消 斎 2003 『久宝寺遺跡第 29 次発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究会報告 74 財団法人八尾市文化財調査研究会
- パレオラボ A M S 年代測定グループ 2007 「放射性炭素年代測定」『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅶ』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 156 集 財団法人大阪府文化財センター
- 広瀬雅信編 1992 『萱振遺跡』大阪府文化財調査報告書第 39 輯 大阪府教育委員会
- 藤沢真依編 1987 『府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』大阪府教育委員会
- 松村隆文編 1985 『府中遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 宮崎康雄編 1996 『古曾部・芝谷遺跡』高槻市文化財調査報告書第 20 冊 高槻市教育委員会
- 消 斎 2000 『弓削遺跡発掘調査報告書』八尾市文化財紀要 10 八尾市教育委員会
- 森屋美佐子・正岡大実編 2008 『八尾南遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第 172 集 財団法人大阪府文化財センター
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価」『日本考古学』第 12 号 日本考古学協会

第3節 近代煉瓦採掘坑とレールについて

(1) はじめに

今回の調査では、近代産業の1つである煉瓦製造に関する遺構と遺物を検出することができた。そこで、ここで得られた成果を基に岸和田市で行われていた煉瓦産業の様相について述べておきたい。

岸和田市域での発掘において、これまでも粘土採掘坑とされる大規模土坑が多数発見されている(例えば、栄の池遺跡や大町遺跡など)。今回の調査で、大規模土坑とレールがセットで発見されたことにより、このような土坑が煉瓦製造のための粘土採掘坑であることが考古学的に証明された。近代の煉瓦生産に関しては、地元住民への聞き取り調査や『大阪窯業株式会社五十年史』・『岸和田煉瓦株式会社参拾年』といった社史から情報が得られる程度で、現在となっては全国的にも著名であった岸和田市での煉瓦生産の実態については不明な点が多く存在する。例えば、泉州一帯は良質な粘土が採掘できる土地として有名であるが、では一体どのような土を使用して煉瓦を製作したのか、それは岸和田市内のどこで採掘したものなのかといった具体的な様相は、史料として残されていない。このような疑問に対して、今回の調査によって一定の見解を得ることができた。

(2) 今回の調査で発見された遺構・遺物について

今回検出できた粘土採掘坑は計4箇所、いずれも地山のシルトか古代から中世に堆積したシルトを採掘している。形状や深度といったものに一定の規則性はなく、深いところで1m、浅いところでは0.5mを測る。採掘坑を埋め戻した土には多量の遺物が含まれていることから、土器などの異物を除いてシルトのみを採掘していた様子がうかがえる。特に64溝と重なる183粘土採掘坑では、64溝から土器が多量に出土したことから、その部分を避けるように南北に長く掘削を行っていたと考えられる。また、基盤層の礫層部分にも旧耕作土を含む土坑が複数あった。粘土採掘坑よりも規模が小さいことから、このような土坑は原料として利用できる土であるかを確認するための試掘坑と考えられる。

レール(1213・1214)は、いずれも粘土採掘坑からの出土であり、枕木(1218・1219)も採掘坑からの出土である。1213は、上端幅18.1mm、下端幅36.4mm、高さ44mm、1214は、上端幅24mm、下端幅45.5mm、高さ51mm、で2種類の規格が存在する。1949年に施行された工業標準化法に基づいて制定された日本工業規格(JIS)に当てはめると、1214は「6kgレール」(1mの重さが6kg)になる。1213は、JISに当てはまるものはないが、あえて言うなら「4kgレール」となるだろうか。1213の軌間(レールとレール間の距離)は508mm、主に鉱山などの作業用路線のレールとして使用された軌間である。

1213の枕木と枕木の間隔は芯々間の距離で66cmを測る。枕木間隔は、上に走る車両の重量と大きく関係するようで、間隔が広い1213は、軽便軌道用であったと考えられる。

それでは、このレールはどこへと繋がっていたのであろう。それを知る手がかりは、(図111-1、相沢1931)と(図111-2、大日本帝国陸地測量部1938)にある。

図111-1は、岸和田城を中心として描かれており、当遺跡が所在する下池田町に関しては描かれていない。しかし、下野町の大阪窯業株式会社岸和田工場、並松町の岸和田煉瓦綿業株式会社へと連なる2つの軽便軌道が明確に描かれている。さらに、図111-2にも軽便軌道が2つ描かれている。図111-1の北側に描かれる軌道と図111-2の南に描かれている軌道の走行が一致することから、両者は同じ軌道を描いたものと判断できる。このことから、当遺跡で発見されたレールは、大阪窯業株式



1. 相沢正彦 1931「岸和田志附図」「岸和田志」和泉刊行会を2万5千分の1に縮小・修正・加筆

▼軽便軌道



2. 大日本帝国陸地測量部 1938『信太山近傍』大正11年測図昭和4年及同9年修正測図2万5千分の1に加筆 □今回の調査区／▼軽便軌道

図111 地形図に描かれた軽便軌道



国土地理院「岸和田東部」S=1/25,000 2007年6月1日発行に加筆 □■ 軽便軌道/□ 今回の調査区/▲ 図版48撮影位置

図112 現在の地形図と軽便軌道

会社岸和田工場へとつながるものと結論付けられる。ちなみに、図111-2北側軌道は、磯之上町にあった岸和田煉瓦綿業株式会社磯之上工場へとつながるものである。

そこで、現在の地形図に軌道を復元すると図112になる。この復元によって、03-05調査において検出された〈落ち込み34〉の直上に軌道が位置する。〈落ち込み34〉は軌道遺構であったと想定される。また、かつて当遺跡からさらに東へと進むためにJR阪和線の下をくぐった場所には、現在トンネルなどの施設は残されていないが、土留め工が施され、何かの横穴が穿たれていたことを痕跡として留めている。地形図に描かれている軌道は、調査地より南側に位置する場所に敷設されており、北側に位置する場所に敷かれた状態で出土した1213はかつての軌道にはあてはまらない。おそらく、地形図に描かれている軌道は、幹線として機能していたものであり、1213はこれへとつながる支線だったのでないであろうか。つまり、支線を縦横にめぐらせることによって広範囲の粘土を採掘し、採掘が終われば回収し、新たな場所へと軌道敷を移動していったと考えられるのである。このように考えれば、1213が最も軽い規格である理由も合理的に説明することができよう。そして、1214は1213よりも

大きな規格であり幹線用として使用されていた可能性が高い。

(3) 岸和田にあった煉瓦製造会社沿革（レールの行き着く先）

詳細な沿革については社史に譲るとして、ここでは主に岸和田工場の歴史について概略しておきたい。また、同じく軌道を敷いていた並松町にあった岸和田煉瓦綿業株式会社についても見ていきたい。

大阪窯業株式会社は、はじめ硫酸瓶製造会社として1882年に大阪市内で操業する。岸和田工場にはもともと和泉煉瓦株式会社があり、1906年に大阪窯業株式会社によって吸収・合併され、岸和田工場となる。以後、東京・愛知に工場を設置し、会社は拡大を続ける。しかし、次第に煉瓦需要が減少し、さらに1923年に起こった関東大震災によって煉瓦構造物に対する耐震性の不安も加わり、煉瓦部門は大幅に衰退する。岸和田工場は、煉瓦部門の屋台骨として生産を続けるが、次第に衰退し規模が縮小される。（大阪府作成1961年の3000分の1地形図）では工場の存在が確認できるが、（大阪府作成1967年測量・1977年修正2500分の1地形図）には描かれておらず、この間に土地が売却されたと考えられる。現在は、外壁の一部が現存するのみである（図版48-1）。

大阪窯業製煉瓦は、大阪を中心として全国各地でかなりの数が発見されている。近年では、地域史としての重要性から発掘調査においても検出、報告がなされている（岸和田市教育委員会2008など）。

岸和田煉瓦綿業株式会社は、藩士である山岡尹方が1872年に設立する士族授産として並松町で煉瓦を製造したことが会社としての起源となる。この頃の煉瓦製造所は一旦途絶えるが、1887年に第一煉瓦製造会社として再び煉瓦を製造するようになる。さらに、1893年に岸和田煉瓦株式会社、1919年に岸和田煉瓦綿業株式会社、1971年に（株）岸煉へと改称される。2005年に倒産するが、1930年代後半に建てられたとされる（株）岸煉の事務所は今も並松町に現存する（図版48-2）。

(4) まとめ

煉瓦工場へと続く軌道は、悉く町の開発によって廃棄され、現在においては在りし日の姿を見ることはほとんどできない。しかし、加守町3町目に所在する春木川の南に小さなトンネルは、もともとは大雨の際に水を逃がすための避溢函渠として設けられたものであるが、南海本線をくぐるために岸和田工場が軽便軌道を敷設した場所であり、今もかつての姿を留めている（図版48-3）。

岸和田市をはじめとして泉州地域における煉瓦産業は、綿業とともに近代における主要産業の1つであった。多くの紡績業と窯業の工場が海岸に立ち並んでおり、大阪窯業株式会社岸和田工場、岸和田煉瓦綿業株式会社も当時の景観を形成する1つであった。綿業はいまや泉州地域の地場産業として人々の生活の一部として根付いている。しかし、煉瓦産業は全国的な需要の低下から廃業へと追い込まれ、いまやこの地での煉瓦生産は行われていないのが現状である。煉瓦産業は近代産業の牽引役として、また当時の人々にとっては生活の一部として機能していたものであり、現在の岸和田市の礎となった歴史の1つである。今回の調査でその一端を明らかにできたことは、泉州地域での煉瓦生産の実態について把握する足がかりができたと考えている。

【参考文献】

岸和田煉瓦株式会社 1917『岸和田煉瓦株式会社参拾周年』

江村恒一 1935『大阪窯業株式会社五十年史』

水野信太郎 1999『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局

岸和田市史編さん委員会 2005『岸和田市史』第4巻 近代編 岸和田市

岸和田市教育委員会 2008『平成19年度 発掘調査概要』岸和田市文化財調査概要 34 岸和田市教育委員会

遺物觀察表

観察表凡例

図とは、本文中の図番号である。

写真とは、写真図版の番号である。

番号とは、各遺物図に添付された個別番号のことである。

法量の単位はcmで、()値は口径・底径については復元値、器高については現存高である。

残存率は、約を省略し、5%単位である。5%未満についても5%としている。

胎土は、密、やや密、やや粗、粗の4区分で、判断できるものについては含有する鉱物種などを記載した。

焼成は、良好、やや良好、やや軟、軟の4区分である。

備考の、生駒西麓とは生駒山西麓産胎土のことである。近江系とは近江・山城系と考えられるものである。

遺物観察表(1)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
28		1	12 竪穴住居	器台?	弥生後期前葉	口径(36.0)/器高(8.0)/ 器厚0.7~1.1	20%	外:口縁以下ハケ? 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/6	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
	11	2	12 竪穴住居	広口壺	弥生後期	口径(20.4)/器高(10.2)/ 器厚0.5~1.2	20%	外・内:口縁部ヨコナデ、以下不 明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~3mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		3	12 竪穴住居	壺	弥生後期	底径5.4/器高(9.1)/ 器厚0.4~1.1	30%	外:ハケ後ミガキ 内:ナデ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		4	12 竪穴住居	壺	弥生後期	底径6.3/器高(7.3)/ 器厚0.6~1.3	20%	外:ハケ後ミガキ 内:ナデ、底部付近圧痕	明褐灰 7.5YR7/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		5	12 竪穴住居	甕	弥生中期後葉	口径(26.0)/器高(3.8)/ 器厚0.4~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		6	12 竪穴住居	甕	弥生後期	底径(5.4)/器高(3.9)/ 器厚0.5~1.3	15%	外:体部タタキ 内:ナデ?	灰黄褐 10YR6/2	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		7	12 竪穴住居	甕	弥生後期	底径4.4/器高(3.0)/ 器厚0.6~1.4	10%	外:底部付近ナデ・体部タタキ 内:ハケ?	灰白 2.5YR/1	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
		8	12 竪穴住居	有稜高坏	弥生後期中葉	口径(27.0)/器高(4.9)/ 器厚0.5~0.7	15%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		11	9	12 竪穴住居	椀形高坏	口径(12.6)/脚径8.8/ 器高(13.0)/器厚0.5~1.1	60%	外:ハケ後ミガキ? 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		11	10	12 竪穴住居	椀形高坏	口径(12.5)/器高(9.4)/ 器厚0.3~1.1	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰 N4/	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
		11	11	12 竪穴住居	高坏	脚頂部径(5.2)/器高(13.6) 器厚0.9	20%	外:タテミガキ 内:タテハケ?	灰白 2.5YR/1	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒・角閃石含む	良好	
		12	12 竪穴住居	蓋	弥生中期後葉	つまみ径2.2/器高(4.8)/ 器厚0.3~0.8	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR7/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		13	84 土坑 (115 竪穴)	中形鉢	弥生後期	口径(26.6)/器高(4.5)/ 器厚0.7~0.9	10%	外:タテミガキ? 内:ヨコミガキ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良好	
		11	14	84 土坑 (115 竪穴)	小形鉢	底径(4.2)/器高(5.4)/ 器厚0.3~1.8	35%	外:ナデ? 内:ハケ後ナデ?	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密	良好	
		15	83 中央土坑 (115 竪穴)	甕	弥生後期	底径3.6/器高(3.1)/ 器厚0.5~1.6	50%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好	
		16	83 中央土坑 (115 竪穴)	広口壺	弥生後期	口径(18.2)/器高(6.3)/ 器厚1.0	5%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/3	やや密	良好	
		11	17	83 中央土坑 (115 竪穴)	高坏	器高(6.2)/器厚0.5~2.0	40%	外:ハケ後ミガキ/内:坏部ミ ガキ、脚部シボリ目	にぶい橙 7.5YR7/3	密	良好	
		11	18	83 中央土坑 (115 竪穴)	高坏	器高(7.0)/器厚0.6~1.0	35%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ、脚 部シボリ目	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良好	
		19	127 竪穴状遺構	椀形高坏	弥生後期	口径(13.4)/器高(3.5)/ 器厚0.4~0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 内:不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好	
		20	127 竪穴状遺構	広口壺	弥生中期	器高(2.5)/器厚0.7~1.0	5%	外:不明 内:剥離のため不明	灰黄褐 10YR4/2	密	良好	生駒 西麓
	21	127 竪穴状遺構	甕	弥生後期	底径(3.8)/器高(3.7)/ 器厚0.8~1.8	10%	外:不明・タタキ? 内:不明・ナデ?	橙 7.5YR6/6	密	良好		
29	12	22	191 中央土坑 (170 竪穴)	有稜高坏	弥生後期中葉	口径(23.2)/器高(3.7)/ 器厚0.4~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ?、以下不明 内:不明	橙 5YR6/6	やや密	良好	
	12	23	191 中央土坑 (170 竪穴)	有稜高坏	弥生後期中葉	口径(19.4)/器高(3.0)/ 器厚0.5	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好	
		24	191 土坑下層 (170 竪穴)	有稜高坏	弥生後期中葉	口径(19.0)/器高(3.4)/ 器厚0.4~0.7	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗	良好	
		25	191 中央土坑 (170 竪穴)	高坏	弥生後期中葉	器高(3.0)/器厚1.2	5%	外:タテミガキ? 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	良好	
		26	191 中央土坑 (170 竪穴)	高坏	弥生後期 前~中葉?	脚径(14.4)/器高(2.1)/ 器厚0.3~0.6	20%	外:タテミガキ?/内:裾部ヨコ ナデ、以上不明	浅黄橙 7.5YR8/4	密	良好	
		27	191 中央土坑 (170 竪穴)	広口壺?	弥生後期前葉?	口径(18.4)/器高(1.2)/ 器厚0.6~1.1	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密	良好	
	12	28	191 中央土坑 (170 竪穴)	甕	弥生後期?	口径(18.0)/器高(3.9)/ 器厚0.3~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	暗灰黄 2.5Y5/2	やや密	良好	生駒 西麓
		29	191 土坑上層 (170 竪穴)	壺?	弥生後期?	口径(10.2)/器高(8.6)/ 器厚0.6~0.8	30%	外:ナデ?/内:上位ハケ、以下 ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密	良好	
	12	30	191 中央土坑 (170 竪穴)	壺	弥生後期?	口径(10.0)/器高(5.5)/ 器厚0.4~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや粗	良好	
		31	191 中央土坑 (170 竪穴)	甕	弥生中期後葉	器高(3.0)/器厚0.7~1.3	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや粗	良好	
	12	32	191 中央土坑 (170 竪穴)	甕	弥生後期前葉	底径(5.0)/器高(3.0)/ 器厚0.8~1.2	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y6/2S	やや密	良好	
		33	191 中央土坑 (170 竪穴)	甕	弥生後期前葉	口径(3.0)/器高(3.3)/ 器厚0.5~1.4	5%	外:ナデ? 内:ナメハケ	灰黄褐 10YR5/2	密	良好	
	12	34	191 中央土坑 (170 竪穴)	甕	弥生後期前葉	底径(3.8)/器高(1.7)/ 器厚0.7~1.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密	良好	
	12	35	196 柱穴 (170 竪穴)	鉢?	弥生後期前葉	口径(34.6)/器高(2.8)/ 器厚0.5~0.6	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好	
		36	159 柱穴 (170 竪穴)	器台?	弥生後期前葉	口径(31.6)/器高(1.9)/ 器厚0.8~1.3	5%	外:不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密	良好	
		37	192 柱穴 (170 竪穴)	広口壺	弥生後期	口径(15.2)/器高(4.6)/ 器厚0.7~0.9	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	やや密	良好	
		38	175 柱穴 (170 竪穴)	壺	弥生後期前葉	口径(9.6)/器高(3.6)/ 器厚0.4~0.6	10%	外:口縁部強いヨコナデ、以下 ナデ/内:不明	橙 7.5YR6/6	密	良好	

遺物観察表(2)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
29	12	39	167 柱穴 (170 堅穴)	甕	弥生後期前葉	口径(13.4)/器高(4.7)/ 器厚0.5~0.7	20%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ?、以下不明	灰黄 2.5Y7/2	やや粗	やや 良好		
	12	40	155 柱穴 (170 堅穴)	広口壺	弥生中期後葉	器高(2.7)/器厚0.8~1.0	5%	外:不明 内:ナデ	灰黄褐 10YR5/2	やや密 1~2mm以下籾含 む	良好	生駒 西麓	
	12	41	199 土坑+ 196 柱穴 (170 堅穴)	長頸壺?	弥生後期前葉	器高(12.7)/器厚0.4~0.6	35%	外:下位タタキ、以上不明 内:下位ハケ、以上不明	明黄褐 5YR5/6	密	良好		
	12	42	157 柱穴 (170 堅穴)	甕	弥生後期 前~中葉	底径(3.8)/器高(2.8)/ 器厚0.7~1.2	10%	外:右上がりタタキ 内:ハケ?	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密	良好		
		43	155 柱穴 (170 堅穴)	高坏	弥生後期前葉	器高(5.4)/器厚0.7~0.9	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良好		
		44	169 溝 (170 堅穴)	高坏	弥生後期中葉	器高(5.0)/器厚0.6~1.3	10%	外:剥離のため調整不明 内:シボリ目、以下不明	浅黄 2.5YS7/3	密	やや 良好		
		45	169 溝 (170 堅穴)	甕	弥生中期後葉	底径(5.6)/器高(2.9)/ 器厚1.0~1.3	10%	外:体部タテハケ、底部ナデ 内:ナメハケ	黄灰 2.5Y6/1	密	良好		
		46	170 堅穴	甕	弥生後期前葉	底径(4.6)/器高(2.0)/ 器厚0.6~1.1	10%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好		
30	13	47	14 土器棺墓	甕	弥生中期末	口径34.6/器高(23.0)/ 器厚0.4~1.2	40%	外・内:口縁部ヨコナデ、以下ハ ケ	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大の長石含む	良好	棺蓋	
	13	48	14 土器棺墓	広口短頸壺	弥生中期末	口径(29.5)/底径10.3/ 器高54.9/器厚0.4~2.0	70%	外・内:口頸部ヨコナデ、以下ハ ケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	棺身	
31	13	49	39 土器棺墓	鉢	弥生中期末~ 後期初頭?	口径23.0/底径6.2/ 器高(12.0)/器厚0.4~1.0	70%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	やや密	やや 良好	棺蓋	
	13	50	39 土器棺墓	壺	弥生中期末	底径11.0/器高(46.5)/ 器厚0.6~1.3	70%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	棺身	
32	13	51	222 土器棺墓	壺	弥生中期末 ~後期?	底径5.8/器高(39.7) 器厚0.6~1.2	65%	外:剥離のため不明 内:ナデ?、胴部穿孔	褐 7.5YR4/3	やや密 1~7mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	生駒 西麓	
	13	52	90 土器棺墓	壺	弥生中期	底径7.6/器高(17.9)/ 器厚0.7~1.2	40%	外:タテハケ後タテミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/3	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒・角閃石 含む	良好		
33		53	139 土坑	甕	弥生中期末~後 期初頭?	口径(16.5)/器高(9.9)/ 器厚0.4~0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ、以下タタ キ後ナデ/内:カキトリ?	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		54	139 土坑	甕	弥生中期後葉	口径(15.4)/器高(5.6)/ 器厚0.5~0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下タテ ハケ/内:口縁部ヨコナデ、以 下ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		14	55	139 土坑	甕	弥生中期後葉	底径(7.5)/器高(16.9)/ 器厚0.4~1.7	40%	外:一部ケズリ? 内:ハケ	明黄褐 10YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		56	139 土坑	鉢	弥生中期後葉	口径(22.5)/器高(10.4)/ 器厚0.3~0.7	20%	外:口縁部凹線、以下ケズリ 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1~2mm大の長石・ チャート含む	良好		
		14	57	139 土坑	蓋	つまみ径4.7/口径(16.4) 器高7.1/器厚0.5~1.2	80%	外:ハケ?/内:口縁部ヨコナ デ、以上ハケ?	橙 2.5YR6/6	密 1~2mm大の長石・ チャート含む	良好		
		58	139 土坑	壺	弥生中期後葉	底径(6.4)/器高(8.8)/ 器厚0.4~0.8	30%	外:剥離のため不明 内:不明、一部ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		59	139 土坑	壺	弥生中期後葉	口径(13.7)/器高(8.9)/ 器厚0.5~0.9	15%	外:不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		14	60	139 土坑	小形鉢	口径(8.6)/底径4.0/器高 7.1/器厚0.4~1.0	70%	外:口縁部ヨコナデ、以下ナデ・ ケズリ/内:ナメナデ	橙 7.5YR7/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		61	110 土坑	広口壺	弥生中期後葉	口径(20.0)/器高(3.9)/ 器厚0.5~1.1	15%	外:不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR6/3	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石・雲母含む	良好	生駒 西麓	
		62	110 土坑	広口壺	弥生後期初頭	口径(21.0)/器高(6.4)/ 器厚0.4~1.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄褐 7.5YR8/4	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
		63	110 土坑	広口壺	弥生後期	口径(18.0)/器高(4.8)/ 器厚0.5~1.0	20%	外:口縁部ヨコナデ、頸部タテ ミガキ/内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		14	64	45 落ち込み	台付鉢	脚径13.4/器高(11.5)/ 器厚0.8~2.1	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	紀伊 系?	
		65	45 落ち込み	ミニチュア 土器	弥生中期?	口径3.0/器高3.6/ 器厚0.4~0.6	95%	外:ナデ 内:ナデ	灰白 2.5Y8/2	密 1mm以下の石英・長 石・チャート含む	良好		
		66	145 土坑	甕	弥生後期 前~中葉	口径(17.8)/器高(2.5)/ 器厚0.4~0.7	30%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~2mm大の長 石・石英含む	良好		
		67	145 土坑	甕	弥生後期前葉	底径6.0/器高(10.9)/ 器厚0.5~1.1	25%	外:タタキのちハケ 内:ハケ	明黄褐 10YR6/6	密 1~2mm大の長石・ チャート含む	良好		
		68	145 土坑	甕	弥生後期	器高(15.5)/器厚0.5	20%	外:タタキのち一部ハケ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		69	145 土坑	壺?	弥生後期?	底径7.0/器高(9.1)/ 器厚0.7~2.0	20%	外:剥離のため不明 内:ハケ・ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/4	やや粗 1~5mm大の石 英・長石含む	やや 軟		
		70	145 土坑	高坏	弥生後期	脚径(15.8)/器高(12.5)/ 器厚0.7~1.1	25%	外:タテミガキ? 内:不明	明黄褐 10YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		71	141 土坑	蛸壺	弥生中期後葉	口径(12.0)/器高(11.7)/ 器厚0.4~1.0	30%	外:口縁部ヨコナデ、以下ケズ リ後ハケ/内:指押さえ、ナデ	明褐 5YR5/6	やや粗	やや 良好		
		72	113 井戸	須恵器 高坏	TK10 型式	口径13.4/器高(4.7)/ 器厚0.3~1.2	50%	外:回転ナデ・カキ目? 内:回転ナデ	灰 N5/	密・精良 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
34		73	17 土坑	甕	弥生中期後葉	口径(35.4)/器高(11.4)/ 器厚0.9~1.3	15%	外:体部ヨコハケ? 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや密 1~8mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
		74	17 土坑	甕	弥生中期後葉	口径(28.4)/器高(7.7)/ 器厚0.5~0.8	20%	外:口縁ヨコナデ、以下不明 内:不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・赤彩粒・角閃石 含む	良好		
	14	75	17 土坑	甕	弥生中期中頃	口径13.8/器高(11.4)/ 器厚0.5	25%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 内:口縁部ヨコナデ、以下ハケ	浅黄橙 7.5YR8/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		

遺物観察表(3)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
34		76	17 土坑	鉢	弥生中期後葉	口径(27.2)/器高(5.9)/ 器厚0.4~1.2	10%	外:不明 内:不明	灰白 10YR8/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		77	17 土坑	高坏	弥生中期後葉	口径(21.2)/器高(5.5)/ 器厚0.8	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y7/1	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		78	17 土坑	壺	弥生中期	底径7.5/器高(4.7)/ 器厚0.4~1.8	15%	外:一部ハケ残存 内:粗いハケ	灰黄褐 10YR4/2	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		79	17 土坑	広口短頸壺	弥生中期後葉	口径(20.2)/器高(5.0)/ 器厚0.6~1.5	35%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ 内:ナデ?指押え	灰白 10YR8/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		80	17 土坑	広口長頸壺	弥生中期後葉	口径(20.0)/器高(8.8)/ 器厚0.5~1.2	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		81	17 土坑	広口短頸壺	弥生中期後葉	口径(17.2)/器高(4.5)/ 器厚0.5~0.8	15%	外:不明/内:口縁部ナデ、以下 不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		82	17 土坑	直口壺	弥生中期?	口径(10.8)/器高(5.3)/ 器厚0.5	35%	外:剥離のため不明、ハケ? 内:不明	灰白 2.5Y8/1	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		83	17 土坑	甕	弥生中期	口径(5.0)/器高(2.6)/ 器厚0.4~1.0	10%	外:タテハケ?、底部不明 内:不明	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		84	22 土坑	甕?	弥生中期	底径(6.6)/器高(1.3)/ 器厚0.4~1.1	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		85	22 土坑	高坏	弥生後期?	器高(5.3)/器厚0.2~1.1	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	やや 良好	
		86	23 落ち込み	広口壺	弥生中期中葉	口径(13.0)/器高(6.1)/ 器厚0.5~1.2	30%	外:タテハケ 内:ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	密 1~3mm大の長石・ チャート等含む	良好	摂津 系?
		87	23 落ち込み	広口短頸壺	弥生中期中葉	口径(7.1)/器高(5.5)/ 器厚0.5	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石・赤彩粒 等含む	良好	
		88	23 落ち込み	壺	弥生中期中葉	底径5.9/器高(14.2)/ 器厚0.4~1.3	30%	外:ナデ? 内:ナデ?	明黄褐 10YR7/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
	35		89	18 井戸 2層	甕	布留1式新~ 2式	口径15.0/器高24.9/ 器厚0.3~0.5	70%	外:口縁部ナデ、体部ハケ/内: 口縁部ナデ、体部ケズリ	灰白 2.5Y8/2	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好
		90	18 井戸 2層	甕	布留1式新~ 2式	口径(14.3)/器高(7.2)/ 器厚0.3~0.7	25%	外:口縁部ヨコナデ、体部タテ ハケ後ヨコハケ/内:口縁部ヨ コナデ、体部ケズリ	灰白 10YR7/1	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	肩部 刺突
		91	18 井戸 2層	複合口縁壺	布留1式新~ 2式	口径(14.4)/器高(10.8)/ 器厚0.4~0.5	30%	外:不明/内:口縁部不明、体部 ケズリ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		92	18 井戸 2層	小形甕	布留1式新~ 2式	口径(10.4)/器高(12.0)/ 器厚0.5~0.9	55%	外:口縁ヨコナデ、体部ナデ? 内:口縁ヨコナデ、体部ケズリ・ ナデ?指押え	黄灰 2.5Y6/1	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒・角閃石含む	良好	
		93	18 井戸 2層	外反高坏	布留1式新~ 2式	器高(4.8)/器厚0.4~1.0	20%	外:柱部タテミガキ?、裾部ハ ケ?/内:柱部ナデ?、裾部不明	灰白 10YR8/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		94	18 井戸 2層	外反高坏	布留1式新~ 2式	口径(16.1)/器高13.5/ 脚径(13.2)/器厚0.4~0.7	40%	外:不明/内:坏部不明、脚部一 部ハケ	灰白 10YR8/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・赤色粒・角閃石 含む	やや 良好	
		95	18 井戸 2層	外反高坏	布留1式新~ 2式	口径(13.3)/器高(9.3)/ 器厚0.3~1.0	60%	外:不明/内:不明、脚柱部シボ リ目	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1~5mm大の石 英・長石含む	良好	
		96	18 井戸 2層	外反高坏	布留1式新~ 2式	口径14.7/器高(5.3)/ 器厚0.3~1.2	30%	外:ハケ(一部ケズリ)後ミガキ 内:ナデ後ミガキ	灰白 2.5Y7/1	密 1~2mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		97	18 井戸 4層	高坏	弥生中期後葉	脚径(19.6)/器高(2.1)/ 器厚0.5~1.5	10%	外:ナデ 内:ナデ	灰褐 7.5YR6/2	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		98	18 井戸 3~5層	壺	弥生中期	器高(3.3)/器厚0.6	5%	外:ナデ 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
36		99	104 溝	広口壺	弥生中期後葉	口径(29.4)/器高(4.3)/ 器厚1.2~2.5	15%	外:不明 内:ナデ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		100	104 溝	高坏	弥生中期中頃	脚径8.2/器高(10.1)/ 器厚0.4~1.3	40%	外:剥離のため不明 内:裾部指頭丘痕・柱部シボ リ目	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~3mm大の石英・長 石・赤色粒含む	良好	
		101	104 溝?	短頸壺?	弥生後期前葉	口径9.4/器高(11.8)/ 器厚0.4~0.7	80%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の長 石・チャート含む	良好	
		102	104 溝	高坏	弥生後期中葉	口径(24.0)/器高(4.0)/ 器厚0.5~0.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		103	104 溝	高坏	弥生後期末	口径(20.0)/器高(4.5)/ 器厚0.3~0.6	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	褐 7.5YR7/6	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		104	216 溝	甕	弥生中期後葉	口径(35.0)/器高(5.5)/ 器厚0.5~1.5	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y7/1	粗 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		105	216 溝	広口壺	弥生中期後葉	口径(26.2)/器高(3.7)/ 器厚0.5~0.7	20%	外:ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	暗褐 7.5YR3/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・雲母・角閃石含 む	良好	生駒 西麓
		106	216 溝	広口壺	弥生中期後葉~ 後期中葉?	口径(23.6)/器高(2.8)/ 器厚0.8~2.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	赤褐 10R5/4	やや粗 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		107	216 溝	広口壺	弥生中期後葉	口径(19.0)/器高(5.3)/ 器厚0.5~1.1	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		108	216 溝	甕	弥生後期前葉	底径(4.8)/器高(22.0)/ 器厚0.5~1.8	50%	外:胴部中位以上タタキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		109	16 溝	甕	弥生中期後葉	口径(37.0)/器高(8.6)/ 器厚0.4~1.1	15%	外:剥離のため不明 内:ハケ	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		110	16 溝	段状口縁壺	弥生中期後葉	口径(22.0)/器高(6.0)/ 器厚0.9~1.0	20%	外:不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		111	56 溝	高坏	布留式?	器高(3.8)/器厚0.3~1.0	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
37		112	64 溝西部 上層上部	段状口縁壺	弥生中期後葉	口径(28.8)/器高(5.3)/ 器厚0.7~1.3	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好	

遺物観察表(4)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
37		113	64 溝西部 上層上部	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(26.6)/器高(4.6)/ 器厚0.6~1.1	20%	外:ヨコナデ? 内:ミガキ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		114	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生中期後葉	口径(15.8)/器高(5.7)/ 器厚0.4~0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	黒褐 2.5Y3/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	やや 良好	生駒 西麓
		115	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径(24.7)/器高(1.5)/ 器厚0.5~1.5	10%	外:頸部ハケ 内:剥離のため不明	暗灰黄 2.5Y5/2	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
		116	64 溝西部 上層上部	加飾 二重口縁壺	庄内式	器高(6.4)/器厚0.8~1.2	15%	外:ヨコナデ後ミガキ 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		117	64 溝西部 上層上部	二重口縁壺	弥生後期後葉	口径(17.2)/器高(5.0)/ 器厚0.6~1.1	10%	外:ヨコナデ・ナデ? 内:ヨコナデ・ナデ?ミガキ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良好	
		118	64 溝西部 上層上部	壺	弥生後期?	口径23.9/器高(15.5)/ 器厚0.8	20%	外:頸部ミガキ 内:ミガキ	灰白 10YR8/2	やや密 1~5mm大の石 英・長石含む	良好	
		119	64 溝西部 上層上部	広口短頸壺	弥生中期末	口径(19.0)/器高(7.7)/ 器厚0.4~1.0	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR7/6	やや密	良好	
		120	64 溝西部 上層上部	広口短頸壺	弥生中期後葉	口径(18.0)/器高(5.1)/ 器厚0.7~1.0	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
		121	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(17.4)/器高(5.8)/ 器厚0.6~0.9	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密	良好	
		122	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生後期中葉	口径(14.0)/器高(5.0)/ 器厚0.5~0.9	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/4	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好	
		123	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生後期	口径(15.1)/器高(3.9)/ 器厚0.6~1.0	25%	外:口縁部ヨコナデ?、以下タテ ミガキ/内:ヨコミガキ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~5mm大の長 石・チャート含む	良好	
		124	64 溝西部 上層上部	壺	弥生中期?	底径(8.0)/器高(3.9)/ 器厚0.4~1.0	15%	外:体部ミガキ?、底部ナデ 内:ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密	良好	
		125	64 溝西部 上層上部	壺	弥生後期末~ 庄内式	底径4.6/器高(4.1)/ 器厚0.6~1.5	20%	外:体部ミガキ 内:ハケ	橙 7.5YR6/6	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		126	64 溝西部 上層上部	広口壺?	弥生後期中葉	口径(18.4)/器高(2.7)/ 器厚0.4~0.6	10%	外:不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1~3mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		127	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生後期中~ 後葉	口径(14.8)/器高(6.3)/ 器厚0.5~0.9	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:口縁部ミガキ?、頸部ナ デ?	浅黄 2.5Y8/3	密 1mm大の長石・雲母含 む	良好	
		128	64 溝西部 上層上部	広口短頸壺	弥生中期後葉	口径(32.2)/器高(6.7)/ 器厚0.8~2.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		129	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生中期後葉	口径(29.6)/器高(2.7)/ 器厚0.5~0.9	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄褐 10YR5/6	やや密 1~2mm大の長 石・雲母含む	良好	生駒 西麓
		130	64 溝西部 上層上部	太頸壺	弥生中期後葉	口径(35.6)/器高(6.4)/ 器厚0.4~1.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	黄褐 2.5Y5/3	やや密 1mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	生駒 西麓
		131	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生中期後葉	口径(24.0)/器高(6.1)/ 器厚0.5~0.7	15%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石・雲母含 む	良好	生駒 西麓
		132	64 溝西部 上層上部	高坏?	弥生中期	口径(25.2)/器高(4.8)/ 器厚0.6	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい褐 7.5YR6/3	やや密 1~7mm大の長 石・雲母含む	やや 良好	
	133	64 溝西部 上層上部	甕	弥生中期中葉	口径(34.0)/器高(15.6)/ 器厚0.5~1.5	10%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、以下不明	橙 5Y6/6	やや密	良好		
38		134	64 溝西部 上層上部	段状口縁壺	弥生中期後葉	口径(39.6)/器高(26.0)/ 器厚0.7~1.2	20%	外:不明 内:摩滅のため不明	にぶい橙 5YR7/4	やや粗 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		135	64 溝西部 上層上部	広口壺	弥生中期後葉	口径(31.8)/器高(11.5)/ 器厚0.9~1.2	20%	外:頸部ミガキ 内:不明	明赤褐 5YR5/6	密 1~4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		136	64 溝西部 上層上部	広口短頸壺	弥生中期後葉	口径(29.9)/器高(12.0)/ 器厚0.8~2.0	15%	外:頸部ミガキ 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
39		17 137	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(17.0)/底径(4.2)/ 器高25.8/器厚0.4~1.3	80%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		138	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後葉	口径(17.3)/器高(20.6)/ 器厚0.5~0.7	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~5mm大の石 英・長石含む	良好	
		139	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期末~ 庄内式初頭	口径(17.1)/器高(12.4)/ 器厚0.3~0.5	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、以下 不明	浅黄橙 7.5YR8/3	やや粗 1~4mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	やや 良好	
		140	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式	底径3.8/器高(19.6)/ 器厚0.4~0.9	30%	外:タタキ 内:剥離のため不明	褐 7.5YR4/3	やや粗 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		17 141	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式初頭	口径(15.8)/底径(3.8)/ 器高20.6/器厚0.4~0.9	50%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 ハケ	にぶい橙 5YR6/4	やや密 1~4mm大の石 英・赤彩粒含む	やや 良好	
		18 142	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式初頭	口径(14.8)/底径2.8/器高 16.9/器厚0.4~0.8	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ?	浅黄橙 7.5YR8/6	やや粗 1~5mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	やや 良好	
		143	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式初頭	底径3.0/器高(17.7)/ 器厚0.4~0.8	65%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	黄灰 2.5Y6/1	やや粗 1~5mm大の長 石・チャート含む	やや 良好	
		144	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.6/器高(15.5)/ 器厚0.5~1.2	35%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
		145	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径(17.8)/器高(3.4)/ 器厚0.5~0.7	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ?/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の長石 含む	良好	
		146	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後半~ 庄内式前半	口径(16.6)/器高(3.7)/ 器厚0.3~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1~3mm大の長 石・赤彩粒含む	良好	
	147	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後半~ 庄内式前半	底径3.8/器高(15.3)/ 器厚0.6~1.1	30%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	148	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期末~ 庄内式前半	底径4.1/器高(7.0)/ 器厚0.4~1.1	15%	外:体部タタキ 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/1	やや粗 1~3mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	良好		

遺物観察表 (5)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
39		149	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後半～ 庄内式前半	底径4.0/器高(7.6)／ 器厚0.4～1.5	20%	外:タタキ 内:ハケ?	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 1～3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		150	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式	底径3.0/器高(5.7)／ 器厚0.4～1.3	15%	外:体部タタキ 内:ハケ	浅黄橙 7.5YR8/5	やや粗 1～4mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	良好	
		151	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後半～ 庄内式前半	底径4.6/器高(6.4)／ 器厚0.3～1.4	20%	外:タタキ 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/4	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・角閃石・赤彩粒	良好	
		152	64 溝西部 上層上部	甕	弥生後期後半～ 庄内式前半	底径(4.8)／器高(3.6)／ 器厚0.5～1.2	20%	外:タタキ 内:剥離のため不明	浅黄 7.5YR8/3	やや密 1mm大の長石・赤 彩粒含む	良好	
		153	64 溝西部 上層上部	甕	庄内式初頭	底径3.4/器高(9.1)／ 器厚0.3～1.5	50%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～4mm大の長 石・赤彩粒含む	良好	
40		19 154	64 溝西部 上層上部	中形鉢	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径29.6/底径4.2/器 高20.2/器厚0.6～1.6	80%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:ヨコミガキ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1～5mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		155	64 溝西部 上層上部	中形鉢	弥生後期後半～ 庄内式	口径(28.0)／器高(7.7)／ 器厚0.3～0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 /内:不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		156	64 溝西部 上層上部	台付鉢	弥生中期後半	口径(33.6)／器高(6.5)／ 器厚0.4～1.1	15%	外:不明 内:剥離のため不明	黄褐 2.5Y5/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石・赤彩粒	良好	生駒 西麓
		19 157	64 溝西部 上層上部	小形鉢	弥生後期末前後	口径(17.9)／底径4.0/器 高6.9/器厚0.4～1.3	70%	外:タタキ後口縁部ナデ? 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR5/4	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート・赤彩粒含む	良好	
		158	64 溝西部 上層上部	台付鉢?	弥生後期後半～ 庄内式	器高(7.2)／器厚0.3～1.3	40%	外:タタキ 内:ナデ?	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好	
		19 159	64 溝西部 上層上部	鉢	庄内式中頃	口径9.6/底径3.1/器高6.9 /器厚0.3～0.6	95%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハ ケ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1～3mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	良好	
		160	64 溝西部 上層上部	小形鉢	庄内式中頃	口径(8.8)／底径2.7/器 高6.5/器厚0.3～0.6	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部不明 /内:口縁部ヨコナデ、体部ハ ケ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～5mm大の長 石・赤彩粒含む	良好	
		161	64 溝西部 上層上部	有孔鉢	弥生後期中葉～ 庄内式	底径(4.1)／器高(2.8)／ 器厚0.5～1.2	10%	外:タタキ 内:ナデ?	明褐 7.5YR5/6	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		19 162	64 溝西部 上層上部	小形鉢	庄内式中頃	口径8.9/底径2.4/器高6.2 /器厚0.2～0.6	95%	外:タタキ後ナデ? 内:ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート・赤彩	良好	
		163	64 溝西部 上層上部	小形鉢	庄内式中頃	底径2.8/器高(6.0)／ 器厚0.2～0.8	70%	外:タタキ 内:剥離のため不明	浅黄 10YR8/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石・チャート・赤彩	やや 良好	
		164	64 溝西部 上層上部	小形鉢	庄内式	底径3.1/器高(5.1)／ 器厚0.4～1.1	95%	外:ナデ? 内:ハケ?	浅黄橙 7.5YR8/3	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・チャート・赤彩	良好	
		19 165	64 溝西部 上層上部	有孔鉢	弥生後期後半～ 庄内式前半	底径3.8/器高12.7/器 厚0.4～1.1	70%	外:タタキ 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石・赤彩粒	良好	
		166	64 溝西部 上層上部	有稜高坏	弥生後期末	口径(18.4)／器高(6.7)／ 器厚0.4～0.6	15%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	やや密 1～3mm大の石 英・チャート含む	良好	
		167	64 溝西部 上層上部	有稜高坏	庄内式前半	器高(4.3)／器厚0.4～0.6	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/3	密 1～2mm大の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好	
		168	64 溝西部 上層上部	有稜高坏	弥生後期末	器高(11.7)／器厚0.5～1.5	55%	外:坏部不明、脚部ミガキ/内: 坏部ミガキ?、脚部ナデ?	褐 7.5YR4/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好	
		169	64 溝西部 上層上部	小形器台?	庄内式前半	器高(5.7)／器厚0.4～1.2	30%	外:タテミガキ 内:ナデ?	灰白 10YR8/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		170	64 溝西部 上層上部	高坏	庄内式前半	器高(5.7)／器厚0.5	30%	外:タテミガキ 内:ハケ	黄橙 2.5Y8/3	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好	
		171	64 溝西部 上層上部	高坏	弥生後期後半	器高(9.8)／器厚0.3～3.0	30%	外:ミガキ 内:坏部不明、脚部ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
		172	64 溝西部 上層上部	高坏	庄内式前半	器高(6.3)／器厚0.5	30%	外:タテミガキ 内:ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の長石・チャ ート・赤彩粒含む	良好	
		173	64 溝西部 上層上部	高坏	庄内式	器高(4.6)／器厚0.4～4.3	10%	外:ハケ/内:脚部ハケ、坏部ミ ガキ?	浅黄橙 10YR8/3	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
	174	64 溝西部 上層上部	碗形高坏	庄内式初頭	器高(2.5)／器厚0.4～1.2	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/4	やや粗 1～4mm大の長 石・チャート含む	良好		
	175	64 溝西部 上層上部	高坏	弥生後期末前後	脚径(15.6)／器高(8.2)／ 器厚0.3～1.4	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明黄褐 10YR7/6	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート・赤彩粒含む	良好		
	176	64 溝西部 上層上部	碗形高坏?	庄内式	脚径18.8/器高(4.3)／ 器厚0.8～2.1	25%	外:ミガキ 内:ミガキ	灰白 10YR8/1	密 1～4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
	177	64 溝西部 上層上部	手焙形 土器?	弥生後期後半～ 庄内式中頃	器高(9.3)／器厚0.4～0.9	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密	良好		
	178	64 溝西部 上層上部	器台?	弥生後期後半	器高(9.6)／器厚0.6～1.3	40%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート・赤彩粒含む	良好		
	179	64 溝西部 上層上部	器台?	弥生後期前半	脚径(14.1)／器高(4.0)／ 器厚0.7～1.1	10%	外:ナデ? 内:ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好		
	180	64 溝西部 上層上部	高坏?	弥生中期後半?	器高(3.6)／器厚0.4～0.9	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	181	64 溝西部 上層上部	蛸壺	庄内式	器高(7.8)／器厚0.4～0.9	40%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	暗灰黄 2.5Y5/2	密 1～2mm大の長石含む	やや 良好		
41		16 182	64 溝西部 上層下部	広口壺?	庄内式	口径(14.4)／底径3.2/器 高(24.0)／器厚0.5～1.7	70%	外:体部ミガキ 内:ナデ・ハケ?	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		15 183	64 溝西部 上層下部	壺	弥生後期後半～ 庄内式	底径4.2/器高(16.3)／ 器厚0.5～1.5	80%	外:剥離のため不明 内:ハケ・ナデ	赤褐 5YR4/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石含む	良好	
		16 184	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生後期末	口径(13.8)／器高(13.2)／ 器厚0.4～0.7	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		185	64 溝西部 上層下部	長頸壺	弥生後期後半	口径(13.0)／器高(8.5)／ 器厚0.5～0.6	20%	外:口縁部ナデ?ハケ、体部タ タキ/内:口縁部ナデ?、体部ナ デ?	にぶい黄橙 10YR5/4	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		186	64 溝西部 上層下部	長頸壺?	弥生後期後半	口径(13.4)／器高(6.7)／ 器厚0.6～1.0	20%	外:ナデ?/内:口縁部ヨコナ デ、以下ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1～8mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	

遺物観察表(6)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
41		187	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生後期～ 庄内式	口径(10.4)/器高(5.8)/ 器厚0.5～0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	赤明褐 5YR5/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
		188	64 溝西部 上層下部	長頸壺?	弥生後期	口径(14.6)/器高(9.1)/ 器厚0.5～0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ?・頸部ミガキ 内:不明	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
		189	64 溝西部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(17.4)/器高(14.0)/ 器厚0.7～1.0	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部タテ ハケ/内:口縁ヨコナデ?、頸部 ハケ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		190	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(18.8)/器高(8.1)/ 器厚0.5～0.9	30%	外:頸部タテミガキ 内:剥離のため不明	暗褐 10YR3/3	やや粗 1～4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		191	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(15.8)/器高(5.4)/ 器厚0.6～0.8	30%	外:頸部ミガキ 内:不明	灰白 10YR8/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		192	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(14.2)/器高(5.6)/ 器厚0.5～0.7	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR6/4	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好		
		193	64 溝西部 上層下部	壺	庄内式	底径3.2/器高(4.3)/ 器厚0.3～1.0	20%	外:タテミガキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好		
		194	64 溝西部 上層下部	壺?	弥生後期後葉～ 庄内式	底径(3.6)/器高(3.7)/ 器厚0.4～1.2	20%	外:ミガキ 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		195	64 溝西部 上層下部	広口壺	弥生中期後葉	口径(28.0)/器高(6.2)/ 器厚0.4～0.8	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	暗褐 7.5YR3/4	やや密 1～5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	生駒 西麓	
		196	64 溝西部 上層下部	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(49.0)/器高(4.6)/ 器厚0.5～1.2	10%	外:ナデ? 内:ナデ?、ミガキ	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1～6mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		197	64 溝西部 上層下部	広口壺?	庄内式?	口径(34.4)/器高(4.3)/ 器厚0.5～0.7	10%	外:ミガキ 内:ミガキ	浅黄橙 10YR8/3	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		198	64 溝西部 上層下部	二重口縁壺	弥生後期末～ 庄内式	口径(23.4)/器高(5.0)/ 器厚0.7～1.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	褐 7.5YR4/3	やや粗 1～8mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		199	64 溝西部 上層下部	二重口縁壺	庄内式	口径(21.2)/器高(7.3)/ 器厚0.5～0.8	20%	外:タテミガキ 内:ヨコミガキ	灰白 10YR8/2	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		200	64 溝西部 上層下部	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(26.6)/器高(4.2)/ 器厚0.6～1.1	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR6/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	縦凸 帯	
		201	64 溝西部 上層下部	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(25.8)/器高(3.5)/ 器厚0.6～1.4	10%	外:ナデ? 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
	42		202	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末～ 庄内式	口径(18.0)/器高(23.3)/ 器厚0.4～0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	褐 7.5YR4/3	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
			203	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(15.4)/底径4.4/ 器高22.9/器厚0.5～1.2	90%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ?	にぶい黄橙 10YR4/3	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	胴部 穿孔
			204	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末	口径14.0/底径4.6/ 器高22.3/器厚0.5～1.3	95%	外:タタキ 内:ハケ、ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
			205	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(16.2)/器高(15.7)/ 器厚0.3～0.5	40%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:不明	暗褐 7.5YR3/3	粗 1～5mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		206	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(18.4)/器高(15.1)/ 器厚0.5～0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ	にぶい黄橙 10YR5/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		207	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(15.8)/器高(10.0)/ 器厚0.4～0.5	30%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 ハケ?	暗褐 10YR3/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		208	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(16.2)/器高(9.4)/ 器厚0.5～0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1～5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		209	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径(4.6)/器高(7.4)/ 器厚0.6～1.2	30%	外:体部タタキ、底部ナデ? 内:ナデ?	赤褐 2.5YR4/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		210	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末～ 庄内式初頭	底径4.4/器高(11.4)/ 器厚0.5～1.9	40%	外:タタキ 内:ハケ	灰黄 2.5Y6/2	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好		
		211	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末	底径4.0/器高(8.1)/ 器厚0.6～1.8	40%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好		
		212	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期末	底径4.4/器高(16.6)/ 器厚0.5～1.2	25%	外:タタキ 内:剥離のため不明	にぶい褐 7.5YR7/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		213	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径4.2/器高(3.7)/ 器厚0.5～1.2	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		214	64 溝西部 上層下部	甕	弥生後期 中～後葉	底径4.8/器高(6.5)/ 器厚0.6～1.5	20%	外:体部タタキ、底部ナデ 内:ナデ?	褐 7.5YR4/3	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好		
		215	64 溝西部 上層下部	甕	庄内式中頃	底径2.6/器高(8.1)/ 器厚0.4～0.7	30%	外:体部タタキ、底部ナデ 内:ハケ?	灰褐 7.5YR4/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		216	64 溝西部 上層下部	甕?	庄内式中頃	底径2.8/器高(4.5)/ 器厚0.6～1.1	20%	外:体部タタキ、底部ナデ? 内:ナデ?	赤褐 5YR4/6	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
	217	64 溝西部 上層下部	甕?	庄内式初頭	口径(14.6)/器高16.0/ 器厚0.4～1.2	80%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 ハケ?	明赤褐 2.5YR5/6	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好			
43		218	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期末	口径(21.6)/器高(3.5)/ 器厚0.4～0.5	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		219	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期末	口径(21.2)/器高(4.4)/ 器厚0.3～0.5	15%	外:剥離のため不明 内:ヨコミガキ	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～6mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
		220	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(20.6)/器高(5.9)/ 器厚0.5～0.6	20%	外:タテミガキ 内:ヨコミガキ、タテミガキ	赤褐 5YR4/6	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		221	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期末	口径(18.2)/器高(5.1)/ 器厚0.5～0.6	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		222	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径18.4/器高(5.1)/ 器厚0.5～0.8	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		223	64 溝西部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(16.2)/器高(7.6)/ 器厚0.4～1.0	50%	外:坏部ミガキ、脚部ミガキ 内:坏部不明、脚部シボリ目	赤褐 5YR4/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		

遺物観察表 (7)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
43		224	64 溝西部 上層下部	高坏?	庄内式	器高(5.0)/器厚1.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	赤褐 2.5YR4/8	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好	
		225	64 溝西部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	器高(6.8)/器厚0.5~1.5	30%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい赤褐 5YR5/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		226	64 溝西部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径(11.6)/器高(7.9)/ 器厚0.3~0.8	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		227	64 溝西部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径(11.4)/器高(6.5)/ 器厚0.6~0.9	30%	外:ミガキ 内:ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
		228	64 溝西部 上層下部	高坏	庄内式前半	脚径(13.0)/器高(6.0)/ 器厚0.5	40%	外:脚柱部ミガキ、以下不明 内:ハケ?	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		229	64 溝西部 上層下部	高坏	庄内式前半	脚径(11.8)/器高(6.4)/ 器厚0.5~3.0	40%	外:ミガキ 内:ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		230	64 溝西部 上層下部	大形鉢?	弥生後期後葉	器高(10.7)/器厚0.5~0.8	5%	外:口縁部以下ミガキ 内:ミガキ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~7mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		231	64 溝西部 上層下部	手焙形土器	弥生後期末 ~庄内式中頃	器高(4.7)/器厚0.4~1.2	5%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄褐 10YR5/2	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
		232	64 溝西部 上層下部	鉢?	弥生後期?	底径6.2/器高(3.6)/ 器厚0.9~1.5	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい赤褐 5YR4/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
	18	233	64 溝西部 中層下部	器台	弥生後期 中~後葉	口径15.8/脚径(15.4)/ 器高9.4/器厚0.4~1.0	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/2	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
44		234	64 溝西部 下層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径(27.8)/器高(7.5)/ 器厚1.0	10%	外:頸部ミガキ 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		235	64 溝西部 下層	段状口縁壺	弥生中期後葉	口径(26.8)/器高(4.3)/ 器厚0.5~0.8	5%	外:不明 内:摩擦のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
	16	236	64 溝西部 下層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径21.2/器高(8.7)/ 器厚0.7~1.4	20%	外:頸部タテハケ後ミガキ 内:頸部ミガキ?、体部ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		237	64 溝西部 下層	広口壺	弥生後期後葉?	口径(15.2)/器高(11.3)/ 器厚0.7~0.8	25%	外:口縁部ヨコナデ、以下ハケ 後ミガキ、内:不明	浅黄橙 10YR6/3	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		238	64 溝西部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径13.0/器高(3.6)/ 器厚0.6~0.8	20%	外:口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	淡黄 2.5YR8/3	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
	16	239	64 溝西部 下層	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.8/器高(16.6)/ 器厚0.4~2.0	80%	外:剥離のため不明 内:ナデ・ハケ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~6mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
	16	240	64 溝西部 下層	細頸直口壺	庄内式初頭	底径1.5/器高(16.1)/ 器厚0.6~1.2	90%	外:タテミガキ/内:頸部ヨコ ナデ、体部ナデ?	淡黄 2.5Y8/3	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		241	64 溝西部 下層	壺	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.0/器高(11.0)/ 器厚0.5~1.6	30%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		242	64 溝西部 下層	不明	不明	器高(8.6)/器厚0.9~1.0	10%?	外:タタキ、ナデ 内:ハケ後ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
	18	243	64 溝西部 下層	甕	弥生後期後葉	口径(13.6)/底径3.9/器高 22.6/器厚0.4~1.6	90%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
	244	64 溝西部 下層	甕?	弥生後期後葉	底径4.8/器高(15.7)/ 器厚0.4~1.8	70%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
	245	64 溝西部 下層	甕	弥生後期後葉	口径(15.2)/底径5.2/ 器高18.2/器厚0.4~1.5	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	246	64 溝西部 下層	甕	庄内式初頭	底径4.6/器高(10.5)/ 器厚0.5~1.6	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ハケ?、体部ナ デ?	灰黄 2.5Y6/2	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	247	64 溝西部 下層	甕	弥生後期末	底径2.0/器高(10.6)/ 器厚0.4~1.4	40%	外:タタキ 内:剥離のため不明	灰黄褐 10YR5/2	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
19	248	64 溝西部 下層	中形鉢	弥生後期 後葉~末	口径(25.6)/底径4.0/ 器高11.0/器厚0.5~1.2	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 後ミガキ、内:体部ハケ後ミ ガキ?	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	249	64 溝西部 下層	鉢	弥生後期後葉	口径(19.2)/器高(9.1)/ 器厚0.4~0.7	30%	外:タタキ 内:ハケ	黄灰 2.5Y5/1	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
	250	64 溝西部 下層	鉢?	弥生後期末	底径2.8/器高(7.2)/ 器厚0.4~1.0	40%	外:タタキ 内:ハケ?	褐灰 10YR5/1	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
45	251	64 溝西部 下層	器台	弥生後期前葉	脚径(19.4)/器高(10.2)/ 器厚0.8~1.4	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
	252	64 溝西部 下層	高坏	弥生後期後葉	口径(18.6)/器高(5.5)/ 器厚0.4~0.6	25%	外:ミガキ 内:ミガキ?	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	253	64 溝西部 下層	椀形高坏	弥生後期末	口径(14.4)/器高(9.6)/ 器厚0.3~1.6	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/8	やや密 1mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
	254	64 溝西部 下層	高坏	庄内式初頭	器高(5.3)/器厚0.5~2.7	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
	255	64 溝西部 下層	高坏	弥生後期 中~後葉	器高(11.1)/器厚0.6~1.6	40%	外:ハケ後ミガキ 内:ハケ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
	256	64 溝西部 下層	高坏	弥生後期中葉	脚径10.2/器高(8.0)/ 器厚0.4~1.2	45%	外:脚部ミガキ 内:脚部ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
19	257	64 溝西部 下層	有稜高坏	弥生後期前葉	器高(13.7)/器厚0.3~1.0	70%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
	258	64 溝西部 下層	高坏	弥生後期 前~中葉	脚径10.6/器高(5.6)/ 器厚0.5~1.0	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	259	64 溝西部 下層	高坏	弥生中期後葉	脚径6.6/器高(6.1)/ 器厚0.3~0.8	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰黄褐 10YR6/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好		
	260	64 溝西部	広口長頸壺	弥生後期 中~後葉	口径(15.6)/器高(10.7)/ 器厚0.6~0.9	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部タテ ミガキ/内:口縁部ヨコミガ キ、頸部ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良好		

遺物観察表 (8)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
45		261	64 溝西部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式初頭	口径(17.6)/器高(7.5)/ 器厚0.4～0.7	25%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR6/2	密 1～4mm大の石英・長 石・雲母含む	良好	
		262	64 溝西部	甕?	弥生後期後葉	底径(5.0)/器高(4.4)/ 器厚0.4～1.3	10%	外:タタキ・ナデ?/内:剥離の ため不明・ナデ?	にぶい橙 7.5YR/3	やや密 1～2mm大の長 石・雲母含む	良好	
		263	64 溝西部	高坏	庄内式初頭	器高(6.4)/器厚0.5～1.5	40%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:坏部ハケ、脚部ハケ	灰黄 2.5Y7/2	密 1～2mm大の長石含む	良好	
		264	64 溝西部	高坏	弥生後期前葉	器高(13.0)/器厚0.7～2.1	20%	外:ミガキ 内:ナデ?	灰黄褐 10YR6/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		265	64 溝西部	鉢	弥生後期後葉～ 庄内式中頃	口径(9.8)/底径3.6/器高 6.1/器厚0.3～1.3	60%	外:ナデ? 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
20		266	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉 ～庄内式	口径15.8/底径4.5/ 器高25.6/器厚0.5～1.6	90%	外:口縁～体部上半不明、体部 下半タタキ後ナデ?/内:口縁 ～体部上半不明、体部下半ハケ	にぶい橙 5YR7/4	密 1～2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		267	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉 ～庄内式	口径(13.5)/器高(6.5)/ 器厚0.5～1.1	20%	外:口縁部ヨコナデ?、体部不明 内:口縁部ヨコナデ?、体部ナ デ?	灰白 10YR8/2	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	やや 良好	
		268	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(15.0)/器高(6.7)/ 器厚0.5～0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ、体部ミガキ/内:口縁部ヨ コナデ?、頸部ミガキ、体部ナ デ?	明褐 7.5YR5/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		269	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径15.6/器高(6.6)/ 器厚0.5～0.8	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/6	密 1mm大の石英・長石含 む	やや 良好	
		270	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(14.8)/器高(7.3)/ 器厚0.4～0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	密 1～2mm大の長石・ チャート含む	やや 良好	
		271	64 溝中央部 上層上部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(23.4)/器高(6.8)/ 器厚0.4～1.2	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	やや 良好	
		272	64 溝中央部 上層上部	直口壺	布留式	口径(18.4)/器高(7.9)/ 器厚0.4～0.8	10%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	混入
		273	64 溝中央部 上層上部	小形壺	庄内式	底径2.4/器高(7.1)/ 器厚0.3～0.9	75%	外:ナデ? 内:ナデ?	褐 7.5YR4/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石含む	良好	
		274	64 溝中央部 上層上部	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(20.4)/器高(7.2)/ 器厚0.7～1.0	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ヨコ ナデ後ミガキ 内:口縁部ヨコナデ、頸部ヨコ ナデ後ミガキ?	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		275	64 溝中央部 上層上部	二重口縁壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(21.8)/器高(4.1)/ 器厚0.4～0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/8	密 1mm大の石英・長石含 む	やや 良好	
		276	64 溝中央部 上層上部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(12.0)/器高(6.6)/ 器厚0.3～0.6	40%	外:剥離のため不明 内:口縁部不明、体部一部ケズ リ	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1～3mmの石英・ 長石・赤彩粒含む	良好	
		277	64 溝中央部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径3.8/器高(6.3)/ 器厚0.5～2.2	15%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好	
	46		278	64 溝中央部 上層上部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.6/器高(5.5)/ 器厚0.5～1.6	15%	外:タタキ 内:ハケ	灰白 10YR8/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好
		279	64 溝中央部 上層上部	小形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式中頃	口径(12.4)/器高(4.6)/ 器厚0.3～0.5	35%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 5YR7/6	やや密 1～4mm大の チャート含む	やや 良好	
		280	64 溝中央部 上層上部	小形鉢	弥生後期後葉	底径2.4/器高(4.2)/ 器厚0.5～1.1	20%	外:タタキ? 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm程度の赤彩粒含 む	良好	
		281	64 溝中央部 上層上部	大形鉢?	弥生後期後葉	器高(5.5)/器厚0.6	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1～3mm大の長石 含む	良好	
		282	64 溝中央部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	器高(8.3)/器厚0.4～1.3	30%	外:坏部・脚部ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1mm大の長石含む	良好	
		283	64 溝中央部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	器高(4.7)/器厚0.6～1.3	40%	外:口縁部不明、底部ミガキ 内:ミガキ	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		284	64 溝中央部 上層上部	碗形高坏	庄内式初頭	器高(9.7)/器厚0.4～3.3	30%	外:坏部不明、脚部ミガキ? 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		285	64 溝中央部 上層上部	碗形高坏	弥生後期後葉～ 末	器高(8.3)/器厚0.5～2.1	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		286	64 溝中央部 上層上部	高坏	庄内式前半	器高(5.5)/器厚0.3～3.8	40%	外:ミガキ 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	密 1～2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		287	64 溝中央部 上層上部	高坏	庄内式初頭	脚径(9.3)/器高(6.6)/ 器厚0.4～3.3	30%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/3	密 1～2mmの長石含む	良好	
		288	64 溝中央部 上層上部	高坏	庄内式中頃	脚径(13.2)/器高(9.0)/ 器厚0.4～3.5	35%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ、脚 部ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		289	64 溝中央部 上層上部	高坏	庄内式	脚径(10.8)/器高(6.5)/ 器厚0.3～4.0	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	やや 良好	
26			290	64 溝中央部 上層上部	蛸壺	庄内式	口径5.5/底径3.6/器高7.5 /器厚0.3～1.7	100%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好
		291	64 溝中央部 上層上部	蛸壺	庄内式	器高(4.5)/器厚0.4～1.4	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～3mmの石英・ 長石・赤彩粒含む	良好	
		292	64 溝中央部 上層上部	手焙形土器	弥生後期後葉～ 庄内式中頃	器高(3.8)/器厚0.4～1.0	5%	外:ナデ 内:摩滅のため不明	灰白 10YR8/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		293	64 溝中央部 上層下部	広口壺	庄内式初頭	口径11.4/底径5.0/器高 21.4/器厚0.3～1.8	80%	外:口縁・頸部ヨコナデ、体部不 明/内:口縁・頸部ヨコナデ、体 部ハケ	橙 7.5YR6/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石・赤彩粒 含む	良好	
		294	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(18.0)/器高(6.2)/ 器厚1.0	10%	外:口縁部不明、頸部ミガキ? 内:口縁部不明、頸部ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
47		295	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(16.7)/器高(5.7)/ 器厚0.6～0.9	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		296	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(12.8)/器高(7.1)/ 器厚0.4～1.1	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガ キ/内:摩滅のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	

遺物観察表 (9)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
47	22	297	64 溝中央部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期 中～後葉	口径(15.2)/底径4.9/器高 23.4/器厚0.5～1.7	85%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部・体 部ミガキ/内:口縁部ミガキ、 頸部・体部ハケ	褐灰 10YR6/1	やや密 1～3mmの石英・ 長石・チャート含む	やや 良好		
	22	298	64 溝中央部 上層下部	細頸直口壺	庄内式初頭	口径7.4/底径3.9/器高 14.7/器厚0.3～1.1	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1～4mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
		299	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期	口径(10.6)/器高(6.6)/ 器厚0.3～0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ナ デ?/内:口縁部ヨコナデ?、体 部ナデ?一部ケズリ?	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好		
		300	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(15.1)/器高(7.0)/ 器厚0.7～0.9	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい赤褐 5YR5/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	やや 良好		
		301	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径12.8/器高(4.5)/ 器厚0.4～0.7	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1～5mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好		
		302	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径14.8/器高(8.9)/ 器厚0.5～0.9	30%	外:不明/内:口縁部不明、体部 ナデ?	明赤褐 2.5YR5/6	密 1～2mm程度の赤彩粒 含む	良好		
		303	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(13.3)/器高(8.2)/ 器厚0.5～0.8	20%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 /内:口縁・頸部ヨコナデ?、体 部不明	橙 5YR6/6	密	やや 良好		
		304	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(16.0)/器高(5.5)/ 器厚0.4～0.8	10%	外:摩擦のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR6/4	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
		305	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期?	口径17.9/器高(13.5)/ 器厚0.5～0.9	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5YR/2	やや密 1～5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	20		306	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式初頭	口径15.2/器高(21.7)/ 器厚0.5～1.0	75%	外:口頸部不明、体部タタキ 内:剥離のため不明	赤 10R5/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好	
		307	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期末	口径(16.0)/器高(5.8)/ 器厚0.5～0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、 体部ミガキ/内:口縁部不明、 頸部ハケ・ナデ?、体部ナデ	橙 7.5YR7/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
21		308	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(9.7)/底径5.0/器高 19.8/器厚0.5～1.7	95%	外:口縁・頸部ヨコナデ?、体部 タタキ後ナデ?/内:口縁・頸部 不明、体部上半ナデ・下半ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1～2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
48		309	64 溝中央部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(28.0)/器高(20.0)/ 器厚0.4～1.1	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm前後の石英含む	良好		
		310	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(15.6)/器高(6.2)/ 器厚0.6～1.1	10%	外:不明/内:摩擦のため不明、 ミガキ?	灰白 10YR8/2	密 1mm大の石英含む	良好		
		311	64 溝中央部 上層下部	広口壺?	弥生後期	器高(4.3)/器厚0.3～0.7	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含 む	やや 良好		
		312	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(14.2)/器高(5.9)/ 器厚0.7～1.5	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR5/4	密 1～2mm大の石英・長 石含む	やや 良好		
		313	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期	口径13.2/器高(4.6)/ 器厚0.4～0.5	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1～3mm大の石英含む	良好		
		314	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径20.0/器高(10.5)/ 器厚0.9～1.3	20%	外・内:口縁部不明、頸部ハケ後 ミガキ	橙 7.5YR6/8	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		315	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(20.0)/器高(6.1)/ 器厚0.7～1.1	10%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～4mm大の石 英・長石・赤彩粒・角閃石 含む	やや 良好		
		316	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径16.5/器高(5.5)/ 器厚0.6～1.5	20%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部ミガ キ/内:摩擦のため不明	橙 5YR7/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好		
		317	64 溝中央部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径15.3/器高(7.1)/ 器厚0.6～0.8	25%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		318	64 溝中央部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期 中～後葉	口径(15.0)/器高(11.2)/ 器厚0.3～0.7	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		319	64 溝中央部 上層下部	広口直口壺	弥生後期末～ 庄内式	口径(13.5)/器高(7.1)/ 器厚0.5～0.8	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1mm程度の石英・ チャート含む	やや 良好		
		320	64 溝中央部 上層下部	二重口縁壺	弥生後期後葉	口径(24.6)/器高(10.5)/ 器厚0.5～1.5	20%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部ハケ /内:口縁部ヨコナデ?、頸部ハ ケ後ミガキ	褐灰 5YR4/1	やや密 1～2mm大の石 英・長石含む	良好		
	20		321	64 溝中央部 上層下部	二重口縁壺	庄内式前半	口径(22.0)/器高(5.7)/ 器厚0.6～1.2	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	やや密 1～5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
			322	64 溝中央部 上層下部	二重口縁壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(19.6)/器高(4.2)/ 器厚0.3～0.7	10%	外:口縁部ヨコナデ?、以下不明 /内:不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm以下の長石・ チャート含む	やや 良好	
	20		323	64 溝中央部 上層下部	二重口縁壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径14.2/器高(6.0)/ 器厚0.4～1.0	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
	23		324	64 溝中央部 上層下部	細頸壺	弥生中期後葉	底径2.3/器高(22.6)/ 器厚0.3～1.3	90%	外:頸部ミガキ、体部ミガキ? 内:頸部不明、体部ハケ・ナデ?	橙 5YR6/6	密 1mm以下の長石含む	良好	
			325	64 溝中央部 上層下部	細頸壺	弥生後期中葉	口径7.4/器高(14.6)/ 器厚0.4～0.6	15%	外:摩擦のため不明 内:摩擦のため不明	浅黄橙 7.5YR8/6	密 1mm程度の石英・長石 含む	良好	紀伊 系?
			326	64 溝中央部 上層下部	細頸壺?	弥生後期中葉	器高(11.3)/器厚0.3～0.4	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明、肩部ナデ	橙 5YR6/6	やや密 1～5mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
		327	64 溝中央部 上層下部	細頸壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径6.9/器高11.5/ 器厚0.4～0.8	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～6mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
22		328	64 溝中央部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径6.3/底径3.5/器高 12.5/器厚0.3～1.1	90%	外:口縁部不明、体部タタキ? 内:剥離・摩擦のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1～4mm大の石 英・チャート含む	やや 良好		
		329	64 溝中央部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径7.2/底径2.8/ 器高11.0/器厚0.3～0.7	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の長石・赤 彩粒含む	やや 良好		
49	22	330	64 溝中央部 上層下部	壺?	弥生後期?	底径(19.0)/器高(55.8)/ 器厚1.0～5.5	70%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰黄褐 10YR4/2	粗 1～10mm大の石英・長 石など含む	やや 良好		
		331	64 溝中央部 上層下部	広口壺	庄内式	底径5.3/器高(22.4)/ 器厚0.4～1.6	60%	外:摩擦のため不明 内:頸部不明、体部ハケ?	明赤褐 2.5YR5/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好		
	21	332	64 溝中央部 上層下部	壺	弥生後期	底径4.0/器高(17.8)/ 器厚0.4～1.2	40%	外:剥離のため不明 内:不明、肩部ナデ?	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～3mm大の石英 含む	良好		
		333	64 溝中央部 上層下部	壺?	弥生後期後葉	底径4.2/器高(10.3)/ 器厚0.4～1.9	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～5mmの石英・ 長石・チャート含む	良好		

遺物観察表 (10)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
49		334	64 溝中央部 上層下部	壺	弥生後期	底径(4.8)/器高(15.8)/ 器厚0.5~1.5	60%	外:摩滅のため不明 内:ハケ、ナデ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		335	64 溝中央部 上層下部	壺?	弥生後期	底径4.4/器高(4.0)/ 器厚0.4~2.0	10%	外:タタキ 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好		
		336	64 溝中央部 上層下部	壺	弥生後期後葉	底径(3.9)/器高(13.1)/ 器厚0.5~1.7	60%	外:ハケ? 内:ハケ	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石 含む	良好		
		337	64 溝中央部 上層下部	壺	庄内式?	底径3.2/器高(7.0)/ 器厚0.4~1.0	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		21 338	64 溝中央部 上層下部	ミニチュア 壺	弥生後期後葉?	底径4.0/器高(6.8)/ 器厚0.3~0.8	75%	外:ミガキ? 内:ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	密 1~3mmの石英・長石・ チャート含む	良好		
		21 339	64 溝中央部 上層下部	ミニチュア 壺?	弥生後期後葉?	底径1.8/器高(4.9)/ 器厚0.4~0.9	90%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm程度の長石・ チャート含む	良好		
		22 340	64 溝中央部 上層下部	ミニチュア 壺	弥生後期後葉?	器高(8.3)/器厚0.4~1.4	75%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/8	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
		26 341	64 溝中央部 上層下部	異形土器	弥生後期後葉?	底径(4.1)/器高(5.2)/ 器厚0.6~1.6	70%	外:タタキ後ナデ? 内:ナデ、ハケ?	明褐 7.5YR6/6	密 1mm程度の長石含む	良好		
50		342	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期中葉?	口径(25.8)/器高(5.8)/ 器厚0.5~0.9	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部不明	灰褐 7.5YR4/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		343	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期 中~後葉	口径(16.3)/器高(7.8)/ 器厚0.5~0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	橙 5YR6/6	やや密 1mm大の石英含 む	良好		
		344	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(16.2)/底径2.6/器高 (25.0)/器厚0.3~1.1	55%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	褐 7.5YR4/3	やや密 1~2mm大の石 英・角閃石・雲母含む	良好	生駒 西麓	
		345	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径(17.2)/器高(7.1)/ 器厚0.5	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	灰褐 7.5YR5/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
		346	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径(16.8)/器高(9.5)/ 器厚0.3~0.7	15%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		347	64 溝中央部 上層下部	甕	不明	口径(19.0)/器高(4.1)/ 器厚0.2~0.6	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	やや 良好		
		348	64 溝中央部 上層下部	甕	庄内式?	口径(17.8)/器高(5.0)/ 器厚0.3~0.5	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗 1~2mm大の石 英・チャート含む	やや 良好		
		349	64 溝中央部 上層下部	甕	布留式	口径(14.0)/器高(3.4)/ 器厚0.3~0.5	5%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR4/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	混入	
		23 350	64 溝中央部 上層下部	甕	庄内式前半	口径(11.0)/底径5.0/器高 18.0/器厚0.4~1.5	65%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・赤彩粒・雲母含 む	やや 良好		
		351	64 溝中央部 上層下部	甕	庄内式初頭	口径14.0/器高(11.7)/ 器厚0.3~0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	明褐灰 7.5YR7/2	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
		352	64 溝中央部 上層下部	甕	庄内式前半	器高(10.7)/器厚0.4~0.6	30%	外:タタキ 内:ハケ	灰白 2.5Y8/1	密 1~4mm大の石英・長 石含む	良好		
		353	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径4.8/器高(17.6)/ 器厚0.4~2.2	30%	外:タタキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	やや 良好		
		354	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径4.8/器高(17.2)/ 器厚0.4~1.7	40%	外:タタキ? 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR6/4	やや粗 1~3mm大の石英 含む	良好		
		23 355	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径4.3/器高(14.6)/ 器厚0.4~1.3	65%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR5/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
		356	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期末	底径(3.6)/器高(14.4)/ 器厚0.3~1.6	60%	外:タタキ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ	にぶい褐 7.5YR6/3	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	やや 良好		
		23 357	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(9.9)/底径3.2/器高 12.0/器厚0.3~0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ? 内:口縁部ヨコナデ?、体部不明	橙 7.5YR6/8	密 1~2mm大の長石含む	良好		
		358	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径3.9/器高(10.7)/ 器厚0.5~1.2	45%	外:体部タタキ 内:摩滅のため不明	灰褐 7.5YR4/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好		
		359	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径3.9/器高(7.1)/ 器厚0.6~1.3	15%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1mm前後の石英・長石 含む	良好		
		360	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径3.9/器高(7.6)/ 器厚0.3~1.5	40%	外:タタキ 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/8	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	やや 良好		
		361	64 溝中央部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径5.2/器高(4.8)/ 器厚0.6~2.1	15%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや粗 1~4mm大の石 英・長石含む	良好		
		362	64 溝中央部 上層下部	甕?	弥生後期末~ 庄内式	底径3.5/器高(6.3)/ 器厚0.4~1.3	35%	外:タタキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~3mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好		
	51		363	64 溝中央部 上層下部	大形鉢	庄内式	口径(48.8)/器高(11.8)/ 器厚0.6~1.2	15%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		25	364	64 溝中央部 上層下部	大形鉢	庄内式	口径(37.2)/器高(6.7)/ 器厚0.4~0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		365	64 溝中央部 上層下部	大形鉢	弥生後期後葉	口径(36.0)/器高(9.6)/ 器厚0.4~0.7	10%	外:剥離のため不明 内:口縁部ヨコナデ?、体部不明	橙 2.5YR6/6	密 1mm程度の石英含む	良好		
25		366	64 溝中央部 上層下部	鉢?	弥生後期~ 庄内式	口径(13.2)/器高(6.8)/ 器厚0.5~0.7	35%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm程度の長石・赤彩 粒含む	やや 良好		
		367	64 溝中央部 上層下部	鉢?	弥生後期~ 庄内式	底径4.0/器高(12.7)/ 器厚0.6~1.5	50%	外:摩滅のため不明 内:ナデ、ケズリ?	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
		368	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉	底径4.3/器高(10.5)/ 器厚0.5~1.6	30%	外:タタキ後ハケ? 内:剥離のため不明	にぶい黄 2.5Y6/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		369	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.6/器高(5.4)/ 器厚0.5~1.4	20%	外:タタキ? 内:ハケ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の長石・赤彩粒 含む	良好		
		370	64 溝中央部 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径3.7/器高(4.8)/ 器厚0.4~1.4	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		

遺物観察表 (11)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
51	26	371	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉	口径13.1/底径3.5/器高 9.0/器厚0.4~2.0	70%	外:タタキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	粗 1~6mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	やや 良好		
	26	372	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	庄内式前半	口径12.8/底径3.0/器高 7.5/器厚0.3~1.5	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR5/3	やや密 1~3mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好		
		373	64 溝中央部 上層下部	鉢?	庄内式初頭	底径(3.2)/器高(3.5)/ 器厚0.5~0.9	20%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		374	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.5/器高(6.8)/ 器厚0.3~2.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 7.5YR5/8	密 1mm以下長石含む	やや 良好		
		375	64 溝中央部 上層下部	鉢?	弥生後期 中~後葉	底径3.4/器高(6.0)/ 器厚0.4~1.8	10%	外:タタキ後ハケ?ナデ? 内:ハケ	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大のチャート 含む	良好		
		376	64 溝中央部 上層下部	鉢?	弥生後期 中~後葉	底径3.2/器高(6.4)/ 器厚0.3~1.8	30%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR6/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		377	64 溝中央部 上層下部	鉢?	弥生後期	底径4.0/器高8.6/ 器厚0.5~1.4	60%	外:摩滅のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		378	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉	口径(9.8)/器高(4.5)/ 器厚0.4~0.8	20%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部不 明	橙 2.5YR6/6	密	やや 良好		
		26	379	64 溝中央部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉	口径(7.7)/底径3.2/器高 7.2/器厚0.5~1.3	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
		380	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式初頭	器高(11.3)/器厚0.6~4.1	50%	外:杯部不明、脚部ミガキ 内:不明	灰白 2.5Y7/1	やや粗 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好		
		381	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式初頭	脚径13.6/器高(9.6)/ 器厚0.3~3.3	45%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1mm程度の石英・ 長石・角閃石含む	やや 良好		
		382	64 溝中央部 上層下部	椀形高坏	庄内式初頭	器高(6.7)/器厚0.4~2.2	40%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm以下の長石含む	良好		
		383	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式初頭	器高(5.5)/器厚0.3~2.8	60%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:不明	明褐 7.5YR5/8	密 1~2mmの石英・長石 含む	良好		
		384	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式初頭?	脚径8.8/器高(8.3)/ 器厚0.4~3.8	50%	外:ミガキ?内:坏部ナデ?、脚 部ハケ?	明褐 7.5YR5/6	密 1~2mmの石英・長石 含む	良好		
		385	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式前半	器高(6.0)/器厚0.3~2.7	40%	外:不明、ミガキ? 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1mm程度の石英・長石 含む	良好		
		386	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式	器高(6.1)/器厚0.4~5.0	20%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1~5mmの石英・ 長石含む	良好		
		387	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式	器高(6.5)/器厚0.3~3.5	20%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
		388	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式前半	器高(8.5)/器厚0.3~2.9	45%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	やや密 1mm大の石英・長 石・チャート含む	やや 良好		
		389	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式	器高(8.1)/器厚0.6~2.5	50%	外:ミガキ/内:剥離、摩滅のた め不明	浅黄橙 10YR8/4	密 1mm程度の石英含む	良好		
		390	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式	脚径(15.4)/器高(6.0)/ 器厚0.6~	20%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ、脚 部ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
	52	24	391	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(27.7)/器高(9.2)/ 器厚0.4~0.9	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好	
		24	392	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(6.5)/器厚0.3~0.8	35%	外:ミガキ 内:ミガキ	明赤褐 5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
			393	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(6.4)/器厚0.4~0.8	40%	外:ミガキ 内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		25	394	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(23.6)/器高(14.6)/ 器厚0.4~2.0	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~3mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
			395	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(22.6)/器高(4.0)/ 器厚0.5~0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	やや 良好	
			396	64 溝中央部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(16.0)/器高(3.9)/ 器厚0.3~0.6	25%	外:剥離のため不明 内:ミガキ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
25		397	64 溝中央部 上層下部	椀形高坏	弥生後期末	口径(14.6)/脚径(10.8)/ 器高11.4/器厚0.3~1.5	80%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
24		398	64 溝中央部 上層下部	椀形高坏	弥生後期後葉	口径13.5/脚径9.3/器高 10.3/器厚0.3~1.0	80%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/8	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
24		399	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(15.0)/器高(6.3)/ 器厚0.3~1.0	45%	外:口縁部不明、坏底部ミガキ 内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm程度の石英・長 石・チャート・赤彩粒含む	やや 良好		
		400	64 溝中央部 上層下部	椀形高坏	弥生後期末	口径14.4/器高(5.3)/ 器厚0.3~0.8	45%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	淡橙 5YR8/3	やや密 1~4mmの石英・ 長石含む	やや 良好		
		401	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径12.4/器高(7.8)/ 器厚0.5~1.7	50%	外:杯部不明、脚部ミガキ 内:不明	にぶい褐 7.5YR6/3	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		402	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径11.0/器高(7.6)/ 器厚0.5~1.3	50%	外:坏部不明、脚部ミガキ?内: 不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1~2mm大のチャート 含む	良好		
		403	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径11.4/器高(8.8)/ 器厚0.4~1.8	50%	外:ハケ後ミガキ/内:坏部ミ ガキ、脚部ナデ?	赤褐 5YR4/8	密 1mm以下の石英・長 石・チャート含む	良好		
		404	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期 中~後葉	器高(10.5)/器厚0.6~1.2	20%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の長石含む	良好		
		405	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径10.0/器高(9.1)/ 器厚0.5~1.3	55%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ、脚 部不明	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1~3mm大の石英含む	良好		
		406	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径(9.3)/器高(7.0)/ 器厚0.5~1.2	30%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ? 脚部ナデ	にぶい橙 5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
24		407	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径12.2/器高(10.3)/ 器厚0.4~1.0	70%	外:ミガキ 内:坏部不明、脚部ナデ?	明赤褐 5YR5/8	やや密 1~2mmの石英・ 長石・チャート含む	やや 良好		
		408	64 溝中央部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径15.2/器高(9.3)/ 器厚0.6~1.1	50%	外:ミガキ 内:ナデ?	橙 5YR7/6	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		

遺物観察表 (12)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
52		409	64 溝中央部 上層下部	高坏	庄内式初頭	脚径(12.2)/器高(7.3)/ 器厚0.4~1.5	40%	外:脚部ミガキ 内:脚部ハケ	灰白 2.5YR8/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
53		410	64 溝中央部 上層下部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(6.3)/器厚0.3~0.8	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	やや 良好	
		411	64 溝中央部 上層下部	壺	弥生後期後葉	器高(3.2)/器厚0.4~0.8	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm以下の長石含む	良好	
		412	64 溝中央部 上層下部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(5.0)/器厚0.5	5%	外:ナデ? 内:ナデ?	橙 2.5YR6/6	密	良好	
		413	64 溝中央部 上層下部	器台?	弥生後期後葉	器高(12.5)/器厚1.0~2.0	40%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい赤褐 5YR5/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		414	64 溝中央部 上層下部	器台?	弥生後期後葉	器高(9.2)/器厚0.9~1.4	30%	外:ハケ? 内:ハケ?	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		415	64 溝中央部 上層下部	蛸壺	庄内式?	口径(6.2)/器高(5.0)/ 器厚0.4~0.8	15%	外:剥離のため不明 内:不明、ナデ?	明赤褐 5YR5/8	密 2mm程度の石英含む	やや 良好	
		416	64 溝中央部 上層下部	蛸壺	庄内式?	口径5.5/器高(5.7)/ 器厚0.4~0.7	30%	外:タタキ? 内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の長石・赤彩粒 含む	やや 良好	
		417	64 溝中央部 上層下部	蛸壺	庄内式?	口径(5.0)/器高(6.5)/ 器厚0.4~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/8	密	やや 良好	
		418	64 溝中央部 上層下部	蛸壺	庄内式?	口径4.3/器高(6.4)/ 器厚0.3~0.5	60%	外:タタキ? 内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm以下長石含む	やや 良好	
		419	64 溝中央部 上層下部	蛸壺	不明	底径4.2/器高(4.7)/ 器厚0.3~1.6	15%	外:タタキ 内:ナデ?	にぶい橙 5YR6/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
54	20	420	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径14.0/器高(15.9)/ 器厚0.5~1.1	70%	外:口縁部不明、体部ミガキ 内:不明、肩部ナデ	明赤褐 5YR5/6	やや粗 1~7mm大の石 英・長石・赤彩粒・角閃石 含む	やや 良好	
		421	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(14.2)/器高(8.1)/ 器厚0.4~0.9	30%	外:口縁部ナデ?、以下ハケ? 内:不明	浅黄褐 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石含 む	やや 良好	
		422	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径(17.2)/器高(4.0)/ 器厚0.6~0.7	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/6	やや粗 1~2mmの石英・ チャート含む	やや 良好	
		423	64 溝中央部 下層	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(7.3)/器厚0.4~0.5	20%	外:ミガキ/内:口縁部ヨコナ デ?、体部ナデ?	にぶい橙 5YR7/4	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		424	64 溝中央部 下層	広口直口壺	庄内式	口径(21.2)/器高(8.8)/ 器厚0.5~0.8	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	明赤褐 2.5YR5/8	やや密 1~2mmの石英・ チャート含む	やや 良好	
		425	64 溝中央部 下層	二重口縁壺	庄内式	口径(23.0)/器高(3.5)/ 器厚0.5~0.8	10%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	明赤褐 2.5YR5/6	密	良好	
	20	426	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径20.7/器高(10.1)/ 器厚0.7~1.1	15%	外:頸部ミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		427	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(20.2)/器高(8.4)/ 器厚0.6~1.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		428	64 溝中央部 下層	脚台付 細頸壺	弥生後期後葉	口径6.5/器高(31.3)/ 器厚0.3~1.2	85%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	赤褐 5YR4/6	密 1~2mmの石英・長石・ チャート含む	良好	紀伊 系?
		429	64 溝中央部 下層	長頸壺?	弥生後期後葉	口径(11.0)/器高(8.5)/ 器厚0.3~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1mm大の赤彩粒含む	良好	
21	430	64 溝中央部 下層	広口壺?	弥生後期後葉	底径4.5/器高(19.0)/ 器厚0.5~1.8	60%	外:摩滅のため不明 内:ハケ	灰白 7.5YR8/2	密 1mm大の長石含む	良好		
	431	64 溝中央部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.2/器高(23.5)/ 器厚0.4~1.4	30%	外:ミガキ? 内:頸部不明、体部ハケ?	明赤褐 2.5YR5/6	やや密 1~2mmの石英・ 長石・チャート含む	やや 軟		
55	24	432	64 溝中央部 下層	甕	弥生後期後葉	口径17.2/器高(23.0)/ 器厚0.4~1.0	55%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい橙 5YR7/4	やや粗 1~5mmの石英・ チャート含む	やや 良好	
		433	64 溝中央部 下層	甕	弥生後期 中~後葉	口径(17.6)/器高(7.7)/ 器厚0.7~0.9	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	にぶい褐 7.5YR6/3	密 1mm大の長石含む	良好	
		434	64 溝中央部 下層	甕	庄内式?	口径16.0/器高(5.7)/ 器厚0.3~0.6	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:不明	褐 10YR4/4	密 1~2mmの石英・長石 含む	良好	
		435	64 溝中央部 下層	甕	弥生後期後葉	底径4.4/器高(12.9)/ 器厚0.5~2.0	40%	外:タタキ 内:ハケ?	灰白 10YR8/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好	
		436	64 溝中央部 下層	甕	弥生後期末	底径3.6/器高(10.6)/ 器厚0.4~1.3	60%	外:タタキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1~5mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	やや 良好	
		437	64 溝中央部 下層	高坏	庄内式初頭	脚径(19.2)/器高(13.9)/ 器厚0.4~5.4	20%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
		438	64 溝中央部 下層	高坏	弥生後期後葉	器高(5.1)/0.5~1.1	40%	外:坏部ミガキ、脚部不明・ミ ガキ?/内:不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
	26	439	64 溝中央部 下層	台付鉢?	弥生後期?	脚径(9.7)/器高(8.0)/ 器厚0.9~1.7	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明褐灰 7.5YR7/2	やや粗 1~4mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
	26	440	64 溝中央部 下層	有孔鉢	庄内式前半	底径2.4/器高(8.4)/ 器厚0.5~1.9	15%	外:タタキ 内:ハケ後ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mmの石英・ チャート含む	良好	
		441	64 溝中央部 下層	有孔鉢	弥生後期後葉	底径5.2/器高(5.3)/ 器厚0.6~1.5	40%	外:体部タタキ、底部ナデ 内:ハケ	明褐 7.5YR5/6	やや密 1~2mmの石英・ 長石含む	良好	
25	442	64 溝中央部 下層	器台	弥生後期後葉	脚径(18.2)/器高(12.4)/ 器厚0.6~1.5	60%	外:裾部ミガキ、以外不明 内:受部ヨコナデ・ミガキ?、以 下不明	にぶい橙 5YR6/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	やや 良好		
25	443	64 溝中央部 下層	蛸壺	庄内式?	口径10.4/器高(6.4)/ 器厚0.5~0.6	35%	外:タタキ 内:ナデ	橙 2.5YR6/8	密 1mm大の石英・チャ ート含む	やや 良好		
56		444	64 溝中央部	広口 直口壺?	庄内式初頭	口径18.9/器高(8.6)/ 器厚0.5~0.9	35%	外:頸部以下ハケ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~5mm大の石 英・長石・角閃石・チャ ート含む	良好	

遺物観察表 (13)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
56		445	64 溝中央部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径11.6/器高(10.6)/ 器厚0.4～1.0	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/8	やや密 1～3mmの石英・ 長石・チャート含む	やや 良好	
		446	64 溝中央部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(15.0)/器高(12.2)/ 器厚0.5～0.9	35%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:不明	明褐 7.5YR5/6	密 1～2mmの石英・長石 含む	良好	
		447	64 溝中央部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	口径15.0/器高11.9/ 器厚0.4～0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR5/2	やや密 1～4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		448	64 溝中央部	甕	弥生後期後葉	底径4.2/器高(9.6)/ 器厚0.4～2.0	15%	外:タタキ	橙 5YR6/6	やや密 1mm程度の石英・ 長石含む	やや 良好	
		449	64 溝中央部	甕	弥生後期後葉	底径3.7/器高(6.7)/ 器厚0.4～1.6	10%	外:タタキ 内:ハケ	橙 5YR6/8	やや密 1～2mm大の石 英・長石含む	良好	
		25	450	64 溝中央部	有孔鉢	口径14.3/底径3.2/器高 13.8/器厚0.3～1.4	85%	外:摩擦のため不明、タタキ? 内:ハケ?	橙 5YR6/6	密 1～2mmの石英・長石・ 角閃石含む	良好	
		451	64 溝中央部	鉢?	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.4/器高(7.7)/ 器厚0.5～1.4	50%	外:摩擦のため不明 内:摩擦のため不明	橙 5YR7/6	密 1～2mmの石英・長石 含む	やや 良好	
		452	64 溝中央部	鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	底径(3.9)/器高(3.7)/ 器厚0.5～1.5	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/6	やや密 1～3mmの石英・ 長石・赤彩粒含む	良好	
		26	453	64 溝中央部	ミニチュア 壺	口径3.6/底径2.8/器高5.3 /器厚0.2～1.0	95%	外:摩擦のため不明 内:摩擦のため不明	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		454	64 溝中央部	有稜高坏	弥生後期 中～後葉	口径22.0/器高(3.2)/ 器厚0.3～0.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		455	64 溝中央部	高坏	庄内式	器高(8.8)/器厚0.4～3.5	70%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1～2mmの石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
		24	456	64 溝中央部	高坏	器高(11.4)/器厚0.3～1.0	80%	外:杯部不明、脚部ミガキ? 内:不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～3mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好	
57		27	457	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(15.4)/底径6.5/器高 37.9/器厚0.8～1.5	80%	外:底部タタキ、体部ミガキ 内:口縁部ヨコナデ?、体部ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		458	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(12.4)/器高(19.7)/ 器厚0.5～0.7	30%	外:口縁部不明、体部ミガキ 内:口縁部不明、体部ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
		27	459	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径19.6/器高(7.4)/ 器厚0.8～1.2	25%	外:頸部ハケ後ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		460	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(20.1)/器高(6.2)/ 器厚0.6～0.8	30%	外:不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		461	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(11.4)/器高(8.6)/ 器厚0.5～0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	橙 7.5YR7/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	近江 系?	
		462	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(12.0)/器高(7.3)/ 器厚0.6～1.0	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ	明赤褐 5YR5/6	密 1～4mm大の石英・長 石含む	良好	近江 系?	
		463	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(12.3)/器高(4.5)/ 器厚0.5～0.8	10%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	近江 系?	
		464	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(15.0)/器高(5.2)/ 器厚0.4～0.9	15%	外:ハケ後ヨコナデ 内:ナデ	灰白 7.5YR8/2	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好		
		465	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(11.6)/器高(7.4)/ 器厚0.6～0.7	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好		
		466	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(11.4)/器高(5.0)/ 器厚0.5～0.7	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/8	やや粗 1～5mm大の長 石・角閃石含む	良好		
		467	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径12.6/器高(7.2)/ 器厚0.4～0.9	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好		
		468	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(15.1)/器高(4.9)/ 器厚0.7～1.1	10%	外・内:口縁部ヨコナデ、頸部ハ ケ?	橙 7.5YR7/6	やや密 1mm大の石英・長 石含む	良好		
		469	64 溝東部 上層上部	甕?	弥生後期前葉	口径(15.6)/器高(2.2)/ 器厚0.7～1.0	10%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ?	浅黄橙 7.5YR8/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		470	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(13.8)/器高(4.9)/ 器厚0.4～0.9	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		471	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(13.6)/器高(4.6)/ 器厚0.6～0.8	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
		472	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(12.7)/器高(4.7)/ 器厚0.5～0.7	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1～3mm大の石 英・チャート含む	良好		
		473	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(11.4)/器高(6.8)/ 器厚0.4～0.5	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/6	密 1mm以下の長石含む	良好		
		474	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(18.0)/器高(4.1)/ 器厚0.9～1.2	10%	外:剥離のため不明 内:ヨコナデ?	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好		
		475	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(19.2)/器高(5.7)/ 器厚0.5～0.8	10%	外・内:口縁部ヨコナデ、以下不 明	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
		476	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(16.0)/器高(5.6)/ 器厚0.5～0.9	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石含む	良好		
	477	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(14.2)/器高(6.5)/ 器厚0.6～0.8	20%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部ミガ キ/内:ミガキ	橙 5YR6/6	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好			
	478	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径13.4/器高(6.6)/ 器厚0.5～0.9	40%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:ミガキ	にぶい赤褐 5YR5/4	密 1～2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好			
	479	64 溝東部 上層上部	広口壺	口径(13.4)/器高(4.3)/ 器厚0.8～1.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR7/4	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好			
58		480	64 溝東部 上層上部	二重口縁壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(21.7)/器高(8.2)/ 器厚0.4～1.0	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	やや粗 1～4mm大の石 英・長石含む	やや 良好	
		481	64 溝東部 上層上部	二重口縁壺	庄内式?	口径(14.6)/器高(4.7)/ 器厚0.3～0.9	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/6	やや粗 1～5mm大の石 英・長石含む	良好	

遺物観察表 (14)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
58		482	64 溝東部 上層上部	二重口緑壺	庄内式初頭	口径(22.0)/器高(5.7)/ 器厚0.6~0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		483	64 溝東部 上層上部	壺	弥生中期後葉	器高(6.9)/器厚0.6~1.0	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/4	密 1~4mm大の石英・長 石含む	良好	摂津 系?	
		484	64 溝東部 上層上部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(10.8)/器高(6.3)/ 器厚0.5~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		485	64 溝東部 上層上部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(10.0)/器高(9.5)/ 器厚0.4~0.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
		486	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径6.1/器高(8.2)/ 器厚0.4~1.2	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
		487	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径2.0/器高(6.7)/ 器厚0.5~0.9	25%	外:ミガキ? 内:ハケ?	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		488	64 溝東部 上層上部	壺	庄内式	底径3.8/器高(4.0)/ 器厚0.5~1.4	10%	外:ミガキ 内:ハケ	赤 10R5/6	密		良好	
		489	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径3.8/器高(4.6)/ 器厚0.3~1.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1~2mm大の石英 含む	良好		
		490	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉	底径(4.4)/器高(14.1)/ 器厚0.5~1.8	30%	外:タタキ?後ハケ 内:ハケ・ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の石英・長石 含む	良好		
		491	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径(7.2)/器高(2.7)/ 器厚0.4~0.9	10%	外:ミガキ? 内:ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		492	64 溝東部 上層上部	壺?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.2/器高(4.3)/ 器厚0.4~1.4	10%	外:ミガキ 内:ハケ?	暗灰黄 2.5Y5/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好		
		493	64 溝東部 上層上部	壺	弥生後期後葉~ 庄内式	底径7.0/器高(4.7)/ 器厚1.0~3.0	15%	外:ハケ、ナデ 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや粗 1~9mm大の石 英・長石・角閃石・チャ ート含む	良好		
		494	64 溝東部 上層上部	壺?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径5.9/器高(2.7)/ 器厚0.6~1.1	10%	外:ミガキ? 内:ハケ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
59		495	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(23.4)/器高(5.0)/ 器厚0.6	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:ハケ・ナデ、体部ハ ケ	浅黄橙 7.5YR8/3	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
		496	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期 中~後葉	口径(19.0)/器高(6.3)/ 器厚0.5~0.8	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		497	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期	口径(18.0)/器高(4.4)/ 器厚0.6~1.2	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ	黒褐 2.5Y3/2	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・角閃石・雲母含 む	良好		
		498	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期 中~後葉	口径(17.4)/器高(5.0)/ 器厚0.6~0.9	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	にぶい黄橙 10YR5/3	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		499	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期 中~後葉	口径(18.0)/器高(3.4)/ 器厚0.3~0.5	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		500	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期 中~後葉	口径(17.0)/器高(3.8)/ 器厚0.4~1.0	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部不 明	橙 7.5YR7/6	やや粗 1~3mm大の石 英・長石・雲母含む	やや 良好		
		501	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径(16.7)/器高(3.9)/ 器厚0.4~0.7	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	密 1~3mm大の長石含む	やや 軟		
		502	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(16.3)/器高(8.0)/ 器厚0.5~0.7	35%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1~2mm大の長石 含む	良好		
		503	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径(15.8)/器高(4.4)/ 器厚0.4~0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	やや 良好		
		504	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(13.7)/器高(4.1)/ 器厚0.5~0.6	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ	にぶい黄橙 10YR5/3	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		505	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	口径(15.6)/器高(11.2)/ 器厚0.4~0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	にぶい黄 2.5Y6/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		506	64 溝東部 上層上部	甕	庄内式?	器高(4.4)/器厚0.4~0.7	10%	外:剥離のため不明 内:ハケ?	灰白 2.5Y8/2	密 1mm大の石英・長石 含む	良好	線刻 ?	
		507	64 溝東部 上層上部	甕	庄内式?	器高(3.1)/器厚0.2~0.3	5%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1mm大の石英・長石・ 雲母含む	良好		
		508	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.5/器高(5.9)/ 器厚0.4~1.4	30%	外:タタキ 内:ハケ	明赤褐 5YR5/6	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		509	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径(4.2)/器高(7.2)/ 器厚0.4~1.5	25%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR5/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		510	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径4.4/器高(4.4)/ 器厚0.5~1.5	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		511	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径3.7/器高(2.6)/ 器厚0.5~1.7	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		512	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径5.0/器高(6.5)/ 器厚0.5~1.9	10%	外:タタキ 内:ハケ	橙 7.5YR6/6	やや粗 1~5mm大の石 英・長石含む	良好		
		513	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径3.8/器高(6.0)/ 器厚0.5~1.3	20%	外:タタキ 内:ハケ	橙 5YR6/8	密 1mm大の長石含む	良好		
		514	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.2/器高(4.8)/ 器厚0.5~1.4	10%	外:タタキ 内:ナデ	にぶい赤褐 2.5YR5/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好		
	515	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径4.4/器高(3.7)/ 器厚0.4~1.7	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好			
	516	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径5.5/器高(6.2)/ 器厚0.5~1.9	20%	外:タタキ 内:ハケ	明褐 7.5YR5/6	やや密 1~4mm大の石 英・長石・雲母含む	良好			
	517	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.0/器高(4.8)/ 器厚0.4~1.5	15%	外:タタキ/内:剥離のため不 明・ハケ?	浅黄橙 10YR8/3	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好			
	518	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.8/器高(4.4)/ 器厚0.4~1.4	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好			

遺物観察表 (15)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
59		519	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径3.9/器高(4.4)/ 器厚0.4~1.6	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	黒褐 7.5YR3/2	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		520	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.6/器高(5.3)/ 器厚0.7~1.5	15%	外:タタキ 内:ハケ	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の石英含む	良好		
		521	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.0/器高(5.2)/ 器厚0.4~1.7	10%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		522	64 溝東部 上層上部	甕	弥生後期後葉	底径5.0/器高(4.7)/ 器厚0.4~1.8	10%	外:タタキ 内:ハケ?	橙 7.5YR6/6	やや粗 1~5mm大の石 英・長石含む	良好		
		523	64 溝東部 上層上部	小形鉢	庄内式?	口径(14.4)/器高(4.2)/ 器厚0.3~0.7	25%	外:タタキ 内:ナデ?・ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好		
		524	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	庄内式中頃	口径(11.0)/器高(3.5)/ 器厚0.3~0.7	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
		525	64 溝東部 上層上部	有孔鉢	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.5/器高(10.0)/ 器厚0.4~1.7	50%	外:タタキ 内:ハケ	橙 2.5YR6/8	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		526	64 溝東部 上層上部	有孔鉢	庄内式?	底径4.0/器高(2.8)/ 器厚0.5~1.3	10%	外:タタキ? 内:ハケ?	橙 5YR6/8	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	やや 良好		
		527	64 溝東部 上層上部	大形鉢	弥生後期後葉	口径(35.6)/器高(3.8)/ 器厚0.6~0.8	10%	外:ミガキ・ナデ 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
		528	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期 中~後葉	底径5.9/器高(8.2)/ 器厚0.8~2.1	20%	外:タタキ後ナデ? 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		529	64 溝東部 上層上部	小形鉢	弥生後期後葉	底径3.6/器高(4.7)/ 器厚0.5~1.4	25%	外:タタキ?・ナデ 内:ハケ	明赤褐 2.5YR5/6	密 1~3mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
		530	64 溝東部 上層上部	小形鉢	弥生後期後葉	底径3.6/器高(6.0)/ 器厚0.4~1.5	40%	外:摩滅のため不明 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
		531	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径3.8/器高(7.5)/ 器厚0.4~1.5	25%	外:ハケ後ナデ 内:ハケ・ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm以下の長石含む	良好		
		532	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径2.6/器高(5.2)/ 器厚0.5~1.5	40%	外:タタキ 内:不明・ハケ?	褐 7.5YR4/3	やや粗 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		533	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉	底径4.5/器高(5.3)/ 器厚0.4~1.3	50%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
		534	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉	底径3.0/器高(4.6)/ 器厚0.4~1.5	20%	外:タタキ 内:ハケ?	橙 7.5YR7/6	やや粗 1~4mm大の石 英・チャート含む	やや 良好		
		535	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径4.2/器高(4.2)/ 器厚0.4~0.9	10%	外:タタキ? 内:ハケ	橙 5YR7/6	やや粗 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
		536	64 溝東部 上層上部	小形鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.4/器高(2.2)/ 器厚0.5~1.5	10%	外:体部ミガキ、底部ナデ 内:ミガキ?	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1mm大の石英・長石 含む	良好		
	60		537	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(27.8)/器高(3.9)/ 器厚0.5~0.8	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~4mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
			538	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期 中~後葉	口径(24.0)/器高(5.4)/ 器厚0.4~1.3	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	密 1~4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		539	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(21.8)/器高(4.1)/ 器厚0.3~0.7	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好		
33		540	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(20.5)/脚径12.2/ 器高13.4/器厚0.3~1.1	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/6	密 1~4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		541	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(19.4)/器高(6.0)/ 器厚0.4~1.0	20%	外:不明・ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		542	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(20.0)/器高(10.1)/ 器厚0.5~1.3	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		543	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期末	口径(21.6)/器高(5.2)/ 器厚0.3~0.7	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1mm大の石英含 む	やや 良好		
		544	64 溝東部 上層上部	有稜高坏	弥生後期末	口径(18.6)/器高(6.1)/ 器厚0.5~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:ミガキ	橙 2.5YR6/8	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好		
		545	64 溝東部 上層上部	椀形高坏	庄内式初頭	器高(5.3)/器厚0.2~0.5	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい赤褐 2.5YR4/4	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
		546	64 溝東部 上層上部	椀形高坏	弥生後期後葉	口径(12.8)/器高(4.7)/ 器厚0.5~0.8	30%	外:ミガキ 内:ミガキ	橙 5YR6/6	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		547	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	器高(8.5)/器厚0.3~0.8	50%	外:不明/内:脚部ハケ・ナデ、 坏部不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の礫含む	良好		
		548	64 溝東部 上層上部	高坏	庄内式初頭	器高(8.7)/器厚0.5~1.9	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	粗 1~5mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		549	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期中葉	器高(8.3)/器厚0.5~1.3	40%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~4mm大の石英・長 石含む	良好		
		550	64 溝東部 上層上部	椀形高坏	庄内式前半	器高(4.9)/器厚0.5~1.0	40%	外:ハケ後ミガキ 内:坏部不明、脚部ハケ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の石英・長石 含む	良好		
		551	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	脚径(15.8)/器高(10.4)/ 器厚0.6~1.3	30%	外:ミガキ 内:ナデ	橙 7.5YR7/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		552	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期 中~後葉	脚径(14.1)/器高(8.1)/ 器厚0.5~2.1	25%	外:ミガキ 内:ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
	553	64 溝東部 上層上部	高坏	庄内式初頭	脚径(12.8)/器高(9.6)/ 器厚0.4~3.6	30%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	やや粗 1~3mm大の石 英・長石チャート含む	良好			
	554	64 溝東部 上層上部	高坏	庄内式	脚径(15.4)/器高(9.6)/ 器厚0.4~0.9	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好			
	555	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	脚径8.5/器高(6.5)/ 器厚0.3~0.8	50%	外:ミガキ 内:ナデ?	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好			
	556	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	脚径10.6/器高(1.7)/ 器厚0.5~0.7	20%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好			

遺物観察表 (16)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
60		557	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	脚径(10.9)/器高(7.2)/ 器厚0.5~3.1	45%	外:ミガキ 内:ナデ?	橙 5YR7/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
		558	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期後葉	器高(8.4)/器厚0.5~1.5	30%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ? 脚部ナデ?	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm大の長石・チャート 含む	良好		
		559	64 溝東部 上層上部	高坏	庄内式	器高(5.1)/器厚0.5	30%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		560	64 溝東部 上層上部	高坏	弥生後期中葉	脚径(9.3)/器高(6.3)/ 器厚0.4~1.2	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/4	密 1mm大の長石・チャート 含む	良好		
		561	64 溝東部 上層上部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	径(21.8)/器高(3.6)/ 器厚0.5~0.9	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR6/4	密	良好		
		562	64 溝東部 上層上部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(5.0)/器厚0.6~0.9	10%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	橙 2.5YR6/8	密 1mm大の長石含む	良好		
		563	64 溝東部 上層上部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	最大径(15.2)/器高(6.9)/ 器厚0.3~1.0	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好		
		564	64 溝東部 上層上部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(6.3)/器厚0.4~1.0	10%	外:ハケ・ナデ? 内:ハケ・ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好		
		565	64 溝東部 上層上部	製塩土器	弥生後期後葉~ 庄内式前半	脚径(8.0)/器高(6.7)/ 器厚0.5~1.0	30%	外:タタキ 内:ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英含む	良好		
	35	566	64 溝東部 上層上部	製塩土器	庄内式	脚径5.3/器高(5.5)/ 器厚0.6~1.0	40%	外:体部タタキ、脚部ナデ 内:体部ハケ?、体部ナデ	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好		
	35	567	64 溝東部 上層上部	製塩土器	庄内式	脚径4.8/器高(3.7)/ 器厚0.5	25%	外:タタキ 内:ナデ?	灰白 2.5YR/2	密 1~3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		568	64 溝東部 上層上部	脚台 製塩土器?	庄内式?	脚径5.0/器高(3.6)/ 器厚0.6		外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	やや 良好		
	35	569	64 溝東部 上層上部	蛸壺	庄内式?	底径(4.2)/器高(11.5)/ 器厚1.1~2.4	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm以下の石英含む	良好		
		570	64 溝東部 上層上部	蛸壺	弥生後期後葉?	口径6.6/底径4.6/器高8.0/ 器厚0.5~1.2	85%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
		571	64 溝東部 上層上部	土錘	不明	幅3.5/厚み3.2/孔径0.7	80%	ナデ	にぶい黄橙 10YR6/4	密 1mm以下の長石含む	良好		
	35	572	64 溝東部 上層上部	小形丸底 壺?	弥生後期後葉~ 庄内式?	口径(8.8)/器高(7.5)/ 器厚0.5~0.7	35%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ	橙 5YR6/8	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
	61		573	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(13.6)/器高(30.5)/ 器厚0.6~0.8	45%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、 体部ミガキ/内:口縁部ヨコ ナデ、頸部・体部ハケ	にぶい褐 7.5YR/3	密 1mm大の石英・チャート 含む	良好	
			574	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径17.5/器高(5.3)/ 器厚0.6~1.1	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、頸部ハ ケ	灰褐 7.5YR5/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
			575	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(13.2)/器高(7.9)/ 器厚0.5~0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ、体部ハケ後ミガキ/内:口 縁部ヨコナデ、頸部ミガキ、体 部ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~5mm大の石英・長 石含む	良好	
		576	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径17.2/器高(6.9)/ 器厚0.5~1.2	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	赤褐 5YR4/6	密 1~5mm大の石英・長 石含む	良好		
		577	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径16.8/器高(8.1)/ 器厚0.7~1.1	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:口縁部ヨコナデ、頸部 ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	密	良好		
		578	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(16.2)/器高(3.6)/ 器厚0.9~1.1	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1mm大の石英・長 石・チャート、赤彩粒含む	良好		
		579	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(15.0)/器高(10.0)/ 器厚0.6~1.1	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:不明	赤褐 5YR4/6	密 1~4mm大の石英・長 石含む	良好		
		580	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生中期後葉?	口径13.0/器高(6.1)/ 器厚0.7~1.1	20%	外:口縁~頸部ヨコナデ、体部 ミガキ/内:口縁~頸部ヨコナ デ、体部不明	橙 5YR7/6	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	近江 系?	
		581	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期	口径18.0/器高(21.5)/ 器厚0.5~0.7	40%	外:口縁部ヨコナデ、頸部~体 部ハケ/内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
		582	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径12.2/底径4.0/器高 (20.1)/器厚0.5~1.5	80%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 後ミガキ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~4mmの石英・ 長石含む	良好		
27		583	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径11.4/底径4.4/器高 17.8/器厚0.4~1.1	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	橙 5YR6/6	やや密 1~3mmの石英・ 長石含む	良好		
		584	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径9.9/器高(8.5)/ 器厚0.5~0.8	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
		585	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(14.7)/器高(6.8)/ 器厚0.5~0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 後ナデ/内:口縁部ヨコナデ、 体部ナデ?	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		586	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(14.6)/器高(5.0)/ 器厚0.4~0.6	10%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好		
		587	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(12.0)/器高(8.1)/ 器厚0.5~0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ /内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
		588	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(13.4)/器高(7.3)/ 器厚0.5~0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ハケ /内:ヨコナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		589	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(13.0)/器高(6.0)/ 器厚0.4~0.7	10%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:不明	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
		590	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式前半	口径12.6/器高(5.5)/ 器厚0.5~0.6	25%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部ミガ キ/内:不明	橙 5YR6/6	やや密 1~4mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好		
		591	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉	口径(14.2)/器高(7.7)/ 器厚0.6~1.1	15%	外:ミガキ? 内:摩滅のため不明	明褐 7.5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
		592	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径15.2/器高(5.9)/ 器厚0.6~0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:ヨコミガキ	橙 5YR6/8	やや密 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		

遺物観察表 (17)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
61		593	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径12.4/器高(4.6)/ 器厚0.6～0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ミガキ/内:不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1～4mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		594	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期	口径(13.6)/器高(6.3)/ 器厚0.4～0.5	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm大の石英・長石含む	良好	
62		595	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期 中～後葉	口径(18.3)/器高(12.4)/ 器厚0.8～1.4	25%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、 体部ミガキ/内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		596	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期 中～後葉	口径(19.9)/器高(11.2)/ 器厚0.6～0.9	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		597	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径18.8/器高(11.5)/ 器厚0.4～1.1	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明褐 7.5YR5/6	やや密 1～4mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
	27	598	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径23.3/器高(10.6)/ 器厚0.5～0.8	20%	外:頸部剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密 1～4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		599	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径23.0/器高(8.6)/ 器厚0.8～0.9	15%	外:頸部ハケ 内:口縁部ミガキ?	橙 5YR7/6	やや密 1～4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		600	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(20.2)/器高(3.3)/ 器厚0.6	10%	外:ナデ? 内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1～5mm大の石英・長石含む	良好	
		601	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径13.7/器高(5.1)/ 器厚0.8～1.3	25%	外:剥離のため不明、一部ハケ 内:不明	明褐 7.5YR5/6	やや密 1～3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		602	64 溝東部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期 中～後葉	口径(19.2)/器高(20.0)/ 器厚0.6～0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、頸部ナデ?	灰白 7.5YR8/2	密	良好	
	29	603	64 溝東部 上層下部	広口壺	弥生後期 中～後葉	口径18.0/器高(9.9)/ 器厚0.7～0.8	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	記号?
		604	64 溝東部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(20.4)/器高(11.5)/ 器厚0.6～0.9	15%	外:口縁部不明、頸部ミガキ? 内:不明	橙 7.5YR7/6	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		605	64 溝東部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(17.0)/器高(13.0)/ 器厚0.5～0.7	20%	外:タテミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/4	密 1mm大の石英・長石含む	良好	
		606	64 溝東部 上層下部	壺?	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.5/器高(8.3)/ 器厚0.5～1.8	20%	外:ナデ?ミガキ? 内:ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1～2mm大の長石・チャート含む	良好	
		607	64 溝東部 上層下部	広口長頸壺	弥生後期後葉	口径(16.3)/器高(13.2)/ 器厚0.7～0.9	40%	外・内:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	橙 2.5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含む	良好	
		608	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉	口径(12.6)/器高(10.0)/ 器厚0.5～0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ?、頸部不明 内:口縁部ヨコナデ?、頸部ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密	良好	
		609	64 溝東部 上層下部	壺?	弥生後期後葉～ 庄内式	底径6.5/器高(8.3)/ 器厚0.7～1.6	15%	外:タタキ? 内:ハケ	灰白 7.5YR8/2	密 1mm大の石英・長石・チャート含む	やや良好	
		610	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉?	口径(16.0)/底径8.6/器高 30.8/器厚0.5～1.7	55%	外・内:口縁部不明、体部ハケ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～3mm大の石英・長石含む	良好	
		611	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉?	口径(13.0)/器高(7.0)/ 器厚0.5～0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下ハケ 内:口縁部ヨコナデ?、以下不明	灰黄褐 10YR6/2	やや密 1～3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		612	64 溝東部 上層下部	二重口縁壺	弥生後期後葉	口径(17.4)/器高(3.0)/ 器厚0.7～0.9	10%	外:ミガキ、ヨコナデ 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
	30	613	64 溝東部 上層下部	細頸壺	弥生後期後葉	口径(10.3)/器高(15.0)/ 器厚0.4～0.7	50%	外:タテミガキ 内:ナデ・ハケ	褐灰 10YR5/1	密	良好	
		614	64 溝東部 上層下部	細頸壺	弥生後期後葉	口径(9.6)/器高(11.7)/ 器厚0.4～0.5	30%	外:ミガキ 内:摩滅のため不明	橙 2.5YR6/8	密 1～3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
29	615	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期中葉	口径(16.0)/底径4.3/器高 29.4/器厚0.4～1.4	90%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ、 体部タタキ後ハケ後ミガキ、 内:口縁部ヨコナデ、頸部・ 体部ハケ	橙 7.5YR6/8	密 1mm以下の石英・長石含む	良好		
	616	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(10.4)/底径4.6/ 器高17.4/0.3～1.5	80%	外:頸部ハケ、体部タタキ 内:頸部ハケ、体部ハケ?	橙 5YR6/8	やや密 1～2mm大の石英・長石含む	良好		
	617	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径8.8/器高(6.9)/ 器厚0.4～0.6	25%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ/ 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1～3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
29	618	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(11.3)/底径3.0/ 器高22.8/器厚0.4～1.7	85%	外:ハケ、口縁部・頸部ヨコナデ/ 内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	灰白 7.5YR8/2	密 1～3mm大の石英・長石・角閃石・赤彩粒含む	良好		
	619	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(13.0)/器高(8.0)/ 器厚0.4～0.6	10%	外:ナデ? 内:ナデ?	淡黄 2.5YR3/3	やや密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
	620	64 溝東部 上層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(9.8)/器高(8.5)/ 器厚0.6～0.7	15%	外:タテハケ 内:ヨコハケ	橙 5YR6/8	密 1mm程度の石英・長石・チャート含む	やや良好		
	621	64 溝東部 上層下部	長頸壺?	弥生後期後葉	底径4.3/器高(13.2)/ 器厚0.6～1.2	30%	外:タタキ後ハケ?ナデ? 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好		
	622	64 溝東部 上層下部	長頸壺?	弥生後期後葉	口径(9.0)/器高(10.0)/ 器厚0.4～0.6	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部不明 内:不明	にぶい褐 7.5YR5/3	やや密 1～3mm大の石英・長石含む	良好		
	623	64 溝東部 上層下部	壺	庄内式?	口径(6.2)/器高(10.7)/ 器厚0.3～1.0	70%	外:口縁部ヨコナデ?、体部不明 内:口縁部ヨコナデ?、体部ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1～6mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
28	624	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉～ 庄内式	口径4.0/器高(25.9)/ 器厚0.4～1.2	80%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや粗 1～4mm大の石英・長石・チャート・角閃石含む	良好		
	625	64 溝東部 上層下部	壺	庄内式?	器高(12.2)/器厚0.5～1.0	20%	外:ミガキ 内:ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 1～2mm大の石英・長石・角閃石含む	良好		
30	626	64 溝東部 上層下部	広口壺?	弥生後期後葉～ 庄内式	口径8.5/底径3.6/器高 12.2/器厚0.4～1.1	90%	外:ハケ後ミガキ/内:口縁部 ナデ?、体部ハケ?	明褐 7.5YR5/6	密 1mm大の長石・チャート含む	良好		
30	627	64 溝東部 上層下部	ミニチュア 壺?	弥生後期中葉?	底径2.5/器高(4.9)/ 器厚0.5～1.2	85%	外:ハケ後ナデ 内:ナデ	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
64	31	628	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(17.0)/器高(22.9)/ 器厚0.4～0.8	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ 後ハケ/内:口縁部ヨコナデ、 体部ハケ	橙 5YR7/6	やや密 1～4mm大の石英・長石・角閃石・赤彩粒含む	良好	

遺物観察表 (18)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
64		629	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(15.6)/器高(21.5)/ 器厚0.6~0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	密	良好	
		630	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(15.3)/器高(19.7)/ 器厚0.5~0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ後ハケ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ	橙 7.5YR7/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		631	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(14.8)/器高(18.6)/ 器厚0.6~0.9	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	褐灰 10YR4/1	密 1mm大の石英・長石・ 雲母含む	良好	
		632	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(20.0)/器高(14.3)/ 器厚0.8~1.2	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1~9mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好	
		633	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径21.5/器高(6.3)/ 器厚0.5~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート・赤彩 粒含む	良好	
		634	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(17.4)/器高(8.0)/ 器厚0.7~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1~2mm大の石英・ チャート含む	良好	
		635	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(19.6)/器高(9.2)/ 器厚0.4~0.7	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ヨコハケ	灰黄褐 10YR4/2	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好	
		636	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(13.8)/器高(6.8)/ 器厚0.4~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		637	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(17.8)/器高(5.8)/ 器厚0.6~0.9	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	褐 7.5YR4/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		638	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(19.2)/器高(6.9)/ 器厚0.4~0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	橙 5YR6/6	やや密 1~5mm大の石 英・長石含む	良好	
		639	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径18.5/器高(6.6)/ 器厚0.5~0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	にぶい橙 5YR7/4	密	良好	
		640	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(19.0)/器高(9.1)/ 器厚0.4~0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ後ハケ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ?	橙 7.5YR6/6	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		641	64 溝東部 上層下部	甕	庄内式?	口径(14.4)/器高(12.9)/ 器厚0.3~0.6	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズ リ?	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~5mm大の石 英・長石含む	良好	
		642	64 溝東部 上層下部	甕	庄内式?	器高(12.9)/器厚0.4~0.6	30%	外:タタキ後ハケ 内:ケズリ後ハケ?	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		643	64 溝東部 上層下部	甕	庄内式	口径(16.0)/器高(12.7)/ 器厚0.6~0.7	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	灰黄褐 10YR4/2	やや密 1~8mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		644	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(17.2)/器高(11.2)/ 器厚0.5~0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		645	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(17.0)/器高(7.1)/ 器厚0.4~0.6	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	粗 1~9mm大の石英・長 石・チャート・角閃石含む	良好	
		646	64 溝東部 上層下部	甕	庄内式	口径17.4/器高(12.2)/ 器厚0.4~0.7	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		647	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(18.8)/器高(6.1)/ 器厚0.4~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~2mm大の石英・ チャート含む	良好	
		648	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(13.8)/器高(8.3)/ 器厚0.4~0.6	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	にぶい橙 5YR6/4	やや粗 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
	649	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉	口径(14.4)/器高(8.7)/ 器厚0.5~0.8	25%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	褐 7.5YR4/4	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
	650	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式初頭	口径(14.4)/器高(15.3)/ 器厚0.5~1.1	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR5/2	密 1~2mmの石英・雲母・ 角閃石含む	良好		
65		651	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(13.8)/器高(13.7)/ 器厚0.3~0.5	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 不明	にぶい赤褐 5YR5/4	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		652	64 溝東部 上層下部	甕	庄内式前半	口径(13.6)/底径3.8/器高 16.7/器厚0.3~1.4	80%	外:口縁部ヨコナデ?、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 ハケ?	橙 7.5YR6/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好	
	31	653	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式初頭	口径13.9/底径5.4/器高 17.8/器厚0.4~2.0	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR4/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		654	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式初頭	口径(13.0)/器高(13.4)/ 器厚0.5~0.7	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ後ハケ、内:摩滅のため不明	橙 5YR7/6	密 1~2mmの石英・長石・ チャート含む	良好	
		655	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(16.6)/器高(6.9)/ 器厚0.4~0.6	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		656	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期中葉?	口径(13.7)/器高(6.2)/ 器厚0.7~0.9	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	橙 7.5YR7/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		657	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(14.2)/器高(4.4)/ 器厚0.5~0.7	10%	外:口縁部ハケ、体部タタキ/ 内:口縁部ハケ、体部ハケ	橙 5YR7/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		658	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式初頭	口径(13.6)/底径4.6/器高 13.4/器厚0.4~2.0	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~2mmの石英・雲母・ チャート含む	良好	
	32	659	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(12.4)/底径(4.0)/ 器高15.0/器厚0.4~1.7	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	明赤褐 5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
	32	660	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	口径(11.4)/底径3.8/器高 13.8/器厚0.4~1.8	60%	外:体部タタキ 内:体部ハケ?	黄灰 2.5Y4/1	やや密	良好	

遺物観察表 (19)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
65		661	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式初頭	底径(3.6)/器高(6.5)/ 器厚0.3～0.8	70%	外:タタキ後ナデ? 内:ハケ後ナデ	明赤褐 5YR5/6	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		662	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径4.8/器高(17.0)/ 器厚0.5～1.3	60%	外:タタキ 内:ハケ	灰黄褐 10YR4/2	やや密 1～5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		663	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径4.3/器高(9.4)/ 器厚0.5～1.6	15%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		664	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉	底径4.6/器高(9.2)/ 器厚0.4～1.8	40%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/3	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好	
		665	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径5.0/器高(7.9)/ 器厚0.6～1.2	30%	外:タタキ 内:ハケ	灰黄褐 10YR4/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		666	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径4.5/器高(6.7)/ 器厚0.3～2.0	20%	外:タタキ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		667	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径5.8/器高(10.0)/ 器厚0.7～2.0	60%	外:タタキ 内:摩滅のため不明	浅黄橙 7.5YR5/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		668	64 溝東部 上層下部	甕	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径4.6/器高(7.4)/ 器厚0.4～1.8	30%	外:タタキ 内:ハケ	褐 7.5YR4/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好	
66		669	64 溝東部 上層下部	大形鉢	庄内式	口径(34.6)/器高(7.6)/ 器厚0.3～0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや密 1～6mmの石英・ 長石・角閃石含む	良好	
		670	64 溝東部 上層下部	中形鉢	庄内式中頃	口径(27.2)/器高(13.4)/ 器厚0.8～1.2	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ/内:口縁部ハケ後ナデ、体 部ハケ	にぶい橙 5YR7/4	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		671	64 溝東部 上層下部	中形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(29.4)/器高(8.3)/ 器厚0.4～0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1～2mmの石英・雲母・ 角閃石含む	良好	
		34 672	64 溝東部 上層下部	台付鉢?	弥生後期?	口径(13.4)/器高(9.8)/ 器厚0.3～1.3	50%	外:剥離のため不明 内:ミガキ?	にぶい橙 5YR6/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
		34 673	64 溝東部 上層下部	台付鉢?	弥生後期後葉	口径(9.2)/器高(12.9)/ 器厚0.4～1.1	50%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガ キ?/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		674	64 溝東部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(20.4)/器高(5.5)/ 器厚0.3～0.6	30%	外:内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1～3mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		33 675	64 溝東部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(19.0)/底径3.2/器高 9.8/器厚0.4～1.5	60%	外:口縁部不明、体部タタキ 内:口縁部不明、体部ハケ?	橙 5YR6/8	やや粗 1～5mm大の石 英・長石・赤彩粒・角閃石 含む	良好	
		676	64 溝東部 上層下部	小形鉢	庄内式前半	口径(14.6)/底径4.8/器高 11.8/器厚0.4～1.4	70%	外:タタキ後ナデ 内:ハケ(口縁部後ナデ)	橙 5YR7/6	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		677	64 溝東部 上層下部	小形鉢	庄内式前半	口径(15.4)/器高(5.1)/ 器厚0.5～0.8	20%	外:ナデ?/内:口縁部ハケ、体 部ナデ?	明褐 7.5YR5/6	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		678	64 溝東部 上層下部	小形鉢	庄内式	口径(13.4)/底径3.8/器高 7.1/器厚0.3～0.9	60%	外:ハケ後ミガキ 内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		679	64 溝東部 上層下部	小形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	底径2.5/器高(5.2)/ 器厚0.6～1.1	60%	外:ナデ? 内:ハケ後ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1～2mmの石英・長石・ チャート含む	良好	
		680	64 溝東部 上層下部	小形鉢	庄内式	口径7.4/底径3.6/器高 5.1/器厚0.3～1.0	80%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 後ミガキ/内:ハケ?	明赤褐 5YR5/6	密 1～2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		681	64 溝東部 上層下部	小形鉢?	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.0/器高(3.4)/ 器厚0.3～1.6	20%	外:ミガキ 内:ナデ?	橙 7.5YR6/6	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好	
		682	64 溝東部 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径(15.8)/底径(4.0)/ 器高13.9/器厚0.5～2.0	50%	外:タタキ 内:ハケ・ナデ	浅黄褐 10YR8/4	やや密 1～5mm大の石 英・長石含む	良好	
		683	64 溝東部 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	口径15.2/底径3.8/器高 11.0/器厚0.5～1.2	80%	外:タタキ 内:ハケ?	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		684	64 溝 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	口径18.6/底径3.7/器高 9.9/器厚0.4～1.4	75%	外:ナデ? 内:ハケ	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
685	64 溝東部 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径3.4/器高(4.4)/ 器厚0.7～2.0	10%	外:タタキ 内:摩滅のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好			
686	64 溝東部 上層下部	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式前半	底径3.7/器高(5.6)/ 器厚0.3～1.5	40%	外:タタキ 内:ハケ	褐 7.5YR4/3	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好			
67		687	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(31.2)/器高(4.0)/ 器厚0.4～0.9	10%	外:内:ヨコナデ・ナデ後ミガキ	黄灰 2.5Y6/1	密 1～2mm大の石英・ チャート含む	良好	
		688	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(28.0)/器高(4.4)/ 器厚0.4～0.6	10%	外:ミガキ? 内:摩滅のため不明	橙 5Y6/6	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		689	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期 後葉～末	口径(27.0)/器高(5.2)/ 器厚0.3～0.4	15%	外:ミガキ 内:ミガキ	灰黄褐 10YR6/2	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		33 690	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期 中～後葉	口径(25.3)/脚径(14.3)/ 器高16.1/器厚0.4～0.9	70%	外:口縁部ヨコナデ後ミガキ、 脚部ミガキ/内:不明	橙 2.5YR6/8	密 1mm前後の石英・長石 含む	良好	
		691	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期 中～後葉	口径(22.6)/器高(5.1)/ 器厚0.3～0.4	10%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～2mm大の長 石・赤彩粒含む	やや 良好	
		692	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期中葉	口径(22.6)/器高(8.0)/ 器厚0.5～3.5	40%	外:坏口縁ヨコナデ、杯底部・脚 部ハケ/内:不明	橙 5YR6/8	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		693	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(19.4)/器高(10.7)/ 器厚0.4～1.2	40%	外:杯口縁部ヨコナデ、以下ミ ガキ/内:坏部ミガキ?、脚部 ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密	良好	
		694	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(17.8)/器高(6.6)/ 器厚0.3～1.0	40%	外:ミガキ? 内:ミガキ?	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		695	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(16.0)/器高(4.8)/ 器厚0.3～0.5	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1～4mm大の石英・長 石含む	良好	
		696	64 溝東部 上層下部	有稜高坏	弥生後期末	口径(15.0)/器高(3.4)/ 器厚0.3～0.6	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/8	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		697	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期末	脚径(24.8)/器高(12.1)/ 器厚0.4～1.5	60%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1～4mm大の石 英・長石含む	良好	

遺物観察表 (20)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
68		698	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径17.4/器高(13.0)/ 器厚0.4~2.0	50%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:不明	橙 5YR7/6	やや密 1~4mmの石英・ 長石・チャート含む	良好	
		699	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期 中~後葉	脚径(15.4)/器高(11.8)/ 器厚0.5~1.4	40%	外:脚部ミガキ、坏部ハケ? 内:脚部ナデ?,坏部ミガキ?	橙 5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		700	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	脚径14.2/器高(9.3)/ 器厚0.4~1.4	45%	外:ハケ後ミガキ 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		701	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期末	脚径(12.0)/器高(9.3)/ 器厚0.4~1.1	40%	外:ミガキ? 内:ナデ?	灰白 10YR8/2	密 1~4mm大の石英・長 石含む	良好	
		33 702	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期後葉~ 庄内式前半	脚径12.4/器高(8.1)/ 器厚0.5~0.9	50%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/6	密	良好	
		703	64 溝東部 上層下部	高坏	庄内式前半	脚径12.3/器高(5.7)/ 器厚0.4~1.2	50%	外:ミガキ? 内:ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		704	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期 中~後葉	脚径(10.6)/器高(7.2)/ 器厚0.3~1.6	35%	外:タテミガキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		705	64 溝東部 上層下部	高坏	庄内式	脚径10.5/器高(7.0)/ 器厚0.6~3.7	50%	外:ハケ後ミガキ? 内:ナデ?	明褐 7.5YR5/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		33 706	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期 中~後葉	脚径(11.0)/器高(7.5)/ 器厚0.5~1.5	50%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		707	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期 中~後葉	脚径(12.0)/器高(7.6)/ 器厚0.6~1.3	40%	外:ミガキ 内:ナデ?	赤褐 5YR4/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		33 708	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期後葉~ 庄内式初頭	脚径(13.4)/器高(8.7)/ 器厚0.5~1.2	40%	外:ミガキ? 内:剥離のため不明	淡黄 2.5YR3/3	密 1~5mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		709	64 溝東部 上層下部	高坏	庄内式前半	脚径(12.6)/器高(9.3)/ 器厚0.7~4.2	30%	外:ミガキ? 内:摩擦のため不明	橙 2.5YR6/6	密	良好	
		710	64 溝東部 上層下部	高坏	庄内式	器高(5.9)/器厚0.5~4.8	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		711	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期前葉	器高(6.3)/器厚0.7~1.2	30%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ? 脚部ナデ?	褐 7.5YR4/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
	712	64 溝東部 上層下部	高坏	弥生後期後葉	器高(6.5)/器厚0.8~1.3	20%	外:ミガキ? 内:ナデ?	橙 7.5YR6/6	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好		
69		34 713	64 溝東部 上層下部	器台	弥生後期 中~後葉	口径(17.5)/脚径(18.2)/ 器高16.2/器厚0.4~0.8	80%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		35 714	64 溝東部 上層下部	器台	弥生後期後葉	口径(17.6)/脚径(14.6)/ 器高15.0/器厚0.7~1.0	40%	外:ミガキ、端部ヨコナデ 内:摩擦のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		715	64 溝東部 上層下部	器台	弥生後期後葉	器高(12.8)/器厚0.8~1.0	40%	外:ハケ後ミガキ 内:ハケ後ナデ	淡黄 2.5YR3/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		34 716	64 溝東部 上層下部	手焙形土器	弥生後期後葉~ 庄内式	底径3.0/器高15.5/ 器厚0.4~1.5	75%	外:底部ハケ 内:底部ハケ	橙 7.5YR6/6	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好	
		717	64 溝東部 上層下部	把手	不明	長さ(7.0)/幅(8.3)/ 厚さ(5.0)	5%	ナデ?	橙 2.5YR6/8	やや粗 1~5mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		35 718	64 溝東部 上層下部	蓋	弥生後期?	口径(17.3)/器高6.0/ 器厚0.4~1.4	50%	外:ナデ? 内:ハケ	明褐 7.5YR5/6	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好	
	719	64 溝東部 上層下部	蛸壺?	庄内式?	器高(2.5)/器厚0.4~1.2	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
70		28 720	64 溝東部 下層	広口壺	庄内式前半	口径(14.7)/底径4.4/器高 21.7/器厚0.5~1.2	95%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタ キ後ハケ/内:口縁部ヨコナ デ、頸部・体部ハケ	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		27 721	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径(12.1)/底径4.8/器高 21.7/器厚0.5~1.2	95%	外:タタキ後ハケ 内:ハケ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		722	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径13.2/器高(21.4)/ 器厚0.5~0.7	20%	外:ミガキ 内:ナデ?	にぶい橙 5YR7/4	密 1mm大の石英・チャ ート含む	良好	
		28 723	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径11.7/底径5.3/器高 22.0/器厚0.6~1.6	70%	外:頸部ハケ?、体部タタキ後 ハケ後ミガキ/内:頸部・体部ハ ケ	浅黄橙 10YR8/3	密 1~4mm大の石英・ チャート含む	良好	
		724	64 溝東部 下層	広口壺	庄内式初頭	口径(11.6)/器高(19.7)/ 器厚0.5~0.7	70%	外:内:口縁部ヨコナデ?、体部 ハケ?	明褐 7.5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		725	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径13.1/器高(7.2)/ 器厚0.6~0.8	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ /内:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ?	にぶい赤褐 5YR5/4	密 1~2mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		726	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径12.7/器高(6.4)/ 器厚0.5~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好	
		727	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径(14.1)/底径4.7/器高 20.5/器厚0.4~1.0	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 後ミガキ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ	橙 5YR6/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		728	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径15.4/器高(6.1)/ 器厚0.6~0.7	15%	外:ミガキ/内:頸部ミガキ、体 部不明	橙 5YR6/6	密 1mmの石英・長石・ チャート含む	良好	
		729	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径14.6/器高(5.9)/ 器厚0.6~1.2	25%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガ キ/内:口縁部不明、頸部ミガ キ	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
	28 730	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径14.3/底径3.7/器高 16.3/器厚0.5~1.8	90%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、 体部タタキ後ハケ/内:口縁部 ヨコナデ?、頸部・体部ハケ	褐灰 7.5YR4/1	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
	731	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径15.8/器高(8.1)/ 器厚0.5~0.8	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下ハケ 内:口縁部ヨコナデ?、頸部ミガ キ?	橙 5YR7/6	やや密 1~4mmの石英・ 長石・チャート含む	良好		
71		28 732	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉?	口径(13.9)/底径4.4/器高 21.0/器厚0.6~1.2	95%	外:口縁部ヨコナデ?、体部ミガ キ/内:口縁部不明、体部ハケ	橙 7.5YR6/8	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		733	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期後葉	口径(15.8)/器高(8.3)/ 器厚0.6~1.3	35%	外:タテハケ後タテミガキ 内:ヨコミガキ	橙 7.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石・赤彩粒 含む	良好	
		734	64 溝東部 下層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径(16.0)/器高(7.5)/ 器厚0.5~0.6	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ 内:口縁部不明、頸部ハケ?	橙 5YR6/6	やや粗 1~6mm大の石 英・長石含む	良好	

遺物観察表 (21)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
71		735	64 溝東部下層	広口壺	弥生後期後葉	口径(15.6)/器高(2.2)/器厚0.8	5%	外:摩滅のため不明 内:ミガキ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好	
		736	64 溝東部下層	広口壺	弥生中期後葉?	口径(12.8)/器高(3.8)/器厚0.4~0.8	25%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ・ナデ	橙 7.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	近江系?
		737	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期後葉	口径8.6/器高(5.2)/器厚0.7~1.0	25%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石含む	良好	
		738	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期後葉	底径5.3/器高(9.8)/器厚0.6~1.7	30%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		739	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期中~後葉	頸部径10.0/底径5.0/器高(22.9)/器厚0.5~1.5	80%	外:ハケ後タテミガキ 内:摩滅のため不明	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		29 740	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期後葉	口径9.5/底径4.0/器高18.9/器厚0.4~1.2	95%	外:ハケ?/内:口縁ナデ?、体部ハケ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1~5mm大の石英・長石含む	良好	
		29 741	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期後葉	口径(12.7)/底径3.0/器高24.4/器厚0.4~1.5	70%	外:頸部ハケ、体部タタキ後ハケ/内:頸部ナデ?、体部ハケ	橙 5YR6/6	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	記号?
		29 742	64 溝東部下層	長頸壺	弥生後期後葉	底径4.7/器高(19.5)/器厚0.5~1.4	90%	外:頸部ハケ、体部ハケ・タタキ 内:頸部ハケ、体部ハケ	灰黄褐 10YR5/2	やや粗 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		743	64 溝東部下層	細頸壺	弥生後期中葉	口径9.0/器高(12.5)/器厚0.5~0.6	40%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ミガキ/内:口縁部ヨコナデ、頸部ナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		30 744	64 溝東部下層	細頸壺	弥生後期中葉	口径(8.4)/底径2.0/器高23.8/器厚0.4~1.0	95%	外:摩滅のため不明 内:ハケ	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		745	64 溝東部下層	広口壺?	弥生後期後葉~庄内式	器高(15.6)/器厚0.5~1.0	30%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 5YR6/8	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		31 746	64 溝東部下層	壺?	弥生後期後葉~庄内式	底径4.8/器高(8.3)/器厚0.7~2.0	30%	外:ハケ?ミガキ? 内:摩滅のため不明	にぶい赤褐 5YR4/3	やや密 1~4mm大の石英・長石・雲母含む	良好	
		747	64 溝東部下層	壺	弥生後期後葉~庄内式	底径5.4/器高(8.2)/器厚0.5~0.9	30%	外:体部ミガキ、底部ナデ 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート・角閃石含む	良好	
		748	64 溝東部下層	壺	弥生後期後葉~庄内式	底径10.6/器高(3.7)/器厚0.5~1.8	10%	外:ハケ後底部付近ナデ 内:ナデ?	橙 7.5YR6/6	密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		749	64 溝東部下層	壺	弥生後期後葉~庄内式	底径4.6/器高(3.2)/器厚0.4~1.7	10%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR7/6	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
72		32 750	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式前葉	口径17.0/底径5.3/器高31.6/器厚0.5~1.5	90%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		30 751	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式初頭	口径14.5/底径(3.4)/器高26.5/器厚0.5~1.5	80%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		32 752	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式初頭	口径14.1/底径(5.2)/器高24.9/器厚0.5~1.4	75%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		753	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉	口径(14.7)/底径5.9/器高24.8/器厚0.5~1.5	60%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		31 754	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉	口径(17.2)/底径4.7/器高21.8/器厚0.5~1.4	80%	外:タタキ 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~5mm大の石英・長石・チャート・角閃石含む	良好	
		755	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式初頭	口径(18.0)/器高(14.1)/器厚0.5~0.7	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1mm大の石英・長石・チャート・角閃石含む	良好	
		756	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式	口径(13.2)/器高(10.6)/器厚0.5~0.6	25%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ?	にぶい赤褐 5YR5/4	密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		757	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式	口径(18.0)/器高(2.2)/器厚0.4~0.6	15%	外:ハケ 内:摩滅のため不明	にぶい橙 5YR6/4	密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
73		758	64 溝東部下層	甕	庄内式初頭	口径(20.0)/底径(2.8)/器高(23.0)/器厚0.5~1.6	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ?	にぶい赤褐 5YR5/4	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		759	64 溝東部下層	甕	庄内式初頭	口径(17.2)/器高(17.9)/器厚0.5~0.9	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	淡黄 2.5YR/3	密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		760	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉?	口径16.2/器高(17.7)/器厚0.4~1.0	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:不明	橙 5YR7/6	やや密 1~3mm大の石英・チャート含む	良好	
		31 761	64 溝東部下層	甕	庄内式中頃	口径16.9/器高(16.2)/器厚0.3~0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部不明	褐 7.5YR4/6	やや密 1~4mmの石英・長石・角閃石・チャート含む	良好	
		762	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式	口径(16.2)/器高(16.0)/器厚0.5~0.9	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密 1~2mmの石英・長石・チャート含む	良好	
		763	64 溝東部下層	甕	弥生後期中葉	口径15.1/底径5.3/器高19.9/器厚0.5~2.0	95%	外:タタキ後ハケ 内:ハケ・ナデ?	灰白 10YR7/1	やや密 1~3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		764	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉?	口径(19.0)/器高(6.0)/器厚0.5~0.8	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ/内:口縁部ハケ後ナデ?、体部ハケ	橙 7.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石英・長石・角閃石・チャート含む	良好	
		765	64 溝東部下層	甕	弥生後期中葉	口径(19.6)/器高(12.0)/器厚0.4~1.1	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ハケ/内:口縁部ヨコナデ?体部不明	にぶい橙 5YR7/4	やや粗 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		766	64 溝東部下層	甕	弥生後期中葉	口径(18.0)/器高(4.5)/器厚0.4~0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部不明	明赤褐 2.5YR5/6	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		767	64 溝東部下層	甕	弥生後期中葉	口径(16.2)/器高(10.2)/器厚0.7~0.9	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
74		31 768	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉~庄内式初頭	口径16.4/器高(25.6)/器厚0.3~0.8	40%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ?	にぶい黄橙 10YR6/4	やや密 1mm大の長石・チャート・雲母含む	良好	

遺物観察表 (22)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
74		769	64 溝東部下層	甕	弥生後期後葉～庄内式	底径5.4/器高(22.3)/器厚0.5～1.8	60%	外:タタキ内:ナデ	灰黄褐 10YR5/2	やや密 1～3mm大の石英・長石含む	良好	
		770	64 溝東部下層	中形鉢	弥生後期後葉	口径(22.4)/器高(9.3)/器厚0.3～0.5	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ミガキ/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ミガキ	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		771	64 溝東部下層	鉢	庄内式前半	口径(17.4)/底径3.4/器高15.4/器厚0.5～2.0	90%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ後ナデ?/内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後?ナデ	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石含む	良好	
		772	64 溝東部下層	小形鉢	庄内式初頭	口径14.1/底径4.2/器高8.6/器厚0.6～1.2	95%	外:剥離のため不明内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/8	密 1～2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		773	64 溝東部下層	小形鉢	弥生後期後葉～庄内式初頭	口径(14.6)/器高(6.2)/器厚0.4～0.6	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下ナデ?内:口縁部ヨコナデ、以下不明	橙 5YR6/6	やや密	良好	
		774	64 溝東部下層	小形鉢	弥生後期後葉	口径(11.2)/底径3.8/器高6.9/器厚0.3～1.0	60%	外:ハケ後ナデ?内:ハケ	橙 5YR6/6	密 1mm程度の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	やや良好	
		775	64 溝東部下層	有孔鉢	弥生後期後葉～庄内式	口径18.1/底径4.7/器高11.4/器厚0.5～1.0	95%	外:タタキ内:ハケ	にぶい橙 5YR7/3	やや密 1～3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		776	64 溝東部下層	有孔鉢	弥生後期後葉～庄内式	底径4.0/器高(9.5)/器厚0.6～1.6	35%	外:剥離のため不明内:底部ハケ、体部不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm以下の石英・長石含む	良好	
		777	64 溝東部下層	有孔鉢	庄内式?	底径5.5/器高(12.8)/器厚0.5～1.5	50%	外:タタキ内:ナデ?	橙 7.5YR7/6	やや粗 1～5mm大の石英・長石含む	良好	
		778	64 溝東部下層	有稜高坏	弥生後期中～後葉	口径(24.0)/器高(6.7)/器厚0.5～0.8	30%	外:ヨコナデ、ハケ内:ヨコナデ、ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
75		779	64 溝東部下層	高坏	弥生後期後葉	口径(22.6)/器高(6.1)/器厚0.4～0.7	30%	外:ミガキ内:ミガキ	橙 5YR6/8	やや密 1～4mmの石英・長石・チャート含む	良好	
		780	64 溝東部下層	高坏	弥生後期後葉	器高(11.7)/器厚0.5～1.6	60%	外:ミガキ内:坏部ミガキ、脚部ナデ	にぶい褐 7.5YR5/4	やや密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		781	64 溝東部下層	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(19.2)/器高(12.7)/器厚0.5～1.0	60%	外:剥離部ミガキ、脚部ミガキ内:不明	橙 5YR6/8	密 1mm程度の石英含む	やや良好	
		782	64 溝東部下層	碗形高坏	弥生後期後葉	口径(16.2)/脚径11.6/器高14.0/器厚0.4～1.1	70%	外:剥離のため不明内:剥離のため不明	橙 5YR6/8	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		783	64 溝東部下層	高坏	弥生後期後葉	脚径13.7/器高(9.6)/器厚0.6～1.0	50%	外:剥離のため不明内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		784	64 溝東部下層	高坏	弥生後期後葉	脚径14.1/器高(9.2)/器厚0.7	50%	外:ミガキ?内:脚部ヨコナデ	橙 2.5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		785	64 溝東部下層	高坏	弥生後期中～後葉	器高(11.4)/器厚0.5～1.2	50%	外:ハケ後タテミガキ内:坏部ミガキ、脚部ナデ・ハケ	明赤褐 5YR5/8	密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		786	64 溝東部下層	高坏	弥生後期後葉?	器高(5.8)/器厚0.3～0.7	30%	外:脚部ミガキ内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	密 1～2mm大の角閃石・赤彩粒含む	良好	
		787	64 溝東部下層	高坏	庄内式前半	器高(7.8)/器厚0.7～3.7	15%	外:ハケ後ナデ?/内:坏部不明、脚部ハケ後ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1～2mmの石英・長石・チャート含む	良好	
		788	64 溝東部下層	高坏	弥生後期前～中葉	脚径(12.9)/器高(6.6)/器厚0.5～1.2	40%	外:タテミガキ内:ナデ?	明赤褐 5YR5/6	密 1mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
76		789	64 溝東部下層	器台	弥生後期後葉	口径(24.5)/脚径(21.0)/器高20.5/器厚0.6～1.0	60%	外:ハケ後ミガキ?/内:口縁部ナデ後ミガキ?、筒部ハケ、脚部ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1～3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		790	64 溝東部下層	器台	弥生後期後葉	口径(17.4)/脚径14.7/器高12.9/器厚0.6～1.0	70%	外:ミガキ、端部ヨコナデ/内:口縁部ミガキ、以下ハケ後ナデ	橙 5YR6/8	密 1mm大の石英・チャート含む	良好	
		791	64 溝東部	広口壺	弥生後期後葉～庄内式	底径5.8/器高(34.4)/器厚0.9～1.8	90%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガキ/内:頸部ミガキ、体部ハケ	橙 7.5YR6/6	やや密 1～3mm大の石英・チャート含む	良好	
		792	64 溝東部	広口壺	弥生後期後葉	口縁(25.0)/器高(11.0)/器厚0.9～1.0	15%	外:ナデ、ミガキ内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		793	64 溝東部	広口壺	弥生後期中～後葉	口径18.7/器高(9.8)/器厚0.8～1.0	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部以下ハケ後ミガキ/内:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ、体部ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや粗 1～3mm大の石英・長石含む	良好	
		794	64 溝東部	広口壺	弥生後期後葉～庄内式	器高(9.0)/器厚0.5～0.7	20%	外:頸部ハケ後ミガキ、体部ミガキ/内:頸部ハケ?、体部ハケ	橙 2.5YR6/6	密 1mm以下の石英・長石含む	良好	
		795	64 溝東部	二重口縁壺	弥生後期後葉～庄内式	口径(17.4)/器高(4.8)/器厚0.3～0.7	10%	外:摩滅のため不明内:摩滅のため不明	橙 7.5YR6/6	やや密 1～2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		796	64 溝東部	ミニチュア壺?	弥生後期後葉	器高(4.7)/器厚0.3～0.4	40%	外:ナデ?内:ナデ?	橙 5YR6/6	密 1mm以下の石英・長石含む	良好	
		797	64 溝東部	広口壺	弥生後期後葉～庄内式	口径14.9/器高(7.7)/器厚0.4～0.6	20%	外:剥離のため不明内:不明、肩部ナデ?	橙 5YR6/6	密 1～2mm大の石英・長石含む	良好	
		798	64 溝東部	広口壺	弥生後期後葉～庄内式	口径11.7/器高(6.2)/器厚0.3～0.8	20%	外:剥離のため不明内:剥離のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石・チャート含む	良好	
30		799	64 溝東部	長頸壺	弥生後期後葉	口径8.9/底径4.4/器高14.6/器厚0.5～1.1	100%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガキ/内:頸部ナデ、体部ナデ・ハケ	灰白 2.5Y7/1	やや密 1～2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		800	64 溝東部	甕	弥生後期後葉	口径(15.4)/器高(22.2)/器厚0.3～0.8	60%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ヨコナデ、体部不明	橙 7.5YR7/6	やや粗 1～5mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		801	64 溝東部	甕	弥生後期中葉	口径(15.3)/器高(6.9)/器厚0.4～0.6	25%	外:内:口縁部ヨコナデ、体部ハケ	にぶい橙 7.5YR6/4	密 1mm以下の石英・長石含む	良好	
		802	64 溝東部	甕	弥生後期後葉	口径(13.6)/底径4.0/器高19.9/器厚0.4～1.5	90%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:口縁部ナデ・ハケ、体部ハケ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1～4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		803	64 溝東部	甕	弥生後期後葉	底径6.5/器高(7.4)/器厚0.4～2.0	25%	外:タタキ内:ハケ	にぶい褐 7.5YR6/3	やや密 1～3mm大の石英・長石含む	良好	
		804	64 溝東部	甕	弥生後期後葉	口径14.3/底径4.4/器高15.9/器厚0.4～1.7	70%	外:口縁部ヨコナデ、体部タタキ/内:不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 1～3mm大の石英含む	やや良好	

遺物観察表 (23)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
		805	64 溝東部	甕	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(13.5)/底径(4.0)/ 器高11.2/器厚0.4～1.3	40%	外:口縁部不明、体部タタキ 内:剥離のため不明	灰黄褐 10YR4/2	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		806	64 溝東部	大形鉢	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(34.4)/器高(17.4)/ 器厚0.6～0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ/内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		807	64 溝東部	小形鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(13.3)/底径6.3/器高 10.3/器厚0.6～1.8	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内:ハケ後ナデ	褐灰 10YR5/1	密 1mm以下の長石含む	良好	
		808	64 溝東部	製塩土器	庄内式	脚径6.4/器高(5.4)/ 器厚0.7～1.4	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		809	64 溝東部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(17.2)/器高(9.2)/ 器厚0.4～0.9	35%	外:坏口縁部ヨコナデ?、以下ミ ガキ/内:坏部ミガキ、脚部ナ デ?	にぶい橙 5Y7/4	密 1～2mm大の石英含む	良好	
		810	64 溝東部	有稜高坏	弥生後期 後葉～末	口径(16.3)/器高(5.8)/ 器厚0.4～0.5	30%	外:口縁ヨコナデ、ミガキ 内:剥離のため不明	橙 5YR6/6	やや密 1～3mm大の石 英・長石含む	良好	
		811	64 溝東部	高坏	弥生後期後葉	器高(7.3)/器厚0.6～1.4	30%	外:坏部ミガキ、脚部ハケ後ミ ガキ/内:坏部ミガキ、脚部ナ デ?	橙 2.5YR7/6	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好	
		812	64 溝東部	高坏	庄内式初頭	器高(8.7)/器厚0.4～3.4	25%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1mm大の石英含 む	良好	
77		813	64 溝東部	高坏	弥生後期中葉	器高(6.9)/器厚0.6～1.5	30%	外:坏部ハケ後ミガキ?、脚部ミ ガキ/内:坏部ハケ、脚部ハケ 後ナデ?	灰白 2.5Y7/1	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
		814	64 溝東部	高坏?	弥生後期 前～中葉	脚径11.1/器高(8.7)/ 器厚0.5～2.0	55%	外:ミガキ/内:坏部ハケ後ミ ガキ、脚部不明	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1～2mm大の石英・赤 彩粒含む	良好	
		815	64 溝東部	高坏	弥生後期 中～後葉	脚径(16.6)/器高11.8/ 器厚0.5～1.7	25%	外:タテミガキ 内:脚部ヨコナデ、以上ナデ?	黄灰 2.5Y6/1	やや密 1～4mmの石英・ 長石・チャート含む	良好	
		816	64 溝東部	蛸壺	庄内式?	器高(7.5)/器厚0.5～0.7	40%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
		817	64 溝東部	蛸壺	庄内式?	器高(2.0)/器厚0.5～0.6	5%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	淡黄 2.5Y8/3	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		818	64 溝東部	手焙形土器	庄内式?	器高(3.8)/器厚0.4～1.4	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1～2mm大の長 石・赤彩粒含む	やや 良好	
		819	64 溝東部	鉢?	不明	口径(17.8)/器高(5.4)/ 器厚0.5～1.0	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部不 明	橙 7.5YR7/6	密 1～2mm大の長石・赤 彩粒含む	やや 良好	
		820	64 溝東部	器台	弥生後期後葉	器高(12.0)/器厚0.7～0.8	35%	外:ミガキ 内:ナデ	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の長石・赤彩粒 含む	良好	
36		821	120 溝中央部 4層+5～7 層	碗形高坏	庄内式中頃	口径(12.4)/脚径(18.0)/ 器高11.7/器厚0.3～1.2	80%	外:坏部ナデ後ミガキ・口縁部 ハケ、脚部ハケ・ナデ後ミガキ 内:坏部ナデ後ミガキ、脚部ハ ケ・ナデ	淡黄 2.5Y8/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		822	120 溝中央部 5～7層	甕?	弥生後期?	口径(13.6)/器高(6.7)/ 器厚0.5～0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ミガ キ?/内:口縁部ヨコナデ、体部 ナデ?	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		823	120 溝中央部 5～7層	有孔鉢	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.2/器高(6.1)/ 器厚0.5～1.2	30%	外:タタキ 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	密 1～2mm大の石英・長 石含む	やや 良好	
		824	120 溝 4層	台付鉢?	弥生後期?	台径6.3/器高(4.0)/ 器厚0.4～1.1	20%	外:体部タタキ?・台部ナデ? 内:体部ハケ?・台部ナデ?	にぶい橙 2.5YR6/4	やや密 1～2mm大の長 石・チャート・赤彩粒含む	良好	
36		825	120 溝中央部 5～7層	広口壺	庄内式	口径(24.5)/器高(7.8)/ 器厚0.4～1.2	15%	外:体部ミガキ? 内:剥離のため不明	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・片岩?含む	良好	阿波 系?
		826	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生後期後葉	口径(23.8)/器高(5.4)/ 器厚0.9～2.4	15%	外:頸部ミガキ?、以外不明 内:剥離のため不明	橙 2.5Y6/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
36		827	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生中期後葉	口径(17.0)/器高(7.6)/ 器厚0.7～1.0	30%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、以下ハケ・ ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		828	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(16.2)/器高(4.6)/ 器厚0.5～0.9	25%	外:不明・ミガキ? 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1～3mm大の石 英・長石・チャート・赤彩 粒含む	良好	
		829	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(15.7)/器高(5.9)/ 器厚0.8～1.2	25%	外:ハケ後ミガキ? 内:剥離のため不明	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
78		830	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(13.8)/器高(8.7)/ 器厚0.4～0.8	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm大の長石・チャ ート含む	やや 良好	
		831	120 溝中央部 5～7層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(14.0)/器高(5.5)/ 器厚0.8～1.0	25%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガ キ/内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
36		832	120 溝中央部 5～7層	加飾 二重口縁壺	庄内式前半	口径20.0/器高(8.8)/ 器厚0.8～1.5	30%	外:口縁部ヨコナデ 内:ミガキ・ナデ?	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
36		833	120 溝中央部 5～7層	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(17.6)/器高(3.1)/ 器厚0.6～1.3	15%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
36		834	120 溝中央部 5～7層	甕	布留式前半	器高(4.3)/器厚0.3～0.6	10%	外:口縁～頸部ヨコナデ、以下 不明/内:口縁部ヨコナデ、体 部ケズリ	橙 2.5YR6/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		835	120 溝中央部 5～7層	甕	弥生後期	底径3.9/器高(3.2)/ 器厚0.4～1.4	10%	外:体部タタキ 内:ハケ	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		836	120 溝中央部 5～7層	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	底径3.8/器高(3.3)/ 器厚0.5～1.5	10%	外:体部タタキ、底部ナデ 内:ハケ	浅黄 2.5Y7/4	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		837	120 溝中央部 5～7層	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	底径4.0/器高(3.2)/ 器厚0.5～1.5	10%	外:体部タタキ、底部ナデ 内:ハケ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		838	120 溝中央部 5～7層	小形鉢	庄内式中頃	底径2.1/器高(4.4)/ 器厚0.5～1.0	50%	外:体部タタキ後ナデ、底部ナ デ/内:ハケ	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		839	120 溝中央部 5～7層	台付鉢?	弥生後期?	台径(7.1)/器高(4.1)/ 器厚0.5～1.0	20%	外:ハケ後ナデ 内:ハケ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1～2mm大の長 石・チャート含む	良好	
36		840	120 溝中央部 5～7層	有稜高坏	庄内式後半	口径(18.8)/器高(5.2)/ 器厚0.4～0.8	30%	外:口縁部ヨコナデ、以下ミガ キ?/内:ミガキ?	橙 2.5YR6/8	密 1～2mm大の長石・ チャート含む	良好	

遺物観察表 (24)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
78		841	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式後半~ 布留式前葉	器高(2.7)/器厚0.4~1.0	10%	外:ミガキ? 内:ハケ後ミガキ	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		842	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式	器高(3.9)/器厚0.4~1.1	20%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ、脚 部ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	密	良好	
		843	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式	器高(1.4)/器厚0.5~1.1	30%	外:剥離のため不明・ハケ? 内:不明	橙 5YR7/6	やや密 1~2mm大の長 石・チャート含む	良好	
		844	120 溝中央部 5~7層	高坏	弥生後期後葉	器高(6.2)/器厚0.5~1.1	25%	外:坏部・脚部ミガキ/内:坏部 ミガキ、脚部シボリ目・ナデ	橙 2.5YR6/8	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		845	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式 前半?	器高(8.4)/器厚0.4~1.3	15%	外:ミガキ 内:シボリ目・ナデ?	橙 5YR6/8	密 1~2mm大の石英・ チャート含む	良好	
		846	120 溝中央部 5~7層	高坏	弥生後期後葉~ 庄内式	器高(8.0)/器厚0.4~1.2	30%	外:ミガキ? 内:シボリ目・ナデ?	橙 7.5YR7/8	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		847	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式	器高(8.3)/器厚0.6~3.8	30%	外:タテミガキ? 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		848	120 溝中央部 5~7層	高坏	弥生後期後葉	器高(8.5)/器厚0.6~1.2	20%	外:タテミガキ 内:シボリ目・ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm大の長石含む	良好	
		849	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式	器高(8.5)/器厚0.6~1.5	30%	外:ミガキ? 内:シボリ目・ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		850	120 溝中央部 5~7層	高坏	弥生後期前葉	脚径(7.4)/器高(8.7)/ 器厚0.5~1.5	40%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1~2mm大の長 石・チャート含む	良好	
		851	120 溝中央部 5~7層	高坏	庄内式初頭	脚径(11.2)/器高(8.5)/ 器厚0.5~1.2	60%	外:ミガキ 内:ナデ?	橙 7.5YR7/6	やや粗 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 良好	
		852	120 溝南東部 2層	広口壺	弥生後期 中~後葉	口径(21.6)/器高(8.8)/ 器厚0.4~1.7	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	暗灰 N3/	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		853	120 溝南東部 4層	広口壺	弥生後期後葉~ 庄内式	口径16.8/器高(5.2)/ 器厚0.6~1.0	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	密 1mm以下の石英・長石 含む	良好	
	36	854	120 溝南東部	広口壺	弥生後期後葉?	器高(9.3)/器厚0.4~0.9	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/3	やや密 1~4mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好	
	855	120 溝南東部	有稜高坏	弥生後期後葉~ 庄内式	口径(18.0)/器高(4.0)/ 器厚0.5~0.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒・雲母含 む	良好		
	856	120 溝南東部	高坏	弥生後期 中~後葉	器高(10.2)/器厚0.4~1.1	50%	外:タテミガキ/内:坏部ミガ キ、脚部シボリ目・ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	857	120 溝南東部	高坏	弥生後期前葉	脚径9.2/器高(8.8)/ 器厚0.5~1.3	50%	外:タテミガキ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	858	120 溝南東部 5層	高坏	弥生後期前葉	脚径6.8/器高(7.7)/ 器厚0.5~1.2	50%	外:脚部タテミガキ、以外不明 内:シボリ目	灰白 2.5Y8/1	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
	859	120 溝南東部	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.4/器高(2.8)/ 器厚0.5~1.1	10%	外:タタキ 内:ハケ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	860	120 溝南東部 5~6層	脚台	不明	脚径(7.0)/器高(4.1)/ 器厚0.3~1.0	30%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	にぶい赤橙 10Y6/3	やや密 1~5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	861	120 溝南東部	高坏?	庄内式?	脚径(16.6)/器高(3.9)/ 器厚0.3~0.5	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅赤橙 2.5Y7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好		
36	862	120 溝南東部 5~6層	加飾 二重口縁壺	庄内式	口径(22.0)/器高(2.5)/ 器厚0.4~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	863	120 溝南東部 5~6層	加飾 二重口縁壺	庄内式	器高(3.8)/器厚0.5~1.1	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
79	864	120 溝南東部 5~6層	広口壺	弥生中期後葉	口径(18.0)/器高(4.6)/ 器厚0.6~1.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/1	やや密 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	865	120 溝南東部 5~6層	広口壺?	弥生後期?	口径(13.0)/器高(3.5)/ 器厚0.5~0.8	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	密 1~4mm大の石英・長 石・チャート含む	良好		
	866	120 溝南東部 5~6層	広口壺?	弥生後期後葉?	器高(5.2)/器厚0.5~0.8	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
36	867	120 溝南東部 5~6層	甕	庄内式?	口径(21.0)/器高(2.8)/ 器厚0.4~0.6	15%	外・内:剥離のため不明・ヨコナ デ?	にぶい橙 2.5YR6/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	868	120 溝南東部 5~6層	甕	庄内式?	口径(16.8)/器高(2.3)/ 器厚0.4~0.6	10%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい赤橙 2.5YR5/3	密 1~5mm大の石英・長 石含む	良好		
	869	120 溝南東部 5~6層	壺	弥生後期後葉?	口径(16.0)/器高(1.5)/ 器厚0.5~1.4	20%	外:ナデ 内:ヨコナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
870	120 溝南東部 5~6層	甕	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.4/器高(6.0)/ 器厚0.5~1.2	30%	外:タタキ 内:ハケ	褐灰 10YR4/1	密 1~4mm大の石英・長 石・8mm大のチャート含む	良好			
	871	120 溝南東部 5~6層	甕	庄内式後半	底径3.2/器高(3.3)/ 器厚0.6~1.2	20%	外:タタキ 内:ナデ?	橙 5YR7/6	やや粗 1~5mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	872	120 溝南東部 5~6層	鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式前半	底径3.1/器高(4.1)/ 器厚0.5~1.2	20%	外:タタキ 内:ハケ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	873	120 溝南東部 5~6層	鉢?	弥生後期後葉~ 庄内式	底径2.8/器高(2.4)/ 器厚0.4~0.9	20%	外:タタキ 内:ハケ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	874	120 溝南東部 5~6層	小形鉢	弥生後期後葉~ 庄内式	底径4.4/器高(4.3)/ 器厚0.5~0.9	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい橙 5YR7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	875	120 溝南東部 5~6層	小形鉢	弥生後期後葉~ 庄内式	底径3.2/器高(4.2)/ 器厚0.5~0.6	30%	外:不明・ナデ 内:剥離のため不明	明褐灰 5YR7/2	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
	876	120 溝南東部 5~6層	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(21.6)/器高(2.8)/ 器厚0.5~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	淡赤橙 2.5Y7/4	やや密 1~2mm大の石 英・長石・赤彩粒含む	良好		
	877	120 溝南東部 5~6層	有稜高坏	庄内式後半	器高(4.9)/器厚0.4~0.6	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		

遺物観察表 (25)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
79		878	120 溝南東部 5～6層	高坏	弥生中期後葉	口径(17.2)/器高(3.1)/ 器厚0.2～0.4	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄褐色 10YR5/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石・チャ ート・雲母含む	良好	生駒 西麓
		879	120 溝南東部 5～6層	高坏?	庄内式?	器高(4.5)/器厚0.6～0.9	30%	外:剥離のため不明 内:ミガキ	にぶい黄褐色 10YR7/2	密 1mm大の石英・長石・ 角閃石含む	良好	
		880	120 溝南東部 5～6層	高坏	弥生後期後葉	器高(8.8)/器厚0.6～1.4	40%	外:タテミガキ/内:脚部シボ リ目・ナデ?	にぶい黄褐色 10YR7/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		881	120 溝南東部 5～6層	高坏	弥生後期後葉	器高(5.7)/器厚0.5～1.2	40%	外:坏～脚部ミガキ 内:脚部シボリ目・ナデ?	灰白 10YR8/2	密 1mm以下の石英・長 石・赤彩粒含む	良好	
		882	120 溝南東部 5～6層	高坏	弥生中期後葉	口径(12.0)/器高(1.2)/ 器厚0.3～0.4	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄褐色 10YR5/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・角閃石・雲母含 む	良好	生駒 西麓
80		883	120 溝北西部 5層	甕	弥生中期後葉	口径(38.6)/器高(6.2)/ 器厚0.6～1.3	20%	外・内:口縁部ヨコナデ、以下不 明	にぶい黄褐色 10YR7/3	やや密 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		884	120 溝北西部 1～4層	甕	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(17.0)/器高(8.7)/ 器厚0.4～0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部タ タキ/内:口縁部ヨコナデ、体部 ハケ	灰白 10YR8/2	やや粗 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		885	120 溝北西部 5層	広口壺	弥生後期 中～後葉	口径(23.4)/器高(9.2)/ 器厚0.4～1.3	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	密 1～2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		886	120 溝北西部	広口壺	弥生後期 中～後葉	口径(15.6)/器高(3.8)/ 器厚0.5～1.4	20%	外:体部タテミガキ/内:口縁 部ヨコナデ?以下不明	明黄褐色 5YR5/6	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		887	120 溝北西部 1～4層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(11.4)/器高(7.2)/ 器厚0.3～0.7	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 7.5YR8/2	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒含む	良好	
	36	888	120 溝北西部 1～4層	長頸壺	弥生後期 前～中葉	口径(11.3)/底径3.2/ 器高27.6/器厚0.4～0.7	70%	外:タテミガキ/内:口縁部不 明、体部ハケ	にぶい黄褐色 10YR7/2	やや粗 1～3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		889	120 溝北西部	高坏	弥生後期前葉	器高(11.6)/器厚0.7～1.0	40%	外:剥離のため不明 内:シボリ目	灰白 2.5Y8/1	やや粗 1～4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		890	120 溝北西部 5層	高坏	庄内式?	器高(10.5)/器厚0.7～1.6	30%	外:剥離のため不明 内:シボリ目・ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～2mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		891	120 溝北西部 6・7層	蛸壺	庄内式	口径5.4/器高10.9/ 器厚0.3～0.9	90%	外:剥離のため不明 内:底部ナデ?	にぶい橙 7.5YR/4	やや密 1～3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		892	120 溝北西部 5層	高坏	弥生中期後葉	口径(15.8)/器高(8.5)/ 器厚0.9～2.0	35%	外:不明 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや粗 1～3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
		893	120 溝北西部	甕	弥生中期後葉	底径5.4/器高(6.5)/ 器厚0.5～0.9	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/1	やや粗 1～3mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好	
		894	120 溝北西部 6・7層	甕	弥生中期後葉	底径(6.0)/器高(5.6)/ 器厚0.7～1.1	15%	外:剥離のため不明 内:底部ハケ?	褐灰 10YR4/1	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
	81		895	65 溝南東部	須恵器 坏蓋	MT15 型式	口径(12.8)/器高(3.6)/ 器厚0.4～0.5	25%	外:回転ナデ・ケズリ 内:回転ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好
		896	65 溝南東部	須恵器 坏身	TK23 型式	口径(11.8)/器高(4.3)/ 器厚0.2～0.6	35%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好	
		897	65 溝南東部	須恵器 坏身	MT15 型式	口径(11.8)/器高(3.9)/ 器厚0.3～0.7	10%	外:回転ナデ・ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		898	65 溝南東部	須恵器 坏身	TK23 型式	口径(11.0)/器高(2.4)/ 器厚0.2～0.4	15%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
37		899	65 溝南東部	須恵器 有蓋高坏	TK23 型式	口径10.6/脚径8.8/器高 9.5/器厚0.4～1.2	90%	外:回転ナデ・ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		900	65 溝南東部	鉢	弥生後期後葉	口径(33.0)/器高(4.4)/ 器厚0.5～0.7	20%	外:口縁部ヨコナデ、以下ナデ? 内:口縁部ヨコナデ・ミガキ、以 下ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/2	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好	
		901	65 溝南東部	複合口縁壺	布留式前半	口径(32.4)/器高(11.1)/ 器厚0.6～2.0	20%	外:ヨコナデ・ナデ 内:ヨコナデ・ナデ	灰白 2.5Y8/2	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		902	65 溝南東部	二重口縁壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(18.6)/器高(5.2)/ 器厚0.6～1.1	20%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	にぶい橙 7.5YR/3	やや粗 1～5mm大の石 英・長石含む	良好	
		903	65 溝南東部	壺	庄内式	口径(13.8)/器高(5.0)/ 器厚0.3～0.8	20%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	にぶい黄褐色 10YR7/4	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		904	65 溝南東部	蛸壺	庄内式?	口径(5.5)/器高10.2/ 器厚0.5～1.1	80%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	密 1～2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
		905	65 溝南東部	蛸壺	弥生後期末～ 庄内式初頭	口径(6.4)/器高8.8/ 器厚0.7～1.1	55%	外:剥離のため不明 内:ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1～3mm大の石 英・長石・角閃石・チャ ート含む	良好	
		906	65 溝南東部 上面	須恵器 高坏	TK216～ 208 型式	器高(2.4)/器厚0.5～1.2	25%	外:回転ナデ・スカシ 内:ナデ	灰白 N7/	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		907	65 溝南東部 上層	広口壺	弥生後期後葉～ 庄内式	口径(20.8)/器高(6.2)/ 器厚0.7～1.0	25%	外:頸部ミガキ 内:ヨコミガキ	にぶい黄褐色 10YR7/2	密 1～2mm大の石英・長 石含む	良好	
		908	65 溝南東部 上層	甕	古墳中期	器高(4.4)/器厚0.5～0.7	30%	外:ハケ/内:指押さえ・ナデ・ ケズリ	橙 5YR7/6	やや密 1～2mm大の石 英・長石・チャート含む	良好	
38		909	65 溝南東部 上層	韓式系土器? 瓶 把手	古墳中期?	長さ(5.8)/幅(2.6)/ 厚さ(2.5)	5%	外:ナデ 内:ナデ	浅黄 2.5Y7/3	密 1～3mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好	
38		910	65 溝南東部 褐色土	須恵器 壺	TK208～ 47 型式	口径(15.0)/器高(6.2)/ 器厚0.4～0.6	10%	外:回転ナデ、波状文 内:回転ナデ	灰 N5/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
37		911	65 溝南東部 黒色土	須恵器 高坏蓋	TK23 型式	口径(12.5)/器高5.4/ 器厚0.3～0.6	55%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰白 5Y8/1	密 1～2mm大の石英・長 石含む	やや 良好	
	912	65 溝南東部 黒色土	須恵器 坏蓋	MT15 型式	口径(13.0)/器高(4.1)/ 器厚0.2～0.5	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
	913	65 溝南東部 黒色土	須恵器 坏蓋	TK47 型式	口径(10.8)/器高(3.9)/ 器厚0.4～0.6	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N4/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
	914	65 溝南東部 黒色土	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(14.0)/器高(3.3)/ 器厚0.3～0.4	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1～3mm大の石英・長 石含む	良好		

遺物観察表 (26)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
81		915	65 溝南東部 黒色土	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(10.9)/器高(3.9)/ 器厚0.3~0.6	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N5/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		916	65 溝南東部 黒色土	須恵器 坏身	TK47 型式	受部径(12.0)/器高(3.2)/ 器厚0.4~0.6	35%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N5/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	やや 良好	
		917	65 溝南東部 黒色土	須恵器 有蓋高坏	TK23 型式	脚径8.4/器高(9.1)/ 器厚0.3~1.4	55%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		918	65 溝南東部 黒色土	須恵器 高坏	TK47 型式	器高(3.7)/器厚0.5~0.7	25%	外:回転ナデ・スカシ3方 内:回転ナデ	灰白 5Y7/1	密 1mm大の石英・長石含 む	やや 良好	
		919	65 溝南東部 黒色土	須恵器 高坏	TK47 型式	脚径(9.0)/器高(5.8)/ 器厚0.3~1.0	30%	外:回転ナデ・スカシ3方 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		920	65 溝南東部 黒色土	須恵器 高坏	TK47 型式	脚径(8.1)/器高(5.7)/ 器厚0.2~1.2	30%	外:回転ナデ 内:回転ナデ・ナデ	灰白 N7/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		921	65 溝南東部 黒色土	須恵器 器台	TK47 型式	口径(37.4)/器高(8.6)/ 器厚0.5~0.9	20%	外:(タタキ?)のち回転ナデ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		922	65 溝南東部 黒色土	土錘	不明	最大幅3.7/最大長3.8/ 厚さ3.1	100%	ナデ	灰白 2.5Y8/2	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好	
	923	65 溝南東部 黒色土	蛸壺?	庄内式	器高(4.0)/器厚0.5~1.5	30%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~3mm大の石 英・長石・チャート含む	良好		
82		924	65 溝南東部 粘土	須恵器 坏蓋	TK217 型式	口径(10.1)/器高4.4/ 器厚0.3~1.0	65%	外:回転ナデ・ケズリ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	やや 良好	
		925	65 溝南東部 粘土	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(11.8)/器高4.8/ 器厚0.3~0.9	40%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		926	65 溝南東部 粘土	須恵器 高坏	TK23・47 型式	器高(2.9)/器厚0.4~1.2	30%	外:カキ目 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		927	65 溝南東部 粘土	須恵器 高坏	TK47 型式	脚径(9.0)/器高(6.0)/ 器厚0.2~1.2	45%	外:回転ナデ 内:回転ナデ・ナデ	灰白 N7/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		928	65 溝南東部 粘土	須恵器 器台	TK23・47 型式	脚径(22.0)/器高(9.3)/ 器厚0.8~1.0	25%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		929	65 溝南東部 粘土	高坏	布留式	器高(3.6)/器厚0.4~1.4	20%	外:不明・ミガキ? 内:ヨコナデ・ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		930	65 溝南東部 粘土	台形土器	弥生中期後葉	径(27.0)/器高(5.9)/ 器厚2.9	20%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石含む	やや 良好	
		931	65 溝南東部 下層	羽口	不明		20%	外:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1mm大の長石・ チャート含む	良好	
		932	65 溝南東部 砂層	須恵器 坏身	TK23・47 型式	口径(10.0)/器高(2.5)/ 器厚0.2~0.4	20%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		933	65 溝南東部 下層	小型丸底壺	布留3式	口径(8.3)/器高(7.8)/ 器厚0.4~0.6	35%	外:口縁部ヨコナデ・体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ・体部ケズ リ・ナデ	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		934	65 溝南東部 砂層	台付鉢	弥生中期後葉	台径(10.0)/器高(8.1)/ 器厚0.7~1.0	30%	外:ナデ 内:ナデ	灰白 10YR8/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石・角閃石・チャ ート含む	良好	
		935	65 溝南東部 最下層	須恵器 坏蓋	TK208 型式	口径(12.0)/器高(4.1)/ 器厚0.2~0.5	35%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		936	65 溝南東部 最下層	須恵器 坏蓋	TK23 型式	口径(12.4)/器高(2.8)/ 器厚0.3~0.5	25%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 5Y6/1	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		937	65 溝南東部 最下層	須恵器 坏蓋	MT15 型式	口径(13.0)/器高(2.8)/ 器厚0.3~0.4	25%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		938	65 溝南東部 最下層	須恵器 無蓋高坏	TK208 型式	口径(16.0)/器高(4.7)/ 器厚0.2~0.5	25%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好	
		939	65 溝南東部 最下層	須恵器 無蓋高坏	TK23 型式	口径(14.6)/器高(4.7)/ 器厚0.3~0.7	20%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ケズリ	灰 N6/	やや密 1~4mm大の石 英・長石含む	良好	
		940	65 溝南東部 最下層	須恵器 はそう	TK23 型式	器高(3.9)/器厚0.3~0.6	20%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 N5/	密 1mm大の石英・長石含 む	良好	
		941	65 溝南東部 最下層	蛸壺	庄内式	器高(8.2)/器厚0.4~1.0	70%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄 2.5Y6/2	密 1mm以下の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好	
		942	65 溝南東部 最下層	蛸壺	庄内式?	口径(5.0)/器高(6.3)/ 器厚0.5~0.7	35%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 10YR8/2	やや密 1~3mm大の石 英・長石含む	良好	
		943	65 溝南東部 最下層	蛸壺	庄内式	器高(4.4)/器厚0.8~1.3	35%	外:剥離のため不明・ナデ? 内:剥離のため不明・ハケ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~2mm大の石 英・長石含む	良好	
	944	65 溝南東部 最下層	製塩土器	弥生後期後葉?	器高(5.1)/器厚0.5~1.5	30%	外:タタキ 内:ナデ?	灰白 2.5Y7/1	やや密 1~2mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	945	65 溝南東部 最下層	高坏	布留1式	器高(6.3)/器厚0.5~0.7	25%	外:ハケのちミガキ 内:ケズリ	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
	946	65 溝南東部 最下層	高坏	布留2式?	口径(15.6)/器高(5.1)/ 器厚0.5~1.2	30%	外:ヨコナデ・ケズリ・ハケ 内:ヨコナデ・ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1~4mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
	947	65 溝南東部 最下層	甕	布留2式	口径(14.6)/器高(2.9)/ 器厚0.5~0.6	10%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1mm以下の石英・長 石・角閃石含む	良好		
	948	65 溝南東部 最下層	甕	布留2式	口径(14.4)/器高(3.7)/ 器厚0.5~0.7	20%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
	949	65 溝南東部	須恵器 甕	TK216 型式	口径(28.2)/器高(12.2)/ 器厚0.7~0.8	40%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	灰 N4/	密 1mm大の長石含む	やや 軟		
	950	65 溝南東部	須恵器 有蓋高坏	TK10 型式	口径(10.4)/脚径9.4/器高 9.9/器厚0.3~1.0	80%	外:回転ケズリ・回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の長石含む	良好		
	951	65 溝南東部	須恵器 有蓋高坏	TK47 型式	口径(11.0)/脚径9.0/器高 9.0/器厚0.3~0.8	70%	外:回転ナデ・カキ目 内:回転ナデ	灰 N5/	密 1mm大の長石・角閃石 含む	良好		

遺物観察表 (27)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
82	37	952	65 溝南東部	須恵器 坏蓋	TK47 型式	口径(12.1)/器高4.7/ 器厚0.3~1.3	75%	外:回転ケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の長石含む	良好	
	37	953	65 溝南東部	須恵器 坏蓋	TK208 型式	口径13.0/器高4.7/ 器厚0.4~0.5	80%	外:回転ケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の長石含む	良好	
		954	65 溝南東部	須恵器 坏蓋	TK47 型式	口径(12.4)/器高4.5/ 器厚0.3~0.5	35%	外:回転ケズリ、回転ナデ 内:回転ナデ	灰白 N7/	やや密 1~2mm大の石 英・長石・チャート含む	やや 軟	
83	37	955	65 溝南部	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(12.4)/器高4.2/ 器厚0.2~0.7	80%	外:回転ナデ・ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1~2mm大の長石・ チャート含む	良好	
		956	65 溝南部	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(12.0)/器高(3.1)/ 器厚0.3~0.8	10%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		957	65 溝南部	須恵器 高坏	TK73 ~ 216 型式?	器高(5.1)/器厚0.5~1.0	30%	外:回転ナデ/内:坏部ナデ、脚 部回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		958	65 溝南部	有稜高坏	庄内式初頭	口径(25.8)/器高(5.9)/ 器厚0.4~0.6	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm大の長石・チャ ート・赤彩粒含む	良好	
		959	65 溝南部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(17.6)/脚径(11.0)/ 器高12.4/器厚0.4~1.0	60%	外:坏部ミガキ?、脚部ミガキ 内:坏部ミガキ、脚部ナデ?	明赤褐 2.5YR5/8	密 1mm大の長石・チャ ート・赤彩粒含む	良好	
		960	65 溝南部	壺	弥生後期後葉	口径(13.0)/器高(23.7)/ 器厚0.4~0.6	40%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ハ ケ後ミガキ、体部上位ミガキ、 以下不明/内:口縁部ヨコナデ? 頸部ナデ?、体部ハケ	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長 石・チャート含む	良好	
		961	65 溝南西部 上層	須恵器 坏蓋	TK208 型式?	口径(13.8)/器高4.2/ 器厚0.3~0.6	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		962	65 溝南西部 上層	須恵器 把手	TK216 ~ 208 型 式?	器高(5.5)/把手幅2.2/ 厚さ2.4	5%	外:回転ナデ・ナデ 内:回転ナデ・ナデ	灰 5Y6/1	密 1mm大の長石・チャ ート含む	やや 良好	
		963	65 溝南西部	甕	古墳中期?	口径(26.2)/器高(21.0)/ 器厚0.4~0.9	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部(タ タキ)後)ハケ/内:口縁部ヨコ ナデ、体部ナデ・ケズリ	浅黄 2.5YR/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		964	65 溝南西部 最下層	棒状土製品		器高(15.1)/器厚0.6~2.2		外:ナデ? 内:ナデ?	橙 5YR6/6	やや密 1~2mm大の長 石・チャート含む	良好	
		965	65 溝東部 上層	須恵器 器台	TK23・47 型式	器高(9.3)/器厚0.7~0.9	10%	外:回転ナデ 内:回転ナデ	灰 5Y5/1	密 1mm大の石英・長石・ チャート含む	良好	
		966	65 溝東部	須恵器 高坏	TK208 型式?	器高(4.7)/器厚0.5~1.0	15%	外:回転ナデ・カキ目 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1mm以下の長石・ チャート含む	良好	
		967	65 溝東部	小形鉢	庄内式?	器高(5.1)/器厚0.3~0.5	60%	外:ハケ?ナデ? 内:ナデ	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石・赤彩粒 含む	良好	
		968	65 溝東部	高坏	弥生中期中葉	脚径12.6/器高(8.9)/ 器厚0.7~1.1	40%	外:タテミガキ? 内:ナデ?	橙 5YR6/6	密 1mm大の長石含む	良好	
		969	65 溝東部	蛸壺	庄内式?	口径(5.6)/器高(6.9)/ 器厚0.6~1.1	10%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
		970	65 溝東部	甕	弥生中期後葉	口径(20.0)/器高(13.7)/ 器厚0.3~0.7	20%	外・内:口縁部ヨコナデ?、体部 不明	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1mm大の長石・チャ ート含む	良好	
	971	65 溝東部	台付鉢	弥生中期後葉	口径(24.0)/器高(5.7)/ 器厚0.4~1.0	15%	外:不明 内:ナデ?	にぶい橙 5YR6/4	密 1mm大の長石・チャ ート・雲母含む	良好	生駒 西麓	
	972	65 溝西部 下層	台付鉢	弥生中期後葉	口径(27.8)/器高(5.9)/ 器厚0.4~1.2	10%	外:ナデ? 内:ミガキ?	褐 7.5YR4/4	やや密 1mm大の石英・長 石・角閃石・雲母含む	良好	生駒 西麓	
	973	65 溝西部 上層	蓋	弥生中期後葉?	口径(17.2)/器高3.1/ 器厚0.3~0.9	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい赤褐 2.5YR4/4	やや密 1~2mm大の長 石・チャート含む	やや 良好	生駒 西麓	
84	974	210 流路中央 部下層下部	広口壺	弥生中期後葉	口径(34.0)/器高(11.0)/ 器厚0.7~1.1	25%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 内:口縁部ヨコナデ、以下不明	灰白 2.5Y8/2	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
	975	210 流路中央 部上層	大形鉢	弥生後期後葉	口径(29.4)/器高(4.0)/ 器厚0.7~1.0	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ナ デ 内:口縁部ヨコナデ、体部ハ ケ	にぶい黄橙 10YR6/3	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
	976	210 流路中央 部下層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(31.4)/器高(6.4)/ 器厚0.4~0.7	25%	外:剥離のため不明 内:ミガキ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1mm大の石英・長石含 む	良好		
	977	210 流路中央 部上層上部	高坏	弥生中期後葉	口径(28.0)/器高(2.7)/ 器厚0.4~0.9	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石・ 赤彩粒・雲母含む	良好		
	978	210 流路中央 部下層下部	碗形高坏	弥生後期後葉	口径(16.0)/器高4.7/ 器厚0.4~0.7	25%	外:ミガキ 内:タテミガキ	橙 2.5YR6/6	密 1mm大の石英・長石・ 角閃石・赤彩粒含む	良好		
	979	210 流路中央 部下層下部	有稜高坏	弥生後期後葉	器高(9.1)/器厚0.6~0.9	60%	外:ハケ後ミガキ/内:坏部剥 離のため不明、脚部シボリ目・ ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~5mm大の石英・長 石含む	良好		
	980	210 流路中央 部下層	高坏	弥生後期前葉	脚径(9.3)/器高(6.0)/ 器厚0.5~1.2	45%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	密 1~2mm大の石英・長 石含む	良好		
	981	210 流路中央 部下層下部	広口壺	弥生後期中葉?	口径(14.4)/器高(6.6)/ 器厚0.4~0.8	25%	外:口縁ヨコナデ、頸部ハケ後 ミガキ/内:ナデ	灰白 10YR8/2	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好		
	982	210 流路中央 部下層下部	広口壺	弥生後期後葉	口径(11.0)/器高(6.5)/ 器厚0.5~0.8	30%	外:口縁部ヨコナデ?、体部不明 内:口縁部ヨコナデ?、体部ハ ケ	灰白 10YR7/1	密 1mm以下の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
	983	210 流路中央 部下層下部	長頸壺	弥生後期後葉	口径(12.2)/器高(8.9)/ 器厚0.4~0.9	25%	外:口縁部ヨコナデ 内:口縁部ヨコナデ・ハケ	灰白 2.5Y7/1	密 1~2mm大の石英・長 石・角閃石含む	良好		
	984	210 流路中央 部下層下部	壺	弥生後期?	底径(7.6)/器高(5.6)/ 器厚1.1~2.5	20%	外:体部タテハケ、底部ナデ? 内:ハケ	橙 5YR6/6	密 1~3mm大の石英・長 石含む	良好		
	985	210 流路中央 部下層下部	製塩土器	庄内式?	脚径(6.3)/器高(4.8)/ 器厚0.6~1.7	40%	外:タタキ 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1~4mm大の石 英・長石・角閃石含む	良好		
	986	210 流路中央 部上層上部	蛸壺?	庄内式?	底径3.1/器高(3.0)/ 器厚0.6~0.8	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	密 1mm以下の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		
	987	210 流路中央 部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径4.7/器高9.5/ 器厚0.5~0.6	100%	外:剥離のため不明 内:底部指頭圧痕、以上不明	浅黄橙 10YR8/3	密 1~3mm大の石英・長 石・角閃石・赤彩粒含む	良好		
	988	210 流路中央 部下層	大形鉢	弥生後期後葉	器高(6.7)/器厚0.6~1.9	20%	外:ナデ/内:口縁部ヨコナ デ、体部ハケ	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1~3mm大の石英・長 石・赤彩粒含む	良好		

遺物観察表 (28)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考	
84		989	210 流路中央部上層	甕	弥生中期後葉	口径(41.0)/器高(6.0)/器厚0.5~1.1	20%	外:内:口縁部ヨコナデ、体部不明	灰白 2.5Y8/1	やや粗 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
		990	210 流路中央部上層	器台	弥生後期前葉?	器高(15.6)/器厚1.3~1.5	25%	外:ハケ? 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1~5mm大の石英・長石・赤彩粒・角閃石含む	やや良好		
		991	210 流路中央部上層上部	有稜高坏	弥生後期後葉	口径(29.6)/器高(4.8)/器厚0.5~0.8	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・角閃石・赤彩粒含む	良好		
		992	210 流路中央部上層	壺	弥生後期中葉	口径(16.2)/器高(2.3)/器厚0.6~1.4	20%	外:ヨコナデ・ナデ? 内:ヨコナデ・ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・雲母含む	良好		
		993	210 流路中央部上層	甕	布留式前半?	器高(3.4)/器厚0.5~0.6	20%	外:頸部以上ヨコナデ、以下不明/内:頸部以上ナデ、以下ケズリ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		994	210 流路中央部上層下部	甕	弥生後期後葉~庄内式	底径4.2/器高(4.2)/器厚0.4~1.1	20%	外:体部タタキ、底部ナデ? 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや粗 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		995	210 流路中央部上層	壺?	弥生後期?	底径6.7/器高(3.9)/器厚0.6~1.1	25%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR5/3	やや密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		996	210 流路中央部上層上部	甕	弥生後期?	底径4.0/器高(3.8)/器厚0.5~1.1	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 2.5YR6/6	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
	997	210 流路中央部上層	製塩土器?	弥生後期後葉~庄内式	脚径(6.6)/器高(5.3)/器厚0.5~2.6	20%	外:タタキ後ナデ? 内:ナデ?	にぶい橙 5YR6/4	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
85		998	210 流路南部下層	甕	弥生中期後葉	口径(31.8)/器高(10.0)/器厚0.9~1.7	15%	外:口縁部ヨコナデ、以下タタキ/内:口縁部ヨコナデ、以下ハケ	灰白 10YR8/2	やや密	良好		
		999	210 流路南部上層?	高坏	弥生後期中~後葉	器高(9.0)/器厚0.8~1.9	30%	外:ミガキ?/内:坏部ミガキ?・脚部ナデ?	にぶい橙 7.5YR6/4	密	良好		
		1000	210 流路南部上層?	高坏	弥生後期	器高(9.2)/器厚0.5~1.1	40%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	浅黄橙 7.5YR8/4	やや軟	やや軟		
		1001	210 流路南部下層	広口壺	弥生後期?	口径(13.0)/器高(5.0)/器厚0.5~1.1	20%	外:口縁部ヨコナデ、以下ハケ 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密	良好		
		1002	52 流路	壺	弥生中期?	底径7.0/器高(14.9)/器厚0.6~1.4	30%	外:タテミガキ 内:ハケ?	灰白 2.5Y8/2	やや密	良好		
		1003	52 流路	壺	弥生中期?	口径(14.8)/器高(2.6)/器厚0.6~1.3	10%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密	良好		
		1004	210 流路中央部下層?	高坏	弥生後期	器高(8.3)/器厚0.6~1.6	20%	外:不明・タテミガキ? 内:シボリ目・ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	密	良好		
	1005	210 流路中央部下層?	高坏	弥生後期	器高(9.4)/器厚0.5~1.7	約40%	外:ハケ・タテミガキ 内:坏部ミガキ?・脚部ハケ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密	良好			
86		1006	128 流路南東部埋没後層	複合口縁壺?	布留式?	口径(16.6)/器高(5.3)/器厚0.5~1.0	5%	外:ヨコナデ? 内:ヨコナデ?	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大礫含む	良好		
		1007	128 流路南東部埋没後層	複合口縁壺?	布留1~2式?	器高(5.0)/器厚0.3~0.7	5%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/4	密 1mm大の長石含む	良好		
		1008	128 流路南東部埋没後層	高坏	布留式	器高(1.7)/器厚0.4~1.0	5%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 7.5YR6/6	密 1~2mm大の長石・赤彩粒含む	良好		
	42	1009	128 流路南東部埋没後層	蛸壺	弥生後期後葉~庄内式	口径5.4/器高9.1/器厚0.5~1.0	100%	外:ナデ 内:ナデ	明黄褐 10YR6/6	やや粗 1~5mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
		1010	128 流路南東部上層	甕	布留1式	口径(15.2)/器高(3.8)/器厚0.3~0.6	5%	外:口縁部ヨコナデ、体部不明 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ?	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密	良好		
		1011	128 流路南東部上層	壺	布留式前半?	器高(8.3)/器厚0.4~0.8	60%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	密 1~2mm大の長石含む	良好		
	42	1012	128 流路南東部上層	蛸壺	弥生後期後葉~庄内式	口径4.9/器高9.5/器厚0.4~0.9	90%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の長石含む	良好		
		1013	128 流路南東部下層上部	複合口縁壺	布留式前半?	口径(26.0)/器高(6.2)/器厚0.6~1.0	10%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y6/2	やや密 1~2mm大の長石含む	良好		
		1014	128 流路南東部下層上部	複合口縁壺	庄内式?	口径(24.0)/器高(5.0)/器厚0.5~1.2	10%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	明赤褐 5YR5/6	やや密 1~2mm大の長石・赤彩粒含む	やや軟		
	39	1015	128 流路南東部下層上部	壺	弥生中期後葉?	口径(8.8)/器高(11.8)/器厚0.3~0.5	35%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		41	1016	128 流路南東部下層上部	高坏	布留式前半?	器高(5.7)/器厚0.4~0.8	40%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 5YR6/6	やや粗 1~5mm大の石英・長石・チャート含む	やや軟	
	42	1017	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	底径6.8/器高(8.6)/器厚1.0~2.2	35%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや粗 1~5mm大の石英・長石・チャート含む	やや軟		
	42	1018	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	底径6.2/器高(9.8)/器厚0.5~1.8	30%	外:ナデ? 内:ハケ	灰白 2.5Y8/2	密 1~2mm大の長石・赤彩粒含む	良好		
		1019	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(5.0)/器高9.8/器厚0.5~1.0	50%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の長石・チャート・赤彩粒含む	良好		
	42	1020	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径5.9/器高10.4/器厚0.3~0.6	85%	外:ナデ、ハケ 内:ナデ、ハケ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
		1021	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(5.8)/器高9.8/器厚0.5~1.2	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の長石・赤彩粒含む	良好		
		1022	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(6.2)/器高(8.1)/器厚0.4~1.0	30%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
		1023	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	器高(3.0)/器厚1.0~2.0	15%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1mm大の長石含む	良好		
		1024	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	器高(4.1)/器厚0.4~0.7	20%	外:ハケ 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~2mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	良好		
		1025	128 流路南東部下層上部	鉢?	弥生中期後葉?	口径(20.0)/器高(2.6)/器厚0.6~1.5	5%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の石英・長石含む	良好		

遺物観察表 (29)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考		
86	40	1026	128 流路南東部下層上部	甕	布留1~2式?	口径(15.4)/器高(9.4)/器厚0.3~0.6	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1~3mm大の長石・赤彩粒含む	良好			
		1027	128 流路南東部下層上部	甕	布留1~2式?	口径(13.6)/器高(7.1)/器厚0.3~0.8	20%	外・内:口縁部ヨコナデ?、体部不明	明黄褐 10YR7/6	密	やや良好			
		1028	128 流路南東部下層上部	甕	布留2式?	口径(15.0)/器高(3.7)/器厚0.4~0.6	5%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の石英・長石含む	良好			
		1029	128 流路南東部下層上部	二重口縁壺	布留式前半	器高(4.3)/器厚0.3~0.8	5%	外:ヨコナデ内:ヨコナデ	淡黄 2.5Y8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1030	128 流路南東部下層上部	甕	弥生後期後葉~庄内式	底径(4.4)/器高(4.4)/器厚0.5~1.8	5%	外:タタキ内:ハケ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		41	1031	128 流路南東部下層上部	直口高坏	布留1式	口径(17.4)/器高(13.6)/器厚0.2~1.4	60%	外:坏部ナデ、ケズリ、脚部ミガキ/内:坏部ナデ、ミガキ、脚部ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の長石含む	良好		
		41	1032	128 流路南東部下層上部	直口高坏	布留1式	口径(16.6)/器高(11.1)/器厚0.4~1.1	60%	外:剥離のため不明/内:坏部ナデ・ミガキ、脚部ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		41	1033	128 流路南東部下層上部	有稜高坏	布留2~3式	口径(18.6)/器高(7.4)/器厚0.5~1.2	40%	外:摩擦のため不明内:摩擦のため不明	橙 5YR6/6	やや粗 1~5mm大の石英・長石含む	良好		
		41	1034	128 流路南東部下層上部	直口高坏	布留2式	口径15.2/器高(9.2)/器厚0.4~0.8	70%	外:坏部ハケ?内:坏部ナデ?、脚部ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1035	128 流路南東部下層上部	高坏	布留2式	器高(2.9)/器厚0.4~1.2	20%	外:ハケ内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1036	128 流路南東部下層上部	高坏	布留1式	器高(6.4)/器厚0.4~0.9	25%	外:坏部不明、脚部ハケ後ミガキ/内:坏部不明、脚部ケズリ	灰黄 2.5Y6/2	密 1mm大の長石・チャート含む	良好		
		39	1037	128 流路南東部下層上部	脚付小形壺	布留式前半?	口径(12.0)/器高(8.4)/器厚0.3~1.5	60%	外:ミガキ/内:口縁部ミガキ、体部ナデ?	淡黄 2.5Y8/3	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
			1038	128 流路南東部下層上部	小形丸底壺	布留2式?	口径(10.6)/器高(5.0)/器厚0.3~0.7	15%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の長石・チャート含む	良好		
		39	1039	128 流路南東部下層上部	小形丸底壺	布留3式?	口径7.8/器高8.3/器厚0.3~0.5	95%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1mm大の長石・赤彩粒含む	良好		
			1040	128 流路南東部下層上部	小形丸底壺	布留3式?	器高(7.2)/器厚0.4~0.8	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の長石・チャート含む	良好		
			1041	128 流路南東部埋没後層	紡錘車	弥生?	径3.3/厚0.5	100%	ナデ	浅黄橙 7.5YR8/3	密	やや良好		
	87		1042	128 流路南東部下層上部	有稜高坏	庄内式	口径(17.0)/器高(5.4)/器厚0.3~0.5	15%	外:摩擦のため不明内:摩擦のため不明	橙 5YR6/8	密 1mm大の石英・長石・雲母含む	やや良好		
			1043	128 流路南東部下層上部	小形丸底壺	布留式後半?	口径(8.4)/器高(6.4)/器厚0.4~0.6	40%	外・内:口縁部ヨコナデ、体部不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1~2mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	やや良好		
			42	1044	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(6.2)/器高10.6/器厚0.3~1.0	70%	外:剥離のため不明内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	やや良好	
			42	1045	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径5.2/器高10.0/器厚0.5~0.9	85%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明内:口縁部ヨコナデ、以下ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	良好	
			1046	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	器高(7.3)/器厚0.7~1.4	40%	外:剥離のため不明内:ナデ?	浅黄橙 10YR8/4	やや粗 1~5mm大の石英・長石含む	良好		
			1047	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(5.2)/器高8.9/器厚0.6~1.1	70%	外:ナデ?内:ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	良好		
			1048	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	器高(8.3)/器厚0.9~1.0	50%	外:ナデ?内:ナデ	灰白 2.5Y7/1	密 1~2mm大の長石含む	良好		
			1049	128 流路南東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(5.4)/器高(7.0)/器厚0.3~0.5	30%	外:剥離のため不明内:剥離のため不明	浅黄橙 10YR8/4	密 1~2mm大の石英・長石・チャート・赤彩粒含む	良好		
			1050	128 流路南東部下層下部	複合口縁壺	布留式前半	口径(31.8)/器高(4.9)/器厚0.5~0.9	5%	外:ヨコナデ内:ヨコナデ	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の長石・チャート含む	良好		
			1051	128 流路南東部下層下部	二重口縁壺	庄内式	口径(25.0)/器高(10.3)/器厚0.7~1.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、頸部ミガキ/内:口縁部ミガキ?、頸部ミガキ	灰黄褐 10YR6/2	密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1052	128 流路南東部下層下部	直口壺	布留2式	口径(18.0)/器高(8.4)/器厚0.4~0.7	10%	外:ヨコナデ内:ヨコナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1053	128 流路南東部下層下部	直口壺	布留3式	口径(16.0)/器高(5.9)/器厚0.5~0.8	5%	外:ヨコナデ内:ヨコナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
			1054	128 流路南東部下層下部	直口壺	布留2式?	器高(6.4)/器厚0.4~0.6	15%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
			1055	128 流路南東部下層下部	広口壺?	弥生?	口径(14.0)/器高(4.9)/器厚0.9~1.0	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ後ミガキ/内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y6/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1056	128 流路南東部下層下部	複合口縁壺	布留式前半	口径(20.4)/器高(5.5)/器厚0.4~0.7	5%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ	浅黄橙 10YR8/3	密 1mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		40	1057	128 流路南東部下層下部	甕	布留2式	口径(14.6)/器高(8.7)/器厚0.3~0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1058	128 流路南東部下層下部	甕	布留1式	口径(15.0)/器高(5.9)/器厚0.4~0.6	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
			1059	128 流路南東部下層下部	甕	布留1~2式	口径(14.3)/器高(6.5)/器厚0.3~0.6	20%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好		
			1060	128 流路南東部下層下部	甕	布留2式?	口径(12.8)/器高(6.7)/器厚0.4~0.6	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好		

遺物観察表 (30)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
87		1061	128 流路南東部下層下部	甕	庄内式?	口径(14.0)/器高(5.1)/器厚0.2~1.0	5%	外:内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1062	128 流路南東部下層下部	高坏	布留2式?	口径(19.6)/器高(4.7)/器厚0.4~0.6	10%	外:ハケ後ナデ 内:ハケ後ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密	良好	
		1063	128 流路南東部下層下部	高坏	布留式前半	口径(15.0)/器高(5.6)/器厚0.3~1.0	15%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	橙 7.5YR7/6	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		1064	128 流路南東部下層下部	高坏	庄内式	口径(17.2)/器高(5.4)/器厚0.4~0.8	25%	外:ミガキ 内:ミガキ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		41 1065	128 流路南東部下層下部	高坏	布留式	器高(2.0)/器厚0.4~1.0	10%	外:ハケ 内:摩滅のため不明	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1066	128 流路南東部下層下部	高坏	布留式	器高(2.1)/器厚0.6~1.2	10%	外:ハケ 内:摩滅のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1067	128 流路南東部下層下部	高坏	庄内式	器高(5.7)/器厚0.6~3.6	20%	外:ミガキ 内:坏部ミガキ、脚部ハケ	にぶい黄橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		39 1068	128 流路南東部下層下部	小形丸底壺	布留3式?	口径11.0/器高5.8/器厚0.3~0.8	80%	外:口縁部ヨコナデ、以下不明 内:口縁部ヨコナデ・ハケ	灰黄 2.5Y7/2	密	良好	
		40 1069	128 流路南東部下層下部	小形甕	布留式?	口径6.5/器高(5.6)/器厚0.3~0.5	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		39 1070	128 流路南東部下層下部	台付壺	弥生後期後葉~庄内式	器高(5.0)/器厚0.5~0.8	30%	外:摩滅のため不明 内:ナデ	暗灰黄 2.5Y5/2	密 1mm大の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好	生駒西麓
		42 1071	128 流路南東部下層下部	製塩土器	庄内式	脚径7.0/器高(7.0)/器厚0.5~1.0	40%	外:タタキ 内:ナデ	淡黄 2.5Y7/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		42 1072	128 流路南東部下層下部	製塩土器	庄内式	脚径5.2/器高(4.8)/器厚0.4~3.1	25%	外:タタキ 内:ハケ・ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1073	128 流路南東部下層下部	製塩土器	庄内式	脚径6.0/器高(5.8)/器厚0.3~1.4	25%	外:タタキ・ハケ 内:ナデ	灰白 2.5Y7/1	やや密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		1074	128 流路南東部下層下部	製塩土器	庄内式	器高(4.0)/器厚0.6~1.0	15%	外:タタキ 内:ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1075	128 流路南東部下層下部	製塩土器	庄内式	器高(4.1)/器厚1.0~1.8	15%	外:タタキ 内:ハケ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1076	128 流路南東部下層下部	壺	布留式?	底径2.0/器高(1.8)/器厚0.5~1.2	10%	外:ミガキ 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		1077	128 流路南東部下層下部	小形壺	庄内式?	底径(2.8)/器高(2.5)/器厚0.4~1.0	20%	外:タタキ 内:ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		1078	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径(6.0)/底径3.0/器高10.1/器厚0.7~1.6	40%	外:摩滅のため不明 内:ナデ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好	
		1079	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径(6.2)/器高(6.3)/器厚0.4~0.8	25%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1080	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	底径3.6/器高(3.2)/器厚0.3~0.9	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄 2.5Y6/2	密 1mm大の石英・長石含む	良好	
		1081	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	器高(4.8)/器厚0.4~1.4	30%	外:剥離のため不明、ナデ? 内:ナデ	にぶい橙 7.5YR6/4	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1082	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	器高(3.8)/器厚0.8~2.3	20%	外:ナデ? 内:ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		42 1083	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式	口径5.2/器高11.0/器厚0.5~1.1	100%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		42 1084	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式	口径5.2/器高9.4/器厚0.5~0.8	95%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		42 1085	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式	口径4.8/器高8.4/器厚0.6~1.1	100%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや粗 1~5mm大の石英・長石含む	良好	
		42 1086	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	底径6.2/器高(14.5)/器厚0.7~1.6	35%	外:摩滅のため不明 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
		1087	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径(6.2)/器高(9.2)/器厚0.5~1.1	40%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
	1088	128 流路南東部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径(6.4)/器高(6.0)/器厚0.4~0.5	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・チャート含む	良好		
	41 1089	128 流路東部下層下部	直口高坏	布留1~2式?	口径(14.5)/脚径(11.2)/器高12.2/器厚0.2~1.4	60%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや粗 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	やや良好		
	1090	128 流路東部	直口壺	布留2式?	器高(13.0)/器厚0.5~0.7	40%	外:剥離のため不明 内:ハケ・ナデ	浅黄 2.5Y7/3	やや粗 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	やや良好		
	1091	128 流路東部下層下部	二重口縁壺	布留2式	口径(25.2)/器高(4.5)/器厚0.5~1.0	10%	外:口縁ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ/内:口縁ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好		
	1092	128 流路東部下層下部	二重口縁壺	布留2式	口径(22.2)/器高(3.6)/器厚0.7~0.9	5%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、頸部ハケ後ナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の石英・長石含む	良好		
	40 1093	128 流路東部下層下部	甕	布留2~3式?	口径13.0/器高(5.1)/器厚0.3~0.7	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	橙 7.5YR7/6	密 1mm以下の石英・長石含む	良好		
	1094	128 流路東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(4.4)/器高10.8/器厚0.3~0.8	50%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
	1095	128 流路東部下層上部	蛸壺	庄内式?	口径(5.0)/器高(7.0)/器厚0.3~0.6	35%	外:ナデ? 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	密 1~3mm大の石英・長石含む	良好		
	1096	128 流路東部下層上部	蛸壺	庄内式?	器高(1.3)/器厚0.4~1.0	5%	外:ナデ? 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	やや粗 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
89	39 1097	128 流路南西部下層下部	二重口縁壺	布留2式	口径(24.0)/器高(8.4)/器厚0.5~1.3	10%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	褐灰 10YR6/1	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好		

遺物観察表 (31)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考		
89		1098	128 流路南西部下層下部	直口壺	布留2式?	口径(18.0)/器高(9.2)/器厚0.5~0.8	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部不明 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好			
		1099	128 流路南西部下層下部	壺	布留式	器高(9.0)/器厚0.5~1.1	10%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1100	128 流路南西部下層下部	甕	布留1~2式?	口径(26.0)/器高(3.2)/器厚0.6~0.7	5%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm程度の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1101	128 流路南西部下層下部	甕	布留2式	口径(22.2)/器高(4.8)/器厚0.4~0.6	5%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ? 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm程度の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1102	128 流路南西部下層下部	甕	布留2~3式?	口径(18.0)/器高(2.6)/器厚0.5~0.7	5%	外:ヨコナデ 内:ヨコナデ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm以下の石英・長石含む	良好			
		1103	128 流路南西部下層下部	壺	布留式	器高(12.0)/器厚0.4~0.8	25%	外:ハケ 内:ケズリ	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好			
		1104	128 流路南西部下層下部	蛸壺	庄内~布留式	器高(8.0)/器厚0.6~1.1	60%	外:ナデ? 内:ナデ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好			
		1105	128 流路南西部	高坏	布留1~2式?	器高(6.4)/器厚0.5~1.3	10%	外:坏部不明、脚部ミガキ 内:脚部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1mm程度の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
	40	1106	128 流路西部上層	甕	布留1~2式	口径13.6/器高(15.7)/器厚0.3~0.7	50%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	やや密 1~3mm大の長石・チャート含む	良好			
		1107	128 流路西部上層	甕	布留1式	口径(14.4)/器高(5.0)/器厚0.5~0.8	15%	外:ヨコナデ/内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~3mm大の長石・チャート含む	良好			
		1108	128 流路西部上層	甕	布留式?	口径(17.4)/器高(9.6)/器厚0.4~0.6	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ? 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	黄灰 2.5Y5/1	密 1mm大の石英・長石・角閃石・雲母含む	良好	生駒西麓		
	42	1109	128 流路西部下層上部	不明土製品	不明	長さ(6.2)/幅5.1/厚さ7.2	不明	外:ナデ? 内:不明	にぶい黄橙 10YR7/4	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好			
	40	1110	128 流路西部下層上部	甕	布留1~2式	口径(13.6)/器高(10.3)/器厚0.3~0.6	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好			
		1111	128 流路西部下層上部	甕	布留1~2式	口径(15.0)/器高(5.8)/器厚0.3~0.5	15%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1112	128 流路西部下層上部	甕	布留1式	口径(12.0)/器高(5.9)/器厚0.4~0.8	5%	外:口縁部ヨコナデ、体部不明 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰白 10YR8/2	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好			
		1113	128 流路西部下層上部	甕	布留式前半	口径(12.1)/器高4.7/器厚0.3~0.5	15%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 7.5YR8/4	やや密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好			
		1114	128 流路西部下層上部	高坏	弥生後期後葉?	脚径(10.8)/器高(5.3)/器厚0.6~1.0	50%	外:ハケ 内:摩滅のため不明	橙 5YR7/6	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好			
		1115	128 流路西部下層	高坏	布留2式?	器高(5.9)/器厚0.5~1.4	30%	外:ヨコナデ、ハケ 内:ハケ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好			
		1116	128 流路西部下層下部	高坏	庄内式	器高(7.3)/器厚0.5~4.2	20%	外:ミガキ/内:坏部ミガキ? 脚部ハケ?	橙 7.5YR6/6	密 1mm大の石英・長石含む	良好			
		1117	128 流路西部下層上部	鉢?	布留式?	口径(17.5)/器高(5.2)/器厚0.4~0.6	30%	外:摩滅のため不明 内:摩滅のため不明	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好			
		1118	128 流路西部下層上部	蛸壺	庄内式?	底径1.0/器高(2.2)/器厚0.6~1.0	10%	外:ナデ? 内:ナデ	灰白 10YR8/2	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好			
	42	1119	128 流路西部下層上部	蛸壺	弥生後期後葉~庄内式	口径5.3/器高8.8/器厚0.5~1.2	100%	外:ナデ? 内:ナデ	灰白 10YR8/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・チャート含む	良好			
		1120	128 流路西部下層	蛸壺	庄内~布留式	口径(5.0)/器高(5.7)/器厚0.6~0.9	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の石英・長石含む	良好			
	90		1121	128 流路北西部最下層	甕	布留2式	口径(15.6)/器高(15.0)/器厚0.4~0.6	30%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	灰黄 2.5Y7/2	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		40	1122	128 流路北西部最下層	甕	布留2式	口径13.0/器高20.0/器厚0.4~0.6	100%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ケズリ	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1123	128 流路北西部最下層	広口壺?	庄内式?	器高(5.7)/器厚0.6~1.5	10%	外:ミガキ・ナデ 内:ナデ	にぶい黄橙 10YR7/4	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		41	1124	210 流路北西部下層上部	台形土器	弥生中期後葉	口径(26.6)/器高(7.5)/器厚1.5~2.5	20%	外:ナデ 内:不明	灰白 10YR8/2	やや密 1~4mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1125	210 流路北西部下層上部	小形丸底壺	布留式前半	器高(5.1)/器厚0.3~0.5	40%	外:ハケ、ナデ? 内:ケズリ	浅黄 2.5Y7/3	密 1mm大の石英・長石含む	良好		
		42	1126	210 流路北西部下層上部	製塩土器	庄内式	脚径6.2/器高(5.1)/器厚0.6~4.0	25%	外:タタキ 内:ナデ?	浅黄 2.5Y7/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		39	1127	210 流路北西部下層下部	直口壺	布留2式?	口径(11.2)/器高(14.6)/器厚0.5~0.8	65%	外:口縁部ヨコナデ、体部ハケ 内:口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	浅黄橙 10YR8/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	やや良好		
			1128	210 流路北西部下層下部	高坏	布留1式?	口径(15.8)/器高(5.2)/器厚0.3~0.7	25%	外:摩滅のため不明/内:口縁部ナデ、底部ミガキ?	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
			1129	210 流路北西部下層下部	高坏	布留式前半	脚径(12.6)/器高(7.2)/器厚0.3~0.8	15%	外:ハケ後ミガキ 内:ナデ・ケズリ	にぶい橙 7.5YR7/3	密 1mm程度の長石含む	良好		
			1130	210 流路北西部下層下部	細頸壺	弥生後期?	器高(5.0)/器厚0.4~1.0	10%	外:摩滅のため不明 内:ナデ?	灰白 2.5Y8/2	やや密 1~3mm大の長石含む	やや良好	東部瀬戸内?	
			1131	210 流路北西部下層下部	蛸壺	庄内式?	口径(5.4)/器高(7.7)/器厚0.6~0.9	25%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白 10YR8/2	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		
		91	47	1132	1層上部	須恵質土器鉢(東播系)	12世紀末~13世紀初頭	口径(30.4)/器高(4.6)/器厚0.6~1.0	10%	外:ナデ 内:ナデ	灰白 N7/	密 1mm大の長石含む	良好	14区

遺物観察表 (32)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
91	47	1133	1層	須恵器壺蓋	奈良	器高(2.0)/器厚0.7~2.0	20%	外:ナデ 内:ナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
		1134	1層下部	須恵器蓋	奈良	口径(15.6)/器高(1.3)/器厚0.5~0.8	20%	外:ナデ 内:ナデ	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	14区
		1135	1層下部	須恵器蓋	奈良末~平安初	口径(13.6)/器高(1.3)/器厚0.4~0.6	20%	外:ナデ 内:ナデ	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	14区
	47	1136	1層上部	須恵器蓋	奈良	口径(13.0)/器高(1.4)/器厚0.4~0.6	20%	外:ナデ 内:ナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	14区
		1137	1層	須恵器蓋	奈良	口径(11.2)/器高(1.5)/器厚0.4~0.5	20%	外:ナデ 内:ナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
		1138	224落ち込み直上包含層	須恵器蓋	奈良末~平安初	口径(10.0)/器高(0.5)/器厚0.3	10%	外:ナデ 内:摩滅、ナデ?	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	22区
	47	1139	1層	須恵器蓋	奈良末~平安初	器高(1.8)/器厚0.6~1.7	30%	外:ナデ/内:ナデ、反時計回りナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
		1140	(側溝)	須恵器坏B?蓋	奈良	器高(1.4)/器厚0.6~1.4	5%	外:ナデ? 内:ナデ?	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
	47	1141	1層	須恵器蓋	奈良	底径(14.0)/器高(2.9)/器厚0.8	20%	外:ナデ、底部ケズリ後ナデ 内:ナデ	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
		1142	1層下部	須恵器坏B	奈良末~平安初	底径(9.2)/器高(3.0)/器厚0.6	60%	外:ナデ、底部ケズリ後ナデ 内:ナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	14区
		1143	(側溝)	須恵器坏B	奈良末~平安初	底径(10.0)/器高(1.5)/器厚0.4~0.7	10%	外:ナデ 内:ナデ	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	
		1144	1層	須恵器坏B	奈良	底径(10.0)/器高(2.4)/器厚0.5	25%	外:ナデ 内:ナデ	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	9区
		1145	1層	須恵器坏B	奈良	底径(11.2)/器高(1.3)/器厚0.5	20%	外:ナデ、一部調整痕 内:ナデ、極めて平滑	灰N6/	密 1mm大の長石含む	良好	24区
		1146	(側溝)	輸入白磁碗	11世紀後~12世紀前	口径(15.4)/器高(2.1)/器厚0.4~0.5	10%	外:ナデ後軸 内:ナデ後軸	灰白7.5Y7/1	密 1mm大の長石含む	良好	9区
	47	1147	1層上部	瓦器椀	13世紀中~後	口径(14.6)/底径(3.8)/器高4.0/器厚0.5	35%	外:口縁部ヨコナデ、以下指頭圧痕・ナデ/内:ナデのち粗い連結輪状暗文	灰N5/	密 1mm大の長石含む	良好	14区
	47	1148	1層上部	瓦器椀	13世紀前	底径(4.8)/器高(1.0)/器厚0.3~0.7	20%	外:剥離のため不明、高台部ナデ?/内:剥離のため不明	にぶい黄橙10YR7/4	密 1~3mm大のチャート等含む	やや軟	14区
	47	1149	184大畦畔上層	瓦器椀	13世紀前	底径(4.6)/器高(1.0)/器厚0.5~0.9	10%	外:剥離のため不明、高台部ナデ?/内:剥離のため不明	灰白5Y8/1	密 1mm大の長石含む	やや軟	
	1150	1層	須恵器壺	平安初	底径(9.0)/器高(3.1)/器厚0.4~1.3	20%	外:ナデ、底部糸切り痕 内:ナデ	灰白10Y7/1	密 1mm大の長石含む	やや良好	34区	
	1151	1層	須恵器壺	平安初	底径(8.4)/器高(1.1)/器厚0.7	5%	外:ナデ、底部糸切り痕 内:ナデ	灰白N7/	密 1mm大の長石含む	良好	7区	
92		1152	24流路	平瓦	古代末~中世	幅(11.6)/長さ(8.3)/厚さ2.4	20%	凸面:縄叩き 凹面:布目	灰5Y7/1	密	良好	
		1153	(側溝)	平瓦	古代末~中世	幅(10.0)/長さ(8.8)/厚さ1.6	10%	凸面:摩滅 凹面:布目	灰5Y7/1	密	良好	1区
		1154	1層下部	丸瓦	古代末~中世	幅(7.2)/長さ(9.4)/厚さ2.0	10%	凸面:摩滅 凹面:布目	明黄褐10YR6/6	密	やや軟	14区
		1155	146井戸	土人形	近世	幅(4.5)/長さ(4.0)/厚さ1.8	60%	型作り・ナデ?	にぶい橙7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長石・チャート含む	良好	
93	46	1156	(側溝)	絵画土器	弥生後期?	器高(8.0)/器厚0.6~0.7	10%	外:ミガキ 内:ナデ?	灰白10YR8/2	やや密	良好	7区
	46	1157	64溝東部直上	絵画土器	弥生中期後葉?	器高(3.7)/器厚0.8~0.9	5%	外:摩滅のため不明 内:ナデ?	灰黄2.5Y7/2	やや密	やや良好	
94	46	1158	211溝	銅鍍	弥生後期~庄内式	長さ4.3/最大幅1.15/厚さ0.3	100%					
図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(何れも最大値)	残存率	石材	備考			
95	43	1159	110土坑	石匙	縄文	長さ3.4/幅5.8/厚さ0.8	100%	サヌカイト				
	43	1160	2層	石匙	縄文	長さ5.8/幅3.8/厚さ1.1	100%	サヌカイト	もしくは調整剥片?			14区
	43	1161	65溝東部	石匙	縄文	長さ3.8/幅5.9/厚さ1.25	100%	サヌカイト				
	43	1162	1層	石錐	弥生	長さ3.7/幅1.6/厚さ0.6	90%	サヌカイト				7区
	43	1163	12竪穴住居	打製石鏃	弥生	長さ3.4/幅1.7/厚さ0.55	100%	サヌカイト	円基式			
	43	1164	64溝中央部	打製石鏃	縄文	長さ3.0/幅1.5/厚さ0.2	100%	サヌカイト	凹基式			
	43	1165	1層	打製石鏃	弥生	長さ5.1/幅2.2/厚さ0.6	90%	サヌカイト	尖基無茎式			7区
	43	1166	64溝東部	打製石鏃	弥生	長さ5.7/幅1.9/厚さ0.9	100%	サヌカイト	もしくは尖頭器未成品?			
	43	1167	22土坑	打製石鏃	弥生	長さ5.2/幅2.9/厚さ0.85	90%	サヌカイト	凸基有茎式			
	43	1168	2層	打製石鏃	弥生	長さ5.9/幅2.8/厚さ0.7	90%	サヌカイト	凸基有茎式			25区
43	1169	210流路北部下層下部	尖頭器	弥生	長さ7.0/幅3.7/厚さ0.75	100%	サヌカイト					

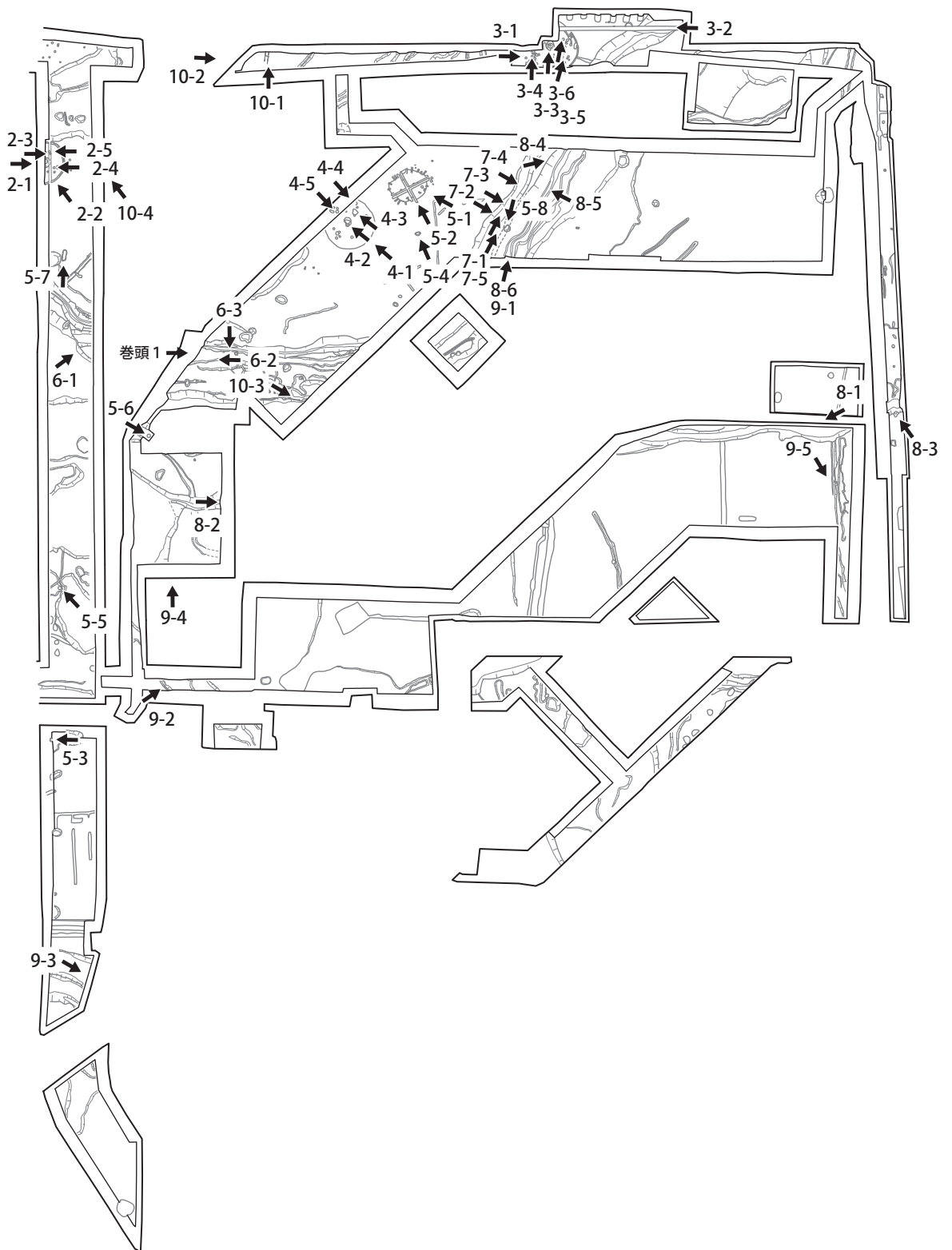
遺物観察表 (33)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	石材	備考			
95	43	1170	128 流路南東部下層上部	打製石剣	弥生	長さ7.2/幅3.5/厚さ1.2	50%	サヌカイト	基部片?			
96	44	1171	128 流路南東部	尖頭器	弥生	長さ3.5/幅2.5/厚さ0.6	50%	サヌカイト				
	44	1172	64 溝西部	スクレイパー	弥生	長さ2.2/幅6.0/厚さ0.4	100%	サヌカイト	縦長剥片			
	44	1173	旧耕作土	スクレイパー	弥生	長さ3.6/幅6.2/厚さ0.7	100%	サヌカイト	縦長剥片			1区
	44	1174	1層	スクレイパー	弥生	長さ4.3/幅8.2/厚さ1.2	100%	サヌカイト	横長剥片			9区
	44	1175	1層	スクレイパー	弥生	長さ4.7/幅9.1/厚さ1.4	100%	サヌカイト	横長剥片			34区
	44	1176	(側溝)	スクレイパー	弥生	長さ5.9/幅8.5/厚さ1.8	100%	サヌカイト	横長剥片			14区
97	44	1177	128 流路北西部	スクレイパー	弥生	長さ3.8/幅10.5/厚さ1.1	100%	サヌカイト	縦長剥片			
98	45	1178	216 溝	石庖丁	弥生中期	長さ4.3/幅7.7/厚さ0.8	50%	結晶片岩	外湾型			
	45	1179	64 溝中央部	石庖丁	弥生中期	長さ6.6/幅4.1/厚さ0.9	50%	結晶片岩	外湾型			
	45	1180	183 粘土採掘坑	石庖丁	弥生中期	長さ4.1/幅8.1/厚さ0.7	90%	結晶片岩	直線型			
	45	1181	65 溝西部上層	石庖丁	弥生中期	長さ3.2/幅6.0/厚さ0.8	60%	結晶片岩	内湾型			
	45	1182	128 流路南東部	石庖丁	弥生中期	長さ3.3/幅7.1/厚さ0.65	60%	結晶片岩	内湾型			
	45	1183	包含層1層	石庖丁	弥生中期	長さ4.3/幅5.0/厚さ0.7	40%	結晶片岩	直線型			9区
	45	1184	183 粘土採掘坑	石庖丁	弥生中期	長さ3.8/幅4.3/厚さ0.45	20%	結晶片岩				
99	45	1185	104 溝	石庖丁	弥生中期	長さ7.0/幅6.5/厚さ0.8	30%	結晶片岩	直線型			
	45	1186	128 流路南東部?	大型石庖丁	弥生中期	長さ8.0/幅12.8/厚さ1.2	60%	結晶片岩				
100	45	1187	64 溝中央部	磨製石鎌	弥生	長さ7.3/幅1.8/厚さ0.75	60%	粘板岩				
	45	1188	141 土坑	方柱状片刃石斧	弥生	長さ7.5/幅3.15/厚さ2.35	70%	凝灰岩				
	45	1189	128 流路西部下層	柱状片刃石斧	弥生	長さ13.0/幅3.6/厚さ1.1	50%	結晶片岩				
	45	1190	128 流路南東部下層上部	柱状片刃石斧	弥生	長さ6.0/幅3.2/厚さ3.3	50%	石英斑岩				
	45	1191	128 流路南東部下層下部	扁平片刃石斧	弥生	長さ6.0/幅3.5/厚さ1.5	40%	結晶片岩				
101	45	1192	128 流路南東部下層下部	石錘	弥生	長さ7.3/幅5.2/厚さ3.2	100%	砂岩				
	45	1193	210 流路北東部	敲石・磨石	弥生	長さ5.8/幅5.1/厚さ5.0	50%	砂岩				
	45	1194	1層	凹石・台石	弥生	長さ10.2/幅8.0/厚さ6.2	90%	礫岩				7区
	45	1195	128 流路東部	石皿・砥石	弥生～古墳	長さ10.2/幅4.3/厚さ4.3	不明	砂岩	自然礫?			
	45	1196	12 堅穴住居	石皿・砥石	弥生後期	長さ14.2/幅9.0/厚さ3.9	50%	砂岩	自然礫?			
	45	1197	64 溝中央部	凹石・台石	弥生～庄内	長さ・幅10.0/厚さ6.6	不明	砂岩	自然礫?			
102	45	1198	128 流路東部	砥石	弥生～古墳	長さ6.9/幅5.2	不明	安山岩				
	45	1199	65 溝南東部上層粘土	砥石	弥生～古墳	長さ13.0/幅10.6/厚さ5.0	不明	安山岩				
	45	1200	127 堅穴状遺構	台石・砥石	弥生	長さ25.0/幅8.8/厚さ6.8	100%	砂岩	自然礫?			
図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	時期	残存率	樹種	備考			
103	46	1201	128 流路東部	曲柄又鉞	布留式	長さ29.0/幅9.4/厚さ1.4	35%	アカガシ亜属				
		1202	65 溝東部下層	杭	古墳中～後期	長さ29.5/幅5.5/厚さ5.2	70%	コナラ亜属				
		1203	65 溝東部下層	杭	古墳中～後期	長さ29.4/幅4.2/厚さ3.3	70%	コナラ亜属				
		1204	65 溝東部下層	杭	古墳中～後期	長さ24.9/幅3.6/厚さ3.3	70%	コナラ亜属				
		1205	65 溝南東部	曲物容器底板	古墳中～後期	長さ31.8/幅7.2/厚さ1.0	25%	ヒノキ				
		1206	65 溝南東部	曲物容器底板	古墳中～後期	長さ33.1/幅9.2/厚さ1.0	25%	ヒノキ				
	46	1207	65 溝南東部	曲物容器底板	古墳中～後期	長さ50.0/幅9.7/厚さ1.1	50%	ヒノキ				

遺物観察表 (34)

図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	樹種	備考			
103	46	1208	210 流路中央部下層下部	槽・盤?	布留式	長さ18.5/幅14.9/厚さ3.3	15%	アカガシ亜属				
		1209	120 溝南東部	棒状品	庄内~布留式	長さ47.1/幅7.5/厚さ2.9	不明	アカガシ亜属				
		1210	65 溝南東部上層	部材	古墳中~後期	長さ56.7/幅15.0/厚さ3.3	不明	コナラ亜属				
		1211	65 溝南東部上層	部材	古墳中~後期	長さ90.4/幅13.6/厚さ3.4	不明	アカガシ亜属				
図	写真	番号	遺構/層位	器種	時期	法量(cm)	残存率	調整	色調	胎土	焼成	備考
104		1212	185 暗渠	土管	近代	口径21.0・15.0/長さ63.5/厚さ2.6	100%		赤黒 10R1.7/1	密	良好	
105	47	1213	148 粘土採掘坑	枕木付レール	近代	(レール)頭部1.81/底部3.64/高さ4.4(4kgレール)	-		-	-	-	
		1214	183 粘土採掘坑	レール	近代	頭部2.4/底部4.55/高さ5.1(6kgレール)	-		-	-	-	
		1215	(側溝)	犬釘	近代	長さ6.9/幅1.55/厚さ0.75	100%?		-	-	-	9区
		1216	(側溝)	犬釘	近代	長さ(7.3)/厚さ0.7	80%		-	-	-	9区
		1217	(側溝)	犬釘	近代	長さ(7.1)/厚さ0.7・0.9	80%		-	-	-	33区
		1218	183 粘土採掘坑	枕木	近代	長さ92.1/幅8.3/厚さ6.7	100%		-	-	-	アカマツ
		1219	183 粘土採掘坑	枕木	近代	長さ84.1/幅9.0/厚さ6.7	100%		-	-	-	アカマツ
106		1220	1 粘土採掘坑	須恵器 坏蓋	TK23 型式	口径(12.6)/器高(4.0)/器厚0.3~0.6	40%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		1221	1 粘土採掘坑	須恵器 坏身	TK23 型式	口径(10.6)/器高(4.3)/器厚0.2~0.4	40%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰白 N7/	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		1222	1 粘土採掘坑	蛸壺	弥生後期後葉~庄内式	口径(6.0)/器高(4.2)/器厚0.8	20%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1223	148 粘土採掘坑	高坏	弥生中期後葉	口径(36.0)/器高(4.9)/器厚0.5~1.1	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 10YR7/3	やや密 1~2mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1224	148 粘土採掘坑	広口壺	弥生後期中~後葉	口径(22.6)/器高(6.6)/器厚0.8~2.0	20%	外:不明 内:剥離のため不明	灰白 5Y8/2	やや密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		1225	148 粘土採掘坑	広口壺	弥生中期後葉?	口径(16.4)/器高(5.0)/器厚0.5~1.5	20%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	褐灰 10YR4/1	密 1~3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	生駒西麓
		1226	148 粘土採掘坑	高坏	弥生中期後葉	口径(18.0)/器高(5.5)/器厚0.6~1.0	30%	外:剥離のため不明 内:剥離のため不明	にぶい黄橙 7.5YR7/4	やや密 1~3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		1227	148 粘土採掘坑	蛸壺	庄内式?	口径(4.4)/器高(7.0)/器厚0.5	40%	外:ナデ? 内:ナデ?	にぶい橙 7.5YR7/4	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		1228	183 粘土採掘坑	壺	TK208~47 型式	口径(21.4)/器高(6.3)/器厚0.9~1.2	20%	外:回転ナデ、ナデ? 内:回転ナデ、ナデ	灰 N7/	密 1~2mm大の石英・長石含む	良好	
		1229	183 粘土採掘坑	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(13.0)/器高4.5/器厚0.3~0.7	40%	外:回転ナデ、回転ケズリ 内:回転ナデ、ナデ	灰 N4/	密 1mm以下の石英・長石含む	良好	
		1230	183 粘土採掘坑	高坏	布留1~2式	脚径(11.4)/器高(7.4)/器厚0.4~0.9	40%	外:ナデ・ミガキ? 内:ケズリ・ナデ	にぶい黄橙 10YR7/2	密 1~4mm大の石英・長石含む	良好	
		1231	183 粘土採掘坑	黒色土器 A類碗	10世紀代	高台径(8.4)/器高(1.8)/器厚0.3	20%	外:高台貼り付け時ヨコナデ? 内:不明	外:橙 7.5YR6/6 内:暗灰N3/	密	良好	
		1232	183 粘土採掘坑	土錘	不明	最大幅1.8/長さ(5.9)/厚さ1.7	70%	ナデ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~4mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		1233	183 粘土採掘坑	広口壺	弥生後期前~中葉	口径(23.0)/器高(10.7)/器厚1.0~1.4	20%	外・内:口縁部ヨコナデ、以下タテミガキ	にぶい橙 7.5YR7/4	やや密 1~3mm大の石英・長石含む	良好	
		1234	183 粘土採掘坑	壺	弥生中期?	底径(10.0)/器高(14.0)/器厚0.7~1.1	30%	外:タテミガキ 内:剥離のため不明	灰白 10YR8/2	密 1~4mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		1235	148 粘土採掘坑	須恵器 坏身	TK23 型式	口径(12.4)/器高(4.3)/器厚0.3~0.6	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰 N6/	密 1mm大の石英・長石含む	良好	
		1236	148 粘土採掘坑	高坏	弥生中期後葉	口径(31.0)/器高(2.7)/器厚0.6~0.9	20%	外:不明 内:不明	にぶい赤橙 10Y6/3	密 1~2mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	
		1237	148 粘土採掘坑	壺	弥生中期後葉?	口径(26.6)/器高(4.5)/器厚1.2	15%	外:不明 内:不明	にぶい黄橙 10YR6/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好	
		1238	148 粘土採掘坑	壺	弥生中期中葉	器高(9.0)/器厚0.6~1.0	15%	外:不明 内:ナデ?	にぶい黄橙 10YR7/3	密 1~3mm大の石英・長石・角閃石含む	良好	摂津系?
		1239	148 粘土採掘坑	高坏	弥生後期前葉	器高(11.1)/器厚0.8~1.0	40%	外:剥離のため不明 内:ナデ?	橙 5YR6/6	密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒・雲母含む	良好	
	1240	148 粘土採掘坑	高坏	弥生後期後葉?	器高(5.4)/器厚0.7~1.2	15%	外:ミガキ 内:ナデ	橙 5YR6/6	密 1~2mm大の石英・長石・角閃石含む	良好		
	1241	183 粘土採掘坑	須恵器 坏身	TK10 型式	口径(11.6)/器高(3.9)/器厚0.3~0.7	30%	外:回転ナデ・回転ケズリ 内:回転ナデ	灰白 5Y8/1	やや密	良好		
	1242	183 粘土採掘坑	甕	弥生中期?	底径(8.2)/器高(2.5)/器厚0.7~0.9	15%	外:不明 内:不明	にぶい黄橙 10YR4/3	やや密 1~3mm大の石英・長石・雲母含む	良好	生駒西麓	
	1243	183 粘土採掘坑	甕	弥生後期	底径4.2/器高(2.8)/器厚0.6~1.4	20%	外:タタキ? 内:ハケ?	にぶい褐 7.5YR5/4	密 1~3mm大の石英・長石・赤彩粒含む	良好		

圖 版



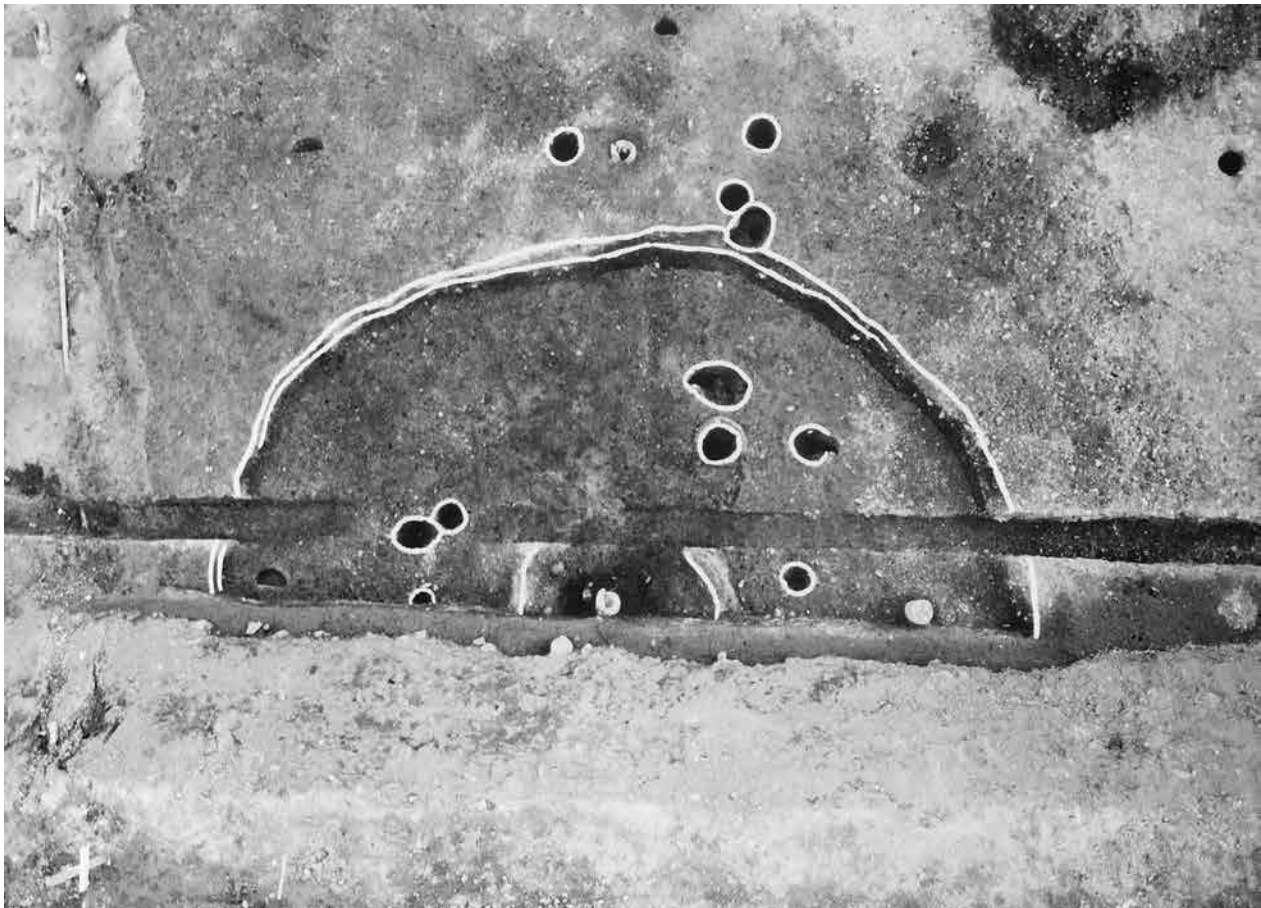
↑
1-1

調査撮影位置



1. 調査区全景（垂直）

図版 2



1. 12 竪穴住居全景 (北西から)



2. 12 竪穴住居断面 (南から)



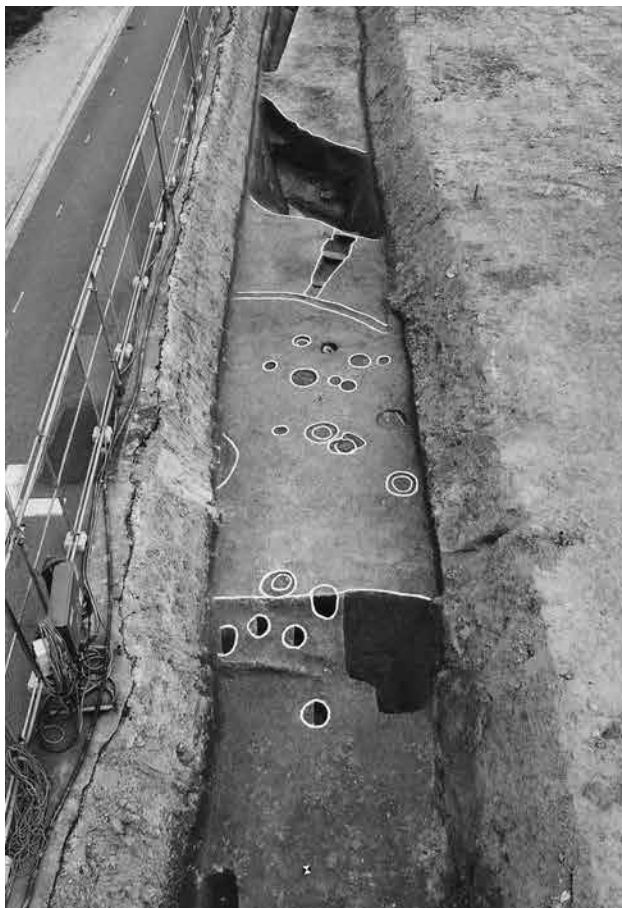
3. 土器出土状況 (北西から)



4. 41 柱穴断面 (南東から)



5. 51 柱穴断面 (南東から)



1. 170 竪穴住居南西部（北西から）



2. 170 竪穴住居北東部（南東から）



3. 191 中央土坑断面（南西から）



4. 154 柱穴断面（南西から）

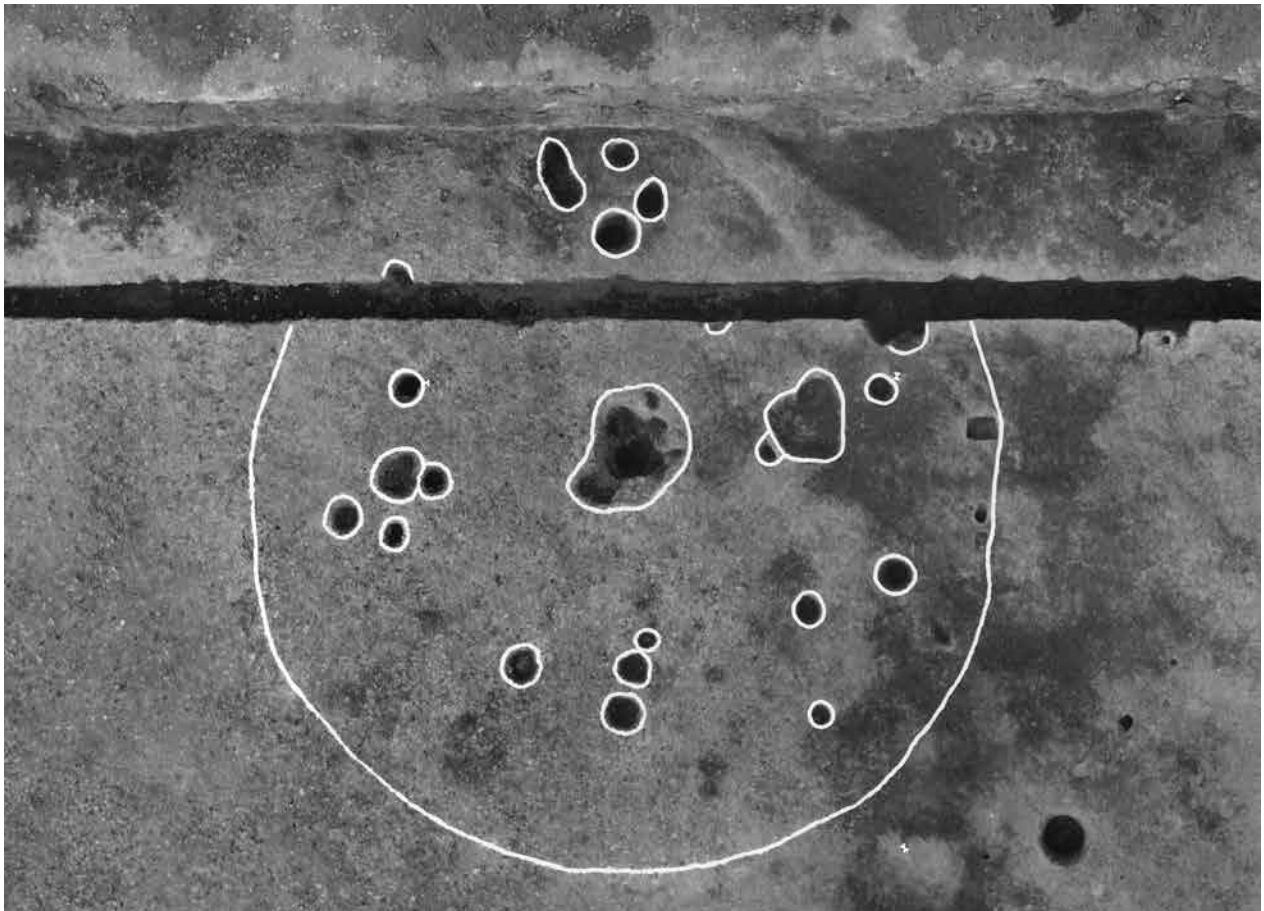


5. 165 柱穴断面（西から）



6. 193 柱穴断面（南から）

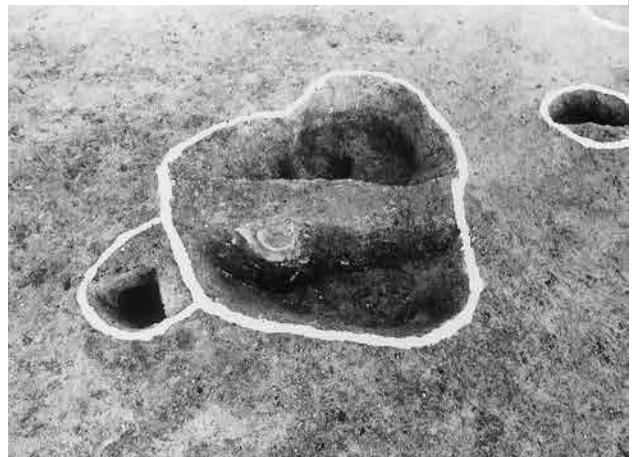
図版 4



1. 115 竪穴住居全景 (南から)



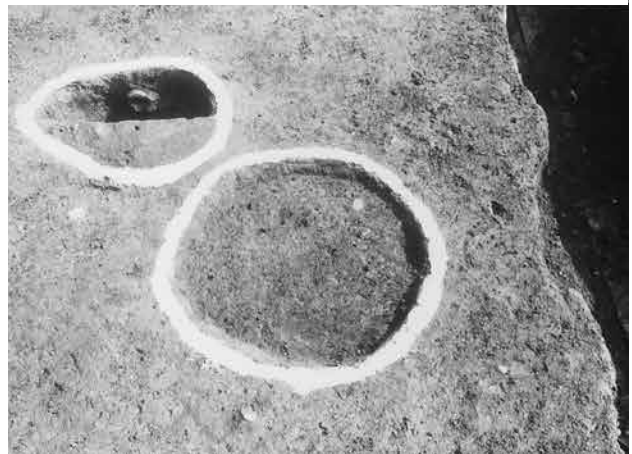
2. 83 中央土坑断面 (南から)



3. 84 土坑断面 (南から)



4. 87 柱穴断面 (北西から)



5. 88 柱穴 (西から)



1. 127 竪穴状遺構全景 (南から)



2. 127 竪穴状遺構断面 (南西から)



3. 14 土器棺墓 (南東から)



4. 90 土器棺墓 (南から)



5. 39 土器棺墓 (南から)



6. 222 土器棺墓 (北から)



7. 17 土坑 (南西から)



8. 139 土坑 (東から)

図版 6



1. 64 溝西部出土状況 (西から)



2. 64 溝中央部北西端出土状況 (南東から)



3. 64 溝中央部 131・133 柱穴全景 (北東から)



1. 64 溝東部全景 (南西から)



2. 64 溝東部出土状況 1 (北から)



3. 64 溝東部出土状況 2 (北から)



4. 64 溝東部出土状況 3 (北から)



5. 64 溝東部断面 (南西から)

図版 8



1. 120 溝中央部全景 (東から)



2. 120 溝北西部断面 (北西から)



3. 120 溝南東部全景 (南から)



4. 65 溝南東部断面 (西から)



5. 65 溝南東部木器出土状況 (南から)



6. 65 溝南東部全景 (南西から)



1. 128 流路南東部全景 (南西から)



2. 210 流路南部断面 (西から)



3. 52 流路断面 (北西から)

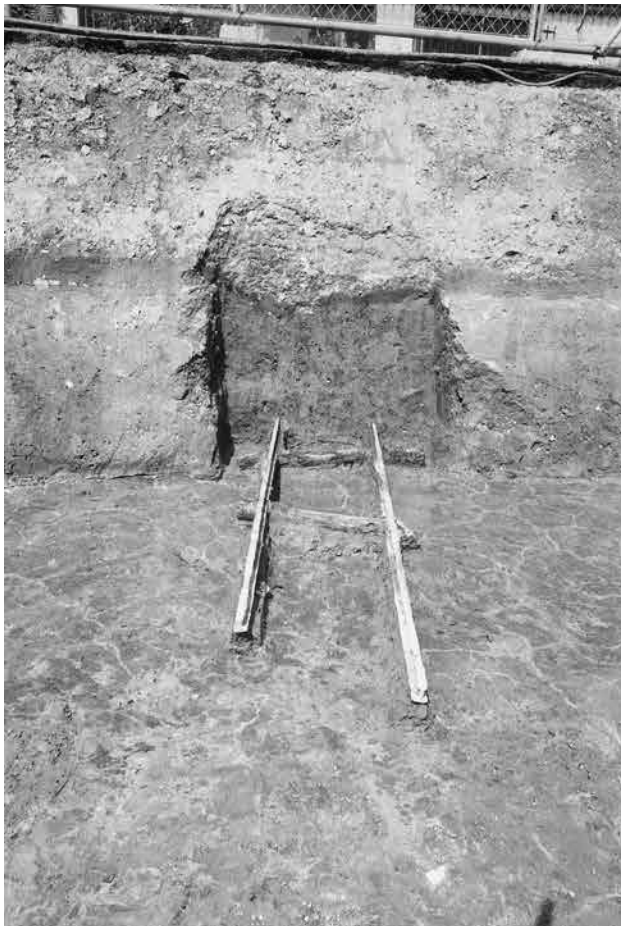


4. 184 畦畔全景 (南西から)

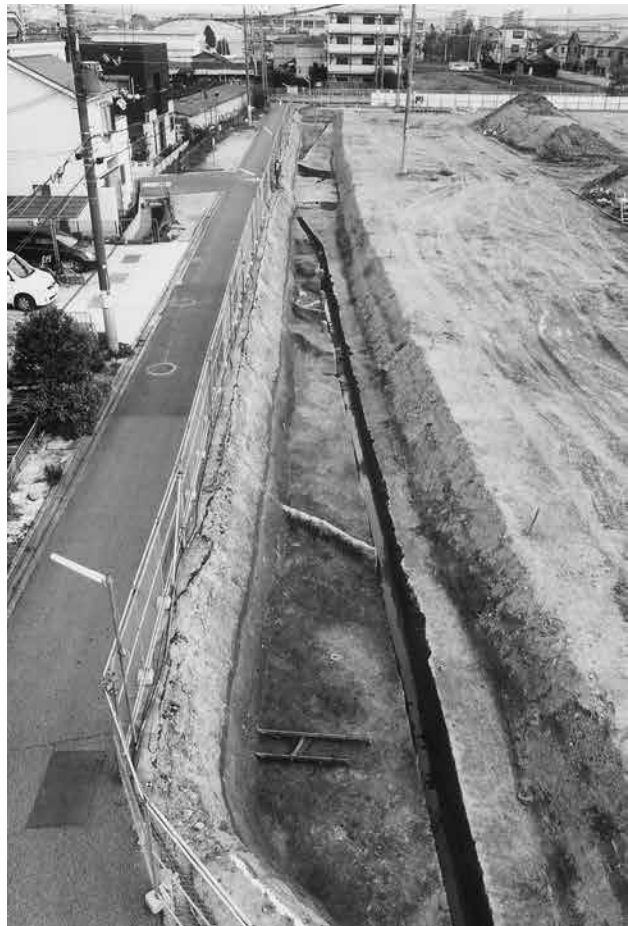


5. 226 畦畔南西部 (北から)

図版10



1. レール1出土状況（南西から）



2. 148粘土採掘坑全景（北西から）



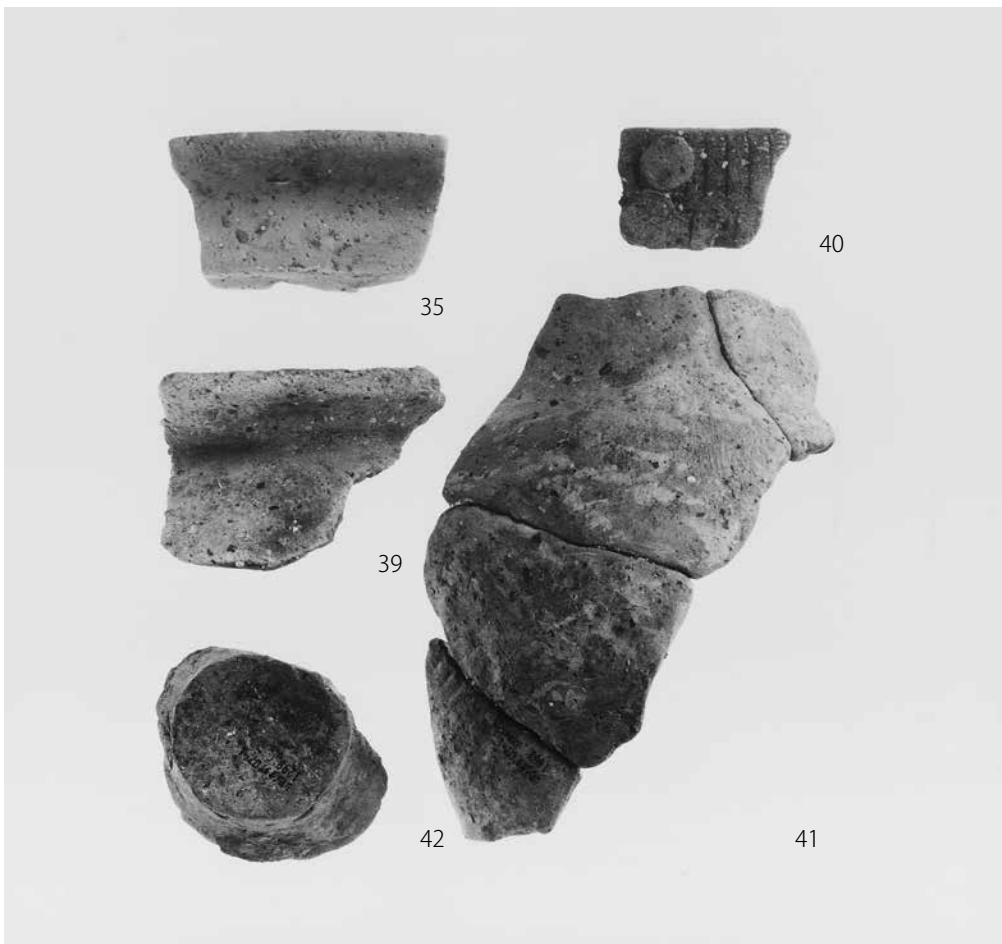
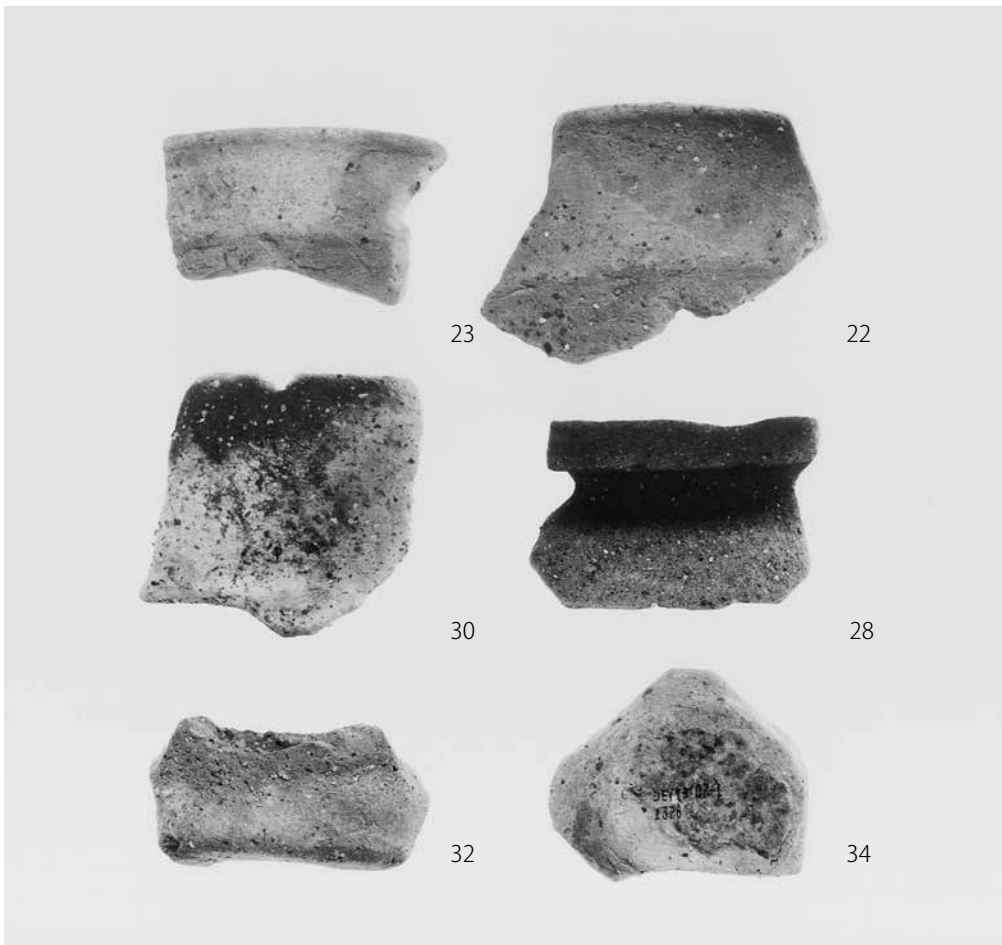
3. レール2出土状況（北から）

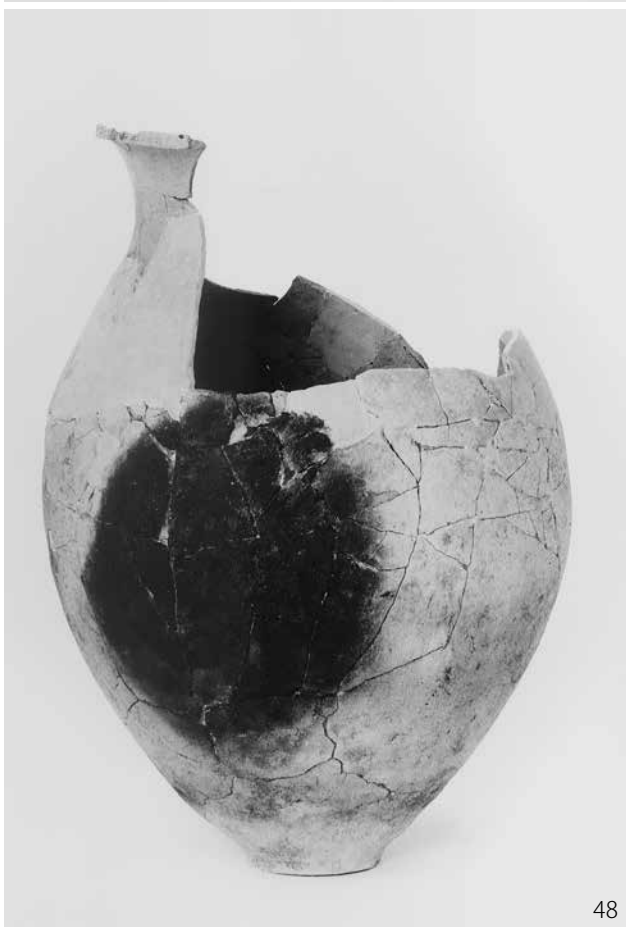


4. 1粘土採掘坑全景（南から）



图版12





図版14





95



196



200



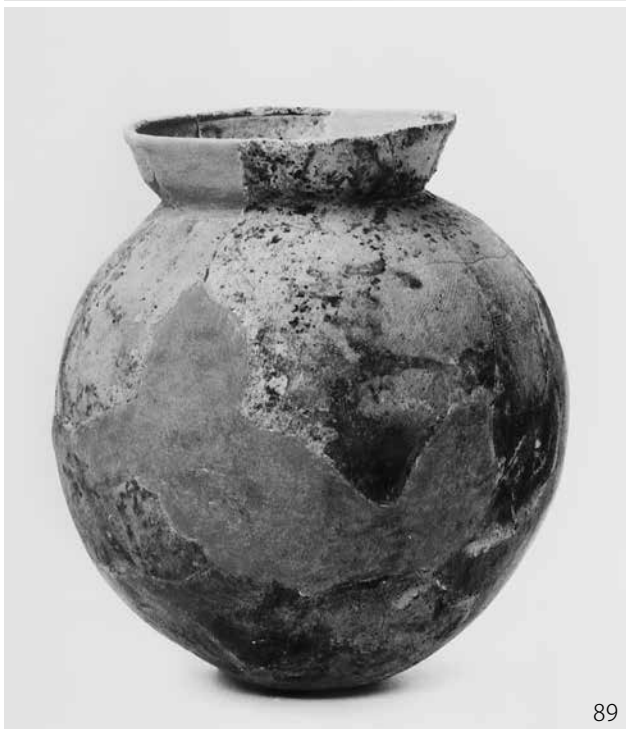
94



199



118



89



183

图版16









图版20





338



339



293



308



430



332















720



624



732



723



730



741



603



740



618



742



615





761



768



628



653



754



746



659



660



750



752



540



782



690



706



702



675



708



775





789



718



572



790



569



714

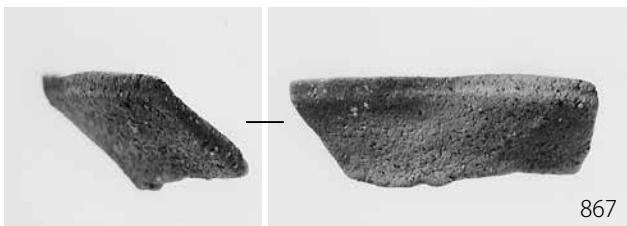
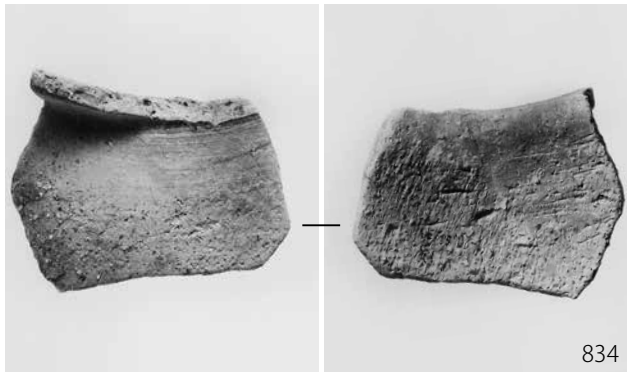


566

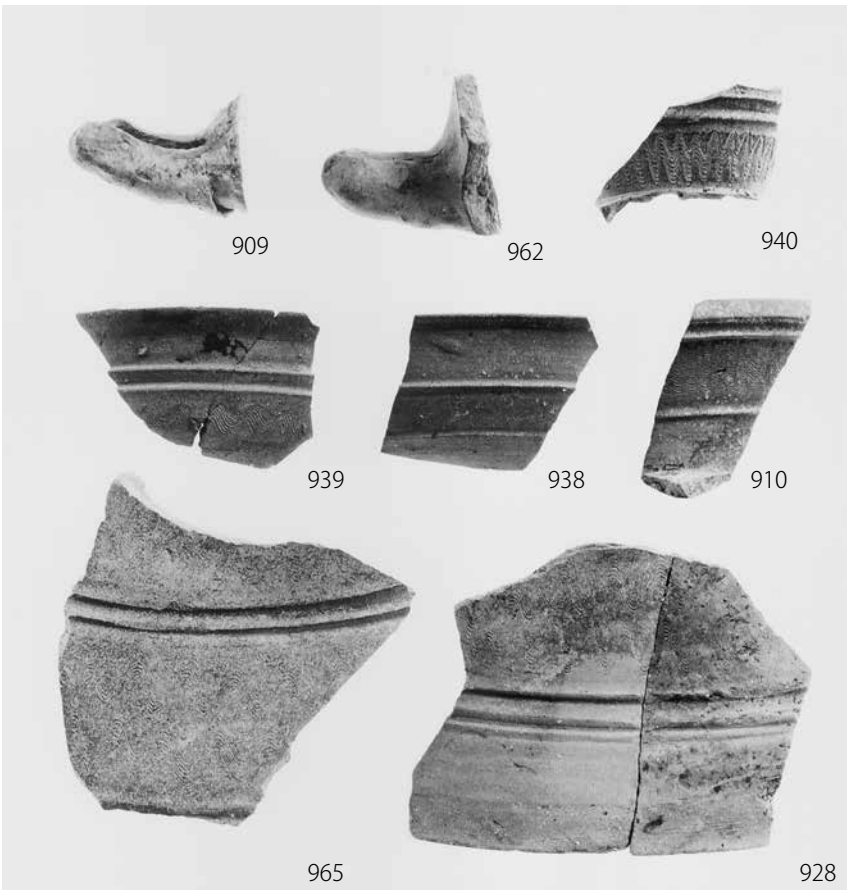
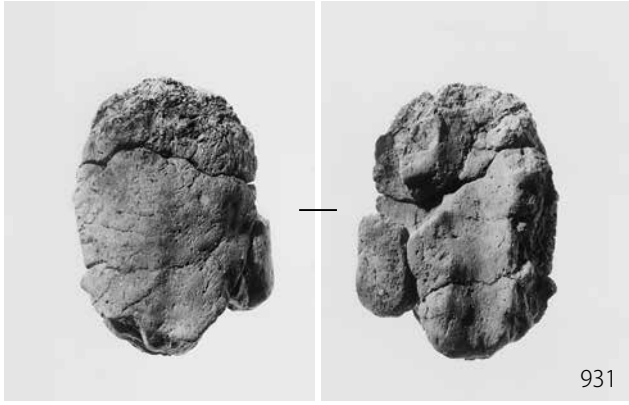


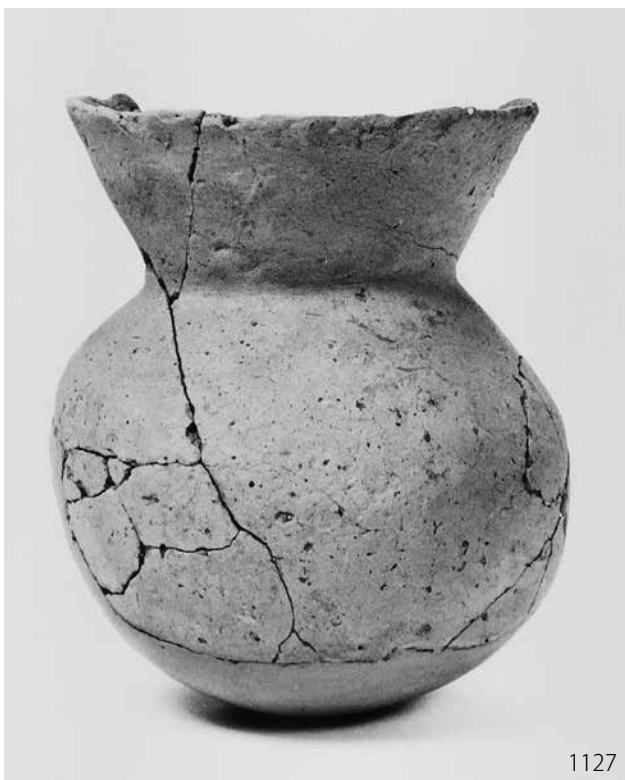
567

图版36









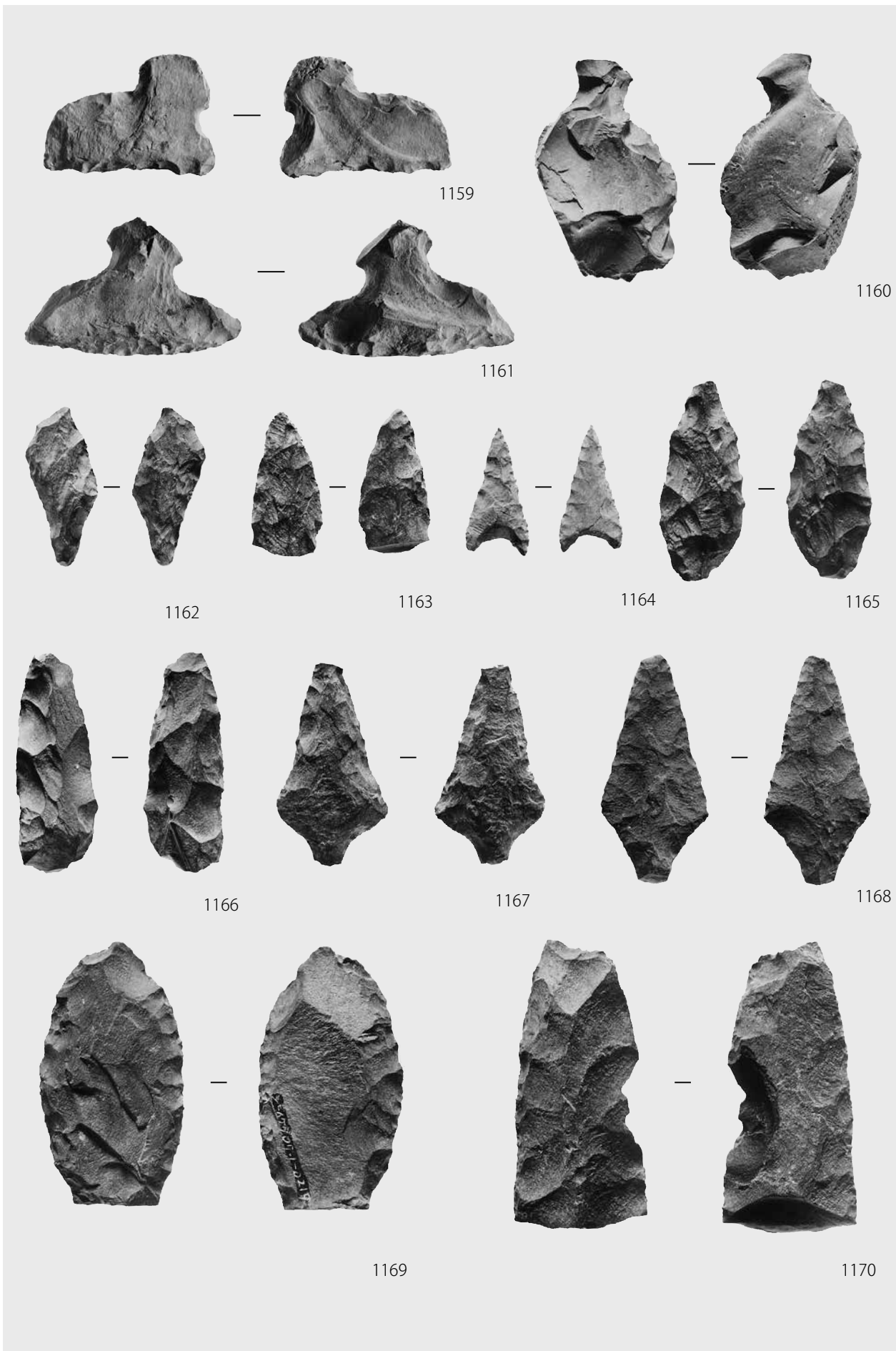
图版40

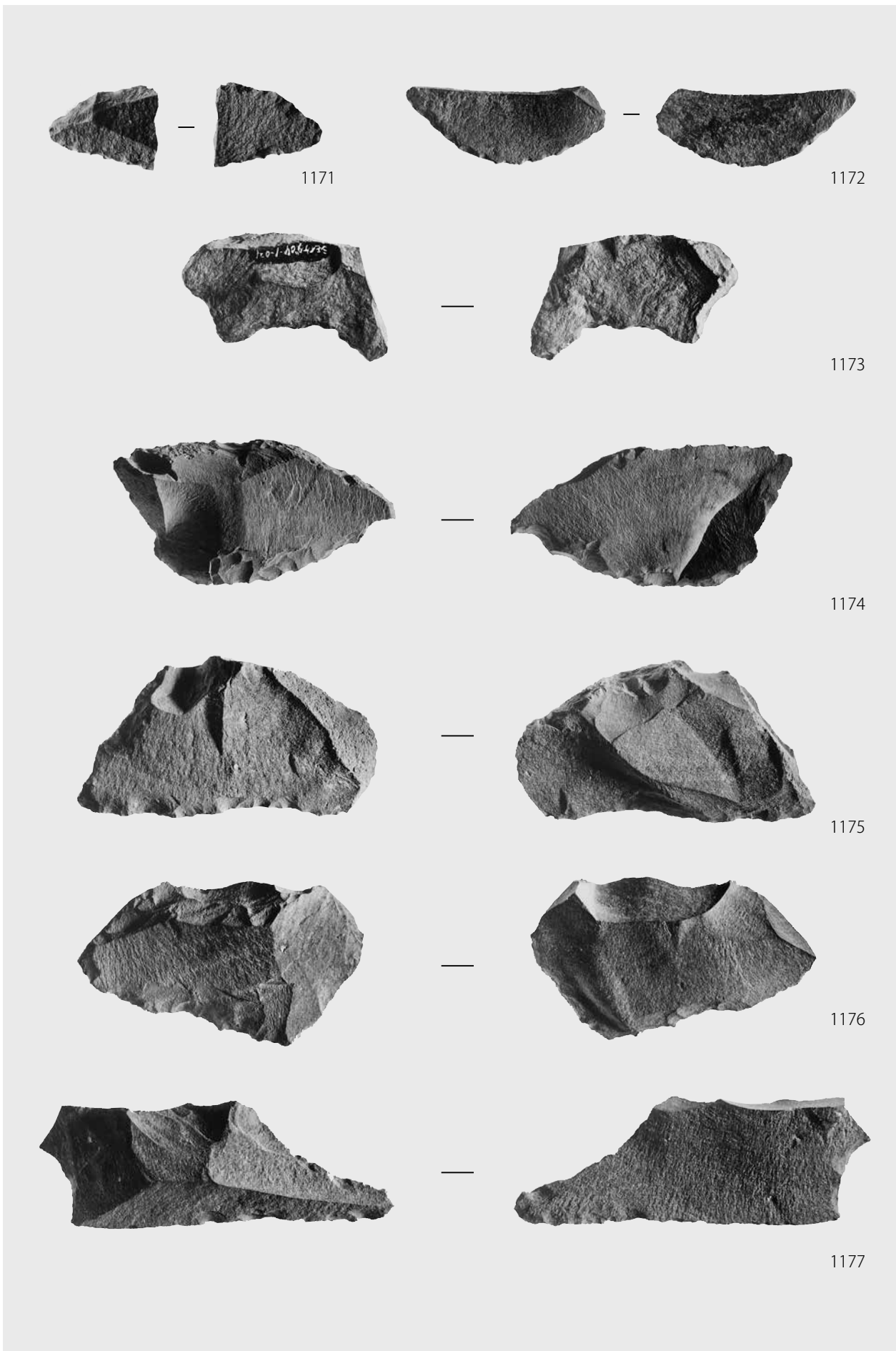


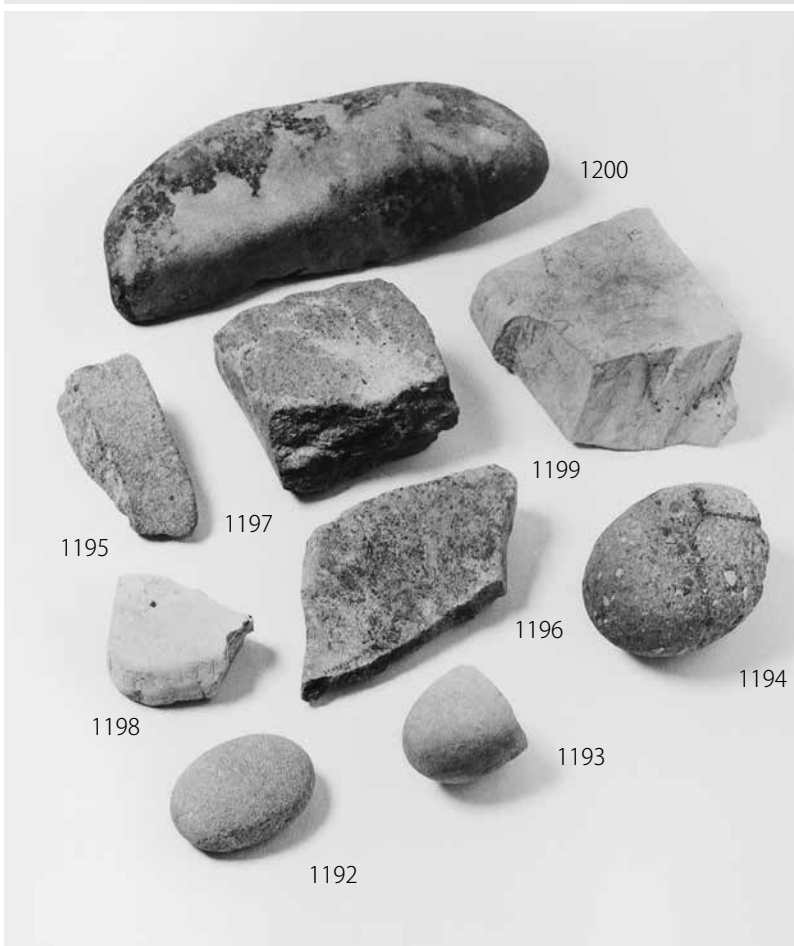
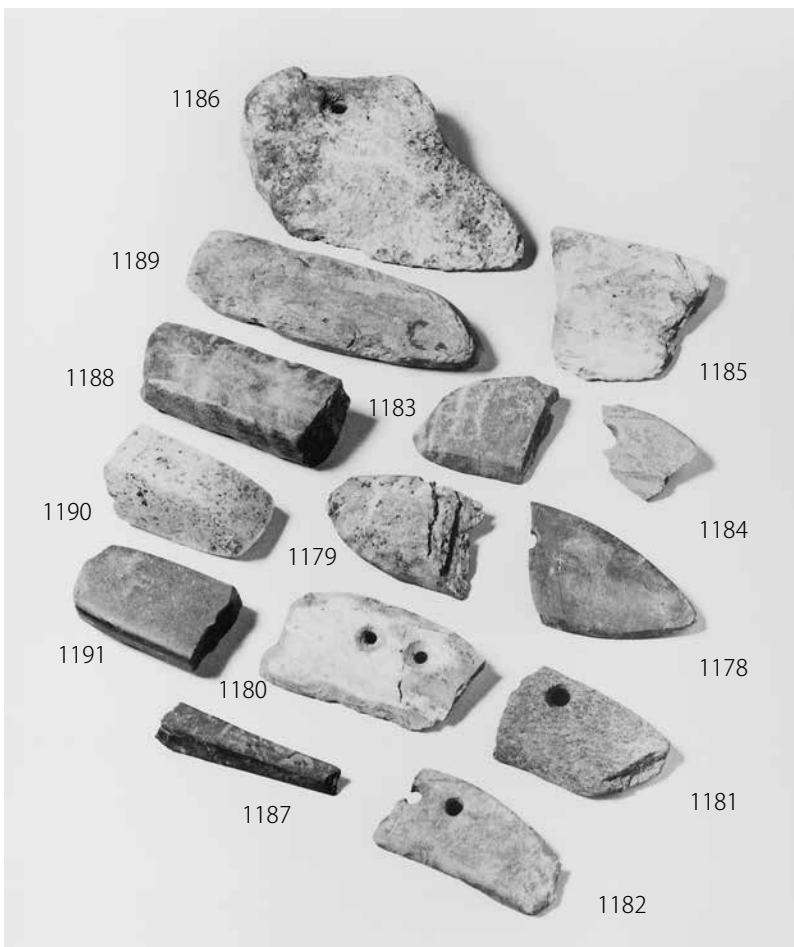


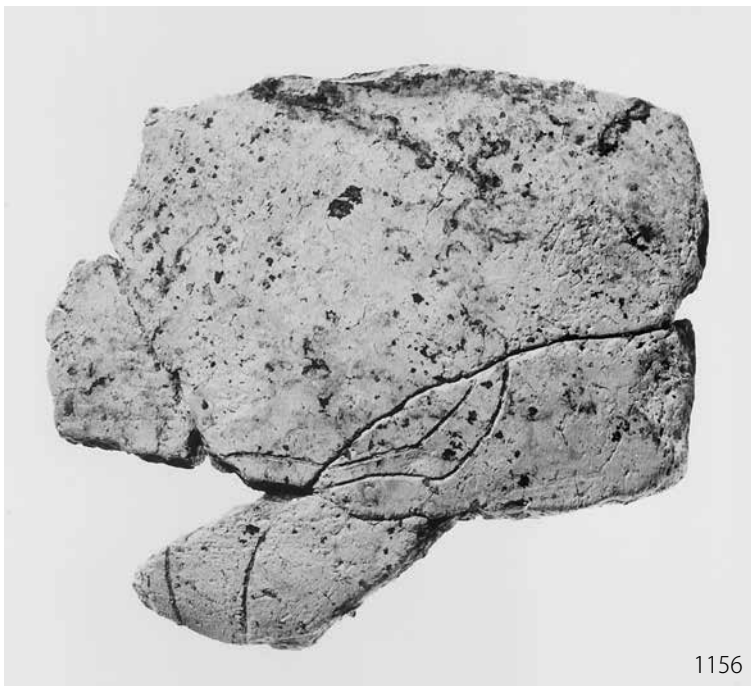
图版42











1156



1157



1208



1201



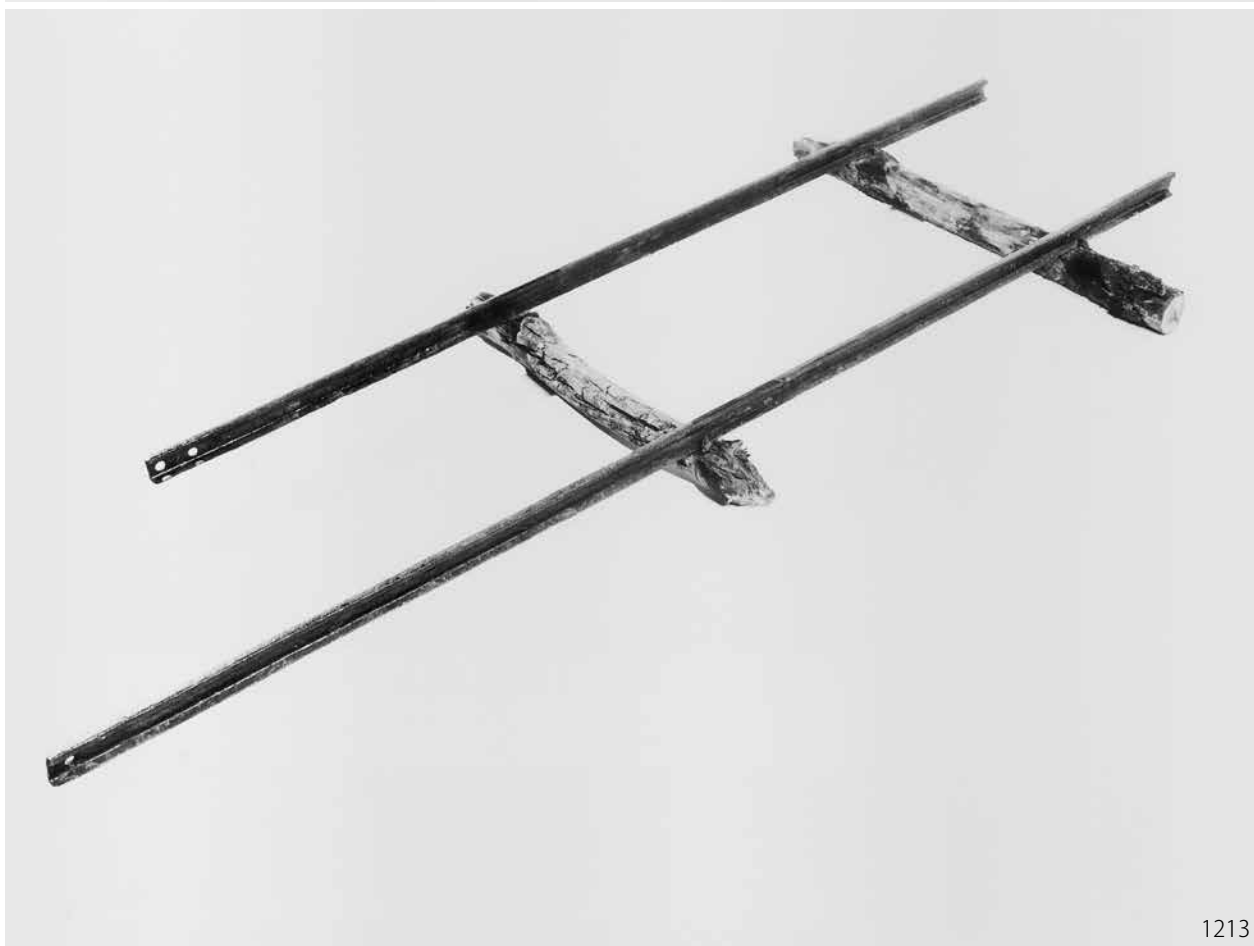
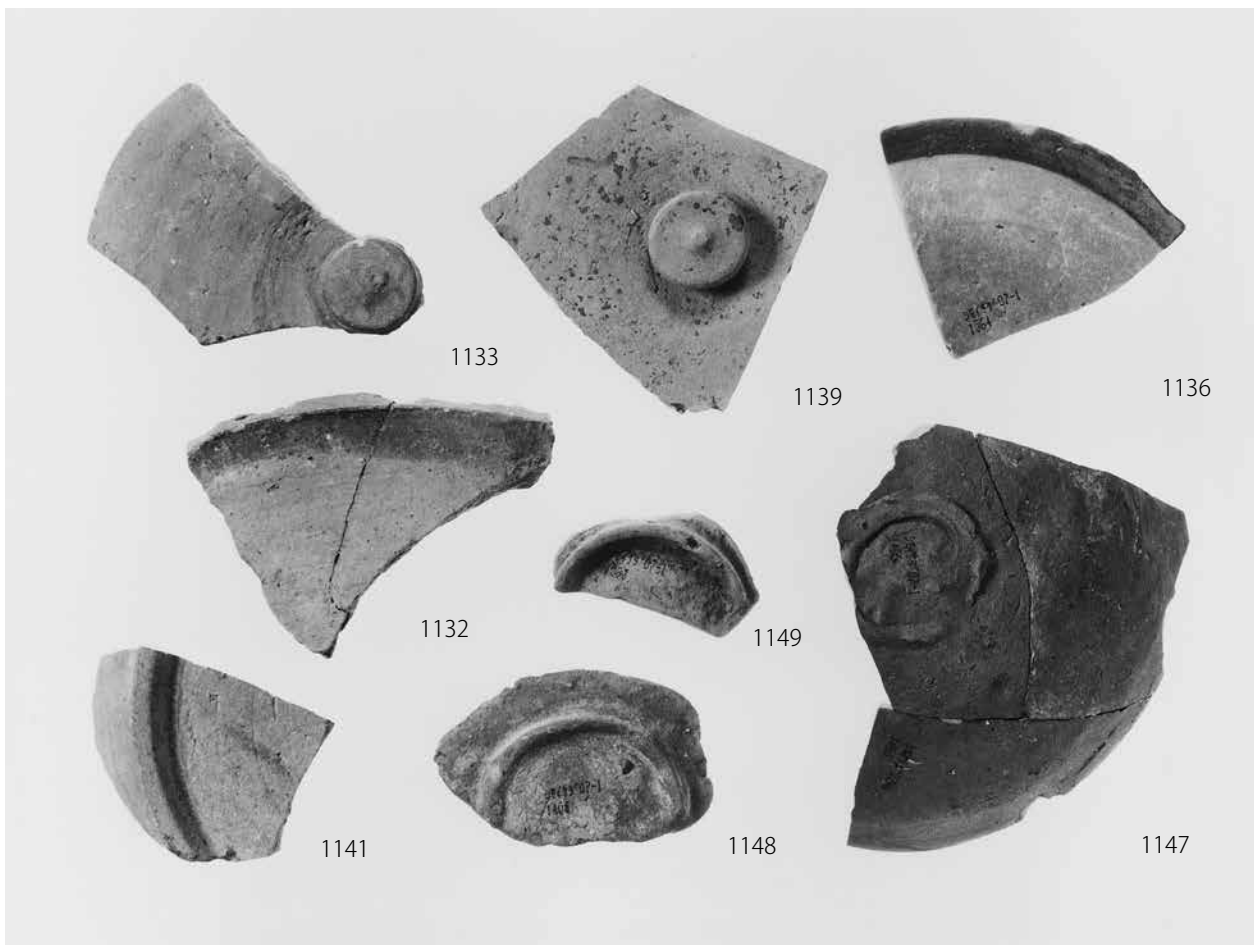
1207



1158-1



1158-2





1. 大阪窯業株式会社岸和田工場跡地



2. 岸和田煉瓦綿業株式会社跡地



3. 新田避溢函渠

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもいけだいせき							
書 名	下池田遺跡							
副書名	大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財調査報告							
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第190集							
編著者名	市村慎太郎・奈良拓弥							
編集機関	(財)大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL 072-299-8791 FAX 072-299-8905							
発行年月日	西暦 2009年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		東 経	北 緯	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもいけだ いせき 下池田遺跡	おおさか 府 大阪府 きしわだし 岸和田市 しもいけだちようさちようめ 下池田町3丁目 ちない 地内	27202	127	135° 24' 33"	34° 28' 00"	2007.11.1 ～ 2008.10.9 [発掘調査] 2008.8.1 ～ 2009.7.31 [整理作業]	7,068㎡	大阪府営 岸和田下池田住宅 民活プロジェクト
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下池田遺跡	集落	弥生時代中期 ～古墳時代後期		竪穴住居・土器 棺墓・溝・土坑・ 溝・流路など		弥生土器・絵画 土器・須恵器・ 石鏃・石庖丁・ 磨製石鏃・銅鏃・ 木器など		弥生時代中期後葉 ～後期中葉にかけ ての竪穴住居3棟 と土器棺墓4基を 検出。弥生時代後 期後葉～庄内式期 にかけての土器が 多量に廃棄された 溝を約45mに渡っ て検出。この溝か らは、銅鏃が出土。
		古代以降		井戸・畦畔・粘 土採掘坑・流路 など		須恵器・瓦器椀・ 瓦・レール など		
要 約	今回の調査で、弥生時代中期後葉～後期中葉の竪穴住居を3棟、土器棺墓4基、溝2条、土坑6基を検出した。これにより、弥生時代中期後葉から大規模な集落が形成されたことが判明した。さらに、後期後葉～庄内式期前半の溝に多量の土器が廃棄されていることから、この時期になっても周辺で規模の大きな集落が形成されていたと推測することができた。古墳時代の遺構も検出できたことから、弥生時代中期～古墳時代にかけて連綿と人が生活していた集落遺跡であることが判明した。							

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第190集

下 池 田 遺 跡

大阪府営岸和田下池田住宅民活プロジェクトに伴う埋蔵文化財調査報告

発行年月日 / 2009年7月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本 / 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目4番4号